



国際日本文化研究センター
International Research Center for Japanese Studies

世界の日本研究 2017

JAPANESE STUDIES AROUND THE WORLD

国際的視野からの日本研究

JAPANESE STUDIES FROM INTERNATIONAL PERSPECTIVES

郭南燕 編

Edited by Nanyan GUO



世界の日本研究 2017
JAPANESE STUDIES AROUND THE WORLD

国際的視野からの日本研究
Japanese Studies from International Perspectives

郭南燕 編
Edited by Nanyan GUO

国際日本文化研究センター
International Research Center for Japanese Studies

© 2017 International Research Center for Japanese Studies

ISBN 978-4-901558-88-4

All rights reserved by the International Research Center for Japanese Studies.

No part of these proceedings may be used or reproduced without written permission,
except for brief quotations embodied in critical articles and reviews.

First edition published in 2017

by the International Research Center for Japanese Studies

3-2 Goryo Oeyama-cho, Nishikyo-ku, Kyoto 610-1192 Japan

Telephone: (075) 335-2222 Fax: (075) 335-2091

URL: <http://www.nichibun.ac.jp/>

目次

Table of Contents

序 日本研究に必須な国際的視野	郭南燕	5
-----------------	-----	---

I グローバルな視野からの日本研究

01 Toward a Globalized Japanese Studies: What We Need to Learn from Modern Catholic Japan	Kevin M. DOAK	12
02 日本十七世紀の自伝、その一側面	ヴォルフガング・シャモニ	18
03 Peripherality and Provinciality in Japanese Studies: The Case of the English-Using World	Eyal BEN-ARI	35
04 共同研究会「万国博覧会と人間の歴史」から考える	佐野真由子	44
05 「特攻隊」とメディア・リテラシー——韓国の日本語教育の現場より	堀まどか	54

II 欧米の日本研究

06 セルビアにおける日本研究——ベオグラード大学日本学事始め	山崎佳代子	64
07 ワルシャワ大学日本学科の歴史と研究	アグネシカ・コズィラ	87
08 カザフスタンにおける日本研究——現状と課題	アンダソヴァ・マラル	100
09 ロシア、ブリヤート国立大学における日本語・日本文化の教育の現状	ボトーエフ・イーゴリ	107
10 イタリアの日本研究——文化の多様性を生かす	ボナヴェントゥーラ・ルベルティ	112
11 Japanese Studies at SOAS, University of London	Andrew GERSTLE & Alan CUMMINGS	128
12 The French Society of Japanese Studies	Cecile LALY	148
13 Japanese Studies and Area Studies at the Ohio State University	Richard TORRANCE	151
14 欧米の日本研究と問題点	寺澤行忠	160

Ⅲ アジアの日本研究

15 韓国における日本古典文学研究の現況	李 愛淑	174
16 韓国の日本鉄道研究の動向——鉄道官僚の研究を含めて	李 容相	184
17 ソウル大学の日本研究 ——「人文韓国支援事業」(2008–2018年)の研究成果を中心に	張 寅性	195
18 明治期の倫理学関係著(訳)書の中国における伝播	龔 穎	204
19 中国における川端康成文学の研究	周 閱	212
20 日中文化人の書簡交流にみる周作人の芸術と思想	顧 偉良	222
21 周作人研究の現在——『周作人年譜』の日記改竄をめぐって	顧 偉良	244
22 中日国交正常化以来の日本研究の概要	姜 龍範	254
23 ベトナムにおける近年の俳句研究の動向	グエン・ヴァー・クイン・ニュー	260
24 インドにおける日本語教育の過去・現状・未来	P・A・ジョージ	269

Ⅳ 日本から世界へ、世界から日本へ

25 ヨーロッパにおける日本殉教者劇 ——細川ガラシャについてのウィーン・イエズス会ドラマ	新山カリツキ富美子	284
26 The Prints of the Thirty-Six Immortal Poets in the Art Institute of Chicago	Michelle KUHN	295
27 夏目漱石『心』における英訳の変遷	徳永光展	307
28 日本統治期台湾の通訳者、通訳をめぐる近年の研究動向	富田 哲	322
29 Internationalization of the Japanese Language in Interwar Period Japan (1920–1940) by Foreign Missionaries and Writers	Nanyan GUO	335
30 Crossing the Borders between the Living and the Dead: An Insight into Knowledge Transfer and Issues of Post-War Reconciliation	INAGA Shigemi	348
執筆者一覧		359

序 日本研究に必須な国際的視野

郭 南燕

今年、本誌の編集・出版元の国際日本文化研究センター（日文研）の設立30周年である。日本研究を国際的に行き、海外の日本研究を支援するという使命を貫いてきた30の春秋である。

創立当時の経緯については『日本研究』（第55集、鼎談：「日文研問題」を考える）を参照されたい。当初、国粹的な日本研究を主宰する機関になるのでは、と日本内外から疑問を持たれていた。海外勤務の長い私もこのような不信の声をよく耳にしたものだ。

私は2008年に日文研に勤務してから、日本研究の学際化、国際化、総合化、高度化を目の当たりにしてきた。言語、国籍、分野を超えた日本内外の研究者の参加する研究会、シンポジウム、ワークショップに臨み、国際的視野に立つ研究から生まれた豊富な成果に驚きを禁じ得ない。海外研究者によって啓発されて、新しい研究を始める同僚が多くいる。日本国内に閉じこもり、海外の研究者と交流しなければ、思いもつかないような問題意識に教えられることが日々ある。一方、海外からの日本研究者は、研究資料が不足、研究者人数が少ないため、孤立状態に陥りやすいので、日本国内の研究者との連携を大切にしている。

海外の研究者は、各自の歴史と文化を基礎に置きながら、日本を知る。日本人にとって当たり前のことは、他国の人にとって異様に思われることもある。日本人が「独自」だと思えることが、海外からみて何の変哲もないこともある。つまり、日本を理解するには、日本内外の視点が必要である。日本に関する知識、観点、問題意識について絶えず交流すれば、より客観的な日本理解に結びつくだろう。

今号は、日文研に短期、長期滞在したことのある海外研究者（23人）、日本と外国をまたがる研究者（3人）、日文研の教員（3人）の報告・論文を合計30編収め、一国中心の「日本研究」を超えた国際的視野を示すものである。本号は第Ⅰ部「グローバルな視野からの日本研究」、第Ⅱ部「欧米の日本研究」、第Ⅲ部「アジアの日本研究」、第Ⅳ部「日本から世界へ、世界から日本へ」から成り、多彩な研究

成果と情報を提供する。

まず、第I部「グローバルな視野からの日本研究」では、Kevin M. Doak氏の「Toward a Globalized Japanese Studies: What We Need to Learn from Modern Catholic Japan」は、日本の「独特性」を強調するあまり、日本文化の普遍性を見過ごしがちな日本研究の問題点を指摘し、安土桃山時代から現代まで持続し、日本文化の一部となりきった基督教の「普遍性」を通して、広い視野からの日本理解を提案する。ヴォルフガング・シャモニ氏の「日本十七世紀の自伝、その一側面」は、千年も続く世界の「自伝文学」に日本の「自伝文学」を位置付けるために、日本に渡来した黄檗宗萬福寺僧侶たちの自伝（「行実」、「行由」）を紹介し、中国福建省の禅宗寺の伝統が日本に持ち込まれて継続した事実を通して、近世ヨーロッパの「自伝」と同時期に、東アジアの16世紀にも「自伝」の伝統が連綿と伝わったことを解明している。

Eyal Ben-Ari氏の「Peripherality and Provinciality in Japanese Studies: The Case of the English-Using World」は、海外の日本研究を三つの層に分けている。上にあるのは英語圏、その中間は日本語層、最下層は研究成果が国際的にあまり流通しない他言語圏とする。米国を中心とする英語圏は、評価の基準、研究のレベル、学術用語の使用などをリードし、最下層は上層の権威者の認可を待つ身となっている。このように英語圏の特定の理論に束縛された日本研究は広い視野を失い、問題意識と研究使命が違うはずの非英語圏の研究者（例えば、香港では、英語圏に認められるように英語で論文を書き、地元の読者には中国語で対応する）は常にジレンマを感じていることを指摘する。佐野真由子氏は、氏の主宰する共同研究会「万国博覧会と人間の歴史」の研究成果を紹介し、最初の博覧会の日本部門の準備者がイギリス人外交官オールコックであり、展示された日本部門は外国人の見た「日本」であったことを挙げ、一国主義に陥らない「日本研究」の今後向かうべき方向性を示唆してくれる。

堀まどか氏は、韓国の嶺南大学校で日本語と日本文化を教えた体験に基づき、メディアに対する日韓学生の意識の差と、授業で見せた3本の映画『TOKKO』『永遠の0』『風立ちぬ』における「特攻隊」の表象に示した学生の強い違和感を取り上げて、海外で日本文化を教えるときに、違う民族的風俗、教育システム、生活環境、歴史認識を念頭に入れる必要性と、日本研究に異文化比較の視点を導入することの重要性を教えてくれる。

第II部「欧米の日本研究」では、山崎佳代子氏は、旧ユーゴスラビアのベオグラード大学の日本学の創設者デヤン・ラジッチ博士の功績と人柄を振り返り、日

本学の成立に尽力した数々の研究者を温かく描写している。また、旧ユーゴを解体した内戦（1993年から）のとき、日本学再開の希望を捨てなかった山崎氏の奮闘も感動的である。ベオグラード大学の日本研究はすべて日本とセルビアとの比較という観点から行われていることが特徴である。アグネシカ・コズイラ氏は、ヨーロッパで2番目に古い伝統をもつワルシャワ大学日本語日本学の歴史と現状を紹介している。21世紀初頭に大学図書館に設置された茶室「懷庵」の話も、ポーランドの学生が、いかに日本文化に興味を持っているのかを示してくれている。

アンダソヴァ・マラル氏はカザフスタンの日本研究の始まりと現状を述べ、大きな進歩があると同時に、日本研究者の人数が少ないため、日本研究が独立した分野となりえていないことを紹介する。ポトーエフ・イーゴリ氏はロシア、ブリヤート国立大学における熱心な日本語・日本文化の教育を紹介して、学生の卒業論文テーマの一覧表が示す学生の日本に対する関心と問題意識の多彩さに驚かされる。

ボナヴェントゥーラ・ルベルティ氏の報告は、イタリアの日本文化の研究史を概観し、研究者の名前、専門分野、研究成果を詳細に教示し、豊富な情報源となっている。Andrew GerstleとAlan Cummings両氏は、日本研究者を輩出してきた重要な研究機関ロンドン大学SOAS（School of Oriental and African Studies）の歴史と発展と研究者の業績を丁寧に辿る。Cecile Laly氏はフランス日本学会（The French Society of Japanese Studies）の活動、会員の論著の情報公開、大学院生に対する援助を紹介してくれる。Richard Torrance氏は、オハイオ州立大学（Ohio State University）における日本語教育と日本研究の概要を紹介し、人文科学の人的資源の削減、日本研究の博士学位を目指す人の減少に言及し、近年の漫画ブームによって、学生たちが将来の就職のために、古典文学や歴史の研究だけではなく、日本の大衆文化の研究をも兼ねるようになったことを教えてくれる。寺澤行忠氏は精力的な踏査によって把握したアメリカとドイツを中心とする欧米諸国の日本研究の現状に触れながら、日本語教育や図書収集に存在する問題点を指摘してくれる。傾聴すべき意見が多々ある。

第三部「アジアの日本研究」では、李愛淑氏は、日本古典文学とくに『源氏物語』に関する研究が韓国で盛んであることを紹介し、近年、韓国の人文科学の学科統合、廃科の嵐に影響されて、研究環境が悪化し、博士号取得後の研究者の論文数の減少を憂慮する。李容相氏は、韓国、日本、満州の鉄道のもつ密接な政治、経済、軍事的関係を示し、官僚による政治決定の過程を詳細に研究する必要性を

説く。張寅性氏は、人文韓国（Humanities Korea）支援（2008～2018年）によるソウル大学の日本研究の成果を披露し、日韓比較という従来の図式を離れて、日本をグローバルとトランスナショナルな視点から捉え直す動きが強まったことを紹介し、ソウル大学の出版した論文集の内容に触れる。そこからソウル大学の日本研究の多様化、成熟化が見られる。

龔穎氏は、中国人知識人がいかに明治期の西洋倫理学思想の和訳書と日本人研究者の著書を翻訳し、中国での伝播を広げたのかを詳細に辿る。周閔氏は中国における川端康成の文学に関する研究史、動向、新しい傾向を紹介し、川端文学への理解が深化しつつあることを詳述する。顧偉良氏はまず日本の知識人から中国の文豪周作人宛の1400通の書簡の発見を紹介し、その一部分を引用して、日中文化交流の一側面を鮮やかに描写する。そして、日本占領期の職務に関する周作人日記の内容に対する改ざんを通して、中国国内の周作人研究の政治性を批判し、歴史的人物の研究の客観性と公平性の重要性を強調する。姜龍範氏は中日国交正常化以来の中国で行われた過去45年間の日本研究の主な分野と論文数の変化を教えてくれる。

グエン・ヴァー・クイン・ニュー氏は、ベトナムにおける近年の俳句研究の動向を紹介し、ベトナムで展開された俳句創作と研究成果（著書、論文、学会発表）の情報を提供し、氏の主導した全国俳句コンテストの入賞作品の和訳を提示してくれる。P・A・ジョージ氏は、近年のインドで日本関連企業への就職のため、盛んになった日本語教育の歴史と現状を紹介し、勤務校ネルー大学の日本語・日本文化研究の隆盛を詳述する。また、インドで日本研究が普及していない原因は、日印両国の無関心と先入観にあるとし、今後の発展を展望する。

第4部「日本から世界へ、世界から日本へ」は、日本文化がいかに海外へ渡り、受け入れられたのかを中心とする。新山カリツキ富美子氏は1698年、ウィーンで上演された細川ガラシャについてのイエズス会音楽劇「気丈な貴婦人」（*Mulier fortis*）を取り上げ、2017年の宮津での上演予定に触れ、300年余りにわたる日本とオーストリアとの文化交流のきっかけを作ったガラシャの役割を教えてくれる。Michelle Kuhn氏は米国のシカゴ美術学院収蔵の江戸時代の嵯峨本「三十六歌仙絵」と勝川春章画の「三十六歌仙絵本」を紹介し、日本美術の海外輸出を考察している。徳永光展氏は、夏目漱石『心』の英訳本三つにある、日本語語彙の訳し方と訳注の変遷を通して、日本文化がいかに海外に浸透しているかを論証する。

富田哲氏の報告は、日本統治期の台湾総督府、とくに法院や警察における、台湾語などの通訳にたずさわる日本人や日本語を解する台湾人の通訳者と通訳行為

を対象としたここ10年間の研究成果を紹介する。社会言語学、歴史学、民族学の観点から日本統治期の通訳行為のもつ政治的、イデオロギー的な意味を考察することは新しい分野であり、さらなる展開が待ち望まれる。宗主国の日本語と台湾現地語との媒介者の個人的葛藤は、日本統治期の言語使用の複雑性、日本語教育史の負の遺産を示してくれる。Nanyan Guo (郭南燕)の報告は、1920年から1940年までのあいだ、日本在住の外国人宣教師と作家の行った日本語創作を通して、多国籍の書き手によって日本語が「国際化」され、日欧交流が直接、迅速に行われていたことを示す。

最後に掲載されるInaga Shigemi (稲賀繁美)のエッセイは、伊勢神宮の20年おきの遷宮によって保たれたものと失われたものを例に、伝統の受け継ぎに必然的に伴われる喪失を哲学的に論じ、生者が死者に生かされ、死者が生者のゆりかごだ、という生命の新陳代謝を詩的に語る。第二次世界大戦終了後すでに71年経った今でも、日本との和解がまだ成立していないアジア諸国の政治的現状を連想させ、異文化理解としての「日本研究」のもつべき責任を新たに想起させてくれる。

以上のように、日本研究に国際的視野を導入しなければ、日本に対する理解が深まらず、偏ってしまう可能性があり、学術的価値も限られてしまうことは明らかである。したがって、日文研のこれからの使命は国際的視野からの日本研究の質を高めていくことではないかと思う。

最後に、本号の論文の収集は日文研の研究協力課の輝川尚子氏に負うことが大きく、編集は出版編集室の伊藤桃子氏に多大な協力を得たこと、英語論文の校閲をRaquel Hill氏に担当していただいたこと、本誌の編集委員松田利彦氏と坪井秀人氏に助言をいただいたこと、中国美術学院の鄭巨欣教授の筆による墨絵「朝顔」を表紙に利用させていただいたことを記して、深甚なる謝意を表す。

I グローバルな視野からの日本研究

01 Toward a Globalized Japanese Studies: What We Need to Learn from Modern Catholic Japan

Kevin M. DOAK

A few years ago, I asked Marie Anichordoguy, my co-editor at *The Journal of Japanese Studies*, if she could discern any pattern, trend, paradigm, or the like in the field in recent years. I had already worked with her in editing the JJS for more than five years, not only editing the manuscripts that had been accepted for publication, but reading all submissions to the JJS, a number that of course far exceeds the number of articles we published. It seemed to me that the editorship of the JJS offered an unparalleled position from which to discern where the field of Japanese Studies, at least in the English language, was headed. But after several years of reading all these submissions, I was left a bit troubled that I could not discern any trend or pattern in the field. I thought that perhaps Marie, who had served as co-editor of the JJS a bit longer than I had, had noticed some pattern that had eluded me. But no, she agreed with me that there was no clear trend in Japanese Studies at present.

The field certainly has grown more diverse over recent years, although submissions to the JJS were still heavily tilted towards historical and literary scholarship. But even that fact does not allow us to conclude that Japanese Studies has shifted away from the social sciences. Rather, it is more likely that Japan experts in the social science fields are more inclined to publish in discipline-based journals rather than area studies journals like the JJS — although we got a good share of submissions from social scientists as well.

The failure to discern a pattern in the field of Japanese Studies arguably can be presented as proof of the growth and dynamism in the field. There are so many scholars working in so many subfields that the very diversity of topics, approaches, and methodologies can be seen as evidence of the scholarly maturity of Japanese Studies. Perhaps there is another possibility, a more troubling one that goes right to the heart of not only Japanese Studies but of Asian Studies in general.

I am indebted to the subject of my current research, Tanaka Kōtarō (1890–1974), law professor and Chief Justice of the Supreme Court, for this other perspective. Tanaka published a powerful and controversial indictment of the Japanese intellectual world in 1932

called “An Exploration into Our Contemporary Intellectual Anarchy and Its Root Causes.”¹ That is right, the state of Japanese Studies today can be described as “anarchic,” for many of the same reasons that Tanaka found the general Japanese intellectual world of the 1930s to be anarchic. Tanaka attributed the cause of Japanese intellectual anarchy to modern secularism and its bias toward philosophical and moral relativism. As he put it, “Western social thought has been unnaturally ripped away from its indispensable basis in Christianity, and transplanted in Japan in an exotic fashion and has thus begun to develop in a deformed manner.”² This anti-Christian bias that Tanaka found at the root of modern Japanese intellectual life stemmed to a great measure from the popularity of Marxism and neo-Kantian relativism among social scientists in early twentieth century Japan.

At best, religion was acceptable if it could be limited to a subjective, emotional indulgence by eccentrics — something that would surely wither away in time with greater progress and scientific development. But a religion, that claimed already to have reconciled faith and reason and sought to bring that understanding of truth into social science, was seen as a threat to the relativism that informed much of modern intellectual thought. By referring to this situation as “anarchy,” Tanaka hoped to draw attention to the modern intellectual withdrawal from a governing standard of objective truth and its retreat instead to a world of subjective passions and diverse political programs that rejected any assertion of right order, such as was put forth by advocates of the Natural Law (of which Tanaka was one).

Similarly, the English language field of Japanese Studies can be seen as suffering from a double-effect of relativism: (1) in the first instance, scholars working in the field of Japanese Studies undoubtedly are influenced, directly or indirectly, by many of the Japanese intellectuals whose relativist bias Tanaka identified and criticized in the early 1930s; (2) in the second place, Japanese Studies as conducted in English has certainly not completely avoided the exoticism and moral escapism that Edward Said lambasted as “Orientalism” in his classic study of that name.³

While some area studies scholars have embraced the political aspects of Said’s critique that were useful in their agendas against Western cultural imperialism (falling back into the relativism mentioned above), they generally overlooked Said’s moral criticism of how Western men used the Orient for sexual fantasies and worse. Said noted that Orientalism creates the image of the Orient as a “place where one could look for sexual experience unobtainable in

1 Tanaka Kōtarō, “Gendai no shisō-teki anākī to sono gen’in no kentō,” *Kaizō* 14 (7), July 1932, pp. 2–28. pp. 2–28.

2 Tanaka Kōtarō, “Gendai no shisō-teki anākī to sono gen’in no kentō,” p. 5.

3 Edward Said, *Orientalism* (New York: Vintage Books), 1979.

Europe.”⁴

Also, few scholars who do use Said for political purposes are aware of the fact that Said himself was a Christian. The latter point is not about Said’s personal piety (it appears he was not a regularly practicing Christian), but rather that Said’s background as a minority Christian Arab enabled his critical view on the sexual objectification and cultural homogenization carried out by Western men as they projected their fantasies onto the non-West. Today, in spite of Said’s criticism, there seems to be a renewal of this particular kind of moral Orientalism that looks to Japan for evidence of a sexual libertinism that might be contrasted with a supposedly more repressive (Christian) West.

And yet, as Said predicted, this sexualized Japan seems to offer little more than a commodification of the human person and a rather tired form of commercialization and consumption of the images it creates. And these images are increasingly circulating well-beyond “Japanese” or even “non-Western” cultures. Yet the net result is not a true globalist understanding of Japanese culture, but rather an effort to perpetuate moral relativism and the sexual attitudes of nineteenth century Orientalists as broadly as possible in the present.

All is not lost, however. Even as this kind of neo-Orientalizing is being conducted by some Japan Studies scholars today (who are now often joined by their Japanese colleagues who engage in a form of self-exoticizing of Japanese culture as they too embrace what they undoubtedly see as the latest trend imported from the West), there is a renaissance of interest in Christianity in Japanese culture that offers a promising countermeasure to this neo-Orientalism.⁵ Although even scholarship on Christianity in Japan also has been touched by the influences of this Orientalist exoticism and cultural relativism, we are beginning to see new approaches that challenge old shibboleths about the complete eradication of Christianity from Japan during the Edo period or the essential incommensurability of Christianity and Japanese culture.

An important and path-breaking work in this regard is the forthcoming study by William J. Farge that has discovered Baba Bunkō (1718?–1758) as a hidden Catholic who was a prolific social critic and was apparently executed for his faith at a time when Japanese Catholics were supposedly already wiped out or driven deeply underground.⁶ There was not supposed to be a Catholic influence on mid-Edo culture, but Baba suggests otherwise.

4 Said, *Orientalism*, p. 190.

5 Cf. Kiri Paramore, *Ideology and Christianity in Modern Japan* (Leiden: Routledge), 2009; Rebecca Suter, *Holy Ghosts: the Christian Century in Modern Japanese Fiction* (Honolulu: University of Hawai’i Press), 2015.

6 William J. Farge, *A Christian Samurai: The Trials of Baba Bunkō* (Washington, DC: The Catholic University of America, 2016).

The anthology that I edited, *Xavier's Legacies: Catholicism in Modern Japanese Culture* was an effort to signal that Catholicism was not merely something from Japan's early modern period, but has continued to play a largely unsung role in shaping modern Japanese culture, politics and society.⁷ And I have been particularly fortunate during 2015 at the Nichibunken to participate in the collaborative research project headed by Associate Professor Nanyan Guo on the impact of Christian missionaries on modern Japanese language (see her paper at the end of this volume). The large number and wide range of disciplinary specializations of the scholars participating in Professor Guo's project signal that there is a vibrant international community of Japan scholars who recognize the importance of crossing cultural borders in the way that the study of Christian Japanese culture especially foregrounds.

Yet, while Japanese Protestants are well-represented in English language Japanese Studies, the study of Japanese Catholics lags behind what scholars working in the Japanese language have achieved. One can point to a wealth of recent publication in Japanese on Catholic Japanese culture: the five volume set of *Inoue Yōji chosaku senshū* (Nihon Kirisuto kyōdan Shuppanyoku, 2015); the nearly dozen articles by Yamanashi Atsushi published from 2010 to 2012 on various aspects of Catholicism in modern Japan; Wakamatsu Eisuke's many books but especially his *Yoshimitsu Yoshibiko (1904–1945): Shi to tenshi no keijijōgaku* (Iwanami Shoten, 2014); and similarly, Yamane Michihiro, the doyen of Japanese language work in Endō Shūsaku (1923–1996) Studies, who presents a consistently Catholic perspective in his work, something that contrasts with the English language scholarship on Endō's literature that is dominated by Protestant, if not non-Christian, perspectives.⁸

But the crowning jewel is undoubtedly the appearance of Iwashita Sōichi (1889–1940)'s *Shinkō no isan* as an Iwanami Bunko paperback in 2015. The republication of Fr. Iwashita's prewar essays on the Catholic faith in this cheap and widely available format suggests something of the reach of Catholic Japanese Studies in Japan today. In addition, I have found a warm reception for my work on Catholic Japanese whenever I address audiences in Japan (which are mostly composed of non-Christians). Yet, the interest in Catholic Japanese Studies in the West has been rather tepid.

Why the difference? Here I think we have to recognize the influences of Orientalism that tend to make Western scholars of Japanese Studies both uncomfortable with the presence

7 Kevin M. Doak, ed., *Xavier's Legacies: Catholicism in Modern Japanese Culture* (Vancouver: University of British Columbia Press, 2011).

8 For example, contrast Yamane Michihiro, *Endō Shūsaku no "Fukai kawa" o yomu* (Tokyo: Chōbunsha, 2010), with Mark Dennis and Darren J. N. Middleton, eds., *Approaching Silence: New Perspectives on Shūsaku Endō's Classic Novel* (New York: Bloomsbury Academic, 2015).

of Christians in Japanese culture and with the uncompromising universal truth claims that Catholicism in particular raises. In the first place, we have to honestly admit that Western scholars of Japanese Studies are not representative of their own societies' attitudes toward Christianity; by their very professional choice of Japanese Studies a good many Western scholars have run toward Japan from the very Orientalist impulses that Said exposed — to escape from the moral frameworks of their homelands that might oppose their own personal pleasures. Such escapism, however, is more than a matter of personal moral choice. Collectively, it builds in a certain bias toward particularism and relativism in the field of Japanese Studies that is open to every cultural phenomena one can discover in Japanese history and society except for those aspects of Japanese cultural history that speak of something larger, something more global, something that the West might even share with Japan (strangely, with the exception of Marxism, however marginal it is in Japanese Studies).

Of course there are various approaches that might yield a more global Japanese Studies. But certainly attention to the contributions made by Japanese Catholics to their culture is one very important area for promoting a more globalized Japanese Studies. In contrast to Protestantism and Marxism, Catholicism was not introduced to Japan only at the end of the nineteenth century with the wholesale modern transformation of Japanese culture. It established roots in Japan hundreds of years earlier, simultaneous with many “traditional” features of Japanese culture that were shaped in the Azuchi-Momoyama and early Edo periods. Certainly, more scholarly attention to the Catholic disciples around Sen no Rikyū (1522–1591) who shaped the development of tea ceremony, is needed, as are studies on the “Catholic stone lanterns” created by Furuta Oribe (1544–1615) that were subsequently dispersed around the country.

But a study of Japanese Catholics that begins and ends with the *kirishitan* risks a kind of familiar Protestant historical narrative that sees all this as the “superstitions” of the pre-modern era that were modernized and rationalized with the Meiji period. This is the trap that has stunted the growth of a truly globalized Japanese Studies that might escape the dominant modernist biases of Western historiography. Rather than positing a radical break between the Tokugawa period and the Meiji era, a historical perspective that captures the continuities in Japanese society and culture from at least the Azuchi-Momoyama period to the present holds considerable promise in laying the ground for a more global understanding of Japanese culture.

One means of correcting the biases of modernist historiography is to increase the English language scholarship on Catholic Japanese after the Meiji Period. Japanese scholars have already demonstrated the existence of a Catholic renaissance after 1925 through the contri-

butions to modern Japanese intellectual and cultural life from Fr. Iwashita Sōichi, Yoshimitsu Yoshihiko and Tanaka Kōtarō, among others. Western missionaries like Fr. Sauveur Candau, M.E.P. were not irrelevant, but they were very much secondary influences in a movement that was largely driven by Japanese Catholics themselves. Recognizing the Japanese Catholic impetus behind this cultural renaissance is an important step toward realizing the globalized Japanese culture that these men were enhancing in early twentieth century Japan.

At a time when theologians pursue misleading models of an “inculturation” that presumes an incompatibility between Catholicism and Japanese culture, and cultural studies scholars reflect the same bias by simply ignoring or deriding the impact of Catholicism on modern Japanese culture as “foreign,” we should be exploring the history of Catholicism in modern Japan both as a means of closing the gap between English language and Japanese language scholarship in Japanese Studies as well as a means of overcoming the stubborn influences of Orientalism in our field. Anything less is merely to remain passively in the prison house of Orientalism that promises liberation from the West only to enclose one in a narrower view of what Japan is, was, and could yet be.

02 日本十七世紀の自伝、その一側面¹

ヴォルフガング・シャモニ

日本の知り合いなどに、私が目下、江戸時代の自伝、つまり近代以前の日本の自伝に取り組んでいるということを話すと、あまりピンときてもらえないという経験をたびたびする。新井白石の『折たく柴の記』などの2、3点が思い出されることがあっても、それらは散発的な孤立した作品と見られ、「本当の自伝」はやはり近代のものだと思う人は多い。

ヨーロッパでも、自伝はいわゆる「近代的自我」の表現であるので、せいぜいルネッサンス以後のものと思われ、しかも「本当の自伝」は18世紀の後半に成立したもので、ルソーの『告白録』（執筆は1765-70年、発表は著者没後の1782-1789年）が自伝の原点だという見方が長く幅を利かしてきた。そして、ルソーの『告白録』を自伝の原点とすると、おのずから自伝というものは「ある人間が自分の個性の形成過程を、外面的なことがらよりも内面の体験を中心に回想して記録したもの」というような定義になる。

その結果、ルソー以前の自伝が軽視され、特に中世は真っ暗な時代であったなどの結論にたどりつくわけである。そして、ヨーロッパ以外の国々ではヨーロッパの影響を受けてからはじめて自伝という現象が現れたということになる。このヨーロッパ中心主義の結果、「自伝」という用語がはじめて出た例として、ドイツ語のSelbstbiographie（1796）を見るか、英語のautobiography（1797）を見るかという議論がある。しかし中国ではすでに一千年も前に陸羽（有名な『茶経』の著者）の「陸文学自伝」（執筆761年）²があることを知る人にはそれがいささか滑稽に思われる。

1 この小文は第61回国際東洋学研究会の関西部会（2016年5月28日）で講演としてなされたものに、さらに手を入れたものである。この研究を進める上で、鈴木貞美先生をはじめ日文研の諸先生とスタッフの方々から16年にわたって多大の恩恵を受けたことに深く感謝したい。また講演のチャンスを与えてくださった東方学会の関西部会、そして講演原稿を作成するにあたって種々の助言をくださった京都大学の宇佐美文理先生に心から感謝の念を述べたい。

2 それ以前には自紀、自叙、自序伝などの名称がある。川合康三がその『中国の自伝文学』（創文社、1996）でそれらの名称を論じ、特に陸羽の自伝を細かく紹介している（229-252頁）。なお、日本では「自伝」の初出は元果大僧都の983年作とある『自伝』（続群書類従、28下、746-748頁）であろう。

1. どうしてこのテーマを選んだか

私は以前からヨーロッパの自伝に興味をもっていたが、日本文学を勉強するうちに、『蜻蛉日記』は一種の自伝といえるのではないか、『更級日記』、『とはずがたり』などもそういえるのではないか、ほかにもいろいろな形のものがあるのではないか、などの疑問が湧いてきた。

そして35年ほど前、ゲオルグ・ミッシュ (Georg Misch) というドイツの思想史研究家の『自伝の歴史』³という4巻8分冊からなる大著を見つけたときは、大きな驚きだった。第一に、この本の叙述は8分冊のうちの2冊を古代に、5冊を中世に当て、わずか1冊をルネサンス以後の自伝に当てていることで、第二に、その著者がきわめて簡単な自伝の定義から出発していることである。その定義とは「自伝はある人が自分の一生を自分で描いたものである」という。第三に、この本ははじめてヨーロッパ以外の地域の自伝、つまりイスラムの世界の自伝をも考慮に入れているということである。

それで、私は日本の自伝のことを調べて、ミッシュの本をわずかでも補うことができたらしめはじめた。しかし、「近代的自伝」の成立が念頭にあったので、まずは江戸時代から明治の、ミッシュのあの簡単な定義にかなうテキストを集めはじめた。自伝の数がどんどん多くなってきたので、研究の対象を江戸時代に、さらにしぼって江戸時代の初め、つまり17世紀のあいだに作成されたもの限定することにした。

それらのテキストを細かく分析することによって、近代以前の日本における自伝のあり方、あるいは伝統の大略がわかるのではないかと思ったからである。この勉強を進めていくうちに、1990年にドイツの中国学者ヴォルフガング・バウエル (Wolfgang Bauer) が『中国の顔』⁴という題のもとで、中国の自伝の展開を古代から20世紀まで描いた浩瀚の研究書を刊行した。そして同じ年にアメリカで呉百益 (Wu Peiyi) が *The Confucian's Progress* という題で、やはり中国の自

3 Georg Misch, *Geschichte der Autobiographie* (Frankfurt a.M. 1949-69), 4 parts in 8 volumes. 実際は第1巻 (古代篇) がすでに1907年に発表され、おおいに補筆されて1949年に2分冊として再版された。

4 Wolfgang Bauer, *Das Antlitz Chinas. Die Autobiographische Selbstdarstellung in der chinesischen Literatur von ihren Anfängen bis heute* (München: Carl Hanser Verlag, 1990).

伝の歴史的展開を追求した本を世に出した⁵。さらに1996年には川合康三先生が『中国の自伝文学』（創文社）を發表した。この3冊の本は私にとって大きな刺激になった。

ちょうど同じ時、ヨーロッパの歴史研究家によって、近世、つまり中世と近代のあいだに挟まれた複雑な時代⁶に書かれた自伝を計画的に集める動きが起こり、フランス、オランダ、ドイツ、スイスなどのそれぞれ大きな共同研究の計画で、いままで文書館などに眠っていた近世の自伝の目録がつくられ、またテキストが続々と翻刻され、研究されるようになった。それで、あの18世紀後半を目安にする自伝の歴史がおおいに訂正され、近世の社会と文学がさらに深く理解されるようになったといえる。そしてこれらの研究にも私は大いに啓発されたのである。

さて、17世紀というのは日本の時代区分としておかしいのではないかといわれるかもしれない。たしかにおかしなことだ。17世紀とは全く便宜的な区切りであって、実質的には世界のどこにもそのような「時代」は存在しない。だから、これは時代区分ではなく、観察領域として恣意的に規定された時期なのである。たとえば生物学では、生物の分布を調査するには一つのいわゆるメッシュ（英語の「網の目」）を使う。つまり緯度と経度で囲まれた柵形の地域を決めて、その地域にあるすべての、たとえば昆虫を一個体も残さず丁寧に記録することによって、まずはその柵形の中の生態系の一要素が理解でき、ひいてはそれより大きな地域の生態系も理解できるということが期待される。その際、重要なことは、そこにいる昆虫の定義にかなうすべての生き物を同じ基準で記録することである。

これと同じように私はこの1600年から1700年まで勝手に決めた100年のあいだの、上にあげたメッシュの簡単な定義にかなうテキストを集めはじめたが、作業を進めていくうちに31篇のテキストが集まった。本稿の末尾に私が取り上げたこれらのテキストのリストを附した。研究方法として、まず私はこれらのテキストすべてを同じ基準に従って把握することにした。つまり、執筆の動機、形式、機能、あて先（予想された読者）、さらにそのテキストの伝授の形（写本か印

5 Pei-yi Wu, *The Confucian's Progress. Autobiographical Writings in Traditional China.* (Princeton NJ: Princeton University Press, 1990). 書題はイギリスの古典的な自伝、パンヤンの『天路歷程 (*The Pilgrim's Progress*)』をふまえている。

6 ヨーロッパでは長く「近世」と「近代」を区分しないうえに、約40年前から中世に次ぐ時代、つまりルネッサンス・宗教改革から工業革命やフランス革命にはじまる政治革命の前夜まで（国によって違うがほぼ15世紀から18世紀半ばまで）の時代を区別して、「早い」という付加語をつけてFrühe Neuzeit（ドイツ語）とかearly modern period（英語）と呼び習わしてきた。この時代を社会・政治・文化の面で日本の近世と類似するところが多いと見る歴史家がいる。よってここではその時代を指すに「近世」という用語をつかう。

刷かなど)を確定してみたのである。さらにはならずそのテキストの一部(普通は冒頭の部分、短いものは全体)を翻訳して、翻訳にこまかい註を施した。

末尾のリストを見ると、大変雑多な印象をうけるにちがいない。戦国時代の生き残りの武士である小幡景憲の幕府に対する「書き上げ」、日蓮宗の僧である元政の陶淵明の『五柳先生伝』をふまえた『霞谷山人伝』、儒者である林鷺峰の自作年譜、本阿彌光瑳・光甫父子が書き記した三代にわたる家伝である『本阿彌行状記』などは、それぞれ、言葉・形式・内容・機能など、ほとんどすべてのところで異なる、全く別のジャンルに属するものであるので、それらを「自伝」という一つのレッテルのもとにおさめるのは無理なのでは、と思われる読者もあるかと思う。

もちろんそれらの違いを無視するわけにはいかない。しかし、むしろそれぞれの自伝のジャンルの別々の約束ごとをあきらかにすることによって、1600年と1700年とのあいだに、どんな人がどんな枠組み(ジャンル)の中で、自分の人生を振り返って、それを総括することができたか、あるいはそうすることを許されたか、もしくは、そうするように命令されたか、という問いのもとにそれぞれの作品を分析することは、その時代の文化を理解する上で、無意味な問いではないと思う。

そこで、上記の31篇のテキストを紹介したあと、総論のところではむしろ、それらを別々なジャンルとして整理して、それぞれの約束事、またその時代のなかでの機能をできるだけ正確に把握するようにつとめたのである。それらのジャンルはあわせて一つの時代パターンをなしていると考えているからである。そのパターンを解明して理解することが、この研究の最終的な目標であった。テキストを探し、発見する、また翻訳し、注釈する、そして分析・総括する過程は実に30年以上の年月を要した。そして、2016年の秋にようやくこの研究は人に読んでもらえる形になって、『回想と自己演出』という題でドイツ語で刊行された⁷。以下ここでその一部をごく省略した形で紹介したい。

2. 具体例

さて、31篇のテキストにはいくつかの目立つグループがある。その一つは「行実」とよばれた3点(13、16、20番)とそれに形式的に非常に近い「行由」と呼ばれた1点(19番)である。これらのテキストはすべて宇治の黄檗山萬福寺系の

7 Wolfgang Schamoni, *Erinnerung und Selbstdarstellung: Autobiographisches Schreiben im Japan des 17. Jahrhunderts*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2016, 616 pages.

中国生まれの僧侶の自伝で、その僧侶はいずれも、福建省に生まれ、中国でかなりの修行を積んで成人となってから、1654年と1661年の間に日本に渡ってきたのである⁸。

2.1 即 非

ここでまずその一つ、即非如一 (Jifei Ruyi, 1616-1671) の『広寿即非和尚行実』⁹ を短く紹介したい。このテキストは、即非の生前に九丁 (約4000字) の小冊子として印刷され、おそらく萬福寺系の諸寺以外にはあまり普及しなかったと思われる。題名の「広寿」は「広寿山」のことで、九州の小倉にある福衆寺の山号である。題のあとに即非によって口述された行実を記録した僧侶、これも中国生まれの性合しょうごうの名前が記されている。本文のはじめにはその口述の時期 (乙巳年、寛文五年、1665年) とその場所、また即非に自分の行実を語るように依頼した人たち、つまり寺の大檀家である源太守すなわち小笠原忠真という小倉藩の大名や、寺の特別な事務をつかさどるそれぞれの執事の名前があげられている。(図1)

そのあとに続く文章は、まず自分の一生は要するに語るに足りないものだが、河を渡るときに使い、渡った後には捨てる筏いかだのように、この行実も修行して師よりも高いところに進むべき弟子の参考になるかもしれない、というような謙遜の前置きである。

それから自分の経歴と修行の由来を述べる。即非は他の僧侶と同じく自分のことを「山僧」と呼んでいる。はじめに中国の伝記の約束ごとに従って、家族のいわゆる籍貫、親の名前、また誕生にまつわる事情を述べる。ここで僧伝 (僧侶の伝記) によくある、母親が観音様に祈ったこと、そして子を産む前に見た夢について述べられている。子供時代にはもう父親が亡くなってしまふ。転換のきっかけとなるのは、目連劇¹⁰を見たことである。その後、自分も僧侶になって母親の恩に報いようと切に願うようになる。母ははじめは賛成しないが、彼が17歳のときについにそれを許す。それからいろいろな寺をまわって修行を積んだあと、

8 これらの自伝の存在を知ったのは専ら宇治の大槻幹郎先生のおかげである。また実物の閲覧を快諾し、いろいろと便宜をはかってくださったのは萬福寺文華殿の田中智誠和尚である。お二人に深い感謝の意を表したい。

9 『即非全集』(思文閣、1993年)、第4巻、1327-1346頁に複製されている

10 釈迦の十弟子の一人である目連 (目犍連とも、梵語 Maudgalyāyana の音写) が地獄に堕ちて苦しんでいる母親を救い出したという説話が盂蘭盆経にあり、それが盂蘭盆会 (盆) の起源となった。その説話は「孝」を重んじる中国では歓迎され、民衆劇の題材にもなり、福建省では近代まで盛んに上演された。

22歳のとき、福建省の萬福寺で隱元（Yinyuan）から具足戒を受け、そのあとはずっと隱元とつながっている。

しかし順治11年（1654）に63歳の隱元が長崎からの招待に応じて日本に渡るときには、当時39歳であった即非は躊躇して中国に残る。だが結局1657年には即非も日本に渡り、いろいろな障害に出会った後、ようやく1663年に宇治で隱元に再会する。そのあと長崎に帰ろうとした途中、小倉の大名、小笠原忠真に是非あたらしい寺を建設してほしいと引きとめられて、その寺での2年目、数え年50歳のとき、この行実を語るのである。結びに小笠原忠真への感謝のことは述べ、自分の著作をリスト・アップし、最後に自分の現在の心境を述べた一節を附してある。

ここで私は即非の中国と日本での修行・活躍を論じるつもりではなく、ただ、この口述された行実の構造を問題にしたいと思う。そうする前に同じグループのもう一人の僧侶の自伝をも紹介したい。

2.2 独 湛

この自伝の題は『初山独湛禪師行由』¹¹で、つまり浜松の近くの細江にある初山宝林寺の住持であった独湛性瑩（Duzhan Xingying, 1628-1706）が修行の由来を語ったものである。「行実」と「行由」とは名称が異なり、後者は特に仏教的な意味合いがある（行由はいわゆる「六祖壇經」で慧能の伝記を語ったところに出る用語）が、構造的には似ている。

これもはじめに口述の自伝を記録する二人（二人とも独湛の日本人の弟子）の名前が記されたあと、成立の時期は丙辰の年（延宝4年、1676年）と記され、次の行に寛文己酉（寛文9年、1669年）よりこれまで4回も話をするよう頼まれたこと

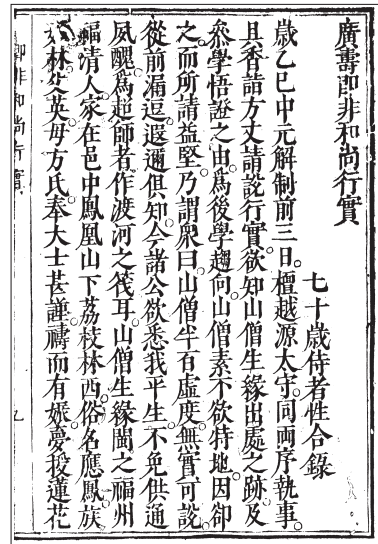


図1

11 著者生前に印刷され、冊子として発表されたが、近代の翻刻はない。冊子は宇治の萬福寺文華殿と駒沢大学図書館に所蔵されている。この自伝は京都大学の太谷正雄先生が中心になった研究会で取り上げられ、筆者も参加しておおいに教えられた。

が記されてあるので、8年にわたった独湛の4回の話をも、その二人の弟子が記録あるいは編集したことになる。独湛自身もその編集作業に参加したかもしれない。話すように頼んだのは、ここでも檀家の近藤貞用さだもちという旗本、そして寺の事務をつかさどる僧たちである。

4回にわたって話したもので、即非のような肉声の跡がない。いきなり自分の家族の名前から始まり、しかも遠く宋時代にまでさかのぼって祖先の話あげている。たしかに、独湛は正史に載っている何人もの有名人を祖先にもっていたのである。そして自分の誕生の年月日、時間まで記したあと、かなり具体的に、豊かな文化をもった家族環境を描いている。親戚が地方の試験に合格したときの豪華な祝宴を見てはじめて無常を感じたと述べているが、その後、ある日、やはり目連劇を見て決定的な転換期をむかえ、16歳で郷里の寺に入る。彼もまた、いろいろな寺と師をまわる（このあたりは非常にこまかく描かれていて、読む者に、即非と同じように熱烈な求道心がつたわってくる）。そしてついに1651年に福建省の萬福寺で隠元に出会う。そのときの気持ちを「本師を一見して遂に恋々として去るに忍びず」（原漢文）と述べている。

そして3年後、当時27歳の独湛は隠元とともに日本に渡り、寛文元年（1661）以降宇治の萬福寺の建設に協力する。1664年、37歳のとき、先述の旗本、近藤貞用の招待を受け、宝林寺を建設するのだが、出発の前、隠元が彼に嗣法のしるしとしてほっすを渡す。宝林寺は1665年に隠元を開山にして創建されるが、独湛はそれから17年にわたってその寺の住持を務めたのち、天和元年（1681）に萬福寺の四代目の住持として呼び戻される。それ以前、宝林寺が発足してから12年目にこの「行由」と題された自伝が作成されるのである。

しかし、この宝林寺在職の12年間についての記述は極めて短い。やはり即非の場合と同じく、若いときに求道のため師から師へ渡り歩いたときの叙述が本文の中心をなしている。宝林寺に関する数行の叙述のあと、1673年の隠元の死を述べ、そして隠元への感謝の言葉、また檀家の近藤貞用への感謝の言葉で結ばれている。最後には「山僧今年五十歳」と記されている。正確にかぞえれば、どうしても数え49歳としか言えないが、おそらく、50歳という年齢がこういう行実を口述するにふさわしい節目と思われたので、そうしたのであろう。

2.3 共通性

さて、この二つの自伝には次にあげるような共通点がある。①題の後に記録者の名をあげている。つまりただ一人で書いたものではなく、他の人からの協力の

もとで出来上がったテキストであることを示す。②記録の年と口述を促す人びとの名前があげられている。③まず出生から子供時代について述べ、それから、出家する動機が形成される過程を述べる。その過程で目連劇を見たことが強調されていることが特に重要である。④出家したあと、いくつかの寺をまわって、いわゆる本師を見つけるまで、さまざまな師のもとで修行する。この内容が量的に一番大きなウェイトを占めている。⑤最後に自分の到達点での心境を総括する。⑥漢文で記されている。⑦もう一つの重要な共通点はそれらの行実は印刷で広められたということである。

しかし両方の冊子には序も跋もなく、刊記もない。自作年譜によくあるように執筆終了から死ぬまでの人生を補う第三者の補遺もないので、あきらかに「著者」の生前に印刷になったもので、しかも寺の「内部」で発表されたものと思われる。

2.4 悦山と柏巖

もう一人の黄檗僧、つまりのちに、萬福寺の第七代の住持となった悦山道宗 (Yueshan Daozong, 1629-1709) の「行実」もあるが、それには本人の口述の時期も記録した人の名前も記されていない。ただし、結末に寺の大衆に話しかけている言説があるし、口述の時期も50歳のように、やはり前に紹介した即非や独湛のものと同様に基本的な状況で出来上がったテキストであると思われる。そして『悦山禪師語録』(1687年刊か)に収録されているので、著者の生前に発表されたものと考えてよい。

4人目は事情が少しちがう。柏巖性節はくがんしょうせつ (Boyan Xingjie, 1634-1673) は寺の住持ではなく、一生自分よりえらい僧侶の侍者を務めた人である。彼は即非の招待に応じて1661年に来日し、その後ながく18歳年上の即非に仕えたが、即非が亡くなると、萬福寺に行って隠元に仕えた。そして隠元が寛文13年(1673)4月に亡くなると、引退して、同じ年の九月に亡くなる。自分の自伝の結びのところで隠元の死が述べられているので、その自伝は隠元の死と自分の死の短い間に書きとめられたことになる。寺の住持でもなかったため、彼に修行の由来を話すように頼む人もいなかったが、文人的趣味があったので、自分の意思で書いたわけである。それにふさわしく、「山僧」という自称を使わず、文人が使う「余」を使用している。わずか40歳で亡くなった。しかし、この自伝も「行実」と題され、内容的に前の3篇の自伝に類似している。柏巖の詩文集『聴月集』(1687年刊)の第4巻におさめられた。

2.5 一つの伝統

上述した4篇の自伝はすべて中国の僧侶が日本に来てから記録されたものであるが、それでは、当時中国の彼らの周辺にそういう習慣があったのであろうか。さかのぼって見てみると、隠元には既にただ『行実』と題された自伝¹²があり、それは隠元が60歳で、まだ中国に居たときに記録されたものである。そこには記録の時期も口述を願う弟子たち（その中に即非もいた）の名も明記されている。そして隠元の師、費隱（Feiyin）にも『行繇』と題されたものがあり、それには記録の時期と年齢は記されていないが、編集した門人の名前があり、また口述を願う人のうちに隠元の名が見える。費隱の師の密雲（Miyun）にもまた「行実」があり、口述の時期とそれを願う門人たちの名前が記されている。

これらの事実を総合すると、中国の少なくとも福建省の禅宗の寺では50歳あるいは60歳に寺の住持を務めた僧には自分の経歴を話して、記録してもらう習慣、あるいは制度があったということである。彼らはこの習慣を日本に持ってきて日本で続けたわけである。そこで二つの問題に気づく。

3. 二つの問題

①ヨーロッパを見ると、近世のプロテスタント、特にイギリスのピューリタンやドイツのいわゆる敬虔派の人々のあいだに、日記をつけたり自伝を書いたりするという習慣があったことがよく知られている。それは、人が、世俗化した伝統的な宗教から分離して、より深い信仰にめざめたときから書くのであった。そこには、自分を毎日観察し、反省する一種の計画性、ないし合理性が働いていたといえる。

それでは、東アジアにも似たような状況があったかという問いが浮かぶ。それには第一に中国の宋時代以来の儒学の特徴である自省的な傾向があげられる。その上、より民衆的なレベルで、明朝末期から清朝にかけていわゆる「善書」がはやっているが、日本で特に影響力をもったものとして株宏（Zhuhong, 1535-1615）の『自知録』と袁了凡（Yuan Liaofan, 1533-1606）の『陰騭録』があげられる。この二つの本は日本ではじめて元禄14年（1701）に2冊揃いで印刷されている。そしてその際に萬福寺の独湛が『陰騭録』の序を書き、京都の法然院の忍激（1645-1711）が『自知録』の跋を書いた。ここに、すくなくとも独湛の場合に、「自伝」

12 『隠元和尚広祿』（無刊記の日本版）巻18に収められている。

と「善書」との関係が見えてくる¹³。これは一つの接点に過ぎないが、計画的な自己反省と自伝との関係はより広い視野で究明しなければならない。

②もう一つは、黄檗派の中国生まれの僧侶たちのこうした自伝の伝統が日本人の自伝に影響を及ぼしたかという問いである。いまのところこれには簡単に答えられないが、ここでは、まずは2篇の自伝をとりあげて注意をうながしたいと思う。

3.1 了翁

それは、まず宇治の萬福寺に深くつながっている日本人の奇僧、了翁道覚(1630-1707)の自伝である。この人は秋田の湯沢で極貧のうちに孤児同様に育った人で、のちに小説のような一生をおくった。11歳のとき地元の寺に入り、14歳のとき平泉の中尊寺であの有名な紺紙金字(銀字)経がないがしろにされ、既に大半が損失しているのを見て悲憤慷慨し、自分の一生の間に、大蔵経一そろいを集めたいという大願をたてる。それ以後、20年も七難八苦の日々を過ごしながら、承応3年(1654)に隠元の来日を聞いて長崎まで走るが、病気になってしまい、その門に入ることができなかった。

1661年に一時、即非の弟子になったが、のち即非のもとを去り、いろいろと苦行を行い、ついに自分を去勢するなど、肉体的にも極限状況を経験する。そして心身ともにどん底に達したときに、夢に長崎の中国人の僧、黙子如定もくすじょじょう(Mozhi Ruding, 1597-1657)が現れ、傷跡を治す薬を教えられるのだが、その薬が奇跡的に効いて、健康が回復した。いろいろと躊躇したあげく、江戸の不忍池のほとりに店を開き、錦袋円という名前でその薬を売り出すのだが、それが大いに成功して¹⁴、またたく間に百万長者となった。

その金で延宝元年(1670)に上野の寛永寺に図書館をつくる。その図書館にまず天海版の大蔵経を納め、それから外典も、つまり中国の史書から日本の物語、和歌まであらゆる本を集めて、その図書館を全国の人に開放し(彼らのための宿泊施設の寮までつくった)、実質的に日本で最初の公共図書館をつくったのである。しかし彼はそれだけでは満足せず、全国で合計21か所の寺にも図書館をつくった¹⁵。了翁は残りの人生を萬福寺と寛永寺の間を何回も往復して過ごす

13 禅僧であった株宏にもこういう接点が見える。彼は数多い著作のうち『自知録』だけでなく、『禅関策進](中国版は1600年、日本版は1656年)という宋・元の禅僧の経験談(参禅録といってもいい文を多く含む)を集めたものもある。

14 錦袋円は万能薬として江戸時代を通して有名で、『江戸名所図会』にもその店先の絵があり、薬は大正時代まで売られていた。

15 鉄眼禅師がちょうどそのときに開版した大蔵経が了翁のこの活動を可能にした。

年に萬福寺の第五代住持を務めた高泉（Gaoquan）に嗣法の弟子として認められ、ついに1707年に万福寺で亡くなる。ちなみに、貞享元年（1684）、つまり了翁の生前にはすでに彼の業績を記念してその石像（坐像）が寛永寺の境内に立てられ、元禄5年（1692）には彼の業績をたたえる石碑（碑文は高泉）が立てられた。石像も碑も現在まで東京の寛永寺の境内にある。

この了翁は貞享2年（1685）、3番目の図書館を高野山の光台院につくった後、それを記念するかのような形で、自分の波乱万丈の人生を記した自伝¹⁶を書いた。書いたといっても、さきの黄檗派の僧たちと同じく、二人の弟子がその作成にあずかったと本文の終わりに記してある。しかし、あの中国生まれの僧たちの自伝とちがって、序と跋があり、また本文の中心部は年譜風になっている。そして何よりも、生き生きとした和文で書かれている。残念なことに伝授が弱く、現在知られている3種の写本はいずれも近代に入ってから書写されたもので、はじめて印刷になったのも、明治30年である¹⁷。ここに書き出しを引用しておく。

某乙ハ *本朝東山道羽州仙北雄勝郡八幡村野民ノ子也。寛永七年庚午、三月十八日午日午時生ル。如何ナル夙世ノ業因ニヤ有ケン、不幸ナル事、タトヘテ更ニイハン方ナシ。既ニ二歳ニシテ慈母ニハナル。父、養育スルニ力ナクテ、同郡高屋敷村ニ、高橋氏某ト云テ、富栄ノ人アリケル。縁ヲ其モトニ求テ、我等ヲ遣シテ子トナシヲハレリ。其年、不図ニ養母世ヲサリ、続テ又養父ヲ喪シ、又程モナク姉二人マテ早世セリ。¹⁸

この後の子供時代も不幸の連続で、よってこの自伝は書き出しから詠嘆的な調子であり、絶望と苦労の話が多い。仏教の修行の話もあるが、それよりも願の実現のための奮闘、また三つ目の図書館設立までの道のりの叙述が中心になっている。その山場の一つは1665年に夢で教えられた薬が奇跡的に効いたとき、この薬を売って自分の願の実現のために使おうかと迷ったところである。まずは知り

16 弘前大学の渡辺麻理子先生による秋田県公文書館所蔵『了翁祖休禪師行業記』（外題）の翻刻文は『論叢 アジアの文化と思想』第14号（2005年）に発表された。同じ翻刻文は他の伝記資料と合わせて『東京大学総合図書館所蔵嘉興大蔵経 目録と研究』II研究篇（2010年）にも収められている

17 活字本の『了翁禪師伝』は大変な稀観本であり、大正大学図書館と叡山文庫（坂本）に所蔵されているものが知られている。なお、昭和13年、鈴木左祐氏が秋田本の小部数の謄写版をつくり、それが最近デジタル化され、国会図書館のデジタルコレクションで閲覧できる。

18 引用は渡辺氏のテキストによる（註16参照、35-36頁）。原文中、天皇などに敬意を表すために使われる「欠字」、「平出」、「台頭」を便宜上アスタリスクで示す。

合いの旗本松平忠冬と相談するが、その人は「釈氏ノ門ニハ商估きかずヲ不聞」といつて強く反対する。それで了翁はその旗本の兄に自分の志すところを説明する。

夫諸仏ノ三世ニ出世シ、諸祖ノ十方ニ応現シ（中略）孔門ノ仁義、老子の虚無、諸子百家別立一義、此等ヲ算へ挙テ、詳ニ其行跡ヲ考へ思へハ、一々別々悉ク皆其所能ヲ売却シテ、世ヲ濟ヒ物ヲ導クニ非スヤ。大凡ソ売門ヨリシテ万法ヲ見レハ、塵々箇々売品ナラスト云コトナシ。

そして、熱弁の結びには「作用是性¹⁹ 我只売棄セン」と高らかに宣言する。相手が笑って「且ク汝カ好ム所ニ任ス」²⁰と同意する。このように会話を交えた緊張ある場面を描いて、読者にあたかも小説を読むかの感じを与えている。

さて、この自伝がどこまで了翁の著作か、どこまで二人の弟子の作成したものかは別にしても、この文章をどう評価すべきか、私も迷っている。萬福寺と深く関わっている僧の自伝だけあって、あの中国生まれの僧たちの自伝から刺激を受けたことはありうるが、それを示す直接的な証拠はない。言葉は勿論、様式もかなり異なっている。自称は「山僧」でもなく、「余」でもなく、「某乙^{それがし}」である。それでも、了翁が萬福寺の僧たちと密接な関係があったことは動かない事実である。題は写本によって異なるが、一番信頼の置ける写本（秋田県公文書館蔵）は外題が『了翁祖休行業記』で、内題は『収納一代宝典並儒老倭漢群書武州諸国二十一庫本末縁起並序』となっている。外題がジャンルを示し、内題は中心的なテーマを示しているといえる。このことから自伝執筆と願の成就（貞享2年の3番目の図書館設立）が繋がっていることが解る。

3.2 橋染子

萬福寺周辺の日本人の自伝には、元禄時代の幕府の実力者、柳沢吉保（第五代将軍綱吉の側用人）の側室、橋染子（系譜では飯塚氏、1667-1705）という女性のものがある。萬福寺周辺といっても、了翁のように直接的な関係はなく、主人の吉保を通しての関係である。吉保は萬福寺の何人かの僧の指導を求めたが、そのなかに自伝を残した悦山や了翁の師である高泉も入っている。それで、吉保が上にあげた自伝を見た可能性は高いが、側室の染子はおそらく、彼から自分の修行を

19 禅籍に「作用即性」とか「性在作用」として出る句で、日常的な行動がそのまま仏性の実現であるという意。

20 前引用のテキスト、58-59頁。

記録するように勧められて書きとめ、わずか39歳で亡くなったのち、吉保が彼女の遺した記録を整理したと伝えられる²¹。そういう意味で染子の自伝も萬福寺周辺のテキストと見ていいと思われる。

さて、染子の自伝は「行実」ではなく『故紙録』²²と題されている。「故紙」はもちろん謙遜の表現で、題は「価値のない記録」という意味である。この『故紙録』に言及した、わずかにある現代の研究文献では「參禅録」とも言われている。

染子が生んだ吉保の長男吉里が大和郡山の大名になったあと、柳沢家の菩提寺、永慶寺に納めた『故紙録』の贅沢な写本が現存している。縦22センチの1ページにただの4行という体裁なので、それほど長くないテキストが2巻になっている。同じ形の写本で同じ寺に納められた吉保自身の自伝的記録は33巻である²³。

染子のものを見ると、いきなり子供時代に地獄の恐怖を感じたところから始まる。(図2)

我七八歳^{ころ}ノ比。タマタマ。* 醍醐帝^{ないり}ノ泥犁ニ墮チ給フ。双紙ノ画ヲ見テ。不
図アヤシミテ。爺^ちニ問ヒシハ。* 帝王ノ。ナニノ故ニ。カク畏^{おそ}ロシキ呵責ニハ。
逢ヒ給フゾト。尋ケレバ。爺^{おの}コマヤカニ。ソノ謂ハレヲ。物語リシ給フ。是
ヲ聞キシヨリ。心神悚^{おの}キ恐レテ思ヒシハ。最モ畏^{イト}コキ* 御門^{おんくら}ノ御位ニテサへ。
所作ノ業報ヲバ。カク遁レサセ給ハヌゾヤ。マシテ。愚カニモ賤シキ身ノ。
一生ノウチニハ。幾バクノ罪咎^{つみとが}ヲカ犯サンズルヲ。忽チニ死シ畢^をラバ。来世
ノ苦患^{くぐん}。イカナラント。想ヒヤリケリ。ソレヨリコノカタ。遊ビ戯ブル、次
デニモ。事ニ触レ物ニ感ジテ。唯オソロシ。オソロシトノミ。思ハル。²⁴

ここでは自分の生まれ、親の名前などには一切言及していない。続いて9歳のときの母の死、それから18年飛んで自分の3人の子を幼いうちに次々と失う悲しみ、

21 そのことははっきり、同じく吉保の側室であった正親町^{おおぎまち}町子の「松蔭日記」(岩波文庫版、335頁)に書かれてある。なお、町子は染子の記録の題を誤って『胡氏録』と書く。

22 最初の翻刻は1897年のもので稀観本だが、国会図書館のデジタル・ライブラリーにおさめられている。新しい翻刻として三田村鳶魚編『近世仏教集説』(1916、復刻1993)の後、大和郡山の永慶寺発行の『柳沢吉保公參禅録』(1973)に、翻刻とならんで写本の覆刻を極端に縮小した形で納められている。

23 両人の記録の同じ体裁の写本は甲州市の恵林寺にも所蔵されている。なお、別な写本(1頁に6行だがこれも大変綺麗な写本)は駒澤大学図書館の所蔵で、デジタル化され、公開されている。

24 引用は上記の永慶寺版(274頁)による。句点や片仮名の振り仮名は駒澤大学の写本により、平仮名の振り仮名は筆者が補った。アスタリスクについては、註18参照。

そしてそれにともなって起こった人生に対する疑問を述べている。そういうことから、吉保がまず自分で彼女を禅の修業に導こうとし、後に雲巖禪師という龍興寺（現在東京中野にある）の住持を紹介するが、彼女はその雲巖禪師の指導をうけて、ついに元禄13年に悟りをひらくことが出来たというところまでの道を記している。

注意すべきことは、禅の修業以外の人生はほとんど描かれず、ただ初めのところで、自分の疑問と修行への道のきっかけをつくった諸事件を述べるにとどまっているということである。いつ、またどういう経路で柳沢家に入った

かに触れていない。また、何よりも驚くべきことは、吉保の長男を産んだことにも言及していない。長男を産んだことは側室の染子の地位を決めることであったはずだが、ひと言もいわない。たった一人の生き残った子のことをいわない代わりに、幼児のとき亡くなった三人の子のことは一人ひとりを用いるのである。それで確かに、この自伝は最初から最後までこの女性一人の悟りを開くまでの道の記録として統一されているといえる。黄檗山の僧侶たちの自伝は修行以外の人生もある程度までふくまれているが、染子のものは修業に制限されている。

吉保の記録には萬福寺との連絡がはっきりあらわれているが、その連絡は吉保個人の連絡で、染子の連絡でないのはもちろんのことである。ただ、染子の記録の動機、また、吉保が染子に記録を勧めたのは萬福寺の坊さんたちの自伝があったのことと考えられる。我々が今日目にする染子の記録の形は、彼女が1705年にわずか39歳で亡くなった後、主人の柳沢吉保が彼女の記録（本文の中の最後の記載は1700年）を編集して豪華な体裁の写本をつくらせたものである。彼女のものに吉保のかなり凝った漢文の序がついている（吉保の記録には靈元天皇の序がある）。染子と吉保の二人の記録は同じ体裁で、少なくとも三つの寺（大和郡山の永慶寺、甲州（塩山）市の恵林寺、東京中野の龍興寺）に納められたということは具体的にどういう意味であったかわからない。あたかもこの二人の関係を記念するような形である。

近世には女性による自伝的な文章が少ないようで、管見に入ったかぎり、17世紀にはすくなくとも三人のものがある。他には松江藩の大名の娘、京極伊知子

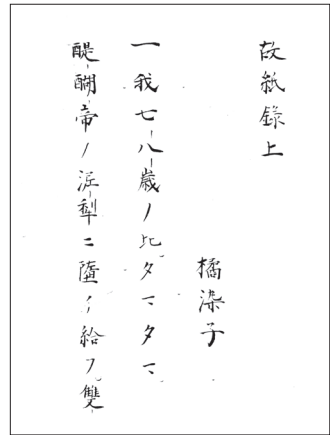


図2

の「涙草」と俳人^{でん}田捨女として知られ、のちに盤珪の弟子になった貞閑尼の無題の文章がある。その中で伊知子のものも大変魅力的な作品であるが、染子のもは思索する女性²⁵の記録として光っている。日本でこれら三人の女性の自伝がほとんど注目されていないことは不可思議としかいいようがない。彼女らも日本に支配的である上述したヨーロッパの自伝概念（ヨーロッパではもはや清算された概念）の犠牲者になっているのであろうか。

4. ジャンルの問題

さて、上に書いた通り、私はそれぞれのテキストを紹介するとき、何よりもそのジャンル（ヨーロッパのジャンルではなく、17世紀の日本で著者と読者が共有していたジャンル）を確定するようにつとめた。なぜなら、ジャンルの体系は文学の「文法」の中心部ともいわれるが、ジャンルによって書く人の経験がどのように表現されるかだけでなく、何が表現できるかということまで決められるからである。即非の場合には、「行実」が題になっているのでジャンルの確定は一見簡単ようだが、「行実」とは何であろうか。「行実」は一般的に儒者の伝記にも使われているので、特別仏教的な意味合いがなく、ある人の一生の事実をあまり文学的な潤色を加えないで書き記したもの、という意味に理解できる。そしてより一般的な「行状」とほぼ同じ意味だと思われる。

それでは「行由」、「行業記」とは何であろうか。両方とも仏教的なコンテキストでしか使われていないようである。即非の自伝は「行実」というが、亡くなって一年あとに弟子が書いた伝記は『広寿即日和尚行業記』という題をもっている。ところで、その三つのジャンルはともに『日本古典文学大事典』には項目として存在しない。「行業」は『例文仏教語大辞典』（小学館）には「身・口・意の所作、また一般に仏道の修行」とあり、また「行業記」は「僧の一生の行動を記した伝記」ときわめて簡単に説明されている。しかし、ただそれだけであろうか。こういうジャンルにはそれぞれもっと細かい約束事があり、そのジャンルの実作も歴史とともに変化があったはずである。

もちろん、私はそういう事典だけに頼ったわけではない。それぞれのテキストに内在するジャンルの約束事をさぐって見たし、またその背景にある『文体明弁』（明の徐師曾の著）などの本をしらべたのだが、『文体明弁』などは何百年にわた

25 柳沢吉保に対する民衆の反感が災いして、『元禄太平記』という実録などで染子に対して悪女のイメージがつくられ、現代のテレビドラマなどに受け継がれているが、一方、彼女が書きのこした文章はほとんど無視されている。

って伝授された規範を簡潔に記したものとして参考になるが、歴史的な現実での規範の応用については模範になる例文はあげるものの、歴史的変化についてはほとんど何も言っていない。しかも、仏教系のジャンルは完全に無視されている。

それで、私は私なりに、人間の一生に関わるすべてのジャンル（中国、日本を問わず）のリストを作ってみた。先ず中国伝来のジャンル、つまり「伝」とその無数のサブ・ジャンル（史伝、家伝、托伝、孝子伝、往生伝、高僧伝など）、それから行状、行実、行業記、墓碑銘、墓誌、哀悼、祭文、誄、末後事実、または自題、自記、自序、自賛、自詛など、それから日本のジャンル、書き上げ、軍功記、由緒書き、系譜、終焉記、辞世、言行録、奇人伝、人物誌などなど、その定義とテキストを集めてみたのだが、私のように漢文の読書経験のあさい外国人が泥縄式にそれをやっても、成果が非常に不確かなものとなるのは避けられない。

それで、一つの途方もない夢をみることがある。せめては東アジア、つまり漢字文化圏に共通の文学文法である中国生まれの散文の諸ジャンルの事典のようなもの（バーチャルな形でもいい）があればいいなという夢。それは、それぞれのジャンルの伝統的な定義だけではなく、中国、朝鮮半島、日本での諸傾向と実例をも網羅するようなものであってほしい。もしかしたらそういうものがすでにあるかもしれない。少なくとも断片的にすでに存在していると思う²⁶。

なお、拙著『回想と自己演出』には17世紀のわずか31篇の自伝的な文章が紹介されている。しかし、私は2篇（番号の2と8）を別にすればすでに印刷になっているものだけを対象にした。しかし計画的に文書館などを探索すれば、17世紀だけでもその何倍ものものがあるかもしれない。中国では、すでに1936年に郭登峯が『歴代自叙傳文鈔』（新版1985年）を発表して、司馬遷から梁啓超まで140点の「自叙伝」を集めた。また戦後には、台湾の学者杜聯誥がその『明人自傳文鈔』（1977年）に明時代だけで210点のテキストを集めている²⁷。

日本では、この種のテキストを集めるのはこれからの仕事のようなものである。同学の人たちによってもっと積極的にテキストが発掘され、また研究されることを熱望してやまない。

26 たとえば水田紀久の「碑銘と行状」（1974年、『国語と国文学』第51巻第10号に発表、1987年に論文集『近世日本漢文学史論考』に所収）はそういうジャンル辞典への貢献と見ていい。なお、拙論「『序』の文学史のために」（『文学』第7巻第4号、2006年7・8月号、187-200頁）も不十分ながらこの方面への試みであった。しかし、中国の伝統には短くしか触れておらず、朝鮮・韓国は全く視野にはっていない。

27 編者はひろい「自伝」の定義から出発している一方、宗教的な自伝はわずかしか採集していない。

付録 『回想と自己演出』で扱ったテキスト（括弧内は成立年）

- 1 日奥 「賜京信徒書」（「御難記」）（1602）
- 2 木俣守勝 「紀年自記」（1610）
- 3 二木寿斎 「寿斎記」（1611）
- 4 反町幸定 「反町大膳訴状」（1617）
- 5 玉木吉保 「身自鏡」（1617）
- 6 島津義弘 「惟新公御自記」（～1619）
- 7 渡辺堪兵衛 「渡辺水庵覚書」（1632）
- 8 小幡景憲 「小幡景憲記」（1642）
- 9 松永貞徳 「戴恩記」（～1644）
- 10 京極伊知子 「涙草」（1650）
- 11 大蔵虎明 「わらんべ草」（1659）
- 12 脇田如鉄 「脇田家伝」（1660）
- 13 即非如一 「広寿即非和尚行実」（1665）
- 14 元政 「霞谷山人伝」（～1668）附「偶書」
- 15 池田光政 「覚」（1672）
- 16 伯巖性節 「行実」（～1673）
- 17 山鹿素行 「配所残筆」（1675）
- 18 中嶋両以 「中嶋両以記文」（1675）
- 19 独湛性瑩 「独湛禅師行由」（1676）
- 20 悦山道宗 「行実」（1678）
- 21 林鶯峰 「自叙譜略」（1680）附「一能子伝」、「西風涙露」
- 22 本阿弥光甫 「本阿弥行状記」上巻（～1683）
- 23 榎本屋弥左衛門 「三子より之覚」（1680）
- 24 了翁道覚 「了翁祖休行業記」（1685）
- 25 徳川光圀 「梅里先生碑」（1691）
- 26 近藤徳用 「雨夜のすさみ草」（1695）
- 27 河内屋可正 「河内屋可正旧記」（1693 - 1706）
- 28 宇治加賀掾 「門弟教訓」（1697）
- 29 村上冬嶺 「二魂伝」（1698）
- 30 貞閑尼（田捨女）（無題の記録）（1698）
- 31 橘染子 「故紙録」（1700/1705）

03 Peripherality and Provinciality in Japanese Studies: The Case of the English-Using World

Eyal BEN-ARI

Introduction

Since the end of the Cold War the conditions for producing knowledge in the scholarly fields called “area” or “regional” studies have been the focus of intense self-reflection. Those of us belonging to Japanese or Japan Studies (henceforth JS) have also participated in this reflexive exercise. Indeed, during this period, we have heard critiques of the Euro-American model of scholarship sounded by scholars based inside and outside of Japan who have systematically questioned the epistemological foundations of JS and sought to offer alternatives (Hamaguchi 1985; Kent 1999; or Ryang 2004a, 2004b). Other works like that of Morris-Suzuki’s (2000) calls for an anti-area studies approach that takes as its starting point a much more global view of developments. And yet another strand raises questions about the degree to which North American-based scholars can be said to dominate our field — in access to funding, setting research agendas, and determining career patterns or access to journals (Asquith 2000a; Kuwayama 2004; Sugimoto 2013).

Alongside these developments, in the English-using world the same period has ever increasing theoretical citation in articles published in JS (as in other regional journals and books) in both the social sciences and the humanities. These quotations may take the form of analytical constructs that are deployed in regard to Japanese data or “ornamental” quotes (witness the ritual invocation of French academic “saints” as Foucault, Derrida, or Deleuze). In the social sciences, it seems, what is worthy of study in JS is governed by the disciplines and their emphasis on the theoretical contribution of a given study and less and less by multi-disciplinarity or holistic understandings of areas. In the humanities, the concepts, theories, and frameworks of cultural studies have become almost a precondition for publication and career advancement.

Against this background, in this article I raise questions about the inputs Japanese scholarship have contributed to the dominant English-using academic system. Specifically, I will argue that from the point of view of the core of this academic system, these contributions have typically taken two ideal-typical forms of peripherality: what I call *marginality* and *provinciality*. In this sense, my essay contributes to what Ludden (1997) calls a theorization or theory of area studies or of area-specific knowledge(s). My argument follows Sugimoto’s

(2013) plea that we need to extend the comparative angle used in regard to Japan inwardly towards academic institutions and to area studies like JS. To be clear then, my aim is *not* to add another deconstruction of area studies but rather to suggest that it may be fruitful to use the case of JS to think comparatively about the ways in which knowledge about areas is socially produced, reproduced, and integrated into systems of knowledge.

Area Studies: Centers and Peripheries in Systems

Analytically, the character of JS is dependent first of all on their place in the broad scheme of the academic systems comprising the world of higher education. Many scholars — including those in JS — usually identify two levels of this system: the globally dominant one where English is used and a variety of local systems interacting to a greater or lesser degree with it. This system is often thought of as having a center, semi-centers and peripheries (Gerholm and Hannerz 1982).

A more complex picture reveals that the world is actually divided into three tiers of various overlapping linguistic academic systems each of which is characterized by its own metropolitan centers, semi-centers and peripheries (Hamel 2007). Below the dominant top tier of the English-using system lies the second tier each of which is characterized by its own language of research and mode of academic production and using the languages of former colonial or regional empires (Eades 2000): the prime examples are the Spanish, French, Chinese, Russian, Arabic, Japanese or Hindi academic communities. Finally at the bottom is the third tier comprised of other countries with languages that have little international diffusion.

Each community, with variants, is characterized by its own academic mode of production. A prime and relevant example for our purposes is the slowly changing *kenkyushitsu* model in Japan that long assured tenure without “publish or perish” pressures, made available and legitimized in-house publications, provided more publishing opportunities earlier in careers, and (still) has large readerships in the Japanese language (McVeigh 2002; Poole 2010). For the Japanese-using academic system — as for other of the larger linguistic academic communities — the governing issue is the presence of a critical mass of scholars and resources that can assure full-fledge careering structures and practices, and allow them to be relatively disconnected or loosely coupled to the English-using system. Thus while mastery of (academic) English is a prerequisite for participating in “international scholarship,” its use may be limited if there is a very large internal academic market as in China or Japan (Barshay 1996; Eades 2000). Such academic markets, unlike those characterizing “small” societies like Malaysia or Israel, often allow professional advancement without publication or participation in English language fora.

The indicators of how English has become the dominant language of the academic world are clear. For instance, more than 75 percent of the articles in the social sciences and well over 90 percent of the articles in the natural sciences are written in English (Hamel 2007). In addition scientists in the semi-peripheries are users of Western science rather than contributors to its collective store of knowledge (Schott 1998). The governing pattern is for the filtering of external ideas into second and third tier communities through translations of works written in the centers (almost exclusively composed in English or rarely French or German) or the holding of international conferences and seminars.

Against this background it is important to understand that while before World War II area studies was a Eurocentric story it has now become a US based one. Indeed, following Appadurai (Burgess 2004: 124) area studies can be seen as the largest institutional epistemology through which the academy in the United States has apprehended much of the world since that war. The shift between Europe and the United States represented a shift in the metropolitan centers or cores of the world system of academic knowledge. Hence, area studies such as JS have travelled across the Atlantic and their contemporary core is concentrated in the top 50-60 or so universities in the United States.

Moreover, what is important in the shift to the United States is that it is groups in the dominant American academic metropolis that create criteria for professional recognition, standards for research, vocabularies for appraising career moves, and identifying relevant audiences. In addition, publishers or journal editors serve to reinforce relations between centers and peripheries that are further reproduced by cultural and academic exchanges, policies of scientific foundations, or processes of training (Gerholm and Hannerz 1982: 10; Miller 2005).

The main mechanisms by which the power and location of this core are produced and reproduced have been charted out before and include problem setting and conceptualization, maintaining the hierarchy of scholarly publications, defining excellence through citation patterns, holding scientific conferences, and lastly, staffing funding schemes for research (Blagojevic and Yair 2010). Within these cores, metropolitan scholars largely confine their attention to what goes on at home, or possibly in one or more other metropolises while scholars at the periphery are concerned with what happens in the discipline in their own country and in one or more metropolitan anthropologies. And in the peripheries researchers on the whole take little note of each other's work, at least unless it is brought to their attention through metropolitan scholarship.

In these circumstances academic authority of knowledge produced in the centers is grounded in patterns of social authority; it is primarily scholars at the metropolitan hubs that

settle disputes and establish truth. For instance, when I have looked at the patterns of citations in English-language books about Japan, I have repeatedly found the theories cited to have been produced and disseminated from a few tens of institutions in the United States and, to a lesser degree, in Britain. Or, to provide another example, the arrangement by which departments in Singapore or Hong Kong (where English is the medium of teaching) consistently obtain the majority of their external academic examiners from the prestigious universities of Britain and America is both an indicator, and a practice that actualizes center-periphery relations. Whatever interest scholars may have in problems defined as important in their societies, in order to achieve recognition from the “centers”, they must formulate their findings in terms of relevant theoretical models developed in the metropolises. For example, many Asian scholars find that they often have to “de-Asianize” their findings for external audiences from the centers (Burgess 2004; Jayasuriya 2012; Tachimoto 1995).

Two Kinds of Peripherality: Marginality and Provinciality

The model that I have been sketching out allows us to understand two kinds of peripheral knowledge that have sometimes been conflated in writings about area studies (each having its own expression in JS): *marginal* knowledge and *provincial* knowledge. Marginal knowledge is produced within the main US-British dominated system (or any academic system) by groups who are located at its fringes and who talk back to the centers in the world academic language of English. While they do so in a manner that is less fluent than scholars positioned in the centers, they are nevertheless understood and the legitimacy of their participation in the system is accepted by those at the center (Gerholm and Hannerz 1982: 9).

From the perspective of the Euro-American center, knowledge produced within other (loosely coupled but independent) linguistic academic systems however, is frequently seen as *provincial* knowledge: one often labeled as parochial or insular. Because these other linguistic systems have their own research agenda, use locally produced analytical frameworks, and write for local audiences the knowledge they produce is “unfashionable,” “unsophisticated,” or “outmoded.” For all of the celebration of peripherality and diversity in the English-using center, the grounds for celebration are defined by this very center. Sociologically, for peripheral scholarship, the center provides the crucial reference group.

This is certainly the case for how much of Japanese folklore is seen by English-using folklorists and anthropologists because it focuses on questions of origin and authenticity, questions that are viewed as old-fashioned and no longer as important. Similarly, Western anthropologists conflate anthropology and folklore in Japan despite their distinct pedigrees and agendas for research (Shimizu 2000). To use an image suggested by Mathews (2004), scholars

within and outside the English-using system seem to live in parallel universes. Asquith (2000b) sees a lack of willingness to dig deep into alternative paradigms as the problem with scholars at the center.

My model allows us to understand that the root of this problem is that scholars within the English-using system and outside of it are situated in very different systems of incentives and disincentives. It is, I think, for these reasons that Kuwayama (2000) cites examples of the arrogance of and lack of respect among American anthropologist for the knowledge produced in Japan, they see it at best as data (if at all) and at worst as little more than parochial opinions. Conversely, to follow him (Kuwayama 2000), scholars at the center have their own kind of provinciality because they can ignore foreign scholarship without damaging their own career, which I sometimes refer to as the “provinciality of the center.”

Steinhoff (2012) rightly remarks that in the study of East Asia, whether focused on Japan, China, or Korea, one has to be able to utilize the scholarship written in the appropriate language in order to be taken seriously within the area studies community. Yet as the secondary literature in English on those areas has grown exponentially, scholars are expected to place their contributions within that scholarly context; that is, English-language writing about Japanese society is seen by scholars pursuing their career as being more important for them. Hence, to get published they have to refer to other academics who have published about Japan within their English-using system rather than to researchers who have developed frames for understanding this society but written in Japanese (or Chinese or Korean).

Moreover, in almost all cases, the theory used is one developed outside writings about the area. The governing variable in the relations between linguistic communities is the looseness or tightness of their coupling. By this I mean the degree to which each system is sealed off or is tied to the other. It is my impression that there is a particularly loose-coupling between the various linguistic systems within which JS are carried out. Such a view lets us understand the truly global nature of the academic systems for producing knowledge that is divided between linguistic communities (each characterized by center-periphery relations) and organized hierarchically.

In the marginal communities both within the English-using and other communities, scholars writing about local cases and tend to “import” theories developed at the center and write for both local consumption *and* consumption at the center. For scholars in Japan, to put this point by way of example, the choice of going from being provincial to peripheral (and hopefully more central) involves career choices such as whether to pursue graduate studies, where and what to publish, the languages of publication and the paradigmatic boundaries one works within.

We can now understand — to put this point by way of examples — that the study of Japan in Israel, Singapore, or Norway (all parts of the English-using system) is marked not so much by parochialism as by marginalization or peripheralization in terms of the world system of scholarship. The very exposure of local scholars there to work outside these countries prevents them from becoming parochial but is mediated by works published in the centers of the English-using system. On the other hand, the orientation to the center comes at the price of being disconnected from local, “parochial” knowledge.

Conclusion: Towards Change?

Various solutions have been offered to remedy this situation. For example, Van Bremen (2000) looked to a solution in bicultural scholars. Others have established various institutional solutions such as the Graduate Program in Global Studies at Sophia University and belongs to the English using system and is loosely coupled to the Japanese one. Another potential solution to the links between parallel — if hierarchically organized — systems is scholars who become transmigrants travelling between different linguistic academic communities characterized by their own ways of producing, disseminating, and consuming knowledge (Yuki Imoto personal communication).

Faure (2001), commenting about academics in Hong Kong, explains that they lead a schizophrenic existence since they are caught between the “international” (read English-using) system and the system of the Chinese-using world. Within the contours of this world, mediators are important since they translate — literally or figuratively — texts published in one system into the language of another. For the foreseeable future, however, younger scholars seen to achieve global acknowledgement have to play by the rules of the dominant English-using academic system.

*Acknowledgements. For comments and questions on an earlier (much longer) draft, I would like to thank participants at the 2013 conference on “Engaging with Japanese Studies: Revisiting the Question of ‘Why Japan Matters’”, Oxford: Nissan Institute of Japanese Studies, 14–15 March, as well as Pamela Asquith, Yuki Imoto, Rotem Kowner, and Patricia Steinhoff.

References

- Alatas, Syed Farid. 2005. Indigenization: Features and Problems. In *Asian Anthropology*, eds. Jan van Bremen, Eyal Ben-Ari, and Syed Farid Alatas, 227–44. London: Routledge.
- Asquith, Pamela. 2000a. Introduction: Cross-Disciplinary Perspectives on the Marginalization of Japanese Scholarship. *Ritsumeikan Journal of Asia Pacific Studies* 6: 1–6.

- . 2000b. The Right to Differ, but How to be Understood? Challenges to Presenting and Critiquing Japanese Disciplinary Perspectives. *Ritsumeikan Journal of Asia Pacific Studies* 6: 50–57.
- Barshay, Andrew E. 1996. Toward a History of Social Sciences in Japan. *Positions* 4 (2): 217–51.
- Ben-Ari, Eyal. 1998. Colonialism, Anthropology and the Politics of Professionalization: An Argumentative Afterword. In *Anthropology and Colonialism: The Japanese and Dutch Experience in East and South-East Asia*, eds. Jan van Bremen and Akitoshi Shimizu, 384–411. Honolulu: University of Hawai'i Press and London: Curzon Press.
- . 2005. Asian Anthropologies and Anthropologies in Asia: An Introductory Essay. In *Asian Anthropology*, eds. Jan van Bremen, Eyal Ben-Ari, and Syed Farid Alatas, 3–40. London: Routledge.
- Bennet, John W., and Michio Naga 1953, The Japanese Critique of the Methodology of Benedict's *Chrysanthemum and the Sword*, *American Anthropologist* 55 (3): 404–11.
- Blagojevic, Marina, and Gad Yair. 2010. The Catch-22 Syndrome of Social Scientists in the Semi-Periphery: Exploratory Sociological Observations. *Sociologija* 52 (4): 337–58.
- Burgess, Chris. 2004. The Asian Studies 'Crisis': Putting Cultural Studies into Asian Studies and Asia into Cultural Studies. *International Journal of Asian Studies* 1: 121–36.
- Connell, Raewyn. 2007. *Southern Theory*. London: Polity.
- Eades, J. S. 2000. Why Don't They Write in English? Academic Modes of Production and Academic Discourses in Japan and the West. *Ritsumeikan Journal of Asia Pacific Studies* 6: 58–77.
- Faure, David. 2001. Higher Education Reforms and Intellectual Schizophrenia in Hong Kong. *Ritsumeikan Journal of Asia Pacific Studies* 8: 80–5.
- Gerholm, Tomas, and Ulf Hannerz. 1982. Introduction: The Shaping of National Anthropologies. *Ethnos* 1 (2): 5–35.
- Goodman, Roger. 1998. A Short Sociology of the Japan Anthropology Workshop. *Minpaku Anthropology Newsletter* 7: 1–4.
- Hall, Peter A., and Sidney Tarrow. 1998. "Globalization and Area Studies: When Is Too Broad Too Narrow?" *Chronicle of Higher Education*, January 23.
- Hamaguchi, Esyun. 1985. A Contextual Model of the Japanese: Toward a Methodological Innovation in Japan Studies. *Journal of Japanese Studies* 11 (2): 289–321.
- Hamel, Rainer Enrique. 2007. The Dominance of English in the International Scientific Periodicals Literature and the Future of Language Use in Science. *AILA Review* 20: 53–71.
- Haney, David Paul. 2008. *The Americanization of Social Science*. Philadelphia: Temple Uni-

- versity Press.
- Jayasuriya, Kanishka. 2012. A Teachable Moment: 'Explaining' Asia in the Asian Century. *Global Asia* 7 (2).
- Kent, Pauline. 1999. Japanese Perceptions of the *Chrysanthemum and the Sword*. *Dialectical Anthropology* 24: 181–92.
- Kuwayama, Takami. 2000. 'Native' Anthropologists: With Special Reference to Japanese Studies Inside and Outside of Japan. *Ritsumeikan Journal of Asia Pacific Studies* 6: 7–33.
- . 2004. *Native Anthropology: The Japanese Challenge to Western Academic Hegemony*. Melbourne: Trans Pacific Press.
- Ludden, David. 1997. "The Territoriality of Knowledge and the History of Area Studies." <http://www.sas.upenn.edu/~dludden/areast1.htm>.
- Mathews, Gordon. 2004. On the Tension between Japanese and American Anthropological Depictions of Japan. In *The Making of Anthropology in East and Southeast Asia*, eds. Shinji Yamashita, Joseph Bosco, and J. S. Eades, 114–35. Oxford: Berghahn.
- Miller, Daniel. 2005. Can't Publish and be Damned. *Anthropology Matters Journal* 7 (2): 1–8.
- Morris-Suzuki, Tessa. 2000. Anti-Area Studies. *Communal / Plural* 8 (1): 9–23.
- Poole, Gregory. 2010. *The Japanese Professor: An Ethnography of a University Faculty*. Rotterdam: Sense Publishers.
- Ryang, Sonia. 2004a. "Chrysanthemum's Strange Life: Ruth Benedict in Postwar Japan." Oakland: Japan Policy Research Institute. Occasional Paper 32.
- . 2004b. *Japan and National Anthropology: A Critique*. London: Routledge.
- Schott, Thomas. 1998. Ties between Center and Periphery in the Scientific World-System: Accumulation of Rewards, Dominance and Self-Reliance in the Center. *Journal of World-Systems Research* 4: 112–144.
- Steinboff, Patricia. 2013. "Debunking the Myth: Japanese Studies is Actually Alive and Well in the United States." Paper Presented at a conference on "Engaging with Japanese Studies: Revisiting the Question of 'Why Japan Matters'." Oxford: Nissan Institute of Japanese Studies. March 14–15.
- Steinboff, Patricia G. 2012. "Cross-Purposes or Complementarity? Changing Relationships between Area Studies and the Disciplines. In *Relevant/Obsolete? Rethinking Area Studies in the U.S. Academy*. International Institute Series, ed. Will Glover, vol. 1. Ann Arbor: University of Michigan International Institute.
- Sugimoto, Yoshio. 2013. "Changing Models of Japanese Studies: Reflections on Future Directions." Paper Presented at a conference on "Engaging with Japanese Studies: Revisiting the Question of 'Why Japan Matters'." Oxford: Nissan Institute of Japanese Studies.

March 14–15.

- Tachimoto, Narifumi. 1995. Global Area Studies with Special Reference to Malay or Maritime World *Southeast. Asian Studies* 33 (3): 469–483.
- Van Bremen Jan. 2000. Open Gateways and Blind Alleys: Disciplinary Perspectives and Their Effects upon International Discourses in Anthropology. *Ritsumeikan Journal of Asia Pacific Studies* 6: 34–49.

04 共同研究会「万国博覧会と人間の歴史」から考える

佐野真由子

2010年度に始めた小さな研究会「万国博覧会と東アジア——共同研究の可能性を探る」から、翌年度のシンポジウム「万国博覧会とアジア——上海から上海へ、そしてその先へ」が生まれた。そこに参加してくださった方々の熱意に押されるようにして、2012年度に共同研究会「万国博覧会とアジア」を立ち上げ、2013年度からは3年計画の「万国博覧会と人間の歴史——アジアを中心に」に移行、ここまでの成果を、25編の論文からなる『万国博覧会と人間の歴史』（佐野編、思文閣出版、2015年10月、計758頁）にまとめた。そして2016年度より再び3ヵ年の計画で、「万国博覧会と人間の歴史」がスタートしたところである。

当研究会を紹介する機会をいただいたことを光栄に思いつつも、迷いがあった。なぜなら、この研究会を遂行してくるなかでの一つの重要な関心はつねに、「日本研究を脱する」ことにあったからである。ほかでもない「日本研究」をテーマとする本誌には、ふさわしくないのではなからうか——。それでも、むしろそこにこそ日本研究を考える鍵があるかもしれないと考えて、小文を認めてみることにしたい。

1. 万博研究は日本研究なのか？

19世紀半ば、世界を一望のもとに収める未曾有の催しとして実施されるようになった万国博覧会——欧米先進国の事業として始まり、1970年大阪万博で初めてアジアでの開催が実現し、近年では2010年上海万博を筆頭として、アジアの広域で展開されるようになった——は、あらためて言うまでもなく、国際的な営みである。にもかかわらず、そこに「日本研究を脱する」という課題が浮上する背景には、日本における既存の万博研究が、この国際的事業を相手にしながら、「日本」を研究するものでありすぎたという背景がある。

日本で万国博覧会という素材が著述の対象として注目されるようになったのは、上記の1970年大阪万博開催前後からのことである。同万博自体の計画に着目したジャーナリズム記事等が先行したが、万博史を振り返る本格的な学術研究としてこのテーマに先鞭をつけたのは、京都大学人文科学研究所の科学技術史家、吉

田光邦教授であった。その成果は1985年から翌年にかけて、吉田の単著である『万国博覧会——技術文明史的に』（日本放送出版協会）、吉田が多彩なメンバーを率いて行った共同研究会の論集『万国博覧会の研究』（吉田編、思文閣出版）、ならびに『図説万国博覧会史——1851-1942』（同）として世に送り出された。

吉田の研究はけっして日本関連の事象のみを扱ったものではないが、歴史上の万国博覧会に日本が参加してきた経緯、その様相を描き出すことに一つの重点が置かれ、刊行物においても多くの頁が割かれているのは、日本における最初の万博研究としてごく自然なことであったと言えるだろう。実際、明治維新後の新政府が国際社会に日本という存在を位置づけていく努力のなかで、1873年ウィーン博、1876年フィラデルフィア博、1878年パリ博……と連続開催された万博を、世界への窓としていかに重視し、それへの参加を政治上の重要課題と見て取り組んだかを想起するだけでも、日本における万博研究が日本の万博参加の歩みに光を当てることに、疑問を呈する余地はない。

ただし、日本の参加に関して吉田光邦とその研究会による一連の成果がとくに印象的に打ち出したのは、初期の万博に展示された日本の物産が、それらが開催された欧米諸国において、異国趣味／エキソチシズムを強調する形で受容・消費され、また日本側もそれに呼応する自己表象を重ね、ひいては日本が（西洋）国際社会に入り込もうとする努力は同時に、自らの他者性ないし周縁性を固定化するものであったという文脈であった。これが、日本の万博参加史における注視すべき一側面であったことは間違いないと、筆者も考える。

しかし、この視角は結果として、その後の万博研究に影響力を持ちすぎたのではないか。日本の西洋「文明」社会へのキャッチアップが完成しようとしていた——だからこそ貿易摩擦に苦しんでもいた——1970～80年代、日本の来し方をこのように捉えることが読者に受け入れられやすく、また読んだ者の思考に深く根つきやすかったと推測することも、的外れではないだろう。

その後、万博というテーマは分野を超えて多くの研究者を惹きつけ、万博の持つ種々の側面を取り上げた多くの小規模な研究が重ねられるようになったが、それらは全体として、当初の吉田研究を踏まえ、その視角を再生産したと考えられる。一方で、あらためて万博という事象全般を問い直す研究成果が生まれないうまま、吉田らの成果は万博研究の基本文献であり続けた。万博に対する総合的な視野を持つ数少ない著作を代表するものとしては、1992年に出版された吉見俊哉の『博覧会の政治学』（中央公論社）があり、一般にも注目されたが、万博を欧米列強の帝国主義的「まなざし」を具現化する装置として論じたこの書もやはり、

吉田の「エキゾチズム」文脈を万博研究の常套としてより強固にするものであったと言えよう。

こうして、日本における万博研究は——むろん例外もなかったわけではけっしてないが——ほぼつねに「日本」を主題としてきた。のみならず、やや批判が過ぎることを恐れずに述べるなら、近代国際社会において、受動的な他者であることを強いられた特殊な存在としての日本（文化）という位置づけを予定調和的に導くものとして、積み重ねられてきた。

2. 共同研究会の問題意識

かく言う筆者も、吉田研究の成果に濃厚な影響を受けて万博研究を志向した者であり、上の批判はまず自分自身に向けられなければならない。が、自身の研究の途上でのいくつかの経験から、万博研究を規定してきたとも言えるこの視角に疑問を持つようになった。問題を端的に述べれば、万博で日本文化のエキゾチズムが（不当に）強調されたことそれ自体は間違いではないが、日本だけがそのような目に遭ったかのような論じ方は妥当ではないということである。むろん、一連の吉田書は、より広範な世界にも目を配っている。が、それに続いた個別の研究では、研究規模の制約もあって、当然のように日本だけを見て論じるケースも増えた。それらが、問題は日本「だけ」のものであると特記しているわけではなくとも、考察がその範囲を出る余地がないのなら、実質は同じであろう。

西洋世界における万博で自文化のエキゾチズムが誇張され、消費されるという点において、類似の経験をした非西洋諸国は、他に多く存在する。日本は独自の歴史をたどったのではなく、比較の対象となりうる多くの非西洋諸国の「一例」にすぎない。つねに「多くの非西洋諸国」全体を視野に収める必要まではないが、そうした横の広がりやを考慮したことのないままに論じられる「万博の日本」は、信ぴょう性に欠けると考えるようになった。筆者がそう気づかされた研究経過については、先に触れた共同研究会の成果論集『万国博覧会と人間の歴史』（「はじめに——本書について」）でも触れたので、ここで重ねて紙数を費やすことは控えるが、思い起こせば、2010年度以来の共同研究は、まさにこの問題意識から、万博研究を「やり直す」ために始まったのである。

本稿ではこの問題に関連して、筆者が既存の万博研究においてとくに問題を感じている事柄の一つ付け加えておきたい。1851年のロンドンでその歴史が始まった万国博覧会に日本が初めて参加したのは、1867年のパリ万博というのが通説化しているが、これは誤りである。結果からみれば倒壊直前の段階にあった徳

川幕府は、1867年パリ博に招かれて出品し、將軍徳川慶喜の実弟昭武を団長とする使節団を派遣した。このように万博に公的な代表団を送り込んだのは、たしかにこのときが初めてである。しかし、その前の1862年ロンドン博に、幕府はすでに出品物を送り、イギリス側からも公式参加国として認識されていた（従前よりそのことを正確に述べておられたのは、筆者の知る限り、松村昌家氏のみである）。

このロンドン博が日本の万博参加史から除外されてきた要因は、このときの出品が、ときの駐日イギリス公使ラザフォード・オールコックによって、幕府のあずかり知らないところで勝手に行われたという理解にあると考えられる。初期の研究者が史料不足からそのように推測して述べたものが、調べ直されることのないまま踏襲され、いつのまにか定説となったのであろうが、そもそもこれ自体が間違いであり、オールコックは当時、イギリス政府の駐日代表として、幕府老中に対し本国から日本への参加招請を正式に伝えていた。そして、幕府もその趣旨を理解し、むろん準備の大部分はオールコックに頼りつつも、少ないながら自ら出品を実行した経緯については、やはり先の論集『万国博覧会と人間の歴史』（拙論「万博の人、ラザフォード・オールコック——1851、1862、1878、1886」）で、史料に基づいて明らかにした。

しかし、ここで問題視したいのは、この日本の参加経緯に関する事実誤認のことではない。1862年ロンドン博への参加に幕府が関与したとはいえ、実際、参加を実現するにあたって、オールコックの働きは実に大きかった。実質的に日本部門を演出したのはたしかにオールコックである。それでも、それゆえにこの1862年博を日本の参加史から除外するという考え方には問題があると、筆者は考えている。外国人の意向が主な動因となってなされた出品を、日本の真正な「参加」とは位置づけたくないという「気持ち」は理解できるが、日本の万博参加がそのように、外からの目と手によって、いわば「連れ出される」という形から始まったという事実を無視し、正規の歴史から外してしまうという形をとっては、国際社会における日本の歩みを客観的に振り返ることができないのではないか。

日本の万博とのかかわりは、1862年ロンドン博において、オールコックの主導と幕府の限定的な関与から始まり、67年パリ博には、やはり駐日フランス公使ロッシュの多大な協力のもと、幕府の自主性がかなり向上した形で参加。明治維新をはさんだ1873年ウィーン博の際もなお、お雇い外国人ワグネル、駐日オーストリア公使館員シーボルトの助言に多くを依存したが、同時に、政府の主体的参加と見なしうる形が整った。こうして段階的に外国側の采配から脱し、日本が自立して出品実務を遂行できるようになっていった、その経過全体を、日本の

万博参加史の第一歩として記録することこそが重要であろう。

さて、「初めての万博参加」をめぐる認識のぐらつきについて長々と述べてきたのは、実はこのこと自体が、日本だけに限られた現象ではないからである。たとえば中国は、日本より早く、1851年の世界初の万国博覧会から参加していた。しかし当初の主体性は日本の場合よりも弱く、中国政府は公式にはまったく関心を示さず、事実上、外国側が勝手に出品した。その段階から始まり、洋関——その存在自体、外国の中国政府業務への介入にほかならない——が万博参加実務を担った時代、洋関の監督を脱して主体的な中国政府の参加が実現していく段階にわたって、いずれの万博を中国の初参加の場と見なすかという認識は、研究者によってかなり開きがある。その点では、一つの見方が定説化してしまった日本の場合とは異なると言うべきかもしれないが、自国の主体性の度合いとの関連で「初めて」を判断しようとする視点が共通していることは興味深い。

多くの非西洋諸国にとって、少なくとも19世紀から20世紀前半までの万博への参加史は、近代国際社会への参入の道のりを縮図のように表している。したがって、日本、さらに中国のみならず、いずれの国においても、自国／自文化の参加経緯に関心が集中し、それを中心に研究が進むのは当然のことであろう。しかしそのうえで、視野をその範囲——たとえば日本において、日本に関すること——にとどめず、少なくとも日中両国、そしてもっと大きく広げることで、そこには一国の奮闘物語ではなく、非西洋諸国の近代国際社会への参入過程を把握する、客観的な切り口が見えてくるのではあるまいか。

上に取り上げた「初参加」問題のような研究上の傾向を、仮に自国について批判する場合でも、それを他との比較のなかで相対化し、共通点もあれば相違点もあるさまざまなケースのなかの「一例」として見直すならば、逆にその「一例」が世界史の一角に占めるところとその意義を確かめることができるようになるだろう。ひいてはその研究は、それ自体は深く「一例」を見つめ続けるものであったとしても、その囲いのなかに限定されない、グローバルな価値を持ちうるのではないか。

そのような意味で、万博研究は筆者にとって、「日本研究」（それ自体を相対化するために、「一国研究」と言い換えてもよい）という、日教研という場において根本的な研究枠組みへのチャレンジを内包するようになった。または、あえて極言するなら、そのチャレンジの側から見た場合、万博研究はそのための一つのツールということになるかもしれない。

3. 共同研究会に表れた方向性

共同研究会のメンバーは必ずしも「日本研究」というものに関心を持って集った方々ではないので、つねにこのような問題意識を表向きに論じてきたわけではない。が、万博の研究を従来の日本中心的な視野から解放し、日本の位置を相対化していこうという狙いは、当初から明確に打ち出し、研究会として共有してきた。そして、とくに初期の研究会での議論から、まず、世界中というよりは近隣アジア諸国の歴史的経験を意識的に研究に取り込むという形で、その第一歩を具体化しようとしてきた。

そのことは、本稿冒頭に掲げた各段階の研究会名にも表れている。2015年秋に刊行した成果論集のタイトルを単に『万国博覧会と人間の歴史』とし、現行の新研究会名はそのままこれを踏襲して、「アジア」を付さなかったのは、そこまでの積み重ねから、アジア以外の非西洋諸国にも共同研究の視野が広がり、そうした広範な地域の研究者とネットワークを構築していく可能性が見えてきたからである。とはいえ、アジアを重視する姿勢は今後とも変わらない。

さて、このように、日本という対象を相対化することから新たな万博研究をめざすという方向性は、大きく三つの形で、研究会の展開に表れてきたと言うことができる。

一つは、一人の研究者が自身の視野を広げ、多角的な研究を試みるケースで、典型的には当研究会の創立メンバーの一人である鶴飼敦子さん（東京大学東洋文化研究所・日本学術振興会特別研究員）の研究が挙げられる。鶴飼さんは美術史と日仏交渉史にまたがる領域で、いわゆるジャポニズムを専門とされてきた研究者である。

ジャポニズム研究と万博研究は、従来から深いかわりがある。19世紀後半からヨーロッパ各国を席卷したジャポニズムの源が万博の日本出品物に求められることは周知のとおりだが、その意味でジャポニズム研究者にとっては必然的に、万博は重要な研究の素材ないし舞台となってきた。逆に、日本の万博研究はジャポニズムという現象とあまりに深く結びついてきたと言うこともでき、その内容は、先に述べた吉田研究の持つ傾向とも無関係ではない。

鶴飼さんが当研究会の初期の議論のなかで、ジャポニズム——「日本」趣味——という枠で自らの研究を規定することに疑問を抱くようになっていった様子を近くで拝見していて、筆者は大きな刺激を受け、また励まされる思いでもあった。鶴飼さんはその後、歴史上の万博におけるアジア諸国の展示物が、われわれ

の想像よりはずっと混交的に受容されたかもしれない可能性や、「日本の」「中国の」と称される物産が元をたどれば、素材や意匠の地球大の交流・商取引のなかでつくり上げられてきたものであることに着目し、ご自身の研究を「世界美術史」と呼び直して、新しい道を開く挑戦を続けておられる。論集『万国博覧会と人間の歴史』には、そうした方向性のなかで金唐革／金唐紙という製品を取り上げた一つの試みを、「万国博覧会を飾った日本の革と紙——ジャポニズムを越えて」として寄稿された。

他方、共同研究会の活動において、必ずしも全員が、鶴飼さんのように個人研究の枠を具体的な形で広げることを旨としてきたわけではない。むしろ個々の研究者が、あくまで自身の専門とする日本の問題、中国の問題……を深めながら、それを世界史のなかの「一例」として相対化すること、そのためには何よりも、互いの別な「一例」に関心を持つことを通じて、各々の研究の意義を考え直すことをめざしてきた。そのために重要なのは、研究会のなかにさまざまな「一例」を確保することであり、またその結果として、研究会全体としての枠も広がっていくことになる。すでに述べたように、ここまでの活動では近隣アジア諸国を中心に、それを実現しようとしてきた。

論集『万国博覧会と人間の歴史』では、日本以外のアジア諸国の経験を取り上げた論考が全体の約三分の一を占め、まだ必ずしも十分ではないにせよ、万博研究のあり方として新しい方向を打ち出すことができたと考えている。このなかには、中国や韓国などの現地側の研究者によるものと、日本人またはそれ以外の外国人研究者が、中国や韓国のケースを取り上げた論文が含まれる。

一つ一つが本研究会の誇る貴重な成果だが、ここではとくに、ユク・ヨンスさん（韓国・中央大学校人文学部教授）の論考「『隠者の国』朝鮮士大夫のアメリカ文明見聞録——出品事務大員鄭敬源と1893年シカゴ・コロンビア万国博覧会」に触れておきたい。朝鮮はこの1893年シカゴ博に「初めて」参加した。鄭敬源はこのとき、朝鮮政府の代表を務め、現地に渡った官僚である。ユクさんの論文は、鄭敬源という個人に着目し、本人が残した「鄭敬源文書」——19世紀万国博覧会をじかに経験した朝鮮人の手になる記録のうち、公開された唯一の史料であるという——を紐解きながら、万博参加の経緯を中心に、彼の西洋文明理解の進展を追跡し、批評する。

いまその内容の詳細に踏み込むことはしないが、岩倉使節団の『米欧回覧実記』をはじめ、幕末から明治にかけて、幕府や政府に派遣されて、または個人留学生として洋行した日本人の記録に魅せられたことのある読者ならば、まず、比較の

おもしろさに膝を打つであろう。遡ってユクさんと寄稿内容を相談していた折、「朝鮮の福沢諭吉」として言及されたこの人物について、このような紹介がなされたことは、万博研究から生まれた東アジア比較文化研究の大きな前進であり、同時に万博研究の枠を豊かに広げてくれたとすることができる。

三つめに、以上のようなアジアへの視野の拡大という方向性とは異なるが、これからの万博研究にとってきわめて重要と考えられる切り口が、本共同研究会を母体に2015年12月に開催した国際研究集会「万国博覧会と人間の歴史」において、招待発表者の一人、ロバート・ヘリヤーさん（米国・ウェイクフォレスト大学歴史学部准教授）から示されたことを記しておきたい。「闘うティールーム——万博を舞台に、アメリカ市場を狙って繰り上げられた日英競争1893－1917」と題する研究発表でヘリヤーさんは、タイトルのおおりに、この時代の一連の万博が茶貿易の伸展をめぐる日英間の熾烈な競争の場となった事実を、史料を踏まえて具体的に明るみに出した。

ここで提示されたのは、万国博覧会という場に、従来描かれ続けてきたエキゾチシズムともジャポニズムとも異なる、能動的な競争者として登場していた日本の姿である。その意味においてこの発表は、「万博における日本」の研究を鮮やかに更新するものであった。ヘリヤーさんはもともと日本の茶の輸出を世界大の貿易の動きのなかに相対化してみせたことで注目を集めた日本史家だが、その研究の過程で、茶貿易の推移を分析するうえでの万博という舞台の重要性に気づいたという。たとえばこのような視角から、あくまで日本という「一例」を掘り下げながら、従来の日本研究の枠をも万博研究の枠をも打ち破る研究が生まれつつある。

4. これからの日本研究のために

ここに書いてきたことは、万博研究と日本研究に関する網羅的な考察とは到底言えない。しかし、既存の万博研究を踏まえて当共同研究会が模索する方向性が、「日本研究」という、わざわざそう称する以上もともと国際的な前提に立っているはずが、実のところ「一国」主義的な視野に陥りやすい営みの抱える悩みを多分に映し出しているということは、お伝えできたのではないかと思う。

むろん、当研究会のテーマは万博であって、万博そのものにより密着した研究上の特長——歴史上のものだけでなく現代の最新の万博までを連続的に取り扱う研究姿勢や、そうした現在進行形の万博の企画現場で働く専門家たちとの連携を重視することなど——を挙げることもできる。「日本研究を脱する」実験のみを

念頭に置いているわけではない。したがって、本稿の内容は研究会のあくまで一つの側面であることはお断りしておかなければならないが、万博研究につきまわっていた日本中心的な視点を相対化し、仮に対象を日本の事例に絞り込んで深く追求するにしても、それをあらためて普遍的な意義を持った研究として築き直すという意識は、やはり当研究会の拠って立つ基軸である。そのことが、共同研究会メンバーはもとより、研究会としてのおつき合いが生まれた方々の間で、徐々に広く理解されつつあることを実感している。

そうしたなかで、いま一步、チャレンジしなければならないことがある。ここで近隣アジア諸国の視点を取り込んだ日本の相対化とか、グローバルな研究とかと謳いながら、あくまでそれを日本で、ほとんどの場合は日本語で行う研究会で追求し、日本で刊行される日本語出版物で表現しているにすぎないという実態は、まことに歯がゆい。今後、より実質的な、真の相対化へと踏み込むためには、研究会自体もアジア各地で、現地の研究者らを巻き込みながら行い、成果物の公表も各国語でできることが理想である。これには当然、一定の資金も必要であって簡単に実現できることではないが、可能なことから着手していきたいと考えている。

本研究会ではこれまでも、2010年上海や2012年麗水（韓国）、2015年ミラノと、開催中の万博を訪問する自由参加の視察旅行を実施してきた。しかし、これをもう一段階進める最初の試みとして、2016年11月に初めて、ソウルでのシンポジウム開催を予定している。こうした国外での研究会は、日文研の通常の共同研究制度では残念ながら許されていない——つまりこのような本質的な「相対化」を目下の制度はめざしていない——のだが、ゆえに、あくまで共同研究会をベースとした「番外編」企画として、メンバー中の有志に各自の費用で集まっていたくという計画である。

研究会の海外メンバーであるウィーベ・カウテルトさん（ソウル大学校環境大学院教授）が中心となり、先に触れたユク・ヨンスさんが協力する形で準備を進めてくださっており、そこに日本からのメンバーが参加して、現地で新しく招かれる韓国人研究者らと議論することになっている。何よりもこのことの意義に共鳴して手弁当で奔走して下さっている現地のお二人に、そして日本から呼応して下さるメンバーに感謝するとともに、この機運を大切に、次につなげていきたいと思う。ここから得られるものは、仮に現行の日文研の制度をはみ出しても、これからの「日本研究」の、より大きな可能性に還元されていくものであると考えている。

本稿を書いているのは2016年8月だが、本誌が刊行されるころには、ソウルでのシンポジウムはすでに完了していることであろう。翌年は中国のどこかで、と念じている。まさに万国博覧会のように、研究会が世界各地を——いずれはアジア以外の非西洋諸国や欧米も含めて——回り、互いの「相対化」に寄与していくことができたなら、万博研究の面目躍如といったところである。

05 「特攻隊」とメディア・リテラシー

——韓国日本語教育の現場より——

堀まどか

はじめに

本稿は、韓国日本語教育の現場での私個人の格闘の一端を記録するものである。学生たちとの対話から感じ、日韓の文化の特性について考えたことの、きわめて独断的な報告ノートになることを、最初に断っておきたい。

私が韓国大邱^{テグ}の嶺南大学校の日語日文学科で日本語や日本文化を教える機会を得たのは2013年3月から2015年8月までの2年半である。渡韓当初は、大邱を地元とする朴槿恵^{パククネ}大統領が韓国初の女性大統領として就任した直後で、日韓関係の好転や韓国での女性活躍時代の到来におおいに期待を寄せていた。だが、意に反してそのようなムードはついぞ生まれず、むしろ日韓両国の政治的関係は悪化の途をたどった。また韓国社会に日々流れるニュースが、韓流ドラマの展開以上に目まぐるしく、驚嘆すべきものばかりで、すっかり翻弄された日々であった。ただし、私自身は韓国生活のなかで特に大きな困難を強いられることもなかったし、むしろ快適につつまなく、刺激的で充実した時間を送った。韓国の学生たちとの対話やその反応が常に新鮮な驚きの連続で、面白かったからである。(本稿では割愛するが、韓国の学生たちの大学生生活の様式も考え方も日本のそれとは異なっており、成績や出席に熱心で、社会の事情が異なっている。)

他者との対話が面白いというのは、自分自身の内在的意識にも気が付くということでもある。当然のことだが、海外では自分自身の持っている文化や認識を改めて強いカタチで突きつけられることの連続であった。隣国である日韓の文化社会には、他の諸外国との関係と比較すれば、相違点よりも類似点のほうが圧倒的に多いが、似ているところが多ければ多いだけ、その分、微妙にでも異なる部分が気になる。お互いが常識だと感じている点にわずかな差異がみられると、大きな誤解や心理的距離感を生じやすくなると思われた。それが実感である。

本稿では、そんな誤解の生まれる可能性のある差異を意識した瞬間の、教育現場の空気的一端を記すことができばと思っている。滞韓中に考えた「文学」研究に関することや私自身の精神的揺らぎについては、すでに記述したことがある

ので¹、ここではそれに重ならない「映画」に関する教育的格闘について記しておきたい。

1. 映画鑑賞から「リテラシー」を考える

2014年秋学期の「放送日本語」という科目を担当した際、日本語ニュースの分析や読解をおこなう一方で、いくつかの映画をも教材としてみた。映画は一般的には娯楽作品として楽しむものだが、複合ジャンルのメディア芸術でもあり、いろいろな角度から言語と文化を眺める教材にもなる。映画を通じて短時間ながら、日本の生活や習慣、歴史や伝統、人びとの考え方に会うことができ、感情移入することで別の人生を疑似体験することができる。限られた授業時間のなかで、日本語・日本文化にふれながら、重層的・複合的にさまざまなことを感じ思考するきっかけを与えることができれば、一石二鳥の教育効果があるのではないかと考えた。

映画を使った視聴覚教育のメリットとして挙げられるのは、ひとつには、言葉を学ぶ教材として適していること。ただ、大学教育現場においては言葉を学ぶ以上の「考える力」を養う時間であってほしいと考える。もうひとつのメリットは、メディアに性格の違いがあることを体感できること。ドキュメンタリーと娯楽映画の、それぞれの作品のつくられ方は異なるが、その方法論と効果を考えることもできる。そして、作品の評価のされ方から、韓日やその他のメディア・リテラシーを考えることができる。

つまり、授業を通して学生とともに考えてみたいと思ったのは「メディア・リテラシー」の問題であった。視聴者の感性や理性に直接働きかける映画を鑑賞して、そこからいったい自分が鑑賞者としてどのような距離を取るのかを自覚し体験する機会となればよいと考えた。これは文学を読む際にも、読者としての自分が作品との距離をどう取るかという点で重要な体験になるが、外国語学習者にとっては文学作品でそれを体験するよりは映画のなかで体験することの方が、敷居が低いはずである。

「メディア・リテラシー」とは、情報を主体的に読み解いて、真偽を見抜き、評価し活用する能力のことである。インターネットも普及して膨大な情報が氾濫している今日、メディアを批判的に識別する技術と意識を育てることは、教育の重要課題になっている。じつは韓国ではあまり「リテラシー」という言葉や概念

1 堀まどか「日本語教育の現場で感じる「文学」研究の可能性」『日本近代文学』第94集、2016年5月15日、219-226頁。

が浸透していない感があった。実際「メディア・リテラシー」という言葉を聞いたことがない学生がほとんどだった。欧米の教育の中ではメディア教育が進んでいる。日本では、私が子供であった30年前は記憶に定かではないが、現在の小学国語の教科書を眺めてみれば、「新聞をいろんな角度から見る」とか「二つの記事を比べる」といったリテラシー育成を意図した単元が散見できる。日本では、戦前のメディア規制や報道統制^{じくせい}に対する忤怩^{じくじ}たる思いがあるためか、そして戦後に教育や価値の転倒が起こった衝撃があるためか、メディアへの安易な過信は危険であるという思いが強く残っているように思う。情報の裏を読まねば危険である、単一メディアを過信すると情報が偏向するので警戒すべきであるという意識は、戦後の日本社会では案外育まれてきたのではないかと感じている。しかし、韓国社会はどうであろうか。

つまり、以上のような教育的目論見もあって（あるいは単純に個人的な関心があったので）、「メディアとは何か」「メディア・リテラシーとは何か」を考えてみるために、特攻隊を扱った映画を教材として取り上げることを決めた。

特攻隊を扱った映画というのは、政治的にも感情的にも過激になりがちなものであり、学生らから嫌悪や反発が強いのではないかととは思ったが、メディア・リテラシーを考えるためには、その問題性が明確に浮き彫りになるのではないかと思い、学習のために敢えてこのようなテーマを選んでみた。

2. 「特攻隊」という言葉

ところで、日韓では、「特攻隊」という言葉の持つイメージがそもそも異なっている。いまだに北朝鮮との休戦状態（つまり今も戦時体制）で、徴兵制度によって軍隊組織を維持している韓国においては、「特攻隊」は特別攻撃隊で、単に、一般よりも特別に選抜された優秀な攻撃部隊のことを意味する。

日本において「特攻隊」といえば、太平洋戦争の末期に日本軍が編成した生還できない体当たり攻撃部隊である²。こうした体当たり攻撃は、基本的には各自の志願によるものとされていたが、実際には、さまざまな形で暗黙のうちに強制性がはたらいた場合も少なくなかった。つまり、本人たちが本心から希望したわけではなかったが、戦局が極めて厳しいものになると体当たり攻撃での出撃を拒否できない状況になっていた。このような事情は、一般的に日本国内では当然のこ

2 航空特攻の場合には、1944年10月にフィリピンにおいて編成された「神風特別攻撃隊」が最初で、また海上特攻の場合には潜水艦の甲板から発信して敵艦に体当たりする人間魚雷「回天」が1944年11月から使用された。

ととして知られていることだが、日本の外ではあまり認識されていない感がある。顔で笑って心で泣いて、という事情が理解されていないフシがある。つまり、ホンネとタテマエがあって当然と感じる日本的価値観のなかで、タテマエとしての特攻志願が、個々人のホンネとは異なっているだろうことは言うまでもないことに感じられるのだが、海外ではそこが必ずしもよく理解されているわけではない。(日本人の表情のつくり方も、独自の文化として不可解に思われているところがあるのだ。どこで笑ってどこで泣くのか、それが外国人には不可思議に捉えられていることを忘れるべきではないのだ。)

そもそも戦後の日本人にとっては、「神風特別攻撃隊」に限定しなくとも、戦時下に生きる兵士たちや民間人たちに生還・生存は保障されていなかったし、「体当たり」攻撃や集団自決を余儀なくされる状況であっただろう、という戦時イメージは濃厚にある。紙切れ一枚の命の価値にさらされた個々人の苦痛と極度の緊迫が、「特攻隊」に凝縮して象徴されるとは知っているが、戦時下ではそれのみが特異な事例でもなかったのではないかという茫漠とした印象が、戦後日本人の戦争観の中には濃厚であると思う。「特攻隊」だけが異常な精神をもった自滅型戦闘員であったとは、日本では決して思われていない。特攻隊員も死にたくなかったはずだが、思想教育の中でやむにやまれず追いつめられたのだらうと、同情的に理解されていると思う。

この、日本でいうところの「特攻隊」は、海外では「カミカゼ(神風)」の名で知られている。(日本ではあまり「カミカゼ」という言葉では語られておらず、カミカゼなどと呼ばれると、それこそ「特攻隊」を美化している主観や中傷ニュアンスが含まれるようで、少々違和感もあるのではないだろうか。)韓国でも日本の「特攻隊」は「カミカゼ」という言葉で認知されている。

3. 映画というメディアのジャンル——娯楽かプロパガンダか

学生たちと一緒に鑑賞したのは、ドキュメンタリー、一般娯楽映画、アニメーションの、日本の第二次世界大戦期の特攻隊に関連する映画3本である。はじめに、アメリカで生まれ育った日系2世の女性映画監督モリモト・リサが撮ったドキュメンタリー映画『TOKKO』を観た。アメリカで義務教育を受けた監督自身が、「カミカゼ」を鬼のように恐ろしい盲信的破壊集団だと理解していたが、優しかった自分の亡き叔父が若き日に特攻隊員であったことを知って驚愕し、叔父の知人たちや特攻隊経験者に一人ずつインタビューに出かけていくという内容である。

この映画は、韓国国内でも2008年9月に『カミカゼ物語』と言うタイトルでテ

レビ放送され、高い評価を得ていた。だが、学生たちは、この映画を初めて見た者ばかりであった。学生たちの感想としては「従来考えていた特攻隊のイメージとは異なって、衝撃的だった」「日本人が被害者だと考えてみたこともなかったが、もしかしたら日本人の一部も被害者だった可能性がある、という考えが起こった」「おじいさんの日本語は聞き取りにくかったが、〈生きたかった〉〈死にたくなかった〉というおじいさんたちの真心の話は、伝わってきて、胸が痛かった」などが出てきて、概して、映画監督の意図を理解していた。このように韓国人学生たちの反応が悪くなかったのは、監督が日系アメリカ人であることにも起因しているかもしれないし、韓国社会内でも評価が高かったことも無関係ではないだろう。

次に見たのは、2013年12月に公開されて日本で大ヒットを記録した『永遠の0』である。これは、現代の若者が特攻隊として死んだ祖父の過去を追い探つてゆくもので、『TOKKO』の筋書きと大枠で似ている。韓国では公開されなかったものの、当時の韓国社会では、日本の右傾化とナショナリズム高揚の象徴として、批判が激しかった。ところが、一緒に鑑賞した韓国の学生たちは、この作品に「かなりの違和感や嫌悪感」「ときどき違和感」を感じたという者が38%で、一方「違和感もあったが、興味もあった」「違和感よりも、もっと興味や好奇心を感じた」者が60%を超えている。登場人物の誰かに共感できたかとの質問には、「まったく／あまり共感できなかった」という者も少数いたものの、「どこかに、各々の程度で、共感することができた」と回答したものが半数を占めた。

ある男子学生は、「ただ国のために戦う軍人の話でしかない、それ以上でもそれ以下でもない」と感想を書いた。「ナショナリズムを煽るのはどの国でも起きている」といった意見は10%近くの学生に見られた。しかし、基本的に、この映画の全体評としては批判的に受け取られていたのが実際である。私は、徴兵制がある現代の韓国においては、体当たり出撃を命じられる人間の命運や、自分の意志にかかわらず命令を遂行しなければならないタテマエの事情を、自分たちの現実と重ねあわせて受け取ることができるのではないかと考えていた。だが、日本の戦時中の描写に対しての嫌悪感が先に立つようであった。

しかし、よくよく聞いてみると、その嫌悪感は、日本の戦時下の集団主義や国粹主義に対するものというよりは、作品中の男女の恋愛観・結婚観に向けた違和感が中心であった。死を覚悟する主人公が、なぜ直接に妻に愛のメッセージを残さなかったのか、なぜ親しい部下に「家族をたのむ」と遺書を書いていたのかが分からない、妻に対する裏切りに等しく酷い、という意見もあった。また、友達や部下であったものが、親しかった人の妻と結婚するということが韓国ではあり

えない、倫理的に許されないという意見も多かった。そして、妻が生き残った若い男を、死んだ夫の生まれ変わりのように見ている点がまったく理解できない、という意見も実に多かった。つまり、恋愛の描かれ方や結婚観、男女の関係性、日本の靈魂観や仏教的な輪廻転生にもとづく死生観に対して強い違和感が指摘されたのだった。

『TOKKO』『永遠の0』^{ゼロ}に続いて鑑賞したのが、ジブリのアニメーション映画『風立ちぬ』である。日本の1920年代から40年代を舞台に、「零戦」の設計者・堀越二郎の実話と、堀辰雄の『風立ちぬ』をオーヴァーラップさせて描いた物語である。飛行機に魅せられた主人公の夢と情熱がテーマで、時代的制約や挫折や悲痛な経験を経ても「生きねば」ならぬことを説く。長年、韓国で絶大な人気を誇ってきた宮崎駿監督が、この映画の公開時には激しく批判されて、韓国では公開がなされなかった。学生たちも見たことがないという者ばかりだった。

興味深く感じたのは、実写で戦争状況をリアルに描く「特攻隊」映画であった『永遠の0』よりも、アニメ『風立ちぬ』を観たときのほうが、違和感や嫌悪感を訴える者が圧倒的に多かったことである。「かなりの違和感・嫌悪感があった」「少し違和感や嫌悪感があった」と答えたものは全体の70%にも上った。「この映画が戦争賛美していると思うか」という質問についても、「極めて／結構／多少は、そう思った」と答えた者が75%にもなり、「自分自身はあまり戦争賛美と思わなかったが、戦争賛美の作品として批判が出て仕方がないと思う」という意見が20%を占めた。この映画を「戦争賛美とは思わない、むしろ反戦の映画と感じた」と答えた者はわずか一人。そして、「もっと日本の歴史を掘り下げて描くべきだった」と答える者が半数以上、「世界的に人気のある宮崎駿監督が、このような作品を作ったことをどう感じるか？」の質問に対しては80%もの学生が、「極めて危険だと感じる／結構不安な要素があると感じる／積極的に評価できない」と答えた。

日本国内でもこの作品の面白さについては賛否両論があったが、ただ、日本人の立場からすると（私個人の感覚からすると）、この映画が戦争賛美の作品だとは考えにくい。むしろ、宮崎監督が一貫して描いてきた反戦・厭戦の内容の集大成的作品だと感じている。

しかし私自身、韓国の学生たちと同じ空間で一緒に観ていて居心地の悪さを感じた点が確かにあった。第一には、この映画が戦前の日本の自然や田園風景や街並みを極めて美しく印象的に描いていること。同じ時代の朝鮮半島に、このように美しい光景があったか、あったと彼らに認識されているのかが疑問だからだ。

現代の若者たちにとっては、この時代の母国は蹂躪された屈辱の歴史で、叙情的に懐かしむ空間イメージは持てないだろうから、微妙だなと感じたのである。第二には、この映画のなかで重大なテーマであるモノづくりへの執着や、仕事への果てしなき情熱を学生がどう見るのかということ。韓国のモノづくりの意識や情熱は日本とは異なっている。それは技術の問題だけではなく、職人技に対する価値観や職業観、文化意識にも起因しているように思う。

4. 歴史を扱うメディアの韓日文化の差異

そして『風立ちぬ』を学生らと鑑賞しながら、もっとも強く考えさせられたのが、歴史ジャンルに対する日韓の認識の仕方の違いである。日本の歴史を眺める方法と、韓国が歴史についての観方が概念認識からして違うのではないか、ということである。

日本では、歴史をテーマにしたメディア——たとえば、小説、戯曲、映画、テレビドラマ、漫画など何でもジャンルは問わないが——を観る場合、作品を監督や作家の描く芸術として視る。もちろん真偽や細部の整合性を判断することはあるが、それを問わない場合も多い。作品内で歴史の細部すべてを描くことはできないので、必要な情報だけを残したり、描きたい部分に角度をつけて見せる方法を取る。斬新な切り口で見せることができた作品ならば「成功」といえるだろう。一方、韓国では、歴史をテーマにする作品が、必要な情報だけを取捨選択したり、描かない部分があったならば、「事実とあわないから残念」「嘘があった」と判断されて「失敗」になるようである。

たとえば、『風立ちぬ』でも関東大震災が描かれるシーンがあったが、学生のなかから、「関東大震災では朝鮮人虐殺も起こったのに、なぜそれが描かれていないのか。歴史をきちんと描いていない」とか、「帝国主義下の日本で飛行機を作ったのは韓国人や中国人だったのに、それが描けていない」といった意見が出て、不満を持つ者が目立った。そして、『風立ちぬ』は日本の「歴史」を掘り下げてないので、もっと掘り下げるべきだったという学生が半数を上回ったのだった。歴史に関係する状況設定がある以上、描きたいテーマに関係なく、歴史の正当性・整合性が必ず追究されるべきだという考える傾向が高くなるようである。

そして、このような歴史についての考え方は、韓国社会のサブカルチャーの捉えられ方も関係があるかもしれない。サブカルチャーが一般的には軽視されている韓国社会ならではの風潮が連動しているという点である。

ある学生が、日本では幕末時代や戦国時代を背景にしたゲームやアニメやマン

ガが多数存在しており不思議である、と指摘した。韓国には、歴史をテーマにするゲームやアニメなどはほとんどなく、あるとしたら、子供向けの教育漫画かテレビドラマだけだ、と。日本の「乙女ゲーム」(女性向け恋愛ゲーム)のなかには、幕末志士をイケメンキャラクター化したものがあり、現実とは無関係に、たとえば伊藤博文までが美男子で描かれることがあるので信じられなかった、と。韓国では、歴史上の偉人を歴史から切り離してキャラクター化する行為があり得ないという。なるほどと思う。日本の歴史ものの作品のなかで、いろいろな立場や角度から新しく描きなおすということは、当然の手法だと思ってきたが、そのような方法がどの文化でも当然で可能だというわけではない、と実感する。歴史に対する観点や、受容の在り方、ジャンル認識が、日韓では異なっているのだと感じた。日韓の社会のなかでは、メディア・リテラシーの所在やその力点も異なるのかもしれない。

また蛇足ながら付け加えておくと、日本の「歴史」に対する「見立て」意識や相対主義的解釈の多用さは、日本独特の文化であって国際的に共有されている感性というわけではないのかもしれない。勝者がいれば敗者の正当性もある、とか、歴史人物に仮託させ象徴させて現代を生きる自分の心情を描く、といった方法は、日本文化が培ってきた遺産かもしれない。飛躍するようだが、「見立て」文化の浸透は、社会的な共感性にも繋がる気がしており、相対主義的な発想や日本特有の感性に繋がっているような気がしたのである。

おわりに

さて、ずいぶんと独断的な記録になってしまったが、「リテラシー」について学生に考えさせようとした私の教育的な目論見は、学生の教育というよりは私自身の学びになった。つまり、自分だけが正しい理解と認識をしているのかどうかを疑う契機になり、自分の常識を疑い、文化を考える契機になった。

『永遠の0』のような映画が、韓国の若い学生たちから批判的な反応を持たれることは、最初からある程度予想していたが、じつはその反感を生むポイントについては想定外の部分が多かった。彼らの違和感や嫌悪感は、単純な歴史問題や政治問題を超えており、それは文化や生活システムの差異、恋愛観や靈魂観の違いから生じる食い違いのような面も少なくないことを実感した。

メディア・リテラシーや、歴史に対する認識、鎮魂に対する感覚、恋愛観など、韓日では異なる部分や文化差が多く、この些末な差異を無視すると、大きな誤解を招いてしまうことになる。相手の位置を知らないうちには相対化はできない。

日韓の歴史認識や文化の差異がどこにあるのか、隣人がどのように考えどこで何をどう感じるのかを想像することには、日本側からも十分な配慮と注意を向けなければならない。相互文化理解はこのような小さなところから始まるはずだ。日韓の歴史認識に摩擦が生まれていることは確かに事実ではあるが、いったい何にすれ違っているのか、理解ができていないのか、本当にお互いが考えている観点で違和感を生じているのか、お互いが丁寧に手さぐりして確かめていく必要がある。相互理解の糸口を見つけ出せない現状を放置しているわけにもいかない。日本語教育の現場から、日韓の文化的差異や認識の違いをみつけ、日韓の相互理解の一端に寄与することができないだろうか。日本語教育を行う現場で実際に感じた差異を、整理して、お互いがその違いを共有してみることから始めてみるのはどうであろうか。そんなことを考えながら韓国で生活していたが、まだ確固たる成果が出ていないということは、本稿で明らかであろう。

わたしが韓国で暮らした成果があるとすると、第一には、学問領域や専門性という意識を完全崩壊できたことなのかもしれない。以前の私は、「文学」研究を文学資料として扱っている限り、「歴史学」や「民俗学」に比べて、より安全で信頼性が担保された学問であるかのように考えていた気がするが、それは誤りで、文学こそ、民族や国家の集団全体に関わる思考法や倫理観そして歴史的記憶を作りだしてきた、とも改めて感じ入るようになった。「文学」を文学研究だけで考えることはできないし、同様に「歴史」を歴史研究だけで考えることもできない。歴史という概念自体に理論的な混沌と変革の枝葉が内在している。

もしも、歴史資料ではない「文学」でならば、人々の共感や共通項を牽引しやす^{つまず}いだろうなどと安易に考えるならば、それこそは躓きの原因である。文学作品の読解も、歴史認識を背負いこみ、民族的文化風俗を引きずる。同じ絵を見て、隣の人間が同じように感じるとは限らない。ある同じ人の表情を見ても、それが幸せいっぱいの笑顔なのか、悲しみを湛えて微笑する顔なのか、その判断は、文化背景や人間の経験値そして倫理感と繋がる。異なる教育システムの下で育ち、異なる環境を生きてきた場合、思考方法や表現方法そのものが、各文化や歴史認識で経験値を背負うからである。(文学作品を映像作品としても、同じことがいえるだろう。) 表情の表し方ひとつからして、宗教意識や靈魂観とも無関係ではないのではないか、という気がして、さらに文化比較研究に関心を深めている次第である。

II 欧米の日本研究

06 セルビアにおける日本研究

——ベオグラード大学日本学事始め——

山崎佳代子

はじめに

2016年は、セルビアの日本学にとって大切な年である。ベオグラード大学文学部に選択科目としての日本語コースが導入されたのが1976年、今秋は40周年を迎える。また本年は、デヤン・ラジッチ博士30回忌にあたる。セルビアのみならずユーゴスラビアにおける日本学の先駆者であり、ベオグラード大学文学部日本学専攻課程開設のために、文字通り命をかけた人である。

今日、ベオグラード大学文学部の日本学専攻課程は、リリヤナ・マルコヴィッチ（旧姓ジュエロヴィッチ）教授をはじめ、筆者ほか十余名の教官がセルビアの日本学研究、日本語教育に携わっており、1年生から大学院生まで300名ほどの若者が集う課程に成長し、セルビアにおける重要な日本文化の発信者としての役割を担っている。

セルビアにおける日本学の節目となるこの年に、国際日本文化研究センターに滞在させていただくことになった。私自身は、37年ぶりで半年という長い時間を日本で過ごし、セルビアという国を遠く離れて見つめる時間を手にした。日本を出てから初めて二つの季節の移ろいを味わう。市中の山居というべき日文研で、ラジッチ先生の仕事を振り返り、今日のベオグラード大学における日本文学研究について記してみたい。

1. 日本学の先駆者、デヤン・ラジッチの生涯

デヤン・ラジッチは、1935年に、セルビア（当時は、ユーゴスラビア社会主義連邦共和国）の北部カニジャ市に生まれた。ハンガリーとの国境が近く、セルビア語とハンガリー語がまざりあって聞こえる町である。両親はモンテネグロ人であった。モンテネグロの地から、家族は移動したことになる。モンテネグロはアドリア海を挟んでイタリアの対岸、旧ユーゴスラビアの南に位置し、叙事詩の伝統の豊かな土地である。氏の稀有なる語学力や記憶力は、モンテネグロ人の気質に支えられていたであろう。また少年期を過ごしたカニジャという多民族地域のもつ文化の複合性も、異国の文化に開かれた氏の精神を養ったのかもしれない。日本文学との出会いは高校生のとき、英語で読んだ俳句であったと、氏は後に回想

している。

ラジッチ氏は、ベオグラード大学文学部世界文学科に入学、世界文学専攻課程では、ヴォイスラヴ・ジュリッチ（1912-2006）教授の「世界文学」を受講した。ジュリッチ教授は、世界文学科（一般文芸・文学理論）の開設者であり、高名な文学研究者である。教授は、英・独・仏語などの文献を駆使し、日本文学についても世界文学の授業で語っていた。俳句に魅せられた青年は、日本文学を勉強しようと決意する。

卒業を待たずにイギリスに渡る。1955年、ロンドンで英文学を学び、そこから船でオーストラリアに出発する。英語はロンドンで初めて学んだが、すぐに上達した。旅しながら、同じ船でオーストラリアに向かう。ユーゴスラビアの移民たちに英語を教えたと聞いた。1958年からシドニー大学で日本文学と中国文学を学び、卒業後、東洋文学の研究に携わる。その後、日本政府奨学生として1964年から66年まで早稲田大学に留学し、日本の演劇を研究した。三島由紀夫の現代能にも関心を抱き、ひろく日本文学に触れた。

国費留学生が少ない時代である。同期に日本へ留学した学者には、優れた日本文学者であり翻訳家のエドワード・クロッペンシュタイン教授もいた。二人は面識はなかったが、当時、留学生の青年と交流を進める日本婦人のグループが東京にあり、柔和な人柄のラジッチ氏は会員から尊敬されており、その名をよく聞いていたと、クロッペンシュタイン教授は昨秋、筆者に語っている。日本での留学を終えたラジッチ氏は、1967年にキャンベラ大学で修士号を取得し、研究生活を続けた。

1971年、オーストラリアでの研究生活に終止符を打ち、妻と三人の息子とともに、祖国ユーゴスラビアに帰国したラジッチ氏は、ベオグラードのコララツ人民大学で市民のための日本語講座と中国語講座を開設、教壇に立った。いずれも初級レベルであるが、ユーゴスラビア初の講座である。受講生のなかには、故山岸リリヤナ女史（1958-1998）がいた。彼女は中国に留学、上海で日本人と結婚し、大阪外語大学でセルビア・クロアチア語のコースを10年にわたって担当した。山岸女史は日本語も中国語も堪能で、今日でも珍しいセルビア・クロアチア語の講座を通してユーゴスラビア文化を伝える仕事をした女性である。ラジッチ家と親交が深かった。生き方や志に通い合うものがあつたのだろう。

ラジッチ氏は、ガレニカ製菓で翻訳の仕事をする一方、機会あるごとに会議通訳などでも活躍した。日本語の通訳や翻訳家が非常に少ない時代で、文字通り、国と国、言葉と言葉の架け橋であった。ユーゴスラビア社会主義連邦共和国は、

冷戦構造のなかで東にも西にも開かれた国であり、経済活動も活発で、日本との国家間交流もさかんであった。

だが氏が志していたのは、文学作品の翻訳であり語学教育である。ベオグラード大学に東洋学を興すために準備を始め、その努力が実り、1974年、ベオグラード大学に中国語が、1976年には日本語の初級の語学コースが導入され、ラジッチは初代の講師として初級を教えることとなった。いずれも選択科目で3年間の初級コースであった。日本語コースには、前述のリリヤナ・マルコヴィッチが加わった。

*

ラジッチ一家は、ベオグラード大学文学部から歩いて5分ほどのヴァシナ通り14番地に住んでいた。戦前からの気品ある建物の二階にあった。日本からの留学生や文学関係者が、ときおり立ち寄り、俊子夫人の手料理を楽しみ、話に花を咲かせた。なかでもセルビア・クロアチア語の優れた翻訳者、田中一生と山崎洋は、ラジッチ氏と文学について話し合う機会が少なくなかった。ラジッチ氏は、あなたたちがいらっしゃると和食が楽しめますよと微笑み、二人の来訪を愉しんでおられたという。

翻訳家田中一生氏の存在も、当地の日本学にとって重要な意味を持っていた。田中氏は、早稲田大学露文科を卒業後、ベオグラード大学に留学し、世界的に名高いビザンティン美術研究家ゴイコ・スボティッチ教授のもとで美術史を学んだ人である。筆者も含め、ユーゴスラビアへ留学する者は、出発前には田中氏から貴重な助言をいただいていた。ノーベル賞作家イヴォ・アンドリッチの文学作品の翻訳などを数多く手掛ける一方、ベオグラード大学における日本学の発展を温かい目で見守り続けた。後に日本学研究者となるダニエラ・ヴァシッチをはじめ、日本を訪れたセルビアの若者たちも田中氏の案内で東京の文学散策を楽しみ、お土産に日本の書物をいただいたりした。

田中氏とラジッチ氏は、文学の翻訳に携わる者として友情に結ばれていた。当時のユーゴスラビアは出版活動が盛んだったが、1970年代に、ザグレブ市の出版社リベル（Liber）が日本文学選集を企画したときには、数学者で俳句の紹介者としても知られていたヴラディミル・デヴィデ氏とともに、ラジッチ氏も翻訳者として企画に加わっていた。ベオグラードでは、ナーロドナ・クニーガ社（Narodna knjiga）も積極的に日本文学の出版を企画していた。田中氏は作品の選択にいくつか提案をするなど、編集者の相談に乗った。島崎藤村の『破戒』の翻

訳を勧めたのは田中一生氏である。日本の南バルカン学研究者とユーゴスラビアにおける日本学研究者の協力は、今とは比べものにならないほど大切であった。またザグレブ（クロアチア共和国首都）在住のデヴィデ氏は、日本の文化をこよなく愛した人で、ラジッチ氏のよき友人であり協力関係があった。

翻訳家としてのラジッチ氏を語るとき、セルビアの文学者との交遊も記録しておかねばならない。戦後のユーゴスラビア文学、20世紀のセルビア詩を代表する詩人ヴァスコ・ポーパとの交遊である。田中一生と山崎洋がポーパに出会ったのも、ラジッチ氏の居間で、4人は和やかな時をともにした。ポーパには、漢字をグラフィカルに添えた詩作品があるが、ラジッチ氏との交遊に靈感を得たのだと思われる。この他、ポーパには連作「小さな箱」(Mala kutija)がある。「死んでいく父親は、幼い息子に大きくなったら開くようにと箱を残した。成人した息子が箱を開くと、そこに父の顔があった。箱には鏡が入っていたのだ」という中国の逸話をもとにしている、と詩人自身が註を施している。東洋のモチーフは氏との交流から得たのではないだろうか。ポーパはラジッチ氏の翻訳活動のよき理解者であった。詩人と分かち合った時間は、氏の翻訳活動を豊かなものとしたであろう。

*

氏が翻訳した日本の文学作品は、多岐にわたる。最初の仕事は、『日本民話集』(*Japanske narodne bajke*, Narodna knjiga, 1979)であった。ロシア語からの翻訳者リリヤナ・シヤコヴィッチとの共訳である。氏の翻訳した部分が日本語からの初のセルビア語への翻訳となった。この後、目覚ましい翻訳活動を展開する。

1970年代後半の欧米における日本文学は、川端と三島を中心に紹介されているが、ラジッチ氏も、三島由紀夫と川端康成を高く評価していた。三島の『金閣寺』(*Zlatni pavilion*, Nolit, 1982; 1989)、川端の『千羽鶴』(*Hiljadu židralova*, Dečije novine, 1983; 1989)の翻訳を発表している。早稲田留学時代に三島由紀夫と会い、作家の署名のある皮表紙の書物を宝物のようにしていたと敏子夫人は筆者に語っている。阿部公房の『砂の女』(*Žena u pesku*, Narodna knjiga, 1982)、井伏鱒二の『黒い雨』(*Crna kiša nad Hirošimom*, Narodna knjiga, 1982)の翻訳もラジッチ氏の手による。タイトルは、編集者の意向で「広島黒い雨」となっている。ユーゴスラビアでは、広島・長崎への原爆投下については、教科書などにも詳細に記され、悲劇に胸を痛める人は非常に多かった。近世文学からは、井原西鶴の『日本永代蔵』(*Vječna riznica japanske porodice*, Liber, 1985)を翻訳している。死後、刊行さ

れたものには、志賀直哉の『暗夜行路』（*Dug put kroz mračnu noć*, Liber, 1989）、松尾芭蕉の『奥の細道』（*Uska staza u Zabrđe*, Draganjić, 1994）がある。

ラジッチ氏は、黒柳徹子の『窓ぎわのトットちゃん』（*Mala Toto na prozoru*, Dečije novine, 1985）も訳している。いわさきちひろの美しい水彩画を表紙にあしらった書物である。「今まで難しいものが多かったから、こうした軽いものの翻訳も楽しいですね」と穏やかにおっしゃった。児童書が日本語から訳されることは今日もほとんどないので、広い読者を獲得している一冊である。いずれの翻訳書も大手出版社から刊行されたものである。

日本現代文学のアンソロジーには、『陰影の技』（*Veštine senčenja*, Narodna knjiga, 1983）がある。三島由起夫、谷崎潤一、川端康成、遠藤周作、永井荷風などの短編を収めた。タイトルからも感じられるように、谷崎を連想させる神秘的な日本をイメージした編集。翻訳には、編者であるラジッチ氏のほか、当時は若手であった日本語からの翻訳家ドラガン・ミレンコヴィッチ氏、英語からは優れた翻訳家であり現在は作家として有名なダヴィド・アルバッハリ氏も加わっており、共同作業であった。

単行本として刊行されることはなかったが、文芸雑誌には、高村光太郎、宮沢賢治、谷川俊太郎らの詩作品、芭蕉の俳諧をはじめ、数多くの翻訳を発表したほか、川端康成の掌小説など短編の訳も発表しており、翻訳者としてのラジッチ氏の守備範囲の広さ、美意識がうかがわれる。掲載された文芸誌は、レストピス・マティツェ・スルプスケ（*Letopis Matice srpske*）など、長い伝統を誇る文芸誌である。編集者は、詩人や作家であったから、彼らとの交流も日本文学紹介にとって重要であった。

今日、ラジッチ氏の翻訳書はすべて、詩人シモン・シモノヴィッチが興した TANESI 社が、遺族の厚意によって著作権を譲り受けて再刊している。ベオグラード大学の日文学専攻課程では、ここに挙げた翻訳書を必読書に指定しており、日文学を学ぶ学生たちに、氏の翻訳した書物は読み継がれ、文学作品について語り合うことができる。文学愛好家たちにも読まれており、『金閣寺』や『砂の女』は新しい世代の読み手たちにも愛されている。氏が翻訳した作品が、現代の読者の心にも響くことを示すと同時に、時代を超えて価値のある作品が選択されていたことを物語っている。

筆者も再刊にあたって『暗夜行路』に解説を書く機会があり、氏の翻訳と向かい合う時を森の宿で過ごした。2016年、ベオグラード大学に提出された修士論文には、イエレナ・オブラドヴィッチ氏が提出した「『暗夜行路』における移動

の意味」がある。移動をすることによって、主人公が思想を変化させ深めていくことを指摘したものである。『暗夜行路』は、明快な文章や精密なプロットが魅力的な小説で、さらに読まれるべき作品である。よい翻訳書が生まれる意味を、改めて感じさせられた。翻訳者とは、翻訳によって生き続けるのである。

日本文学の翻訳者としてのラジッチ氏は信頼され、高い評価を受けていた。セルビア翻訳者協会の主要メンバーであり、ミロシュ・ジューリッチ翻訳賞の審査委員であったダーナ・ミロシェヴィッチ氏が語ってくれたエピソードがある。

『窓ぎわのトットちゃん』の翻訳が刊行されると、ダーナ氏をはじめ数名が、「翻訳賞は、日本語から直接、翻訳したラジッチ氏に授与すべきだ。これまでの業績に対して、わが会は何一つその労をねぎらっていない」と主張した。しかし、児童文学では作品そのものが弱い、という意見に押され、ラジッチ氏の受賞は実現しなかった。落胆したダーナ氏は、会議のあとで仲間と翻訳者協会の近くの菓子店に入る。今は、こうした店は少なくなったが、庶民のささやかな憩いの場所で、レモネードを飲みながら伝統的な菓子を食する簡素な店である。だが、あいにくの満席。すると、子ども連れの背の高い紳士が、にこやかに立ち上がり、「どうぞ、ここが空きますから」と席を譲ってくれた。「それがラジッチさんだったのよ」と彼女は懐かしそうに言った。奇遇であるが、彼女は早逝した山岸リリヤナさんの叔母にあたる。ダーナ氏は、優れたフランス文学の翻訳家。ラジッチ氏の謙虚で穏やかな性格を彷彿とさせる話である。

ラジッチ氏は翻訳活動と並行して、日本語を選択科目から4年制の専攻課程に発展させるべく努力を続けていた。大学の規定では、専攻課程を発足させるためには、関係する研究領域で博士号を取得した者が最低1名必要となる。論文執筆許可の手続き、委員会の構成、資料の収集と、解決すべき問題が山積していた。苦労の末、ラジッチ氏は、博士論文の執筆にとりかかる。指導教官は、ヨーロッパ自然主義について研究書のあるラドスラヴ・ヨクシモヴィッチ教授である。未知の日本文学に対する健康な好奇心の持ち主だった。東洋文学にも関心を持ち、快活な研究者である。私も修士課程で授業を聴講したが、セミナー論文では近松門左衛門の心中のモチーフについて書かせていただいた。学部では自分の専門分野以外の論文指導を引き受ける教授は極めて稀で、ヨクシモヴィッチ教授の勇気がなかったら、日本学の専攻課程の開設は遅れていただろう。

ラジッチ氏は執筆に集中、ベオグラード大学文学部世界文学科に博士論文「日本近代文学における自然主義」(Naturalizam u modernoj japanskoj književnosti, 462 str, Beograd, 1981)を提出する。ベオグラード大学文学部における最初の文

学博士誕生。博士論文は、ユーゴスラビアにおける初の日本文学に関する研究書となった。日本における自然主義文学の研究を体系的にまとめたほか、ヨーロッパ自然主義との比較考察を行うことは、いまもなお意義の深い仕事である。論文の審査には、ワルシャワ大学からポーランドの日本文学研究を代表するミコライ・メラノヴィッチ博士も加わった。審査の日には、ご家族のほか、選択科目として日本語を受講していた学生たちも数多く参加して先生を祝福し、会場は明るく和やかな雰囲気包まれた。残念ながら、現在は、大学図書館に収められた論文が閲覧できるだけである。2006年には、氏の没後20周年記念論集が編纂され、1章を掲載したが、単書としての刊行が望まれる。

博士号取得後、ラジッチ氏は、日本学専攻課程、中国学専攻課程を開設すべく、学科長、学部長をはじめ多くの関係者に構想を説明して協力を求めた。当時の学部長はトルコ語の研究者スラヴコ・ジンジッチ教授、学科長はアラブ語の研究者ダルコ・タナスコヴッチ教授で、両氏ともラジッチ氏の構想を支持し、開設に積極的であった。

これに平行して、氏はカリキュラムの制作に着手する。日本語教育、日本文学、日本事情（文明論など）からなる専攻課程をデザインするのは、簡単な作業ではなかった。日本学専攻課程のカリキュラムについては、1983年から1年間、国際交流基金の招聘による日本滞在中で、収集した資料や書物をもとに作成された。その頃の日本学の水準から見て、ラジッチ氏の手によるカリキュラムは均整の取れたものであった。

当時のベオグラード大学文学部では、外国の文化に関する学科は、外国語教育、文学研究、文化研究と基本3領域から成り立っていた。外国語の専攻課程のカリキュラムは、語学、文学、事情論の三つを柱としていた。日本語専攻課程のモデルになったのは、すでに導入されていた東洋学科のアラブ語、トルコ語である。日本語教育は、講義のほか、演習が行われていた。その他の専門科目は講義形式で、演習はない。第二外国語以外は、ほとんど選択科目はなく、多くが必修科目であった。日本語は1年次から4年次まで演習と講義があるほか、3年次と4年次に翻訳演習がある。日本文学史は3年次と4年次。日本事情に関係する科目には、1年次の日本学入門、3年次と4年次に日本文明論と日本社会文化史が用意された。これらの科目のカリキュラムもラジッチ氏の手によるものであった。

日本文学の参考文献には、ロシアの比較文学者であり日本学研究の第一人者であったニコライ・コンラッド、アメリカのドナルド・キーンなどの研究書が挙げられており、比較文学的な視点が感じられる。文学部に提出されたカリキュラム

は美しくタイプされていた。氏は、「西洋文学と比較して、その共通部分や異質性などを研究しつつ、現時点に於いて日本文学が世界文学のなかでどのような位置にあるかを特に重視するような「日本文学史」にしようと考えています」と、日本の雑誌『翻訳の世界』（1985年3月号、74-75頁）のインタビューで述べている。

日本学専攻課程開設の準備が始まった1980年代は、多民族国家ユーゴスラビアが存在していた時代である。1981年、国家の象徴でもあったティトーが死去すると、様々な政治問題、経済問題が少しずつ浮上してきてはいたが、冬季オリンピックがサラエボで開催されるなど、国力は小さくはなかった。よき時代に、日本学専攻課程の準備は進められたことになる。ラジッチ氏は日本学専攻課程の構想が固まると、日本語を教えるはどうかと私に声をかけてくださったのだった。

*

その当時の私といえば、1979年、北海道大学で露文科を卒業後、スラヴ文学を学ぼうとユーゴスラビア給費留学生としてサラエボに1年留学、その後、スロベニアのリュブリャナ民族音楽研究所を経て、ベオグラード大学文学部修士課程に入ったばかりだった。サラエボ大学では、ノーベル賞作家イヴォ・アンドリッチ研究の第一人者ラドヴァン・ヴチコヴィッチ教授のもとでユーゴスラビア文学史を学び、セルビア・クロアチア語圏の口承文学の豊穡に魅せられ、南バルカンの民謡に現れる「心中」のモチーフについてリュブリャナでも調べ、そのあとベオグラードで、近松の人形浄瑠璃にみる心中ものとの比較研究を始めていたのである。

ヴチコヴィッチ教授は、ご自身には厳しい方だったが、日本から来た私にとっても親切にしてくださった。私だけのための水曜日ごとの体系的な文学史の講義のおかげで、多民族地域のユーゴスラビア文学の複雑な歴史の全貌を把握することができた。今では考えられぬ贅沢な話である。サラエボに着いて間もないころ、「我が国では日本のことはよく知られていませんが、詩人のツルニャンスキーが、日本の古歌のアンソロジーを編んでいます。ご存じですか」と、ヴチコヴィッチ教授がおっしゃったのを思い出す。

異国で母語である日本語を教えるとは、なんと魅力的な仕事だろうか。当地は女性が働くことは当然の社会である。保育所や有給休暇のシステムも含めて、当時の労働条件は日本とは比べものにならぬほど整備されており、安心して働くことができた。子育ての真ただ中、人生が大きく変わろうとしていた。大学側が法律を調べたところ、国家間の文化交流協定のない国の語学講師を任用すること

はできず、研究職を兼ねた助手のポストということで、永住権の申請なども含め、私も手続きのために書類を揃えることになった。

だが、すでに病魔がラジッチ氏の身体をむしばんでいた。夏に、ラジッチ家を訪ねると、胃に潰瘍が見つかったとおっしゃった。いつものように、居間のソファに深々と座り、動揺した素振りはいささか見せず、静かに受け止めておられる。闘病中に、委員会の報告書を書きあげ、他の委員たちの署名を集めてくださったのだ。秋に入院となった。

1985年、秋は深まっていく。法律上の様々な問題が解決し、文学部のすべての会議で承認され、私の就職が決まった。電報で採用通知が届くと、人事課で手続きを済ませ、花屋で白ユリの花を求めて、市立病院に向かった。長身で体重が90キロ以上はあったはずの先生がすっかり痩せていた。40キロもないのと、俊子夫人が囁く。無事に採用されたと先生に申し上げると、「それは、よかった。これで日本学はなくならなくてすみます」と、心から嬉しそうに穏やかな微笑みをたたえておっしゃる。「早く良くなってください」という私の声は、病室のよどんだ空気に吸い込まれていった。病室から出たら、廊下は長く、庭は寒々として、樹木は枯れており、世界があらゆる色彩を失っていた。

1985年11月、日本学科は中国語科とともに発足する。だがラジッチ先生は、教室に戻ることもなく入院生活を続け、翌86年1月に永眠。享年50歳。あまりにも早すぎる旅立ちである。

日本学者としてこれからという時に昇天したラジッチ氏の足跡を辿ると、小さいが真珠のような文学の仕事が見つかる。それは『文学用語事典』(Dragiša Živković, *Rečnik književnih termina*, Nolit, Beograd, 1985, 896 pp.) の「俳句」(p. 243) の項目である。基本文献としては、米国のR. H. Blythの4巻本(1949-52)、A. Miyamori著の*An Anthology of Haiku: Ancient and Modern* (1932) のほかに、セルビアで初めて日本の古歌のアンソロジーを編んだ詩人ミロシュ・ツルニャンスキーとその本の書評を著わした文学者イシドラ・セクリッチも記されている。

この文学事典に執筆をすることはラジッチ氏が研究者として評価されていたことの証でもあった。当時のユーゴスラビアでは、ベオグラード、ザグレブ、サラエボの3都市の大学の文学研究家の交流はさかんで協力関係があった。パフチンやロットマン、シクロフスキーの研究は進んでおり、文学理論の研究が華やかな時代だった。文学研究家たちを総動員して編纂されたのがこの辞典であり、文学の潮流、ジャンルの定義などが整理され、いまもなお版を重ねている。ベオグラードの文学芸術研究所の刊行で、編集責任者は文学理論研究を代表するドラギン

ヤ・ジヴコヴィッチ教授だった。この事典を開くとき、「俳句」の項が、季節の色をとどめた押し花のように思われる。俳句に魅せられた青年が、早すぎる人生の終わりに俳句について書き残した。あたかも人生が一句であるかのように。「日本人は大きく広いところから深く凝縮した世界を志向しているように思えます」（『翻訳の世界』1985年3月号、74-75頁）と、ラジッチ氏は述べている。

あるときのこと、ラジッチ氏がお電話で、「日本の近代文学は、都市と農村について、どのように描いているでしょうか。それについて論文を書くので」と私にお尋ねになったのを思い出す。あのときは、ろくに満足な答えもできず残念でならない。様々な視点から、日本文学を語る時代が始まっていた。

セルビア国営放送のアーカイヴには、ラジッチ氏へのテレビ・インタビューが残されている。インタビュー担当はヴラディミル・リストヴ氏である。博士号の所得が話題を呼び、文化番組で日本文学について語っている。日本の平安時代の文学を取り上げ、物語のジャンルに注目し、紫式部と『源氏物語』について語った。

「日本の文学は、世界でも類まれに豊かな文学である。とりわけ平安時代の宮廷文学は、さまざまな芸術を生み出したが、なかでも物語というジャンルは興味深い。理想化された源氏を主人公とするこの作品は、心理描写に秀でている。とりわけ女性の登場人物たちの心理の描写は見事である。世界でこの時代に、このような完成度の高い作品はないので、世界初の小説ということもできるだろう。日本の古典文学の傑作である。20世紀のジェームス・ジョイス、ブルーストたちの心理小説と比べることができる。同じモチーフとテーマが波のように反復する作品の構造は交響楽ともいえ、それが魅力である……」

撮影は、文学者や翻訳家たちが立ち寄り語り合ったあの居間で、グレーのスーツの先生が落ち着いて話しておられる。まだ生きていらっしやると錯覚するほど……。

50年という限られた時間を疾走するごとく、ラジッチ氏は日本文学の翻訳活動に取り組み、この世を去った。日本学とともに中国学の専攻課程を立ち上げるという大きな課題に取り組みながら、氏は最後の書物を書き上げている。『禅』（Zen, Dečijie novine, Gornji Milanovac, 1985, 341 pp.）である。目次を見ると、「禅と日本人のメンタリティー、禅の源流、禅仏教の歴史、悟りと公案、禅と俚諺、禅の話、日本文学における禅、禅と生きる知恵、禅と愛と性、禅とユーモア、禅

と宗教、禅と心理学、禅と科学、禅と西洋、禅と日常」と章が並び、鈴木大拙などを中心に、禅が紹介されている。文学作品の翻訳と同様、心を集中させて一気に書き上げたのだろう。斬新な表紙は、当時、第一線で活躍していたブックデザイナーのランッチ氏の手になるもの。白地に「心」の文字を黒々とあしらひ、書の美しさによって読み手を誘う。ユーゴスラビアの読者にむけた禅についての入門書であるが、序文からは禅に寄せる一人の人間としての氏の想いが伝わってくる。序文の日本人の清潔好き、日本人の本好きなど、ラジッチ氏が日本の人々にそそいだ温かな眼差しが感じられる。先生の葬儀のあと、ヴァシナ通りのお宅を訪ねると、ラジッチ氏の母上は、あの書物を書いていたから息子はあんなに穏やかでいられたのです、とおっしゃった。この一冊こそ、氏の涅槃だったのだろう。この書物をきっかけに日本学を学ぼうと決心したという学生が今もときに現れ、胸を打たれる。東京大学で博士課程を修めたイーリヤ・ムスリン氏もその一人である。若手の日本研究家で、セルビア語に太宰治の『斜陽』を訳している。

2. それからの日本文学と私たち

ベオグラード大学の日本学は、ラジッチ氏から次の世代にゆだねられて出発した。ラジッチ氏は、みずからが開設のために尽力した2つの専攻課程に入学した第一期生を教室で迎えることができなかったのだった。

今日のセルビアの大学教育は、EUのボローニャ協定に沿って2005年に大学改革を行い、単位制度が導入され、数多くの選択科目も生まれ、開設当時からは多くの点で様変わりしている。ベオグラード大学文学部の日本語・日本文学専攻課程も、言語・文学・文化という3領域から日本学を学ぶコースとして多数の選択科目が置かれ、そのうち数科目は日本学が主専攻ではない学生にも開かれている。

専門課程としての日本学発足から今日まで、私は仲間とともに日本語教育と日本文学の講座を担当してきた。30年という歳月を、セルビアの日本学とともに生きてしまった。限られた紙面であるが、ラジッチ先生亡き以後のベオグラード大学の日本学の歩みを日本文学の講座を中心に記しておきたい。

*

第1期生は10名。現在、本学部で教授をつとめるダニエラ・ヴァシッチ氏も在籍していた。リリヤナ・マルコヴィッチと筆者のほか、国際交流基金から派遣講師1名加わって3人だけの出発である。助手だった私と小松知子講師（1985-87在任）、後には荒川みどり講師（1988-1990在任）が演習を担当し、日本語教育が

産声をあげた。伝統のないところで発足した日本学専攻課程にとって、交流基金の講師派遣は計り知れぬほど有意義なものだった。日本語教育を専門とする講師は、日本語コースを充実させただけでなく、学生と自由に話しあえる友として貴重な存在だった。また国際交流基金から届けられる教材や教科書なくしては日本語教育の開始は不可能だった。

日本文学の講座は、1期生が3年生に進級した1988年に開始される。当時は、本学部に専門家がなかったため数多くの苦労があり、国外から研究家を招き集中講義を行った。最初の集中講義を担当したのは、当時ソフィア大学（ブルガリア）の十文字華子氏ことツヴェタナ・クリステヴァ氏である。1週間の集中講義が2回行われた。少数のクラスであり、密度の濃い授業となつて和やかだった。学生は、英文の参考資料を用いてセミナー論文を提出し、試験は口頭試験で行われた。古典を中心とする日本文学史の輪郭が学生たちに伝わった講義だった。クリステヴァ氏の話術に魅了され、古典の魅力を知った者も少なくない。セミナー論文は、歌舞伎や文楽、能楽などをテーマとしたものもあり、内容は多様であった。クリステヴァ教授は、現在、国際基督教大学（ICU）で活躍しておられる。

次に集中講義が行われたのは1989年10月から3か月間、協定校である中央大学の長崎健教授によるものだった。質素な外国人講師宿舎での生活など、ご苦労も多かったはずだが、この集中講義によって日本文学研究の土台が築かれたのである。講義は日本語で行われ、当時、助手であった私が通訳を務めた。この通訳体験は、未熟な私にとって厳しい修行であった。教授には講義の内容をあらかじめ届けていただき、キーワードを押さえておく。手書きの原稿と配布資料をいただき、準備をして授業に臨む。通訳が入るので、実際に教授が話す部分は1講について45分であったろう。しかし内容の濃いものだった。明確な解説のあと、実際の文学作品の引用をする形で進められ、ユーモアのある楽しい授業であった。だが、私は『古事記』の冒頭部分などを通訳するわけである。勉強に勉強を重ねた3か月であった。学生には講義録を提出してもらい、誤解が生じてはいないか、通訳で用いた訳語が適切だったかなどを確認する。学生たちは講義録をコピーして共有し、教授の帰国後、これに基づいて私たちが口頭試験を行った。

集中講義の通訳の準備の苦労は、今となれば、よき思い出である。美学や哲学、歌論などに関する用語はとりわけ難しかったが、この経験によってキーワードの定訳ができた。動植物の名前も難しかった。『源氏物語』に登場する植物の名前では、藤の花が思い出される。訳語を見つけたあと、実際に花の咲いている場所をベオグラードで発見、そのあと源氏を講義するときは必ず、どこに咲いている

かを学生に伝えた。今では、インターネットの普及でこうした作業は楽になっているが、淡い紫の藤の花をコサンチッチ横丁の煉瓦塀の家で見つけたときは嬉しかった。今も5月になると花をつける。アドリア海沿岸の町では見かけるが、内陸のベオグラードでは珍しいのだ。

長崎教授の授業は、第1講で日本文学の地域的な特徴を論じたあと、2講は時代区分の解説、3講は美意識の変遷を解説、そのあとは時代を追って文学作品、ジャンルを解説していくという流れであった。多少の変化を加えながら、このスタイルを概ね踏襲してきた。はじめて日本文学に出会う若い人々たちに、最初の段階で文学史の全体像を把握してもらうことは重要であるし、講座全体の流れを魅力的なものにする。

講義の通訳を通して、海外で日本文学を教える際に、何が重要であるかを考えさせられた。美意識に関する用語（あはれ、をかし、わび、さび、幽玄、余情美など）や、歌論などに関わる用語（枕詞、縁語など）は、英語など他の言語を介して説明すると、基本概念から遠ざかっていく。文学や美学の基本概念を伝えることは、きわめて繊細な作業であると実感せざるをえなかった。学生の共通の母語がある場合は、母語の文学史の諸現象や母語による文学理論をふまえ、概念を精確に伝える訳語を選ぶ必要がある。近年は、外国人留学生に対する英語のコースの必要が強調されているが、世界は英語圏だけではない。小さな言語であっても、海外の大学において受講者の母語が共通の場合は、丁寧に日本文学に関する訳語を決めていくことが大切である。文学の言語とは、なんと感じやすい言語であろうか。文学の言葉が、翻訳や通訳などを介して別の言語に移動していくと、意味やイメージが大きく変化してしまうことがあるのだから。

集中講義が終わると長崎教授は、近世、近代、現代も同じようなスタイルで教えたらよいと提案してくださった。こうして1990年から、3年生と4年生を対象に私が日本文学史を講義することになった。『古事記』や『万葉集』から紐解き、中世、近世、近代を経て、横光利一など前衛文学まで、日本文学の変遷を異郷で辿ってきたことになる。セルビアの季節の変化を、日本文学の流れと重ねてきたのである。

講座を運営していくために必要な書物については、国際交流基金の書籍寄贈のプログラムに申請することになり、長崎教授が選書をしてくださった。寄贈された書籍なくしては、日本文学史の講座を続けることは不可能であっただろう。寄贈された書物のなかで特に貴重だったものには小学館「古典文学全集」がある。当時刊行されて間もないもので、現代語訳が付されている。あわせて明治書院刊

「研究資料古典文学」と「研究資料現代日本文学」の叢書が、その後の当地の日本文学の講座にとって基本的な文献となった。その後も長崎教授は、当時、院生であった菊地明範氏とともに研究に必要な資料を送ってくださったほか、和歌などについて手紙で貴重な助言をくださった。筆者のアヴァンギャルド詩研究についても、研究家の古俣裕介氏を紹介して下さり、異国での閉ざされた研究活動を支えてくださった。

文学関係の図書は、多くの人々の厚意で充実していった。ラジッチ家からは、先生の蔵書が寄贈された。日本語の文献ばかりではなく、英文の優れた研究書が数多くあり、多くの学生に読み継がれていった。また筑摩書房の「現代文学大系」全巻は、本学の日本研究になくはならぬ書物となった。翻訳家の田中一生氏は、ご自身もいくつか項目を執筆した平凡社刊『世界大百科事典』を日本ユーゴスラビア友好協会の仲間と寄贈してくださったほか、岩波書店刊『日本古典文学大系』、安倍公房や夏目漱石の全集など、膨大な図書を個人で寄贈してくださった。この他、国際交流基金、共立女子大学、日本書籍出版協会をはじめ、シルクロード雑学大学などから書籍をいただいた。

だが1991年の春、ベオグラード大学日本学専攻課程は、暗い時代に遭遇する。多民族国家ユーゴスラビアにおける内戦没発、さらに国家解体のプロセスが始まったのである。徴兵制度があったので、配属先の兵舎で紛争に巻き込まれ、想像を絶するような体験をした後、大学に復帰できぬまま退学したV君のことを思い出す。一度だけ教室に顔を出して、新聞などでは報じられぬ惨事を知らせてくれた。美しい戦争などはない。

1993年、ユーゴスラビア（セルビアとモンテネグロ）に国連制裁が課せられると、国はさらに緊張した。多民族国家の解体の責任は、独立ではなく連邦を存続させようとした共和国だけに問われた。制裁は経済、交通、文化・学術・スポーツも含む過酷なものだった。医療器具や薬品の輸入もままならぬ時代、知人の妻はインシュリンが手に入らず亡くなった。学術雑誌は海外から届かなくなり、国家間の留学制度は麻痺した。すでに文科省の留学が内定していた学生には、ただちに取消しの知らせが届いた。オリンピックも、団体競技は出場停止、個人競技では、国のマークを一切つけず、白いシャツでの参加だけが認められた。当時、助手だったダニエラ・ヴァシッチ氏も、国際交流基金による1年間の研修が取り消された。

*

内戦の時代は、混乱の時代だった。クロアチア出身の学生たちにも、民族紛争の嵐は辛かった。愚かなメディア戦争から、私たちは教室のよき人間関係だけは守ろうと心を尽くした。国内も政治の風が吹き荒れ、大学は政治活動をする学生たちの手で封鎖され、ストライキが続いた。定期試験を予定した日に、反政府デモが始まり、苦勞して実施した試験をやり直せという要求が学生団体から出された。激戦地となった村の両親のもとへ帰る女学生に、夏の宿題だった日本語の日記を添削し、及第点をつけて送り出す。それきり、彼女は教室に戻らなかった。オリヴェラという名前だったと思う。

ユーゴスラビアという多民族国家が内戦によって解体し、これまで連邦を構成していた共和国は分離独立して、私たちの生活圏はセルビアとなっていく。学生たちのなかには、難民として来た者も少なくなかった。これまで築かれていた価値観が、砂の城のように崩れていく。閉鎖状態のなかで、ベオグラード大学における日本学が、近隣諸国から大きく遅れをとることは火を見るよりも明らかだった。国際交流基金からの講師派遣も途絶えた。だが戦争という異常事態のなかで、諦めている暇などはなかった。耳の奥から、ラジッチ先生の声が何度も聞こえてきた。「日本学がなくならないですみます……」と。日本語教育をいかにして続けていくか、日本文学の講座をいかに進めるか。文学の授業では、中世の無常観が心に染みた。風姿花伝、徒然草、平家物語、方丈記……。

*

私たちに課せられた仕事は簡単ではなかったが、内戦時に素晴らしい出会いに恵まれたのは奇跡としかいいようがない。政府の奨学金が途絶え、閉塞感につまれた時代だからこそ若い人を励まそうと、田中氏の呼びかけで、東京大学の柴宣弘教授、翻訳家の山崎洋の3氏はお金を出し合い、四年生の最優秀者に「桜賞」を授与する決心をした。国連制裁が解かれる年まで続けられ、現在、セルビアの外務省で活躍するスネジヤナ・ヤンコヴィッチ氏、後に大阪大学で博士号を取得するドラガナ・シュピツァ氏、そして今日、ベオグラード大学教授となったダリボル・クリチコヴィッチの3氏が受賞した。副賞は『講談社日本語大辞典』で、受賞者は、賞状とともに、ずっしりとした辞書を厳かに受け取った。俳句の朗読会など、文学プログラムとともにベオグラード市立図書館の初夏の庭で授賞式が行われたのも懐かしい思い出である。

内戦の時代の私の課題は、博士論文を書き上げることだった。修士論文「セルビア・クロアチア語圏の民謡における情死——日本文学と比較して」(Tragična

ljubav dvoje mladih u srpskohrvatskoj narodnoj poeziji i japanskoj književnoj tradiciji, 1986) は、心中のモチーフを扱ったタイポロジー研究であったが、博士論文のテーマを選ぶまでに長い時間がかかった。留学も研究滞在も許されない。戦争が始まったころ、詩を書き始めていた私の心に、アヴァンギャルド詩が浮かんだ。第一次大戦の死の灰からダダイズムが生まれた。セルビアも日本もヨーロッパ・アヴァンギャルドの受容者である。比較していくことで、鮮明になるものがあると考えたのだ。奇しくも、そこに立ち現れてきた書物は、1928年にツルニャンスキーが編んだ日本の古歌のアンソロジーである。前衛運動の中で、中国と日本は、セルビアの詩人たちに新しい風を吹きこんだ……。文学事典にラジッチ先生が記し、ヴチコヴィッチ教授が教えてくださったあの書物である。

アヴァンギャルド詩をテーマに選んだ私が、ノヴィツァ・ペトコヴィッチ教授に巡り合えたのは、暗い時代の一条の光であった。文学事典の編纂者であるジヴコヴィッチ教授の愛弟子であり、ロシア・フォルマリズムの研究者、セルビア20世紀文学の代表的な研究者である。数々の困難にもかかわらず、指導教官を快く引き受けてくださったのだった。アヴァンギャルドの基本理念は、この出会いがなかったら理解できなかっただろうし、セルビアの前衛運動の全体像も見えなかっただろう。国が閉鎖された時代であって、外国文学の資料収集には限界がある。だが文学理論の研究の水準が高いセルビアで、文学テキスト分析には可能性が残されている。詩というテキストの読み解き方を教授に教えていただき、日本文学を読み解く眼が変わった。比較文学の方法、文学テキストの分析は、日本文学を外から観る方法として、閉鎖された時代にも新しい道を示してくれたのだった。ペトコヴィッチ教授は、ティトー元帥死後の政治危機で、サラエボ大学を追われた後、ベオグラード大学に移られていた。

振り返れば、封鎖された時代ではあったが、数多くの日本の研究者にお世話になった。アヴァンギャルド文学研究家の千葉宣一教授は、見ず知らずの私に貴重な書物を貸してくださり、手紙で励ましてくださった。日本に帰国の折には、友人の父である江頭彦三先生や剣持武彦先生のお宅で、近代詩についてお話を聞かせていただき、ご指導いただいた。詩人でフランス文学研究家の安藤元雄教授は、国連による文化制裁の最中に、セルビア文学者協会主催の作家会議に参加し、ベオグラード大学の日本学科の学生たちを訪ねてくださった。多くの出会いに支えられていたのである。

制裁下での日本語教育には厳しいものがあった。交流基金からの講師派遣が中止となり、語学演習の量も質も低下せざるをえなかった。当時、日本語演習を担

当していた母語話者は私だけで、日本文学史も担当せねばならず、全学年を受け持つことは不可能であった。山崎洋が非常勤として3年と4年を対象に翻訳演習を担当することになった。だが、1年生の演習に母語話者の教師が確保できない年もあり、口頭試験で学生たちの発音のひどさに啞然とし、慌てて促音や撥音の練習をしたこともあった。

内戦当時、ベオグラード大学文学部国際スラヴ学センターの所長をしていたチヨールリッチ教授は、「両国政府給費による交換留学の制度が途絶えているのだから、日本からベオグラード大学に留学したい人も困っているはずだ。留学希望者を募り、日本語の非常勤講師を時給でお願いしてはどうか」と提案してくださった。東京大学教養部の柴宜弘教授の院生、岡山大学文学部の鐸木道剛教授の院生などが、この形をとって留学が可能となり、日本語の非常勤講師として演習を担当することになった。この形式をとって内戦という異常な時代をなんとか乗り越えることができた。野町素己氏、奥彩子氏、嶋田紗千氏、山崎信一氏らが、この形で演習を担当した。

内戦当初は、日本人学校の教師夫人たちにボランティアをお願いしたこともあったが、残念ながら国連制裁を機に日本人学校は閉鎖されて長くは続かなかった。だが一人一人の授業には、誠意がこもっていた。教員免許を取得しておられた方の授業はすばらしかった。日本から留学希望者がなく、母語話者が確保できなかった年に、国際赤十字勤務のスイス人の夫人に日本語教育を依頼したこともある。東京で中級までを習っていた女性だった。多くの方々に支えられた12年間であった。

内戦を背景とする混乱のなかでの出会いには、忘れることのできないものも数ある。難民支援活動をしていたヴィゴツキー発達心理学の実践家ヴェスナ・オグニェノヴィッチ女史との出会いである。彼女は、難民の人々の心理的支援を行っていた。学生のなかには、難民となった若者たちも多かった。彼女の活動に共鳴する。日本の現代詩を翻訳、「詩のワークショップ」を難民センターで展開して10年をともにしたのだが、この体験をもとに、詩のワークショップのフレームを日本語の教室に教授法として取り込み、大学の仲間とメソッド「詩歌（ことばうた）ワークショップ」へと発展させていったことは、この上なき収穫である。ベオグラード日本語教育のトレードマークとなった。

こうして閉ざされた時代にヒューマン・メソッドを言語教育の柱として、文字通り、夢中で仕事をした。人と人の出会いの中でこそ人間は発達するというヴェスナ思想と実践は、内戦の時代に生きる私たちの指針となった。ワークショップ

プで何度も群読することになる谷川俊太郎の連作「ポール・クレーの絵による「絵本」のために」や白石かずこの詩作品を、詩人スルバ・ミトロヴィッチ氏とともに翻訳したのが、私にとっては日本現代詩のセルビア語への翻訳の初仕事となった。

その後、日本からは現代詩人の安藤元雄、白石かずこ、谷川俊太郎、高橋睦郎たちがベオグラードを訪れ、ワークショップの輪に加わってくださった。池澤夏樹氏も2度、ベオグラード大学で講演なさっている。文学作品を語学教育に丁寧に織り込むことは、学生たちとともに教師たちを深く動機づけてくれた。時を豊かなものとした。歴史の狭間で、私たちを守り支えてくれたのは、ほかならぬ詩であり文学だった。あの時の体験が、私たちの日本語教育、文学教育の礎となっている。

*

バルカン半島に起きた民族紛争は、世界規模のメディア戦争でもあり、人の思想や感情にも入り込む、醜く汚いものだった。だが内戦中に、助手の採用が許可され、文学・日本語教育にダリボル・クリチコヴィッチ氏とディヴナ・グルマッツ氏、日本文明にマリーナ・ジャオヴィッチ氏が教官として仲間に加わる。いずれも、今日の日本学の教授陣の核となる仲間たちである。

だが1999年春、NATOによるユーゴスラビア（セルビアとモンテネグロ）空爆が始まる。授業は中止、学生も職員もほとんど現れぬ校舎で、当直をするという緊張した日々が続いた。国の法律で、非常時における公務員の勤務については、6歳以下の子供を持つ女性には出勤の義務は免除されたが、私は「大きな子ども」の母親であった。朝の廊下は暗く、そこで出会う同僚と交わす言葉は、砂漠の水のように嬉しかった。家に帰り、自宅の本棚に並べた前衛詩関係の書物のタイトルを見つめながら、一瞬にして破壊され、無となっていく建物や人の情景が重なり、虚しさと闘わなくてはならなかった。第二次大戦中、日本でも無数の書物やノートが空襲に消えた。その炎が思いをよぎる。空襲警報解除のサイレンが朝空に響き渡ると自宅を出て、午後2時くらいに大学から自宅に向かう。ドナウ川を渡る電車の中では緊張する。橋はいくつも落とされていた。空襲警報が鳴り響くのは午後4時くらいだった。そこで空気は凍りつき、私たちは家にこもる。送電線は何度も攻撃を受けて停電、断水が何日も続いた。病院も停電、簡単な手術も困難になる。ワープロも立ち上がらない日が何度もあった。

78日間続いた空爆が終わり、最後の空襲警報解除のサイレンが鳴る。亡くなった人々、負傷した人々……。だが新しい時代が来た。

3. 実りの季節

苦勞の末に、博士論文「1920年代における日本前衛詩の発展——セルビア文学との比較考察」(Razvoj japanske avangardne poezije 1920-ih godina u poređenju sa srpskom, Beograd: Filološki fakultet u Beogradu, 2002)を書き上げたのは2002年のこと。ラジッチ氏の後、長い空白を経てベオグラード大学に提出された2番目の日本学の博士論文となった。遅々たる歩み、完成までには気の遠くなる時間がかかった。精神の力が必要だった。いくたびも自分の力を疑った。だが異郷の言葉で言語表現を身につけるための試練だった。論文審査には、家族のほかに学生たちが来てくれた。友人たちもやってきた。ヴチコヴィッチ教授もいらっしやって、論文の完成を喜んでくださった。教授夫妻は内戦によってサラエボの町を追われて、難民生活をベオグラードの郊外で始められていた。論文が『日本アヴァンギャルド詩——セルビア文学と比較して』(*Japanska avangardna poezija: u poređenju sa srpskom poezijom*, Beograd, Filip Višnjić, 2004)と題して刊行されたのは内戦などの混乱が収まってからのことである。私の初めての研究書となった。

次の課題は、日本文学と日本語教育関係の科目のカリキュラムを書き直すことである。山のような新しい仕事が待っていた。2005年から東京外国語大学から若手の日本語講師を2名迎えることとなり、日本語教育は目覚ましい発展を遂げることになる。この橋を架けることができたのは素晴らしいことだった。淵上真弓、水野(和田)沙江香、岡田さやか、宮野谷希、高橋亘各氏のあと、現在は、高見あずさ氏、正木みゆ氏が日本語講師として活躍し、日本語教育の新たなページが開かれた。

東京外国語大学の柏崎雅世教授、早津恵美子教授、留学生日本語教育センターの伊藤祐郎センター長、藤森弘子副センター長、藤村知子教授、花蘭悟教授各氏には、日本語教育についてご指導いただき、日本語講師の推薦もお願いしてきた。E-Learningの日本語教育システムJPLANGのセルビア語版を、チームで作らせていただき、学生たちはこのシステムを利用して日本語を学ぶことができるようになった。

日本語教育のために出版された書物には、山崎洋編の『セルビア語日本語、日本語セルビア語辞典』(*Japansko-srpski, srpskog-japanski rečnik*, Beograd: Zavod za udžbenike, 2003, 2008, 2014)がある。6000語あまりの規模で、中級までの読解と作文に利用できるほか小文法が付されている。セルビア語の文法学者ブレドラグ・ピッペル教授が文法用語について監修してくださったのは幸いであった。これま

で教室で用いられる文法用語には統一がなく、小文法の仕事は貴重であった。原稿の段階で私も意見を述べ参加することができ、後の授業や文法書の作成に役立った。

セルビア語による現代日本語の文法書が完成するのは、11年後のことである。JPLANGの文法解説に大きく手を加え、大学教育のために、私は『現代日本語文法 上・下』(*Gramatika savremenog japanskog jezika I i II*, Beograd, Zavod za udžbenik, 2014)を書きあげた。7年の歳月がかかったが、今日の日本語演習で活用されている。初めて教壇に立ってから、日本語の文法書を書かなくてはならないと考えていたが、悲願がかなった。授業の能率もあがり、学生たちの日本語学習も前に比べて楽になったと思う。見出しを日本語とセルビア語で併記、また例文も2か国語で示し、日本人講師も使えるように工夫した。この書物が完成して、ほっとしている。

文学の翻訳活動も、若手の研究者たちとともに続けられていった。若手の翻訳指導を行い、多くの翻訳書の監修を行った山崎洋の果たした役割は大きい。山崎洋が、ヴァシッチ、クリチコヴィッチ、グルマツとともに、4人で『古事記』を7年かけて訳したことは翻訳史に記録すべき出来事だった。4人は日本翻訳家協会の特別文化賞を受賞した。私はこの翻訳書のために解説を書き、『古事記』を何度も読み返した。大きな書物を外国語に訳すとは文字通りの共同作業である。

山崎洋は、このほかに芭蕉、蕪村、江戸俳句の翻訳集、奥の細道も訳し、日本文学の講座ではいずれも必読書となっている。ダニエラ・ヴァシッチは、アイヌの民話、芥川龍之介、森鷗外などを訳すなど、活発な翻訳活動を行い、山崎洋と「竹取物語」を共訳した。ダリボル・クリチコヴィッチは、芥川龍之介、池澤夏樹などの短編のほか、末木文美士の『日本宗教史』(岩波書店、2006年)を訳すなど多岐にわたる翻訳活動を行っている。ディヴナ・グルマツは村上春樹の『ダンス、ダンス、ダンス』(1988年)、『スプートニクの恋』(1999年)を訳して、村上ブームの口火を切った。

日本文学研究は、ダニエラ・ヴァシッチ教授とダリボル・クリチコヴィッチ教授が加わり、新たな展開をみせている。両氏の修士論文、博士論文の指導は、今は嬉しい思い出となったが、修論の冒頭部分の指導には膨大な時間を費やした。私が論文の指導を受けた恩師のペトコヴィッチ教授が脳溢血で倒れて、入院なさっていた。夕方遅くまで研究室で朱筆を入れて、そこから病院にお見舞いに行ったことを思い出す。書くということを伝える仕事は厳しいものである。教授はじきに逝去なさった。

ヴァシッチ、クリチコヴィッチ両氏とも優れた研究者、信頼される教師として成長した。博士論文を書き終えた私に、ペトコヴィッチ教授が「あなたは私の作品だ」とおっしゃったが、両氏は私の作品である、と言ってみても二人とも怒ったりしないだろう。でもこの場合は、「青は藍よりいいで藍より青し」である。

ヴァシッチ氏は、セルビア口承文学と日本の古典文学との比較研究を中心に活躍している。修士論文「古事記における変化のモチーフ——セルビアの口承文学との比較考察」(Motiv metamorfoze u delu Kodiki – tipološka paralela u poređenju sa srpskom narodnom književnošću, 2006) は、『太陽と剣』(*Sunce i mač – Japanski mitovi u delu Kodiki*, Beograd, Rad, 2008) として刊行された。博士論文「日本古典文学におけるジャンルとしての物語——セルビア口承文学との比較考察」(Žanr monogatari u starojapanskoj književnosti, sa posebnim osvrtom na Taketori monogatari, u poređenju sa srpskom narodnom prozom, 2013) は、『竹取物語——日本文学における口承文学と記載文学』(*Mesečeva princeza – Usmeno i pisano u japanskoj drevnoj književnosti*, Beograd, Tanesi, 2013) として刊行され、ベオグラード大学の優れた研究書に与えられるヴェセリン・ルキッチ賞を受賞した。

クリチコヴィッチ氏は、修士論文「芥川龍之介の初期の作品におけるインターテクスチュアリティ」(Intertekstualnost u delima iz prve razvojne faze Rjunosukea Akutagave, 2006) で芥川短編小説における引用を研究した。新しい文学理論を駆使しての新鮮な仕事である。博士論文「夏目漱石と禅仏教」(*Soseki Nacume i zen budizam*, 2011) は、おびただしい数の文献を読みこなし、夏目漱石の生涯と作品を有機的に考察した労作である。田中氏寄贈の岩波の漱石全集を隅々まで読破した。漱石の生涯を描いた部分は、生き活きと書かれて小説のようだ、と文学批評家であり哲学者のサーシャ・ラドイチッチ氏は評した。詳細な年譜的研究とテキスト分析を総合した方法も、文学理論の専門家アドリアーナ・マルチェティッチが高く評価した。文学のテキストの外と内を統合した仕事である。『禅仏教と日本の近代文学』(*Zen budizam i japanska moderna*, Beograd, Albatros plus, 2014) として刊行され、多くの読者を得ている。文学のみならず東欧で数少ない仏教研究者として活躍が期待される。

わけても前述の末木文美士著『日本宗教史』(*Istorija japanske religije*, Beograd, Albatros Plus, 2016) のセルビア語訳は労作である。クリチコヴィッチ氏は、セルビア語の読者のために薫り高い序文を寄せ、本文には詳細な註を数多く施し、素晴らしい書物となった。クリチコヴィッチの序文には、セルビアがギリシャ正教の文化圏に属することを考慮し、日本におけるロシア正教の布教についても詳し

く述べられている。末木教授の原書には正教については言及がないので、セルビアの読者には貴重な序文である。ラジッチ氏の『禪』から30年ぶり、日本の宗教に関する研究書がセルビア語で刊行されたことの意義は計り知れない。世俗の歴史をも視野に入れ、仏教、神道、さらにキリスト教の関係を精確に描写し、日本宗教の歴史の深層のダイナミズムを鮮やかに示す末木教授の本書は、日本学研究者だけではなくセルビアの多くの読者にとっても魅力的な書物となった。これから日本について学ぼうとするセルビア語圏の人々にとっての必読書となるであろう。

*

2005年に行われたボローニャ協定による改革のあと、単位制度の導入に伴って、膨大な書類を書く仕事が増え、事務に関する教師の負担は計り知れない。しかしカリキュラムを刷新することで日本文学講座にも新しい風を吹き込むことになった。3年前からヴァシッチ氏は古典文学の講座を、クリチコヴィッチ氏は中世文学の一部と近代文学の講座を受けつぎ、それぞれの個性ある講義が行われるようになった。それまで私が一人で通史を講義していたが、新しい力が日本文学の魅力を瑞々しく伝えている。

私は、美意識の変遷と時代の概観、韻文、近世文学を担当し、現代日本語文法を著した後、久しぶりに日本語教育に加わり、読解のストラテジーを担当している。天気がよい春の日は、ときに学生公園で……。

日本学専攻課程の歴史は、バルカン半島に吹き荒れる戦争のなかで、数々の試練に出会いながらも、よき人々との出会いに恵まれてきた。ラジッチ氏が始められた日本学をこうして仲間たちと育んできたことは、なんとという至福であろうか。内戦、国家解体、空襲……。様々な混乱のなかで、遅々とした足取りではあったが、ラジッチ氏が私たちに残した日本学の芽は、青々とした木の葉をつけた若木に成長した。

2014年3月、国際日本文化研究センターから小松和彦所長、末木文美士教授、細川周平教授をお迎えし、東欧諸国からも新鋭の研究家たちを招き、研究会を開くことができた。2015年10月には、東欧諸国の研究家とともに、本大学に集い、池澤夏樹氏をゲストにお話を聴き、日本語教育に文学作品をどのように取り入れるかをテーマに語り合った。東欧で日本学に携わる仲間のネットワークが形を取りつつある。

最初に私が授業を行った教室は、イエローサブマリンというニックネームが

いた地下室の古びたランゲージ・ラボラトリーだった。その後、1987年1月14日、中曽根総理がユーゴスラビアを訪問、ベオグラード大学講堂で講演されたのをきっかけに、当時、最新式の立派なランゲージ・ラボラトリーを日本政府から寄贈していただいた。330号教室である。2012年にはJICAの支援で改装され、日本学のシンボルとなっている。2015年月に、本専攻課程は東京外国語大学のJAPAN GLOBAL OFFICEの薄紫のプレートを掲げ、新しい時代を迎えた。伊藤佑郎、沼野恭子、前田泉各氏が訪問、心に残る講演を企画させていただいた。当学科と活発な交流のある岡山大学も、当地に国際同窓会を開設した。

今、この文章を終わろうとするとき、リュブリャナ民族音楽研究所所長であったズマーガ・クームル博士の言葉を思い出す。引退を前に同僚たちにあてて彼女は手紙を書いた。「研究ということは、個人がやっているように見えてそうではない。共同作業なのだ。それをあなたたちは忘れないでください」と。ズマーガ先生は、リュブリャナで私が民謡のテキスト研究をしていたころの指導教官。研究ということが何かを教えていただいた。

日文研では、「セルビア・アヴァンギャルドと日本」をテーマに、ツルニャンスキーが編んだ『日本の古歌』(Miloš Crnjanski, *Pesme starog Japana*, Beograd, 1928)を中心として、これまでセルビア語で研究してきたものを日本語でまとめようと思う。今夏、日文研に到着して3日目に、ドイツの高名な日本研究者シャモニ氏にお会いした。ドイツ語に翻訳された日本語の俳句などについて、多くをご教示いただき、フローレンスの日本語の詩歌の翻訳本を図書館で見せていただいた。ちりめん本と呼ばれる珍しい書物である。書棚には、ヴォルフガング・シャモニ氏の数々の著作があった。そしてセルビア語訳の『古事記』も、同僚たちの著作も並んでいる。世界の研究者たちのつながりが、遠い国へ日本を伝え、また日本へ異国の文化の豊かさを届けている。研究者たちは、日本語という樹海のなかに棲む鳥たちの群であるかもしれない。ひとりひとりの仕事は、世界の日本研究という樹海のなかの樹木なのだとわかった。

付記

ベオグラード大学文学部では、20年を記念して研究会が行われたが、その際に論文集が刊行された。ラジッチ氏の生涯について記されているほか、東洋学科の司書スネジャナ・ゲンチッチ女史が作成した業績表も掲載されている。*Večna riznica: sećanje na Dejana Razića / priredili Kayoko Yamasaki i Radoslav Pušić. – Beograd: Filološki fakultet u Beogradu, 2007.*

07 ワルシャワ大学日本学科の歴史と研究

アグネシカ・コズイラ

日本研究の概略

19世紀中頃、日本の文化はフランスをはじめヨーロッパ中で注目をあびていた。ポーランドも例外ではなく、知識人は日本へ目を向けるようになり、その結果、日本をテーマとした小説や物語が相次いで出版されるようになった。なかでも、日本に関する著書を多数執筆したのは、ヴァツワフ・シェロシェフスキ氏 (Wacław Sieroszewski, 1858-1945) である。さらに日本文化の影響は、作家ステファン・ジェロムスキ氏 (Stefan Żeromski, 1864-1925) やノーベル文学賞受賞のヴワディスワフ・レイモンド氏 (Władysław Reymont, 1867-1925) の作品にも見られている。

1902年、プロニスワフ・ピウスツキ氏 (Bronisław Piłsudski, 1866-1918) が日本を訪問し、北海道などでアイヌの習慣や伝統を研究した。氏はアイヌ民謡などの録音をはじめ、貴重な資料を収集した民族学者として、日本でも知られている。

1816年に創設されたワルシャワ大学では、1919年7月、ボグダン・リヒテル氏 (Bogdan Richter, 1891-1980) が少数のポーランド人の学生を対象に日本語を教え始めた。それはポーランドにおける初の日本語講座であり、学生が選択できる科目を増やそうという改革への努力の成果でもあった。リヒテル氏は、戦間期に有力なアジア研究センターであったルヴフ大学 (現在のウクライナ、リヴィウ大学) で、教授資格取得論文審査に合格し、1924年、助教授に昇格した。1925年にワルシャワ大学に移り、1932年まで日本語教育と極東文化の研究を続けた。同氏は日本文化に関する著書を数多く出版したが、ポーランド語に翻訳された最初の日本文学断章や日本文学史概論などはとりわけ注目される。ポーランドにおける日本の知識普及のために大いに貢献した。リヒテル氏のもとで最初に日本研究課程を卒業したのはカミル・ゼイフリド氏 (Kamil Seyfrid, 1872-1960) であった。氏は日本文学の翻訳者として知られ、また氏の尽力により、ポーランド人日本学者の書籍文献が収集された。リヒテル氏の渡日後は、ヤン・ヤヴォルスキ博士 (Jan Jaworski) がワルシャワ大学における日本語教育を引き継いだ。ヤヴォルスキ氏は日本学者であると同時に、宗教学を専門とする中国学者でもあった。その後、1933年にワルシャワ大学を訪れた三井高治男爵の財政援助により、ワルシャワ

大学における日本学研究は著しい発展を遂げた。

ワルシャワ大学における戦後の日本研究の開拓者はヴィエスワフ・コタンスキ氏 (Wiesław Kotański, 1915-2005) である。ワルシャワ大学出身のコタンスキ教授は、1930年から日本研究を続け、長期にわたり日本学科の主任を務めた。同教授はワルシャワ東洋専門学校で日本語を習得した後、1945年に修士学位を、1951年に博士学位を取得し、1952年からは独立した日本学専攻の修士課程を指導する許可を得た。コタンスキ教授の尽力により、1956年、日本学科は完全に独立し、ワルシャワ大学の他の学科と同等の権利を取得した。同教授は多数の著作や翻訳を含む200以上の学術論文、一般教養書を刊行したが、その研究業績としては何よりも『古事記』のポーランド語訳 (*Kojiki*, Warszawa: PIW, 1981) が挙げられる。氏の『古事記』論はポーランドで注目され、古代日本語語源研究の主要な研究書として高く評価されている。また、ポーランド語で『日本の神々の遺産』 (*Dziedzictwo japońskich bogów*, Wrocław: Ossolineum, 1998) など、日本文明を分析、解説した書物を多数執筆した。日本語論文は、「日本の天地開闢説」(『神道及び神道史』42/43号、1985年)、「古代歌謡の解説」(『日本研究』17集、1998年)、「私の『古事記』研究をめぐって——『古事記』の中味に上代文化が映じてある」(『アジア研究所紀要』26号、1999年)、「新しい古事記研究」(『祖国と青年』250号、1999年)や『古事記の新しい解説』(松井嘉和編、錦正社、2004年)などが挙げられる。『万葉集』 (*Antologia dziesięciu tysięcy liści*) と題された日本古典文学選集は、学生に愛読され、ポーランド語による日本の古典文学入門として重要な書となっている。

1960年代以降に日本研究が著しい発展を遂げた理由は、日本との関係がより密接になったことにある。新任の日本人講師もポーランドで教鞭を執るようになり、米川和夫氏 (1929-82) が1967年まで、工藤幸雄氏 (1925-2008) が1974年まで日本語講師として勤務した。両氏とも優れたポーランド文学の翻訳家として知られている。その後、岡崎恒夫氏が仕事を引き継ぎ今日に至っている。岡崎氏はワルシャワ大学日本学科における日本語教育の発展を促進させた。また吉上昭三教授のご尽力により、ワルシャワ大学と東京大学との交流が盛んになった。

1970年代後半には東京大学と学術協定が結ばれ、また、国際交流基金の援助もあり、日本学科の卒業生たちは日本に留学できる機会を得た。東京大学および他の大学の教授もポーランドへ招聘され、日本語教育に携わるようになった。1970年代、日本学科のカリキュラムは、文学、歴史学、言語学の三つの専攻に分けられ、歴史学はヨランタ・トゥビエレヴィッチ教授 (Jolanta Tubielewicz, 1931-2003) (ワルシャワ大学東洋学研究所副所長、ワルシャワ大学新言語学部長も兼

任)、文学は主としてミコワイ・メラノヴィッチ教授 (Mikołaj Melanowicz) (ワルシャワ大学日本学科主任、ワルシャワ大学東洋学研究所所長も兼任) が担当した。

トゥビエレヴィッチ教授は古代を中心に日本史を研究し、教授資格取得論文として *Superstitious, Magic and Mantic Practice in the Heian Period* を提出している。また『日本の神話』 (*Mitologia Japonii*, Warszawa: Wydawnictwa Artystyczne i Filmowe, 1977)、『日本史』 (*Historia Japonii*, Wrocław: Ossolineum, 1984)、『日本考古学の発見と謎』 (*Wielkie odkrycia i zagadki japońskiej archeologii*, Warszawa: Trio, 1996)、『日本文化事典』 (*Kultura Japonii: Słownik*, Warszawa: Wydawnictwo Szkolne i Pedagogiczne, 1996)、『古代日本における男女関係』 (*Mężczyźni i kobiety w starożytnej Japonii*, Warszawa: Nozomi, 2000) などをポーランド語で刊行している。長きにわたり、ワルシャワ大学日本学科の主任を務めたクリスティナ岡崎氏 (Krystyna Okazaki, 1942-2008) は中江兆民研究について博士論文を提出し、『方丈記』などの日本文学のポーランド語訳を発表した。1997年に『日本芸術辞典』(共著、国際交流基金) を出した。

1980年には、東海大学と国際交流基金の協力のもと、ワルシャワ大学日本学科において国際シンポジウム「日本の現代社会・文化の中の人間」が開催された。また、1991年には日本学科が提唱し、吉上昭三教授や多くの個人賛同者の支援を得て、ポーランド日本学基金が設立された。翌1992年には共英製鋼株式会社の高島浩一社長 (1922-2000) からの寄付により、ワルシャワ大学日本学科内に高島基金が設立された。当時、駐日ポーランド大使として日本との交流の発展に奔走したヘンリク・リプシツ氏 (Henryk Lipszyc) (元日本学科講師) も、基金の設立に尽力した。高島基金はワルシャワ大学日本学科の発展を支え、ポーランドでの日本文化普及に大いに貢献している。同基金の支援のもと、日本学科は日本文化を紹介する独自の研究誌『ヤポニカ』 (*Japonica*) とシリーズ「日本文学図書館」の発行を開始した。

1994年11月、国際交流基金、在ポーランド日本大使館及びワルシャワ大学当局の協力を得て、日本学科はポーランドにおける日本語教育75周年を記念し、日本研究シンポジウムを開催した。参加者はヨーロッパ諸国の日本学研究者やワルシャワ大学の日本研究関係者で、かつて同大学で教鞭を執った日本人講師も多数参加した。

ワルシャワ大学の日本学科史上最も記念すべき出来事は、2002年7月の天皇皇后両陛下のご訪問である。同大学の学生や教員、関係者は両陛下の拝顔の榮に浴した。さらに2002年10月4日、長年にわたるポーランドでの日本研究と日本語

教育の推進、またポ日両国の文化交流および相互理解の促進への貢献をたたえ、国際交流基金よりワルシャワ大学日本学科に国際交流奨励賞が授けられた。2004年にはワルシャワ大学でヨーロッパ日本学協会（European Association for Japanese Studies, EAJS）の学術会議が開かれ、ヨーロッパ諸国をはじめ、日本、アメリカ、オーストラリアなどから650人の日本学研究者がポーランドを訪れた。当時ワルシャワ大学日本学科主任およびヤギェウオ大学日本学科主任でもあったミコワイ・メラノヴィッチ教授が、学会の組織委員会委員長を務めた。

学習プログラムと日本との交流

1980年代に新学習プログラムが導入され、日本学教育の水準は高まった。これは東京大学のスラブ・ポーランド言語学者である吉上昭三教授の尽力の賜物である。吉上教授は戒厳令が布かれた困難な時代に、2年間もワルシャワ大学で日本語教育を行ったのである。

現在の新教育プログラムは3年間の学部課程と6年間の大学院課程（修士課程2年、博士課程4年）に分けられている。学部課程は、日本語と日本文化の一般教養が十分に習得できるように、最初の2年間は漢字、会話、文法といった日本語の科目や、日本の歴史、文学、宗教、芸術、現代文化の入門講義を受講する。その後、学部課程の3年次に自ら選択したテーマに基づいて論文を書き、卒業時には学士号（BA）が与えられる。

修士課程は日本学科の学部課程を修了し、さらに専門の知識を深めようとする学生のために設立されたものである。2年間の課程修了後には修士号（MA）が与えられる。古典文学、現代文学、歴史学、宗教学、思想、言語学、美学などの幅広い選択肢から専門分野を選び、より深い研究を行うことが可能となる。また、日本語・ポーランド語間の翻訳・通訳能力の養成のため、会話などの日本語科目も必修となっている。修士論文は日本語の原書を基礎資料とすることが決まっている。

また、ワルシャワ大学日本学科は、東京大学、筑波大学、立教大学、神戸大学、学習院女子大学、信州大学など数多くの日本の大学と学術協定を結んでいる。

ワルシャワ大学における日本学研究者

ミコワイ・メラノヴィッチ教授（現在名誉教授）は日本の文学を研究し、安部公房や谷崎潤一郎の作品をはじめ素晴らしいポーランド語訳を数多く出版した。多くのポーランド人読者を日本文学の世界に導く『日本文学』（*Literatura Japonii*,

Warszawa: PWN, 1994-96 : 第1、2巻『日本の散文』、第3巻『日本の詩と演劇』)、『日本文学形態論』(*Formy w literaturze japońskiej*, Kraków: WUJ, 2003)、『日本文学におけるナレーション——日本現代作家の研究』(*Japońskie narracje. Studia o pisarzach współczesnej Japonii*, Kraków: WUJ, 2004)などを刊行した。教授資格取得論文は『谷崎潤一郎の作品における日本伝統の影響』(*Tanizaki Junichirō a krąg tradycji rodzimej*, Warszawa: Wydawnictwa Uniwersytetu Warszawskiego [以下WUWと略称]、1975)である。日本語では「谷崎潤一郎とヘンリック・シエンキエヴィッチの小説におけるエトス」(梅棹忠夫ほか編『知と教養の文明学』中央公論社、1991年)、「漂泊者萩原朔太郎」(国文学研究資料館『国際文学研究集会』1992年)、「大江健三郎と『万延元年のフットボール』の翻訳」(『群像』4号、1995年)、「安部公房——痛んだ文明のアレゴリーとアンチ・ユートピア」(『国文学——解釈と教材の研究』42巻9号、1997年)、講演記録「文学の役割と可能性、その破綻と救済のイメージ——安部公房と大江健三郎を中心に」(宮城学院女子大学『人文社会科学部論叢』2000年)などを執筆した。

ワルシャワ大学日本学科において日本語教育の発展を促進させた岡崎恒夫講師は日本語教授法を研究し、『漢字ノート』(共著、WUW、1981)や『漢字学習 第3級』(WUW、1981)、「ポーランドの日本語教育・日本研究」(『もっと知りたいポーランド』弘文堂、1992)を公表した。在日本ポーランド大使として日本との交流の発展のために奔走したヘンリック・リブシツ講師(現在定年退職)は日本の演劇を専攻し、「三島由紀夫の戯曲——わたしのビートルズ」(*Moi Bitelsi*, Warszawa: Dialog, 1998)のほか三島由紀夫、安部公房の小説や戯曲、佐藤誠の歌集など、多くの日本文学作品を翻訳して、雑誌『世界の文学』(*Literatura na świecie*, 1-2-3, Warszawa, 2002)に掲載している。

エヴァ・パワシュ=ルトコフスカ教授(Ewa Pałasz-Rutkowska)は近現代日本史を専攻しており、その博士論文は日本陸軍の真崎甚三郎と皇道派に関するものである(General Masaki Jinzaburō and the Imperial Way Faction, *Orientalia Varsoviensa* 4, 1990)。日本・ポーランド関係史の研究として『ポーランド・日本国交史1904-1945』(共著: *Historia stosunków polsko-japońskich*, Warszawa: Bellona, 1996、和訳『日本・ポーランド関係史』彩流社、2009)、『日本の対ポーランド政策1918-1948』(教授資格取得論文: *Polityka Japonii wobec Polski 1918-1920*, Warszawa: Nozomi, 1998)、“The Other in Intercultural Contacts: The Image of Japan in Poland at the End of the Nineteenth and the Beginning of the Twentieth Centuries and in the Interwar Period (on the Basis of Selected Publications)”(東

京大学社会科学研究所ディスカッションペーパーシリーズ、2001年)、「第二次世界大戦と秘密諜報活動——ポーランドと日本協力関係」(共著:『ポロニカ』5号、1994年)などを発表した。また『近・現代日本史』(with Katarzyna Starecka, *Japonia*, Warszawa: Trio, 2004)、共編『日本におけるポーランド人墓碑の探索』(*W poszukiwaniu polskich grobów w Japonii*, Ministerstwo Kultury i Dziedzictwa Narodowego, 2010)、『明治天皇——近代化する日本における君主像』(*Cesarz Meiji (1852-1912): Wizerunek władcy w modernizowanej Japonii*, WUW, 2012)などを出版した。氏の近年の日本語論文には「日本に眠るポーランド人たち」(『軍事史学』47巻3号、2011年)「講演 明治天皇、近代化する日本における君主像」(『神園』10号、2013年)、「ポーランド・日本間の国交回復問題——第二次世界大戦後の外交関係」(『日本歴史』806号、2015)などがある。

ロムアルド・フシチャ教授(Romuald Huszcza)(ワルシャワ大学ポーランド語学学部・一般言語学及び東アジア言語学学科)の日本語研究は、形態論、統合論、意味論、慣用句論(四字熟語や反義対語を含めて)を中心とする。クラクフ市のヤギェウオ大学の主任を務める同氏は、長年にわたって日本語のテーマ・レマ構造や敬語文法、漢語の問題(特に言語の多体系性および共体系性の立場からみた共時的接触の問題)、東アジア言語学とポーランド語との幅広い対照研究をしてきた。ポーランド初の日本語文法の大学教科書『日本語文法 解説と練習』出版プロジェクトをスタートさせ、自分の学生らとともに全3巻の第1巻と第2巻をすでに刊行している(*Gramatyka japońska. Podręcznik z ćwiczeniami*, vol.1, Warszawa: Wydawnictwo Akademickie Dialog, 1998, repr. Kraków: WUJ, 2003; vol.2, Kraków: WUJ, 2003)。日本語の敬語を一般言語学の検討からみた理論的モデルを、ポーランド語やその他の言語における類似現象の研究に適用した。このテーマに関するフシチャ氏の研究書『対偶法——文法論・実用論・類型論』(教授資格取得論文: *Honoryfikatywność - Gramatyka. Pragmatyka. Typologia*, Warszawa: Wydawnictwo Akademickie Dialog, 1996)はポーランドの言語学会に高く評価された。フシチャ氏は日本語学以外に中国語、韓国語、ベトナム語に関する論文をも公表しているが、特にポーランド語や一般言語学の研究においては日本語のデータを主な理論基礎にする傾向が著しい。現在、フシチャ氏は日本語文法のプロジェクトを行いながら、日本語、中国語、韓国語およびベトナム語という漢字文化圏の言語の共体系性および多体系性の研究成果である『自然言語における多体系性および共体系性——東アジア言語圏』(*Wielosystemowość i współsystemowość w językach naturalnych*)を準備している。

ベアタ・クビアク・ホ・チ准教授 (Beata Kubiak Ho-chi) は三島由紀夫をはじめとする現代文学と日本美学を研究して、「三島の謎——川端康成に宛てた三島の書簡」(Zagadka Mishimy: Listy do Kawabaty Yasunarięgo, *Japonica* 9, 1998) や「ラディゲの役割——三島由紀夫が古典主義的美学を身につけていく過程」(松本徹ほか編『世界の中の三島由紀夫』勉誠出版、2001年)などを発表した。博士論文のテーマは「三島由紀夫の小説や戯曲(1941-1960)における古典主義的美学」(*Mishima Yukio: Estetyka klasyczna w prozie i dramacie 1941-1960*, Kraków: Universitas, 2004)であった。また『日本の美学と美術』(*Estetyka i sztuka japońska: Wybrane zagadnienia*, Kraków: Universitas, 2009)、『文楽における悲劇性の表現』(*Tragicizm w japońskim teatrze lalkowym Bunraku*, WUW, 2011)という著書を刊行した。近年の論文には、“The Tragic in Japanese and Polish 18th-century Drama: ‘The Battles of Coxinga’ by Chikamatsu and ‘The Tragedy of Epaminondas’ by Konarski” (in *Aesthetics and Cultures*, ed. Krystyna Wilkoszewska, Kraków: Universitas 2013) や「笹野頼子作の『タイムスリップコンビナート』における現代東京の感情的な地形」(Afektywna topografia współczesnego Tokio w powieści Yoriko Shōno “Kombinat zakrzywionej czasoprzestrzeni” (Taimu surippu kombināto), *Teksty Drugie* 6, 2015) などがある。

イヴォナ・コルジンスカ・ナブロッツカ准教授 (Iwona Kordzińska-Nawrocka) は、日本文化、古文、平安文学を専攻し、『源氏物語における六条御息所の人物像をめぐって』(Warszawa: Wydawnictwo Akademickie Dialog, 1999) や「平安時代の貴族社会の愛と結婚」(Miłość i małżeństwo w arystokratycznym społeczeństwie okresu Heian, *Japonica Torumiensia* 2, 2001)、 「日記文学としての阿仏尼の『うたたねの記』」(Utatane no ki (Zapiski z drzemki) mniszki Abutsu jako przykład japońskiej średniowiecznej literatury pamiętnikarskiej, *Przegląd Orientalistyczny*, nr. 3-4, 2015) などの論文を発表した。出版された博士論文は『日本の王朝恋愛』(*Japońska miłość dworska*, Warszawa: Trio, 2005) である。また、『日本食文化』(*Japońska kultura kulinarna*, Warszawa: Trio, 2008) と『浮世、井原西鶴の作品における町人文化』(*Ulotny świat ukiyo, obraz kultury mieszczańskiej w twórczości Ihary Saikaku*, WUW, 2010)、『日本語の古典文法』(*Klasyczny język japoński*, WUW, 2013) を刊行した。日本文学の翻訳者でもあり、2011年に井原西鶴『好色一代女』と円地文子『女坂』を訳出している。

アグニエシカ・ジュワフスカ梅田氏 (Agnieszka Żuławska-Umeda) は、松尾芭蕉とその弟子の詩についての博士論文 (*Sztuka poetycka w szkole Matsuo Bashō*

1684-1694, Warszawa 2004) を完成した。すでに『俳句』(Haiku, Wrocław: Ossolineum, 1983)、『笈の小文、更科紀行翻訳解説』(Z *podróznej sakwy*, Warszawa: Sen, 1994)、宮本武蔵の『五輪書』(*Minamoto Musashi i Pięć Kęgów*, Bydgoszcz: Diamond Books, 2001) のポーランド語訳を出版している。また、“Issues Relating to Notes from The Hut of Delusion: Bashō’s Returns from his Wanderings” (*Analecta Nipponica* 3, 2012) と「歌枕からポーランドの俳句へ——原文と翻訳の文学的空間の共有をもとめて」(*Między polskim haiku a jego japońskim przekładem—w poszukiwaniu wspólnej przestrzeni kulturowej*, rozdział w języku japońskim, *Japonica Toruniensis* 3, 2014) という論文を執筆したほか、『桜と柳——ポーランド俳句集』(*Wiśnie i wierzby: Antologia polskiej szkoły klasycznego haiku*, Warszawa: Wydawnictwo Japonica, 2015) を編集、解説している。

カタジナ・スタレツカ氏 (Katarzyna Starecka) は日本の「国内冷戦」という政治的事情の起源と構造について博士論文 (Japonia między Wschodem a Zachodem- geneza wewnętrznej zimnej wojny 1945-1960) を提出した。また、「極東軍事裁判の法的基盤と組織」(Podstawy prawne i organizacja Międzynarodowego Trybunału Wojskowego dla Dalekiego Wschodu, *Japonica* 3, 1994)、「国際極東裁判の事後法論争」(Kontrowersje dotyczące prawa ex post facto w świetle Międzynarodowego Trybunału Wojskowego dla Dalekiego Wschodu, *Japonica* 4, 1995)、「日本政党制の分類試み」(Próba typologii systemu partyjnego lat 1955-1993, *Japonica* 10, 1999)、『近・現代日本史』(*Japonia*, with Ewa Pałasz-Rutkowska, Warszawa: Trio, 2004) を公刊した。そのほか、2015年には以下のポーランド語の論文を発表している。「現代日本の学校における道徳教育」(Wychowanie moralne we współczesnej japońskiej szkole, w: *Japonia ery Heisei – alienacje i powroty*, red. Katarzyna Starecka, Agnieszka Żuławska-Umeda, Warszawa: Wydawnictwo Japonica, 2015)、「日本における東京裁判の判決の受け止め方」(Japonia wobec werdyktu Trybunału Tokijskiego, w: *Wina i kara. Społeczeństwa wobec rozliczeń zbrodni popełnionych przez reżimy totalitarne w latach 1939-1956, Studia i materiały*, red. Patryk Pleskot, Warszawa: IPN, 2015)、「日本国民の誇りの復活の問題点」(Trudny proces wskrzeszania japońskiej dumy narodowej, *Azja-Pacyfik* 17, 2015)、「歴史的レガシーと日本の再アジア化の展望」(Historyczne zaszłości i perspektywy „reazjanizacji” Japonii, w: *Orient w poszukiwaniu tożsamości*, red. Agata Bareja-Starzyńska, Marek M. Dziekan, Warszawa: Polskie Towarzystwo Orientalistyczne, 2015)。英語論文としては、“The Problem of Patriotic Education in Modern Japan in Light of the Revision

of the Fundamental Law of Education” (in *Is the 21st Century the Age of Asia? Deliberations on Culture and Education*, ed. Joanna Marszałek-Kawa, Toruń: Wydawnictwo Adam Marszałek, 2012) などがある。

アンナ・ザレフスカ氏 (Anna Zalewska) の専攻は古典文学と伝統文化 (特に書道と茶道) であり、「小倉百人一首」や裏千家の大宗匠、千宗室の『茶の精神』をポーランド語に翻訳した。また、『日本の書道に関する三つの論』(*Kaligrafia japońska: Trzy traktaty o drodze pisma*, Kraków: Wydawnictwo Uniwersytetu Jagiellońskiego, 2015) を刊行し、最近の論文としては「鬼になった女について——日本文学における橋姫」(O kobiecie, która zamieniła się w diabła: interpretacje motywu hashihime w literaturze japońskiej, w: *Dwa filary japońskiej kultury: Literatura i sztuki performatywne*, red. B. Kubiak Ho-Chi, I. Rutkowska, WUW, 2013)、「狂言役者、茂山家——あるいは「お豆腐狂言」について」(Aktorski ród Shigeyama, czyli o tym, że kyōgen jest jak tofu, w: *Materialne i niematerialne dziedzictwo kulturowe Japonii*, red. Anna Zalewska, Urszula mach-Bryson, Warszawa: Wydawnictwo Japonica, 2014)、「短歌は必ず花や恋を歌うべきか——現代歌人俵万智の歌を巡って」(Czy wiersze tanka muszą mówić o kwiatach i miłości? O twórczości współczesnej poetki, Tawary Machi, w: *Alchemia słowa i obrazu: Tradycje, dekonstrukcje i rekonstrukcje*, red. Agnieszka Żuławska-Umeda i Katarzyna Starecka, Warszawa: Wydawnictwo Japonica, 2015) などがある。

ウルシュラ・マッフ＝ブライソン講師 (Urszula Mach-Bryson) は日本の思想・茶道史研究者で、裏千家学園において茶道を学び、ポーランド人として初めて坐忘齋お家元 (第16代千宗室) より茶名「宗宇」を授けられた。現在、久松真一について博士論文を書いている最中である。藤井カルボルク陽子講師 (Yoko Fujii-Karpoluk) は早稲田大学で修士号を取得した後、日本学科で日本語を教えるようになった。博士論文執筆中で、「能における戦争と鎮魂」を中心に研究を進めている。

本文著者のアグネシカ・コズィラ (Agnieszka Kozyra) は日本の哲学・宗教史を専攻し、内村鑑三の日本的キリスト教に関する博士論文 (*Samurajskie chrześcijaństwo*, Warszawa: Wydawnictwo Akademickie Dialog, 1994; 和訳『日本と西洋における内村鑑三』教文社、2001年) を出版した。また、“Eastern Nothingness in Nishida Kitarō and Linji” (in *Logique du lieu et dépassement de la modernité*, vol.1, dir., Augustin Berque, Bruxelles: Ousia, 1999) や“The Affirmation of Ordinary Mind (Byōjōshin) in the Landscapes of Sesshū Tōyō (1430-1506)” (in *Aesthetics and*

Cultures, 2012)、 “Zen Influence on Japanese Dry Landscape Gardens” (in *Art of Japan, Japanisms and Polish-Japanese Art Relations*, ed. Agnieszka Kluczevska-Wójcik and Jerzy Malinowski, Toruń: Tako, 2013) などの論文を発表した。2004年に西田幾多郎哲学から見た禅の思想的伝統について教授資格取得論文『禅の哲学』(*Filozofia zen*, Warszawa: PWN, 2004) を刊行したほか、親鸞の『歎異抄』、西田幾多郎の「経験科学」、「場所的論理と宗教的世界観」、「絶対矛盾的自己同一」、有吉佐和子の『恍惚の人』などのポーランド語訳を刊行した。また、『西田幾多郎の無の哲学』(*Filozofia nicości Nishidy Kitarō*, Warszawa: Nozomi, 2007) を刊行し、それに基づいて日本語論文「パラドックス的ニヒリズム——西田とハイデッガー」(『日本研究』33集、2006年) と英語論文 “Nishida Kitarō’s Logic of Absolutely Contradictory Self-Identity and the Problem of Orthodoxy in Zen Tradition” (*Japan Review* 20, 2008) を発表した。また著書『禅の美学』(*Estetyka zen*, Warszawa: Trio, 2010) と『日本の神話』(*Mitologia japońska*, Warszawa: Szkolne, 2011) も出版している。

ワルシャワ大学日本学科図書室

日本学科の図書室は、国際交流基金、トヨタ基金、甲府ロータリークラブ、日本・ポーランド協会、三菱商事株式会社、講談社、小学館、ワルシャワ日本商工会および多くの個人寄贈者の方々の支援により、蔵書を充実させてきている。中曽根康弘元首相、海部俊樹元首相、立入広太郎教授、また、ワルシャワ大学の元日本語講師諸氏も蔵書拡大に大いに貢献した。1983年には、日本政府よりAV機器やLL教室が寄贈された。これらの援助がなければ、同学科の日本学教育の水準は現在ほど高くなってはいなかったと思われる。長年にわたり、日本学科の入学募集は隔年であったが、現在は毎年入試が行われており、学生数は全学年で200名前後にまで増えた。

1994年、ワルシャワ大学の日本語教育75周年を記念して、日本学科は日本出版クラブから書籍の寄贈を受けたが、これは岡田吉弘会長の助力によるところが大きい。また、2004年に行われたヨーロッパ日本学協会 (European Association for Japanese Studies, EAJS) の学術会議を機に、出版文化国際交流会からも書籍の寄贈を受けるようになった。

三井物産冠講座の趣旨

2010年7月、三井物産株式会社榎田会長のポーランド訪問の際、楠本祐一在泊

ーランド日本国大使（当時）との会食の席において、優秀人材育成及び日本理解を深める社会貢献活動として、同大使より冠講座に対し多大なる関心が寄せられた。その後、在ポーランド日本国大使館および三井物産ワルシャワ支店にて検討を重ねるとともに、ワルシャワ大学日本学科長のエヴァ・パワシュニルトコフスカ教授（当時）の同意を得て、日本の伝統文化・精神性に対する関心が極めて高い親日国であるポーランドでの冠講座の開講が決定された。

ワルシャワ大学は長い歴史と伝統を持つ、ポーランド国内随一の名門大学として知られており、長きにわたる日本文化研究の歴史を有する。同冠講座は、ポーランドの若手人材育成と日本への関心を高める講座内容を目指しており、これまでに以下の講座が開催されてきた。

- 2011年第1回 「歴史と冒険のシンクロニシティー 『天の原』歌をめぐって」
辻原登（芥川賞作家）
- 2011年第2回 「3月11日以後の日本文学」平野啓一郎（芥川賞作家）
- 2012年第1回 「『はやぶさ』が挑んだ世界初の往復宇宙旅行とその7年間の歩み」川口淳一郎氏（JAXAプロジェクトマネージャー）
- 2012年第2回 「変わる日本の女性の役割」坂東眞理子（昭和女子大学長）
- 2013年第1回 「波打ち際の文学」松浦寿輝（詩人、芥川賞作家）
- 2013年第2回 「小説を書き続けることについて」綿矢りさ（芥川賞作家）
- 2014年第1回 「禅と日本庭園」柘野俊明（禅僧、庭園デザイナー）
- 2014年第2回 立川志の春氏（落語家）
- 2015年 近藤麻理恵氏（片づけコンサルタント）

2011年度は主に日本学科の学生が対象とされたが、2012年度からは日本学科の学生のみならず、学内横断的に、より幅広い層が聴講できるように同時通訳付であった。これは、ポーランドの現場で日本社会・文化を発信することにより、日本理解の深化を図り、両国友好のさらなる発展と交流拡大に寄与できる人材を育成することを目指す、冠講座の趣旨と合致するものである。

2012年度の第2回で当初予定されていた2年間の講座は終了したが、過去4回の講演は安定して多数の参加者を集め、熱心な聴講に続いて意欲的に質疑応答が展開される等、毎回大盛況であったこと、また、ワルシャワ大学と三井物産も講座を通して相互理解によって良好な関係を構築できたことをふまえて、引き続きポーランドにおける日本の存在感及び可視性の向上、親日層の拡大、知日派の育

成を目的に、新たな3年間の取組みが決定された。

高島記念基金

高島記念基金は、日本政財界の要人であった高島浩一氏によって1992年9月2日に創設された。高島氏は、父君の秀次氏とともに1947年に設立した共英製鋼株式会社の会長を務め、戦争で破壊された祖国の冶金産業の改善に大いに貢献したが、本業以外にも慈善福祉活動に積極的に参加し、国内外の学術組織を支援した。ポーランドの真の友として、1996年から2000年まで戦後初の在大阪ポーランド共和国名誉総領事を務め、両国間の政治・経済・科学・文化交流を積極的に奨励した。

高島記念基金は、1993年に基金登録され、ワルシャワ大学東洋学部日本学科付設の基金として活動を開始した。その事業目的は、ワルシャワ大学における日本の歴史、文化、文学と言語の研究、そして経済学、社会学、政治学などのテーマを含む現代日本関連課題の研究、さらに日本語教育活動の支援である。その他、高島記念基金はポーランドにおける日本文化の普及、そして両国間の学術協力と文化交流の活性化にも貢献している。高島記念基金は、非営利活動を旨とし、学術専門誌『ヤポニカ』の定期刊行（1994～2003年）を含む、日本文化に関連する研究論文の出版支援、奨学金の提供、日本語教育への支援、さらにワルシャワ大学日本学科の学生の研究・言語合宿への資金補助、および図書・教材の補充などを通し、事業目的を遂行している。高島記念基金は、ワルシャワ大学日本学科以外での日本文化の普及を目的とする活動も援助している。

1995年2月22日、高島浩一氏は、そのポーランドにおける日本研究発展支援への貢献に対し、ポーランド共和国大統領より「ポーランド共和国黄金功労勲章」を授与された。高島氏は生前、常にワルシャワ大学日本学科に心を寄せ、個人的にも、日本学科の学生・教員の利用に供する、日本研究に不可欠な多くの書籍を寄付してきた。日本とポーランドの友情のしるしとして1998年に高島氏より寄贈され、ワルシャワ大学国文学部の裏庭に植えられた桜の苗木100本は大きく成長し、毎年きれいな花を咲かせている。

高島氏は、他にも多くの企画を考えていたが、突然の他界により中断されてしまった。しかし、ポーランドにおける日本文化の普及と、日本・ポーランド間の関係を深めるという遺志は、氏の令妹高島和子氏（2002～2012年、在大阪ポーランド共和国名誉総領事）と令弟高島成光氏、そして令息高島秀一郎氏に引き継がれた。そして、その遺志は、日本の数寄屋造りの専門家が伝統的な大工技術を駆

使してワルシャワ大学図書館内に建てた「懷庵」という茶室として見事に具現されている。茶室建築は高島浩一氏の発案ではあったが、その実現には、ワルシャワ大学日本学科を支援し続ける高島家の方々や共英製鋼株式会社の方々が多数関わった。高島記念基金は、その創設者の遺志を継ぎ、事業目的を遂行し続けているのである。

「懷庵」茶室

2004年10月19日、2年半にわたる準備、建築を経て完成した「懷庵」の茶室開きが行われた。

「懷庵」は小間、四畳半、水屋、腰掛待合、露地一式から成っており、ワルシャワ大学新図書館2階に建設された。設計は飯島照仁氏、施工は京都数寄屋建築「工匠 すゞき」が担当し、茶室の道具類は、現在も日本学科の茶道指導に貢献し続けている杉本みちる教授の寄付によるものである。茶室名「懷庵」は、高島浩一氏の崇敬した京都圓通寺の北園文英老師の命名で、扁額の揮毫も老師であった。これはポーランド初の本格的茶室で、日本・ポーランド間の文化的、人的交流の場として、大いに活用されている。2007年6月に初めてポーランドを訪問した茶道裏千家千玄室鵬雲斎大宗匠をはじめ、茶道の流派を問わず、多くの方々が茶室を訪ね、両国文化の相互理解にさらに寄与している。また、千玄室大宗匠の訪問の際には日本学科の授業の一環として茶道コースが新設された。「懷庵」は、ポーランドにいながらにして、日本伝統文化に親しみ、実際に触れながら学びを深められる恵まれた機会と場所を提供している。

2016年は、ワルシャワ大学日本学科設立60周年を迎える節目の年であった。日本学科の代表としてその発展に貢献して下さったの方々に心より感謝申し上げる。

08 カザフスタンにおける日本研究

——現状と課題——

アンダソヴァ・マラル

はじめに

カザフスタンというと、もっとも古い交易路とされるシルクロードが思い浮かぶ人が多いだろう。カザフスタンの草原（ステップ地帯）は紀元前4世紀からスキタイや匈奴といった多くの遊牧民（騎馬民族）が住み、東西の文化交流の役割を担っていた地域だったといえるだろう。

こうした文化的背景の中で、15世紀末にカザフ・ハン国が形成するが、18世紀からロシア領となっていく、1920年にソビエト連邦に編入されていく¹。ソビエト連邦崩壊後、1991年12月16日にカザフスタン共和国として独立し、1991年12月21日に独立国家共同体（CIS）に加盟している。

現在のカザフスタンはユーラシア大陸の中心に位置している、世界第9位の広大な国土面積（2,717,300km²）を有している国である。人口は16,967,000人であり、ロシア人、ウクライナ人、タタール人など100ほどの諸民族から形成されている。カザフスタンは中央アジアにおける多民族、多宗教国家として、日本からも注目されるようになってきているのである。

日本との外交関係は、独立翌年の1992年1月26日に樹立されている。翌1993年1月20日に旧首都アルマトイに在カザフスタン日本大使館が開設された²。

独立後のカザフスタンでは、技術国家としての日本への関心が極めて高く、新首都アスタナの設計図は日本の建築家、黒川紀章によってつくられたものである。また、両国においてお互いの国の文化を紹介するコンサート、展覧会、スポーツイベント、シンポジウムなどの催しが開催され、文化的、学術的交流が行われてきている。こうした中で技術やロボットに関心を持つ若者のみならず、日本の伝統文化に興味を持つ人も増えてきているのである。このようなカザフスタンでは日本研究はどのように行われているのか、本稿において概観する。

1 カトリーヌ・ブジョル『カザフスタン』宇山智彦・須田将訳、白水社、2006年。

2 2005年1月1日、カザフスタンの遷都により、日本大使館はアルマトイからアスタナに移転した。その時に開設されたアルマトイ出張駐在官事務所は2014年1月1日に閉鎖している。一方、在日カザフスタン大使館は1996年2月22日に開設している。在カザフスタン日本大使館ホームページ。（<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/kazakhstan/data.html#section3>）

1. カザフスタンの日本研究の第一期——ソビエト連邦の時期（1920～1991）

ソビエト連邦の時期、カザフスタンには日本語・日本文化を学ぶ高等教育機関はなかった。そのため日本語学習、日本研究を行うためにロシアにある高等教育機関に留学するしか方法はなかった。

ロシアにおける日本研究は18世紀に始まり、ソビエト連邦成立以前（18～20世紀初頭）、ソビエト連邦の時期（1920～1991）、ソビエト連邦崩壊後（1991～現在）はそれぞれ性格を異にしつつ、さかんに行われている。日本研究を代表する高等教育機関は、モスクワ国立総合大学付属アジア・アフリカ諸国大学、サンクトペテルブルク国立総合大学、極東国立総合大学などがある³。

2. カザフスタンにおける日本研究の第二期——独立後（1991～現在）

日本語学習・教育

1992年1月のカザフスタンと日本の外交関係樹立から間もなく、日本語教育が相次いで始まった。同年9月アル・ファラビ名称カザフ民族大学東洋学部極東学科において日本語部門が開設され、A. A. カマルディノフ講師、H. Okawa講師の指導のもと、日本語教育が行われ、翌1993年にアブライ・ハン名称カザフ国際関係外国語大学において東洋学部極東言語学科日本語部門も設置された。

2016年7月現在、日本語を主専攻とする大学は、上記のカザフ民族大学、カザフ国際関係外国語大学の他に、首都アスタナにあるL. N. グミリョフ名称ユーラシア国立大学国際関係学部東洋学科の3校である⁴。カザフ民族大学において主専攻（第一外国語）、カザフ国際関係外国語大学、ユーラシア国立大学において主専攻、選択科目（第二外国語）として日本語が教えられている。

2007年9月にカザフ国立大学において、日本語専攻の大学院修士課程が設立され、2012年に東洋歴史コースから博士課程への進学者が1名、2014年にも1名が認められている⁵。日本語コースが設立された当初は日本語教育が中心となってい

3 矢沢理子「ロシアの日本語教育事情——その伝統的授業理論と現在の動向をめぐって」『日本語教育学会秋季大会予稿集』京都外国語大学、1996年10月、エカテリーナ・レフチェンコ「ロシアにおける日本研究の過去と現在」『世界の日本研究 2014』国際日本文化研究センター、2015年。

4 2009年度までカザフ経営経済戦略大学（KIMEP）とアバイ名称カザフ民族教育大学においても日本語教育が行われていたが、現在は行われていない。また、第二外国語コースがあったカザフ民族大学国際関係学部においても2013年度夏に閉講された。

5 カザフ民族大学東洋学部極東学科紹介文章。カザフ民族大学東洋学部極東学科所蔵。

たが、近年、歴史、宗教、文化という幅広い分野へと関心が広まっている。また、スレイメノフ名称東洋学研究所にも東洋学の一つとして、日本研究がスタートしている⁶。政治学、社会学という幅広い視座からアプローチがされている。

留学に関しては、カザフ民族大学、ユーラシア国立大学は大学間交流協定などにより、筑波大学、北海道大学、東京外国語大学、早稲田大学などと毎年2～10名程度の交換留学を行っている。

大学教育以外に、2002年よりアルマティにカザフスタン日本人材開発センター（日本センター）が創設され、初級・中級のレベル日本語コースが開設されている。年間を通じて約400名近くが受講している。また、2006年より首都アстанаでも日本語コースが開かれており、年間約100名が受講している⁷。

また、日本センター及び日本語教育を行っている大学では、日本大使館の協力のもと、毎年、茶道、書道、和紙づくりなど、学生、受講者向けの日本文化ワークショップが開催されている。さらに、日本語学習推進のため、日本大使館、国際交流基金の協力のもと、日本語弁論大会が毎年カザフ民族大学、カザフ国際関係外国語大学で相互に開催されている。カザフスタン全土の日本語学習者及び教員の交流の場となっているのである。

以上に見てきたように、カザフスタンでは日本語を主専攻とする大学は全国で3校あり、また大学以外に日本センターなどにおいて日本語教育もおこなわれている。高等教育機関のみならず、幅広い層へと日本文化を伝えるための事業のため、日本への関心が増してきている。

だが、高等教育機関においても独立した日本語学科というものがなく、東洋学・東洋言語学の一部として日本語教育が行われている。また、研究機関においても、日本研究は東洋研究の一部として行われているのが現状である。

日本研究

高等教育機関においては、日本語教育、日本語、日本文化に関する研究が行われてきている。カザフ語・日本語辞書の作成などがその代表的な研究成果である。また、政治史、現代史、社会史の視点から日本と中国、日本と韓国という交流及

6 スレイメノフ名称東洋学研究所ホームページ (<http://www.invest.kz/struct/east/>)。

7 国際交流基金『2014年海外日本語教育機関調査』(<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/kazakhstan.html>)。上記コース以外には、アルマトイ市内において、民間学校1校で日本語が教えられている。さらに、地方都市においても自主的に日本語を学習する例が見られる。

び問題に関する学位請求論文も執筆されている。こうした研究成果は、大学教育の教材の作成にも反映されている。以下は具体的な事例を紹介していきたい。

①辞書類⁸

Ш. Т. Сауданбекова, А. М. Нурелова, А. Т. Мухаметрахимова, Айки Каё Тілашар. *Жапон, қазақ, орыс, ағылшын тілдерінде* (慣用句集——日本語・英語・ロシア語・カザフ語), Алматы: Қазақ университеті, 2015.

Ж. Б. Амантай, С. И.Кадикова, Б. К.Акын, А. Сайто, А. Хасимото, Т. Ивагаки. *Жапонша-Қазақша саяси-экономикалық терминдер сөздігі* (カザフ語・日本語政治・経済用語辞典). Алматы: Қазақ университеті, 2015.

②博士学位請求論文⁹、学術著書

О. Б. Дуйсебаев. «Политические аспекты казахстанско-японских отношений (日本とカザフスタンの政治交流の аспекты)» Алматы, 2002.

Д. В. Козельский. «Исторические аспекты современных проблем в корейско-японских отношениях (現代における日本・韓国問題の歴史的背景)» Алматы, 2005.

Н. Ж. Шаймарданова. «Демократизация политической системы Республики Казахстан и Японии: сравнительный анализ (カザフスタンと日本の政治システムの民主化——比較分析)» Алматы, 2008.

Ж. Е. Ашинова. «Япония - КНР: динамика развития политико-экономических отношений (1949–2009 гг.) (日本と中国——政治及び経済交流の推進 (1949–2009))» Алматы, 2009.

アンダソヴァ・マラル 『古事記 変貌する世界——構造論的分析批判』(原文日本語) 佛教大学研究叢書21、ミネルヴァ書房、2014.

8 カザフ民族大学図書館所蔵。東洋学部教員出版物紹介HP (<http://pps.kaznu.kz/ru/Main/ChairPublications/96/0/>)。

9 カザフ民族大学図書館所蔵。図書館HP (<http://elibrary.kaznu.kz/ru/>)。

③教材¹⁰

- С. Т. Абдумомунова. *Типовая учебная программа курса "История религий Японии"* (「日本宗教史」教材). Қазақ университеті, 1998.
- С. Т. Абдумомунова. *Типовая учебная программа курса "История культуры Японии"* (「日本文化史」教材). Қазақ университеті, 1999.
- Ж. Е. Ашинова. *История взаимоотношений Японии и КНР* (日本・中国交流史). Қазақ университеті, 2012.
- У. А. Амирбекова. *Minna no Nihongo I, II Аударма және грамматикалық түсіндірме* (みんなの日本語初級1 翻訳・文法解説カザフ語版2). Қазақ университеті, 2013.
- С. К. Боранкулова, *Көпшілікке арналған жапон тілі. Аударма және грамматикалық түсіндірме. 2-бөлім* (みんなの日本語翻訳・文法解説カザフ語版2). Қазақ университеті, 2013г.
- Ж. Е. Ашинова. *Политическая модернизация Японии и Республики Казахстан* (日本・カザフスタンの政治的近代化), Қазақ университеті, 2014.

④學術雜誌¹¹

カザフ民族大学において1997年以降『カザフ民族大学紀要 東洋学叢書』という東洋研究関連の學術雜誌が出版されている。雜誌では大学院生及び大学教員の研究成果が発表される形をとっており、現在50件以上の論文が確認できている。その他にも『歴史叢書』、『教育叢書』にも論文が多数報告されている。以下、研究テーマに分けて具体的に紹介する。

政治、社会、歴史、宗教について

- Л. Д. Нурсейтова. «Роль женщин в японском обществе (日本社会における女性の役割).» Вестник КазНУ, серия востоковедения (カザフ民族大学紀要 東洋学叢書). 2012, №1.
- Ж. Е. Ашинова. «Полиическое сознание японцев как механизм реализации политической модернизации в Японии (政治的近代化を実現するメカニズム

10 カザフ民族大学図書館所蔵。東洋学部教員出版物紹介HP (<http://pps.kaznu.kz/ru/Main/ChairPublications/96/0/>)。

11 カザフ民族大学図書館所蔵。東洋学部教員出版物紹介 (<http://pps.kaznu.kz/ru/Main/ChairPublications/96/0/>)。WEB閲覧可能の論文が多い。

としての日本人の政治的認識)» Вестник КазНУ, серия историческая (カザフ民族大学紀要 歴史叢書). 2014, №2.

Л. Т. Балакаева. «Религиозная ситуация в Японии в период правления династии Токугава (1603–1867 гг.) (徳川十五代における宗教事情 (1603–1867) . » Вестник КазНУ, серия востоковедения (カザフ民族大学紀要 東洋学叢書). 2014, №2.

Ш. Т. Сауданбекова. «Феномен сёгунской власти в средневековой Японии (中世日本における将軍政権)» Вестник КазНУ, серия востоковедения (カザフ民族大学紀要 東洋学叢書). 2014, №3.

日本語学習、言語と文化について

Г. Н. Бахаутдинова. «Аниме и манга - методы изучения японского языка (アニメと漫画——日本語学習の方法として)», Вестник КазНУ, серия востоковедения (カザフ民族大学紀要 東洋学叢書). 2011, №4.

Ж. Б. Амантай. «Концепт семья казахской и японской лингвокультурах (カザフ語及び日本語における家族コンセプトについて)» Японский язык в вузе (大学における日本語). 2012, №8.

А. Н. Бекебасова. «A research agenda for contrastive analysis of Japanese and Kazakh: The case of grammar and pragmatics (日本語とカザフ語の対比的分析—文法と実用)» Вестник КазНУ, серия востоковедения (カザフ民族大学紀要 東洋学叢書), 2015, №4.

М. Т. Шадаева. 「依頼行為における格下げの範疇の築：カザフ語に適した範疇の場合」(原文日本語), Вестник КазНПУ им. Абая, серия "Педагогические науки" (カザフ民族教育大学 教育叢書). 2015, №4.

А. М. Токкарина. «Жапон жазуындағы иерегліфтердің қазіргі кездегі жағдайы (現代における日本語の漢字の事情)» Вестник КазНУ, серия востоковедения (カザフ民族大学紀要 東洋学叢書). 2016, №1.

結びにかえて

以上に見てきたように、カザフスタンでは日本との文化交流が図られ、日本語教育がさかんに行われてきている。

日本語教育が始まった当初は言語教育が中心であったが、近年は歴史、社会、宗教、言語、文化という幅広い分野へと関心がシフトしていることが見えてくる。

また、大学院への進学が可能になったこと、東洋学研究所において日本研究がスタートしたことなど、言語教育のみならず、日本研究そのものを形成し、向上させていく試みが見える。こうしたなか、カザフスタン大学の大学院生及び教員によって、カザフ・日本語辞典、学術論文、教材などの研究成果が発表されている。

だが、高等教育機関において独立した日本語学科というのがなく、東洋学・東洋言語学の一部としての日本語教育が行われている。また、研究機関においても、日本研究は東洋研究の一部としてしか行われていないのが現状である。

独立した日本学を形成すべく、カザフスタンは国際的な広がりの中なかで、日本研究の歩み及び成果を学ぶ必要があるだろう。ロシア語圏、及び英語圏における日本研究へと視野を広げ、また日本とも学术交流を推進することが今後の大きな目標となっていると言えるのである。

09 ロシア、ブリヤート国立大学における 日本語・日本文化の教育の現状

ボトーエフ・イーゴリ

ロシア全体の日本研究の歴史と現状に関しては、『世界の日本研究2014』においてエカテリーナ・レフチェンコ氏の「ロシアにおける日本研究の歴史と現在」というレポートが紹介している。本報告では、ロシア国内の一つの東洋学の拠点である、ブリヤート国立大学の制度に基づいて、現在のロシア連邦の大学における日本語・日本文学・日本文化の教育制度の特徴について述べる。

ブリヤート国立大学 (Buryat State University) の始まりは、全シベリアの小・中・高等学校の教員養成を目的として、1932年設立のブリヤート国立教育大学に遡れる。今現在のブリヤート国立大学は、「教育大学」の狭い範囲を超えて、13の学部、3の分校と1の専門学校から成る、典型的な総合大学となっている。その13の学部のなかで、最も新入生の人気を集めているのは東洋学部だと言っても過言ではない。その人気の理由は様々ある。まずは、地政学的な要因である。ブリヤートは歴史的に西洋文明と東洋文明が接触する地域に位置して、ヨーロッパやロシアなどの多くの東洋学者にとって、古くから数多くの探検の出発点であった。もう一つの重要な理由はブリヤート人の民族的属性にあると考えられる。ブリヤート人は大きなモンゴル民族の一つの部族であり、ロシア人の東洋学者は、18世紀からブリヤートの居住地をモンゴル研究の拠点にしていた。モンゴル学のブリヤート派こそが、現在のブリヤート国立大学東洋学部の基盤を作った人々であった。

現在の東洋学部は、ブリヤート語講座、ブリヤート文学講座、シベリア少数民族語講座、極東地域文学講座、中央アジア文学講座、アジア地域学講座という、6つの講座から成る。学生はここで、モンゴル語をはじめ、ブリヤート語、日本語、中国語、韓国語、トルコ語、チベット語、エヴェンキ語を学ぶことが出来る。選べる専攻としては、言語学専攻、文学専攻、地域学専攻と観光学専攻が設置されている。

日本学科は極東地域文学講座に所属し、学科の教員構成は以下のとおりである。

1. Zhantsanova Marina氏 (准教授、現代日本文学 [宮本輝] 研究)
2. Botoev Igor氏 (准教授、日本文学の翻訳と異文化コミュニケーションの諸問題)

3. Marheeva Tuyana氏（講師、現代日本語固有名詞の研究）
4. Badmadorzhieva Vera氏（助教、日本の民話伝承の研究）
5. Sedenjab氏（外国人講師、プリヤート語と日本語助詞の比較研究）
6. 尾上慶子氏（外国人講師、日本語会話の教授方法の研究）

2016年現在の学生数は37名である。ロシアの東洋学の名門モスクワ国立大学、サンクトペテルブルグ国立大学と極東連邦大学（ウラジオストク市）の東洋学部と比べると、「授業料が比較的安い」、または「交換留学制度がある」「学生寮がある」「市内の治安が良い」などの理由で、シベリア全地域（プリヤート共和国、ハカス共和国、トゥヴァ共和国、ザバイカリエ地方、アルタイ地方、イルクーツク州、スヴェルドロフスク州、チェリャビンスク州など）だけではなく、ロシアのヨーロッパ地域（コミ共和国やウドムルト共和国など）からの入学生数も、徐々に増えつつある。専攻東洋語の選択科目の人気度ランキングでは、中国語は1位、韓国語は2位、日本語は3位という状況が長年続いていたが、「ロシア国内の「韓国ブーム」が収まった」、または、「日本文化の人気度が高くなった」という理由によって、日本語・日本文化に関する興味を示した入学者数（2016年度）が約3倍に増え、今現在、日本語は2位になっている。

ロシアの大学の教育制度の特徴として、学生が自由に授業科目を選択できないことが一般的である。入学から卒業までの4年間の全授業科目は、ロシアの文部科学省に認定された「東洋学部における教育プログラム」によって定められている。プリヤート国立大学における、日本語・日本文化関連の全授業科目の年次割当は資料1のとおりである。

また、本大学内の授業の他、学生は、交換留学生として協定大学の山形大学に留学し、1年間にわたって「日本語・日本文化」関連の授業を受けることができる。交換留学生の人数制限のため、日本留学に行けない学生数は、残念なことに少なくないが、彼らは大学毎年の夏休みに実施している「東洋学のサマーキャンプ」や招待講演などに出席して、日本人先生の授業を受けことができるようになっている。

日本語・日本文化関連の授業と並んで、学生が日本研究の方法を習得するための研究指導制度は非常に大事な役割を果たしている。日本語・日本文化専攻の学生は、1年目の後期に自分の好みに合わせて自由に研究テーマを選択することができる。2016年現在の学部生の研究テーマは資料2のとおりになっている。

研究テーマ一覧を分析してみると、学生の興味は日本語・日本文学の研究から

資料1 日本語・日本文化関連の年次別授業科目一覧（2016年現在）

年次	入学年	人数	授業科目名
1年	2015年	19名	日本語初級文法・語彙
			日本語リスニング
			日本学入門
2年	2014年	8名	日本語基本文法
			日本語リスニング
			日本語会話
			日本文学入門
			日本史
3年	2013年	5名	日本語史
			日本語会話
			ビジネス日本語
			文法論
			翻訳論
			文体論
			テキスト分析論
			日本文化論
			日本宗教史
			日本古典文学
			日本近代文学
日本経済			
4年	2012年	5名	日本語会話
			文法論
			翻訳論
			文体論
			テキスト分析論
			日本現代文学
			日本文化論
日本社会政治論			

日本文化の研究へ変わっていく傾向が見られるようになった。また、最近の学生は、「本格的な研究分野にならない」という理由によって、およそ10前までタブー視された「ホラー小説」、「妖怪」、「心中」、「怪談」、「SM思考」、「アニメ・漫画」などの日本文化の要素を、自分の研究対象に選択するようになっている。

ロシアの他の大学と比べると、ブリヤート国立大学の学生は積極的に、地方の民族的な要因を挙げて、「日本文化とブリヤート文化」や「日本語とブリヤート語」などのような比較研究を試みている。学生の研究結果の発表の場は、ブリヤート

資料2 年次別の研究テーマ（2016年現在）

年次	入学年	研究分野	研究テーマ
1年	2015年	日本語	日本語の機能的な特徴
			日本語文体の特徴
			現代日本の言語的状況
			日本語の語彙論
			日本語の方言
		日本文学	日本語の翻訳方法
			日本ホラー小説の研究
		日本文化	日本の演劇とロシア文学からの影響
			日本国家の神話的起源思想
			浮世絵の研究
			日本人名の研究
			日本民話における日本人の発想法
			日本文化における「お化け」の表象
			日本文化における「死」の表象
			日本史における明治維新の役割
日本の教育制度の諸問題			
日本の伝統芸能の研究			
2年	2014年	日本語	日本の妖怪の研究
			日本画の研究
		日本文学	英語語彙の日本語化メカニズム
			日本語の敬語体系の特徴
			室町時代の軍記物の研究
			現代日本文学の短編小説の研究
		日本文化	20世紀後半の日本女性文学の研究
日本の推理小説の特徴			
『万葉集』における恋愛の表象			
3年	2013年	日本文化	『万葉集』における恋愛の表象
		日本語	日本民話伝承における「人間」の表象
			現代日本語における外来語彙の構成変化
		日本文学	夏目漱石による日本西洋化の批判
			日本典型文学における「朱」の象徴的意味
日本文化	大岡昇平の文学活動の研究		
4年	2012年	日本語	日本の民話伝承における「お化け」の役割の研究
			日本文学の翻訳におけるシンタクシス的変更について
		日本文学	現代日本語におけるネーミングの方法
			日本の歴史・時代小説の研究
			読本における中国文学からの影響
日本文化	近松門左衛門の文学作品における「心中」の表象		
			日本における「狐」の表象について

2015年 卒業生	2011年	日本語	日本古典文学における地名の特徴 関西弁における動詞の打ち消し活用形の特徴について				
		日本文学	『百人一首』の研究 『新古今和歌集』の研究				
			日本文学における社会派推理小説の役割について				
2015年 卒業生	2011年	日本文化	日本文化における天照大神の表象について 日本文化における七福神の表象について				
			2014年 卒業生	2010年	日本文学	小林一茶の作品における自伝的記憶の特徴について 井上靖著『おろしや国酔夢譚』における「ロシア」の表象について 大江健三郎の作品における環境汚染問題について 宮沢賢治童話の世界	
2013年 卒業生	2009年	日本語				日本語とブリヤート語の慣用句の比較研究 現代日本語における経済学専門用語の構成的な特徴について 漫画の擬音語・擬態語の特徴について 現代日本語における「身体」の表象について 日本語の諺の翻訳方法	
						日本文学	有島武郎の作品におけるキリスト教の役割について 小松左京著『明日泥棒』とイワン・エフレモフ著『アンドロメダ星雲』における「未来」の比較研究 平塚らいてうの作品における女性解放運動 桐野夏生の作品における「追放人」の表象について 三島由紀夫の作品におけるSM思考について 日本の「怪談」の特徴について
							日本文化

国立大学東洋学部の機関誌である『BSUの東洋学』、『東方アジア』、『東洋学の教授方法』の3誌が用意されている。また、学生の口頭発表の場として、ブリヤート国立大学は、毎年5月に「アジア太平洋地域の過去と現在」という国際若手研究者学術会議を開催している。

ブリヤート国立大学の日本学科の教員は、日本研究の分野において最高の成果を上げられる若手研究者を育てるために様々な試みを行っている。その結果としては、ごく近い将来にブリヤート国立大学出身の若手研究者は、ロシアだけではなく、全世界の大学や研究機関などで活躍することが大いに期待されている。

10 イタリアの日本研究

——文化の多様性を生かす——

ボナヴェントゥーラ・ルペルティ

1. イタリアと日本との交流

おそらく、ヨーロッパのなかで、最初に日本という国について言及したのは、イタリア人、ヴェネツィア共和国の商人マルコ・ポーロ (Marco Polo, 1254-1324) であろう。彼の口述に基づく旅行記『東方見聞録 (*Il Milione*)』においては、日本を指す Cipangu / Cipango (チパング)、Zipangu (ジパング) に関する記述があり、ヨーロッパに広く普及して、写本だけでも 150 種類があり、印刷本は数え切れないほどあった。

日本とイタリア人の最初の接触は戦国時代に入ってから、主にキリスト教の宣教師を通してである。日本で活躍したイタリア人宣教師としては、イエズス会のオルガンティノ・ネッキ・ソルデイ (Organtino Gneccchi Soldi, 1533-1609) やアレッサンドロ・ヴァリニャーノ (Alessandro Valignano, 1539-1606)¹が有名である。とくにヴァリニャーノ巡察師は、1581年にイエズス会員のための宣教ガイドライン *Il Cerimoniale per i Missionari del Giappone* (日本の風習と流儀に関する注意と助言) を著し、*Sumario de las cosas de Japón* (日本諸事要録, 1583) と *Adiciones del sumario de Japon* (日本諸事要録補遺, 1592) を収める『日本巡察記』とともに、未完の *Historia del Principio y Progreso de la Compañía de Jesús en las Indias Orientales* (1542-64) や *Del principio y progreso de la Religion Christiana en Japon* (1601) などの大作も著わした。ルイス・フロイスとジョアン・ロドリゲスの著書と並び歴史に残るものである。また、1582年(天正10年)に、九州戦国大名が4人の少年使節をローマ教皇のもとに派遣した「天正遣欧少年使節」を発案・実施した人物でもある。イタリアを中心に、少年使節団への反響を記した書物(例えば、Guido Gualtieri, *Relazioni della venuta degli Ambasciatori*

1 Centro Internazionale Alessandro Valignano アレッサンドロ・ヴァリニャーノ国際研究所ウェブサイト (<http://www.valignano.org/jp/bibliografia>) と A. Boscaro, *Ventura e sventura dei gesuiti in Giappone (1549-1639)* (Venezia: Cafoscarina, 2008) を参照。

Giaponesi a Roma..., Zanetti, 1586) も数多く発行されたようである。

なお、宣教師や商人などの記録、報告、言述・書簡などに基づいて、16、17世紀のヨーロッパで出版された日本に関する書籍は、主にラテン語かイタリア語で書かれたもので、多数多彩であった。ルネサンス時代、ヨーロッパに出回る書籍のおよそ半分がヴェネツィアで印刷されていた²。

また、仙台藩主伊達政宗の命により支倉常長を正使とした慶長遣欧使節は、1615年1月30日（慶長20年1月2日）にエスパーニャ国王フェリペ三世に謁見した後、ローマに至り、1615年11月3日にはローマ教皇パウルス5世に謁見した。天正使節ほどの盛大な反響ではなかったにせよ、記録のみならず、ヴェネツィア共和国の元首に委託されてドメニコ・ティントレット（Domenico Tintoretto, 1560-1635）が伊東マンショの見事な肖像画を残したと同じように、アルキータ・リッチ（Archita Ricci, 1560-1635）による豪華な『支倉常長像』（1615年、ローマのボルゲーゼ美術館蔵）も残っている。

その後、日本は禁教令を敷いて鎖国の時代になったにもかかわらず、1643年（寛永20年）にジュゼッペ・キアラ（Giuseppe Chiara, 1603-1695）、そして1708年（宝永5年）に（イエズス会宣教師ではないが）ジョヴァンニ・バッティスタ・シドッティ司祭（Giovanni Battista Sidotti / Sidoti, 1668-1714）というイタリア人が密入国し、捕らえられて悲惨な結末を迎える。しかし、キリスト教布教のために来日したシドッティ司祭への審問に基づいて、新井白石が『西洋紀聞』（1715年頃完成）を筆記し、それが1807年以來広く流布されるようになり、鎖国下の日本における世界認識に大いに役立った。

17世紀の半ばにイタリア人イエズス会士ダニエッロ・バルトリ（Daniello Bartoli, 1608-1685）の大著 *Istoria della Compagnia di Gesu*（イエズス会史）は、徐々にアジア編（1653年版）、日本編（1660年版）、中国編（1663年版）、イギリス編（1667年版）、イタリア編（1673年版）の発行を得て、イタリア文学のなかでも17世紀の名著とされた。未完の *Il Giappone*（1660年版、5冊2巻）も幅広く普及し、愛読された書籍となったようである。このように、このころまで、イタリア人は日本に関する知識を宣教師の書いた書物だけを介して得ていたのであるが、また、日本に興味を持つようになったのは、19世紀後半、統一王国になってからである。

2 Sonia Favi, "Self through the Other: Production, Circulation and Reception in Europe of Written Sources on Japan in the Christian Century," PhD thesis. Venice: Ca' Foscari University of, 2013, pp. 196-211.

<http://dspace.unive.it/handle/10579/3061>

しかし、近代になってから日本との関係が強くなった最初のきっかけは政治と貿易である。独立国家になったばかりの当時のイタリアには養蚕業と関連した紡績業などが、国の最も重要な産業のひとつで、ヨーロッパの中で生糸・絹織物の生産量の多い輸出国であった。しかし、1854年頃から、蚕の伝染病が流行したことにより、養蚕製糸業に大きく依存するイタリアの経済は致命的な打撃を受けてしまったのである。1860年代の初めから、イタリアの蚕種仕入人・業者は、伝染病に感染していない健康な蚕種を求めて、ベンガル、中国などへ探しに出たが、健康な蚕種が存在する唯一の国は、開国したばかりの日本であった。日本の蚕種の質は極めて良好だったため、1860年代に日伊蚕種貿易の規模は徐々に拡大し、イタリアは日本にとって産業上、最も重要なパートナーとなったのである³。

この状況は日伊外交関係に影響をおよぼし、1866（慶応2）年に日伊修好通商条約が締結された。1867年から、イタリアと日本は本格的に国交を始め、公使と領事が日本に派遣された。実は当時、日本在住のイタリア外交担当者であったアレッシンドロ・フェ・ドステイアーニ伯爵の家族も蚕種貿易に携わっていた。イタリア海軍大尉ヴィットリオ・アルミニョン（Vittorio Arminjon）は、1866年に、イタリア使節として日本に赴き、日伊修交通商条約に調印し、1869年に、ジェノヴァで著書 *Il Giappone e il viaggio della corvetta Magenta del 1866*（『幕末日本記』）を刊行した⁴。明治政府が1873年に派遣した岩倉使節団は、フィレンツェ、ローマ、ナポリ、ヴェネツィア、ミラノなどを視察し、各地で歓迎され、その見聞を『米欧回覧実記』（1878年版）にまとめている⁵。

19世紀後半、ジャポニズム（Japonisme）はイタリアでも広がり、日本の美術品の収集家が次第に増えていった。イタリアの場合、主にお雇い外国人として日本を訪れたイタリア人を中心に、日本美術の重要なコレクションが生まれた。東京の大蔵省紙幣局を指導し、日本の紙幣切手印刷の基礎を作ったエドアルド・キョッソーネ（Edoardo Chiossone, 1833-98）コレクションを収蔵するジェノヴァの

3 経済史の展望からこの時代の日伊貿易についての諸論文は元ピサ大学のクラウディオ・ザニエル Claudio Zanier による。R. Caroli, 1868. *Italia Giappone: intrecci culturali* (Venezia: Cafoscarina, 2008).

4 Teresa Ciapparani, “Al Giappone: scritti di viaggiatori italiani, o in italiano, da metà Ottocento alla fine del periodo Meiji,” in *Studi in onore di Cosimo Palagiano. Valori naturali, dimensioni culturali, percorsi di ricerca geografica*, a cura di Emanuele Paratore, Rossella Belluso (Roma: EDIGEO, 2013).

5 岩倉翔子編『岩倉使節団とイタリア』京都大学学術出版会、1997年。

キョッソーネ東洋美術館、イタリアのブルボン＝パルマ家の公子エンリコ・ディ・ボルボーネ＝パルマ（Enrico II Borbone-Parma, 1851-1905）が妻と世界一周の旅（1887-1889年）の途中、東洋、日本で買い集めたコレクションからなるヴェネツィアの東洋美術館、イギリス人の父、イタリア人の母をもつフレデリック・ステッベルト（Frederick Stibbert, 1836-1906）が熱心に収集した武器武具などのコレクションと豪邸からなるフィレンツェのステッベルト美術館、東京芸術大学の前身である東京工部美術学校で教授した彫刻家ラゲーサ（Vincenzo Ragusa, 1841-1927）のコレクションなどを所蔵しているローマのピゴリーニ民族博物館などがある。

2. イタリアの日本研究の歴史

上記の動きは、イタリア人研究者と、研究機関である大学や日本語教育などにも影響を及ぼした。イタリアにおける日本語教育は、19世紀後半、フィレンツェの国立高等学校に日本語講座の開設から始まる。この時から20世紀の初めにかけて、ヴェネツィア、カ・フォスカリ大学の前身であるヴェネツィア商業高等学校、ローマ大学、ナポリ東洋学院（現ナポリ大学の「オリエンターレ」）など、現在日本語学科のある主な大学で次々に日本語講座の開設が進められた。

フィレンツェでは、アンテルモ・セヴェリーニ（Antelmo Severini）が初めて日本語講座を開設し、1866年に『日本語会話』のイタリア語版を出版している。ヴェネツィアでは、カ・フォスカリ大学の日本語講座の開設が1873年で、アゴスティーノ・コッティン（Agostino Cottin）著 *Nozioni sulla lingua giapponese: Lettura accademica*（日本の基礎知識）の出版は1886年で、イタリア語による最初の日本語文法書のようなものである。ジュリオ・ガッティノーニ（Giulio Gattinoni）は1890年に *Grammatica Giapponese della lingua parlata*（日本口語文典）を、1908年に *Corso completo di lingua giapponese*（日本語講座）を上梓している。翻訳家バルトロメオ・バルビ（Bartolomeo Balbi）は1911年に *Piccolo vocabolario-manuale italo-giapponese*（伊和実用宝鑑）を、作家で語学者のピエトロ・シルヴィオ・リヴェッタ（Pietro S. Rivetta）は1912年に *Les cent caracteres "hiragana": les plus employés au Japon*（平假名百字）を刊行している。

アンテルモ・セヴェリーニは、ロドヴィコ・ノチェンティニ（Lodovico Nocentini）とともに、日本の文学作品をイタリア語に訳し始めた人である。その後、ナポリで教え、詩人やダンウンツィオや政治家ムッソリーニと親交のあった詩人下位春吉（1883-1954）は文芸誌 *SAKURA* で、日本文学の数作品を紹介したこと

がある。カトリックの宣教師で、サレジオ会の神父として1929～47年、1959～74年に日本に滞在したマリオ・マレガ (Mario Marega) は戦前、『古事記』『忠臣蔵』の伊訳などを刊行したことがある。戦後になってから、マリオ・テーティ (Mario Teti) と作家須賀敦子 (1929-98) も日本の近現代文学 (川端康成、谷崎潤一郎、三島由紀夫、安部公房など) の翻訳に大きく貢献した。日本文学史、日本演劇史などについて著書を刊行したマルチェッロ・ムッチョーリ (Marcello Muccioli) 教授は、イタリアの日本古典文学の翻訳と研究の中心的な人物であった⁶。また、黒澤明をはじめ、日本映画を紹介しながら、ムッチョーリの後を継いだのは、ジュリアーナ・ストラミジョーリ (Giuliana Stramigioli) である⁷。翻訳だけではなく、日本文化に関する研究も始まり、文学、芸術、民族学、歴史、哲学と宗教などについての研究書も徐々に出版され始めた⁸。

日本との文化交流は、20世紀前半になって盛んになった。1897年に日本の美術協会は、1895年から開催された世界最古の国際美術展覧会ヴェネツィア・ビエンナーレに初めて出展して広い反響を呼ぶ⁹。1911年にローマで開催された博覧会にも日本絵画が展示され、日本画は文学評論家エミリオ・チェッキ (Emilio Cecchi) 等によって評価された。その後、1930年にもまたローマのパラッツォ・デッレ・エスポジツィオーニ・デイ・ベッレ・アルティの展示場にて大規模な日本美術展覧会が開催された。ムッソリーニ政権の支援によって実現されたこの展覧会は、大倉喜七郎男爵の主催で、画家横山大観 (1868-1958) が日本芸術使節の役を担当し、西洋初の大規模な日本美術展であり、後に「ローマ展」という名で知られるようになった。

日本の職人たちの手によって改装された本格的な日本様式の展示空間の中で、展示作品の多くは近代日本画の傑作で、当時の日本・イタリア両側のマスコミに大きく取り上げられ、大成功を収めた。また、1929年に日本画の本質を説く書

6 M. Muccioli, *La letteratura giapponese* (Roma: L'asino d'oro, 1969, 2015); *Il teatro giapponese, Storia e antologia* (Milano: Feltrinelli, 1962).

7 Andrea Maurizi, Teresa Ciapparoni La Rocca, (a cura di), *La figlia occidentale di Edo. Scritti in memoria di Giuliana Stramigioli* (Milano: Franco Angeli, 2012).

8 A. Boscaro, *Narrativa giapponese: cent'anni di traduzioni* (イタリア語になった日本文学) (Venezia: Cafoscarina, 2000).

9 日伊交流450年の歴史についての多彩な研究を集めた論文集は、下記の書籍を参照されたい。A. Tamburello (a cura di), *Italia-Giappone: 450 anni*, Vol. 2 (Roma-Napoli: Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente, Roma-Napoli, 2003). 明治期日伊交流史について石井元章の研究をご参照。Motoaki Ishii, *Venezia e il Giappone: Studi sugli scambi culturali nella seconda metà dell'Ottocento* (Roma: Istituto nazionale d'archeologia e storia dell'arte, 2004); A. Boscaro and M. Bossi, *Firenze, il Giappone e l'Asia Orientale* (Firenze, 1999).

物 *Ars Nipponica* (日本の美術) も限定部数で発行され、特にロベルト・パピーニ (Roberto Papini) の批評は、イタリアの日本美学の解釈法を示す画期的な参考書になった¹⁰。また、リヴェッタが書いた *La pittura moderna giapponese* (日本の近代絵画、1930年) は、一般のイタリア人に日本文化に対する知識を普及させた。

1939年には日伊文化協定が結ばれたが、この時期のイタリアの日本研究は、日伊両国の政治と密接に関連していた。大戦後、政治的關係からは解放され、イタリアの日本研究はますます盛んになる一方であった。現在、日本語専攻課程をもち、日本語の学位が取得できる大学は、ヴェネツィア、ローマ、ナポリにあり、日本研究者の大多数はこの3校に集中している。他の諸地方では、ミラノ大学、ミラノ・ビッコカ大学、トリノ大学、ポローニャ大学、フィレンツェ大学、ベルガモ大学、サレント大学 (レッツェ市)、カターニア大学とラグーサ分校なども日本語日本文化のコースがあり、優れた研究者が活躍している。また、小規模だが、パヴィーア大学、ペルージャ大学、トゥーシャ大学にも日本語講座がある。

ヴェネツィア大学の日本語日本文化専攻の学部は3年間の定員制で、各学年は310人で、大学院生も入れると、1000人以上となり、国際交流基金が認めたヨーロッパの拠点として、最大規模の日本研究機関である。ローマ大学は学生数800人、ナポリ大学は400人ぐらいで、イタリアの日本語学習者総数は、国際交流基金の2014年度公開の日本語教育機関調査結果によると7420人で、そのうちの6069人は大学などの高等教育機関で学んでいる¹¹。

3. イタリアの日本研究の最新動向——大学を中心に

19世紀後半から現在に至るまで、イタリアの日本研究のテーマは時代とともに変化している。先駆者たちの東洋学、日本学、日本文化全般の研究から、専門分野の細分化があり、戦後からより専門的な研究が行われるようになった。常設の日本語講座は最近までは言語と文学が中心であったが、近年、日本語を主眼として、他の科目も専門細分化し成長してきた。2000年より始まった大学制度の大改革は、言語と文学の区別が形式・実質ともにより明確になり、他専門の自立をもたらし、認可させるきっかけとなった。これは、歴史、思想・宗教、美術、芸術などの他の学問にとっても大変良いことである。ただし、国立大学、国内の

10 L. Sabbatoli 「アルス・ニッポニカ——昭和5年「ローマ展」と日本画へのイタリア側の批評」 *Studi Italici* 57(3) (2007) : 24-326.

11 <https://www.jpfg.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/italy.html>.

研究機関は今後、多くの専門分野を発展させるための体制と予算が備えられるかどうかが問題である。

イタリアの文化史の伝統は、歴史的展望を中心とし、文献学、書誌学から文化変遷の中の言語、文学、歴史を対象とする研究が主流をなしてきた。現在でも外国語の学部は主に、諸国の言語とともに、かならずその国の文学史を教える仕組みになっている。日本語講座のある大学も例外ではなく、作家論、作品論などを中心とする日本文学研究はどの大学でも主役になっている。

ヴェネツィア、カ・フォスカリ大学では現在、アジア・地中海アフリカ研究学科になっているが、日本学も多種多様な分野の専門家がいて、教員、若手研究者、院生などの研究は多岐にわたる。日本思想史、とくに徳川時代の思想、文化史、政治学、国際関係に関する博識のパオロ・ベオーニオ・ブロッキエーリ (Paolo Beonio Brocchieri, 1934-91) 教授から日本学が始まるが、教授がバヴィーア大学へ転勤後、アドリアーナ・ボスカロ (Adriana Boscaro) 教授が、ヴェネツィアの日本学の棟梁となり、キリシタン世紀とイエズス会宣教師の記録、豊臣秀吉などの研究、日本史から徐々に日本文学に移り、古典文学、平賀源内、谷崎潤一郎、遠藤周作などに関する幅広い優れた論文と翻訳を通して、現在の日本学の確固たる基盤を築いた。

イエズス会、キリシタンの研究から、古文書、日本語史へと広がったアルド・トッリーニ (Aldo Tollini) の研究活動は、ボスカロの流れの一部を汲み、仏教哲学、禅と道元、茶道の文化などへと展開し、貴重な著書を生み出している。他方、彼の弟子にヴァレリオ・アルベリッツィ (Valerio Alberizzi) がおり、古文書、国語史、文体史、仏教典などの漢文の古訓点などについて精密な研究を日本で続けている。

人類学においては、ブロッキエーリの後を継いだマッシモ・ラヴェーリ (Massimo Raveri) が日本の宗教、神道や民俗学、民間宗教、現代の新興宗教などに関する研究大家であり、国際的に活躍する弟子たち (Fabio Rambelli, Lucia Dolce, Federico Marcon, Erika Baffelli, Andrea De Antoni, Tatsuma Padoan など) を育ててきた。若手研究者ジョヴァンニ・ブリアン (Giovanni Bulian) は神島などの調査研究を行い、漁師の町村、日本の漁業、風、海などに関する独創的研究を続けている。

ボスカロの文学研究の後継者として、ルイーサ・ビエナーティ (Luisa Bienati) は作家論、作品論を通して、日本近現代文学史の入門書と専門書を刊行し、永井荷風、谷崎潤一郎、井伏鱒二、原爆文学などの研究と翻訳で注目され、実り多い

成果をあげている。古典文学においては、『住吉物語』『更科日記』『紫式部日記』などの翻訳と解説などを著しているナポリ大学出身のカロリーナ・ネグリ (Carolina Negri) である。若手研究者では、ピエラントニオ・ザノッティ (Pierantonio Zanotti) が小説を主流するイタリアの従来の研究と違って、和歌 (藤原定家) から近現代詩 (山村暮鳥、未来派、アヴァンギャルド)、現代のゲーム世界などへ関心を広げている。カテリーナ・マッツァ (Caterina Mazza) は現代文学のなかでも、井上ひさしのパロディー文学をはじめ、萩野アンナのような女性文学、多和田葉子のような2か国語で書く作家の作品などの新傾向に注目している。

日本語の分野においては、言語学と言語史から日本語の多方面 (明治時代の日本語、坪内逍遙から最近の言語現象まで) を捉えるパオロ・カルヴェッティ (Paolo Calvetti)、社会言語学から琉球諸語とアイデンティティの問題、周縁言語、消滅危機言語をめぐる多大な成果をあげたパトリック・ヘインリッヒ (Patrick Heinrich)、琉球語と音韻の問題に取り組んでいる若手研究者ジュセッペ・パッパラルド (Giuseppe Pappalardo) などがいる。

日本史においては、日本のファシズム、日本近現代史の政治問題と太平洋地域の国際関係の諸領域 (ヴェトナムなど) を扱うフランチェスコ・ガッティ (Francesco Gatti) の教え子ローサ・カーロリ (Rosa Caroli) も日本史、沖縄史、国際関係などについて業績をあげている。若手研究者に関しては、日本近現代史のなかで政府体制、政治経済と選挙との関連、農業問題などの研究者アンドレア・レヴェラント (Andrea Revelant)、歴史学から16世紀、17世紀のイタリア宣教師などの記録を通して見た日本の知識とイメージ、イタリアにおける和書、日本をめぐる書籍の調査研究などを行っているソニア・ファヴィ (Sonia Favi) が期待されている。

美術の分野では、日本美術と美学、浮世絵とその巨匠北斎、広重、歌麿などに関する多数の書籍を刊行し、キュレーターとして展覧会に直接携わったジャンカルロ・カルツァ (Giancarlo Calza) の後、ジャポニズムと浮世絵、葛飾北斎と広重などの基礎的研究を新鮮な感覚で紹介しているシルヴィア・ヴェスコ (Silvia Vesco) が代表者である。

ヴェネツィアで舞台芸術の分野を切り開いたのは、主に能楽、横道萬里夫などの能の構造分析をふまえた演劇学の研究に独創的な感覚を注いだパオラ・カニョーニ (Paola Cagnoni) である。その跡を継いだのは、ボナヴェントゥーラ・ルベルティ (Bonaventura Ruperti) で、人形浄瑠璃、近松門左衛門、近世演劇、近代文学 (泉鏡花の作品と戯曲)、日本舞踊、ドラマツルギーとしての演劇を扱う日本

演劇史の研究を続けてきた。また、舞踏やコンテンポラリー・ダンスの現場で研究しているカティア・チェントンツェ (Katja Centonze) も比類ない研究活動 (日本現代文学、三島由紀夫と舞踏の関わり、舞踏、現代舞踊、モダンダンス、現代演劇など) を行っている¹²。

最近、学生の関心を集めている大衆文化については、ロベルタ・ノヴィエリ (Roberta Novielli) が映画史、日本映画と日本近現代文学、アニメに関する論文を多数刊行しているが、エウジェーニオ・デアンジェリス (Eugenio De Angelis) のような有望な若手研究者も育ち、国際映画祭に参加しながら専門雑誌に評論を投書し活躍している¹³。三宅トシオ (Toshio Miyake) も社会学とカルチュラルスタディーズの視点から、マンガ・アニメ、若者文化、日本現代文学におけるイタリアのイメージ、イタリアにおける日本のイメージ、その変遷などの研究に貢献している。マルチェッラ・マリオッティ (Marcella Mariotti) は日本語、日本語教授法を研究しながら、社会学の視点から児童文学の研究し、イタリアでも大ヒットとなった『世界の中心で、愛をさけぶ』、『はだしのゲン』、童話集などの翻訳を数多く刊行している。また、東洋美術、仏教思想、韓国との交流などに焦点を当てる新しい研究を行っているクレメンテ・ベーギ (Clemente Beghi) も挙げられる。以上はヴェネツィア大学の研究者陣であった。

ミラノには日本語日本文化講座を設けている大学が三つあり、ミラノ・ビッコカ大学、ミラノ大学が主だが、私立のボッコーニ経済大学にも日本経済の専門家がいて、授業数は少ないが日本語講座がある。ミラノ・ビッコカ大学では、アンドレア・マウリツィ (Andrea Maurizi) が『懐風草』『新猿楽記』『浜松中納言物語』『落窪物語』などの古代文学や近世文学の『男色大鑑』の翻訳と解説を行い、多彩な活動を行っている。ミラノ大学では、シモーネ・ダッラ・キエーサ (Simone Dalla Chiesa) と、若手のティツィアーナ・カルピ (Tiziana Carpi) が人類学、社会問題に取り組みながら、日本語と言語学に力を入れている。ヴィルジニア・シーカ (Virginia Sica) は、三島由紀夫を中心に日本近現代文学のみならず、中世の五山文学の研究をも行っている。ボッコーニ大学出身 (現在ミラノ国立大学) のコッラード・モルテーニ (Corrado Molteni) は、カルロ・フィリップーニ (Carlo

12 実は、舞踏についての関心も高く、舞台やワークショップだけでなく、研究の面でも舞踊研究者、評論家マリア・ピア・ドラーツィ (Maria Pia D'Orazi) などの論文がある。

13 映画の分野では、日本映画専門の評論家ダリオ・トマーシ (D. Tomasi) がおり、国際映画祭 (世界で一番古いヴェネツィア映画祭のほかに、日本、韓国、中国などの大衆映画を紹介する極東ウーディネ映画祭も人気を集めている) 等に参加し、専門誌に批評、論文を書いている。

Filippini) とともに日本経済の専門家である。ほかに、日本美術の分野においては、写真美術と浮世絵¹⁴、デザインと美学などの論文を出しているカルツァの弟子ロッセツラ・メネガッツォ (Rossella Menegazzo) がいる。

ミラノ大学とともにトリノ大学において、西川一郎とともに最初から日本学、日本文学研究を築いたのはマリオ・スカリーセ (Mario Scalise) である。彼の父親 (グリエルモ・スカリーセ大将 Guglielmo Scalise, 1891-1975) は1934～39年のあいだ、日本に軍事担当として滞在し、暗き時代の中でも日本の文化に魅せられ、その後、伊日辞典 (1940年) や翻訳書を出版し、ミラノ大学で日本語日本文化を教えていた¹⁵。スカリーセ大将の婿サンテ・スパダヴェッキヤ大将も舅に感化を受け、日本の文化に熱中し、アジア文化センターを開設した。娘のニコレッタ・スパダヴェッキヤ (Nicoletta Spadavecchia) は現在、IsIAO アフリカ東洋研究所 (前身は1933年設立のIsMEO中亜極東協会) のミラノ分校で、日本語日本文化を教えながら、夏目漱石、大江健三郎の作品と土居健郎の著書の翻訳を出している。

トリノ大学には日本近現代文学の専門家でも、三島由紀夫に傾倒しているエマヌエーレ・チッカレッラ (Emanuele Ciccarella) と、現代文学の翻訳 (大江健三郎から桐野夏生、高橋源一郎、古川日出男まで) を次から次へ出し、安部公房の演劇と現代文学を専攻するジャンルーカ・コーチ (Gianluca Coci) がいる。若手ダニエーラ・モーロ (Daniela Moro) はジェンダー文学、女流作家と演劇、円地文子、野上弥生子などについての論文を発表している。そして、ラヴェーリの弟子で日本思想史、京都派、西田幾多郎などの研究者マッテオ・チェスターリ (Matteo Cestari) は東洋哲学の担当者である。

ボローニャ大学では、外国語部と文学部が別れているが、言語学のフォルリー・キャンパス、音韻学専門の上山素子 (Ueyama Motoko) がおり、ボローニャ本校は新しい日本語教授法を取り入れる実験的研究と大衆文学、推理小説の翻訳をも

14 日本を撮影した初期の写真家フェリーチェ・ベアト (Felice Beato, 1832-1909) もヴェネツィア生まれで、横浜を拠点にその後活躍したアドルフォ・ファルサーリ (Adolfo Farsari, 1841-1898) もヴィチエンツァ生まれで、イタリア人である。

15 和伊辞典は、バルトロメオ・バルビの初期のもの (1939年) の後、ヴァッカーリ (Oreste Vaccari, 1886-1980) の辞書と文法 (1956年) も出版されている。その後、マリオ・スカリーセも文法と漢字辞典を出している。ヴェネツィア大学では、久保田陽子が執筆した『現代日本語文法』(Grammatica di giapponese moderno, Venezia, Cafoscarina, 1989年) は画期的なもので、今でも重宝されている。また、ローマ大学ではMastrangelo, Ogawa, Saito, *Grammatica giapponese* (Milano: Hoepli, 2006) も刊行されている。最近の出版としては、ミラノのSusanna Marino, *Grammatica pratica di giapponese* (Zanichelli, 2008) と Simone Guerra, *Grande dizionario giapponese-italiano dei caratteri* (Milano: Zanichelli, 2015) も貴重である。

行っているフランチェスコ・ヴィトゥッチ (Francesco Vitucci) と、近現代文学、女流文学、映画について幅広い活動を繰り広げているパオラ・スクロラヴェツァ (Paola Scrolavezza) がいる。ほかに、日本学専門ではないが、ボローニャ大学舞台芸術学科のジョヴァンニ・アッツァローニ (Giovanni Azzaroni) と弟子マッテオ・カザーリ (Matteo Casari) は、演劇の専門家として、歌舞伎、能、伝統演劇の伝承方法、実際の稽古体験を、人類学的方法を用いて研究している¹⁶。ボローニャ大学の文学部の日本語担当は竹下敏明である。ほかに、菊川英山などの浮世絵の研究を残した近藤映子、ボローニャの東洋美術センターを統率するジョヴァンニ・ペテルノッリ (Giovanni Peternolli) は文献資料を提供し、展覧会を企画する機関における日本美術の専門家である。

この分野では、ジェノヴァのキョッソーネ東洋美術館館長ドナテッラ・ファイッラ (Donatella Failla) が、素晴らしいコレクションを活用しながら、ジェノヴァ大学でも教え、優れた研究を続けている。その活動からは、大学人のみでなく、直接作品にふれる他分野の研究でも大事な役割を果たしているといえよう。

フィレンツェ大学の文学部の日本語日本文化講座は、チベット研究の第一人者ジュゼッペ・ツッチィ (Giuseppe Tucci, 1894-1984) に次ぐ東洋学者で、アイヌ、海女の研究の草分け的かつ魅力的な存在だった人類学者、登山家、写真家、ジャーナリストのフォスコ・マライーニ (Fosco Maraini) によって創設された。現在の教員に、『万葉集』、『古今和歌集』の伊訳と、和歌文学から近代詩歌 (萩原朔太郎など) まで優れた研究成果をあげている鷺山郁子 (Sagiyama Ikuko) と、和歌、物語文学、中世文学、『方丈記』、『蜻蛉日記』等の翻訳に取り組んだフランチェスカ・フラッカーロ (Francesca Fraccaro) がいる。若手のエドアルド・ジェルリーニ (Edoardo Gerlini) は和歌と漢詩の影響関係、菅原道真、イタリア中世の詩歌と和歌との比較などを通して、斬新な研究を行っている。フィレンツェには、浮世絵のコレクターと愛好家、美術の専門家マルコ・ファジョーリ (Marco Fagioli) がロンドンなどよりも早く、1977年からほとんど毎年日本の春画の本、カタログ、解説書などを数多く出版し、展覧会にも携わっている。

ローマのラ・サピエンツァ大学には、『源氏物語』の初の伊語訳を行い、古典文学から近現代文学 (夏目漱石、石川淳、太宰治など) まで研究し、多大な成果を

16 日本演劇については英語から翻訳したベニート・オルトラーニや演劇学の専門家ジョイア・オッタヴィアーニの著書がある。Benito Ortolani, *Il teatro giapponese, dal rituale sciamanico alla scena contemporanea* (Bulzoni, 1998); Gioia Ottaviani, *Introduzione al teatro giapponese* (Usher, 1994).

上げているマリア・テレサ・オルシ (Maria Teresa Orsi) がいた。それを継承するマティルデ・マストランジェロ (Matilde Mastrangelo) は幕末と明治の文芸、森鷗外と歴史小説、近代文学と落語、講談、三遊亭円朝と怪談についての論文を発表してきた研究者である。また、ジョーヤ・ヴィエンナ (Gioia Vienna) は現代文学、女流作家などの作家研究を続けている。若手のルーカ・ミラーシ (Luca Milasi) は坪内逍遙、幸田露伴を、ステファノ・ロマニョーリ (Stefano Romagnoli) は戦争文学 (火野葦平) と紀行文学を、それぞれ研究している。また、ローマ大学出身のロベルタ・ストリッポリ (Roberta Strippoli) は中世文学、物語、御伽草子などの翻訳と研究を行い、現在アメリカで活躍している。

日本史専門家として、マルコ・デルベネ (Marco Del Bene) は日本史、近現代史におけるメディア、新聞、ラジオ、歌謡曲、映画の役割についての研究をしている。日本美術史を担当するダニエーラ・サドゥン (Daniela Sadun) と、日本近現代文学、芥川龍之介、女流文学、伊日交流を研究してきたテレサ・チャッパローニ・ラ・ロッカ (Teresa Ciapparoni La Rocca) は上記のストラミジヨリの教え子である。

日本の音楽の専門家には、日本とアジアの楽器、『源氏物語』における音楽、神楽などの研究をしているローマ大学のダニエーレ・セステイーリ (Daniele Sestili)、現代音楽の作曲家、能の音楽とフルクサス (Fluxus) のようなアヴァンギャルドなどの研究をしているトリノー出身のルチャーナ・ガッリアーノ (Luciana Galliano) もおり、大変貴重な存在である。日本思想史、古文書、仏教、宗教などの研究でナポリとローマで活躍していたシルヴィオ・ヴィータ (Silvio Vita) は今日本在住である。

ナポリ東洋大学では、上記の日本文学研究の先駆者マルチェットロ・ムッチョーリを受け継いで、日本美術、日本史、日伊交流などの多彩な研究を繰り広げたアドルフォ・タンブレロ (Adolfo Tamburello) が多くの弟子を指導してきている。現在日本語担当の大上順一 (Ōue Jun'ichi) とシルヴァーナ・デマイオ (Silvana Demaio) がそれぞれ比較言語学、日伊言語の比較と日本語、明治史、御雇外国人を研究している。

文学研究においては、ジョルジョ・アマトラノ (Giorgio Amitrano) が日本近現代文学、特に中島敦、吉本ばなな、村上春樹、井上靖の研究と翻訳を通して紹介し、業績を上げ、若手のキアラ・ギディーニ (Chiara Ghidini) は古典文学と宗教思想を、ジュセッペ・ジョルダナーノ (Giuseppe Giordano) は『新古今和歌集』を、クラウディア・イアツェッタ (Claudia Iazzetta) は能を、ガラ・フォッラ

ーコ (Gala Follaco) は永井荷風から近現代文学までを研究し、論文を出している。

政治学部の担当者は、日本史、日本政治史、日本の国際関係に関する視野の広い論文を著したフランコ・マッツェイ (Franco Mazzei) とその弟子ノエミ・ランナ (Noemi Lanna) である。ほかに、イギリスの東インド会社、日本・中国の関係史、海洋貿易と海賊をめぐる研究をするパトリツィア・カリオーティ (Patrizia Carioti) がいる。

コーモ市の大学には日本史研究の若手ティツィアーナ・イアンネッロ (Tiziana Iannello) がおり、サルデーニャ島のサッサリ大学では日本史専門家パオロ・プッディヌ (Paolo Puddinu) も活躍している。レッツェ市のサレント大学には、古代文学、『万葉集』、『唐物語』、日本文学と漢文学との関係を研究するマリア・キアラ・ミリオレ (Maria Chiara Migliore)、古代文化、『常陸風土記』の翻訳、馬をめぐる文化と言葉の研究をしている若手のアントニオ・マニエリ (Antonio Manieri) がいる。

シチリア島のカタニア大学とラグーサ分校では、パオロ・ヴィッラーニ (Paolo Villani) が『古事記』、本居宣長、神話などを、ルーカ・カッポンチェッリ (Luca Capponcelli) が萩原朔太郎、与謝野晶子の近現代詩を取り上げている。

5. 研究現状と動向——大衆文化への関心

以上、イタリアの大学と研究機関で研究活動を行っている日本学の研究者と研究テーマを概観し、あらゆる分野で専門的知識と豊富な研究成果を上げていることが実感できる。北欧諸国と違って、近現代の文化現象のみならず、古典研究も重要な基盤となっていることが明らかに窺える。それに合わせて学生の教育も、現代語を初め、漢文、和文などの古文に対する読解力とともに、文学、宗教、歴史などの他分野でも古代から一通りの研究をする体制を持ち続けて、しっかりした基礎をもつ学習者、若手研究者、柔軟性のある人材を育てることを重視している。古典研究のできる人材は、現代研究も兼ねてできるが、逆の方向はうまくいかないようである。そのため、古典資料の読解力と古典研究の能力を育て、歴史変遷にともない絶えず変化する物事の本質、細部、全体像を把握し、通時的知識、歴史的展望、厳密な解釈と想像力、柔軟性と総合性を育成することに努めてきたといえよう。

それにしても、今の日本はヨーロッパと同じように政治体制・経済の多種多様な問題を抱え、不景気や停滞、不振に苦しんでいるのに、イタリアでは日本文化に大きな関心をもって大学で日本語を学ぼうとする学生の人数が依然として減ら

ないのはなぜであろうか。

著しい経済発展の高度成長の絶頂を経てきた日本ではあるが、今やヨーロッパ諸国、アメリカと並び、優れた伝統、洗練された美的創作の付加価値、高度の資質を備えた豊かな文化を提供する国となって、人の心を惹きつける魅力に溢れ、より安定した時代に入っているといえる。むしろ、経済成長を支えてきたのは、高水準の文化力、就学率、教育と学問の普及、知識と教養、芸術と技術に対する関心、精密性と厳格性をもつ繊細な精神と感性なのではないか。他方、それに反して、実用主義・功利主義に傾きがちな経済発展が、時には文化のいろいろな側面を犠牲にしてきたのも、否めない事実である。

喜ばしいことに、文化のあらゆるレベルでも国際的に認められてきたのは、日本に対する注目度が高いと言える。日本現代文学も徐々にイタリアの読者に馴染みのあるものとなり、日本料理もイタリアの一般の消費者・美食家にとってちょっとした流行になっている現在、日本文化の魅力に触れられる分野が増え、多彩な芸術現象をもつ大衆文化が主役となっている。

十何年前から、ヴェネツィア大学に限らず、イタリアの大学の日本語学科の学生に日本語学習の動機を尋ねると、日本のマンガ、アニメを通してなんとなく日本文化に興味をもったと答える学生が多い。若い世代のアニメ・マンガへの関心は、言うまでもなく、幼少時から日本のアニメ・テレビ番組から受けて来た感化による。大学進学になると、単なる趣味というレベルを超え、意識的に日本文化に近づいていき、興味も関心も研究も多彩化していく。実際は、若手研究者のレベルになると、やはり、大衆美術から高級文化までバラエティに富む日本のマンガ・アニメの膨大な世界にとどまらず、他の研究テーマに関心を広げているようである。

これと同時に、映像文化についての学術的洞察を示す著書も出ている。日本漫画史、漫画・アニメ辞典、漫画家論（手塚治虫、宮崎駿など）、作品論にジャンル・カ・デイ・フラッタ（Gianluca Di Fratta）などの研究もあれば、日本漫画やアニメの根底にある世界観についての考察であるパドヴァ大学の美学研究家マッシモ・ギラルディ（Massimo Ghilardi）の *Cuore e acciaio*（Esedra, 2003）がある。また、さらに広い視野で、現代日本社会の諸異相への関心を示しているのは、1990年代から出てきた研究書である。たとえば、アレッサンドロ・ゴマラスカ（Alessandro Gomarasca）、ルーカ・ヴァルトルタ（Luca Valterra）編の *Sol mutante*（Costa e Nolan, 1996）、ゴマラスカ編の *La bambola e il robottone...*（Einaudi, 2001）がある。イタリアで根づいた歴史的展望という学術伝統から、より社会的

な視野に移って現代日本を見直そうとする動きが窺える。そのような研究者側の動向と共に、読者・一般享受者の嗜好、関心も変化してきたと言える。

日本美術の典型的テーマ、浮世絵の世界、ジャポニズムが代表するヨーロッパ美術との影響関係に関する研究が相変わらず主流をなす一方、日本美術の新しい側面に注目し、日本古美術の知識や学力をもつ研究者も増えている。これと同時に、日本のアヴァンギャルド、デザイン、コンテンポラリー・アートを含む多岐にわたる日本現代美術の創作活動にますます好奇心を示す専門家も増えつつある。展覧会の都度に刊行された論文集を含むカタログ、一般読者向けの解説、より専門的に問題を取り上げる研究も若手研究者から生まれつつある。

国際的に高く評価され、活躍している日本人の中で、建築家（丹下健三の時代から、安藤忠雄、黒川紀章、磯崎新、伊東豊雄、妹島和世、隈研吾など）はもちろん、美術（村上隆）や、舞台美術を楽しみながらファッション界の先端に立っているスタイリスト（三宅一生、山本耀司等が代表人物）の活躍ぶりも、若手研究者の注目を浴び、研究の対象になっている。日本の伝統的染色、織物、着物の技術、色、文様、美学などの研究と展覧会も現れ、確かに見逃せない日本美術の一面である。

いままでイタリアの出版社は、小説の翻訳や人類学的なジャーナリズム以外、一般読者を対象とする日本に関する論文集や学術書を発行しなかった。しかし最近、日本文学、日本史、日本美術、日本の思想と宗教、各分野に関する専門書も大手出版社から発行され、かなりの読者層が日本文化に関心をもっていることを証明している。

また、日本学専門研究ではないが、日本文化、芸術に興味を示している著者、学者もかなり多くなってきている。一般享受者も、研究者、専門家も、他分野との関わりを無視できず、学際的な共同研究を好む傾向が生まれている。さらに、限られた地域を超え、中国、韓国を含むより広い範囲の中で一つの分野を捉える姿勢も著しくなっている。日本のみでなく、東アジアのなかで同じ現象や多種多様な側面をつかめば、日本への理解も深まるため、示唆に富む比較研究が広がっている。

マルチメディア時代のいま、映像・音響の多次元を通して訴える表現方法が好まれる趨勢にあるのは確かである。ネットのサイトにおいて、アジアの映画、アニメ、演劇、舞踊などが専門家によって紹介され、研究資料および年表、批評、論文など充実した情報を提供するものが現れているため、思いもよらぬ勢いで認知され、専門誌にも評価されている。

イタリア日本研究学会（伊日研究学会、AISTUGIA）¹⁷は、イタリアの日本研究を促進する目的で1973年に創立されて以来、日本研究者、学生のみならず、日本に関連する各方面の社会人、日本に真摯な関心を抱く一般人等を集合する方針を堅持している。現在、400名以上の会員を擁し、イタリア最大の学会組織として、年次研究会、論文集発行を初めとする活発な活動を展開している。研究会は毎年行われ、年々発表者が増える一方である。それに応じて、3日にわたる学会のスケジュールも分野別に分かれ、研究発表が同時進行で行われている。若手研究者が多くなっただけでなく、研究テーマや専攻もバラエティに富んでいる。若手研究者の積極的な参加、ますます深まる専門知識による研究細分化と充実性が一番際立っている。

それとは別に、比較研究の観点から毎年異なる研究課題を扱う学会、シンポジウムも各大学、各機関において開催され、文学、歴史、社会、宗教、思想、美術、演劇、音楽などの境界線がなくなって、日本に関わる人文科学領域全般を対象とし、他分野の専門家をも交えた大変興味深い内容となり、実り多い成果をあげている。

近代国家になった日本とイタリアとの国交樹立は1866年8月25日だったので、2016年は国交開設から150年目にあたる。日伊交流150周年のために、イタリアおよび日本各地で文化事業を中心にいろいろな行事、催し物が実施されている。

伊日両国は、450年近い交流があった。「国と国との関係とは、詰まるどころ人と人との関係です。（……）日伊両国及び両国民の相互理解が一層促進され、かつ、二国間関係の新たな展望が拓かれる契機となることを期待」¹⁸できる時代になった。時代の長い流れは人間の劇的な出会いを包み込んでいる。近代になってから、それぞれの国の文化への理解と知識が深まり、文化活動、文化研究、人文科学の今までの研究の積み重ねのおかげで、人間交流が見事にできるようになっている。今後の研究も美しい花を咲かせることが期待できるだろう。

遊楽万曲の花種をなすは、一身感力の心根也（世阿弥『遊楽習道風見』）

17 <http://www.aistugia.it/>

18 在イタリア日本国大使梅本和義の「ご挨拶」。
<http://www.it.emb-japan.go.jp/150/jp/saluto.html>

11 Japanese Studies at SOAS, University of London¹

Andrew GERSTLE & Alan CUMMINGS

Early Days of SOAS

Since its formation out of London's University College and King's College in 1916, the School of Oriental and African Studies (SOAS) has had the overt purpose, more than perhaps any other University college, of serving the British nation. As its motto "Knowledge is Power" asserts, the School has had a mission to train experts and foster knowledge on the Orient and Africa. From its beginnings, solid language training has been at its core, and this is certainly the case for Japanese Studies.

The first Professor of Japanese at SOAS was Frank J. Daniels (1900–1983), who was appointed in 1961.² However, the first Professor of Japanese in the University of London was Joseph Henry Longford (1849–1925), who was appointed in 1902 to the Oriental Department of King's College London but retired in 1916 when his department was moved to the newly established SOS (School of Oriental Studies, the School's formal title until 1938).³ Longford had had a career as a member of the Japan Consular Service for thirty-three years alongside Sir Ernest Satow and William George Aston before taking up the University of London post.⁴ He taught about Japan but does not seem to have taught the language. He published several books on Japan (*The Story of Old Japan*, 1910; *Japan of the Japanese*, 1911) and edited the third volume of Murdoch's *History of Japan* (1926).

In his Inaugural Lecture, "Japanese Studies in the University of London and Elsewhere," Daniels outlined Britain's efforts to develop resources for Japanese language learning and teaching. He cites a series of early publications on the language including Rutherford Al-

1 This report has been published in Hugh Cortazzi, Peter Kornicki, eds., *Japanese Studies in Britain: A Survey and History* (Folkestone, Kent: Renaissance Books, 2016). The editors have kindly given their permission for this essay to be put in this journal.

2 A biographical portrait Otome and Frank Daniels by Ron Dore in Ian Nish, ed., *Britain and Japan: Biographical Portraits*, Vol. I (Folkestone: Japan Library, 1994).

3 A biographical portrait of Longford by Ian Ruxton in Hugh Cortazzi, ed., *Britain and Japan: Biographical Portraits*, Vol. VI (Folkestone: Global Oriental, 2007).

4 Satow was British Minister to Japan in 1895–1900. Satow and many of his colleagues in the Japan Consular service including George Sansom as well as scholar diplomats such as Sir Charles Eliot are discussed in Hugh Cortazzi, ed., *British Envoys in Japan 1859–1972* (Folkestone: Global Oriental, 2004). A biographical portrait of W. G. Aston by Peter Kornicki is contained in Hugh Cortazzi, Gordon Daniels, eds., *Britain and Japan 1859–1991: Themes and Personalities* (London: Routledge, 1991).

cock's *Elements of Japanese Grammar* (1861), W. G. Aston's *Short Grammar of Spoken Japanese* (1869), and *Grammar of Written Japanese* (1871). He notes also that Basil Hall Chamberlain, appointed Professor of Japanese and Philology at Tokyo University in 1896, was the first "British Professor of Japanese."⁵ Chamberlain's *A Simplified Grammar of the Japanese Language (Modern Written Style)* (1886) was another important work. This tradition continued at SOAS with Japanese language textbooks produced by Daniels and his wife Otome, P. G. O'Neill, Charles Dunn, and more recently by John Breen, Stefan Kaiser, and Helen Ballhatchet, as well as research on Japanese language and language teaching by Lone Takeuchi, Stefan Kaiser, Kazumi Tanaka, Barbara Pizziconi, Hiroto Hoshi, Mika Kizu, Noriko Iwasaki, and others.⁶

On the whole, British expertise on Japan until World War II was not acquired or transmitted within universities. Initially diplomats such as Satow and Aston and teachers employed in Japan like Chamberlain (not a diplomat but hired to be a teacher of English) learnt Japanese in Japan in the late nineteenth century. The Japan Consular Service, which was established in 1859, soon after the re-opening of Japan following the Treaties of 1858, required its members to reach a high level of expertise in the Japanese language, and many of its members went on to become Japanese scholars. They included Sir George Sansom in addition to Satow and Aston. Protestant missions also expected their evangelists to try to master the Japanese language and some attained high levels of proficiency. The historian Charles Boxer (1904–2000) and others learned Japanese in Japan as army or navy language officers. It was not until the post-war period that UK universities became major centres of learning and teaching on Japan.

SOAS began its teaching programmes in 1917 and Japanese was taught from the outset, always with students attending, although there were only two who took degrees in Japanese, one each in 1938 and 1939. Both the army and navy sent students to SOAS for language training in the 1920s. Daniels mentions three who taught Japanese in the 1920s and 1930s: W. M. McGovern (from 1919 to 1922), Yoshitake Saburō (from 1923 to 1942) and Commander N. E. Isemonger (from 1921 to 1943).

William Montgomery McGovern (1897–1964), who was appointed to the School in 1919, served only a few years but later became famous for his exploits in illegally entering Ti-

5 A biographical portrait of B. H. Chamberlain by Richard Bowring is contained in Hugh Cortazzi, Gordon Daniels, eds., *Britain and Japan 1859–1991: Themes and Personalities* (London: Routledge, 1991).

6 Biographical portraits of Patrick Geoffrey O'Neill by Phillida Purvis and of Charles J. Dunn by Hugh Cortazzi are contained in Hugh Cortazzi, ed., *Britain and Japan: Biographical Portraits*, Vol. VIII (Folkstone: Global Oriental, 2013).

bet in 1922. His 1924 book *Tō Lhasa in Disguise: A Secret Expedition through Mysterious Tibet* was a popular success. His adventures (including to the upper Amazon basin and Peru in 1925–26, chronicled in his 1927 book, *Jungle Paths and Inca Ruins*) were well known in his day. He had learnt Japanese studying Buddhism in Kyoto at the Nishi Honganji temple before joining SOAS, and later had a long career at Northwestern University.

During War World II

After the attack on Pearl Harbor and then the Japanese capture of Singapore, there was an urgent need for special courses at SOAS to train translators and interpreters for service in India and Burma. J. K. Rideout and F. S. G. Piggott (1883–1966) taught on these courses; Rideout was a specialist in Chinese while Piggott was a retired military officer who had been Military Attaché in Tokyo.⁷ A number of Japanese nationals were also recruited to teach Japanese during the war; one of them was Yanada Senji who stayed on after the war; and worked closely with O'Neill.⁸ Another was Matsukawa Baiken 松川梅賢. Of the Japanese nationals appointed, the School retains a personnel file on only one, Yanada Senji 筭田銓次. After graduating from Tokyo Imperial University in 1931, he spent a year at Harvard University before coming to Britain in 1933. Between 1935 and 1941 he was the London correspondent of the *Yomiuri shinbun*. Briefly interned on the Isle of Man in 1942, he began teaching at the School from the September of that year. He remained a member of the academic staff until his death in 1972.

Arthur Waley (1889–1966), the renowned translator of Chinese and Japanese literature, who lived in the Bloomsbury area for much of his life, had various connections with SOAS and the nearby British Museum and Institute of Education.⁹ In the pre-war period he published translations in the *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* and was made an “additional lecturer” in Chinese poetry in 1924 and honorary lecturer in 1948. Waley gave consultations to students on Japanese literature and served as an external examiner for Japanese. He lived in a SOAS flat at 50 Gordon Square for several years. Ivan Morris, who completed a PhD at SOAS in 1951, was one of those who benefited from his guidance. Waley gave occasional lectures at the School after the war.

Daniels, after spending several years teaching in Japan, was appointed senior lecturer in

7 A biographical portrait of Major-General F. S. G. Piggott (1883–1966) by Antony Best is contained in Hugh Cortazzi, ed., *Britain and Japan: Biographical Portraits*, Vol. VIII (Folkestone: Global Oriental, 2013).

8 A biographical portrait of Senji Yanada by Sadao Oba and Anne Kaneko is contained in Hugh Cortazzi, ed., *Britain and Japan: Biographical Portraits*, Volume IX (Folkestone: Renaissance Books, 2015).

9 A biographical portrait of Arthur Waley by Philip Harries is contained in Hugh Cortazzi and Gordon Daniels, eds., *Britain and Japan 1859–1991: Themes and Personalities* (London: Routledge, 1991).

Japanese at SOAS in 1941, arriving just before the Pearl Harbor attack. His appointment was spurred by the British military's plan to begin sending increasing numbers of officers to SOAS for language training because of the impending war. He had gone to Japan in 1928 to work in the office of the Naval attaché in Tokyo hoping for a bit of adventure. He then worked at mastering the Japanese language and from 1933 he was a teacher of English at Otaru Commercial High School. He was head of the SOAS Japanese language programme under the general supervision of Professor Eve Edwards, professor of Chinese, during the war and afterwards until his retirement in 1967. He and his wife Otome were central to the language programme during the war and in the immediate post-war years.

The teaching of Japanese at SOAS during World War II (1942–1945) is relatively well documented with the book by Ōba Sadao 大庭定男 that was published in Japanese and then in English.¹⁰ The War Office had proposed that SOAS begin training students in Arabic, Japanese and Turkish from around 1939, and posts in these languages were created, but the military did not actively send any students, and it was not until after Pearl Harbor and the fall of Singapore that a programme of scholarships was started. A number of bright young schoolboys thought to have linguistic competence were recruited in 1942 for intensive courses in Japanese, Chinese, Persian and Turkish. As they were given accommodation at Dulwich school they came to be called the “Dulwich boys.” They included Ronald Dore, who became an outstanding Japanese scholar specializing in Japanese education and society, and Peter Parker (1924–2002), who later had a distinguished career in business, becoming chairman of British Rail, author of the “Parker Report” in 1986 on Oriental and African Languages and Area Studies, and namesake of the “Peter Parker Japanese Speech Contest”.¹¹

The armed forces, however, required many more linguists than the “Dulwich boys” could provide and SOAS had to arrange special crash courses for young uniformed soldiers, sailors and airmen. Many of these had to live in barracks in London while others were billeted in London homes. Although most were men, there were some women as well. For example, a group of seven women in the Women's Auxiliary Air Force learned Japanese at SOAS in 1943, before joining the very large contingent of women who worked at Bletchley Park, the centre for code-breaking during the War.¹²

Frank Daniels who had responsibility for organizing courses for the armed services was

10 Sadao Oba, *The “Japanese” War: London University's WWII Secret Teaching Programme and the Experts Sent to Help Beat Japan*, translated by Anne Kaneko (Folkestone: The Japan Library, 1995).

11 A biographical portrait of Sir Peter Parker by Hugh Cortazzi is contained in Hugh Cortazzi, ed., *Britain and Japan: Biographical Portraits*, Vol. VI (Folkestone: Global Oriental, 2007).

12 Michael Smith, *The Debs of Bletchley Park* (London: Aurum Press, 2015), 222–51. Correspondence from Val Salmond and Adrian Barker.

under the general direction of Professor Eve Edwards, who led most of the negotiations with the authorities and doubtless behind the scenes smoothed inevitable difficulties and staff problems. Despite the strains of working under pressure in London during wartime bombardment, morale was generally good and many of the service language students were keen to get out to Asia where they could practise the skills as they had learnt.

There were initially two main courses of a year to eighteen months. These were termed the translators' and the interrogators' courses: as the names suggest, the translators' course concentrated on the written language and the interrogators' course on the spoken language. For both courses teaching materials had to be created from an almost non-existent base with a focus on military terminology. Daniels and his assistants quickly had gramophone records made, in the old 78 rpm format, recording the voice of Yanada Senji using Japanese phrases which the students might need in conversation (e.g. *Anata demasu ka? Hai demasu*). Those studying for the interrogators' course had to listen over and over again to these records mouthing what was said on the records. In small groups they would study elements of grammar and vocabulary and texts in Rōmaji specially created for this purpose.

Hugh Cortazzi, who was an airman on an interrogators' course between September 1943 and December 1944, recalls that the temporary teachers included retired missionaries such as Canon France and serving officers such as Squadron Leader Lomax.¹³ Exceptional students, including Ronald Dore and Charles Dunn, were retained as assistant teachers and were not sent out to serve in the field. Those on the interrogators' courses also had daily "one to one" sessions with temporary Japanese staff. Hugh Cortazzi recalls Mr. Takaira and Mr. Shimizu, among former Japanese businessmen, as well as Canadian army Nisei, including sergeants Yamamoto and Yamaguchi.

The translators' courses were drilled in Japanese characters by various teachers including Major-General Piggott, who had spent three years in Japan in the 1930s as an army language student. He took them through the most commonly used characters in Rose-Innes' *Beginners' Dictionary of Chinese-Japanese Characters and Compounds*. This dictionary, as well as the *Kenkyusha Japanese-English Dictionary*, had to be quickly reproduced by photolithograph process in sufficient quantities for the students to use. It soon became apparent that the division between written and spoken Japanese was unsustainable, and both courses were given tuition in both written and spoken Japanese. The courses were intense, with students expected to turn up every day Monday to Friday and work either in classes or tutorials from 9 to 5 with a good deal of home-work (not easy in a barrack room or perhaps unheated lodgings with food

13 Cortazzi, *Japan and Back and Places Elsewhere: A Memoir*, Folkestone, UK: Global Oriental, 1998, 18–20.

increasingly rationed).

SOAS was fortunate in having a building, which in those days was new and had not been destroyed in the blitz, although buildings nearby had been destroyed or badly damaged. The V1s (flying bombs) and the V2s (rockets) posed a threat to all in London in 1944. One V2 fell in Tottenham Court Road as some airmen were walking back to have some lunch at their barracks in Hallam Street. One airman studying Japanese was killed.

Student numbers gradually increased, and at the peak in the 1944–45 session, there were 183 in total (not just members of the armed forces) learning Japanese, all but six of them full-time. The intensive wartime courses were considered effective in getting students to a level of Japanese sufficient for work in Southeast Asia (mostly India and Burma) and conflict areas, where they were working on captured documents or interrogating Japanese prisoners. The programme organizers adopted a tightly structured and demanding approach to language teaching, driven by the Department of Phonetics and Linguistics under J. R. Firth, who had been its head since 1941 and was the first Professor of General Linguistics in Britain. This emphasis on the modern language with a strong foundation in the written language was to remain at the core of the SOAS approach to Japanese language teaching after the war.

Among the wartime students of Japanese who later became academics in Japanese Studies were Louis Allen (Durham University), John McEwan (Cambridge University), Douglas Mills (SOAS and Cambridge University), Carmen Blacker (Cambridge University), Ronald Dore (SOAS and LSE), P. G. O'Neill (SOAS), Charles Dunn (SOAS), and Kenneth Gardner (librarian at SOAS and the British Library).¹⁴ Some of these were among the “Dulwich Boys,” who were given state scholarships to study language at SOAS and then entered the military. Many took degrees at SOAS after the war including Hugh Cortazzi, who eventually became British ambassador to Japan. William Beasley (1919–2006) was also of this generation but he was assigned to study Japanese at the US Navy Japanese Language School at Boulder, Colorado, as a Royal Navy officer.¹⁵

It has been remarked on by others that although many began learning Japanese when Britain was at war with Japan, the SOAS language programme still managed to instil in many of the students a respect for Japan that influenced their post-war development and the resto-

14 For biographical portraits of Louis Allen by Phillida Purvis, of Carmen Blacker and John McEwan by Peter Kornicki, of Douglas Mills by Richard Bowring, and of Kenneth Gardner by Yu-Ying Brow, see Hugh Cortazzi, ed., *Britain and Japan: Biographical Portraits*, Vol. V (Folkestone, UK: Global Oriental, 2004); Vol. VIII (Folkestone, UK: Global Oriental, 2013); Vol. X (Folkestone, UK: Renaissance Books, 2016); Vol. VII (Folkestone, UK: Global Oriental, 2007), respectively.

15 A biographical portrait of W. G. Beasley is contained in Hugh Cortazzi, ed., *Britain and Japan: Biographical Portraits*, Vol. VII (Folkestone, UK: Global Oriental, 2010).

ration of British relations with Japan. The programme's close links with the government continued in the post-war period, with special language training programmes being run for the Ministry of Defence and the Foreign & Commonwealth Office.

Post-War Expansion

A new degree syllabus for the BA Honours in Japanese was introduced in 1946. As Daniels described it in his Inaugural Lecture, “while including texts from the tenth century onwards, [it] put more emphasis on writing Japanese and included an oral examination. The practical aim we had set ourselves was to qualify students to begin research with only general supervision, either in the School or in a Japanese university.”

In 1946, as part of a review of provision for non-European studies in universities, the Scarborough Commission examined facilities for Oriental, Slavonic, East European and African Studies and recommended an expansion of Japanese studies into new disciplines. Daniels submitted an ambitious plan for the expansion of Japanese studies at SOAS to include social science disciplines, which was not followed initially, but in the end resulted in several new “language” posts and included a social science position filled by Ronald Dore. In the 1960s positions in the social sciences increased after the 1961 Hayter Report’s recommendations for the expansion of Oriental and African Studies. As Dore noted in his biographical portrait of Daniels, Daniels can be credited with creating the first programme of modern Japanese studies across a range of disciplines in Britain. Over the years, the expansion of specialists on Japan has never been easy; it has been driven by government reviews (Scarborough in 1946, Hayter in 1961, and Parker in 1987) and more recently by staff-expansion grants for three or five year partial or full funding. Grants from the following have greatly helped expand and maintain Japanese studies at SOAS: the Japan Foundation (Screech, Pizziconi, Surak, Miyamura posts), International Shinto Foundation (Dolce), Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures (Carpenter), and the Great Britain Sasakawa Foundation (Gerteis). Over the years, in addition to the “language” departments, new “discipline” departments were created within SOAS, most of which included specialists on Japan.

Japanese language study was the initial focus at SOAS, and members of the Japanese Section in the Far Eastern Department continued to contribute to scholarship on both contemporary and classical language. In 1959 Yanada Senji published a textbook with Charles Dunn, *Teach Yourself Japanese*. P. G. O’Neill produced a number of books on language including *Introduction to Written Japanese* (1963), *A Programmed Introduction to Literary Japanese* (1968) and *A Reader of Handwritten Japanese* (1984). Stefan Kaiser, who left in the mid-1990s to become Professor at Tsukuba University, published extensively on Japanese language

including *Japanese: A Comprehensive Grammar* (2001). He also collaborated with Helen Ballhatchet on a completely revamped version of *Teach Yourself Japanese* in 1979, and was one of a group of scholars who wrote the influential *Situational Functional Japanese* (1991–92). Lone Takeuchi, who was at SOAS from 1983 to 1996, is a scholar of historical linguistics and classical literature and produced *A Study of Classical Japanese Tense and Aspect* (1987) and *The Structure and History of Japanese: From Yamatokotoba to Nihongo* (1999). Young scholars from Japan were regularly recruited to assist with language teaching in the 1960s and 1970s, such as Matsudaira Susumu 松平進, a scholar of Japanese theatre, and Ikeda Tadashi 池田重, who wrote a book in English on Japanese classical grammar. Tanaka Kazumi 田中和美, a scholar of language pedagogy, ran the SOAS language programme from 1993 and then left in 2009 to become a professor at ICU in Tokyo. She was the driving force behind the establishment of the British Association of Teachers of Japanese (BATJ) in 1998.

Japanese studies staff also conducted research on various aspects of Japanese culture and society, with many working on literary subjects. Daniels worked on language and folklore, while Charles Dunn published two important books on Japanese theatre, *The Early Japanese Puppet Drama* (1966) and *The Actors' Analects* (1969, with Torigoe Bunzō 鳥越文蔵). In addition to his work on language, P. G. O'Neill also published *Early Nō Drama: Its Background, Character and Development 1300–1450* (1958) and *A Guide to Nō* (1954). Kenneth Strong (1925–1990) completed a BA in Japanese at SOAS in 1951 and then later taught at SOAS from 1964 to 1980. He published *Ox against the Storm* (1977), a biography of Japan's conservationist pioneer Tanaka Shōzō, and several highly regarded translations of modern fiction: Niwa Fumio's *The Buddha Tree* (1966), Tokutomi Kenjiro's *Footprints in the Snow* (1970), Kinoshita Naoe's *Pillar of Fire* (1972), Shimazaki Tōson's *The Broken Commandment* (1974) and Arishima Takeo's *A Certain Woman* (1978). Other scholars in the Far Eastern Department in this period included Akemi Horie-Webber, a scholar of theatre, who retired in 1994, and Miyoko Uraguchi Docherty, a scholar of modern Japanese literature, who left SOAS in 1994.

Many scholars began their careers at SOAS in the postwar period before moving to other institutions: Stanley Weinstein (Yale), Douglas Mills (Cambridge), Christopher Seely (Canterbury), Phillip Harries (Oxford), Nicola Liscutin (Birkbeck), and Susan Napier (Tufts); art historian John Clark (Sydney University) is another among them, as is John Carpenter (Metropolitan Museum of Art, New York). Hugh Clarke, a scholar of Okinawan language and culture, taught at SOAS in the 1970s and then went on to become Professor of Japanese at Sydney University. David Chibbett, who wrote *The History of Japanese Printing and Book Illustration* (1977), was librarian at SOAS before taking up a position in the British

Library, but died prematurely shortly afterwards. Helen Ballhatchet was both a student and then a lecturer at SOAS (1979–1991) before taking up a position at Keio University. Ivan Morris completed his PhD at SOAS in 1951 before taking up a position at Columbia.¹⁶

The Japanese programme was led by P. G. O'Neill from the late 1960s onwards. After his retirement in 1986, the School tried to expand the discipline range of Japanese studies in the department and in 1986 appointed Brian Moeran from the Anthropology Department to the chair of Japanese studies. Moeran resigned after a few years, however, to take up a position in Hong Kong. Andrew Gerstle was then appointed to the chair of Japanese studies in 1993. He was head of the AHRC funded Centre for Asian and African Literatures (jointly with University College London) in 2000–2005, a project which stimulated comparative literature studies at SOAS, and he has co-organized two exhibitions at the British Museum on Osaka Kabuki in 2005 and *shunga* erotic art in 2013.

John Breen and Helen Ballhatchet report that in their time most professors and lecturers took a role in the language programme. O'Neill, Dunn and Kenneth Strong were all considered to be good language teachers and their textbooks were used in the courses. From around the year 1977, SOAS (and other programmes in the UK with honours degrees in Japanese) began to send students for a summer in Japan, initially at Nanzan University in Nagoya. Later SOAS developed its own programme of in-country language training at the Hokkaido University of Education for the third term of year one and the summer vacation. From 1997 SOAS undergraduate students have been sent to various Japanese universities for their entire second year (later third year). This in-country training altered considerably the teaching programme, and was a stimulus to learning and of course to students' fluency in the spoken language.

The language programme of the Japanese section continued to expand during the 1980s and 1990s and into the 21st century, and with it the number of Japanese native language teachers. Setsuko Cornish taught Japanese language for many years in the Department. Non-degree teaching of Japanese language is carried out by the SOAS Language Centre, which offers a variety of courses to the public. The leader of the team of Japanese language teachers is Okajima Shin'ichirō 岡島慎一郎. Yoshiko Jones has been a key teacher in the Language Centre as well as in the degree programme for many years. The Centre collaborates with the London Japan Foundation office in teaching beginners' level courses, and in hosting the Japanese Language Proficiency Test.

16 A biographical portrait of Ivan Morris by Nobuko Albery is contained in Hugh Cortazzi, ed., *Britain and Japan: Biographical Portraits*, Vol. IV (Folkestone, UK: Japan Library, 2002).

The Japan Research Centre (JRC) was founded in 1978 with William Beasley as inaugural chair. Sugihara Kaoru 杉原薫 played an important role in expanding the activities of the JRC in the 1990s. The JRC supports research activities on Japan, such as regular weekly seminars, annual lectures (Named lectures: Meiji Jingu, Beasley, Tsuda), conferences/workshops, performance events, as well as hosting academic visitors from Japan and “Research Associates” in the UK. It is also home to the SOAS Studies in Modern and Contemporary Japan series (editor, Christopher Gerteis), published by Bloomsbury Publishing. Currently it also hosts the journal *Japan Forum*, edited by SOAS staff. The JRC includes all the SOAS staff who work on Japan in the various disciplinary departments, and they will be discussed below.

The current staff in what is now the Japan and Korea department is as follows; Professors and Lecturers: Stephen Dodd (modern literature), Andrew Gerstle (literature, drama, visual arts), Griseldis Kirsch (media), Barbara Pizziconi (linguistics), Nana Sato-Rossberg (translation studies), and Isolde Standish (film) Senior Teaching Fellows: Alan Cummings (literature, drama), Satona Suzuki (history) Principal and Senior Lectors in Japanese language: Furukawa Akiko, Harumi Seiko, Kanehisa Misako, Kashiwagi Miwako, Shiraki Hitoshi, and Taniguchi Kaori. The language staff continually produce teaching materials to supplement the language textbooks.

Literary Studies

Literature has been a key discipline in the programme. The publications of O’Neill, Dunn and Strong have been mentioned above. Other notable work on literature has been produced at SOAS by Douglas Mills (*A Collection of Tales from Uji: a Study and Translation of “Uji shūi monogatari,”* 1970), Christopher Seeley (*A History of Writing in Japan*, 1991), Phillip Harries (*The poetic memoirs of Lady Daibu*, 1980), Nicola Liscutin (*Cultural Studies and Cultural Industries in Northeast Asia: What a Difference a Region Makes*, 2009), and Susan Napier (*The Fantastic in Modern Japanese Literature: the Subversion of Modernity*, 1996).

Film and Media

The area of film and media studies has from the late 1990s developed considerably at SOAS, with two centres, one for film and one for media studies, and recently a BA in Global Cinema and Screen Arts was created in collaboration with Birkbeck College. Current staff members Isolde Standish and Griseldis Kirsch focus on Japanese film and media.

History

Japanese history has been a core discipline from the outset with the appointment of Longford to King's College London. The eminent scholar of early European interactions with East Asia, C. R. Boxer (1904–2000), previously at King's College London, was appointed Professor of the History of the Far East at SOAS in 1951.¹⁷ However, he served for only two years and was succeeded in the Chair by William Beasley, one of the most important scholars of Japanese history in the twentieth century. He began teaching at SOAS in 1947, became Professor of the Far East in 1954 and retired from SOAS in 1983. His focus was on Japan's transition from the Tokugawa to Meiji periods and on diplomatic history. His first book was *Great Britain and the Opening of Japan* (1951); his monumental prize-winning work was *The Meiji Restoration* (1973), and his most widely read book *The Rise of Modern Japan* (1990). His *Japanese Imperialism 1894–1945* (1987) is a bold and challenging reappraisal of Japan's colonial period. Beasley had many PhD students in both Chinese and Japanese modern history, including Ian Nish, who later taught at the London School of Economics and Politics (LSE) and wrote *The Anglo-Japanese Alliance: the Diplomacy of Two Island Empires 1894–1907* (1966) and *The Origins of the Russo-Japanese War* (1995). Beasley continued to be active and to publish long after his retirement from SOAS and the annual Beasley Lecture was established in 2013 in his honour.

G. W. Robinson was at the School for two years from 1955–57. Andrew Fraser, a scholar of Japanese local history who completed a PhD under Beasley and taught at SOAS in the early 1960s, moved to the Australian National University's Research School of Pacific Studies (*National Election Politics in Tokushima Prefecture, 1890–1902*, 1972). He was succeeded in 1966 by Richard Sims, who wrote *French Policy towards the Bakufu and Meiji Japan, 1854–95* (1998) and *Japanese Political History since the Meiji Restoration, 1868–2000* (2001). Sugihara Kaoru, a prolific scholar of economic history and of Japan's relations with Asia, was at SOAS in the 1980s to mid-1990s before moving to a Chair at Osaka University; he later wrote *Japan, China, and the Growth of the Asian International Economy, 1850–1949* (2005). He was very active at SOAS, particularly as Chair of the Japan Research Centre.

The historian John Breen had a long career at SOAS before becoming a professor at the International Research Center for Japanese Studies in Kyoto. His publications have been on state and religion, particularly Shinto; he is the author of *A New history of Shinto* (2010) and

17 A biographical portrait of Charles Boxer by James Cummins is contained in Hugh Cortazzi, ed., *Britain and Japan: Biographical Portraits*, Vol. IV.

Yasukuni, the War dead and the Struggle for Japan's Past (2008), as well as two books in Japanese on the Ise Shrine. He is also editor of the journal *Japan Review*. The current SOAS historians are Angus Lockyer and Christopher Gerteis; both focus on modern Japan. Japanese history is also taught in the art and religious studies departments.

Anthropology and sociology

Anthropology (and sociology) were established early in the post-war era, with Christoph von Fürer-Haimendorf as head of department, initially with a particularly strong focus on South Asia. Ronald Dore was appointed initially as a social science specialist, but not in the anthropology department. Dore, one of the most eminent scholars of Japan, produced many books on a variety of topics, from educational history to city life and economics. They include *City life in Japan: A Study of a Tokyo Ward* (1963), *Education in Tokugawa Japan* (1965), *Land Reform in Japan* (1984), *British Factory, Japanese Factory: The Origins of National Diversity in Industrial Relations* (1973), and *Shinohata: A Portrait of a Japanese Village* (1978).

Rodney Clark, who completed his PhD in the Department, was appointed lecturer in anthropology in 1974, but resigned in 1979 to work in the world of finance and to write plays. His book *The Japanese Company* (1979) is well known and still widely cited. Brian Moeran, after completing his PhD at SOAS, was appointed lecturer in 1981. He is well known for his many publications on the pottery industry, advertising and media: *Lost Innocence: Folk Craft Potters of Onta, Japan* (1984), *A Japanese Advertising Agency: An Anthropology of Media and Markets* (1996), and *Language and Popular Culture in Japan* (2011). Moeran gained some notoriety when his memoir on life as a professor of Japanese at SOAS was published in Japanese in 1988.

Dolores Martinez began teaching at SOAS in 1989, occupying a new post created following the Parker Report, initially as a replacement for Brian Moeran, who had moved to the Far East Department as chair of Japanese studies. After Moeran left for Hong Kong in 1991, she became the only Japan specialist in the department. Martinez published on social rituals and film, including for example *Remaking Kurosawa: Translations and Permutations in Global Cinema* (2009). She was very active and supervised a number of successful PhD students before her retirement in 2012, when Fabio Gygi replaced her.

Economics

G. C. Allen (1900–82), a Fellow of the British Academy who taught for many years at University College London, was an important early scholar of the economy of Japan, and published many books on Japanese economic history including *Modern Japan and Its Problems*

(1927) and *A Short Economic History of Modern Japan, 1867–1937* (1946).¹⁸ He had learned Japanese in Japan in the 1920s while teaching economics there. His connections with SOAS were considerable and he left £3000 to SOAS in his will to establish a prize in the Economics of Japan.

The Department of Economics has a long history of encouraging staff to learn Japanese for research and teaching on the Japanese economy. Seymour Broadbridge, an early appointment in the department, learnt Japanese while at SOAS, although he left to return to Australia before teaching on Japan. Broadbridge was already an established economic historian with a PhD on British railway history in the nineteenth century. He studied Japanese language, and then researched small-scale industrial firms and published *Industrial Dualism in Japan* (1966).

The first head of economics and politics at SOAS was Edith Penrose whose husband, E. F. Penrose, had been a major force in Japanese economic studies (*Population Theories and Their Application, with Special Reference to Japan*, 1934). He was another who had worked in Japan in the 1920s. This connection led her to agree to the suggestion that lecturer Christopher Howe take up Japanese. Howe, a specialist on East Asian trade, taught on the economics of the region for more than forty years at SOAS, retiring from teaching in 2015. His major work on Japan is *The Origins of Japanese Trade Supremacy: Development and Technology in Asia from 1540 to the Pacific War* (1996).

Professor Machiko Nissanke is a specialist on Africa but has contributed to teaching on Japan. Costas Lapavistas is another who was given time to learn Japanese language in order to conduct research on Japan. His field is comparative political economy and finance, and in 2015, he was elected an MP in the Greek parliament. Miyamura Satoshi is the current specialist on Japan and East Asia in the department, and Ulrich Volz also teaches on the Japanese economy. Sugihara Kaoru, who was in the History Department, was an important figure in Japanese economics during his time at SOAS in the 1980s–90s. Penelope Francks (Leeds University) is a notable graduate of the department; she has written *Technology and Agricultural Development in Pre-war Japan* (1984) and *Japanese Economic Development: Theory and Practice* (1999). Another recent graduate is Ralph Paprzycki, who wrote *Inter-firm Networks in the Japanese Electronics Industry* (2005).

18 A biographical portrait of G. C. Allen by Sarah Metzger-Court is contained in Hugh Cortazzi and Gordon Daniels, eds., *Britain and Japan 1859–1991: Themes and Personalities* (London: Routledge, 1991).

Linguistics

Linguistics and language research has been at the core of Japanese studies at SOAS. Kaiser and Takeuchi have already been mentioned. Barbara Pizziconi was appointed particularly with the aim of creating an Applied Linguistics & Language Pedagogy programme in Japanese and this has now been running for many years. Hoshi Hiroto taught theoretical linguistics from 1994 to 2004 before moving to Akita University. Mika Kizu replaced him and taught theoretical and applied Japanese linguistics until 2013. Noriko Iwasaki, a specialist on applied linguistics and language teaching, was appointed to a post in the linguistics department to develop this field at SOAS across its languages. Professor Peter Sells, who headed the SOAS linguistics department between 2007 and 2011, also contributed to research on Japanese theoretical linguistics, as did Andrew Simpson, who conducted several comparative studies including Japanese. Nana Sato-Rossberg was appointed in 2014 with the particular task of developing Japanese translation studies at SOAS.

Business and Finance Studies

This field developed initially from the distance-learning programme, where Sonja Ruehl has been a key figure. The department of financial and management studies, initially only for postgraduates, has recently expanded to include undergraduate degrees, including a BSc in International Management that includes a year in Japan, which started in 2012. Helen Macnaughtan and Tuukka Toivonen are current specialists on Japan in the Department.

Politics

The politics department has been less successful in maintaining research and teaching on Japanese politics over the years. Richard Boyd, the author of *Asian States: Beyond the Developmental Perspective* (2005), was lecturer in Japanese politics for many years before moving to Leiden University. Lesley Connors taught for a few years in the late 1990s, and Phil Deans and Kobayashi Yuka have included Japan as part of their teaching on East Asian international relations. Currently Kristin Surak is the specialist on Japan in the Department.

Geography

Japan was at the core of the geography department from the outset. Charles Fisher (1916–

1982) founded the Department of Geography in 1965.¹⁹ He had been a prisoner of war in Changi and on the Burma Railway after the fall of Singapore, and was a specialist on East Asian geography. He wrote *Three Times a Guest: Recollections of Japan and the Japanese, 1942–1969* (1979).

John Sargent, who died in 2013, began his PhD at SOAS in 1962 and was appointed to the newly established Geography Department in 1965.²⁰ He served as head for seven years and retired in 1999. He published *Perspectives on Japan: Towards the Twenty-first Century* (2000) and *Geographical Studies & Japan* (1993). The latter was co-authored with Richard Wiltshire, who began teaching at SOAS in 1979 after spending several years in Japan teaching at Tohoku University. He also published *Relocating the Japanese Worker: Geographical Perspectives on Personnel Transfers, Career Mobility and Economic Restructuring* (1995). Thus SOAS, unusually in the academic world outside Japan, had two specialists on Japanese geography able to use Japanese for research and teaching. Paul Waley of Leeds University, who published *Japanese Capitals in Historical Perspective: Place, Power and Memory in Kyoto, Edo and Tokyo* (2000), is a notable PhD graduate.

The department was small, however, and early in 2001 it merged with the larger one at King's College London. Joint degrees continue to be offered in geography in collaboration with King's College. SOAS's loss was King's gain. Richard Wiltshire reports that student numbers for Japanese geography are far greater at King's than at SOAS.

Art History

SOAS produced a PhD in Japanese art in 1980 before the Department of Art and Archaeology was established. This was Sebastian Izzard (now an important Japanese art dealer in New York City), who was supervised by William Watson, then professor of Chinese Art at the Percival David Foundation, who had a strong interest in Japan and was a central figure in the Royal Academy's *Great Japan Exhibition* of 1981–82.²¹ The Department, which was founded in 1988, appointed its first Japan specialist, Timon Screech, in 1991. His position was initially supported by grants from the Japan Foundation and Sotheby's. Through his many publications, Screech has established himself as a world-renowned scholar of the art and visual history of the Edo period.

19 A biographical portrait of Charles Alfred Fisher by Gordon Daniels is contained in Hugh Cortazzi, ed., *Britain and Japan: Biographical Portraits*, Vol. VIII.

20 A biographical portrait of John Sargent is contained in Hugh Cortazzi, ed., *Britain and Japan: Biographical Portraits*, Vol. IX (Folkestone, UK: Renaissance Books, 2015).

21 An account of this exhibition by Nicolas MacLean in Hugh Cortazzi, ed., *Britain and Japan: Biographical Portraits*, Vol. IX.

When the Sainsbury Institute for Japanese Arts and Cultures (SISJAC) was founded in Norwich in 1999, it was created with a London branch in SOAS, and Screech for the first five years was a joint appointment with SISJAC. John Carpenter was appointed to SOAS with SISJAC funding, and from 2004 was the SISJAC London office representative. After several years at SOAS, John Carpenter moved to become curator of Japanese art at the Metropolitan Museum of Art in New York. Carpenter's focus has been primarily on text and image in Japanese art, from the classical period to modern times, and he is the author of *Hokusai and His Age: Ukiyo-e Painting, Printmaking and Book Illustration in Late Edo Japan* (2005) and *Designing Nature: The Rinpa Aesthetic in Japanese Art* (2012). Recent PhDs include Alfred Haft, who is now at the British Museum and has written *Aesthetic Strategies of the Floating World: "Mitate," "Yatsushi," and "Fūryū" in Early Modern Japanese Popular Culture* (2013), and Maezaki Shinya 前崎信也, a lecturer at Kyoto Women's University.

From early on the Department has run a Diploma in Japanese art on its own or in collaboration with Sotheby's. Arichi Meri, who received her PhD from the Department, has been key as convenor of this programme. Many students over the years have gone on to get postgraduate degrees in the Department after completing the Diploma.

Religious Studies

SOAS has a long tradition of the study of religion, although the department was formed relatively recently. Timothy Barrett, now emeritus Professor of East Asian History, moved from History to Religious studies a few years after the department was created in 1993 as a specialist on East Asian religion. Brian Bocking, who has written *The Oracles of the Three Shrines: Windows on Japanese Religion* (2001) taught Japanese religion in the Department from 1999 to 2007 before moving to University College Cork in Ireland. John Breen played a crucial role in enabling SOAS to obtain a grant from the International Shinto Foundation for a post in Japanese religion and funding for the Centre for the Study of Japanese Religions. Lucia Dolce, a specialist on Japanese Buddhism, was appointed in 1998 and the Centre was launched in 1999. Under Dolce's leadership the Centre and the study of Japanese religions have flourished at SOAS. The department has also been the recipient of grants from the Numata Foundation, Bukkyō Dendō Kyōkai and Agonshū for research and positions on religion, and in that connection Vincent Tournier, a specialist on Buddhism, has joined the Department as Seiyu Kiriya Lecturer in Buddhist Studies.

Music

SOAS has had a long tradition of research on the traditional Japanese performing arts, with

O'Neill (noh), Dunn (bunraku and kabuki), Gerstle (kabuki and bunraku), and Cummings (kabuki and contemporary music). However, the first specialist on music was David Hughes who taught at SOAS from 1987 to 2008. Upon arrival (before the Centre of Music Studies had become an official Department of Music), he covered the music of East and South East Asia, as well as general ethnomusicology. His main regional research focus was Japan, but he also worked on Indonesia. He has written *The Ashgate Research Companion to Japanese Music* (2008, with Alison Tokita) and *Traditional Folk Song in Modern Japan: Sources, Sentiment and Society* (2008).

Hughes has been particularly active in organizing musical events and in leading traditional music groups, with over 100 events small and large during his time at SOAS and for these activities he was awarded the Japan Society award. He was also active in building up resources at SOAS on Japanese music. The SOAS Library has an impressive collection of books and AV materials related to Japanese music and performing arts. The Department of Music owns a representative variety of Japanese instruments; several were gifts from individuals, while others were acquired through grants obtained in connection with various summer schools and short courses. After Hughes retired in 2008, he was replaced by a Southeast Asia specialist.

Law

East Asian law was taught and researched at SOAS from early in the expansion of law studies as a discipline in the 1980s. Donald Clarke, a specialist on Chinese law, taught Japanese law during his brief tenure at SOAS before moving on the University of Washington and then George Washington University. Frank Bennett was the first appointment as a specialist in Japanese law in 1988. However, after he left in 1998 to take up a position in Nagoya University, there has not been a specialist of Japanese law at SOAS.

Library

The SOAS Library, as the National Library for Asian and African Studies, has had an important role to play in Japanese studies, not only at SOAS but nationally as well. SOAS has been able to have specialist librarians in order to enlarge and manage the collection. The list of successive Japanese librarians is: 1950–1955 K. B. Gardner (Far East); 1955–1955 G. W. Bonsall (Far East); 1958–1969 Miyamoto Shōzaburō (Far East; Japan from 1968–); 1969–1972 D. G. Chibbett (Japan and Korea); 1972–1995 Brian Hickman; 1973–2010 Yasumura Yoshiko; 1995–present Kobayashi Fujiko.

The Library holds over 160,000 items for Japanese studies as of 2015. The Library has

collected research and teaching materials in a wide range of academic disciplines except for the sciences (although it includes books on the history of science) and books for children.

The origin of the collection was a few hundred books, mainly in European languages, which were transferred from the London Institution to the newly founded School of Oriental Studies in 1917. During the first 30 years, the collection was slowly but steadily expanded by purchase and donations. Notable donations included the collections of Richard Ponsonby-Fane (1878–1937), who resided in Japan from 1919 until his death, and Sir Henry Partlett (1842–1921) in the mid-1920s, and some 400 volumes of mainly 19th-century Japanese woodblock printed books donated by Ms S. de Watterville in memory of her brother Lieutenant-Colonel E. F. Calthrop, one time military attaché in Tokyo, in 1927.²² Other early donations include books and prints from Frederick Anderson, the Ernest Satow collection of early books, Arthur Waley's collection and Japanese books brought back from Japan by the Duke of Gloucester, during the 1928–29 academic session. The School purchased confiscated materials from the embassy of Japan in London in 1947. The total holding of Japanese-language books at that time was still less than 3,000.

The major step in building up the collection was a special grant received as a result of the Scarborough Report in 1947. In 1949 the substantial sum of £4,000 was spent on Japanese books, partly from School funds and partly from a special non-recurrent grant made available by the University Grants Committee. Also, £1,000-worth of Japanese Sinological materials was acquired. Walter Simon, the Professor of Chinese, and Frank Daniels visited China and Japan to obtain Chinese and Japanese texts to build up the Library.

During the 1950–51 academic year, the retiring Chairman of the Governing Body, Lord Harlech, presented to the School some 18th–19th century Japanese colour prints, book illustrations, and sketch albums, which formed a major part of the Japanese prints collection together with the works presented as a gift from Frederick Anderson, governor of the School from 1917 to 1939. In the 1952–53 academic year, the School received some 2,000 volumes formerly kept in Japanese embassies and consulates in Europe during the 1939–45 war, which included many classified documents relating to Japanese foreign policy and activities abroad. Those books are still easily spotted by the stamp of the Imperial crest, a chrysanthemum with sixteen open petals, inside the books.

The Hayter Report on Oriental and African Studies (1961) recommended that the Library should operate as a national library in buying important material published in, or relat-

22 On this donation see S. Yoshitake, "Notes on Japanese Literature," in *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 4 (1928): 679–688.

ing to, Asia and Africa. It also recommended that the main expansion in Oriental and African studies during the next ten years should be in fields such as history, geography, law, economics, and social studies. Accordingly, the Library increased acquisitions relating to post-Meiji Japan.

Once SOAS was recognized as a National Library, the Library received grants and donations from external sources, including the Ford Foundation Far Eastern Studies Program (£10,000 in 1967–68), Mitsui and Co. Europe Ltd. (£5,000 for 6 years from 1982/83), TDK Ltd. (£5,000 to update the Japanese business collection in 1984/85), and Hamada & Matsumoto (£5,000 for the purchase of Japanese law-related materials in 1987/88). The Japan Foundation, Toshiba International Foundation, Kasumi Kaikan, Shoyu Club, the Metropolitan Center for Far Eastern Art Studies, and the Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures are among the donors who have been supporting the collections in recent years.

Between 1975 and 1992, the UK Japan Library Group organized the National Co-operative Scheme for the Acquisition of Japanese Vernacular Monographs, financed by a grant from the Japan Foundation Endowment for the Promotion of Japanese Studies. SOAS focused its acquisitions on language, modern literature, law, folklore, and geography.

Two book-buying tours to Japan were made by SOAS librarians in order to improve the collection: Miyamoto Shōzaburō in 1968 on a grant from the Ford Foundation Far Eastern Studies and the School, and Brian Hickman in 1975 on a grant from the Japan Foundation Endowment Committee and the School. They also established contacts for exchange programmes with leading institutions and some are still active today.

The Burma Campaign Memorial Library, which includes over 300 Japanese-language books, was inaugurated in May 1999. This is a comprehensive collection of writings about the war in Burma (1942–1945). The Japanese books cover official military records, memorial publications from some Infantry Regiments, memoirs, and novels.

Electronic resources have become an increasingly important part of the Japan collection. Teaching and research now benefit from using databases, and the Library provides access to many Western-language databases of primary sources, e-books, and journals. The number of e-resources available in Japanese is increasing every year, and major newspapers (*Asahi*, *Yomiuri* and *Nikkei*) and important reference works are available in the Library. The development of full-text Japanese journal databases for arts and humanities in Japan has been very slow so the Japan collections will depend on traditional paper copies for Japanese language resources for some time to come. The Japan collection will continue to change its focus to follow academic trends while it keeps the traditional materials as treasures of knowledge.

Note on the sources used

Correspondence received from the following: Meri Arichi, Helen Ballhatchet, Adrian Barker, Timothy Barrett, Frank Bennett, John Breen, Ian Brown, Sir Hugh Cortazzi, Christopher Howe, David Hughes, Kobayashi Fujiko, Peter Kornicki, Dolores Martinez, Adrian Mayer, Machiko Nissanke, Adele Picken, Val Salmond, Timon Screech, Richard Sims, Tanaka Kazumi, Richard Wiltshire and Thomas Young.

SOAS Archives of Personal Files and Annual Reports.

Obituary of P. G. O'Neill. *The Times*, 23 March, 2012.

Obituary of John Sargent. SOAS website. (<https://www.soas.ac.uk/news/newsitem86103.html>).

Brown, Ian. "Teaching languages to the armed forces." Draft chapter in *History of SOAS*, (forthcoming).

Daniels, Frank J. *Japanese Studies in the University of London and Elsewhere: An Inaugural Lecture Delivered on 7 November 1962*. London: School of Oriental and African Studies, University of London, 1963.

de Gruchy, John W. *Orienteering Arthur Waley: Japonism, Orientalism, and the Creation of Japanese Literature in English*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2003.

Koyama Noboru. "Eikoku ni okeru nihon kenkyū hatten no rekishi," *Nihon kenkyū*: Kyōto Kaigi, 1994.

Moeran, Brian. *Rondon Daigaku Nihongo Gakka: Igrisujin to Nihonjin to*. Tokyo: Jōhō Center Shuppankyoku, 1988.

Morris, Ivan. *Madly Singing in the Mountains: An Appreciation and Anthology of Arthur Waley*. New York: Walker and Company, 1970.

O'Neill, P. G. *Collected Writings of P.G. O'Neill*. Richmond, Surrey: Japan Library, 2001.

Ōba Sadao. *Senchū Rondon Nihongo gakkō*. Tokyo: Chūō Kōron Sha, 1988.

Sadao Oba. *The "Japanese" War: London University's WWII Secret Teaching Programme and the Experts Sent to Help Beat Japan*, translated by Anne Kaneko. Folkestone, Kent: Japan Library, 1995.

Smith, Michael. *The Debs of Bletchley Park*. London: Aurum Press, 2015.

Tayama Hiroko. "Dainiji sekai taisenchū no Igrisu ni okeru Nihon go kyōiku: tekiseigo toshite manabareta nihongo." In *Yamaguchi Kōji kyōju taishoku kinen ronbunshū: Koto-ba to sono hirogari (Ritsumeikan Hōgaku Bessatsu, 2005)*.

12 The French Society of Japanese Studies

Cecile LALY

The “Société Française des Études Japonaises” (SFEJ) (French Society of Japanese Studies) is one of, if not the largest, academic associations of Japanese Studies in France. Its role is to offer information and to organize scholarly activities related to Japanese Studies in France.

SFEJ, in its present form, was founded in 1990 by a committee of about fifteen scholars¹ who are all well known today for their contributions to Japanese Studies in France, such as Yves-Marie Allieux, the translator of several novels by Mishima Yukio; Jean-François Sabouret, an eminent researcher on Japanese sociology; and Cécile Sakai, a notable specialist on Japanese literature.

Just one year after its creation, SFEJ membership quickly rose to about 130 people. Since then, membership numbers have increased in tandem with the development of Japanese Studies in France. The association is currently comprised of about 180 members, from graduate students to researchers and university professors, all of whom are involved in Japanese Studies.

In 1992, hot on the heels of its founding, SFEJ organized a symposium dedicated to the Japanese language, or more specifically to Japanese language education. It was the first large-scale event coordinated by the association. Today SFEJ is best known for the “Colloque de la SFEJ,” a biennial symposium established in 1994, that usually takes place in December. For each symposium, a general topic is chosen with the aim of gathering scholars not only from the field of Japanese language and literature, but also from economics, sociology, arts, or any other topics related to Japan.

For example, the theme of the 12th symposium, scheduled to run December 15-17, 2016, in the city of Lyon, is “graphic arts and visual culture in Japan.” As this symposium is the biggest event of its kind in France for scholars of Japanese studies, it has become the pivotal gathering place for the majority of scholars from Japanese Studies departments at French universities to share research information and discuss their latest work.

1 The complete list of the committee members is as follow: Yves-Marie Allieux, Patrick Beillevoire, Augustin Berque, Jean-Pierre Berthon, Laurence Caillet, Guy Gagnon, Hélène Haon, Annick Horiuchi, Patrick Le Nestour, François Macé, Jean-Jacques Origas, Jean-François Sabouret, Cécile Sakai, Marion Saucier, Kazuhiko Yatabe, and André Włodarczyk.

It also provides a valuable opportunity for researchers who may not work in Japanese Studies departments, but study Japan-related topics, to meet with specialists. Needless to say that advanced doctorate students and young researchers are given the opportunity to present their work, and to garner advice from established researchers and professors from various universities and institutes.

This symposium is also open to foreign Francophone researchers. To that end, the conditions to submit a proposal are the ability to speak French, to research a Japan-related subject by employing Japanese sources, and to register with the association if the proposal is selected. At the last symposium in 2014, more than 50 speakers presented their research, most of them French scholars, but some from other European countries, the United States, and Japan. Since 1994, the papers presented have been published in a series of collections titled *Japan Pluriel* by Editions Philippe Picquier in the city of Arles. This publication is an informative resource guide to the latest trends in Japanese Studies in France.

As the number of students in Japanese Studies departments increases, the desire for information exchange among fellow students has also increased. In 2009, SFEJ started a national workshop for doctorate students, known as “Atelier Doctoral des Études Japonaises” (ADEJ), which means “Doctoral workshop of Japanese Studies.” It takes place in December, in odd years, to avoid overlapping with the above-mentioned biennial symposium, which takes place in even years. This workshop is mainly attended by Francophone Ph.D. students, and unlike the symposium, these workshops do not focus on a specific theme each time. Based on the submitted proposals, the selection committee organizes the students into topic groups. At the workshop, students give a short presentation in front of the group, and then discuss their topics and methodology among themselves while being supervised by a professor.

SFEJ also has its own website, accessible at the address: <http://sfej.asso.fr>. The site was revamped in 2014, and is accessed by about fifty visitors per day. The purpose of this website is to be the most comprehensive information source on Japanese Studies in France. It collects information on Japanese Studies from undergraduate to master and doctorate levels at university departments, while also providing information on research networks, job opportunities, fellowships, publications, and specialized blogs. The information posted on the website is sent to association members through a mailing list on which new members are automatically registered. The mailing list also offers supplementary information on calls for papers by other workshops, seminars or symposium panels.

In addition, since 1990, SFEJ has published an annual *Bulletin* for members, which was originally distributed in paper format before the switch to digital format in 2006. This *Bulle-*

tin summarizes Japanese Studies activities in France for the year, and brings news of annual awards dedicated to Francophone Japanese Studies, such as the “Prix Shibusawa-Claudel,” created in 1984, for high achievement in studies of French and Japanese culture each year, the “Prix Konishi de la traduction littéraire,” established in 1993, for an excellent translation of Japanese or French literature, and the “Prix Zoom Japon,” inaugurated in 2003, for an outstanding French translation of a Japanese novel and a Japanese manga each year.

The *Bulletin* publicizes those who have received awards not for Japanese studies itself, but rather academic achievement that happens to be Japan-related research. The *Bulletin* also lists those who have been awarded masters and doctorate degrees, as well as “habilitation à diriger des recherches”² in France. The *Bulletin* supplies information on books on Japanese studies and translations of Japanese literature published in France, as well as information on major exhibitions on Japan, and recipients of collaborative research projects in France and Europe. In other words, the *Bulletin* is a comprehensive guide to everything related to Japanese Studies in France.

In addition, the *Bulletin* compiles an informative yearbook, which includes all the member names, their positions, research interests, contact details, and their pages on the site of their institution or “academia.edu.” From 2016, there is also a link to members’ Internet profiles. Thus, the latest yearbook will greatly contribute to information exchange among scholars of Japanese studies.

2 The “Habilitation à Diriger des Recherches,” translated as “authorization to supervise research,” is the highest diploma that can be awarded in France, for those with doctoral degrees who aim for tenure positions as university professors.

13 Japanese Studies and Area Studies at the Ohio State University

Richard TORRANCE

The Ohio State University (OSU) is currently the third largest public university in the United States. It has a student population of about 55,500. Ohio's population is typical of the United States as a whole in terms of its ethnic and racial composition. The makeup of the student population is probably typical of large state universities in the US. Coming to OSU in Columbus, Ohio for the first time in 1989, I thought what on earth is a Department of East Asian Languages and Literatures doing in the middle of the country. In those days, Columbus had the reputation of being a "Cow Town." Over the years, however, drawn by a word of mouth that Columbus was a relatively safe and easy place to live and work, immigrants have flocked to the city, providing much greater diversity to the city.

Central Ohio is home to a variety of Japanese businesses. Chief among them is a large Honda plant. The attached Appendix 1 provided by the Japanese Consulate in Detroit in 2014 gives a breakdown of the Japanese business presence in Central Ohio. "Japan ranks among the top foreign investors in Ohio with 422 facilities. The majority of Japanese facilities (253) are manufacturers, 51% of which are automotive-related. There are 95 commercial trade operations, accounting for 23% of all facilities." These facilities provide 70,985 jobs in Ohio, 98% of which are held by citizens of the state. These facts led the administrators of the University to greatly expand the Japanese programs. In the mid-1980s there were one or two tenured or tenure-track professors of Japanese in the Department of East Asian Languages and Literatures. The Japanese program was dominated by the Chinese program. By the early 1990s, there were 9 tenured or tenure-track faculty members in Japanese, a number equal to the Chinese faculty. Below, from the perspective of OSU, I will discuss what I perceive to be recent trends in Japanese Studies in the U.S. under the following categories: undergraduate programs, graduate programs, faculty, general intellectual trends, and future trends.

Undergraduate Programs

When I first began teaching in 1989, I asked a class of 180 students in a course entitled "Elements of Japanese Culture" what their primary association with Japan was: technological innovation in the form of electronic products or World War II. Well over half of the class asso-

ciated Japan with World War II. As OSU became more “civilized” and class sizes were reduced, I asked a same class of 50 students in the mid-1990s the same question, and the majority said electronic products. Recently, I raised the same question in a similar class and the answer was *anime* and *manga*. Interest in Japan remains strong among undergraduates at a major state university, but the reasons for that interest have changed over time.

Interest in learning the Japanese language also remains strong. However, the manner of instruction has changed markedly. When I studied Japanese, first and second year were handled by native speakers hired in Japan under the direction of Tamako Niwa, third year was taught by a former kabuki performer, and fourth year was handled by Roy Miller, the historical linguist. In the upper levels, emphasis was placed on reading and writing, and there appeared to be little standardized curriculum. Once a week Roy Miller would bring in a newspaper article or other contemporary writing and we were expected to translate it by the next session.

Things are different at OSU today. Oral-aural proficiency is stressed following a strict standardized curriculum established by Eleanor Jordan and Mari Noda. The program is run entirely by the linguistics faculty. There is next to no translation. To meet the needs of students, a proliferation of different courses have been instituted. “Intensive Japanese” offered throughout the year, with “Independent Instruction,” by which students can choose their own times to attend class, determine the number of credits they wish to take, and are able to study at their own pace. And, of course, there is a regular track. In addition, a 5th year of Japanese has been instituted.

At the time of the Nixon/Kissinger opening of diplomatic relations with the People’s Republic of China, it was axiomatic that as Chinese enrollments increased, Japanese enrollments decreased. This is no longer the case, as the table below illustrates.

**Language Course Enrollment Figures
for the Department of East Asian Languages and Literatures**

	Autumn 13 – 14 – 15			Spring 14–15		Summer 14–15		a. y. 2013-14	a. y. 2014-15
Chinese	352	350	352	302	302	n/a	18	654	670
Japanese	346	392	384	329	310	57	96	732	798
Korean	181	160	184	162	183	10	16	353	359
	Total							1739	1827

By semester & course, from present back to Autumn 2013:

Autumn 2015

<u>Chinese</u>		<u>Japanese</u>		<u>Korean</u>	
C1101.01	95	J1101.01	137	K1101.01	59
C1101.51	16	J1101.51	39	K1101.51	43
C1102.51	17	J1102.51	31	K1102.51	14
C1103.51	18	J1103.51	17	K1103.51	13
C1103.01	39	J1103.01	58	K1103.01	20
C2141.01	23			K2102.51	7
C2151.01	20	J2141	10		
C2151.51	18	J2151	10		
C4101	14	J4101.01	32	K4101.01	9
C4152.51	12	J5101.01	10	K4101.51	4
C5101.51	11	J5103.51	17	K4102.51	5
C5102.51	1	J5111	5	K5101	10
C5103	7	J5315	18		
C5105.51	1				
C5106.51	1				
C5111	28				
C7617	8				
C7655	9				
C7660	8				
C7671.51	6				
Total	352		384		184

2014-15 a.y. totals

<u>Chinese</u>	670	<u>Japanese</u>	798	<u>Korean</u>	359
vs. 2013-14	plus 16		plus 66		plus 6

Summer 2015

<u>Chinese</u>		<u>Japanese</u>		<u>Korean</u>	
C1101.02	3	J1101.02	16	K1101.51	7
C1102.02	3	J1102.02	13	K1102.51	3
C2141.02	6	J1103.02	19	K1103.51	4
C4142.01	6	J2101.02	18	K2102.51	2
		J5101.02	15	K4101.5p1	0
		J5102.02	15	K4102.51	0
Total	18		96		16

Spring 2015

<u>Chinese</u>		<u>Japanese</u>		<u>Korean</u>	
C1101.51	24	J1101.51	54	K1101.51	51
C1102.51	25	J1102.51	24	K1102.51	10
C1103.51	15	J1103.51	15	K1103.51	12
C1102.01	64	J1102.01	101	K1102.01	32
C2102	27	J2102.01	37	K2102.01	17
C2151.51	14	J4102	25	K2102.51	9
C4102	7	J4142	8	K4101.51	6
C4142.01	25	J4152	8	K4102.01	9
C4152.01	16	J5102.01	9	K4102.51	3
C4152.51	15	J5104.51	10	K5102	6
C4301	20	J5112	4	K5315	28
C5101.51	5	J5316	15		
C5102.51	7				
C5104	5				
C5105.51	2				
C5490	5				
C7615	10				
C7650	5				
C7672	3				
C7670	8				
Total	302		310		183

Clearly, interest in learning Japanese continues to be strong in relation to Chinese and Korean. As an appendix, I include the numbers of students of Japanese for the state as a whole (see Appendix 2).

Graduate Programs

OSU's Department of East Asian Languages and Literatures is one of the largest departments of East Asian languages in the U.S. and has 19 tenured or tenure-track faculty members. Of those, 3 tenured faculty members, including Mari Noda specialize in Japanese language pedagogy (and are deeply involved with language instruction and curriculum/material development). Two other linguistic faculty members also support the Japanese language pedagogy program. And a third, James Unger, recently retired, also made substantial contributions. OSU could thus boast of having the strongest program in the Japanese language pedagogy in the country. As a result, OSU's PhD program in Japanese language pedagogy attracted a great

many Japanese nationals who wished to teach Japanese professionally to foreigners, and not be treated as mere language instructors.

However in recent years, the number of applications from Japan has decreased markedly. One reason is that Japanese universities began developing their own Japanese language pedagogy programs. Another is the rise of the cost of graduate education in the U.S. Still, at one point we had well over 30 graduate students enrolled in the Japanese program. Now, 99% of the graduate students are from OSU.

I am not optimistic about graduate education at large state institutions. There are exceptions, such as Berkeley or the University of Michigan, but generally, the administrations, under new business-like models of public administration, do not like graduate education in the Humanities. As we all know, it takes far more work to guide and teach a few graduate students than it takes to teach 100 undergraduates in classes one has taught for 20 years. Graduate education in the Humanities is thus considered highly inefficient, and so gradually the times to completion of dissertation have been shortened and, as a result, graduate stipends and the number of graduate teaching fellowships has been reduced. Organizations such as the International Research Center for Japanese Studies (Nichibunken), the Japan Foundation, and the Japan-U.S. Educational Commission, and programs such as Foreign Language and Area Studies (FLAS) Fellowships are crucial if Japanese studies are to continue at the graduate level at many large state universities.

Faculty

OSU's Department of East Asian Languages and Literatures has managed to maintain its position as the second largest Department of East Asian Languages and Literatures in the U.S. The death of Professor William Tyler was a huge blow to our program in Japanese literature, but the university agreed to replace him with a position in modern Japanese literature. After Professor James Unger's recent retirement, it seems doubtful that his position will be replaced. In part, this is because there are very few scholars in the U.S. who have chosen to specialize in historical linguistics. The sheer effort of learning, under restrained funding, three languages and their classical forms has resulted in great difficulty in mastering this field in the U.S. It is a sad development. However, OSU is justifiably proud of its record of innovation in language instruction, and so I do not see the Japanese program faculty suffering drastic reductions.

It is a different story in other departments. The eminent historian of modern Japan, James Bartholomew, recently retired, and despite our fervent pleadings, the History Department shows no inclination to search for a replacement in modern Japanese history. For years, we have tried to persuade the Political Science Department to hire a replacement for Bradley

Richardson. The reluctance of some disciplines to hire Japanese Studies and Area Studies specialists is due to two factors. First, there is the well-known antipathy towards Area Studies, held by many people in the social sciences. Second, I think there is the belief by many that China is ascendant and Japan is in decline. As Director of the Institute for Japanese Studies for the past ten years, I have repeatedly stressed the importance of Japan to Ohio's economy and the continued interest in Japan at OSU in presentations and letters to chairs of the social sciences departments, but nothing seems to overcome these misconceptions.

The Humanities departments, on the other hand, have been far more positive in their hiring of new faculty in Japanese Studies. Comparative Studies has replaced the retired Tom Kasulis with a promising young scholar who teaches Japanese religions and does research into the relationship between Buddhism and modernity. History of Art, on its own initiative, created a new position and filled it with a talented assistant professor who specializes in modern and contemporary Japanese art. In addition, OSU supported the Billy Ireland Cartoon Library & Museum, which is the most comprehensive academic research facility for cartoon art and holds one of the largest Japanese graphic art (*manga*) collections in the US. It reopened in a newly-renovated state-of-the-art space in Fall 2013, and the *manga* collection attracts scholars from around the world.

General Intellectual Trends

I have been extraordinarily impressed by young scholars and their scholarship. I think it is a sort of golden age of Japanese Studies in the United States and Europe. Critical theory was of vital importance in freeing young researchers from the constraints of essentialism, but the focus on theory seemed to have left little room for specific empirical research. Critically informed contemporary scholarship is exploring aspects of history, culture, language, and literature that form a picture of Japan in far greater diversity than before. For example, Kerim Yasar, our recent hire in modern Japanese, has a strong background in literature and film, and his present research concerns the radio and the literature and drama written for it. Recent scholarship is so varied that it is difficult to characterize it under a single heading, such as modernization theory or revisionism, or feminism, and so on, and it draws substantially on recent brilliant Japanese scholarship that, in my view, is also more diverse than formerly. I think one characteristic common to much of recent scholarship is a new emphasis on the visual and auditory and their social significance. In my field, just about every job posting asks for the ability to teach Japanese visual culture of one sort or another.

Future Trends

Harvey J. Graff, Ohio Eminent Scholar in Literacy Studies and professor of English and history at OSU, in a December 18, 2015 article in the online journal *Inside Higher Ed* (<https://www.insidehighered.com/views/2015/12/18/how-misguided-university-policies-are-harming-humanities-arts-and-sciences>) writes as follows,

The fact is that the university has chosen to admit and enroll increasingly more students in professional and pre-professional areas, especially engineering and business. Among the consequences has been the decline of about 40 percent over the past four years in both numbers of majors and course enrollments in the humanities. But the university did not take this path through any public discussion, explicit decision making or consideration of the major effects.

Of all the departments in the Arts and Sciences College at OSU, the Department of East Asian Languages and Literatures has suffered the least reduction in majors. Still, at present, the outlook is not bright for the humanities as a whole. There is an anecdote that John Hall, Yale's eminent Japanese historian, stated in the mid-1980s that the History Department should stop admitting graduate students in Japanese history because there would be no jobs for them. If he actually stated this, he was very wrong. There will continue to be positions for students of Japanese Studies, but it is probably wise to advise undergraduates and graduate students to be flexible and attempt to master more than one discipline. I have noticed a number of graduate students combining specialties in Chinese and Japanese language pedagogy, or developing the ability to teach both modern Korean and Japanese literatures, or writing a dissertation on classical Japanese literature but also publishing on *manga* or East Asian film. This trend of combining multiple research and teaching interests will probably continue into the future.

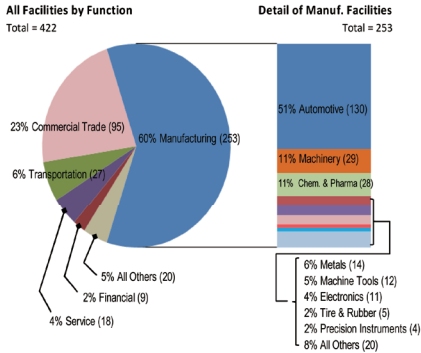
2014 Japanese Direct Investment Survey: Summary of Ohio Results (as of October 1, 2014)

The Consulate General of Japan in Detroit annually surveys Japanese-owned facilities and Japanese nationals in Ohio. As the 2014 data indicate, Japanese investment contributes significantly to state and local economies.

FACILITIES

Japan ranks among the top foreign investors in Ohio with 422 facilities. The majority of Japanese facilities (253) are manufacturers, 51% of which are automotive-related. There are 95 commercial trade operations, accounting for 23% of all facilities.

Figure 1: Japanese Facilities by Sector



EMPLOYMENT

Japanese facilities provide 70,985 jobs in Ohio, 98% of which are held by Ohioans.

Figure 2: Long-term Japanese Investment Trends

Year	Facilities	Total Employees	Employee Breakdown		Manufacturing Employees
			Local	Japanese	
2014	422	70,985	69,467	1,518	41,654
2013	430	69,521	68,031	1,490	40,075
2009	424	55,796	54,325	1,471	31,156
2004	419	65,277	63,643	1,634	38,974
Percent Change					
1 Year	-1.9%	2.1%	2.1%	1.9%	3.9%
5 Year	-0.5%	27.2%	27.9%	3.2%	33.7%
10 Year	0.7%	8.7%	9.2%	-7.1%	6.9%

NOTE: Japanese facilities are defined as non-franchised operations with at least a 10% share of Japanese ownership. Past years' data are periodically revised.

GEOGRAPHIC DISTRIBUTION

The central region's 116 facilities, which provide 21,994 (27% of total) jobs, are mostly automotive production related. Other areas of the state, such as the southwest and northeast, are home to Japanese businesses in a diverse range of sectors including chemicals, pharmaceuticals and rubber.

Figure 3: Japanese Investment by Region (Top Counties)

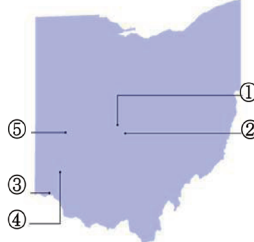
Region	Facilities	Total	Manufacturing
		Employees	Employees
Central	116	21,994	11,632
• Franklin County	78	5,605	2,107
• Union County	13	9,294	4,356
Southwest	133	17,402	10,605
• Hamilton County	42	1,980	549
Northeast	93	7,088	3,050
• Cuyahoga County	41	1,802	114
Northwest	70	23,850	16,023
Southeast	10	651	344

JAPANESE POPULATION

As of January 2015, there are 12,843 Japanese nationals in Ohio, most of whom reside in the central region of the state.

Figure 3: Japanese Population (Top 5 Cities)

①	Dublin	2,214
②	Columbus	750
③	Cincinnati	523
④	Mason	352
⑤	Troy	318



Japanese Education in Ohio

25 Universities and Community Colleges (Fall 2014)				
	City	University	Japanese language courses	
			Total students enrolled	Total number of classes
1	Columbus	Ohio State University	392	24
2	Cincinnati	University of Cincinnati	267	13
3	Athens	Ohio University	178	11
4	Oxford	Miami University	175	9
5	Kent	Kent State University	166	9
6	Toledo	University of Toledo	148	15
7	Cleveland	Case Western Reserve University	109	10
8	Oberlin	Oberlin College	105	9
9	Dayton	Wright State University	94	5
10	Bowling Green	Bowling Green State University	91	4
11	Alliance	University of Mount Union	80	5
12	Akron	University of Akron	74	3
13	Cleveland	Cuyahoga Community College	48	4
14	Granville	Denison University	41	4
15	University Heights	John Carroll University	38	5
16	Delaware	Ohio Wesleyan University	35	3
17	Columbus	Columbus State Community College	35	2
18	Cleveland	Cleveland State University	32	2
19	Springfield	Wittenberg University	26	3
20	Cincinnati	Xavier University	26	2
21	Gambier	Kenyon College	24	3
22	Yellow Springs	Antioch College	23	3
23	Findlay	University of Findlay	20	4
24	Dayton	Sinclair Community College	16	1
25	Westerville	Otterbein University	8	1
TOTALS			2,251	154

K-12 Schools (Fall 2014)		
	Total Number of Schools	Total students enrolled
	16	860
High School	13	723
Elementary and Middle School	3	137

14 欧米の日本研究と問題点

寺澤行忠

はじめに

私はもともと日本文学を専門とする者であるが、約30年来取り組んできた研究テーマが10年ほど前に大きな区切りがついた。そこでかねて強い関心を持っていた「海外における日本文化受容の研究」というテーマで、2005年に1年間のサバティカルを得て、アメリカを中心にヨーロッパ、中国などを調査することが出来た。しかし地域を広げていくだけでは研究上収拾がつかないところから、その後は国ごとにまとめていくこととし、アメリカやドイツに重点を置いて研究を進めている¹。

私の研究対象は日本学、日本語教育、日本語図書、俳句、禅、日本美術、日本庭園、茶道、華道、能、狂言、歌舞伎、文楽、アニメ、マンガ、食文化、太鼓など、日本文化といわれるもの全般にわたる。なかでも日本学には最も多くの時間を充て、できるだけ多くの研究者と懇談することを心がけた。

ただ限られた時間で、2008年に定年を迎えて以後には研究助成がまったく得られない状況の中での個人研究であり、文字通りの管見であることをあらかじめお断りして、お許しをいただきたい。

1. 海外の日本研究

国際交流基金がハワイ大学のパトリシア・スタインホフ教授に依頼して実施した調査によれば²、アメリカにおける2012年現在の日本研究者は1,434人である。また2015年の国際交流基金の調査によれば、イギリスの大学の日本研究者は198人であり³、国際日本文化研究センターの統計データでは、他のヨーロッパにおける日本研究者はフランスが269人、ドイツ201人、ロシア100人、イタリア85人、スペイン32人などとなっている⁴。これらの欧米諸国に他の地域を加えると、世

1 寺澤行忠『アメリカに渡った日本文化』淡交社、2013年。

2 Patricia G. Steinhoff, ed., *Directory of Japan Specialists and Japanese Studies Institutions In the United States* (Tokyo: Japan Foundation, 2013), 23.

3 *Japan Foundation Japanese Studies Survey 2015: A Survey of Japanese Studies at the University Level in the UK* (London: Japan Foundation, 2016), 17.

4 <http://db.nichibun.ac.jp/ja/category/kikan.html>.

界全体では数千人の人々が日本研究に従事している。

ドイツなどでは、財政上の理由で、近隣の大学の日本研究を統合するという州政府の方針で、ゲッティンゲン大学、マールブルク大学、エアランゲン＝ニュルンベルク大学、ヴュルツブルク大学等で日本研究が廃止された。ただ一方で日本学専攻の学生や研究者が増えている大学もあり、ドイツ全体でみると日本学が縮小しているわけではない。

日本研究者はそれぞれの国にあって、日本に対する的確な判断を下す中核となる存在であるから、きわめて重要な存在なのである。それに日本を研究対象に選ぶ人々の多くは日本に愛着、愛情を持ってくれる。その国の政治や世論の形成に影響を及ぼすことが期待できる「知日派」の養成は、日本にとってきわめて重要なことである。総合商社「双日」のワシントン支社長であった多田幸雄氏は、知日派養成のための非営利団体The Center for Professional Exchange（略称CEPEX）を2005年にアメリカで立ち上げた。学生がせっかく大学で日本学を学んでも、それが活かせる分野に就職できない、という現実を打破するために、これらの人々の就職支援をしてきている。出口に不安があれば、日本学を目指す人材が枯渇してしまう恐れがあるからである。このような問題は、いずれの国においても深刻な問題で、海外における日本研究振興のためにも、日本の各界においても真剣に取り組むべき課題であろう。

研究教育の分野では特に、外部からの資金提供の効果は大きい。日本政府はアメリカにおける日本研究を支援するために、1973年に国際交流基金を通じて、総額1,000万ドルを提供した。これは日本研究のプログラムを持つ10の大学に100万ドルずつ配分された。すなわちハーバード、イェール、コロンビア、プリンストン、ミシガン、シカゴ、ワシントン、カリフォルニア（バークレー校）、スタンフォード、ハワイの各大学である。使い方は各大学の裁量に任せられた。田中角栄首相の時代であったから、アメリカの大学では、俗に「タナカ・テン」と呼ばれている。この効果は大きかった。現在でもアメリカにおける日本研究の中核を担うのは、これらの大学である。

カリフォルニア大学ロサンゼルス校の日本研究センターは「PAUL I. AND HISAKO TERASAKI」の名を冠するが、これは臓器移植のエキスパートとして知られるポール・テラサキ名誉教授夫妻が同大学の日本研究を支援するために、500万ドルを寄贈したことによる。同教授はライフサイエンス学部にも、大学開設以来最も高額である5,000万ドルを寄付している。アメリカではトヨタ財団も、研究・教育部門に力を入れて助成している。

中国では、1979年に当時の大平正芳首相が北京を訪問した際、中国側からの要請で、日本語教育の支援を約束した。中国全体の日本語教員600人に対し、各年度120人、5年で600人を再教育するというプログラムで、ODA援助のかたちで5年間に10億円が投じられた。日本から講師を派遣し、教材や図書も提供された。この「日本語研修センター」は、のちに大平首相に敬意を表して「大平学校」と呼ばれるようになった。

その後日本語研修だけでなく、日本語と日本研究の大学院修士課程が加わり、「大平学校」を継承発展させたのが、現在の北京外国語大学「北京日本学研究中心」である。現在は博士課程も設置され、その卒業生は2016年2月現在で、修士学位取得者638人、博士学位取得者46人に上っている⁵。これらの卒業生が、中国における日本語教育と日本研究の中核的人材となっている。

日本では日本文学、日本史学、日本美術史など諸学は、研究者の数が多から細かく専門が分かれているが、海外にあっては当然のことながら担当者が少なく、日本文学や日本史の全分野を一人で教えなければならないことが多い。また日本では、日本の専門家が同時にアジアの専門家でもあることは少ないであろうが、海外にあっては東アジア、すなわち日本、韓国、中国など広域を研究対象としている研究者は珍しくない。エドウィン・ライシャワーなどはその典型である。

日本研究者も時代とともに少しずつ変化している⁶。アメリカにおける第一世代は、戦前の研究者である。エドウィン・ライシャワーやオーティス・ケリーなど、日本で生れ育った人々で、日本に深い愛着を持ち、東アジア全体の広い視野を持っていた。第二世代はドナルド・キーン、エドワード・サイデンステッカーなど、太平洋戦争中に陸軍日本語学校や海軍日本語学校で、日本語の訓練を受けた人々である。これらの人々が、戦後の日本研究をリードした。第三世代は、ジェラルド・カーティスなど、日本を冷静に、客観的に真正面から見据えようとする人々である。第四世代は、チャルマーズ・ジョンソンなど、日本をより懐疑的、批判的にみる傾向のある人々である。いわゆるリビジョニスト（日本異質論者、日本見直し論者）などもこの世代である。第五世代は、日本のシステムはなぜうまく機能しないのか、といった悲観的な視点から、日本を見ようとする傾向がある。

5 国際交流基金WEB「北京日本学研究中心事業概要」を参照。https://www.jpff.go.jp/j/project/intel/study/support/bj/details_text.html

6 第一～第三世代については、朝日新聞社編『日本とアメリカ』朝日新聞社、1971年。第四、第五世代については、ジェラルド・カーティス『政治と秋刀魚——日本と暮らして四五年』日経BP社、2008年。

アメリカの場合は、日本研究はさまざまな学問分野で行われているが、ドイツにおける日本研究は、文学も歴史も宗教も、さらには政治や経済も、すべて日本学科の枠の中に統合され、その中でしか行われていないという特徴がある。その結果、近隣の研究とのつながりが失われ、孤立した様相を深めていることが、いま問題となっている。

またドイツでは、日本研究はもともと文学、それも文献中心の学問として行われてきた。しかし日本が戦後急速な復興を遂げ、アメリカに次ぐ世界第二の経済力をつけてくるにつれ、ドイツ政府からその理由や背景の説明を求められるようになった。そうした事情もあり、日本研究は文学・歴史・思想研究よりも経済・政治研究の方向へ、また古典よりも現代という、より現実的な方向を志向するようになってきている。

2. 特色ある施設と講義と交流

コロンビア大学のバーバラ・ルーシュ名誉教授は、同大学中世日本研究所の所長であった。同名の中世日本研究所が京都にもある。同研究所は、日本の宗教史における女性の役割を研究の大きな柱に据え、近年は各方面から寄付金を募り、日本の尼僧寺院の保存修復運動に熱心に取り組んでいる。また雅楽に魅せられ、10年ほど前にコロンビア大学に、正規のカリキュラムとして雅楽プログラムを立ち上げた。神戸大学から寺内直子教授を招いて、雅楽の講義や実技の指導を受け、将来優れた雅楽の演奏家を育てたいという。

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校には、日本文化を教えていた佐藤昌三名誉教授の尽力で、キャンパス内に日本館が建設されている。かなり広い日本庭園を持っている。大学の理解の下、万博資金、裏千家、国際交流基金、篤志家の寄付などの資金によってつくられたもので、日本文化に関する講義やさまざまなイベントが催され、日本文化紹介の拠点となっている。大学内にこれだけ大きな日本文化関連施設を持つところは、他にほとんどない。

ロサンゼルスのカウンティ美術館の日本美術館は、ジョー・ブライス夫妻の寄贈と、その呼び掛けで日米の財界が協力して資金を出してつくられたものである。ブライスは既成の価値観にとらわれず、自分の観察眼と感性だけを頼りに、若冲がほとんど注目されていなかった時代に、若冲を中心とした江戸時代の個性的な画家の作品を大量に購入した。そして日本での展覧会には自らのコレクションを惜しみなく提供した。現在の日本における若冲ブームは、このブライスの鑑識眼によってもたらされたところが大きいといってよい。

ドイツのデュッセルドルフにある恵光日本文化センターも、日本文化紹介の拠点の一つである。このセンターは、仏教伝道協会や（株）ミットヨの創業者、故沼田恵範によって1993年に設立されたもので、広大な敷地に恵光寺、日本庭園、茶室もある日本家屋、幼稚園、図書館などがあり、ここでさまざまな文化活動や行事が行われている。伝道よりも文化活動、文化交流が中心で、民間の施設ではあるが、デュッセルドルフにおける日本文化センターの役割を果たしている。元東北大学教授の青山隆夫館長以下、数名の専任研究者によって研究活動も行われている。図書館には仏教、歴史、美術、音楽、文学、哲学など6万点以上の図書があり、一般にも開放されている

ドイツのハイデルベルク大学通訳研究所には、2009年に同大学日本学科と提携して、世界初の日独会議通訳修士課程が開設された。世界でもトップクラスの会議通訳者の養成を目指している。

アメリカではフルブライト交流事業が長い歴史を持っている。これはフルブライト上院議員の発意から1946年に始まったもので、相互理解に貢献できるリーダーの養成を目的とする専門家、学者、大学院生の交流計画である。世界各国を対象としているが、日本からはすでに約6,400人がアメリカへ、アメリカからは約2,600人が日本へ、この制度で相互に留学した⁷。そして参加者の多くが、帰国後にアメリカに強い親近感を抱くようになったことは、注目に値する。

日本のジェット・プログラム（The Japan Exchange and Teaching Programme：JET）も相互理解に大きな役割を果たしている。これは日本政府の方針でつくられたもので、世界各国から大学を卒業した若者を招き、日本の小中高校の外国語指導助手、地域において国際交流活動に従事する国際交流員、地域のスポーツを通じた国際交流活動に従事するスポーツ国際交流員などとして勤務してもらう制度である。この制度は1987年に開始され、当初4か国、英語圏の848名から始まったが、2002年度には40か国6,273人になり、ピークに達した。累計では2016年現在、参加者は65か国、のべ6万4千人を超える。語種も英・仏・独・中国語・韓国語・ロシア語に拡大し、世界でも最大規模の国際交流プロジェクトである⁸。

3. 海外の教育制度

ヨーロッパでは、学制は国によってさまざまであったが、1999年にヨーロッパの29か国の教育大臣が署名して出されたボローニャ宣言で、ヨーロッパの高

7 日米教育委員会（フルブライト・ジャパン）WEB「フルブライト交流事業」

8 一般財団法人自治体国際化協会（CLAIR）WEB「JET Programme」

等教育制度を統一することが決められた。すなわち2010年までに、学修プロセスを学士課程 (Bachelor) と修士課程 (Master) の2段階にして、ヨーロッパ全体が同じ基準でこれらの学位を出すことになったのである。たとえばドイツの大学は、従来大学の学部と大学院が分かれておらず、すべて大学院修士までは修学する必要があった。これが新制度により、学部卒で社会に出ることが可能になった。学士課程はふつう3年だが、日本学コースでは4年とする大学もある。日本語を習得した上で、3年間で日本学を学ぶのは苦しいからである。

ドイツでは大学教授になるためには、原則として博士号を取得した後で、博士論文以上の論文を書き、「ハビリタツイオン (Habilitation)」と呼ばれる大学教授資格を得なければならない。したがって博士号を取得することは、大学教授になるための基礎資格として重要である。ドイツのトリア大学日本学科は1985年に設立されたが、その20周年記念式典の際に、トリア大で博士号を取得した日本の若い女性研究者に、博士号を持たない駐ドイツ日本大使より上席が用意されたという。ドイツではそれほど博士号が意味を持つのである。

女性研究者の割合は、概してアジアより西欧の方が高い。内閣府男女共同参画局が公表している2015年度現在の統計によると、世界で最も女性研究者の割合が高いのは、ポルトガルの45.4%で、イギリスは38.1%、イタリア35.7%、アメリカ34.3%、ドイツ28.0%、フランス25.5%、日本14.7%であり、日本は欧米諸国よりもかなり低い⁹。日本の女性研究者の割合は1992年には4.9%であったから、年々少しずつ増えてはいるが、国際水準からみるとまだまだ少ないというべきであろう。

パリに国際大学都市がある。1925年にフランス文化大臣の提唱によって、世界各国の学生や研究者に宿舎を提供し、文化や学術の交流を推進することを目的として建設されたものである。34ヘクタールの広大な敷地に40の建物が散在し、その中にはドイツ館、スイス館、イタリア館、スペイン館などとともに、薩摩治郎八の資金援助によってつくられた日本館もある。全体で130か国、5,500人の学生や研究者が居住している。こうした施設は学術研究や文化交流を側面から支援する大きな意義をもつもので、このような施設がさらに世界各地につくられることが期待される。

9 「研究者に占める女性割合の国際比較」『男女共同参画白書』平成27年版。

4. 日本語教育

日本研究の基礎になるのは、日本語教育である。日本語学習者は、2012年現在、世界で398万5千人おり、年々増加の一途をたどっている¹⁰。最多は中国の104万6千人、次いでインドネシア87万2千人、さらに韓国84万人、オーストラリア29万7千人、台湾23万7千人、アメリカ15万6千人、タイ13万人と続いている。1990年頃のバブル経済の崩壊によって、日本経済の勢いが衰えたが、それでも日本語学習者の数は減らなかった。

大学で日本の経済や政治を学ぶ学生数は減ったが、一方でアニメやマンガ、Jポップなどに対する興味から日本研究を志す学生が増え、全体として日本語や日本学を学ぶ学生は、むしろ増加傾向を示している。欧米にはコスプレで大学に来る学生もいる。アニメやマンガに対する関心は世界的な傾向で、こうした方面に対する関心から、本格的な日本学、日本研究に入ってくるならば、歓迎すべきことであろう。ドイツやフランスでは、柔道や剣道、合気道など、日本のスポーツに対する関心も深い。

海外を歩いていると、日本の文化がいかに広く、また深く受け入れられているかに驚かされる。それは一般の日本人が想像する以上のものである。それは日本の文化が、世界に通用する普遍的な価値を持っているからに他ならない。

近年、国際語としての英語教育の重要性が声高に叫ばれている。もちろん現実の問題として、グローバル化した現代において、英語運用能力が重要であることは論を俟たないが、といて自国語を軽視してよいということにはなるまい。戦時中アメリカ陸軍の日本語学校で学んだハーバート・パッシンが、興味深いことを述べている。「私はいくつもの言語を話す、ある言語からある言語へと使う言語を変換すると、自分が人格も身振りも動作も、そして頭脳構造の枠組みまでも、それに合わせて姿を変えていくのがわかる。」「日本語を話すと、自分がこんなにも礼儀正しくなるものかと、自分でも驚いてしまう。」¹¹というのである。言語とはそういうものである。日本語と日本文化は切り離すことが出来ないものであり、日本の文化を知ることによって、世界の人々の精神的な世界がより豊かになるものならば、英語を重視する一方で、日本語もますます広めていく必要があるだろう。

10 国際交流基金編『海外の日本語教育の現状——2012年度日本語教育機関調査より』くろしお出版、2013年。

11 ハーバート・パッシン『米陸軍日本語学校——日本との出会い』TBSブリタニカ、1981年

現に自国の文化を大切にしている国は、自国語の国際的普及に力を入れている。中国は国家プロジェクトとして、孔子学院を通じて中国語と中国文化の国際的普及を図っている。現地が施設を提供、中国側が講師を派遣し、資金と教材を提供するのである。2015年現在134か国で1,500校か課程が展開されている¹²。ドイツのゲーテ・インスティテュートは、ドイツ語教室を世界97か国に147か所持っている。またフランスのアリアンズ・フランセーズは世界138か国に1,085校のフランス語教室を設置している。英語については、世界各国で自主的に英語教育に力を入れているが、アメリカにも各地に無料の英会話教室があって、外国人に対する英語教育に力を入れている。

ところで海外での日本語教育担当者は日本人が多い。留学した者が現地人と結婚するなどしてその国に留まり、職業としては日本語教師を選ぶようになるケースがよくみられる。あるいは企業の駐在員夫人が日本語教師を志す場合もある。しかし、日本人なら誰でも日本語が教えられるというレベルでは、教育効率が悪い。日本語教員もきわめて高度な専門職なのであり、きちんとした知識と訓練が必要である。近年は海外の日本語教員養成制度も充実してきている。アメリカではウィスコンシン大学、コロンビア大学、コーネル大学、オハイオ州立大学などに、日本語教師養成コースやプログラムがある。

しかし欧米の大学では、日本語教員については多くが任期制をとっている。例えばドイツでは、州によっても異なるが、3年とか5年の任期制を採っている所が多く、5年以上は将来年金を支払わなければならなくなるから、州政府はなかなか契約したがないという。しかしそのようなやり方では、日本語教師は腰を落ち着けて仕事に取り組めず、ベテランが育ちにくいことが危惧される。

5. 日本関係図書

日本語の図書に関しては、アメリカの大学が充実している。アメリカでもっとも日本語図書が多いのはアメリカ議会図書館で、約121万5千冊を所蔵する。これは日本と同様、すべての印刷物は議会図書館に寄贈する義務があるから別格としても、カリフォルニア大学バークレー校約41万3千冊、ハーバード大学イェンチェン図書館約35万4千冊、コロンビア大学東アジア図書館約33万8千冊、ミシガン大学図書館約31万9千冊、イェール大学図書館約28万6千冊、シカゴ大学図書館約24万5千冊など、アメリカの大学は大量の日本語図書を所蔵している¹³。

12 孔子学院WEB。http://www.hanban.edu.cn/confuciousinstitutes/node_10961.htm

13 東アジア図書館協会が公表している2015年度資料による。

そして多くの図書館では日本語、中国語、韓国語の図書を混合して配架している。

カリフォルニア大学（UC）バークレー校には、2007年に東アジアの図書だけを独立させたC・V・スター東アジア図書館が完成した。東アジアの図書のみで独立した建物を持っている大学図書館は他にないようである。C・V・スターが巨額の資金を提供、日本の仏教伝道協会も50万ドルを寄付した。コロンビア大学にもC・V・スター東アジア図書館がある。

UCバークレー校の日本語図書のうち約10万点は、版本と写本を主とする三井文庫本である。この図書館が出来て、約8割はここに収納できたが、それでも残りは2か所の保存図書館に別置されている。日本では収納スペースがないという理由で、多くの図書館では図書の寄贈を受け入れなくなっているが、ここではいったん受け入れて必要な本だけ残し、他は教職員に安く売るというやり方をしている。きわめて合理的で、日本でも参考にすべきであろう。

コロンビア大学のC・V・スター東アジア図書館には、同大学教授であったドナルド・キーン氏の寄贈になる、キーン氏が日本の作家から寄贈された著者サイン入りの本や、手紙のコレクションが大量に所蔵されている。ピッツバーグ大学東アジア図書館には、旧三井銀行金融経済研究所の所蔵本6万冊余りが、コーネル大学には、前田愛のコレクション約1万3千冊が、カリフォルニア大学バークレー校には、遠藤周作のコレクション約7千冊が、それぞれ寄贈されている。

世界の日本研究機関には、日本語図書を欲しているも、予算がないために手に入らないところが多い。イタリアのある著名な大学でも、そのような悲痛な声を聞いた。それならば日本で引き取り手がない貴重な書籍を、そうした真に欲している所へ送れば、図書が生きるといえるものであろう。先方が送料を負担できれば問題はないが、それも難しい時には、日本の資金で送る方策はないものであろうか。

ほとんどの大学では、その膨大な資料の一部または大部分を遠隔地の保存書庫に収蔵している。その点、シカゴ大学図書館では、約24万5千冊の日本関係資料を1か所に集め、研究者や学生が実際に手に取ってみることができる。研究者や学生にとって、これだけの資料を目の当たりにする学問的刺激は非常に大きい。図書館は午前1時まで開いていて、利用者の便宜を図っている。

日本文学や日本史の研究では、前近代を対象にすると、写本や版本資料が必要となるが、アメリカには原資料がほとんどなく、日本に出向いて調査する必要がある。日本では国文学研究資料館がフィルムや紙焼写真を作成する業務をしているが、これをアメリカでも見るように、データベースの完全公開が

望ましい。

美術分野にはジャパン・アート・プロジェクトと呼ばれる事業がある。これは1995年に国際交流基金と国際文化交流推進協会の共催事業として始まったもので、現在は国立新美術館に引き継がれている。海外で入手困難な日本の展覧会のカタログを、海外の日本美術研究の拠点機関に寄贈する事業で、アメリカのフリーア美術館図書室、コロンビア大学エイヴリー建築・美術図書館、オランダのライデン大学東亜図書館、オーストラリアのシドニー大学フィッシャー図書館に贈られている。返礼として、寄贈先の各機関から、海外で開催された日本美術展覧会のカタログが送られてくる。日本にとっても海外機関にとっても、有意義な事業である。

ハーバード大学の東アジア研究図書館が、中国学を研究するイェンチン研究所から出発していることから窺えるように、アメリカのほとんどの大学で、蔵書数は中国語図書の方が、日本語図書よりも多い。それは中国研究の方が歴史が古く、スタッフも多かったからであるが、日本語図書よりも書物の単価が安いことも、その傾向を後押ししている。

アメリカのオハイオ州立大学には、マンガ研究図書館がある。日本のマンガ文化全体が概観できるようにと、広範囲な資料が集められ、マンガの原画を約30万枚、日本のマンガ本だけで2万冊以上を所蔵する。終戦直後に神田で購入した手塚治虫の1枚32万円する原画もある。

ドイツの大学は、アメリカとは対照的に、個々の大学がそれぞれに図書を所蔵するのではなく、国立図書館が集中的に図書を購入し、それを各大学の研究者が借用するシステムで運用している。送料は2ユーロで、4週間借りられる。早ければ3日で届く。時間や手間はかかるが、経済的には合理的といえる。ただ国立図書館の日本語図書の蔵書数は約23万冊で、大規模大学でも2～5万冊程度のところが多いから、アメリカの大学と規模の点では大差がある。

フランスのコレージュ・ド・フランスは、学生やキャンパスを持たない研究所組織で、50名余りの教授陣を擁している。この図書室は約3万冊の日本語図書を持っており、蔵書数そのものはアメリカの大学図書館などと比べると、多いとは言えないが、近世以前の本、原典や基礎的なものから購入するようにしているということで、本格的な研究態勢を志向する。古典文庫、時雨亭叢書、東洋文庫、大日本史料や古辞書類など、基礎的文献が整備されている。

6. 翻訳と出版

欧米では、欧米語を相互に翻訳しても学者の大きな業績にはならないということがある。翻訳料もきわめて安い。また、欧米語とは遠い日本語から欧米語への翻訳、あるいはその逆も業績としてはあまり評価されず、学問的評価に耐えようとすれば、その翻訳には詳細な注や解説が要求されることになる。したがって海外の日本研究者が、日本の作品を自国語へ翻訳することは簡単ではない。国際交流基金などが助成金を出した時に出版社が相談に乗ってくる、というのが現実である。翻訳出版事業への助成制度がどうしても必要である。

興味深いのは1993年から2000年にかけて、ベルリン自由大学のイルメラ・日地谷＝キルシュネライト教授の編纂によって、日本文学のドイツ語訳シリーズ「日本文庫」32冊がインゼル社から刊行された企画である。収録する作品や翻訳者の選定は、すべて同教授の手によって行われた。

『古今和歌集』『方丈記』のような古典から、夏目漱石『吾輩は猫である』、島崎藤村『破壊』などの近代の作品、森鷗外『普請中』、谷崎潤一郎『武州公秘話』、川端康成『浅草紅団』のような、すでにドイツ語で刊行されている著名な作品を避けて選ばれたもの、宇野千代『或る一人の女の話』、円地文子『女面』のような女流文学、また古井由吉『聖』、丸谷オ一『女ざかり』などドイツ語圏で初めて紹介された作家の作品、さらに西田幾多郎『禅の研究』、加藤周一『羊の歌』など、多様な作品が編者の見識によって選ばれている。全巻に詳細な解説が付され、ドイツ人読者の理解を助けている。

良質の翻訳を提供することにも、とりわけ意が用いられている。なかには何人かに試訳してもらい、3人目の訳がようやく採用されたケースもあるという。

こうした優れた編者による日本文学の叢書が、ドイツ人の日本文学に対する理解を深める上で、大きな力になるであろうことは、言うまでもない。

ベルリンの森鷗外記念館は、多数の日本の書物を独訳し、世界の大学など約120の機関に送っている。

文化庁は、文芸作品の優れた翻訳家を発掘し育成するために、2010年に第1回翻訳コンクールを実施した。第1回は英語とドイツ語が対象で、小説と評論・エッセイの課題作品各3点の中から1点ずつを選んで翻訳して審査を受けるのである。2015年には第2回のコンクールが行われたが、翻訳言語は英語のみであった。優れた翻訳者の発掘・育成という趣旨からすると、翻訳言語をもっと増やすべきであるし、毎年実施すべきであろう。

イタリアでは吉本ばなの本がよく読まれている。それは翻訳も優れているからだという。複数の研究者から原作以上だという評を聞いた。翻訳された作品が原作以上になることがあるのかどうかはともかく、それほど翻訳は大切だということである。川端康成や大江健三郎がノーベル賞を受けたのも、原作の良さに加え、翻訳も優れていたからであろう。

国文学研究資料館の伊藤鉄也教授の調査によると、『源氏物語』は33もの言語に翻訳されており、今や世界文学となっている¹⁴。英訳もアーサー・ウェーリー訳（1925年）を嚆矢として、現代英語によるサイデンステッカー訳、最新の源氏物語研究の成果も取り入れたロイヤル・タイラー訳などがあり、オスカー・ベンル教授のドイツ語訳、ルネ・シフェール教授のフランス語訳などと共に、名訳として評価が高い。一度訳された作品であっても、さらにより訳文をめざして、何度でも翻訳が試みられてよいであろう。

村上春樹の人気は世界各地で抜群である。ハーバード大学では、大学の書店で村上ものが書棚の1ブロックを10年以上前から占め続けている。2009年のカリフォルニア大学バークレー校における講演会では定員2,000人の会場が満席になり、入れない者も出た。ワシントンのジョージタウン大学では、ある年に村上春樹の『神の子どもたちはみな踊る』が、大学1年生全員1,200人に対し、課題図書として指定された。

もっとも、意外とも思われる作品がよく読まれているケースがある。吉川英治の『宮本武蔵』は、1,000ページに近い大冊であるが、アメリカで10万部以上出た。黒沢明の映画などの影響もあるかもしれないが、それ以上に剣の修業を通して自己を確立していく物語が、普遍的なテーマとしてアメリカの読者の心を捉えたのであろう。この作品はヨーロッパでもよく売れている。

おわりに

さて以上、海外における日本研究の一端を垣間見てきたが、実地に多くの日本研究者の方々と懇談させていただくことが出来たことは、誠に有難いことであった。ただその成果を発表する段になって困惑したのは、現在の出版界の事情はきわめて厳しいものがあり、日本研究を主題とするような本を出してくれるところがないことであった。そのためアメリカにおける日本文化をテーマとする本を上梓した際にも、日本研究に割けるスペースは限られており、一部の研究者しか紹

14 伊藤鉄也「エスベラント訳『源氏物語』は33種類目の言語による翻訳」（同氏 WEB「鷲水亭より」）。

介できなかったことは、痛恨の思いであった。

海外での調査研究には多額の費用を要する。研究助成がまったく期待できない中で、こうした多額の費用を要する研究テーマを継続することは困難である。

そうした個人的な事情はともかく、海外の日本研究機関を歩いていて痛切に感じたのは、日本研究に対する助成が少なく、困難な状況にあるという各方面から上がる悲痛な声であった。国際交流基金も懸命に努力しているが、同基金の予算自体がもともと少ない上に、近年はかなり減額されており、事態が憂慮される。海外における日本研究の実情調査は、わが国の公的機関が十分な予算と人員を投入して、大規模かつ継続的に行うことが必要であろう。国の将来のためにも、学問研究や文化に必要な予算が充分確保されることを強く望むものである。

Ⅲ アジアの日本研究

15 韓国における日本古典文学研究の現況

李 愛淑

1. はじめに

2014年1月に韓国政府の教育部は、将来の学齢人口の減少に備えた韓国政府の対応策の一環として「大学構造改革推進計画」を発表した¹。韓国政府案は、2018年度になると、大学入学可能者数と高校卒業生数が逆転すると見込み、大学入学定員を2013年度の56万人から、2023年には40万人へと、三期にかけて、16万人を削減することを骨子にしている。具体的には、2015～2017年度に4万人、2018～2020年度に5万人、2021～2023年度に7万人を削減する計画である。その上、政府の削減の基準のために、「大学構造改革推進評価」を行うと発表し²、政府の評価実施の前に、それぞれの大学が自主的に入学定員の削減策を提出するように促した。

そこで、大学側は自主的に2015年度に4万1943名の入学者を削減する計画を発表して、入試を進めたが、その最終結果を受けた教育部は、今後の資料として「2015年度の全国大学募集単位別入学定員現況」を公開している³。

したがって、同資料の内容を通して、各大学が推進している近未来の大学構造の変化の一面が伺える。すなわち、大学はいわゆる「非人気学科」の入学定員の削減、もしくは廃科、統合などの方法で、入学定員の削減を断行している。非人気学科と指定された分野は、死活問題をいきなり抱え込むことになる。日本学科もそのように指定されたことは、深刻な意味がある。2015年以後の日本語・日本文学・日本学など日本関連学科は、定員削減にとどまらず、廃科などの厳しい状況の到来に対応するように求められている。

教育部の「2015年度の全国大学募集単位別入学定員現況」によると、韓国で日本関連学科（日語日文、日本語、日本学、日本語文化学科など）を設置しているのは86の大学で、前年度の2014年度に比べれば、7の大学で廃科の対象になっ

1 2014年1月29日に発表 (<http://www.moe.go.kr>)。

2 2015年8月31日に「大学構造改革推進評価」結果発表 (<http://www.moe.go.kr>)。

3 2015年10月29日に公開 (<http://www.moe.go.kr>)。

ており、定員削減の対象にもなっている⁴。

このような日本関連学科の危機は、2015年以前から教育現場で察知され、個別大学の事例によって、研究者の間で危惧されている。韓国の大学の未来を考えるには、無視できない重大な問題である。また、教育現場の危機の波は研究領域にまで押し寄せてきている。

本稿は、2005年から2015年までの韓国における日本古典文学の研究、『源氏物語』研究の現況を、実証的に分析し、その中で、教育現場での実態化した危機が個別の研究分野にどのような影響を与えているのかを考察したい。

2. 日本文学研究の概観

まず、韓国における日本文学を含む日本研究の歴史を概観すると、日本研究は韓国社会の日本語教育への需要から始まったと言える。1961年、韓国の大学で日本関連学科が初めて設立されたのは外国語大学の日本語科で、翌1962年には国際大学で日語学科が設立された。このように日本語教育から始まった韓国の日本研究は、1980年代に多くの大学で日語日文学科が作られることで、本格化していくが、その背景には、当時世界第2の経済国である日本に対する韓国社会の高い関心があったからである。日本研究の中心は、日本語と日本文学に関する研究であった。

1990年代に入ると、日本に留学した多くの研究者が帰国し、日本文学の研究は、当時の地域学としての日本学の胎動とも連動し、より多様化・専門化していくと同時に、学会や学術誌、そして研究所なども急増した。

4 教育部の「2013年度・2014年度の全国大学募集単位別入学定員現況」をも参考し、2015年度の特徴を分析したところ以下の3点があげられる。(1) 廃科は地方大学を中心になされている。中源大、金剛大、又松大、東亜大、慶一大、大邱韓医大、光州大は、ソウルや首都圏域以外の大学である。特に、釜山にある東亜大の場合、かなり早い時期から日本語日本文学学科が設立された大学で、釜山の日本研究を牽引してきた大学であるだけに、廃科は衝撃的と言わざるを得ない。学科名称変更に関しては、建陽大の〈中国日本学部〉のように、東アジアを軸に学科を統合し、名称を変更するか、国際学部への統合が一般的であるが、韓南大は既存の日語日文学科とフランス語文学科を統合し、2015年度から日本・フランス語文学科にし、定員削減の募集であった。その統合は恣意的としか言えない。祥明大はソウルと地方キャンパスにそれぞれ日本語教育学科と日本語文学科の二つの学科を同時運営していたが、ソウル所在の日本語教育学科を廃科し、地方キャンパスの日本語文学科に一本化した。まず地方大学を廃科に追い込むのと違い、この廃科は、ソウル所在の各大学の日本語化の今後に及ぼす影響の前兆とも受け取れる。というのは、壇国大の場合、2013年度にソウル所在の日語日文学科を廃科し、地方キャンパスの日本語科だけを存続させる前例があったからである。一つの大学のもつ類似する二つの日本語学科を統合し、存続させた学科に定員をさらに削減している (<http://www.moe.go.kr/>)。

2000年代に入ってから、当時の人文学の危機に対する韓国政府の対応策の象徴である韓国研究財団主導の「人文韓国支援」(Humanities Korea Project)を筆頭として、多様な学術支援政策が取られ、日本研究は数量的に飛躍的な成長を見せた。しかし、大型の学術支援政策は直接的には、1990年代の人文学の危機が原因で、1996年に全国の大学の人文学部長が集合し、韓国政府へ政策支援を求める提言の発表に起因するが⁵、人文学の根本的な環境改善にまでは至らなかった。

日本研究に関しては、政府主導の大型研究支援があったにもかかわらず、2000年代に入ると、大学の日本関連学科はもちろん、日本研究機関の創立も徐々に減少していくことになった。次の表1は、世宗研究所と国際交流基金の報告書がまとめた日本研究機関の創立に関する調査統計で、その数値からも2000年代の環境悪化が確かめられる⁶。

表1 日本研究機関創立日

年代	1950～	1960～	1970～	1980～	1990～	2000～
大学	0	2	13	24	23	5
大学付設研究所	1	0	2	0	5	2
一般研究所	0	1	3	3	0	2
学会	0	0	3	1	9	3

表1の統計から、1980年代、1990年代に活況をみせた大学の日本関連学科の設置や学会創立が、2000年代に入ると、激減していくことが確認できるが、その変化の時期を同じくして、大学の教育現場では日本古典文学が忌避されていった。ただ、それは2004年からの日本大衆文化の全面的開放によって現れた日本現代小説のブームとはいかにも対照的な古典文学の苦戦である。筆者は、2000年代の古典文学の状況を分析し、教育現場での古典文学の苦戦が研究領域にまで波及していることを展望し、古典研究者による韓国語翻訳に対する積極的な評価や、研究スタンスの変化などを提案したことがある⁷。

5 1996年9月26日に、韓国の80の大学の人文大学長が集合し、人文学の危機を救うために、「今日の人文学の危機、我らの提言」を発表した。

6 『2012韓国日本学の現況と課題』(韓国語) 日本国際交流基金・世宗研究所日本研究センター、173頁。この報告書には、日本古典文学、近代文学、日本語、日本学、日本史、日本経済の各領域での2005年から2011年までの研究現況や課題に関する報告がある。

7 李愛淑「ナショナルリズムと古典文学研究——源氏物語を中心に」『日本学報』62集、韓国日本学会、2005年2月。

しかし、2000年代の古典文学の教育現場での苦戦は、2010年代に入ってから、古典文学だけに留まらず、近代文学、日本語教育、日本学まで、すべての日本研究領域にまで押し寄せている。それを端的に表したのが、教育部の「2015年度の全国大学募集単位別入学定員現況」に見える、日本関連学科の廃科と統合である。今後の日本研究の研究環境が厳しくなることが予想され、古典文学の研究領域はさらなる変化が引き起こされるだろう。

では、2005年から2015年までの日本古典文学の研究や『源氏物語』研究の論文の分析を通して、研究の現状を考察し、研究環境の変化に目を向けていく。

3. 分析対象と方法

1990年代に学会や大学付設研究所の創設が集中し、それぞれ競争していく中で、研究者が数多くの論文を発表することがある。本稿は学会のホームページに掲げられた学会の目標や活動を参考に、日本語日本文学の研究を中心とする学会誌を選び出して、その中で研究者同士の交流が最も活発な8つの学会誌を分析の対象にする。また、大学の付設研究所の場合、特定の研究者に偏る傾向があるため、多様な研究者の研究活動を対象にすべく、学会誌に限定した。分析対象の学会誌を、表2にまとめておく。

表2 分析対象学会誌

学会誌名	創刊年度	刊行学会（創立年度）
日本学報	1973	韓国日本学会（1973）
日語日文学研究	1979	韓国日語日文学会（1978）
日語日文学	1991	大韓日語日文学会（1991）
日本語文学	1992	日本語文学会（1992）
日本語文学	1995	韓国日本語文学会（1995）
日本文化学報	1996	韓国日本文化学会（1993）
日本文化研究	1999	東アジア日本学会（1999）
日本言語文化	2002	韓国日本言語文化学会（2001）

分析対象とする学会誌の2005年から2015年までの論文は、各学会のホームページや韓国教育学術情報院（KERIS）（<http://www.riss.kr>）、韓国国会図書館（<http://www.nanet.go.kr>）の資料を参考に調査した。

まず、8つの学会誌が発行した2005年から2015年までの11年間の日本文学関連の研究論文の調査をし、さらに古典文学の研究論文と近現代文学の研究論文に

分けて、それぞれの研究論文の量的推移を、以下の表3にまとめる。上段には古典文学、下段には近現代文学研究論文の数を記し、()の中には日本文学研究における古典文学の研究論文の比率を付記しておく。

表3 日本文学研究論文の量的推移

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	合計
日本文学	19 28	16 39	16 24	9 40	10 25	10 16	13 22	16 21	8 21	17 22	3 16	137 274 (33%)
日語日文学研究	26 33	21 32	16 28	32 38	41 31	23 29	23 27	23 34	29 34	30 25	23 21	287 332 (46%)
(大韓) 日語日文学	11 14	3 11	4 23	7 16	7 13	3 20	2 16	8 18	7 16	12 21	7 26	71 194 (26%)
日本語文学	15 29	9 36	11 27	12 19	6 23	6 21	16 24	7 21	11 23	11 20	10 25	114 268 (29%)
(韓国) 日本語文学	6 22	14 20	15 16	13 6	10 21	10 27	11 13	7 24	8 26	9 35	7 18	110 228 (32%)
日本文化学報	16 14	14 21	11 21	15 21	12 16	11 9	8 15	7 13	7 23	4 15	8 14	113 182 (38%)
日本文化研究	2 34	8 15	5 23	10 20	9 27	7 29	8 20	8 31	6 27	4 26	4 25	71 277 (20%)
日本言語文化	4 10	9 16	7 9	3 7	6 7	8 13	10 20	8 11	5 9	7 16	10 16	77 134 (36%)
総計	99 184 (35%)	94 190 (33%)	85 171 (33%)	101 167 (38%)	101 163 (38%)	78 164 (32%)	91 157 (37%)	84 173 (33%)	81 179 (31%)	94 180 (34%)	72 161 (31%)	980 1889 (34%)

4. 古典文学研究の現況

表3の研究論文の量的推移を分析すると、二つの特徴が見られる。第一の特徴は、古典文学研究が教育現場では敬遠されているにもかかわらず、依然として学会の研究の中心に位置していることである。つまり、11年の間、近現代論文が1889本、古典研究論文が980本掲載されて、日本文学研究論文に占める古典文学の比率は平均34%になる。しかも、2005年から2015年までの11年間、最高38%、最低31%であり、31%を下回ることもなく、安定していることから、古典文学研究の活況が伺える。2000年代からの教育現場での近現代文学の人気や、古典文学の回

避を考えると、平均34%の研究活動は、韓国の古典文学研究の異例の活躍を物語り、教育現場と研究領域との乖離がかえって注目される。

第二の特徴は、雑誌『日語日文学研究』において古典文学が研究の中心となる傾向である。つまり、8つの学会誌のなかで、『日語日文学研究』の場合は、古典文学の研究論文の比率が46%に達している。『日語日文学研究』を刊行する韓国日語日文学会は、『日本学報』を刊行する韓国日本学会と共に、韓国の日本研究の草創期を象徴するものでもある。

このような『日語日文学研究』の古典文学志向は、その創刊号に掲載された論文の構成からしてすでに確認できる。創刊号には次のような論文が掲載されていた。

Ainu 語名詞の形態について

『蜻蛉日記』に現れている自然描写の特質

日本語における否定表現考察

人称代名詞の待遇意識体系研究

平安時代の日記文学概観

人形浄瑠璃と韓国の人形劇

『堤中納言物語』の成立過程について

近代翻訳詩の重訳問題に関する考察

韓日両国語の子音体系の差異と音声教育の問題点

池亭記と方丈記との比較研究

創刊号の10本の論文の中で、文学研究は6本、日本語研究は4本である。そして、6本の文学研究論文の構成は、古典文学研究が4本、比較文学研究論文が2本であった。古典文学論文の比率が67%で、半分を超えている。もし比較文学の論文、「人形浄瑠璃と韓国の人形劇」を広範囲の古典文学研究に入れると、比率は83%に及び、古典文学研究の圧倒的な比率が確かめられる。このような創刊号からの古典文学研究中心の『日語日文学研究』の志向は、2015年までの46%の比率にまで続いている。

以上、学会誌の論文の量的推移の分析を通して、韓国における古典文学中心の研究志向、古典文学研究の安定した高い位相を確かめてきた。教育現場の苦戦と乖離した研究領域の活況の内実に迫るために、以下では『源氏物語』研究の現況を分析する。

5. 『源氏物語』 研究現況

まず、8つの学術誌に掲載された古典研究論文における『源氏物語』研究論文の比重を調べるために、古典文学の研究論文と『源氏物語』研究論文の量的推移を調査した。表4では、上段は古典文学論文数、下段の（ ）の中は『源氏物語』の論文数を記し、総計ではその比率を付記しておく。

表4 『源氏物語』研究論文の量的推移

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	総計
日本学報	19 (5)	16 (6)	16 (3)	9 (0)	10 (1)	10 (0)	13 (3)	16 (2)	8 (1)	17 (2)	3 (1)	137 (24) 18%
日語日文学研究	26 (1)	21 (2)	16 (3)	32 (10)	41 (14)	23 (9)	23 (5)	23 (4)	29 (4)	30 (5)	23 (3)	287 (60) 21%
日語日文学	11 (0)	3 (0)	4 (0)	7 (0)	7 (0)	3 (1)	2 (1)	8 (2)	5 (0)	7 (0)	10 (1)	71 (5) 7%
日本語文学	15 (1)	9 (0)	11 (0)	12 (3)	6 (0)	6 (1)	16 (1)	7 (1)	11 (2)	11 (2)	10 (1)	114 (12) 11%
日本語文学	6 (0)	14 (0)	15 (1)	13 (1)	10 (1)	10 (0)	11 (0)	7 (3)	8 (0)	9 (0)	7 (0)	110 (6) 5%
日本文化学報	16 (1)	14 (3)	11 (2)	15 (5)	12 (2)	11 (2)	8 (1)	7 (0)	7 (1)	4 (1)	8 (1)	113 (19) 17%
日本文化研究	2 (0)	8 (1)	5 (1)	10 (6)	9 (4)	7 (1)	8 (0)	8 (3)	6 (1)	4 (1)	4 (1)	71 (19) 27%
日本言語文化	4 (1)	9 (0)	7 (2)	3 (0)	6 (1)	8 (2)	10 (0)	8 (2)	5 (1)	7 (3)	10 (2)	77 (14) 18%
総計	99 (9) 9%	94 (12) 13%	85 (12) 14%	101 (25) 25%	101 (23) 23%	78 (16) 20%	91 (11) 12%	84 (17) 20%	81 (10) 12%	94 (14) 15%	72 (10) 14%	980 (159) 16%

表4の量的推移の分析から次の特徴が見えてくる。まず注目される第一の特徴は、『源氏物語』研究論文の比重が2005年から2015年までの11年間、平均16%に達していることである。韓国における日本古典文学の研究が古代、中古、中世、近世と時代別に細分化されていることから考えると、平均16%という比率は一つの作品に関する研究論文数としてはかなり高く、古典文学研究における『源氏物語』研究の位相の高さが分かる。

第二の特徴は、平均10%台の論文数が2008年には25%、2009年には23%へと急増していることである。特に、『日本文化研究』の場合は、2008年には古典論文10本中の6本、2009年には9本中の4本の掲載で、2年間に総論文数71本中の10本が集中している。『日本文化研究』が古典文学研究論文の総数では20%を占め、学会平均34%（総数71本中19本）を下回り、8つの学会誌で一番低いことから考えると、『源氏物語』研究論文の平均27%は異例である。2008年と2009年の論文急増の原因から第三の特徴がみえてくる。

2008年と2009年度の論文の急増は、韓国内の博士学位論文の作成と深く関わっている。すなわち、第三の特徴は、韓国内の博士学位論文の準備過程において、学会誌での活動が活発に行われ、論文数が急増したことにある。

例えば、『日本文化研究』の場合、平均27%という高い比率は一人の著者、金サンウンの掲載論文数によるものであるが、同氏はその2年間の学会誌論文の総数10本中の5本、半分を占めている。圧倒的な比重であり、また、論文の題名を調べると、

2008年1月 「『源氏物語』と谷崎潤一郎小説比較考察——桐壺と帚木を中心に」

2008年4月 「『源氏物語』と谷崎潤一郎小説比較考察——空蟬、夕顔、末摘花を中心に」

2008年10月 「『源氏物語』と谷崎潤一郎小説比較考察——紅葉賀、花宴、葵を中心に」

2009年1月 「『源氏物語』と谷崎潤一郎小説比較考察——須磨を中心に」

2009年4月 「『源氏物語』と谷崎潤一郎小説比較考察——澁標を中心に」

上記のように、『源氏物語』と谷崎潤一郎の小説を比較する中で、『源氏物語』の巻別の考察を積み重ねていくことが注目される。同氏の研究活動を追跡したところ、同氏は2007年2月に『日本文化学報』に、「『源氏物語』と谷崎潤一郎小説比較——宇治十帖と『鍵』『瘋癲老人日記』を」発表している。したがって、3年間という期間や論文の題名の一貫性に注目し、博士学位申請論文を調査したところ、同氏は2010年に「『源氏物語』と谷崎潤一郎小説比較研究」で東国大学院から博士学位を取得したことが確認された。同氏は博士学位取得までの2007年、2008年、2009年の3年間、集中的に研究活動を行ったため、学会誌論文が急増した。

さらに、2008年と2009年度の論文の急増と『源氏物語』研究の博士学位申請論文の関連性を明確にするため、2005年から2015年までの博士学位申請論文を調べ、その間の学会誌論文の量的推移と比較してみる。次の表5は『源氏物語』研究の博士学位論文と学会誌掲載論文の量的推移をまとめたものである。()の中には、博士学位取得者の論文数を記しておく。

表5 学位論文と学会論文の量的推移

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
博論	-	-	1	-	2	4	3	-	-	-	-
学会誌	9	12	12	25 (10)	23 (7)	16 (9)	11	17	10	14	10

2007年まで、12本だった学会誌の論文が2008年に25本、2009年に23本と、ほぼ2倍もの増加をみせるが、通常博士課程在籍の3年間を考慮すると、韓国内で『源氏物語』研究で提出された博士学位申請論文は2009年に2本、2010年に4本、2011年に3本と、この3年間に集中していることも確認できる。取得者9人と論文題名、授与大学を以下に記す。

1) 2009年度

- 崔ジンヒ 「平安時代文学作品に表われている恋愛と言語表現」(啓明大学)
 金ヨンスン 「『源氏物語』研究——基礎研究資料の分析と浮舟論を中心に」(新羅大学)

2) 2010年度

- 金サンウン 「『源氏物語』と谷崎潤一郎小説との比較研究」(東国大学)
 金ビョンスク 「『源氏物語』の感覚表現に関する研究」(外国語大学)
 辛ミジン 「『源氏物語』人生儀礼に関する研究」(外国語大学)
 文インスク 「『源氏物語』に表れている光源氏の間人間関係に関する研究——笑いの機能を中心に」(外国語大学)

3) 2011年度

- 辛ウンア 「『源氏物語』の「嫉妬」に関する研究——「妬む女」の人物造形を中心に」(外国語大学)
 李ミリョン 「『源氏物語』の仏教的世界観に関する研究」(外国語大学)

学会誌論文の急増した2008年と2009年の論文数は計48本であるが、2009年の学位取得者二人の学会誌の論文発表は見当たらず、2010年、2011年度の博士学位取得者7人のうちの5人の論文掲載が確認できた。したがって、博士学位取得以前の、学位論文準備の過程での論文という基準をもって、2010年までの論文へと対象を広げ、7人の論文数を調べてみた。2008年は計25本中10本、2009年は計23本中7本、2010年は計16本中9本で、それぞれ40%、30%、57%の高い比重を見せていることがわかった。博士学位準備の過程での活発な研究活動は注目に値する。

結びにかえて

以上、昨今の韓国の大学の教育現場において、日本関連学科が危機に見舞われているなか、日本古典文学の研究、特に『源氏物語』研究の盛況を、論文の量的推移を通して見てきた。2005年から2015年の統計から、教育現場と乖離している古典文学研究、『源氏物語』研究の現況を確かめることができた。しかし『源氏物語』研究の一端を担っている博士学位取得者の活動が、2012年以後、確認できないことに注目したい。なぜなら、博士学位取得後、より活発な研究活動が期待されるにもかかわらず、学会誌の上では活動が断絶したからである。たとえば、2009年度の2人、『日本文化研究』に精力的に論文の発表した金サンウン、『日語日文研究』に3本を掲載した文インスクラ、合わせて4人の場合は、博士学位取得後、研究活動が途絶えている。また、2010年と2011年度の7人は学位取得までの4年間、学会誌に27本の論文を掲載し、36%を占めていたが、学位取得後、研究活動が縮小している。数値からしても、その7人は2011年から2015年まで6本しか論文を掲載しておらず、10%（総数62本）にまで激減した。統計数値の表面と裏面の間隔に目を向けていかなければならない。

数値の裏面にみえる、博士学位取得後の研究活動の断絶や縮小は、研究環境の悪化、教育現場の危機を意味する。社会的教育環境の変化、いわば人文学の危機が『源氏物語』研究の危機を加速化していることに、より敏感にならざるをえない。若手の研究者の研究活動の悪化という、研究環境の変化を重く受けるべきであろう。特に、韓国の『源氏物語』研究者の高齢化とも連動する研究環境の悪化についての分析結果や、これからの研究展望は今後の課題として残しておく。

16 韓国の日本鉄道研究の動向

——鉄道官僚の研究を含めて——

李 容相

1. 問題提起

日本鉄道の歴史は近代初期の韓国の鉄道開業と密接な関係がある。韓国における日本鉄道の研究は、時代によって過去と現在とに大きく分けられる。

韓半島（朝鮮半島）に初めて鉄道が走ったのは、京仁線（鷺梁津から仁川）が開通した1899年である。2年後の1901年、京釜鉄道（株）が設立され、京釜線（ソウル—釜山）の建設が始まった。その後、日露戦争（1904～1905年）が起こり、日本から満洲への軍需品輸送のため、韓半島を縦貫する鉄道が必要となり、京釜線に加えて、軍用鉄道としての性格の強い京義線の整備が急務になった。京釜線は1905年1月1日に、そして京義線は1906年4月3日に龍山から新義州までの全線が開通した。京義線は、全線開通前の1905年4月28日に、ソウルと新義州の連絡運転が始まり、日露戦争の軍事輸送に活用された。このように韓半島の鉄道縦貫ルートの早期実現は、軍事目的が優先されたためであった。日露戦争は1905年8月10日に停戦、ポーツマス条約により9月5日に終結した。

韓半島の鉄道はその後、朝鮮の植民地化に伴い、日本の植民地支配の主要手段となっていったが、一方、韓国の経済、文化、社会の変化にも大きな影響を与えた。日本統治期の韓半島の鉄道政策の注目すべき大きな変化の一つは、朝鮮総督府直営であった朝鮮鉄道が、南満洲鉄道株式会社（以下「満鉄」と略称）へ委託され、経営されることである。この委託経営は1917年7月に始まり、1925年4月まで続いた。日本の朝鮮統治は、1910年から45年まで35年間続き、その間の1917年から1930年までの韓国鉄道の輸送量の変化、政治的力学関係、国際関係の変化と鉄道政策など韓国鉄道に関する政策変容を検証することは、当時の日本植民地支配の実態を解明する上で重要な作業の一つと考えられる。その後、韓国鉄道は戦争に巻き込まれ、利用されるようになる。日本統治時代の鉄道政策とその影響に関する研究は、韓国鉄道史研究の中で最も立ち遅れている分野といえる。

鉄道は移動の自由、移動時間の短縮、生活空間の拡大、時間認識の変化をもたらし、社会の変化に大きな影響を与えているが、その影響に関する事実、評価研究は、韓国ではまださほど行われていない。また日本政府あるいは総督府の韓国鉄道政策についての研究も十分ではない。それは、朝鮮鉄道に関する研究者の評

価が二つに分かれているからである。まずは否定的評価として、主権を奪われた韓国鉄道の敷設は、特に日本の経済的、軍事的収奪のための手段として利用されたという見方である。この立場からは、植民地時代の鉄道を含む社会資本の整備は、終戦（1945年）以降の発展に寄与する部分は別になかったとする、いわゆる断絶性の主張である。一方、植民地時代の鉄道の整備に関しては、少数だが、肯定的側面を強調する見方もある。すなわち、植民地の近代化と産業の発展は、後日の韓国の工業資本主義への移行の基礎を築き、社会的に非常に大きい影響があったという見方である。

むしろ、歴史的評価は、様々な分野で膨大な事実分析と検証が必要である。これからの研究はこのような議論を踏まえて、まず韓国鉄道の政策決定と密接な関係のある日本鉄道の当時の状況を究明し、韓国鉄道との関係、繋がりを調べなければならない。近年の目覚ましい研究は歴史資料を翻訳し¹、日本鉄道の歴史と発展を解明する動向である²。日本統治期に関しては、鄭在貞³、許宇亘⁴の研究がある。

現代の日本鉄道に関する研究は、主に政策と技術面を取り上げるものが多い。政策については、日本鉄道の民営化の過程と結果、私鉄の発展、日本の鉄道博物館、鉄道貨物の歴史などがあり、技術については主に新幹線の技術発展や海外進出などがある。これらの研究は交通学、工学、経済学の視点が主流となっている⁵。

2. 今後の鉄道研究の分野

鉄道研究を4種類に大きく区分することができる。まず経済史と政治史の分野として鉄道が影響を及ぼす環境と鉄道の実態分析である。2番目は、政策決定に関連した官僚の思考、出身、背景、主張、事例など、行政学との関連を通して、鉄道政策にどのような影響を与えたかを分析する。3番目は時代変化による環境要因と国家政策、政治過程が鉄道政策や官僚制に及ぼした影響や繋がりに関する研究である。最後に、鉄道政策と、鉄道関連の法律、制度、組織、経営、技術、文化など経営成績との究極的な関係を究明するものである。これらの研究に基づけば、国家間の比較も可能となる。

1 鮮交会『朝鮮交通論』を韓国鉄道文化財団で2012年翻訳書として発行。

2 李容相ほか『日本鉄道の歴史と発展』1、2、3（韓国語）、ソウル：ブックギャラリー、2015年。

3 鄭在貞『日帝侵略と韓国鉄道』（韓国語）ソウル大学出版部、1999年。

4 許宇亘『日本強占期の韓国鉄道』（韓国語）韓国学叢書、2010年。

5 主に韓国鉄道技術研究院と韓国交通研究院で行っている。主なテーマは新幹線の効果と地域発展、技術開発戦略、海外進出戦略などである。

韓国における鉄道研究のテーマは、鉄道が急激に発達した植民地統治期（1910～45年）の日本、朝鮮、満州鉄道の環境、国の政策、状況などの比較研究があげられる。時期区分は、1910～20年、1920～30年、1930～45年の三つに分けられる。1914年の第1次世界大戦開始、1931年の満州事変、1941年の太平洋戦争開始があり、帝国主義、近代化、産業発展などに鉄道が大きな役割を果たした時期である。特に、日本の植民地において鉄道の役割と影響は巨大なものであった。それらを究明するには、鉄道に影響を及ぼした環境要因、国家政策、政治過程を調べ、各地の鉄道政策を比較し、鉄道機能の相違点を明らかにすることが必須である。例えば、軍事、産業、経済、政治などの架け橋とすべく、満州が一時期朝鮮鉄道を委託経営したこと、植民地鉄道としての日本鉄道との関係、戦争と産業発展に貢献した日本鉄道、大陸連結と産業発展に密接な関わりをもつ朝鮮鉄道、総合植民地会社（イギリス東インド会社と同じ）として鉄道附属地内で土木、教育、衛生の行政を行った満鉄。このような各地鉄道の特徴を主な資料をもって証明していくことも重要なテーマの一つであろう。

特に、朝鮮鉄道に関する主要鉄道政策は、三つの側面から考察することができる。まず、日本の大陸進出の手段として日本陸軍参謀本部が鉄道を高く評価し、官僚の任命は日本の鉄道省によるが、任命された官僚が独自の判断力も持っていたことを考察すべきである。二番目は、満鉄委託経営に対する立場の違いである。例えば寺内総督の鮮満一貫統治、軍の立場、外務省の立場（反対）はそれぞれ共同輸送ルート（三線連絡運賃）と関係している。委託経営の交通史的観点から、産業、行政、交通の一元化または二元化についての議論、鉄道の使命（行政と産業の円滑化）、朝鮮総督府への還元理由（朝鮮の生活安定と産業開発）などを究明すべきである。三番目は、鉄道が朝鮮の産業と地域の発展にどのような貢献をしたのか、特に私鉄の役割に注目する必要がある。

日本の鉄道網は、幹線の場合は軍事、国土経営の目的で利用され、私鉄の場合は商業が目的であったが、敷設は同時に行われる。朝鮮は先に幹線を、それから私鉄を建設する。満鉄は幹線中心に運営した。日本と朝鮮の鉄道は輸送中心、満鉄は都市開発中心、という特徴があるが、戦争遂行という共通点も持っている。鉄道と技術との関係については、日本鉄道は国有体制下の技術自立と輸出（1906年鉄道国有）、朝鮮、満州は国際標準による中国への直通鉄道（軍事鉄道）という特徴も持っている。技術自立の問題点としては、政治の介入（1910～20年）と、全面侵略戦争下の技術破綻と崩壊（1930～40年）などを、詳しい事例をあげながら証明していかなければならない。最後に、政策決定の過程に影響を与える官僚

の出身背景、官僚システム、主な政策決定者と集団などを考察する。各地の官僚システムをみると、日本は政治家、官僚、軍人が政策の決定権をもっていたが、朝鮮は官僚が、満鉄は初期は政治家が、後期は関東軍が影響力をもっていた。各地の鉄道官僚の出身背景と性格、政策決定過程を分析、比較することが期待されている。

3. 研究分野としての鉄道官僚

日本統治期の鉄道官僚の出身背景などについての分析は、当時の鉄道の性格を理解するための重要な作業である。1916年から1936年までの間、主要鉄道官僚の出身校は東京帝国大学の理系が多い(表1)。また、鉄道官僚の中で、満鉄出身者の占める割合が徐々に増している。満鉄出身者は、1925年の委託解除以降も朝鮮鉄道官僚として多くの割合を占め、朝鮮鉄道局出身者が増えるのは、1936年になってからであることがわかる(表2)。

表1 官僚の出身学校の変化 (単位：%)

	1916年	1927年	1936年
東京帝国大学卒業	47	47	42
京都帝国大学卒業	6	24	26
他の大学	6	6	5
高校卒業、現業	41	24	26

表2 官僚の出身の変化 (単位：%)

	1916年	1927年	1936年
朝鮮鉄道局	29	12	35
日本鉄道省	35	59	12
満鉄	0	24	53
他の部署	36	6	0

特に韓国鉄道に勤めた鉄道局長らの特徴分析も重要で、当時7人の鉄道局長が在任した(表3)。

初代局長である古市公威(1854-1934)は1854年9月4日姫路出身で、1875年文部省初の留学生としてフランスに留学、エコール・サントラルで工学を専攻し、数学、天文学を学んだ。帰国後、内務省土木局に入り、要職を歴任し、1898年11月通信次官を経て、1903年3月鉄道作業局長官に就任した。官僚を辞めてから、京釜鉄道総裁を経て、1905年に大陸鉄道の経営や技術を研究する東亜鉄道研究

表3 鉄道経営主体の変化と鉄道局長

時期	鉄道管理主体	鉄道局長	特徴
1905年～1909年	統監府鉄道管理局	古市公威	学者、官僚、京釜鉄道会社社長、土木工学博士（フランス留学）
1909年	統監府鉄道庁	大屋権平	幹線鉄道完成（湖南線、京元線）、土木工学博士
1910年	韓国鉄道管理局鉄道院	大屋権平	東京大学（1883年卒業）、鉄道省技師
1910年～1917年8月	総督府鉄道局	大屋権平	1917年7月日本帰国
1917年9月～1923年5月	満鉄京城管理局	久保要蔵	日本中央大学卒業 高等文官試験（官僚）
1923年6月～1925年4月	満鉄京城管理局	安藤又三郎	
1925年5月～1932年9月	総督府鉄道局	大村卓一	札幌農学校 北海道炭鑛鉄道会社 鉄道建設12年計画策定 南満州鉄道株式会社社長（1939年）
1932年10月～1938年4月	総督府鉄道局	吉田浩	東京帝国大卒業 1910年鉄道院入社（官僚） 1929年東京鉄道局長
1938年5月～1939年6月	総督府鉄道局	工藤義男	
1939年7月～1943年11月	総督府鉄道局	山田新十郎	
1943年12月～1945年8月	総督府交通局	小林利一	東京帝国大卒業 高等文官試験（官僚）

出典：鮮交会『朝鮮交通史』1986年、294-97頁；森尾人志『朝鮮の鉄道経営』日新印刷、1936年、74、178-81頁。

会を設立し、理事長になった。古市は当時工学界の第1人者であり、高潔な人格で尊敬された。統監伊藤博文も「古市さん」と敬称を付けて、呼んでいた⁶。

第2代局長の大屋権平（1861-1924）は、岩国出身で1883年に東京大学理学部を卒業、1885年に鉄道局技師となり、日露戦争前夜の1903年に京城—釜山間の京釜鉄道の工事長になった。統監府鉄道管理局長を経て、1909年に鉄道院技監兼韓国鉄道管理局長、1910年に朝鮮総督府鉄道局長に就任した。

大屋は統監府鉄道管理局長の時代、地理的に韓国釜山が中国大連より利便性があり、京元線と、元山—平壤間の鉄道との建設によって利益をあげることができるとして、安奉線によって大陸と欧州まで連結ができると主張した⁷。彼はさらに朝鮮鉄道の拡張のため、1909年には京元線と湖南線の建設を提案した⁸。彼は、大

6 江口寛治『朝鮮鉄道夜話』京城：二水閣、1936年、46-47頁。

7 大屋権平「朝鮮鉄道に就いて」『経済評論』第8巻第19号、1908年11月、17-18頁。

8 大屋権平「朝鮮鉄道談」『経済評論』第9巻第16号、1909年9月、11-12頁。

表4 古市公威の経歴

年 度	内 容
1873年	開成学校仏語科卒業
1875年～1880年	パリ留学, 工学学士, パリ理科大学(数学、天文学)卒業
1881年～1885年	内務省土木局事務取扱, 土木局勤務
1886年	工科大学教授, 帝国大学工科大学学長
1890年	内務省土木局長
1899年	鉄道国有調査委員
1903年	鉄道作業局局長, 長官(1905年)
1903年	京釜鉄道株式会社総裁
1904年11月	京釜鉄道速成竣工
1905年1月	京釜鉄道全線営業
1905年10月	東亜鉄道研究会理事長
1906年6月	統監府鉄道管理局長
1907年6月	統監府鉄道管理局長辞任
1911年	広軌鉄道改築委員
1919年	金剛山電気鉄道株式会社取締役

出典：真野文二『古市公威』故古市男爵記念事業会，1937年，423～38頁。

表5 大屋権平の経歴

年 度	内 容
1883年	東京大学理学部を卒業
1885年	鉄道局技師
1903年	京釜鉄道株式会社 工事長
1907年6月	統監府鉄道管理局長
1909年	鉄道院技監兼韓国鉄道管理局長
1910年	朝鮮総督府鉄道局長
1916年	鉄道局汚職事件
1917年	朝鮮総督府鉄道局長辞任
	日本帰国

出典：日本図書センター『朝鮮人名資料事典第4巻』2002年，19頁。

陸との縦貫線以外に産業発展のための鉄道建設をも考えた。さらに、各国の人口1万人当たりの鉄道距離を示し、日本は1.29マイル、台湾は1.54マイル、欧州4.70マイル、米国27.10マイルに比べて朝鮮は0.66マイルに過ぎないと指摘している(1914年当時)⁹。大屋に対する評価は、官僚的で、部下に皮肉を浴びせることが多く、大酒飲み、というものであった。

朝鮮鉄道で主な役割を果たした局長は大村卓一と吉田浩であった。大村卓一は鉄道省運輸局長種田虎雄の推薦で任命された。種田虎雄の義兄が総務総監の下岡忠治であった¹⁰。大村は英語のできる国際派であった。鉄道局長在任期間中(1925～32年)、1925年に朝鮮鉄道の使命について次のように述べた。長い引用になるが、朝鮮鉄道のあり方についての重要な理論なので紹介する。

9 大屋権平「朝鮮鉄道の将来」『朝鮮叢報』1915年5月号、13-15頁。

10 大村卓一追悼録編纂会『大村卓一』1974年、243頁。

表6 大村卓一の経歴

年 度	内 容
1872年2月3日	福井市松ヶ枝下町長男として出生
1889年	札幌農学校入学
1898年	札幌農学校工科卒業
1898年-1905年	北海道炭鉱鉄道
1905年	鉄道国有法により官吏、北海道鉄道局勤務
1908年	北海道鉄道局工務課長、港湾と鉄道一体経営主張
1909年	鉄道院総裁後藤新平の港湾と鉄道一体経営に対する支持を取り付ける
1915年	北海道鉄道局管理局長代理
1917年-1920年	鉄道院勤務、シベリア出張
1920年	鉄道技師
1922年	山東鉄道条約実施委員
1925年	北京国際鉄道連結委員会支那側最高委員
1925年5月-1932年	朝鮮鉄道局長（総務総監下岡忠治の推薦）
1926年	朝鮮鉄道12年計画樹立
1932年	関東軍交通監督部長
1935年9月	満鉄副総裁
1939年3月24日-1943年7月14日	満鉄総裁
1944年	『大陸に在りて』出版
1945年	大陸科学院長に就任
1946年3月5日	死去、10月10日東京霊南坂教会で葬儀

出典：大村卓一追悼録編集会『大村卓一』1974年、396-416頁。

朝鮮鉄道は本来、日本の商権の拡張を前提して企画され、京城、仁川間の線路を完成したが、国際環境のため、南の釜山より国境新義州に至る縦貫線路を敷設し、更に主要港湾に支線を通じて、軍事目的に使用された。勝利の結果、朝鮮における日本の地位を確立すると共に、日本政府は朝鮮の開発と鉄道統一改善のため、一九〇六年京釜鉄道を国有化し、京義、馬山線を軍用のため速成に開通した。一九一一年鴨緑江鉄橋と安奉線の改築は朝鮮鉄道を世界の公路として、産業鉄道と国際鉄道として位置付けられた。以来、線路は延長され、施設は改善されたが、他の鉄道に比べて、貧弱な状態である。鉄道延長は一三〇〇マイルで貨物は四〇〇万トンであるが、満鉄は、半分の線路距離で一三〇〇万トンを輸送している。鴨緑江、圖們江の奥国地域は天然資源が多く、鉄道の敷設による開発ができる。拓殖鉄道は最初収益をあげることは無理であるが、富源開発を使命とする朝鮮鉄道はその方面に向か

うべきである。朝鮮鉄道の歴史をみると当初産業鉄道として起こり、中頃に至り軍事的色彩を表したが、これは単に一時的現象に過ぎない。再び本来の産業鉄道に復帰しているところである。満鉄からの委託解除もその趣旨である。朝鮮鉄道は国内産業開発と国際鉄道としての重要な役割が期待されている。このような目的を達成するために、前者においては路線の拡張と運賃値下げ、後者のためには膨大な経費が必要であるが、これを遂行しなければならない。¹¹

大村卓一が企画し、1927年に帝国議会で通過した「鉄道十二年計画」は朝鮮鉄道に大きな影響を与えた。これは5新線860マイルを建設、5私鉄210マイルを買収し、線路と車両の改良に3億2千万円を投資する計画であった。1927年の国有、私有を合わせた鉄道距離1,800マイルを、1938年に3,500マイルに拡張するという線路倍増加計画である。

吉田浩朝鮮鉄道局長は「特にキリスト教の社会観の上に立っていた大村さんにとっては、それが直接日本のためにならなくとも人類のため大なる貢献をしていることをさぞ満足されていると思う」と言ったことがある¹²。吉田浩は鉄道局長在任期間中（1932～38年）、1932年の『鉄道時報』で次のように述べている。

朝鮮鉄道は日満交通の要衝地であり、東京と新京間の速度向上、北鮮線を媒介した新しい幹線の形成を期している。朝鮮鉄道は総延長4,100キロ、面積1,000平方キロあたり18.8キロ、人口10万人あたり22.5キロで、日本の1,000平方キロあたり66.9キロ、人口10万人あたり31.2キロに比べて低い水準である。朝鮮の場合、日本と異なり、多量の生産の必要に迫られて敷設されたのではなく、鉄道が先に敷設されており、文化の発展、資源開発を期待している。運営初期は収入は充分ならず、今後工業時代に向かって鉄道収入は増加することを期待している。¹³

11 大村卓一「朝鮮鉄道の使命」『朝鮮』1925年5月号、142-43頁。

12 大村卓一追悼録編纂会『大村卓一』1974年、253頁。

13 吉田浩「朝鮮鉄道本来の使命」『鉄道時報』1933年1月号、51頁。なお、引用にあたっては、読者の便を鑑み、現代語に要訳した。

表7 吉田浩の経歴

年 度	内 容
1885年	東京生まれ
1909年	東京大学政治学科卒業, 高等文官試験合格
1910年	鉄道省勤務
1915年	北海道鉄道管理局勤務 (その時期大村卓一は工務課長)
1932年	門司鉄道局長, 東京鉄道局長
1932年7月-1938年4月	朝鮮鉄道局長 (政務総監今井田推薦) 今井とは大学同窓

出典：日本図書センター『朝鮮人名資料事典第4巻』2002年, 34頁。

このような分析を通して初期は鉄道専門家、後期は官僚がその任を務めたことが明確になった。また鉄道局長はだんだん官僚が務めるようになった。

表8 鉄道局長性格

鉄道局長	性 格	特 徴
古市公威、大屋権平	鉄道専門家 (博士)	初期幹線鉄道完成
久保要蔵、安藤又三郎	官僚	満州鉄道委託経営
大村卓一	鉄道専門家	産業鉄道、私鉄発達
吉田浩、小林利一	官僚	官僚優位、戦争時は軍が優位

4. 結 び

今後、韓国において日本鉄道に関する研究はさらに増えていくことだろう。特に鉄道史研究を含む比較研究などが期待される。最後にこの研究を遂行するために利用してきた資料を記しておく。最近、学習院大学の友邦文庫で公開された資料¹⁴が利用可能である。初期韓国を調査した松田行蔵の関連資料¹⁵、京釜鉄道株式会社を設立した洪沢栄一の資料である『洪沢栄一伝記資料』、韓国鉄道技術研究院の資料室

14 萩原三朗外録音「朝鮮の鉄道を語る——満鉄時代から朝鮮への回顧」朝鮮問題研究会、1969年、田中保太郎録音「朝鮮の鉄道について」近代史研究会、1958年、穂積真六朗録音「間島問題を中心に」近代史研究会、1959年、姜徳相録音「朝鮮の鉄道」朝鮮問題研究会、1959年など (学習院大学東洋文化研究所蔵)。

15 慶尚道全羅道旅行記事並農商況調査録』商法会議所、1891年、復刻『慶尚道全羅道旅行記事並ニ農商況調査録』竜溪書舎、2009年、『朝鮮国慶尚忠清江原道旅行紀事——農商調査表附』商法会議所、1888年、檀國大學校附設東洋學研究所編『開化期日本民間人の朝鮮調査報告資料集』檀國大學出版部、2001年、須川英徳「日本人が見た朝鮮の村々——松田行蔵朝鮮国慶尚忠清江原道旅行記事」『アジア遊学』32号、勉誠出版、2001年

にある日本統治期の鉄道関連資料(約300巻所蔵¹⁶)が参考になり、国家記録院 (<http://www.archives.go.kr/next/viewmain.do/>)、国立中央図書館 (<http://www.nl.go.kr/nl/index.jsp>)、韓国歴史情報システム (<http://www.koreanhistory.or.kr/>)、国会図書館 (<http://www.nanet.go.kr/main.jsp>)、国史編纂委員会資料室 (<http://library.history.go.kr/index.ax>) もネット検索が可能となっている。

参考文献

「満鉄委託」について

大村友之丞 1917 「鮮満鉄道合併に伴う諸問題」『朝鮮及び満州』1917年7月1日。

朝鮮総統府 1917 「朝鮮総統府官制改正ノ外五件第三審議会 枢密院委員会録」

釈尾旭邦 1917 「編輯室より」『朝鮮及び満州』1917年7月1日。

帝国鉄道大観編纂局(編) 1927 『帝国鉄道大観』運輸日報社。

林美美子 1933 『三等旅行記』改造社。

江口寛治 1936 『朝鮮鉄道夜話』二水閣。

朝鮮総統府鉄道局(編) 1940 『朝鮮鉄道四十年略史』朝鮮印刷株式会社。

鮮交会(編) 1986 『朝鮮交通史』鮮交会。

北岡伸一 1978 『日本陸軍と大陸政策1906-1918年』東京大学出版会。

山縣有朋 1967 「満鉄鉄道経営方策」『山縣有朋意見書』原書房。

浅田喬二 1990 『日本植民地研究史論』未來社。

満鉄会(編) 2007 『満鉄四十年史』吉川弘文館。

「未公開資料 朝鮮総督府関係者録音記録」2014 『東洋文化研究』第16号、学習院大学東洋文化研究所。

朝鮮総統府鉄道局『朝鮮総統府鉄道局年報』各年版。

「朝鮮鉄道12年計画」について

大平鉄畊 1927 『朝鮮鉄道十二年計画』鮮満鉄道新報社。

帝国鉄道大観編纂局(編) 1927 『帝国鉄道大観』運輸日報社

南満洲鉄道株式会社(編) 1932 『南満洲鉄道株式会社三十年略史』。

姫野徳一 1932 『満鉄総裁論』日支問題研究会。

大村卓一 1944 『大陸に在りて』勝進社。

『帝国議會衆議院委員會議録』1987 第51会(1926年)、52会(1927年)、臨川書店。

日本国有鉄道 1984 『日本国有鉄道百年史』成山堂書店。

金景林 1987 『조선철도 12년 계획선에 관한 연구(朝鮮鉄道12年計画線に関する研究)』梨花女子大学校修士論文。

16 日笠芳太郎『満鉄総裁論』(大阪屋号書店、1933年)、南満洲鉄道株式会社『南満鉄株式会社条約集』(竜溪書舎、1993年)、満鉄京城図書館編『満鉄京城図書館図書目録』(満鉄京城図書館、1925年)、福崎栄蔵『鮮満機関車』(交友社、1939年)、日笠芳太郎『満鉄改造論』(大阪屋号書店、1933年)など。

- 山本有造 1992 『日本植民地経済史研究』名古屋大学出版会。
- 高橋泰隆 1995 『日本植民地鉄道史論』日本経済評論社。
- 小林道彦 1996 『日本の大陸政策』南窓社。
- 今西一 1997 「帝国『日本』の自画像——1920年代の朝鮮『同化』論」『立命館言語文化研究』第8巻第3号。
- 鄭在貞 1999 『日帝侵略과 韓国鉄道 (1892-1945)』ソウル大学出版部。
- 松下孝昭 2004 『近代日本の鉄道政策 (1890-1922年)』日本経済評論社。
- 李容相ほか 2005 『일본철도의 역사와 발전 (日本鉄道の歴史と発展)』(韓国語) ソウル:ブックギャラリー。
- 金大煥 2006 「朝鮮鉄道12年計画 (1927 ~ 1938) について」『史学論叢』第36号、2006年3月、別府大学史学研究会。
- 鄭在貞 2007 「朝鮮總督府의 鉄道官僚와 鉄道政策: 大村卓一の 경우-」『國際シンポジウム30 日本・朝鮮・台湾支配と植民地支配』国際日本文化研究センター。
- 谷島桂 2009 「植民地朝鮮への鉄道投資の基本性格に関する一考察」『経営史学』第44巻第2号。
- 井村哲朗 2012 「村上義一文書に見る北鮮鉄道港湾建設——満鉄の北鮮港湾経営・再論」『環東アジア歴史年報』第7号、新潟大学、2012年3月。
- 韓国鉄道文化財団 2013 『조선교통사 (朝鮮交通史)』(韓国語) ソウル:ブックギャラリー (鮮交会『朝鮮交通史』1986年の翻訳)。
- 老川慶喜 2013 『井上勝』ミネルヴァ書房。
- 慶応義塾大学『村上義一文書』(5A-1)。

「吉会線敷設と北鮮鉄道」について

- 許興凱 1930 『滿洲經濟と日本帝國主義』白揚社。
- 南滿洲鉄道株式会社 1932 『南滿洲鉄道株式会社30年略史』滿洲日日新聞社。
- 柴田彌一郎 1942 『交通政策論』商工行政社。
- 『帝國議會衆議院委員會議錄 朝鮮事業公債法改正』1987 第51会 (1926年)、52会 (1927年)、臨川書店。
- 橋谷弘 1982 「朝鮮鉄道の満鉄への委託経営をめぐる——第一次大戦後の日帝植民地政策の一断面」『朝鮮史研究会論文集』第19号。
- 加藤聖文 1997 「吉会鉄道敷設問題」『日本植民地研究』第9号。
- 芳井研一 2000 『環日本海地域社会の変容——「間島」・「滿蒙」と「裏日本』』青木書店。
- 中見立夫ほか 2006 『滿洲とはなんだったのか』藤原書店。
- 坂本悠一 2006 「植民地期朝鮮鉄道における軍事輸送と釜山——シベリア出兵・満州事変を中心として」『社会文化研究所紀要』第59号、八幡大学。
- 谷島桂 2010 「植民地朝鮮における国有鉄道十二年個年計画」『歴史と経済』第52巻第2号。

17 ソウル大学の日本研究

——「人文韓国支援事業」(2008-2018年)の研究成果を中心に¹——

張 寅 性

1. 韓国の日本研究の新動向——研究所中心の集中研究

ここ20年間、韓国の日本研究は質量ともに大いに成長してきた。韓国の日本研究は長らく専攻別の個別研究の形で行われ、研究アジェンダの形成はほとんど期待し難かった。だが、ポスト冷戦期に入って日本関連の学科が多数設置されたのとあいまって、地域研究が活性化し、その研究分野も日本語日本文学研究から人文社会科学へと広がってきた。さらに、現代現象の研究の増大、テーマの多様化やソフト化、集中研究の活性化といったような現象も見られる。とりわけ、研究所中心の集団的共同研究が大いに活性化したことは、特筆すべきである。集中研究の活性化は、「韓国研究財団」の「人文韓国 (Humanities Korea) 支援事業」(以下、HK事業)と「重点研究所支援事業」によるところが大きい。とくにHK事業に参加する大学の日本研究機構は、長期的な研究のできる基盤を整え、一段と研究能力を高め、多くの意味ある研究成果を挙げている。研究所中心の集中研究は、日本研究のアジェンダの多様化や研究レベルの格上げをもたらしていると言える。

最近韓国の日本研究は、ソウル大学日本研究所、高麗大学グローバル日本研究院、国民大学日本学研究所、翰林大学日本学研究所など、大学付設の日本研究機構を中心に進められている。高麗大学グローバル日本研究院は2007年から「跨境の日本語文学・文化研究」、「日本の国内国語政策と日本語の世界化戦略」、「東アジアの戦争と平和、そして共同体」、「ポスト3・11と人間」をテーマに共同研究を行っている。国民大学日本学研究所は2002年の設立以来、日韓関係の歴史学的アプローチと政策的な観点を兼ねた集中研究に携わってきた。日韓国交正常化交渉や日韓の懸案に関する日本側資料を収集、整理する作業を行っている。翰林大学日本学研究所は、近代日本の文化や思想に関する研究に集中し、2008年以來「帝国日本の文化権力——学知と文化メディア」をテーマに掲げた長期プロジェクトを進めている。

ソウル大学日本研究所は2004年11月の発足以来、研究インフラの構築に力を

1 この文の作成にあたり、ソウル大学日本研究所の徐東周教授に関連資料を提供していただいた。徐教授に感謝の意を表したい。

注ぎ、韓国の日本研究をリードする研究機関として成長した。2008年から10年間のHK事業を通じて多数の専任教授やスタッフを確保して、日本研究の基盤を築き上げ、日本研究の活性化や研究アジェンダの多様化に取り組んできた。同研究所のHK事業は、「現代日本の生活世界を研究する核心拠点の構築」を目指している。現代日本人の生活や体験に関する資料を収集し、その経験的研究を通じて現代日本の生活世界を解明する作業を行っている。国内外の日本研究機関との学術交流も活発に行い、研究活動の国際化を模索している。以下、日本研究所HK事業の主要研究成果を中心に、ソウル大学の日本研究の動向を紹介することにした。

2. 「現代日本の生活世界」——ソウル大学日本研究所の研究アジェンダ

ソウル大学日本研究所のHK事業（2008～2018年）は、「現代日本の生活世界に関する研究の核心的拠点の構築」、「人文学と社会科学の交流や融合による新しい日本研究モデルの構築」を目指している。日韓関係の歴史的経験に拘泥してきた従来の観点や方法を脱し、グローバルとトランスナショナルな視点から日本自体を捉えようという観点に立って、現代日本の生活世界の総体的解明に取り組んでいる。この長期プロジェクトは、3段階からなっている。

第1段階（2008～2011年）では、現代日本の生活世界の発見と新しい方法論の模索を試みた。従来、韓国の日本研究は、植民地の経験と関連したナショナリズムによって日本を見る視線が制限されるか、あるいは、経済的發展モデルとしての日本を想定する実用主義的観点によって日本の特殊性に注目する傾向を表してきた。「生活世界」の観点と方法は、こうした従来のやり方を乗り越え、日本そのものを捉えようという視点、ポスト戦後とグローバル化に応じる日本社会の構造変動と個人の暮らしを同時に把握しようとする視点が含まれている。現代日本の生活世界に見られるアイデンティティと境界の変容を究明する作業も行われている。

第2段階（2011～2014年）では、現代日本の生活世界の構造変動に関する研究が行われた。1段階の研究を進めるうちに日本に少なからぬ変動が起きた。歴史問題をめぐって中国、韓国との葛藤が深まり、東アジア国際関係の変化が見られた。国内では民主党政権の成立など日本政治の変動が起きた一方、長期低迷の持続や格差社会への移行が顕著になった。特に3・11の東日本大震災は、「安全神話」「成長神話」「平和神話」という3種の「戦後神話」の総体的崩壊を招き、生活世界の構造変動をもたらした。第2段階では、こうした事態を捉えて「戦後

日本の構造変動」に焦点を当て、「ポスト3・11の日本」のあり方を模索する研究を行った。

現在は第3段階（2014-2018年）が進行中である。研究アジェンダは「戦後日本の構造的な大転換と生活世界の再編」である。安倍政権の成立とともに生活世界の構造変動がどのように再編されているのかを解明する研究である。

各段階では4、5組の共同研究チームがそれぞれのテーマに取り組んできた。各チームは、共同研究の学際性や完成度を高めるために、数回のワークショップを行い、研究所主催の公開シンポジウムを開いて報告を行う。以下、1段階、2段階の研究成果の内容を紹介し、進行中の3段階の企画研究のテーマにも触れる。

3. 生活世界の発見と新しい方法論の模索——第1段階（2008-2011年）

論文集『戦後日本、そして不慣れな東アジア』（2011年）

この論文集は戦後日本に隠れている「東アジア」の表象を探索することにより、戦後日本で成立した一国的アイデンティティの虚構を究明する共同研究の成果である。「大東亜共栄圏」の旗印の下に表出された「東アジア」表象が、敗戦後「再・国民国家化」過程で日本国民の意識のなかに潜伏し、戦後日本の生活世界に浸透した様相を分析している。日本と東アジアの関係に関する日本人の矛盾した自己認識、戦後日本の新しいアイデンティティの形成過程において生活世界のなかで隠されている亀裂の姿を解明している。

収録論文のテーマは、次のとおりである。第1部 認識：「日本「戦後平和主義者」の朝鮮経験とアジア認識」（南基正）、「雑誌「アジア問題」に見る1950年代日本のアジア認識」（丁振聲）、第2部 運動と政策：「日本の歌声運動と社会主義圏の東アジア」（李知宣）、「東アジア冷戦と日朝友好運動の胎動」（朴正鎮）、「日本自民党政治勢力の東アジア観——1960年代と1990年代の比較」（朴喆熙）、第3部 表象：「1960年代の大島渚映画のなかの在日朝鮮人・韓国人表象」（申河慶）、「東アジア作曲家」としての尹伊桑」（李京粉）、「日本ネット右翼と嫌韓・嫌中のナショナリズム」（金孝眞）。

論文集『東京メトロポリス——市民社会、格差、エスニック・コミュニティ』（2012年）

この研究書では、バブル経済崩壊後の景気低迷の長期化および急速な高齢化と人口減少による社会的活力の減少などの社会変動に対する経験的研究を通じて、マクロな構造変動が生活世界で現れている様相を考察している。この研究は、「失われた20年」の間、日本社会が「停滞」していたのではなく、それなりの変化

を見せてきたという前提に立っている。公共性と市民社会の再編、都市開発と地方分権、格差と貧困、青年層の雇用問題と高齢化、産業構造の転換、多民族・多文化など、東京の生活世界に見られた変化を分析している。

次のようなテーマを扱っている。第1部 行政改革と市民社会：「新しい「公共」創出の論理と構造——川崎市の政策と市民活動を中心に」（韓榮恵）、「多摩ニュータウンの人口転換と市民社会」（林采成）、「2016年東京オリンピックの挫折と都市の政治経済」（金銀恵）、「首都圏行政区域の改編の地域的特性と類型」（趙アラ）、第2部 格差社会と雇用：「格差社会、労働貧困層問題に対する地域の対応——首都圏の地方自治団体における公契約条例制定運動を中心に」（鄭永薫）、「溶けない氷河と東京青年労働市場」（金英）、「日本大田地域の町工場と熟練工の性格変化」（李鍾久）、第3部 変化するエスニック・コミュニティ：「東京都政と在日朝鮮人施策」（朴正鎮）、「横浜のエスニック・メディアと多文化共生のジレンマ」（徐東周）、「東京新大久保エスニック・コミュニティの成長と地域社会」（李虎相）。

論文集『戦後日本の知識風景』（2013年）

この論文集は、戦後日本の民主主義、平和憲法、日米同盟の制度が成立するなかで、日本人の価値や思想を規律する知識がどのように形成されていたのかについて考察した共同研究の成果だ。知識をめぐる理念、運動、制度の相互作用に注目しながら、人文的思惟と社会科学的思惟、伝統と近代、保守と進歩がそれぞれ拮抗し、または結合する様子を捉えている。雑誌、団体、研究所などを媒介にした知識の形成を扱う。

収録された論文は下記の通り。第1部 戦後思想の政治性・無政治性：「「新しい戦争」と文化的自由主義の行方——〈近代文学〉をめぐる思想空間」（徐東周）、「戦後日本の保守主義と教養——『心』の運動と思想」（張寅性）、「戦後日本の音楽の連続性と脱政治化——『音楽之友』の戦後変容」（李京粉）、第2部 解放・平等のアイロニー：「戦後日本の「女性解放」の現実と理想——占領期の『婦人公論』における女性参政権と家事解放の言説」（李垠庚）、「戦後在日朝鮮人の解放運動と知識の政治性——『民主朝鮮』『ゼンダレ』の時代と記憶の政治」（趙寛子）、第3部 社会科学の形成・変容：「戦後社会科学の制度と知識——東京大学社会科学研究所の誕生と運用」（南基正）、「マルクス主義歴史学の戦後変容——戦後日本の歴史学界の運動と争点」（朴晋雨）。

論文集『協調的労使関係の行方——戦後日本の労働と経営の変容』（2013年）

この論文集は、年功序列、終身雇用、企業別労働組合など、日本的労使関係の変容を検討している。この共同研究では、現在日本の労働界が直面している問題が一時的なものではなく、日本社会の歴史的過程で生じた構造的変化であることを確認している。同時に、その構造的変化にもかかわらず、労使関係の固有性が市場主義制度の改革を遅らせていることを明らかにした。

「戦前期の日本労使関係の展開と工場委員会」（林采成）、「敗戦直後の日本の構造調整政策と労使関係」（宣在源）、「高度成長期の日本の労使関係——企業別組合体制の成立を中心に」（金三洙）、「エネルギー革命期の日本石炭産業の労働運動——石炭政策転換闘争を中心に」（丁振聲）、「低成長期の日本における労使関係の動揺と再編——1970～80年代を中心に」（金良泰）、「グローバル化と日本の企業別組合——「従業員主権」のパラドックス」（禹宗杭）、「日本の雇用慣行とジェンダー——結婚退職を中心に」（榎一江）などの論文が載っている。

論文集『現代日本の伝統文化』（2012年）

この研究書は「伝統」の原型に関する考察ではない。現代日本社会において伝統文化が持つ意味を探索している。「伝統」がどのように変形し、現代日本の生活世界に生かされ、働いているか、かつその変容した「伝統」がいかに既存の「伝統」に新しい意味を与えているかに注目する。これは、伝統文化をめぐる日本人の実践の仕方に対する探求であり、意味の変容に関する考察ともいえる。

次のようなテーマを取り扱っている。第1部 制度：「神社の現代的な風景、会社神社」（朴奎泰）、「伝統警官の制度的生産と変化」（趙アラ）、第2部 表象：「現代の日本旅館、おかみさんの伝統と変化」（李垠庚）、「近代以降、着物の変貌と「アンティーク着物のブーム」（金孝眞）、「日本の宮廷公演芸術や文化コンテンツ」（李知宣）、第3部 少数者：「日本の伝統、京都の繊維産業を後押ししてきた在日朝鮮人」（権肅寅）、「沖縄の伝統芸能の活性化と少数民族アイデンティティの行方」（陳泌秀）。

4. 生活世界の構造変動——第2段階（2011-2014年）

論文集『日本、喪失の時代を超えて』（2014年）

著者たちは、ポスト高度成長期の日本の生活世界が変化するなかで現れた思想言説や文化表象を分析している。「失われた20年」と大震災による喪失感が日本社会にどのような変化をもたらしたか、日本人たちは喪失感をどう克服してきた

かを分析している。反米論、大衆社会論、国家戦略、大衆文化論などのトピックを扱っている。これらのトピックを貫くキーワードは「喪失」と「未来」だ。

論文集の構成は次のようである。第1部 時代思想と大衆社会論：「反米主体化とアジア主義の二重変奏——世紀の転換期（1990-2010年）における日本の思想地形」（趙寛子）、「高度大衆社会の日本と保守主義——西部邁の保守理念」（張寅性）、第2部 国家戦略と社会運動：「民主党政権の国家戦略と平和言説——安倍の「積極的平和主義」を評価する前に」（朴正鎮）、「2000年代デモ文化と脱原発運動」（朴志煥）、第3部 関係の喪失と主体の回復：「園子温の映画とアイデンティティ——『自殺サークル』と『紀子の食卓』に対する精神分析的な解釈」（朴奎泰）、「安全神話の崩壊と少年犯罪言説——湊かなえの『告白』から見る法と倫理の振動」（南相旭）、「演歌と喪失感——1990年代日本の大衆音楽文化」（李京粉）。

論文集『戦後日本の生活平和主義』（2014年）

この論文集では、戦争体験による反戦感情と平和憲法による平和的生存権とによって戦後日本の日常生活に据えられてきた平和主義の諸様相を検討している。生活世界で営まれてきた平和主義を「生活平和主義」と概念化し、戦後日本の平和主義や平和運動の主な流れを追跡している。知識人や行動家の理念的平和または平和主義ではなく、生活者が日常生活で営む複数の平和意識や行動に注目している。

次のような論文が含まれている。第1部 生活人の感性と生活の政治化：「1950年代の「生活記録」と平和言説」（徐東周）、「日本母親大会」——覚醒する「母性」と平和」（李垠庚）、「「帰還体験談」と「反戦平和主義」」（朴利鎮）、第2部 国民の心性と平和の儀礼化：「8・15」を通じて見る戦争観と平和認識」（朴晋雨）、「パックス・ムジカ・コンサート」と消費される平和」（李京粉）、第3部 人民・住民・市民の生活と平和：「原水爆禁止運動と日朝人民連帯」（朴正鎮）、「「自生的生活運動」としての岩国反基地運動」（陳泌秀）、「反原発運動と「生活平和主義」の展開」（南基正）。

論文集『エネルギー革命と日本人の生活世界』（2014年）

国民所得と生活水準が急上昇し、大量生産と大量消費の大衆消費社会が出現したのは、高度成長の結果であったが、石炭を石油に代替し、原子力を核エネルギー源として導入するエネルギー革命によってもたらされたものでもあった。この論文集では、高度成長期の日本のエネルギー革命の実体と意味を探索し、エネルギー

ギー革命が日本人の生活世界にどのような影響を与えたかを分析している。

次のような論考が収められている。第1部 石炭と石油：「産炭地域の疲弊と政府の対応」（丁振聲）、「石油をめぐる企業と家計の選択」（李垠庚）、第2部 電気と生活：「京浜臨海工業地帯と火力発電所」（金銀恵）、「大阪千里ニュータウンとエネルギー消費」（陳泌秀）、第3部 鉄道と自動車：「鉄道動力の近代化と東海道新幹線」（林采成）、「三輪トラックと軽自動車のモータリゼーション」（呂寅満）、第4部 原子力と大衆：「原子力導入の政治経済と福島を選択」（林恩廷）、「原子力の導入と大衆の認識」（徐東周）。

論文集『日本生活世界の動揺と公共的実践』（2014年）

高度経済成長の結果、日本は親の世代より豊かな生活を享受することになり、「総中流社会」に入った。だが、1990年代に入って経済低迷が続くなかで、中産層が崩壊し「ワーキングプア」が増えるとともに「格差社会」に変貌した。この共同研究では、「失われた20年」に見られる市民社会の変化、高齢者や多文化集団への政策、不平等問題などを分析し、生活世界の根本的な構造変化について釈明している。

この論文集は次のようなテーマを扱っている。「高齢者居住問題と住居政策」（趙アヲ）、「高齢化する千里ニュータウンの地域組織」（陳泌秀）、「大阪市ホームレス支援運動の展開と変形」（朴志煥）、「青年ホームレスと関係の貧困」（金英）、「日系ブラジル人の就職の変化と介護」（崔璿歌）、「在日コリアンの特別永住制度論争」（李順南）、「多文化政策と地域社会の実践」（朴京敏）。

5. 構造的な大転換と生活世界の再編——第3段階（2014-2018年）

現在進行中の第3段階では、四つの研究チームが次のようなテーマで研究を進めている。

- ① 「ポスト戦後の思想と感情」：第1共同研究チームは、2000年代以降見られる、「戦後」の規定性から脱却しようという「ポスト戦後」の思想と感性を捉える研究を進めている。つまり、戦後体制の改革や「戦後」という時代意識からの脱却を図る政治思想と社会思想、時代的感性、そして大衆文化のあり方などを探索している。
- ② 「低成長・高齢化時代の日本人の生活世界」：第2共同研究チームは、西欧資本主義の代案にまで思われた日本経済システムが1990年代以降、長期不況とともに、どのような変容を見せてきたのかを釈明する研究を行っている。

金融危機、デフレ、労働者の非正規職化、製造業の競争力の低下、高齢化、国際競争力の低下、円の変動などの争点を検討し、これらの問題を解決するための構造改革の様相を明らかにするのが、このチームの課題だ。

- ③「安全社会の動揺と社会的連帯の再構築」：第3共同研究チームは1990年代以降、日本の安全社会が揺らぐ実態と原因を考察し、新たに社会的な連帯が形成される様子を把握する研究を進めている。ジェンダー関係の変化、新しい青年支援システムの構築、地域に基づいた労働組合の形成などを見ることで、家族、学校、会社というレベルで発生する社会的紐帯の再編を考察する。また、超高齢社会に対応する地域再開発や地域活性化の実態を検討する。さらに、東日本大震災で崩壊した地域社会の再構築についても調査する。住民組織やNPO団体の役割も重要な探求対象である。
- ④「日本の保守化の表象と政治社会的な実状」：第4共同研究チームは、日本政治の保守化の様相に関する研究を進めている。この研究では、保守と右翼を区分し、保守化の表象と実体を区別する。保守と右翼の境界を意識しながら保守の実体をつかむことを試みる。表象を扱うマクロ政治学のテーマと政策を扱うミクロ政治学のテーマを取り扱っている。

6. その他の企画研究

ソウル大学日本研究所は、HK事業のほか、特別企画研究も行っている。また、年2回刊行の学術誌『日本批評』を発刊しているが、毎号企画特集を通じて日本研究のアジェンダを提示している。これらを紹介して、結びとする。

『現場から眺めた東日本大震災』（2013年）

これは、特別企画研究チーム「東日本大震災と社会変動」が3・11東日本大震災を機に現れた、日本社会のパラダイム転換を追跡した共同研究の成果だ。研究チームは2回の現地調査を行い、大震災以後の復旧や復興を経るなかで、日本人の意識、日常生活の構造、市民社会や地域社会の対応、原発問題がどのような変化を見せたかを実証している。

以下の論考が収められている。「東日本大震災と東北3県の事業構造の転化——阪神大震災の経験から」（林采成）、「東日本大震災の復旧に向けた宮城県地域開発の戦略構想」（李虎相）、「災害復興の空間的争点——宮城県の三つの都市を中心に」（趙アラ）、「災害復興に向けた創造的な観光政策」（趙アラ）、「東日本大震災以降の日本の社会運動——「素人の乱」の脱原発デモを中心に」（朴志煥）、

「東日本大震災と象徴天皇の癒し効果」(徐東周)、「現地調査日誌——巨大複合災害が日本社会と被災地に残した課題」(李虎相)、「付録 2012年東北地方現地調査報告」。

学術誌『日本批評』(2009年～現在)

『日本批評』(2009年創刊、2016年12月現在15号発刊)は年2回発刊されるソウル大学日本研究所の機関紙だ。『日本批評』は、①専門性、時宜性、大衆性の調和、②人文学と社会科学の融合、③地域研究と普遍的研究の結合、④研究者ネットワークと公論場の形成を志向する学術誌である。「批評」という言葉は、日本という他者を客体化して批評するだけでなく、批評を行う韓国人の視線を点検するという意味も含まれている。毎号企画テーマを設けて6、7本の企画論文とその企画と関連する書評を掲載している。毎号2回の編集会議を開き、熾烈な討議を経て企画テーマと筆者を選定する。また、ワークショップとシンポジウムでの報告を通じて原稿の完成度を高め、アジェンダの公論化を図っている。

各号の企画特集テーマと責任編集者は、以下のとおりである。「現代日本社会の形成と米国」(第1号・尹相仁)、「戦後日本の帝国記憶」(第2号・張寅性)、「韓国人の日本認識100年」(第3号・権肅寅)、「失われた20年」と日本人の生活」(第4号・丁振聲)、「現代日本を精神分析する」(第5号・朴奎泰)、「浮上する中国と日本」(第6号・南基正)、「災害と日本人」(第7号・趙寛子)、「日本社会のマイノリティ」(第8号・崔永鎬)、「天皇・自由・秩序」(第9号・朴晋雨)、「現代日本の保守、そして右翼」(第10号・趙寛子)、「現代日本のジェンダーとセクシュアリティ」(第11号・権肅寅)、「日韓国交正常化50年——葛藤と協力の進化」(第12号・南基正)、「文化イデオロギーとしての日本美」(第13号・姜泰雄)、「東アジアのなかの在日コリアン」(第14号・柳赫秀+申琪榮)、「ゼロ成長期の日本の経済と社会」(第15号・呂寅満)。

18 明治期の倫理学関係著（訳）書の中国における伝播

龔 穎

明治維新の後、日本における西洋倫理学（Ethics）の受容が本格的に展開されてきた。それ以来、倫理学という専門分野は、導入期、改造期、自立期、創造期などのいくつかの段階を経て個性に富む日本近代倫理学を作り上げてきた。そのうち、1920年代までの日本において築かれていた倫理学関係の翻訳または研究成果は、草創期にあたる近代中国の倫理学に多大な影響を及ぼし、中国の倫理学の成立を促したといっても過言ではない。近年、中国の学界において、この問題に新たな関心がよせられ、より詳細な検討や考察が期待されているところである。

この大きな課題を解明するに先立って、本稿はまずいくつかの具体例をあげ、明治期の倫理学関係著（訳）書の中国における伝播の一端を確認してみたいと思う。

1. 梁啓超による倫理学関係書の紹介と翻訳

中国においては、古代から豊かな道徳思想が創出・伝承されてきたが、「倫理学」という体系的な学問は、西洋からの受容によって確立されたものである。倫理学の中国における導入期あるいは受容初期において、日本亡命中の思想家、革命家梁啓超（1873-1929）が果たした役割は大きい。

梁啓超、字卓如、号任公、別名「飲氷室主人」である。1873年、中国広東省新会地域茶坑という村に生まれ、幼少から自宅にて伝統教育を受けていた。周知のように梁啓超は1898年の「^{ぼじゅう}戊戌維新」という運動のリーダーであった。この維新運動の失敗によって梁は朝廷の逮捕を逃れるために日本亡命が余儀なくされた。在日中の梁は、日本語で書かれた西洋哲学、倫理学関係の書物を大量に閲覧した。その中でも特に彼に大きな影響を与えたのは、ベーコン（1561-1626）、デカルト（1596-1650）、ホッブス（1588-1679）、スピノザ（1632-77）、モンテスキュー（1689-1755）、ルソー（1712-78）、カント（1724-1804）、ベンサム（1748-1832）、ダーウィン（1809-82）などの著作であった。梁は一方でこれらの思想や学説を入念に読んで吸収しながら、また一方では矢も盾もたまらず、自分の創設した『清議報』、『新民叢報』、『新小説』で積極的にこれらの西洋哲学、倫理学の思想を紹介し広めた。

これらの雑誌上に発表された文章は中国近代知識界に広範かつ深遠なる影響を

与えた。また、その中に含まれた西洋倫理学関係の紹介、翻訳などは、中国近代倫理学の基礎となった。梁啓超の署名による倫理学関係の紹介、編訳は主として次のようなものが挙げられる。『清議報』紙上の「霍布士 (Hobbes) 学案」、「スピノザ (Bruch Spinoza) 学案」、「ルソー (Roussezu) 学案」など、他には「近世文明の始祖としての二大家の学説」(『新民叢報』第1号、第2号、1902年正月掲載)、「法理学の大家モンテスキュー (Montesquieu) の学説」(『新民叢報』第4号、第5号)、「社会契約論の巨頭ルソーの学説」(『新民叢報』第11号、第12号)、「功利主義の泰斗であるベンサム学説」(『新民叢報』第15号、第16号)、「進化論の革命者の学説」(『新民叢報』第10号、第16号)、「新民説」、「論私徳」など。そのほかに、道德思想と密接に係る文章は次のようなものがある。「天演学の始祖であるダーウィンの学説及び其略伝」、「古代ギリシアの学術を論ずる」、「東籍月旦」、「アリストテレスの政治学説」、「近世最大の哲学者カントの学説について」および「政治学大家ブルンチュリ (Bluntschli) の学説」(『新民叢報』、1903年) などがある。

ここでは特に注目すべきなのは『東籍月旦』の中で紹介された倫理学関係書である。梁啓超は『東籍月旦』の第1章「倫理学」の中で述べているように、倫理学の必読書と参考書の書目を提供し、人々が彼の推薦順に従って漸進的に倫理学の知識を身につけ、「完全なる倫理学を發明し其れを以て国民に提唱する」ための基礎を築いていくことを望んでいた。この推薦書目に、西洋倫理学の古典の日本語訳と、西洋倫理学を受容した日本人学者の手による研究書や倫理学の教科書がある。

次は「必読書」と「参考書」という2種類に分けられた書目の詳細である。第1種類の「必読書」は次の2冊である。

- ①『(中等教育) 倫理講話』元良勇次郎著、明治33年 (1900)、東京、右文館
- ②『倫理通論』井上円了著、明治20年 (1887)、東京、普及社

梁は、これらの書物の章節の見出しを詳しく並べ、具体的な内容を読者に知らせようとする。彼はまた、両書に共通する長所は、言葉が簡潔で、意が尽くされていることにあり、初心者に適すると評価した。さらに、上記の『(中等教育) 倫理講話』には講義内容の復習のための「問題」が用意されており、それを熟考し、解答を読むことを通して、読者を啓蒙する作用があると言い、後者の『倫理通論』は倫理学史上の様々な学説や流派の形成及びそれぞれの変化過程を簡潔かつ明瞭に記述し、今後の学術研究や新道德の構築のために良い参照になる、と紹

介している。「もし学ぶ者にたくさんの書物を閲覧する暇がなければ、この2冊のみを読んでいだけでもこの学問の梗概を知り得る」と断言する。

第2種類の「参考書」は合計14冊があり、具体的には下記の通りである。()の中は原著者の名である。

- ①『(中等教育) 倫理学教科書』(ポール・ジャネー著、岡田良平講述)
- ②『新編倫理教科書』(井上哲次郎/高山林次郎合著)
- ③『修身原論』(フランク著、河津祐之訳)
- ④『倍因氏倫理学』(アレクサンダー・ベイン著、添田寿一訳)
- ⑤『珂氏倫理学』(ケルダーウット著、中村清彦訳)
- ⑥『斯氏倫理原論』(スペンサー著、田中登作訳)
- ⑦『倫理学新書』(ヘルマン・ロツツェ著、立花銑三郎訳)
- ⑧『倫理学』(元良勇次郎著)
- ⑨『越氏倫理新篇』(シー・シー・エップエレット著、渡辺又次郎訳)
- ⑩『倫理学説十回講義』(中島力造編)
- ⑪『倫理学史』(山本良吉著)
- ⑫『東洋西洋倫理学史』(木村鷹太郎著)
- ⑬『主楽派之倫理説』(網島栄一郎講述)
- ⑭『賽斯氏¹倫理学綱要』(田中達/渡辺竜聖共著)

以上の書物のほかに、梁啓超は東京育成会が企画、出版した翻訳書シリーズ「倫理学書解説」(全12冊)を紹介したこともある。このシリーズに収められた本はすべて日本人の手によって翻訳または編訳された欧米倫理学の名著であり、しかも訳者の解説文も付けられ、読者にとって利用し易いものだ、と梁は高く評価していた。

このように、梁の紹介によって、長い歴史を積み重ねてきた中国人の道德史上に初めて「倫理学」という学問体系が登場してきたのである。

2. 著(訳)書の伝播と思想の伝達

さて、明治期の倫理学関係著(訳)書の伝播に伴い、新しい倫理観も20世紀前半の中国に伝来された。この問題については今後、緻密な比較研究が期待される

1 「賽斯」は、「セス」の当時の中国語表記である。

が、ここでは1、2例を挙げることにとどまる。

中国へのT・H・グリーン倫理思想の伝来

先述したように、梁啓超は『東籬月旦』の中で、日本でも出版されて間もない翻訳叢書「倫理学書解説」（全12冊）を紹介していたが、中には西晋一郎著『グリーン氏倫理学序論』というT・H・グリーン倫理学に関する解説書が収められている。梁はこれを中国語で『格里安倫理学』と名付け、「とりわけ浩瀚大で、内容豊かなもの」の一つとして評価したと同時に、さらに、T・H・グリーンをジョン・エス・マッキンジと同等に認め、両者ともにイギリスで当時、最も有名な倫理学家であって、「其書精深博大、可称斯学之淵海」（その書は精深博大なり、斯の学の淵源だと称すべき）、と高く評価した。梁は「格里安」（中国語読みはGe Li An）をもってグリーンの名を訳し、初めてグリーンとその倫理学代表作を中国の知識界に紹介したのである。ただし、梁の推薦、紹介はきわめて簡略かつ大雑把であったため、中国の知識界はグリーン著作の書名しか知らず、その具体的な思想内容については知りようがない状態であった。

1906年11月、留日知識人、張東蓀（1886-1973）などの主催する雑誌『教育』（第2号）上に、当時東京帝国大学哲学科選科に留学していた藍公武の「英哲格林之学説」（イギリス哲学者グリーン之学説）という文章が発表された。この文章は約5千字で、八つの節からなる。「一、グリーン学説の由来」、「二、グリーン倫理学説」、「三、自我」、「四、客観世界」、「五、自由」、「六、道徳の理想」、「七、道徳の進歩」、「八、結論」。これは近代中国倫理学史上において本格的にグリーン思想を紹介した最初の文章といえるが、しかしその内容は依然として非常に簡略で、ほかの原因も加えてその影響力はそれほど大きくなかったと思われる。

中国の知識界において、「自我実現説」を始めとするT・H・グリーン倫理学の思想や主要概念が多くの人々に読まれたのは、それから10年後の1916年であった。それは著名な教育家、学者である楊昌濟（1871-1920）が『東方雑誌』に発表した長編連載翻訳文の一部であった。楊氏は現代中国の最も有名な政治家である毛沢東の恩師かつ義父（毛の最初の妻楊開慧の父）にあたる人物であった。

楊昌濟による倫理学の伝播

楊昌濟、字は懷中、号は華生、冊名は昌濟であった。1871年に湖南省長沙県清泰郷の板倉沖（現在の開慧郷開慧村）に生まれ、14歳までは私塾の先生であった父の指導のもとで学習し、1889年に科挙試験に合格し、「秀才」となった。楊

は1898年の「戊戌維新」の失敗に強い刺激と教訓を受け、大衆啓蒙のために、先進国の西洋諸国に学び、民衆指導に実用でかつ具体的な知識や方法を身につける必要を感じて、1903年春から海外に渡り、10年も続く洋の東西を跨る海外留学の旅を始めたのである。

1903年4月から1909年3月までは、日本の弘文学院と東京高等師範学校（現在の筑波大学）で相次いで勉学し、西洋倫理学、心理学、教育学などの知識や思想に接することができた。

1909年春、楊はイギリスに赴き、1912年上半年期までスコットランドのアバディーン大学で勉強し、人文学の学士号を獲得した。その後、ドイツに赴き、教育関係の考察を9ヶ月間行ってから、1913年春に帰国の途に着いた。

帰国後の楊昌済は、「強避桃源作太古、欲栽大木柱長天」（桃源を上古の理想郷と見てそこに逃避し、そこで天を支える柱になれる大木を栽培しよう）という教育への遠大な志望を持ち、1913年から1918年までの5年間、湖南高等師範学校、省立第一師範学校など多くの学校で哲学、倫理学（修身科）、教育学、心理学などを講義した。学生から熱く歓迎され、社会の進歩と個人の成長を求める多くの青年が周囲に集まってきた。これらの青年は後ほど「新民学会」という革命団体の初期会員の主幹になった。またこの間、楊は大量の論文と教材を書き、外国語からの翻訳も行い、特に「各種倫理主義の略述及び概評」という長編連載翻訳を1916年の『東方雑誌』第13巻第2、3、4号に発表した。この論文の原著者は深作安文（1874-1962）であり、文中は「自我実現主義」という節題でグリーン倫理学の基本を紹介・論評した。

1918年夏、楊昌済は北京大学の教授として招聘され、哲学学部の倫理学と倫理学史の授業を担当した。この時、楊は当時の思想界の革命運動である「新文化運動」に興味を示し、北京大学で「哲学研究会」の創設に参加した。さらに学生たちのフランス留学運動を支持し、また留学生を伴って上京した失業中の毛沢東を北京大学図書館で働かせた。その間、楊は毛を中国共産党創立者の一人である李大釗に紹介し、実質上、毛をマルクス主義の道に導く役割をもったと思われる。

毛沢東は、長沙で楊昌済に従って勉強した時、楊の翻訳した吉田静致著『西洋倫理学史』（原書名『西洋倫理学史講義』富山房、1905年）に強く惹かれ、その翻訳原稿を書き写して、それは大判ノート7冊に及んだ。また、毛は、楊が講義で使うバウルゼン著『倫理学原理』（「倫理学書解説」第4分冊、東京育成会、1901年）をより入念に読んだらしく、約1万2千字の読書メモを書き止めている。これらの教科書や講義の中にグリーン「自己実現」や「精神上の個人主義」という内

容が含まれ、青年毛沢東の自由主義、個人主義の形成にも影響しただろうといわれる。

1920年1月、楊昌済は49歳の若さでこの世を去った。その後、毛沢東は楊の日本語からの訳書『西洋倫理学史』と『倫理学之根本問題』（リプスの原著に対する阿部次郎の抄訳本）という2種類の本を、宣伝広告用の図書目録『文化書社』（1920年11月号）に入れた。「楊訳倫理学書」の影響範囲を確実に拡大したに違いない。

明治期倫理学関係書と蔡元培著『中国倫理学史』『中学修身教科書』

教育思想家、蔡元培（1868-1940）の執筆した『中国倫理学史』（1910年）は、西洋の学問体系に基づいて誕生した中国最初の倫理学史である。その内容も叙述の方法も中国伝統的な「学案」や「経学史」と違って、中国従来の道德思想や言説を斬新な視点によって再構築した画期的な著作だと評価されてきた。この本の成立については、著者が「序例」の中で、1910年の旧暦3月16日（4月25日）に執筆が終わったと表明している。その時、蔡はドイツのライプツヒ大学に留学中であった。その年の8月にこの本は商務印書館から印刷発行された²。

著者蔡の「緒論」の説明によれば、『中国倫理学史』の著述は、主に3種類の日本語の著書を参照した。内容面は主として木村鷹太郎著『東洋西洋倫理学史』（博文館、明治31年）と久保得二著『東洋倫理史要』（育成会、1904年）を参考にしてきた。また、蔡の自叙伝『自写年譜』によると、時代区分では基本的に遠藤隆吉著『支那哲学史』の「三期分叙法」に依拠しながら、独自の補足部分を付けた。蔡の『中国倫理学史』が遠藤の『支那哲学史』から受けた影響は分かりやすいものである。つまり蔡は、中国倫理学史を、「第一期 先秦創始時代」、「第二期 漢唐継承時代」と「第三期 宋明理学時代」に区分している。その上に蔡が「付録」として追加したのは清朝の戴東原（震）、黄宗羲（梨洲）、俞正燮（理初）という学者3名である。

しかし、蔡は木村や久保の著書を融合させながら自分の考えを著したため、原著との異同は簡単に分かるものではない。それゆえ、三者を詳細に比較しながらその異同を確認していかなければならない。例えば、木村の『東洋西洋倫理学史』は久保の『東洋倫理史要』とは立場の正反対なものであり、前者は徹底した功利主義者であるのに対して、後者は精神性や人間の意志を重視し功利主義を批判す

2 27年後の1937年5月、蔡著『中国倫理学史』は「中国文化史叢書」第2集として商務印書館から新たに出版された。1941年、中島太郎はこの再刊本を日本語に訳して大東出版社から刊行して、書名を『支那倫理学史』に直している。

る立場を採っていた。一例を挙げると、朱子の学説に関する評価として、木村は「其説を以てすれば浅薄なり」と酷評したのに対して、久保は「朱子の哲学は全体より観るとき、整然たる一大体系を成し」と高く評価していた。したがって、蔡元培がこの両極端にある二作をどのように取舍選択し、かつ融合させたのかを知るために、まず不可欠なのは、緻密な比較研究を通して異同を確認し、そして、なぜそのような取舍選択をしたのかを考え、この本の特色や狙いを解明していくことである。近い将来、この比較研究が行われることを希望する。

1912年1月、中華民国の成立とともに、蔡元培は中華民国初代教育総長をつとめることになる。教育総長に着任して間もない蔡は、「新教育に対する意見」という一文を発表し、これから中国で「新教育」つまり西洋式教育を実施しようとする抱負を熱く語っている。同じ年、彼は旧著を改めて『(訂正) 中学修身教科書』を編纂し、出版した。これは中国近代以来最初の青少年向けの徳育教科書というだけでなく、実質上、その後の中国の青少年の道德教育の大枠を決めた存在だと認めなければならない。この教科書は、1912年から1921年までの10年間足らずの間に、16回も版を重ね、広い影響力を与えたに違いない。

この『(訂正) 中学修身教科書』は、合計7万字からなる一冊本で、上、下二篇に分けられる。著者自身の言い方によれば、上篇は「実践倫理学」であり、下篇は「理論倫理学」つまり倫理学の基本的な理論を詳述する。この教科書の中で、蔡は彼自身の道德思想を主張すると同時に、国民の資質を高めるにふさわしい実践の道をも明示しようとした。その道はすなわち「修身進徳」という道德的实践である。この教科書の中で、蔡はさらに道德教育の任務を次のように設定している。つまり、道德教育を通じて人々の道德についての意識を高め、道德的感情を養い、そして道德的意志を固めていき、道德的要望に応じて人々の人格を改善していく。さらに立ち入って検討すれば、蔡著『(訂正) 中学修身教科書』の内容は、井上哲次郎著の5巻本『中学修身教科書』(金港堂、1902年)や『新編倫理教科書』(金港堂、1897年)と密接な関連性があることが分かる。これについては、すでに発表された拙論を参照されたい³。

さて、本稿は明治期の倫理学関係著(訳)書の中国における伝播をめぐって、二、三の実例を取り上げて述べてきたが、実際のところ、問題提起ばかりであって、満足できる解明にはまだ至っていない。

だが、この領域における調査や研究を深めていけば、近代中国における倫理学

3 龔穎「蔡元培与井上哲次郎“本务论”思想比较研究——兼论中国近代义务论形成初期的相关问题」(中国語論文、『中国哲学史』、2015年1期)。

の形成史やその実状がより明確に把握できるだろう。また、倫理学研究や道德教育実践などの面における中日両国間の交渉は1920年代まで頻繁に行われたため、この領域における比較研究を有効に行えば、日本近代倫理学の研究及び道德教育の特質にもまた新たな光が当てられ、より立体的に認識されることになるだろう。

19 中国における川端康成文学の研究

周 関

川端康成は、日本で一番目、アジアで二番目のノーベル文学賞受賞者である。中国大陸でも注目される川端文学に関する研究は、社会の発展と意識の変化により、大きなうねりを経てきた。本文は、中華人民共和国成立以来60年間の川端研究を、可能な限り全面的に紹介する。まず先行研究に基づき、研究史を、中華人民共和国成立前～1966年、1966～1978年、1979～2009年、と三つの時代に分ける。そして、1979年から2009年までの30年間の川端研究の変遷とその主な特徴及び社会形態を分析し、総括する。また、文学研究と社会の変遷との相関関係を明らかにし、将来の研究を展望する。

川端康成（1899年6月14日—1972年4月16日）は、日本の新感覚派作家であり、1968年にノーベル文学賞を受賞した。川端は幼くして両親を亡くし、一生各地を転々として過ごした。それが彼の文学に深い影響を与え、彼は「葬式の名人」や「引っ越し魔」と呼ばれている。大学卒業後、横光利一と共に新感覚派の中心人物になった。創作は小説が中心で、長編小説より中短編小説が多い。作品は抒情性に富み、実際の生活を繊細に観察して優美に表現する筆致は、日本人の生活と精神をも表現していると思われる。川端康成の文学創作は、日本文学史上において重要な位置を占めるだけでなく、世界的にも注目を集めている。

1. 建国前から1966年の状況

中華人民共和国成立（1949年）以前、日本文学の翻訳や批評は五・四運動以後にピークを迎えたが、この時期の知識人たちは川端康成に関心を持たなかった。日本文学翻訳の先駆けである魯迅、周作人さえ川端に無関心であった。当時の川端は日本文壇において駆け出しの小説家であったからだろう。1930年「中国左翼作家聯盟」が成立してから1937年の日中戦争勃発まで、中国における日本文学の翻訳は主にプロレタリア文学に集中し、「新感覚派」を大きく掲げた川端康成は中国知識人の視野に入らなかった。日中戦争開始から中華人民共和国成立まで中国において日本文学への関心は低迷した。川端の文学も例に漏れず、1942

年に、川端の小説ではなく、一部のエッセイのみが中国語に翻訳されたが¹、研究者には注目されなかったようである。つまり、1949年までは中国における川端文学の研究は空白であった。中華人民共和国が成立してからも、文学研究者は日本のプロレタリア文学だけを重視し、内容が複雑な川端の小説を依然として研究と翻訳の対象としていない。

2. 1966年から1978年の状況

1966年から1970年代初期まで、文化大革命の大きな打撃を受けた中国では、日本文学の翻訳と研究はほぼ全面的に停滞した。1972年の日中国交正常化以降、日本文学の研究がようやく再開したが、小林多喜二などプロレタリア文学作家にのみ注目が集まった。この期間、川端康成と関係の深い三島由紀夫が、中国で知られるようになったため、川端も三島と共に中国の研究者らによって軍国主義批判の材料とみなされた。

1978年、『外国文芸』創刊号で川端の短編小説『伊豆の踊子』（侍桁訳）と『水月』（劉振羸訳）が発表され、訳者侍桁は川端を「新感覚派の作家代表」としてその作風を紹介した。約26年後の2004年、王志松は「侍桁の紹介はノーベル文学賞受賞作家で、新感覚派作家としての川端康成を特に取り立てたもので、新感覚派の主な文学的特徴を述べたものだが、『伊豆の踊子』という作品を新感覚派文学の代表作として紹介することは妥当ではない」として、むしろこの小説は「文体の新しさと主人公の感受性に対する表現が最大の特徴なのに、侍桁の紹介はこれらの特徴を無視している」²と指摘している。侍桁の評価は、バランスの取れていないものもあるが、建国後最初の川端評論といえる。それ以降、川端小説に関する大規模な中国語翻訳が始まり、文学研究者にも重視されるようになった。建国後30年が経ち、中国の川端研究は徐々に脚光を浴びるようになった。

3. 1979年から2009年の研究状況

1980年代直前、中国の川端研究は、「改革開放」と共に歩み始めた。1979年9月、日本文学研究の学術組織である「日本文学研究会」が設立され、長春で日本文学研究会が開催された。提出された30本ほどの論文に、川端文学に関する評論が

1 欽鴻「範泉著訳書籍見録」『出版史料』2011年第2期、120頁によれば、1942年範泉の翻訳した川端康成のエッセイ「文章」が上海復旦出版社により出版。

2 王志松「川端康成与八十年代的中国文学——兼論日本新感覚派文学对中国文学的第二次影響」『日語学習与研究』2004年第2期、54頁。

現れた。これは、中国における川端研究の初登場である。川端の小説の翻訳も1970年代末から1980年代初期にかけて急速に活発化した。1981年、上海訳文出版社と山東人民出版社は侍桁が翻訳した『雪国』と、葉渭渠、唐月梅が翻訳した『古都 雪国』をそれぞれ出版した³。その後、翻訳は系統的になり、全面的な翻訳につながった。川端研究も徐々に規模を広げていった。

1970年代末以降、文学研究界では、文学が社会に及ぼす作用の単一的認識や、文学のヒエラルキーを強調する偏りは徐々に消え始めた。しかし、1980年代初期、文学を政治闘争の道具として、文学のもつ「階級性」を強調する見解はまだ健在していた。川端研究においても、安易で独断的で、社会批判的な視点から批評され、ある論文は、道徳的評価と階級差別をもって、川端文学を全面否定したこともあった。たとえば、1978年の改革開放後、最も早く翻訳・研究された『雪国』を例にとれば、ある研究者は主人公駒子を自墮落的で、自ら男性の慰みになる娼婦だと評した。また、これを理由に『雪国』に対して政治的価値判断を下し、この作品を墮落賛美だと決めつけた⁴。このような意見は、1980年代前期の川端研究において相当な割合を占めていた。しかし、注意すべきなのは、この時期の川端文学にたいする評価はすでに様々な方向から進んでいることである。つまり、同じ作品に対して異なる意見が見られるようになった。たとえば、『雪国』に対して、ある研究者は政治的物差しを超えて、芸術性から分析し、駒子を日本的な伝統美の持ち主とし、彼女の墮落の原因を社会の問題から探り、資本主義の問題だったと指摘する⁵。

1985年、日本国際交流基金と元国家教育委員会が共同で、北京外国語学院に「日本学研究センター」（現在の「北京日本学研究センター」）を創立した。このような機構の設立は、中国における日本文学の研究を大きく推進し、川端研究にも拍車をかけることになった。1980年代後半、文学についての観念の変化があり、研究者は川端の小説の中の個人的経験や審美的特徴に目を向け始めた。ある研究者は、川端文学に内包された純真で淡い美しさを強調し始め、例えば李徳純は『伊豆の踊子』で繊細に描写された、抑圧された刹那の感情の美しさを分析した⁶。

中国では、川端文学に対する価値判断は両極に別れるが、川端文学の作風と技

3 ほかに、川端の短編の翻訳は文学雑誌や選集にみられる。例えば『母の初恋』（葉渭渠訳『日本短編小説選』所収、人民文学出版社、1981年版、596-624頁）など。

4 李芒「川端康成『雪国』及其他」『日語学習与研究』1986年第1期。

5 平献民「談『雪国』的芸術特色」『外国文学研究』1982年第4期。

6 李徳純「川端康成的『伊豆的舞女』」『読書』1983年第8期。

巧についての評価は基本的に一致し、その芸術性を、程度の差はあるが、ほとんど肯定している。川端の西洋現代派の技巧を用いた効果的な表現方法と、日本の伝統との融合を絶賛している。文学研究におけるこのような肯定的評価は、実際、1980年代中国全体の人文研究の状況と切り離せない。長期にわたる思考の束縛から解放された研究者たちは、ようやく視界が開けて、現実主義と階級批判と完全に異なる斬新な文学的体験をし、西洋文芸思潮の流入とともに、かつてない興奮を覚えた。川端がノーベル文学賞を受賞したことを、西洋文学の現代的技巧を取り入れた最高の成功例とみなして、中国の文学研究者たちは川端文学を重要な研究対象とみるようになった。例えば、王育林「川端康成与超現実主義」⁷のように、研究者たちは川端文学における伝統と現代との融合を研究課題とする傾向が大き

い。

1980年代、川端文学に関する大量な論文が様々な学術誌に発表されたにもかかわらず、研究専著の出版が立ち遅れた。林武志編著『川端康成戦後作品研究史・文献目録』の「海外研究文献目録」の統計によれば、日本以外における1984年までの川端研究は、台湾で出版された中国語版『日本の美与我』（台湾商務印書館、1968年）のみであったが、訳者喬炳南の書いた「川端康成伝」（26-58頁）は短いものであった⁸。中国大陸で初めて専著として出版されたのは葉涓渠の『東方美的現代探索者—川端康成評伝』（1989）であった⁹。この本は「川端の思想と作品を全面的に評論した初めての学術書であり、中国の川端文学研究史上において画期的なものである」と評価されている¹⁰。

全体的にみれば、1980年代の中国における川端研究は、批評の方法は単一で、研究対象も狭く、大部分は『伊豆の踊子』や『雪国』などの代表作に集中している。1990年代に入ると、中国の経済構造の変化と発展が加速し、購買意欲も強くなり、多くの出版社は経済利益と社会公益を考慮し、影響力のある日本人作家の個人作品集を出版する傾向をもつようになった。例えば、1996年中国社会科学出版社が10巻の『川端康成文集』を出版している。一方、余華、莫言、賈平凹など1980年代中国の文壇を率いた作家たちは、1990年代に入ると安定した地

7 王育林「川端康成与超現実主義」『解放軍外国語学院学報』1985年第3期。

8 林武志編『川端康成戦後作品研究史・文献目録』教育出版センター、1984年、336-349頁。

9 葉涓渠『東方美的現代探索者—川端康成評伝』中国社会科学出版、1989年。

10 李先瑞「川端文学在中国的翻譯与研究（上）」『日語知識』1999年第4期。

位を築きあげて、自分の創作は川端文学の影響を受けたと声明し始めた¹¹。これらの明言は、中国本土作家の創作が外国文学によって刺戟されたことを示している。川端研究はこのような背景の下で発展し続け、中国の研究者たちも彼の各時代の文学創作を全面的に理解しようとし、川端文学に関する研究論文も日に日に豊富になっていった。

1990年代以降、川端文学に対する研究は、社会批評的な方法を脱した。研究者たちは、川端文学の複雑性を認め、その要因を研究し始め、研究方法に進歩が現れた。時代の進歩とともに、川端文学の芸術性を取り上げることが研究の中心になり、多くの論文はテキストの精読を通して詳細に分析し、多角的に検討するようになった。例えば、張石は川端の創作した「死」のもつ東洋的美意識を論じ¹²、何乃英は川端の小説の芸術性を検討し¹³、何文林は川端文学の美を伝統、個人、時代という側面から分析し¹⁴、王奕紅は『雪国』を通して、川端文学の美意識を探る¹⁵。しかし、その後の研究に比べると、この段階の川端康成の芸術に対する探求は、深化の余地がまだまだ大きかった。

研究上で、人々の思想や観念が解放され、日本文学の翻訳もだんだん多角的に発展していった。作家の主観に基づく翻訳・批評は唯一の評価基準ではなくなり、多角的に同じ作家の違う作品に対して分析と評価を行った。研究対象としての川端小説は戦後作品群、晩年の作品群に広がった。例えば、譚晶華は『山の声』を中間小説として論じ¹⁶、肖四新は後期の作品群を分析し¹⁷、李希華は初期の児童小

11 例えば、余華は「川端康成和卡夫卡的遺產」の中で、「1982年浙江省寧波甬江の隣にある古いマンションで私は初めて川端康成の『伊豆の踊子』を読んだ。そのとき偶然読んだおかげで、私は正式に創作活動を開始したのである。そして、1986年春まで川端への情熱は尽きない。その間、私は川端作品の翻訳版をすべて読破した。川端作品をすべて2冊ずつ購入し、1冊は保存用、もう1冊は枕元において閲覧用とした」という（『外国文学評論』1990年第2期）。賈平凹は川端康成のおかげで「多くの現代派哲学、文学、美学方面の本を読んだ」と認めている。「川端康成が東洋の作家として、西洋の現代派のものと、日本民族的な伝統を融合させ、新しい世界観を作り出したことに私は深く感銘を受けた」という（賈平凹「平凹答問録」『商州—説不完的故事4』華夏出版社、1995年、527頁）。王小鷹も「川端康成到托爾斯泰—外国文学与我」（『外国文学評論』1991年第4期）で川端文学が彼自身の出发点だと述べる。

12 張石「死之美的東方性—談川端康成創作的一個美学特征」『日本学論壇』1991年第3期

13 何乃英「論川端康成小説の芸術特征」『北京師範大学学报』社会科学版1995年第5期。

14 何文林「伝統 個人 時代—川端康成小説の芸術美」『天津師範大学学报』社会科学版1996年第1期。

15 王奕紅「从『雪国』看川端文学的美学意象」『当代外国文学』1997年第3期。

16 譚晶華「典型的中間小説—論川端康成『山之声』的創作」『解放軍外国語学院学报』1996年第6期。

17 肖四新「本真生命的追求与探尋—論川端康成後期作品的實質与價值」『外国文学研究』1997年第1期。

説を研究している¹⁸。かつてひどく批判された川端康成の小説も新たな評価を得た。例えば、劉勁予はいままでの『眠れる美女』を墮落した色欲の強い作品ときめた見解に反対し、その「美的意義と価値」を肯定し、その小説で川端は「醜を美に転換する芸術を追求し」、「醜の鑑賞を通じて、醜を否定し、精神的超越と心の浄化に達し、さらに美の意義を再確認する」ものだと指摘した¹⁹。このように、『眠れる美女』のような議論を呼ぶ作品への新たな評価のブームが21世紀以降起こった。

研究の視点もかつてない新局面を迎えた。例えば、範川鳳は、中国の読者が読み慣れた現実主義的な正統の作品と違う川端の「鏡を見るような視覚的手法」は「読者にとって作品を理解する障害」になることもありえるだろうという見解を示している²⁰。丁武君は川端の小説にある「赤と白」「黒と白」という色の組み合わせの象徴的意味を通じて、川端の創作の方法を分析している²¹。谷学謙は『抒情歌』、『美しさと哀しみと』などの女性主人公を分析し、川端文学が受けた仏教的示唆を論じている²²。鄭忠信は視覚の美学から川端の人生と作品中の死亡との因果関係を詳説している²³。よく研究されている作品、例えば『伊豆の踊子』に関しても、陳齡のような研究者は新しい角度から分析をしている²⁴。

1990年代の川端研究はもうひとつ重要な特徴がある。例えば、李芒の「日本文学在中国的翻訳和評価」²⁵、李先瑞の「川端文学在中国的翻訳与研究（上、下）」²⁶、孟慶枢の「川端康成研究在中国」²⁷など、研究史を整理、総括する試みが発表され始めた。これは、今まで積み上げてきた多くの研究成果を概説すると同時に、この研究分野に対する回顧と反省の必要性を意識していることをも意味する。

1980年代と違うのは、1990年代に入ってから、川端文学研究の専著が出版されるようになり、10冊あまりに達していることである。前述の葉涓渠著『東方美的現代探索者—川端康成評伝』（1989）をもとに、1996年に増刷版『冷絶文士

18 李希華「川端康成早期児童小説評述」『遼寧教育学院學報』1996年第1期。

19 劉勁予「試論川端康成『睡美人』的美學意義」『廣東教育学院學報』1995年第4期、25-27頁

20 範川鳳「川端康成の鏡子視覚技術」『外国文学研究』1994年第1期、24頁。

21 丁武君「川端康成創作中色彩の表現模式及其象征性」『外国文学研究』1994年第4期。

22 谷学謙「川端康成与仏教」『外国文学研究』1999年第4期。

23 鄭忠信「黑色楽章—川端康成死亡論」『外国文学研究』1997年第3期。

24 陳齡「『伊豆の舞女』中的情愛描写」『当代外国文学』1997年第1期。

25 李芒「日本文学在中国的翻訳和評價」『日本学刊』1992年第5期。

26 李先瑞「川端文学在中国的翻訳与研究（上、下）」『日語知識』1999年第4、5期。

27 孟慶枢「川端康成研究在中国」『外国文学研究』1999年第4期。

一川端康成伝』が中国社会科学出版社から出版された。作者葉涓渠は川端文学の翻訳と研究に貢献している。彼はまず川端文学の芸術性に着目し、「どのように川端文学の構造と美の方程式を解くか、川端文学はどのような地位を示すべきかは、おそらく川端研究においてまず取り組むべき問題だろう」という考えをもっている。そこから出発して、川端文学の伝統性と現代性との要素を探り、国別の文学研究という従来の分離状態を突き破り、「西洋と東洋の文学を比較した上で、日本民族の文化的根源は何か」というより根本的な問題に対する研究に尽力した。彼は「川端文学の二重ないし多重的構造は非常に複雑で美しい方程式をもち、一般的な方法や単一的な研究方法による解明は難しい」と考えている²⁸。これは川端文学の「日本文学とは日本だけではなく、東洋的で、さらには西洋的性質をも併せ持つ」という氏の主張にもつながっている。

中国の大学において、比較文学の学科が成立し、発展するにつれて、1997年に元国家教育委員会は独立していた「世界文学」と「比較文学」とを併合し、「比較文学と世界文学」という学科に再編成した。日本文学と中国文学を対象とする比較文学者たちは、一斉に専門領域と国家の違いを乗り越え、比較文学の研究方法を利用して川端研究を繰り広げていく。

この中で、中国大陸唯一の比較文学専門誌『中国比較文学』は大きな役割を果たした。この雑誌の1994年第1期に孟慶枢は川端文学がいかにか世界的に干渉されているのかを論じ²⁹、1995年第1期に于長敏は川端文学と朱自清の作品を比較し³⁰、文潔若は川端の『水月』と沈從文の『阿金』を比較している³¹。ほかに、川端文学の影響を受けたと名言している中国人作家を取り上げる研究がある。例えば黄嗣は賈平凹と川端を³²、俞利軍は余華と川端を比較している³³。または川端文学とアジア、欧米文学との関係に注目する研究者がいる。例えば喬麗媛はタゴールと川端を比較し³⁴、甘麗娟は川端とヘミングウェイを比較している³⁵。

川端研究におけるこのような比較文学の方法は、2000年代まで続き、グローバルイズムの影響を受けて、21世紀にさらに発展した。しかし総じていえば、表

28 葉涓渠「川端文学研究的幾点思考」『日本文学刊』1993年第4期、第94、95、97頁。

29 孟慶枢「从比較文学角度看川端康成走向世界」『中国比較文学』1994年第1期。

30 于長敏「独到的芸術魅力—作品中的典雅美 川端康成与朱自清的作品比較」『中国比較文学』1995年第1期。

31 文潔若「川端康成的『水月』和沈從文的『阿金』」『中国比較文学』1995年第1期。

32 黄嗣「賈平凹与川端康成創作心態的相關比較」『湖北大学学报』哲学社会科学版、1995年第3期。

33 俞利軍「余華与川端康成比較研究」『外国文学研究』2001年第1期。

34 喬麗媛「泰戈尔与川端康成人生觀及其創作比較談」『遼寧教育行政学院学报』1993年4月。

35 甘麗娟「戦争 女性 死亡—川端康成与海明威創作個性比較」『日本研究』1996年第1期。

面上の平行的な対比に止まり、文学と文化の深層まで掘り下げる、本当の意味で比較にはなっていないようである。昨今、新しい研究が行われている。例えば周閔『川端康成文学的文化学研究』(2008)³⁶は、東アジアの文化的文脈における川端文学と中国文化との関係を掘り下げ、川端文学と仏教・美術・囲碁、中国哲学、中国文学との関係に着目し、比較文学的手法をもって川端文学の成立の過程と芸術様式の形成の根源を論じている。

21世紀以降、川端研究に注目すべき現象が現れた。川端の小説は日本の若い世代にあまり読まれなくなったが、中国の若い研究者の間で注目を集め始めた。最も典型的なのは、川端文学に関する大量の修士論文と博士論文が発表されていることである。学術論文検索サイト「中国知網」で調査した限り、川端文学をテーマとする「優秀修士論文」は35本以上あったことがわかる³⁷。このほかに、無視されがちな川端の「掌の小説」の研究も大きな成果を得ている。

これと同時に、川端の人生体験と創作意識を結び付け、作家の美意識の形成と発展の軌跡を明らかにする研究専著が出版されている。周閔の『川端康成是怎样讀書写作的』(2000)³⁸は、1997年初公開の川端康成と三島由紀夫の手紙などを最新資料として参考し、川端の思想と芸術とを結び付け、広い視野に立って、伝統性と現代性の文化的根源、東洋文化と西洋文化の衝突の中における川端の文芸思想の形成の過程を丹念に辿った。また、劉象愚・胡春梅の『感悟東方之美—走進川端康成的「雪国」』(2007)はアジアの美意識と『雪国』との関係を論じる³⁹。このほかに何乃英の『川端康成小説芸術論』(2010)は思想、創作方法、表現のテクニク、芸術様式という四つの側面から、川端康成の芸術を概括的に分析している⁴⁰。

4. 結 び

日本の研究界と比べれば、中国の川端研究はまだ視野が狭く、一部分の作品に偏り、川端文学の全体的な把握と分析は不足している。もちろん、中国語訳の川

36 周閔『川端康成文学的文化学研究—以東方文学為中心』北京大学出版社、2008年。

37 この統計は、2010年までの「川端康成」を表題（副標題を含む）、キーワードに含む論文に基づく。

38 出版前の原題は『川端康成的人生歷程与創作歷程』だったが、北京大学の楽薫雲教授編の叢書「国外文化名人生平創作研究」に入れられ、出版社に統一されて現題になった、という経緯がある。

39 劉象愚・胡春梅『感悟東方之美—走進川端康成的『雪国』』北京師範大学出版社、2007年。

40 何乃英『川端康成小説芸術論』北京師範大学出版社、2010年。

川端成全集がまだ出版されていないことも関係がある。また、資料採集の広さと深さ、テキストの精読においては日本の研究界と大きな差がある。したがって客観的に川端文学の本質と特徴の形成を明らかにするには、大変な努力が必要である。

日本では川端研究史を定期的に検証し、文献整理に関わる大量の作業をし、川端文学の作品目録の作成も行っている。これに対して、中国では作家とテキストの研究に重点を置き、とくに後者の研究が盛んである。中国語訳の川端作品の整理と文献の収集、中国の川端研究史の整理においては、体系的な成果は少ない。

日本と中国の川端研究の共通点は、作家・作品の研究のみを行い、また西洋文化との関連性によく注目しているが、川端の作品に取り入れられた他の東アジア諸国の文学と文化の要素がほとんど無視されていることである。川端文学に関する比較文学は、中国と日本とはほぼ同じレベルにある。中国の比較研究の開始は遅れたが、研究の勢いは大きい。比較研究においては、日中両国は多くの類似点がある。例えば、多数の論文と著作は「新感覚派」と日本伝統という二つの面に集中し、また川端の吸収した西洋の文芸思潮の分析に力を入れている点である。しかし、川端文学と中国文化との関係に関する両国の研究はまだ少なく、体系的な成果は少ない。川端研究が最も進んでいる日本においても、2005年に初めて康林の『川端康成と東洋思想』⁴¹が刊行された。その2年前の2003年、中国の有張石の『川端康成与東方古典』が出版されて、川端文学を東洋文化との関係から研究している⁴²。しかし、この2冊はどちらも川端文学と中国文化との関係性について述べる章は1章のみである。

古代以来、日中の文化交流は、日欧交渉より遥かに長く頻繁で、中国及び他のアジア諸国の文化を受け入れて形成した豊かな土壌こそが川端文学の基礎といえよう。したがって、川端を研究するうえで、東洋文化の、特に中国文化からの影響は無視するべきではない。川端は上手に異文化の要素を取り入れた作家と認められている。彼は外国の文学と文化によく接触し、取り入れたものに独自性を付け加え、ユニークな作品を仕上げている。川端の芸術の特徴を研究するために、

41 康林『川端康成と東洋思想』（新典社、2005年）は4章に分けられ、「川端文学と老庄思想」、「川端の文学理論」、「初期作品試論」、「『雪国』序論」からなり、第1章にのみ川端の受けた中国文学の影響を論述しているが、ほかは主に短編作品を対象に取り上げている。

42 張石『川端康成与東方古典』（上海古籍出版社、2003年）は4章からなり、「川端康成的生活」、「川端康成的美学」、「川端康成与東方古典専論」、「作品専論」となり、第三章のみが『南方の火』と『山の音』を中心に川端文学と中国易学との関係、『眠れる美女』と禪宗との関係を論じる2節がある。

次のことに注意しなければならない。作品鑑賞にだけ専念するのではなく、また国別の文学の枠組みをも超えて、広い文化的視野をもって、異文化的視点から異民族の文学要素にも注目し、また文学以外の芸術がどのように川端文学に組み込まれているのか、どのような作用を持っているのかを明らかにする必要がある。

川端康成は、最高レベルの美を作り上げる作家であるため、川端研究はその文学の美意識を無視してはいけない。文学作品は作者の芸術的感受性から生まれたものであり、文学研究者も同様な感受性が望ましい。テキストに現れた美意識に対する分析は文学研究の最も基本的な方法のひとつであり、川端研究は特にそうである。今後の川端研究はまだ発展する余地が多く、さらなる成果が非常に期待されている。

20 日中文化人の書簡交流にみる周作人の芸術と思想

顧 偉良

はじめに

明治以降、日清戦争（1894）をきっかけとして、日本では中国蔑視の風潮が高まった。その中で1920年9月創刊の『支那學』（京都大学支那学会）は、20世紀の日中文化交流において画期的な出来事であった。青木正兒^{まさる}は「発刊の辞」の中で、「週末学術討究の自由なる、百家競ひ起り、初学並び進む、人に高下無く、学に軽重なし、嗚呼亦盛なりと謂ふ可し。（略）人の支那学を顧みざる、当世より甚しきは莫し」と記している。日本の中国学の誕生は、1910年代の中国新文化運動にも新風を吹き込んだ。それからの数十年間、日本の中国学の研究者と周作人（1885-1967）との間に様々な交流が行われたが、その実態はまだほとんど知られていない。

2015年3月末、周作人宛ての日本知識人の1400通の書簡が発見されたことは、日本の新聞メディアで大きく報道された¹。20世紀の日中文化人の交流においてこのような規模を超えるものはまだないようである。「世紀の大発見」と考えられる。書簡の送り主は360余名で、日本の著名な作家、詩人、芸術家、評論家、中国文学の研究者等を含む。

周吉宜氏（周作人の孫、元中国現代文学館副館長）は、メールで「日本の友人から送られたこれらの書簡は、祖父が生涯、大切に保管したため、社会の激動を経たにもかかわらず、保存されたのは誠に有難いことです。今後これらの書簡は適切な方法で社会に公表し、その役割を果たすことができれば、先人の願いにかない、後生の責任でもあります」と述べた。

周作人親族の代理人として、書簡整理に携わった筆者は、書簡人名リストを作り、勤務校弘前学院大学のホームページに掲載している²。また朝日新聞などに寄稿した³。これらの書簡は4種類に分けられる。①白樺派を中心とした文人、芸術家、「新しき村」のメンバーとの交流、②日本を代表する中国学の研究者との交流、

1 2015年3月末、NHK、共同通信、朝日・読売・毎日新聞、聖教新聞、東奥日報、陸奥新報などが、これらの書簡の発見を報道した。

2 弘前学院大学HP（<http://www.hirogaku-u.ac.jp>）内、大学院文学研究科教員紹介。

3 寄稿「周作人、隠れた人間像に光」『朝日新聞』2015年4月2日全国版・文化欄。

- ③日本軍占領下の北京大学文學院院長時代に行った日本の文士、学者との交流、
④1950年代以降の交流、である。

その他に、周作人親族の手元に保管されている約2万通の中国人からの周作人宛書簡の中から、さらに日本人からの周宛書簡や葉書が数十通発見されている。日中文化交渉史からみて、これらの書簡は極めて高い歴史的価値がある。

周作人は1901年から1906年まで南京の水師学堂(海軍学校)で5年間学んでから、1905年の官費留学試験に合格、当初は土木建築を学ぶ派遣留学生として、1906年に留学の途についた。東京での下宿生活は兄・魯迅と同居であった。下宿先は、本郷区湯島2丁目の伏見館、本郷区東竹町の中越会館、本郷西片町の「伍舎」(10番地呂字7号、かつては漱石の下宿先)の3か所に移り住んだ。魯迅が帰国後、周作人は麻布森元町(赤羽橋近く)に引っ越した。はじめは法政大学予科に入学、後に立教大学に転校、1911年帰国した。

周作人は当時の留学生活について、「東京にいた数年間の留学生活は、頗る愉快だった。アパートの主人や警察から一度も蔑視されたことなく、または大きな事件と出会ったこともない。魯迅が映画で見た日露戦争で中国人スパイが殺されたことのようなショックも受けなかった。最初の頃、外部との交渉はすべて魯迅がやってくれたので、何もかも平安無事だった。それが日本生活に良い印象を残してくれたわけだ」⁴と振り返っている。

留学時代の周作人は日本文化に高い関心を持ち、特に日本の宗教や日本人の情緒、生活習俗に注目していた。民俗学では柳田国男、南方熊楠に早くも関心を抱き、民芸運動の推進者・柳宗悦にも興味があり、『スバル』、『三田文学』、『新思潮』、『白樺』などを読み漁った。日本人の「根本精神は巫女に由来しており、表面上は濃厚な中国文化や仏教文化を受け、様々な特色が現れているので」、日本人の国民性を理解するには「単なる文学芸術に限らず、宗教理解も必要だ」⁵と考えていた。

帰国後の周作人は、1917年より1945年まで北京大学教授を務めた。彼の生涯の著述活動は、1910年代、1920年代、1930年代、1940年代に分けられる。彼の評論は中国の文学、宗教、民俗、思想、教育、児童文学、婦人問題、ギリシア文明、日本文学などにわたり、幅広い。散文においては古代ギリシアのテオクリトスの影響を受け、諷刺文学においてはギリシアのルキアノスとエウリピデス、フランスのラブレーなどを受容している。日本古典の翻訳は古事記、平家物語、枕

4 周作人『知堂回想録』上、安徽教育出版社、2008年、131頁。

5 同上、123頁。

草子、狂言などがあり、近代文学の翻訳は森鷗外、国木田独步、菊池寛、与謝野晶子、石川啄木、千家元麿、武者小路実篤などの作品がある。雑誌『新青年』でE・カーペンター（Edward Carpenter）、H・エリス（Havelock Ellis）などを取り上げて論じている。ギリシア文明に啓示を受けた周作人は、「独立の精神」と「学問の自由」を重んじ、新文化運動を推進していた。

本稿は、20世紀に交わされた周作人と日本人との往復書簡を通して、周作人の芸術思想を検討する。具体的には、(1) 中国文学の研究者青木正児と周兄弟との書簡交流、(2) 周作人と武者小路実篤・「新しき村」との交流、(3) 中国文学研究者一戸務による周作人評価、(4) 晩年の周作人と谷崎潤一郎との交流、(5) 周作人旧居の訪問、という五つの側面から検証する。

1. 青木正児の周豫才（魯迅）、周作人宛書簡

20世紀初頭の中国で最も注目すべきは、北京大学の若手教授らによる新文化運動の提唱であった。この運動の推進者の一人である周作人は、「人の文学」（1918）、「日本近三十年来文学之発達」（1918）、「新文学の要求」（1920）などの評論をもって新鋭文芸評論家として頭角を表わした。この新文化運動は、日本の中国学の研究者に注目されていた。のち中国文学の研究大家になる青木正児もその一人であった。彼の周兄弟宛の書簡の中で語られたことは印象的で、周作人親族の許可を得て、ここで部分的に公開する。

まず、1通目（大正9年11月20日付）：

出し抜けて御免なさい。私の頭の中に以前から魯迅さんと周作人さんとお二人の名前が離れ離れに——併し共に日本文学に精通してみられると云ふ一点で連続を保ち乍ら——存在してゐたのです。今其れが離る可からざる骨肉的結合を私に教へて下さった方が、何と云ふ驚きでせう。それは胡様の御手紙でした。そして貴方がた御兄弟が私共の時代後れの雑誌に対して幾分興味を持つてみて下さることを承つて嬉しく思ひました。管らぬ雑誌ですが、一号から三号まで取揃へ、胡様のお宅宛にして御両人へお送りするやう、此の手紙と同時に書林へ端書を出して置きますから到着の上はお納め下さいませ。（略）

魯迅さん、貴方の「狂人日記」以下の諸作を私は大きな期待を以て拝見してゐます。近き将来に於て新しい創作をして真に意義あるものと為さしむるの業は貴方のお手によって成功せらる可きを信じて疑ひません。創作の先

覚者として私は貴方に心から尊敬を払つてゐるのです。私は「狂人日記」を我国に紹介したいと思つてゐますが、私の支那語に対する語学力の不足が私をして躊躇せしめてゐます。(略)近頃の白話文でも議論文は古文風な所が多い為十分に了解出来ませんが、創作には純粹の白話が用ひられてある為に愧し乍ら一言一句了解悉くして訳することが私に企及し得られぬのです。私は是非勉強して貴方がたの作物を翻訳するやうになりたいと思ひます。そして貴方の事業を日本の文壇に紹介することを得たいと思ひます。

周作人様、貴方の新村研究は面白いございました。私は又最も新しい大陸文学の紹介者として貴方を尊敬してゐます。又貴方の明治以来の日本文学世界の概要を御国に紹介して下さったことを感謝します。私は今支那文学の研究に没頭してゐます。(略)近頃では谷崎や芥川のを面白いと思ひます。有嶋武郎氏は深みのある芸術家です。(略)貴方のお好きな武者小路君も「純」なる芸術家として私も好です。私の従兄某(彫刻家)は彼と親友で常に彼を推賞してゐました。

封筒には「周 豫才作人御兩人様 参る」と書いてある。横にこの手紙を転送した胡適が、「他送給你們的支那学一至三，還沒有到。適」(彼が貴方たちに贈った一号～三号の『支那学』はまだ届いていない)と書き添えている。胡適は北京大学文科学長、教授で新文化運動の主要メンバーの一人である。青木は魯迅を「創作の先覚者」として期待し、周作人を明治文学の紹介者、「新しき村」の研究者として尊敬していたことが上記の引用でわかる。

2通目(大正9年12月27日付)：

御兄弟は揃ひの結構な日本文の御手紙を下さしまして有難う御座いました。私も支那文で書いて見やうかと思ひました。(略)私は先生に願ひがあるのです。それは十二月十三日の「晨报」に先生們的の發起せられた文学研究会なるものの宣言を見出しました。私は心から其の出現を歓迎します。私も其の会員になることが出来ますでせうか？編輯叢書の利益は頒つて戴く事が出来ると思ひます。私は此の会に入会することによって現代支那文界の新運動を知るに多大な便利を与へられ得ると思ひます。どうか私の為を紹介の勞を取つて下さい、(略)日本では今年春頃、文部大臣から訓示が出て、一切の公文書を白話文にしると云ふことになりました。近頃諸学校でぼつ／＼改められて来ました。大変結構な事と思ひます。届書一つ出すにも「小生……

此段及御届候也」と云つたやうな幕府時代の遺物が吾々の頭に往来してゐるのは、丁髷が散髪の上に載つかつてゐるやうな変な恰好なのです。貴方がたも辮髪は成可く早く去つてしまはれては如何ですか。(略)

先生！ 日本近時の文学も漱石以来大きい物が出ませんね。それは作家の修養が足りないからです。口嘴の黄いうちに、すぐもう大家になってしまうからです。漱石は実に偉らかつたです。其の作は今から見れば多少時代の過ぎたものでせうけれど、あの人は当時英文学者としても日本の第一人者であつたのです。その蘊蓄を傾倒して創作界に乗り出したのですから向ふ所敵無しです。それにあの人は漢学の深い趣味を持つてゐられ、漢詩なども作りました。支那風の画も実に気韻の高いものを描きました。漱石門下の鈴木三重吉だの森田草平だの連も漱石先生程行くことは駄目でせう。芥川龍之介と谷崎潤一郎とは才物です。恐ろしい程の才筆を持ってゐますが、谷崎などもあまりもてた為になら駄作をやつて困ります。どうか先生方も自重して大きなものを見せて下さい、急ぐ事はありません。お国は大陸です、大きいです、大きいものがきつと出ると私はそれを楽しんでゐます。日本のやうなこせへした島国は駄目です、深いもの、大きいものは望みません。(略) 一生を支那文学研究に捧げるつもりです。古い事でも新しい事でも何でも支那の事が知りたいのです。宜しく御指導を仰ぎます。

この手紙は言文一致(白話文)を含む文学の将来を論じ、封建時代遺物の辮髪と丁髷を引き合ひに、異文化の比較を行っている。中国文学の新しい動きに啓発された青木からの書簡は周兄弟にとつても新しい刺激になつただらう。

周兄弟の青木宛書簡(魯迅1通、周作人8通)は、近年刊行の『青木正兒家蔵中国近代名人尺牘』(大象出版社、2011年)に収録されている。周作人の青木宛書簡の1通目と2通目は1920年、3通と4通目は1940年代、他の4通は1958年、1960年代に出されたものである。青木からの書簡で言及された「御兄弟は揃ひの結構な日本文の御手紙」を見てみよう。まず、周作人からの青木宛書簡(1920年12月15日付)：

(略)「支那学」を御送り下されてありがたう。先日胡適之君から第四号を受け取りました。十分の敬意と興味とをもつて拝見して居ります。支那学は本場の支那よりも貴国の方はより學術的に研究され、また多くの有益な論文や書物が発表されてゐる事は予ねて知つて居りますが、あなた方の雑誌を見

ますと支那現代の思想界の傾向にも注意を払つてゐる事は殊更に私達の興味を引きました。過去の文化ばかりでなく、現在の支那の人間の、微弱ながら、光明へとの内面的の努力をも認めて日本に紹介してくれた事を感謝します。日本と支那との様な歴史上からして色々な深き関係をもつてゐる国は互いに理解し合はなければ成らない筈ですが、支那にはまだ日本の芸術はちつとも知られて居ないのは実に残念な事と思ひます。私は今少しでも日本現代作家の作品を訳して支那に紹介したく思つて居りますが日本語の知識は足りませんので心細く思ひます。また美術の事も分らないのも随分残念に思ひます。都合がよかつたら此からもう二三年位日本で勉強したいと思つて居ります。⁶

それから、同年の周樹人（魯迅）の青木宛書簡（11月14日付。12月14日の誤記ではないか。要確認）：

拜啓御手紙拝見致シマシタ、支那学モツヅイテ到着シマシタ、甚ダ感謝シマス。

ワタクシハ先日胡適君ノ処ノ支那学デ、アナタノ書イタ支那学革命ニ対スル論文ヲ読ミマシタ。同情ト希望ヲ以ツテ然モ公平ナル評論ヲ衷心ヨリ感謝シマス。

ワタクシノ書イタ小説ハ幼稚極ナモノデス。只ダ本国ニ冬ノ様デ歌モ花モナイコトヲ悲シテ寂寞ヲ破ルツモリデ書イタモノデス。日本ノ読書界ニ見セル生命ト価値トヲ持ツテ居ナイモノダロト思ヒマス。コレカラ書ク又ハ書クツモリデスガ前途ハ暗澹デス。コンナ環境デスカラ、モツト諷刺ト咀呪ニ陥ルカモ知りマセン。

支那ニ於ケル文学ト芸術界ハ実ニ寂寞ノ感ニ堪ヘマセン。創作ノ新芽ハ少シク出テ来タ様デスケレド生長スルカドーカサツパリ解リマセン。「新青年」モ近頃随分社会問題ニカタムイテ、文学方面ノモノハ少ナク成リマスシタ。支那ノ白話ヲ研究スルニハ今ニ於イテ実ニ困難ナコトデアルト思ヒマス。唱道シタバカリデスカラ、一定シタ規則ナク各人銘々勝手ナ文句と言葉トヲ以ツテ書イテ居リマス。錢玄同君等ハ早ク字引ヲ編纂スルコトヲ唱道シテ居ルケレドモ、未着手シマセン。若シソレガ出来タラ随分便利ニナルダロト思

6 張小鋼編注『青木正兒家藏中国近代名人尺牘』中国：大象出版社、2011年、79-81頁。以下、同書からの引用の際は、旧漢字は新漢字に改めるとともに、原文に適宜、句読点を追加した。強調は引用者。周作人の書簡は「新村北京支部」と記される便箋を使っている。

ヒマス。⁷

上記の書簡から中国の思想界に対する兄弟二人の認識が異なっていることがわかる。周作人は学問の見地から日本の『支那学』誌に共鳴を示し、その意義についての見解を述べた。「過去の文化ばかりでなく、現在の支那の人間の、微弱ながら、光明へとの内面的な努力」という言葉は、思想界の変化に注目し、新文化運動の精神を的確に把握し、生活、感情、思想の相互関連を含む学問体系をもっていることを示す。

一方、魯迅は書簡の中で創作などにも触れているが、周作人のように思想界の変化に関心を示さず、「読書界」を悲観的に見て、自身の創作をも揶揄している。彼は「只ダ本国ニ冬ノ様デ歌モ花モナイ」と書き、暗澹たる創作の前途を嘆き、孤独者の心境を「寂寞を破ル」という言葉で表現している。このように、同時代の中国思想界に示された魯迅と周作人の違う反応は、新文化運動の時点で既に違う道を歩み始めていることを示す。

『青木正兒全集』第十巻の「年譜」に、「(大正)九年(三十四歳)九月小島祐馬・本田成之諸氏と「支那學」を創刊、「胡適を中心に渦いてゐる文學革命」を寄稿。のち胡適と相知る。此頃亦周樹人・周作人とも相知る」⁸とある。『支那学』は、中国文学、東洋史学の碩学(狩野直喜、桑原鷺蔵、内藤湖南等)を中心に始まる研究誌であり、「実証主義」を受け継ぐ京都学派の誕生を意味する。1947年8月まで400余の論文が掲載され、堅実な中国学の成果を世に送り続けた。戦時下でも中斷することがなかった。青木はいわば第2世代の中国学の研究者である。

『支那学』の創刊号、2号、3号に掲載された青木のこの論文は、「文学革命」(白話文学)をめぐって、胡適の「文学改良芻議」、陳独秀の「文学革命論」、劉半農、沈尹黙らの白話文新詩を詳細に論じている。これについて、胡適は青木宛の書簡(1920年11月11日付)で、「先生は中国の文学革命運動について論じ、取材が適切で、見解も公平ですが、私個人を褒めすぎたところがある」と書いている⁹。内容の充実した『支那学』は中国の若い文化人を驚かせただろう。同じ書簡に、胡は「先生は我々に寄せた、「中国の長所をもっと発展させ、足りないところは西洋のすぐれた文学を持ってきて徐々に補足すれば、立派な新しい文学が作れます」と

7 『青木正兒家蔵中国近代名人尺牘』70-73頁。強調は引用者。

8 『青木正兒全集』第10巻、春秋社、1984年。

9 「胡適致青木正兒 之二」、『青木正兒家蔵中国近代名人尺牘』19頁。胡からの青木宛書簡は合計9通(1920年9月25日～1921年5月19日)。

いう希望は正に我々一同の願いです。しかし、我々の力は弱すぎて、恐らく破壊をする処が多く、建設する所が足りないでしょう」¹⁰と書いている。胡適は中国古典小説の研究家として¹¹、このような洞察力と想像力を働かせることができたのであろう。「破壊」と「建設」こそが、新文化運動と政治化した「五四運動」との分岐を作った要因だと思われる¹²。新文化運動に頭角を現した周兄弟に宛てた青木の書簡は中国思想史から見ても大きな意義がある。

2. 新しい村、武者小路実篤との交流

1918年11月、武者小路実篤は、農業共同集落「新しい村」を宮崎県児湯郡木城村に設立した。翌年7月、周作人は早くもこの地を訪れた。実篤夫妻の借家の2階に4日間滞在した。この訪問については、武者小路房子の「周さん」¹³と実篤の「周作人さんとの友情、想ひ出など」¹⁴に詳しい。その後、周作人は「新しい村」の水路建設のために寄付をしている。実篤は周宛てに「君に何度も手紙をかきたく思ってゐました。昨日君から10円寄付が来てうれしく思ひました。その内に君の村への変らざる愛を感じる事が出来、なほうれしく思ひました。(略)今度村で「新しい村通信」にかきましたやうな本を出すことにしたくその時支那の文学哲学等を日本訳したものを出したく殊に古い詩の日本訳を出したく思つてゐます。君に訳して戴けると理想的と思ひます。詩に限りませんが日本人によませたいものがありましたら訳して戴くなり、評論風のもののかいて戴くなりしたく思ひます」(2月7日付書簡より一部引用)と書き、感謝の気持ちと文学上の信頼を見せている。

周作人が「新しい村」に共鳴を覚えたのは、1918年5月に東京堂書店から購入した雑誌『新しい村』がきっかけであった。それと同時に、実篤と周兄弟には交流があった。まず、実篤の『ある青年の夢』を魯迅が中国語訳して、『新青年』誌に4回連載したのち、周作人は感想文「武者小路実篤の『ある青年の夢』を読む」を『新青年』(第4巻第5号、1918年5月)に掲載した。その後、実篤からの公開書

10 同上、18頁。

11 胡適には『紅樓夢』『水滸伝』『三国演義』など十数種類の古典小説に関する実証的研究があり、禪宗研究、水経注研究者でもある。

12 唐徳剛訳注『胡適口述自伝』華東師範大学出版社、1997年、第九章「“五四運動”——一場不幸的政治干渉」。

13 『新しい村』1919年8月号。

14 武者小路実篤「周作人さんとの友情、想ひ出など」、方紀生編『周作人先生のこと』光風館、1944年(初版)；大空社、1995年(復刻)。

簡「与支那未知の友人」(支那の未知の友人へ)(1919年12月9日付)を周作人が中国語訳して『新青年』(第7巻第3号、1920年2月)に掲載している¹⁵。実篤の原文が見つかからないため、中国語からの関口弥重吉の和訳をここで部分的に引用する。

実を云うと私は今世界の中で一番難解な国は支那だと思っています。ほかの独立国はみな目覚めて「人類的」になろうとしています。国民性の謎もその一部分はわかってきました。しかし支那という謎はまだ少しも解けていません。日本もまだ完全に目覚めていないけれども、支那より幾分目覚めており、謎も解明されようとしています。(略)支那が壮んになるときがまたやってきていると思います。諸君が決心して立ち上り、その精神が発揮されるときが支那の精神と文明世界とが生れかわる時だろうと思います。人類はその時に大きな期待を抱いています。諸君はその期待に背くことはないでしょう。(略)

私は正直な人を、真心を求めている人を、忍耐強く、意志の強い、思いやりが深い、そして進んで人類の為に働こうとする人を求めています。支那には必ずこのような人がいるにちがひありません。その人はきっと目覚めるでしょう。(略)¹⁶

以上のように武者小路実篤は『新青年』誌の同人を念頭にこの公開書簡を書き、中国の若い人を激励していたのである。それをいち早く中国語訳した周作人は、きっと感銘を受けただろう。

周作人日記には、1918年5月より1920年にかけて、「新しき村」に関する記述が頻繁に出ている。1919年4月15日、周作人は妻子と共に日本へ行き、日向で「新しき村」を見学。5月、北京で五・四運動が起こり、一人で北京に戻る。7月、再び日本へ、新しき村を訪れる。「新しき村」の北京支部の設立について東京で実篤と相談。帰国後の周作人は、1920年2月、北京八道湾の自宅で「新村北京支部」を設立し、問い合わせの場所と時間、日向への実地考察の紹介、旅行手続きなどはすべて周作人が執り行う、という旨の「新村北京支部啓事」を『新青年』誌に掲載している¹⁷。また、「新しき村」の理想を精力的に紹介していた。「日本

15 武者小路実篤「与支那未知の友人」、『周作人散文全集』第2巻、広西師範大学出版社、2009年所収。

16 関口弥重吉「解題」、『武者小路実篤全集』第2巻、小学館、1988年、683-684頁。

17 『新青年』第7巻第4号、1920年3月、『周作人散文全集』第2巻所収。

の「新しき村」(1919年3月)、「日本の「新しき村」訪問記」(1919年10月)、「「新しき村」の精神」(1919年11月)、「「新しき村」の解説」(1920年1月)、「「新しき村」の理想と実践」(1920年6月)、「「新しき村」の討論」(1920年12月)などといった評論を『新青年』誌に発表している。

実篤も「周作人さんとの友情、思ひ出など」の中で、「長い間新しき村の北京支部を周さんにやつてもらひ、北京へゆく人は周さんに紹介し、又中国の人で新しき村のことを知りたい人は皆周さんに紹介した。時には随分御迷惑を与へたかも知れない」(1944年1月)¹⁸と書き、また「周作人と私」の中で「周作人は人間として立派な人であることは誰も認めてゐると思ふ。又詩人として学者として周作人は尊重すべき人であり、周作人のかく随筆は日本語に訳されてゐるが、それを読んでも立派なものであり、面白いものであり、頭のいゝことがわかる。」¹⁹と書くなど、深い尊敬の念を抱いていることがわかる。

周作人日記によれば、当時、北京大学図書館司書の毛沢東も「新しき村」北京支部を訪ねた。「新しき村」の運動は、新しい人間形成を目指すもので、実篤の言葉「真、愛、美」が示すように人間同士の「絆」を深めるためである。彼らの唱える生命の讃歌、また人間精神への肯定は、「新しき村」の運動の原動力だと言っている。中国人に連帯感を持たせて、「新しき村」の理想を実現させる人の現れを期待していた実篤は、周作人と出会ったのである。

二人の交流は、周作人が亡くなるその前年(1966年)まで続いていた。実篤は1961年12月27日付の周作人宛の書簡に、「御手紙なつかしく拝見致しました。あなたのことは大阪の山本樽信君からうかがい、御元気の御様子を知り、喜んでいました。私の『真理先生』を訳する事元より承知致します。鮑氏にどうぞよろしく。私は無事にくらしていますが、少し老人になり足が少し弱くなりました。しかし御かげで毎日嬉しく仕事しております。お互に生きている間は仕事をしたいものです」²⁰と書いた。この手紙は香港在住の商人鮑耀明を通じて周作人に送られた。

「大阪の山本樽信」とは、今回発見された周作人宛書簡の中で、「新しき村」の村員としてもっとも多くの手紙や葉書を送った人である。ここで山本樽信からの葉書(1920年8月11日付)を紹介する。「新聞紙上にて兄等先進家達を中心として最も有意義な運動をなされて居る由承り喜んでゐます。又村を支部にもお造りに

18 武者小路実篤「周作人さんとの友情、思ひ出」、方紀生編『周作人先生のこと』5頁。

19 「周作人と私」、『周作人先生のこと』13頁。

20 『周作人と鮑耀明通信集1960-1966』河南大学出版社、2004年。

なるとの事非常な希望を以て待つてゐます。いくら不平を抱いても地球以外に脱出することの出来ない以上もつとお互に楽しく生活する事の出来るやう努力したいと思つてゐます」とある。

当時、日本各地の「新しき村」支部から年賀状や葉書を周作人に送っていた。宛先は「周作人兄」で、村員の名前を傘状に記し、心のこもった文章を連ねている。そこから1920年代、海を挟んだ日中の人々が友愛の心を持って社会改良に励みあった気持ちを見ることができる。各支部からの数多くの書簡の公表が期待される。

現在、調布市仙川の武者小路実篤記念館では、実篤と周作人、錢稻孫らの北京での写真（1943年4月に中国を訪れた実篤、谷川徹三らと）、周作人の実篤宛て書簡3通（1956年10月、1965年12月、1966年5月）、周作人自筆原稿1点「過ぎ去った生命」が所蔵されている。また、自筆原稿1点「新村的説明及会則」の寄託を受けている。ちなみに、周作人親族所蔵の実篤の周作人宛書簡は4通ある。ここで、1943年4月の中国訪問後、実篤は日本から周作人に手紙を書いている。

御手紙唯今戴きました。（略）貴兄の事をなつかしく思つておりました時だけになほ嬉しく拜見しました。北京ではゆつくり御話する閑がありませんでしたが御逢い出来、その上御愛蔵の磚を戴き誠にありがたう御ざいました。去年のくれに京都で磚の硯を一つ手に入れて喜んでおりました処だつたので一層よろこびました。それ以上折角御集めになつてゐられるものから一つ御送り下さる御厚意に感謝いたします。その御礼としてどうかと思ひましたが、私も愛蔵してゐましたものを一つ差し上げたくいろいろ考えた結果、四暢園を選びました。御気に入つて嬉しく思ひました。平和になつてゆつくり御逢ひ出来る時が今生にある事を望んでおります。

封筒の裏に「昭和十八年十月二十八日 武者小路実篤」と書いてあった。この手紙は実篤の周作人に対する親しみに溢れ、平和を望む実篤の切望が滲み出ている。実際、「新しき村」を訪れて以来、周作人は白樺派の文人、芸術家（武者小路実篤、志賀直哉、里見弴、長与善郎、千家元麿、木村莊八、犬養健、梅原龍三郎ら）と親しく接した。

1943年、実篤は北京に行く画家・宮崎丈二に託して富岡鉄斎の扇子絵を周作人に届けさせた。周作人は「武者先生と私」の中で、「武者先生とは語れないこ

とがなく、しかも意気投合で、それは一種の愉快で、幸福でもある」²¹と語っている。1913年4月2日付の周作人日記にも「午後『世間知らず』を読む。『白樺』の中で武者小路の著作は、最も個性的で共鳴を覚える」²²と記してあった。日記によると、相模屋から定期購読していた『白樺』の毎号が届けられ、『朝日新聞』や他の書籍も送られている。

周作人の後半生は毛沢東時代の政治に翻弄されたが、利他主義の精神は生涯において挫折したことがない。「真、愛、美」を求める実篤の心と通じ合うものでもあった。古代ギリシアの詩人から影響を受けた周作人の小品はユーモアに富み、広く愛読されている。その根底にあるのは、生活を凝視する風刺の眼であり、実篤の芸術とも相通ずる。二人の友情と交流は、時代の荒波を乗り越え、両国の文学史に刻まれていくだろう。

3. 1934年の日本再訪

周作人と日本との関係には、もう一つ注目すべき接点があった。1934年7月、周作人が妻子と共に来日した折、中国文学研究会は歓迎会を主催している。『中国文学月報』第一号には、「周作人徐祖正両氏歓迎会：昭和九年八月四日、山水楼。与謝野寛、佐藤春夫、有島生馬、新居格、竹田複五氏との共同発起なり、出席者二十五名。」²³と記されている。この歓迎会の出席者には、島崎藤村、戸川秋骨、塩谷温、堀口大學、松村梢風などがいた。島崎藤村は周作人と同行の徐祖正（北京大学教授）の二人を自宅に招き、和辻哲郎、有島生馬も同席した²⁴。そのほかに、改造社、東方文化研究所、日華学会などと交流し、左翼系作家たちの会合に出席した。秋田雨雀と知り合ったのもその会合であった。『東京朝日新聞』、『読売新聞』も周作人の来日を数回報道した。

中国文学研究会（発起人：竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫、増田渉、松枝茂夫、松井武男、一戸務）は、これまでの日本における「漢学」（考証学）、「支那学」（宋学）を中心とした領域よりも、中国現代文学を含む中国の言語、文化といった広範囲を視野に入れている。一戸務（1904-1977）は塩谷温の門下生で、東京帝大在学中に福田清人、那須辰造等と共に第十次新思潮（1929-1930）を立ち上げている。その後、伊藤整の雑誌『文藝レビュー』に参加し、小説、評論、翻訳などを発表し

21 「武者先生与我」『天地』第3期、1943年12月、『周作人散文全集』第8巻所収。

22 魯迅博物館蔵『周作人日記』上、中国：大象出版社、1996年。

23 中国文学研究会編『中国文学月報』第1号、1935年2月。

24 周作人「島崎藤村先生」『芸文雑誌』1943年10月、『周作人散文全集』第8巻所収。

ている。また『三田文学』誌にも評論、隨筆等を発表している。

東京帝大同期生の目加田誠とともに、1929年に北京の周作人私邸の門を叩いたことがある。周作人との初対面の印象について次のように語っている。「はじめて周作人先生の聲咳に接したのは、昭和四年己巳酷熱の候である。場所は先生の久住の地、北京西城八道湾の、折からむし暑い槐樹のもと蟬時雨のする閑雅な客厅であった。そとは焼けつくような暑さなのに、ややうすぐらい書齋のなかは、脚下に冷風さえ漂ってきて、海底にはいったようであった。頭髪を短くくりつと丸刈にされ、大きな^{たまがらす}球硝子の眼鏡をかけて、麻織の真白い支那服を着衣されていた。初見の瞬間、わたくしは小説家山本有三氏の風貌を髣髴した」²⁵とある。

後に一戸氏は周作人の散文集『苦茶隨筆』を翻訳、出版した。周宛の書簡の1通目（昭和15年秋）の中で次のように述べている。

愈々秋深まりました。春以来先生の隨筆翻譯の爲日々苦惱致しましたがやつと九月に書物になりました。国内は何かと多事にて文学も自づと功利的、現実的なものにおされ勝にて充分装幀なども昔日のおもかげのないものばかり刊行さるゝ現状となつてみますので、先生の作品を所載しますには余りになさない書物になつて恥入る次第です。翻訳も私の思ひ違ひで誤りの処も多からうと思ひます折に御批評願上ます。先生の御名前は日本で随分知れ渡つてゐます割合に先生の隨筆に親しんでゐる者が少いやうです。翻訳が困難なために紹介が少いからかとも思ひます。作品中「窮袴」と「芳町」の十字ばかりが削除されました。これは私の注意が足りなかつたので大変に礼を欠きました。

一戸務訳の『周作人 苦茶隨筆』の扉に周作人の写真1枚と一戸務宛の書簡（4月1日付）の写真版がある。短札は、和訳への感謝、写真の送付、序文は恐縮で執筆が無理だ、という謙虚な内容である²⁶。この翻訳は名取書店から刊行されて、松枝茂夫訳『瓜豆集』（創元社、1940年）と共に最初に和訳された周作人文集である。一戸務は「序」にこう書く。「私は周作人の隨筆を翻訳しながら、今日の眞の文人学者の姿はかくあるのではないかとも信じた。陶淵明を愛する感情と諸葛孔明を慕う情熱と孔子を崇拜する智脳とが互に錯雑としてゐて、そのどの一つに走つても、現代の文人学者の域を飛びだすだらう。今日眞の文人を求めて、私は

25 一戸務「周作人文学序説」、子息一戸渡氏より提供。

26 一戸務訳『周作人 苦茶隨筆』名取書店、1940年。

周作人に深く尊敬を感じてゐる。」²⁷とある。

一戸は1956年10月に日中文化交流協会主催の第1回目の日本作家訪中団（団長は青野季吉、以下は久保田万太郎、宇野浩二の諸氏11名）の一員として中国を訪問した。1929年からは27年ぶりの再開で感激した一戸氏は、周作人宛に下記の書簡（12月26日付）を送った。一部分を引用する。

（略）先生の御清祥なお姿に接し、心よりうれしく存じました。昭和四年七月に初めてお目にかゝりましてから三十年の月日が経ちます。中日戦争中は、わたくしは、しばしば日本軍閥から渡華をすすめられましたが、死ぬとも行かずと決意して今日に至り、あくまでも中日平和友好を心に祈っていましたが、その日が今日やって来てうれしくてたまりません。わたしは一個の貧しい中国学者であつて、革命家ではないのですが、今日の新中国をみては、世界の理想国だと信じ、日に日に、りっぱになって行く中国を期してやみません。

帰国以来、多忙をかさね、かへつて御鄭重な御書翰に与り有難く思います。こんどの旅行では、西安がいちばん興味の中心でした。あんなに、たくさん唐代の発掘品がでてきたので、千年まへの唐の長安文化がはつきりとわかり、（略）日本文化は中国唐代の焼きうつしであるのを、立証する数々の学問的ヒントを得ました。（略）

先生の晩年の学問的な随筆を読みたくて、しかたありません。もつともつと御長寿でいられますことを、天の神々に契つてやみません。やがて人類にたのしい平和が来ると確信します。

周作人の散文から東洋の美と感性を感じた一戸務は、北京を訪れたもう一つの目的として、晩年周作人の美文を読みたかったのだったが、それは実現できなかった。彼の尊敬した周作人先生は、既に散文を書く環境に恵まれず、公民権も剝奪され、生活と学問の自由が奪われた身となっていたのである。

1956年10月14日周作人日記に、「14日晴れ。午前、古魯の脚本玉虎墜を修正。〔方〕紀生は一戸君とともに来訪する。狂言選一冊を贈る。」と記されている（周作人親族提供）。

子息渡氏が提供して下さった一戸務の「周作人文学序説」は、おそらく戦前

27 「序」、一戸務訳『周作人 苦茶随筆』4-5頁。

日本で周作人の散文芸術について書かれた最も詳細なものであろう。その中で、「周作人先生の著書を買ったのは、昭和四年に始まる。その後、わたくしは周作人先生の随筆から遠ざかった。昭和九年に雑誌「人間世」が刊行され、紙上に知堂の名を親しく見た。私は再び、先生の随筆に近づくようになった。(略)その間、先生からも書翰をいただいた。先生の筆蹟の鷗外のそれに躍如たるを感じたのである。」とし、「初期における周作人の文学的態度を、明治末期の鷗外と、やや似た文学風の如く感じた」という感想を書いている。また「乱世は敢て今日支那ばかりではないが、こうした世に少しでも思想的に生き抜く文学者は、容易な姿ではあるまい。周作人は自ら中庸の道を生き抜くのだといいながらも、中庸に生き延び難い苦悩の相が筆端に浮んでいる。(略)周作人は北京を慕って去らず、今日なお北京西城に居を移さずにいる。その麗わしい姿は、私達日本人にとって一入心強^{ひとしお}く、支那文学の芽もここから再び咲き匂^{にお}って来るのではないかと思われる。」と語っている。ちなみに、一戸は鷗外の蔵書を整理し、東京大学図書館「鷗外文庫」の完成に携わったことがある。

一戸務は中国文化の理解に心血を注ぎ、明治以降に現れた中国蔑視の風潮をも批判した。1934年の周作人の訪日の際に書いた書簡(8月1日付)では、周作人に原稿依頼をしている。

今般、「近代支那文化研究」の叢書が私の編輯にて発刊いたすことになりました。日本では、近代及び現代の支那文化の研究書はこれが始めてなので、相当困難と冒険をおかして刊行することになりました。この点には日本の学者で研究してゐる方が少いので、実に選びに選んで、日本に於けるこの方面の第一流の学者芸術家、評論家の起筆を乞ふて完成いたしました。出版は九月二十日でございますが、これにつき一冊なりとも日本人に読ませ真実の支那の文化のすぐれた所をしらせたく存じます。日本人が近代支那文化に理解のないことは甚だしいもので、このために日支が相反して来るのは残念の至りだと思つてゐます。(略)この叢書を一般日本人に読んでみただけのやうに、先生の御推薦文をいただければ有難く存じます。

一戸務は著書『現代支那の文化と芸術』所収の「北京点々」で、中国の文芸について「北平は今でもこの物売り屋が、街の音楽である。さらでだに、支那人は音楽趣味豊かな人種であるが、その平和愛好性は、音楽趣味で養はれた点が少ない。自衛本能の最も強く発達せねばならぬ内乱、暴動、対外事件など四圍の情

勢のうづまき中に生活してゐて、惨忍性に富んだ国民性があると共に、平和な穏やかな一面もある」²⁸と語り、鋭敏な感覚と、複眼的な視線で中国文化を観察している。同書所収の「魯迅随想」は、1930年代の魯迅を中国一流の「小説家」とする日本の評論の風潮に同調せず、「いつてみれば、野に下つた学者が小説を書いてゐるといつた風であつて、小説の分野からみれば、魯迅の小説は小説の形もなさぬ小説であるとも云ひきりたい」とし、「どの小説も、現代の中国の制度風習の上に立つたテュム小説である。国境を超えて、人間の真に訴へるのではなく、当時の世俗を皮肉つたり、政治を揶揄したりするのが多く（略）小説らしい小説は魯迅の作品には一つもない。魯迅は小説家としては小説の域を飛び出してゐる思想家の小説家である」と論じる²⁹。確かに、魯迅の『魯迅訳文全集』（全8巻）³⁰の大半は、ソビエト時代の文学理論、革命小説『壊滅』（ア・ファージェーフ著）など、日本のプロレタリア文学理論（蔵原惟人の理論書）で占められるほか、厨川白村の文芸理論の翻訳もある。

一方、『周作人訳文全集』（全11巻）³¹では、ギリシア神話・古典（ルキアノス対話集、エウリピデス悲劇など）、日本の古典文学、近代文学、ロシア、東欧の民話、ハヴァロック・エリス性心理学の翻訳がほとんどである。文学理論の翻訳は一つもない。その多彩な内容から見れば、おそらく近代中国で『周作人訳文全集』は最も豊富なものだと思う。中国では周兄弟の性格上の違いに着目して二人を論じる書物があるが³²、彼らの翻訳を比較するものはあまり見当たらない。二人の翻訳したものは全く異なる分野であり、世界の文明と思想に対する二人の関心の違いを示している。

一戸務は、魯迅の小説は「真」の人間性への追求が欠如していると見ている。その考えは、竹内好の魯迅論と全く違う。「永遠の革命者」³³と見做した竹内の魯迅像には、竹内の「近代の超克」という考えが投射されただろう。ただ竹内にしても魯迅の小説をあまり評価していない。竹内好研究者の孫歌は、竹内の『魯迅』を、「魯迅研究の基礎を築いた記念碑的著作」として、「全世界の魯迅研究者の必読書」と評価している³⁴。中国では無数の魯迅像が登場したが、それらの魯迅像

28 一戸務『現代支那の文化と芸術』松山房、1939年、13-14頁。

29 同上、133-136頁。

30 北京魯迅博物館編『魯迅訳文全集』全8巻、福建教育出版社、2008年。

31 止庵編訂『周作人訳文全集』全11巻、上海人民出版社、2002年。

32 孫郁『魯迅と周作人』遼寧人民出版社、2007年；黄喬生『八道湾十一号』三聯書店、2014年。

33 竹内好『魯迅』未來社、1961年。

34 孫歌『竹内好という問い』岩波書店、2005年、30頁。

が時代の中で揺らぐのも実情である。

一戸務の魯迅論は、単なる小説の思想性に着目するのではなく、小説の言葉と世界との関係に深い洞察力を働かせている。鷗外文学に精通した一戸は、どこか鷗外の諦観に通ずるところがある。一般の魯迅研究者は一戸の魯迅論評をほとんど知らないようである³⁵。ちなみに、一戸は学生時代に塩谷温の魯迅『中国小説史略』の講義を受け、7、8人の受講生と共にその翻訳に着手し、出版書店も決まったが、実現できなかった。

日本の中国学が中国に与えた影響は計り知れない。『支那学』と『中国文学月報』が日中文化の相互理解と学術交流に残した功績は大きかった。中国文学の研究者たちは、ほとんどみんな周作人と書簡交流を行っていた。その交流の全貌の解明は今後期待される。

4. 谷崎潤一郎との交流

1960年代の周作人は、文芸評論家・曹聚仁（香港在住）との交友関係で、香港商人鮑耀明との手紙のやりとりが頻繁で、1960年3月から1966年5月21日まで鮑耀明宛に402通の書簡を送っており、晩年の周作人の一面を如実に物語る。その間、武者小路実篤、谷崎潤一郎、長與善郎らの周作人宛の書簡も鮑氏経由で届けられている。鮑はそれらの書簡をまとめて、香港で『周作人晩年書信』（私家版、1997年）を刊行し、後に中国国内で『周作人与鮑耀明通信集』という題名で出版した³⁶。

この通信集を読むと、背筋が凍る思いがする。1960年7月31日の日記に、「一生を振り返ってみると、侮辱や被害を受けるばかりで、人の為に犠牲を払い続けることは、恐らく死に至るまでだろう」³⁷と周作人は記している。1950年代以降の周作人の境遇は、悲惨そのものであった。日本の侵略戦争への協力という罪で、公民権を剥奪され、生計の道が断たれ、翻訳代で生活を維持するほかはなかった。1960年代には病気治療のために愛蔵した日記の一部分を手放さなければならな

35 例えば、張夢陽『魯迅学：在中国、在東亞』広東教育出版社、2007年の「“竹内魯迅”与“中国魯迅”」の一章は竹内好の魯迅論に触れたが、一戸務の魯迅論については言及していない。

36 出版元の河南大学出版社は遺族の同意を得ないまま、周作人日記、書簡を出版し、作品の使用権および報酬などの権利を侵害した、という「違法」の判決が2005年11月北京市海淀区人民法院から出された。この判決は、出版元に対して、『鮑耀明与周作人通信集』の出版停止を命令した。2006年6月21日の『光明日報』第二面の「啓事」覧に、原告側の勝訴と被告側の賠償金が掲載された。この『鮑耀明与周作人通信集』は、孫郁・黄喬生編『回望周作人』（全9冊、河南大学出版社、2004年）の1冊とされる。

37 鮑耀明編『周作人与鮑耀明通信集』5頁。

かった。食品や栄養品を得られないで苦しんだ周作人は、鮑耀明との通信でほぼ毎回食品に触れている。谷崎も日本の食品、お菓子などを周作人に送り届けている。

鮑からの手紙（1961年10月31日）は、谷崎の手紙を引用している。「梅びしほ、周先生のお気に召しますれば、何回でもお届けします由、乞御返事」とある。『瘋癲老人日記』刊行後、谷崎は鮑宛てに、「誰かそちらの適当な篆刻家に『瘋癲老人日記』の二字を白文で彫って戴きたいものですが、よろしくお願い致します。印材もそちらの方が適当なものがあると思いますので、そちらで選んで下されば結構です。印材並びに篆刻家への謝礼等は、どうぞ御遠慮なく御申出戴きたいと存じます」³⁸と書いたことがある。鮑からの依頼を受けて、周作人は、印刻家に「瘋癲」と「風癩」という二つの銅石印章を彫ってもらった。後に谷崎から『瘋癲老人日記』、『台所太平記』を周作人に贈呈した。ちなみに、現在、芦屋の谷崎潤一郎記念館には、谷崎が周作人に贈ったその『台所太平記』（初版）と書（小型掛け軸）がある。この2点は、岐阜県在住の柳玖美氏が、2014年秋ごろにご主人の遺品整理の時に見つけて、記念館に寄付したものである。その本と書は、周豊一氏（周作人の長男）が柳氏の夫である翁祖雄氏に預けたものである。当時、翁氏は北京大学で日本語を教え、柳氏も周氏と一緒に20年間近く北京図書館に勤務したことがある。二人は1978年に日本へ帰国している³⁹。

戦後の周作人と谷崎潤一郎との交流の始まりは、1960年前後だろうと推察できる。1958年から、谷崎は病気で右手が不自由になり、筆を持つことができなくなったので、周作人宛ての書簡はすべて代筆による。年は明記していないが、2月5日付の書簡を一部引用する。

戦争中お目にかゝりましてからもう長いこと御無沙汰しておりますが、先日計らずも香港の鮑耀明さんを経て七言詩の御揮毫を戴き大変お懐かしく存じました。

もう十六、七年も前、京都祇園の「大友」といふ家でお目にかゝつたのが最後だと存じております。（略）あの時分は日本はもっとも不愉快であった時

38 鮑耀明編『周作人と鮑耀明通信集』171頁。

39 この経緯は、柳氏が直接筆者に知らせてくれた。在日華僑と結婚した柳玖美さんは、新中国建設のために1950年代初期に夫婦二人で北京に渡ったが、1978年に日本に戻った。柳氏は翁氏が周氏からもらった3冊の雑誌『颯風』（第14、15、16号、1982年7月、1983年3月、11月）と周作人の母親の写真4枚を筆者に送ってくださった。

代で、貴下様方もさぞ不愉快な記憶を持って御帰国になりましたこととお察し申します。お国にお帰りになりましてからも戦中から戦後にかけて、少からぬ御心労を嘗められたことと拝察致します。(略) 御健在の御様子でこんなよろこばしいことはありません。今はどう云ふお仕事をしておいでですか。(略) 戦後の貴国の御様子を見に参りたいと云ふ気持は今でも持ってをります。貴下様方も、さうなりましたら是非もう一度日本へお越し下さるやう、そしてあゝ云ふ不愉快な空気ではなく、平和な空気の中で再会のよろこびを得たいと思っております。

どうかくれぐれも御体を御大切になさいますやう御健康を祈つてをります。何か日本のもので、書物その他必要なお品がございましたら御遠慮なく御申し越し下さいませ。

実際、その後、谷崎から本や食品が何回も周作人に送られてきた。また、鮑の手紙(1961年3月27日)は、「本日谷崎潤一郎様から壺井栄童話集、坪田謙童話集、濱田広介童話集、夕鶴、彦平ばなし、赤い鳥が、合わせて五冊届いた。後日郵送する。」⁴⁰と伝えてきている。これらの本はすべて周作人が購入を依頼したものである。ちなみに谷崎の代筆書簡以外に、松子夫人代書で谷崎署名の書簡(周作人の妻の死去への弔問)1通、松子夫人からの書簡(谷崎の死去の訃報)1通が、いま周作人の親族に保管されている。

谷崎の病気を気遣った周作人は、その死去の訃報に接し、鮑宛ての手紙(1965年8月7日)には「甚だ惜しいことだ。自分が明治時代の文学者の中で最も敬服しているのは、夏目漱石と森鷗外であり、大正時代以降の作家なら、谷崎君と永井荷風である。今はすべて故人となり、現代文学に関して読むことができないので知らない」⁴¹という哀切の念を記している。

周作人は鮑宛ての手紙に、日本文学において、「儒釈道に精通した」兼好法師から受けた影響がもっとも大きく、川柳集の『末摘花』からも影響を多く受けている(1965年6月9日)⁴²と書いたことがある。周作人も兼好同様に儒・釈・道に精通した人である。また、周作人の随筆「日本文化を談じるの書」(1936)、「日本文化を談じるの書 二」(1936)、「日本の再認識」(1942)などは彼の日本文化の教養を示している。谷崎は周作人について、「真に日本民族の長所を知つてあ

40 鮑耀明編『周作人と鮑耀明通信集』39頁。

41 鮑耀明編『周作人と鮑耀明通信集』404頁。

42 鮑耀明編『周作人と鮑耀明通信集』395-396頁。

てくれる第一人者であると思ふ」⁴³と評価している。

周作人は、日本軍占領期にも常に分別のある行動をしていた。中国人の文人として、巍然たる態度を以て臨んだ。決して中国の政治的イデオロギーに不当に扱われた「売国奴」ではなく、非常事態においても民族の正義感を放棄しなかったのである。

晩年の周作人は、1930年代から交流のあった中国文学者松枝茂夫、美術史家安藤更生とも書簡を交わし続けた。1953年9月の松枝茂夫からの周作人宛ての書簡には、彼が周作人に郵送した書籍（末摘花注釈2冊、アサヒグラフ、江戸好色本など）、周作人から送られた魯迅関係の本、革命小説『高玉宝』、胡風批判論集などに言及し、さらに、日本文学の翻訳について、「中国でどういうものが紹介され、又その翻訳が計画されているか大体のことをお教えねがいたく存じます。「訳文」にのった樋口一葉の二作の訳はまことに立派なもので感服にたえませんでした」、「日本文学の中国訳本をお送り下さる様おねがいます」という依頼も書いてあった。

周作人が受け取った日本知識人の手紙の中で、松枝茂夫からのものが最も多く、安藤更生からのものは20通以上ある。周作人の生活、文学、また日本占領期の奉職を指す「偽職」も言及されている。松枝茂夫の手紙から、周作人が江戸文学、戦後日本の文化に深い関心を持っていたことがわかる。1950年代以降、周作人は魯迅、自分自身に関する回想、わずかな小品を書くにとどまった。主にギリシアの古典文学及び日本文学の翻訳に専念した。翻訳は人民文学出版社からの依頼で、原稿料は毎月の生活費として支給された（最初は月に200元、後に400元）。ただし、文芸評論の執筆は許されなかった。創作の環境に恵まれていなかった。

周作人の人生は、清王朝、民国時代、日中戦争、毛沢東時代、文化大革命などを経験してきた。どんな屈辱を受けても、彼の持ち前のヒューマニズムによって、学問と人生に失望したことはなかった。新文化運動に頭角を現した新鋭の文芸批評家、散文芸術家の零落は、現代中国の学術思想の挫折そのものだと考えられよう。

5. 周作人旧居の訪問

2008年夏、オリンピックが開催された北京の空は、格別に明るかった。その夏、北京ではじめて周作人の孫周吉宜氏一家とお会いした。その際、吉宜氏の母親（周

43 谷崎潤一郎「冷静と幽閑——周作人氏の印象」、方紀生編『周作人先生のこと』26頁。

作人の息子嫁)は、文化大革命の時に紅衛兵からリンチを受けた周作人の様子について涙ぐみながら語ってくれた。吉宜氏の三姉妹も挨拶してくれ、一番上の姉は、周作人旧居の北京新街口八道湾胡同十一号の地図を書いてくれた。

八道湾に近づいて、道端で老婦人に周作人のことを尋ねてみたら、「あの老人のことか、覚えているわ。普段はよく一人で何かを持って郵便局に行く様子を見かけた」と教えてくれた。旧居の前で、ある中年男性に出会い、周作人の様子を尋ねてみたが、彼は「周作人？ 知らないなあ」と頭を振ったが、しばらくすると、「もしかしてあの漢奸か、彼のことなら覚えているよ」と、文革の時のことを詳しく教えてくれた。「漢奸」とは、中国を裏切った人のことである。

「あの頃俺は小学生だったが、当時のことをよく覚えているよ。夏の日に紅衛兵がやってきて、あの漢奸を家から引きずり出して、大きな樹の下に立たせて、首にプラカードをかけさせた。そして、半分に割ったスイカを頭に被らせ、ベルトで殴ったりしたのさ。隣にその息子の嫁を立てて、同じく半分に割ったスイカを頭に被らせた。そうだね、ひどい時は一日何回も引きずり出した。僕らは紅衛兵がこの庭にやってくる度に、みんなではしゃぎながら見に行った」と話した。この男の口から「漢奸、漢奸」が連発されることが気になった。

その男に旧居を案内してもらい、部屋を一つ一つ見て回った。その部屋はお手伝いさんが住んでいた東部屋で、周作人が病気に苦しみながら、亡くなったのもその部屋であった。

旧居の敷地は広がったが、今は雑居家屋に変身し、中に三十数軒の簡易家屋が建てられ、百人ほどがそこに住んでいる。高く聳え立つ数本の槐樹が強い夏の日差しのもとで大きな影を落している。この旧居に起きたことはすべてこれらの槐樹に刻まれていることと思う。周作人は1919年から1967年5月6日までそこに住んでいた。先の男がふと思わぬことを口にした。「知っているかい？ こは間もなく取り壊されるんだ。全くひどい話だよ」

実は、北京市第三十五中学が八道湾近くに帰還することになり、新しい校舎を建てるために、周辺が取り壊されることになっている。八道湾胡同十一号もその範囲内だった。有識者や住民たちの反対で、辛うじて周作人旧居が新築の北京市第三十五中学の資料室に変身したという。広々としたモダンな第三十五中学校の敷地には、ゴルフ場や馬術部もあるそうだが、旧居の敷地にあった数本の大きな槐樹はどうなっているのだろうか。

北京の八道湾胡同十一号は、1910年代から日中文化人の交流を結ぶところであった。戦前から周作人との交流のある日本の知識人は、北京を訪れば、みな

ここで周作人と面会したという。その「旧居」は今や消えてしまった。以下は、文革中の日記を抜粋する。

1966年7月31日：この一ヶ月は何もできなかった。しかも苦しみは甚だ、毎日苦しみ憂い、心が痛み、心地よい時は一刻もなく、畢生の中で最も苦しい境地だ。

1966年8月4日：劉満進が来て、運動が始まり、内外に書籍購入が中止され、本はごみ同様に売られると話す。

1966年8月23日（絶筆）：『毛沢東、文芸を論ずる』を読む。⁴⁴

1967年5月6日、周作人は紅衛兵のベルトによる無数の傷痕を体に残したままこの世を去った。享年82歳。周作人は「知情合一」（知識と感情との融合）という学問観と人生観をもち、「中庸」思想を尊び、晩年、自分の信念を曲げず、芸術家としての良心を失うことはなかった。台湾の研究者・梁容若女史は、「知堂は聖賢に似ている人であり、トルストイ、ガンジーのような一流の人で、地獄に入り人を救うようなタイプである。ただ今の時代から遠ざかってしまい、彼を理解することは決して容易ではない」⁴⁵と書いたことがある。

小文で取り上げた周作人と日本の知識人との往復書簡は、日中間の学術思想の交流を示す貴重な史料である。1915年に創刊された『新青年』は、新文化運動の原点であり、また新文学の始まりでもある。新文化運動の精神の一つは学問の独立と自由である。不幸な日中戦争のはざまに過酷な運命を体現した周作人の思想と行為を客観的に理解するには、彼の作品、日記だけではなく、日中往復書簡を参考にすることは重要である。これらの書簡を通して、周作人がいかに日中の相互理解に心血を注いだのかがわかり、ここから周作人の芸術、学問に対する正当な評価が得られることを期待している。

44 鮑耀明編『周作人与鮑耀明通信集』448-449頁。

45 鮑耀明編『周作人与鮑耀明通信集』3頁。

21 周作人研究の現在

——『周作人年譜』の日記改竄をめぐる——

顧 偉良

1. 問題提起

中国の思想家胡適¹は、中国の思想史において、史料が不完全か、または信用が置けないため、論評の困難さが最も大きな問題の一つだ、と繰り返し指摘している²。この問題は思想史だけでなく、歴史や文学においても同然である。

驚くことに中国国内では、周作人の年譜に掲載された日記の内容を改ざんしている。その内容は、実は、周作人（1885-1967）が、日本軍の北京占領期に北京大学文学院長に就き、各方面からの要請により、華北政務委員会教育督辦（文部大臣、1940年12月～1943年2月）に就任したことに関する重大な歴史的事実である。

周作人は、その就任により、後に「対日協力」の罪で投獄された。毛沢東時代に「漢奸」と見なされ、公民権まで剥奪された。「文化大革命」（1966～1976年）の渦中で悲惨な死を遂げる。その後、再評価され、1990年代以降、中国では自編作品集が300種以上刊行されている。

日本軍占領期、華北政務委員会教育督辦に就任した彼は、思想上に超然とした孤独者であり、中国のほとんどの知識人と異なる存在である。毛沢東時代は、排斥されたものの、ルネサンスの文化精神を受け継ぎ、ギリシア神話と文学、日本古典文学と近代文学の翻訳に専念し、主流思潮に追随せず、一貫して独自性を保った。毀誉褒貶に動じず、名利名誉を気にかけない人でもある。芳名を後世に伝えることを重んじる中国では、異色の存在である。近代中国の歴史的人物のなかで周作人ほど、著しく異なる理解と評価をうけた人は他にないだろう。

毛沢東時代に政治的美化による魯迅の偶像化が氾濫する反面、周作人に関しては、あまりにも寂しいものだった。中国における従来の周作人研究は、適切な評価が欠如している。資料が乏しいため、現在出版された数種類の伝記や周作人の年譜には、誤りが多く見られる。一部分は、作品の引用に費やされて、著者の批評精神があまり見られない。

1 胡適（1891-1962）、清国第一回目の米国公費留学生派遣、コーネル大学で農学を学び、後にコロンビア大学へ転学、デューイに学ぶ。啓蒙思想家、北京大学学長、駐米大使、中央研究院院長などを歴任。

2 『胡適全集』第5巻、安徽教育出版社、2003年、203頁。

中国国内では、周作人に関する文章は多く、彼の評価をめぐって激しい落差が見られる。つまり、周作人の学問に対して肯定的だが、彼の人格に対して否定的である。現在、周作人研究の最大問題は、(1) 作品以外の資料の不足、(2) 既存資料としての日記に対する改ざんである。その改ざんは、編集者のイデオロギーを反映し、客観性と学術性の欠如を意味する。本稿では、『周作人年譜』において改ざんされた日記の部分と、日記の原文とを照合し、その実態を明らかにし、周作人研究における幾つかの問題を検証する。

2. 『周作人年譜』（初版・増訂）の日記改ざん

「文化大革命」の1976年の終息後、周作人研究は遅ればせながら始まった。1980年代に注目すべき数種類の研究資料が出版された。すなわち『周作人年譜』（張菊香主編、南開大学出版社、1985年）、『周作人研究資料』上・下（張菊香・張鉄榮編、天津人民出版社、1986年）、のちに増訂本『周作人年譜1885-1967』（張菊香・張鉄榮編、天津人民出版社、2000年）の刊行である。また周作人の伝記、評論も数多く出版された。

以上の『年譜』所収の周作人の日記が改ざんされているのである。日記には、周作人の督辦職務が解かれた後の活動も記録されているが、『年譜』では、それらの記録はすべて削除されている。これらの問題は偶然に見つかったものである。『年譜』と日記原文を照合する条件が整っていないため、ほかにどのような改ざんと削除があるかは現時点で不明である。

それから30年後の2014年に、新しい研究書『周作人研究資料』上・下（楊楊、徐從輝編、天津人民出版社）と黄開發『周作人研究歴史与現状』（遼寧人民出版社、2015年）が現れた。後者は、30年来の周作人研究史を詳細に紹介し、周作人の「歴史問題」（日本軍への協力を意味）はすでに結論を出され、解決していると述べている³。しかし、周作人の膨大な日記と書簡は未だに刊行されていないため、そこから重要な事実の発見や確認ができるかもしれないのに、そのような結論を出すのは時期尚早ではないかと思う。

改ざんとは、1939年1月12日付の原日記の内容を故意と歪曲したことである。まず、周作人親族が提供してくれた日記原文をみてみよう。

(1939年1月12日)：下午收北大聘書仍是關於圖書館事而事實上不能去當函

3 『周作人研究歴史与現状』第六章参照。

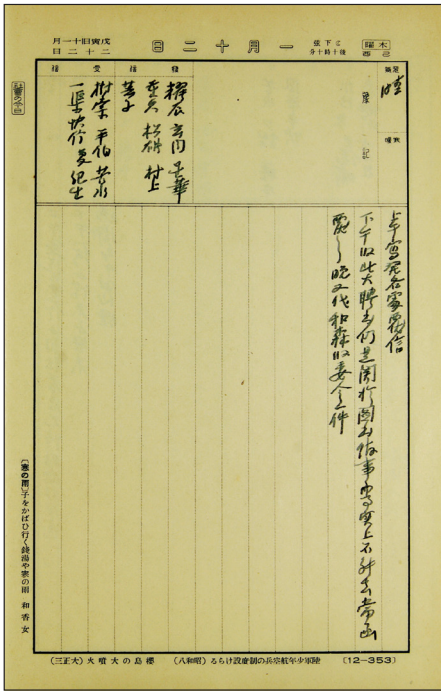


図1 周作人日記より（周作人親族より提供）

る事で、事実上、成らざるを得なかった。」と記している。これは周作人の偽職就任の発端である。）

上記の同じ編者の『周作人研究資料』も、

1939年1月12日、彼は偽北京大学より図書館館長の辞令を受け取った。彼は当日の日記に「午後、北京大学より図書館館長の辞令を受け取り、事実上、成らざるを得なかった。」と記している。⁵

と改ざんを繰り返している。

『年譜』の編者は、改ざん部分の前後に文を付け加えた。つまり、読者にまず前の文を読ませてから改ざんの内容を提示し、さらに後ろの文をもって納得させ

4 『周作人年譜』411頁。

5 『周作人研究資料』上、136頁。

覆之

（午後、北京大学より招聘状を受け取り、図書館に関する事だが、事実、行くべからず之を返信した）

しかし『年譜』では

一月十二日：收伪北京大学任命为北京大学图书馆馆长，即复函接受这一任命，并在当日日记中记：“下午收北大聘书，仍是关于图书馆事，而事实上不能不当。”这是周作人接任伪职的起始。⁴

（偽北京大学より北京大学図書館館長任命書を受け取り、直ちにこの任命を受け入れる。彼は当日の日記に「午後北京大学から任命書を受け取り、やはり図書館に関する

ようという工夫を施している。同じ編者の増訂本『周作人年譜1885-1967』の記載もほぼ同じだが、ただ「任命」を「招聘」（「即复函接受这一聘任」）に変更しただけである⁶。このような巧妙な工夫は驚くべきことである。実際、周作人の日記原文は判読できないほどの難解な筆跡ではなく、無意識の誤読や誤解ではないことが明らかである。

編者の増訂本「編者説明」は次のように述べている。

（略）1985年版の『周作人年譜』は少なからぬ遺漏、また妥当でない箇所ならびに誤りがあった。数十年来、我が国の学術界において周作人に関する研究成果が多数現れ、また周作人と付き合いのある方は多くの資料やそれに関する情報を提供してくれた。そこで、元年譜の土台の上に『周作人年譜』に対する訂正、増訂を加えて、多くの読者にもっと豊富な資料、編年体としての周作人資料——増訂本『周作人年譜』——を提供することができた。

さらに「編者説明」の末尾に、「本書は、1885年から1948年に至る年譜内容に関して、張菊香の編集。1949年から1967年までの年譜内容に関して、張鉄栄の編集」⁷と記している。つまり、増訂本は初版本のミスや誤りを修正しているにもかかわらず、改ざんされた日記の内容はそのまま残っている。それについての言及は全くない。

周作人は書簡を大切にし、日記をつける習慣を生涯もち続けた。文化大革命の時、紅衛兵の家宅捜査に見舞われて、すべての日記と書簡が持ち去られたが、20年後、持ち去られた日記と書簡が北京魯迅博物館に保管されているのを知った遺族は返還を再三要求して、1988年ようやく手元に取り戻したという経緯がある。したがって、『年譜』の編者は、周作人の日記と書簡を保管した北京魯迅博物館の許可がなければ、入手は不可能だったはずである。また日記の改ざんも、編者以外は知ることさえ簡単ではない。

「年譜」の編纂を行う場合、緻密な文献学の方法が必要である。だが、この極めて重要な部分に対する改ざんを含む『周作人年譜』は、中国で周作人に関する唯一の権威的資料として利用されている。周作人研究における学術的公平性の欠如が露呈している。この問題について、年譜編集者と日記保管者の北京魯迅博物館は、社会に対して説明責任を果たす義務がある。それは故人と読者に示すべき

6 増訂本『周作人年譜1885-1967』568頁。

7 増訂本『周作人年譜1885-1967』2頁。

敬意でもある。

『周作人年譜』刊行以来、既に32年間経っている。日記改ざんが学術研究に与えた悪影響は計り知れない。この歴史偽造によって、周作人の「日本侵略への協力」という罪を不動のものにしてしまっている。

3. 周作人年譜に関する書評

年譜の修訂は、年代考証を含む厳密な文献学的方法と系譜学的方法により行う必要がある。微細なものでも、真実を漏らさないように細心の注意を払うべきである。また編者の独立した思考も欠かせないものである。すぐれた伝記や年譜は、一種の思想批評でもあるが、このような作品は中国国内ではあまり見られない。日記改ざんを含む『周作人年譜』は、歴史の検証に耐え得るものだろうか。

増訂本『周作人年譜』刊行後、雑誌『博覧群書』に書評が掲載され、「『周作人年譜』は、学術的価値の高い著書であり、編者は緻密な著述に基づいている」と称賛され、また「たとえ周氏は悪人と思われていても、これは立派な著書であると認めざるを得ない」⁸と付け加えられている。もちろん、評者が日記の改ざんに気づくことはあり得ない。「善でなければ、即ち悪」という価値判断をもつこの評者は、編者と共通認識を持っているようである。中国国内の周作人に関する評価に、これと同じ問題がよく見られる。

周作人は随筆「大乘の啓蒙書」において資料編纂の重要性と学問の客観性を強調している⁹。胡適も随筆「廬山遊記」において、「私は人に教えるべきことがあるが、即ち、学問は平等であり、思想は一貫したものである。一つの小説は、学問において聖賢の伝記と同等の地位を持ち、一つの塔の真偽と孫文遺言の真偽とは、考慮に値する同等の価値を持つ。仏陀と耶蘇が果たして廬山に来たのかを疑問視する人こそ、夏禹は神なのか人間なのかを疑うことができる」と言い、さらに「疑うことにより信じる、考証することにより信じる、十分な証拠を持つことにより信じることができる」¹⁰という方法を提唱している。

また、蔡元培¹¹も胡適の『中国古代哲学史』のために書いた「序文」の中で、「一人の哲学者の生存時代を考証しなければ、彼の思想由来を知ることができない。

8 陳福康「再談『周作人年譜』的成就与不足」、『博覧群書』人民出版社、2001年、第4期、25-26頁。

9 『周作人自編文集 立春以前』河北教育出版社、2002年、101-106頁。

10 胡適「廬山遊記」『胡適全集』第3巻、安徽教育出版社、2003年、193-194頁。

11 蔡元培(1868-1940)、教育家。北京大学学長(1916-1927)、学術と思想自由の校風を確立した。

その遺著の真偽を区別できなければ、彼の實在の思想を提示することもできない。彼の用いる弁証的方法を知らなければ、彼に矛盾した議論があるかどうかを把握することもできない。」¹²と書いている。胡適や蔡元培は道徳的な基準ではなく、学問の公平性を重んじている。『年譜』の編者は先人によって確立された学問の伝統を無視したのである。

周作人評価はさらに様々な問題を抱えている。たとえば、魯迅死後の蔵書売却、魯迅の元妻朱安の生活費をめぐる中国国内の研究者は、周作人の罪を捏造している。『周作人年譜』（初版、増訂本）、『周作人資料研究』（張菊香・張鉄榮編）、許広平『魯迅回想録』（雑誌『新観察』1960年）、黄喬生『八道湾十一号』（三聯書店、2014年）などにおいては、事実と齟齬する内容が多く見られる。内山完造（旧上海内山書店店主）の書簡発見により、その真相がようやく判明した経緯がある。

2015年に発見された内山完造の周作人宛て書簡2通（1944年9月11日、10月18日）¹³は、内山が魯迅の新夫人許広平に頼まれて、周作人に魯迅の蔵書目録の整理を依頼する、と記している。それより前に許広平からの周作人宛ての書簡（1944年8月31日）も残っている¹⁴。一般の研究者は内山書簡の存在を知らず、許広平もその事実を公表していない。だが、内山書簡の発見により周作人の蒙った濡れ衣の真相がわかった。周作人研究は真実を反映する史料を土台にしなければならない。今後、多くの歴史的事実の発見によって、周作人研究の新しい局面が到来するだろうと思う。

4. 周作人研究の方法

歴史的人物の評価は難しい。何を語るかは批評の問題であるが、どのように語るかは方法の問題である。両方とも欠如した場合、周作人の正当な評価は期待できない。『周作人年譜』（1985）と『周作人研究資料』（1986）の刊行順から見れば、年譜がまずあるのは理に適う。しかし事実は違う。ここで初版本『周作人年譜』『後記』の説明文を見てみよう。

一九八一年末、我々は『中国現代文学史資料編』（乙）叢書の中の『周作人研究資料』の任務を受け持った。周作人研究資料を蒐集、編集する過程で、周作人のような複雑で、かつその影響力を無視できない作家に対して、単な

12 『胡適全集』第5巻、安徽教育出版社、2003年、192頁。

13 内山完造の周作人宛て書簡、周作人親族所蔵。

14 許広平の周作人宛て書簡は『致周作人』所収、河南大学出版社、2004年。

る批判や否定をするのではなく、まず詳細な資料を占有し、具体的に彼の功罪を分析し、是々非々をはっきりさせるべきだと痛感した。これを基礎に、彼の歩んだ道を分析、研究すれば、始めて説得力をもつ結果が得られるし、歴史の教訓に学ぶことができる。

年譜の編集に当たって、我々は歴史的唯物主義の原則に従って、周作人の経歴、活動、著述を引用し、彼の生活、政治活動、思想状況、文芸観、創作状況について説明する。これをもって読者に比較的信頼できる確実な資料を提供したいと思う。¹⁵

この「後記」を見るかぎり、年譜編纂の方針は不透明である。本来、膨大な史料を利用するにあたって年譜編纂のチームを立ち上げていれば、史料引用のミスを防ぐことができたはずである。

「資料を占有」という言葉も問題である。それが年譜編者の主な目的だったかも知れない。遺族からも指摘されたが、周作人日記と書簡に記載される多くの人物、重要な出来事は、『年譜』の増訂本に記入されていない。つまり、年譜編者が文献学や系譜学の方法を重要視していないことは明らかである。しかも史実を確認する機能がないまま、日記の重要事項に関わると、編者は軽々しく内容を改ざんしてしまう。実際、『年譜』の初版（1985年）と増訂版（2000年）のあいだに入手できるはずの周作人関係の文献にも触れていない。つまり、増訂版は旧版年譜の焼き直しに過ぎない。また、「是々非々」という言葉は年譜編集の方針のようだが、実際は守られていない。

中国国内の周作人に関する書物の中で、基本的文献さえも入手していないのに、気ままな意見を展開する者もあれば、周作人の人格を否定し、親族を攻撃する者も見受けられる¹⁶。周作人評価に現れたこの現象は、中国の学術史においても稀な事態である。伝統文化の精神を受け継いだはずの中国学界はこのようなことの発生は残念である。

思想家・胡適は「我々は共通の歴史観などを持ち合わせていない」¹⁷と述べたことがあるが、中国国内では、周作人評価に関する「共通認識」が重んじられて、異議申し立ての文章を發表することさえ困難である。また、周作人に関しては攻撃的なイデオロギーの言語のみ残っている場合がある。このような問題を予見し

15 張菊香主編『周作人年譜』「後記」696-697頁。

16 詳しくは黄喬生『八道湾十一号』（三聯書店、2014年）を参照。

17 胡頌平編著『胡適之先生年譜長編初稿』第5冊、台北聯濟出版、1984年、1933頁。

たように、周作人は「翻訳と批評」（1920年）で、「中国では各種の批評は人身攻撃に陥りやすく、これは極めて卑劣な行為であり、改めるべし」¹⁸と述べたことがある。

周作人は、20世紀の新文化運動を推進した文化人である。それは新しい思想が芽生え、周作人の最も活躍した時代でもある。新文化運動の主な精神は、「国故整理」と「新陳代謝」であり、科学的方法の確立を重要視し、伝統文化に果敢に挑戦するものである。彼は、日本文化を多角的に批評している。たとえば、「日本文化を談じるの書」（1936年）で、日本の文化と現実との格差についてこう語っている。「文化とは、その民族の最高表現である。往々にして一時的であり永遠ではなく、少数であり非全体である。故に文化の高尚さと現実の醜さとは一致していない。文化を研究するものは、こういった事情に対して為すすべがないと感じていながらも愉快だとは思わないだろう。例えば、源氏物語、または浮世絵を鑑賞できる者は、柳条溝¹⁹、満州国、蔵本失踪²⁰、華北自治²¹、密輸などを見たら、醜悪愚劣だと思うだろう。教養のある日本の芸術家も同様、そういった事は真善でもなく美でもないと思うだろう」²²という辛辣な批評を下した。このような文化と現実との隔たりは、中国の歴史についても言えるし、歴史人物の評価に関してもいえる。周作人評価において突出した問題は、批評の思想がまだ確立していないことである。これからは原始資料、批評言語、研究体系、根源的思想を重視し、実証を研究方法とし、学問の公平を求めるべきだろう。今後、周作人宛ての日本文化人の書簡の分析と新年譜の編纂は、周作人研究の体系の確立には重要な一環だと思う。

5. 周作人の残してくれた課題

1950年代以降、周作人は沈黙の時代に入り、一家は苦境に立たされた。周作人の息子（周豊一）も「右派」のレッテルを貼り付けられ、生活の資金が断たれた。現存の書簡で知る限り、松枝茂夫、安藤更生、その他に香港、シンガポールの友

18 『周作人自編文集 談虎集』河北教育出版社、2002年、22頁。

19 柳条溝事件は、1931年9月18日関東軍の謀略が起した、満州事変の発端となる鉄道爆破事件である。

20 蔵本失踪とは、1934年6月8日、駐南京日本総領事館書記生蔵本英昭の失踪をめぐって、中国人に拉致されたと日本側が中国に抗議して、第三艦隊旗艦出雲を南京近くまで遡上させた事件。

21 1935年5月以降日本軍による北支五省の「華北自治運動」を指す。「華北事変」とも言う。

22 「談日本文化書」『周作人自編文集 瓜豆集』河北教育出版社、2002年、53頁。

人（曹聚仁、羅孚、何冰然、胡士方、鮑耀明等）、国内の友人が、様々なルートを通じて周作人を援助した。一方、苦境に立たされた周作人自身は、彼よりもっと生活苦に陥った人たちを絶えず助けていた。

例えば、数多い知識人（黄萍蓀、周冠五、徐淦、張次溪、馮元亮、顧承運等）を経済的に援助し、また一般労働者をも助けた。もし1950年代以前の人数を入れれば、もっと多くなる。これらの国境を越えた国際的な生活援助、また自国人同士の助け合いは、感動的で豊かな人間性に満ち溢れる。今後、新たな周作人伝記、年譜長編を編纂する時、これらのことを記載すべきである。

周作人は1949年7月4日に政府要人に手紙を出して、歴史問題の解決を依頼したが、認められなかった²³。その後、公民権まで奪奪され（1953年12月）、「漢奸」文人と名指され、すべての評論活動を停止させられた。それ以前の著作の貸し出しも認められなかった。周作人は精神面で屈辱に耐えて、翻訳作業に没頭した。強靱な思想なしにはできないことであろう。一方、生活上の待遇は些か改善され、新著出版に関しては「周遐寿」の署名で許可された。また新聞の文章掲載も可能になり、海外への投稿も黙認されるようになった。

1956年に『中国青年報』に周作人の文章が発表された後、詩人・李白鳳氏は、周宛ての手紙に「中国青年報に発表された文章を既に拝見、文壇の重鎮が再起することで迎合する輩は群がってくるかも知れない」（1956年8月23日付）²⁴と書いたが、結局、李の望むような結果にはならなかった。毛沢東時代の周作人の境遇は極めて困難なものであった。周作人が晩年に経験したことのすべては、歴史的に見ると、近い者は孔融、李贄、遠い者ならば、ソクラテス、セネガーなどの哲人が経験したことであった。過去の業績が黙殺され、文人としての待遇は最低限なものしか与えられなかった。亡くなるまでに公民権が回復されることはなかった。

彼は精神面でどんな打撃を受けても、社会に対する関心は些かも変わることなく、こつこつと日本文化、または戦後文学の書籍を読み漁った。数百万字にのぼるギリシア神話・ギリシア古典文学、日本古典文学・近代文学の翻訳を行った。中国翻訳史上におけるその功績が埋没することはない。周作人は、かつて「新ギリシアと中国」の一文において、「ギリシア人はある特性を持っており、それは先祖から伝わってきたものである。即ち、生命を求める欲望である。一時余命を保つことではなく、美を求める健全な充実した生活のスタイルである」²⁵と書い

23 政府要人宛ての手紙は『周作人散文全集』第9巻（広西師範大学出版社、2009年）所収。

24 李白鳳の周作人宛書簡（周作人親族所蔵）。

25 『周作人自編文集 談虎集』河北教育出版社、2002年、312頁。

ている。この生の欲望と美への追求とギリシア神話・古典等の翻訳偉業は、晩年の旺盛な精神活動を保たせた。周作人の引用した「エリスの言葉」に「世界だけあるのは不十分で、伝統もなくはならない。また生命だけあるのも不十分で、活動がなくはならない」²⁶という言葉は彼の思想と精神を物語る。

「中国は過去において専制制度が敷かれて、文化界は麻痺状態に陥り、その間に存在するのは劣悪な生真面目さと俗悪な諧謔のみ」²⁷と鋭く指摘したことのある周作人は、晩年にただ1冊の回想録（『知堂回想録』上・下、香港三育図書文具公司、1970年）を書いたにすぎない。卓越な文芸批評家としての彼は消えてしまった。目下、中国国内の批評界では、周作人のような文芸批評家がいないため、寂しいものである。先駆者としての周作人は、後世に多くの課題を残してくれた。

最後に、再び思想家・胡適の語った言葉を引用しておく。「文化史研究者の主な仕事は、やはり無数の細かな問題の中から緻密な解答を得るしかない。文化史の完成は、このような緻密な作業の努力によるよりほかはない」²⁸という言葉は、周作人研究にとって重要な指針となる。日中戦争のはざままで過酷な運命を体験した周作人の思想行為を理解するのは容易なことではない。松枝茂夫、飯倉照平、木山英雄は鼎談の中で、日中戦争期の周作人について語りながらも、周作人の思想と中国思想上の問題との関連性に特に関心を示さなかったようである²⁹。これは周作人研究においてもよく見られることである。多くの人は傍観者の目でその問題を見ているだけである。周作人の中国文学への貢献、日中文化の交流への功績を客観的に研究、評価することは、文化史の完成にとっては不可欠なことである。

26 『周作人自編文集 雨天的書』河北教育出版社、2002年、89頁。

27 「餅齋の尺牘」（1945）、『周作人自編文集 過去的工作』河北教育出版社、2002年、65頁。

28 胡頌平編『胡適之先生年譜長編初稿』第5冊、台北聯濟出版、1984年、1933頁。

29 松枝茂夫、飯倉照平、木山英雄「〈聞書〉紹興、魯迅、そして周作人」、『松枝茂夫文集』第2巻、研文出版、1999年、252-276頁。

22 中日国交正常化以来の日本研究の概要

姜 龍 範

はじめに

1949年の新中国成立から1972年の中日両国国交正常化まで、中国は日本研究を行っていたが、主に政府の政策のためであり、学術研究は極めて限られていた。1972年の国交正常化以来、特に改革開放政策の実施（1978年）以来、中国の日本研究は盛んに発展してきた。その間、国際情勢や中日各自の国力に劇的な変化があり、学術研究に大きな影響を与えたといえよう。本稿は1972年以來の、中国の日本研究の概況を述べ、いままでやり逃げられた成果と不足を分析する。次世代の日本研究に示唆を与えれば幸いである。

1. 中国における日本研究の時代区分

中国の国際関係学を含む社会科学の研究は、時代と国際情勢に大きく左右される。日本研究も例外ではない。中国の日本研究は三段階に分けられよう。第一段階は1972年から1980年代末まで。中日関係のハネムーンともいえるこの期間、日本研究の機関が相次いで設立され、大量な論文が刊行された。学術論文検索サイト「中国知網」に「日本」というキーワードを入力すると、1989年12月31日までの検索結果は96,334の論文となる¹。極めて少ない蓄積から始まった日本研究を思えば、この時期の中国の日本研究が「爆発的」な発展といえよう。

第二段階は1990年代である。この期間は、「中国知網」で153980の論文があり、第一段階の約1.5倍である。1990年代は、日米関係が「漂流状態」に陥るが、一方で、中日関係も良くなったり、悪くなったりしていた。中日関係の迷路状態を前に、中国の日本研究も方向を模索していた。

第三段階は21世紀から2016年までである。2000年1月1日から2016年5月27日現在まで、「中国知網」に「日本」に関する論文数は470495となる。第二段階の3倍以上で、過去の総数を遥かに超えている。研究成果が劇的に拡大したのは、中日関係が良好だからではない。21世紀に入ると、「政冷経熱」（政治関係が冷え

1 中国知網のデータベースは、1979年1月1日から検索できる。

込み、経済交流が盛ん) という状態になり²、一時改善の様子が現れたが、2010年の釣魚島(日本名:尖閣島)における中国漁船の衝突事件後、両国関係がいっそう悪化し、「政冷経涼」が持続した。21世紀の最初の16年間の大半は、中日関係が良くないといえよう。これを背景に中国の日本研究の成果が大幅増えてきたのである。

2. 研究者の構造や変化

2008年、中華日本学会、南開大学日本研究院、日本国際交流基金により、第3回「中国の日本研究」調査を行った。2016年現在まですでに8年経ったが、全面調査の困難度を考えれば、依然として参考価値のある調査結果があったといえる。

2009年4月まで、中国の日本研究機関は100か所で、研究者は1040人いる³。1996年の第二回調査と比べ、研究機関数と人数もやや減少した。一方、日本研究者の規模は比較的に安定しているという印象も与えられた。

2.1 研究機関の分布

所属研究機関を分類すれば、中国の日本研究者は4種類に分けられる。中国共産党と政府の日本研究機関、中国社会科学院と地方の社会科学研究院の日本研究機関、大学の日本研究センター、マスメディア機構の日本研究部門である。

そのうち、中国共産党と政府の日本研究機関に所属する人は10%、中国社会科学院と地方の社会科学研究院に所属する人は10%で、マスメディア機構の日本研究部門に所属する人は10%で、残りの70%は大学に所属する。ただ、大学の日本研究者で、学術研究に専念しているのは100人未満である。

表1によると、学科別で計

表1 中国の日本研究者の学科別分布

順番	学 科	比率
1	日本語学	43%
2	日本の歴史	18%
3	日本の経済	14%
4	日本の政治・国際関係	12%
5	日本の哲学と思想	5%
6	日本の教育	2%
7	日本研究総合	2%
8	その他	4%

注：データソースは中華日本学会、南開大学日本研究院、日本国際交流基金編『中国の日本研究1997-2009』2010年5月。

2 劉江永『中国与日本：变化中的政冷経熱関係』人民出版社、2007年、1-10頁。

3 中華日本学会、南開大学日本研究院、日本国際交流基金編『中国の日本研究1997-2009』、2010年5月、4-5頁

算すれば、日本語学の人数が一番多く43%を占めている。第2位は日本の歴史で18%であり、第3位は日本の経済で14%である。日本の政治と国際関係学は12%で、日本の哲学と思想は5%で、日本の教育は2%である。

日本語学の研究者が多く占めているのは、20世紀末頃から中国の大学で日本語専門コースが大量に開設されたからである。

2.2 研究者の学歴

1980年代から2016年まで、中国の日本研究学者の人数に大きな変化はないが、学歴の構造が変わってきた。改革開放初期、研究者の大半が日本語科出身で、博士学位取得者は多くはなかった。1990年代から、日本研究は中国で盛んになるとともに、博士コースに進学する学者も増え、そのうち、中国本土で博士学位取得者もいれば、日本の大学で取得した人も沢山いる。

博士学位を持つことで、日本研究者の学歴構造がより合理的になるのは当然だが、もっと重要なのは、知識構造の改善により、研究成果の品質が向上していることである。残念なのは、中国の日本研究者には、欧米の大学で博士学位を取得する人があまりいないことである。その原因を把握したいものである。

もう一つ注目すべきなのは、中国の日本研究者の研究方法である。周知のとおり、世界の国際関係学は量的研究を重視するようになってきている。それは社会科学の研究方法の本流で、特に米国の若い世代の研究者は量的研究方法を使わなければ、トップレベルの学術刊行物に論文を採用されることはほとんど不可能である。その影響を受け、中国の国際関係学研究も量的研究方法を重視するようになったが、日本研究の場合、その意識はまだ弱いといわれる。

いずれにしても、学歴構造の改善はいいことであるが、世界的に発信しようとすれば、今後、欧米の学術刊行物に論文を発表し、社会科学の研究方法を積極的に利用することが必要となる。

3. 研究テーマの変化

中国の国際関係学者、日本研究者は、時代によって日本研究のテーマが異なることは当然だと思うだろう。例えば、1972年から1980年代末まで、日本研究のテーマは主に「経済」に集中している。第二段階の研究テーマは政治、外交、安全保障に集中し、第三段階はより重要、戦略的な課題に集中していると楊伯江氏

表2 各時期研究テーマの検索結果

	第一段階 (96344)	第二段階 (153980)	第三段階 (470495)
経済	10.7% (10326)	13.6% (20981)	16.1% (75887)
政治	1.7% (1661)	2.2% (3414)	4.1% (19170)
軍事	5.7% (5526)	1.1% (1752)	1.6% (7382)
文化	3% (2849)	4.4% (6785)	9.2% (43277)
社会	5.2% (5049)	5.9% (9154)	11.7% (55147)

の研究で結論づけられている⁴。この結論は、筆者を含め、中国のほとんどの国際関係学者の実感するところだろう。だが、データを見れば、この結論と違う結果が現れる。

前述の「日本」というキーワードに政治、経済、軍事、文化、社会の5つを加えて、そこから得た論文数の一番多いものをその時期の主な研究テーマと見てよい。重なるところも若干あるが、本研究の目的に大きな影響はないと考えられる。

表2のように、第一段階（1972～90年代末）では、日本の経済についての検索結果は10,326本となり、全体の10.7%を占め、第1位となる。確かに当時の改革開放政策のため、日本研究は主に経済面に集中していた時代背景、大方の人が実感したところである。

面白いことに第二段階でも、日本の経済の検索結果は全体の13.6%を占め、依然と第1位であった。一方、政治、軍事についての検索結果はそれぞれ2.2%と1.1%と、併せても最少数で、「第二段階の研究テーマは政治、外交、安全保障に集中している」という「実感」と遥かに離れている。第三段階も同じく、経済が一番関心を集めたテーマで、検索結果は全体の16.1%を占め、政治と軍事の検索結果は増えたが、比率は依然として少ない。このデータで、中国の日本研究は1978年以来、一貫して「経済」を中心に行われてきたことがわかる。

では、なぜ楊伯江氏の研究結果と違ったのだろうか。まず、楊伯江先生を代表とする研究者の考えに間違いはない。国際関係学者、中日関係研究の視点から見れば、確かに時代によって研究テーマが異なり、中日関係に大きく左右されてきたことは、実感だけではなく、実態でもある。

ただ、国際関係研究はイコール日本研究ではないので、研究成果の全体像から見れば、上記のデータもある程度で研究の実態を反映する。社会科学の世界

4 楊伯江「中国中日関係研究総述」『日本学刊』2015年1月、58-60頁。

において、刊行物の数量、採用の可能性など、さまざまな要素がある。中国では、経済学の学術刊行物が量的には圧倒的に多く、日本が経済大国のため、それに関する研究成果は当然他の分野より多い。

言語学の場合、日本語学習者は多いが、日本語関係の学術刊行物は量的に少なく、論文採用が比較的難しく、学術誌のレベルも経済学と比べて不利である。そのため、言語学出身の研究者は、日本の経済、政治、軍事を対象としなければ、日本文化、日本社会を研究することが多くなることは、以上のデータでわかる。

4. 課題と展望

以上、中日国交正常化以来の中国における日本研究の概況を振り返ってみた。数から見れば、過去38年間の研究成果は増え続け、特に両国の政治関係の変化に左右される様子は見られない。分野別から見れば、政治、外交、軍事など「高次元の政治」領域の研究成果は増えたが、全体的には経済、社会、文化などの分野の研究が大きく発展している。

なお、日本語教育は日本研究の礎とは言えなくても、日本研究者の基礎能力となり、不可欠なものであろう。また、日本研究の大物は基本的に日本語出身である。

では、次世代の日本研究にとって、努力すべき方向は何だろう。まずは、研究方法の更新であろう。社会科学の研究領域において、「科学的方法」を重視する傾向が世界的に見られる。重複研究、無用研究、低品質研究を避けるため、また若い研究者が激しい競争に勝つため、「科学的方法」を使うほうが効率的だと思う。ちなみに、「科学的方法」はイコール「量的研究」というわけではない。

次に、フィールドワークに基づく研究である。数十年前、日本語を勉強した中国人はほとんど日本に行くチャンスがなかったが、今の日本研究者はほとんど訪日経験を持っている。だが、日本に行っても、日本の図書館で文献調査をする人は多くいるが、現地でフィールドワークを行うことはまだ少ない。フィールドワークはすべての領域において必要というわけではないが、説得力のある研究成果を出すためには、有効な方法といえよう。

最後に、学際的研究の重要性はいうまでもないものである。次世代の日本研究者は、高度の日本語能力を持つ以外、世界への発信を目指すなら、英語で論文を書き、英語圏の学術誌で発表することは極めて重要である。また、国際関係学の

理論を用いて、基礎理論と政策研究を総合的に研究することが求められる⁵。また、政治、経済、法律、管理、環境などをまたがる学際的研究によって、異なる考えから刺激と啓発をうければ、日本研究は新たな道を拓いていけるだろう。

5 呂耀東「中国30年来の日本外交研究」『日本学刊』2015年増刊、53頁。

23 ベトナムにおける近年の俳句研究の動向

グエン・ヴァー・クイン・ニュー

はじめに

日越両国は最近、要人の相互訪問、経済協力、文化交流において順調に発展して、アジアで最も安定した友好関係にある。また日越関係は、官民レベルでますます緊密になってきている。2013年は、日越外交関係樹立40周年を記念して、「日越友好年」と定められた。2014年、日越関係は「アジアにおける平和と繁栄のための広範な戦略的パートナーシップ」というレベルに上がった。それを反映するように、両国では開催された多様な文化行事が成功裏に終わり、民間レベルの交流が大変活発に行われている。また、両国の政治・経済・文化・教育など様々な分野で緊密な関係が築かれてきている。友好の絆はますます緊密になり、文化交流を通して日本への理解が深まっている。豊かな歴史と伝統文化を持つ日本に対する研究が盛んになり、日本の言語文化と文学への関心が高まっている。

1. ベトナムにおける俳句研究の姿勢

1945年から1970年まで、ベトナムの詩人の何人かが、3行詩の短詩として初めて「俳句らしい」ものを作ったようだ。1971年初め、グエン・トゥオン・ミン氏が初めて日本の俳句をベトナム語で「和歌集」(1971)と「連歌集」(1972)に翻訳した。しかし、当時のベトナム人はこの新しい短詩にあまり魅力を感じなかった。

1980年ごろ、ドイモイ(革新)政策実施後、2000年に俳句が高校教科書に導入され、芭蕉の俳句を通して季語の特徴及び俳句の美意識が紹介された。

閑かさや岩にしみいる蟬の声 (松尾芭蕉)

Vắng lặng u trầm

thăm sâu vào đá

tiếng ve ngâm.

(高校1年生言語文学教科書)

1990年から、ベトナム人の文学研究者は、俳句に魅せられ、俳句を翻訳・出

版した。文学講師ニャット・チエウは日本の文学及び俳句についての研究書籍を多数出版した。たとえば、『芭蕉と俳句』（1994）、『日本の詩歌』（1998）、『日本の文学——基礎から1868年まで』（2003）、『3000の詩歌世界』（1994）などがある。これらの書籍は日本語の書籍からではなく、英語、中国語の書籍を参考に書いたものである。同氏の日本文学及び俳句に関する著書は、俳句の教育及び研究に大きく貢献した。

2000年代も、研究者たちは俳句の研究に力を入れ始め、俳句関係の書籍及び研究論文は多く見られるようになった。『俳句入門』（レー・ティエン・ズン著、2000）、『松尾芭蕉と奥の細道』（ヴィン・シン著、2001）があり、様々な研究誌において俳句関連の研究論文が掲載された。『日本俳句のいくつかの芸術特徴』（ハー・ヴァン・ルオン著、2002）、『芭蕉——グエン・チャイグエン・ズー、同調の詩歌』（ドアン・レー・ザン著、文学詩、2003）、『禅と俳句』（レー・ティ・タイン・タム著、2003）等である。しかし、この時代まで、俳句が一般の人々の関心を惹くことはなかった。

上記の書籍の中で『松尾芭蕉と奥の細道』（ヴィン・シン著、2001）だけが、芭蕉の句を日本語から直訳している。その翻訳の特徴は、3行の詩形の他、ベトナムの独特の形式「ルク・バット」（六・八詩¹）の2行で翻訳したという点である。例えば、芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」は「六・八詩」の2行で訳されている。

Ao xưa bóng rử trưa hè,
Nhái khua nước động, bốn bề tịch liêu!
(ベトナム語訳 ヴィン・シン)

「夏の午後の騒がしい蛙の声やその周りの静けさ」を鮮明に描写している。当時、このベトナム語訳は長すぎるとは言われていなかった（俳句についてまだ関心があまりなかったため）。それでも、ベトナム人の親しむ伝統的構成と韻律をもつ新しい詩の「俳句」を楽しむ機会を与えてくれたのである。

これらの書籍と論文を通して、日本文学の研究者達は俳句の美意識、特に物の哀れ、わび・さびに対する関心を高めていったものの、一般のベトナム人は短い詩形の俳句にあまり関心がなかった。近年、マイ・レイエン氏は『日本文学集』（勞

1 「六・八詩」とは、「六言」の句と「八言」の句が腰韻（句の途中で踏み韻）と脚韻（句末に同じ韻）を踏みながら交互に交代していく形式であり、このような複雑な韻を踏みながらメロディを紡ぎだしていくわけである。

働出版社、2010) の中で「松尾芭蕉の奥の細道」について書き、そして2011年に出版されたグエン・ナム・チャン著の『日本文学史総括』（教育出版社）では、俳句の歴史についても紹介している。

2. ベトナムにおける初の俳句コンテスト

2007年、在ホーチミン日本国総領事館は、ベトナムで初めて「日越俳句コンテスト」を開催した。応募俳句はベトナム語部門と日本語部門からなる。3か月の応募期間中、ベトナムの南部、中部、北部の各地方から、予想を超える約4千句もの応募があった。応募者たちは自分の俳句作品を提出しただけではなく、俳句に対する感想をも寄せてきた。「短い詩のため、作詞しやすい。文字はあまりないが表す意味が深くて面白い詩型」だというような感想が多くあった。

その後、2年ごとに俳句コンテストが定期的に催され、2015年に「第5回俳句コンテスト」となった。いままでの入賞作を紹介する。以下、特に注記のないかぎり、和訳は筆者による。

(1) 第1回俳句コンテスト (2007) の1位² :

〈日本語部門〉 チャン・ホン・トゥック・チャン
春巡り過ぎし日想う窓の外

〈ベトナム語部門〉 2位 (1位なし) グエン・テー・トォー
Con cá thờ
Bọt bong bóng vỡ
Mưa phùn
(魚の呼吸泡壊し小雨)

(2) 第2回俳句コンテスト (2009) 1位³ :

〈日本語部門〉 ダオ・ホー・ティ・フォン
梅の花微笑み始め春の風
〈ベトナム語部門〉 グエン・タイン・ガー
Xó chợ
Chiếc lon trống

2 在ホーチミン日本国総領事館、第1回日越俳句コンテスト冊子、2007年、21頁。

3 在ホーチミン日本国総領事館、第2回日越俳句コンテスト冊子、2009年、25頁。

Hạt mưa mồ côi
(市場の角空き缶孤児の雨)

(3) 第3回俳句コンテスト (2011) 1位⁴ :

〈日本語部門〉 マイ・ン・テイ・レー・チー
種を蒔く子供の夢に幸あれと

〈ベトナム語部門〉 トン・タット・トー

Quả mướp dài

Con ong vọt đến

Đâu người tình xưa?

(長い冬瓜ハチ来て昔の愛する人はどこ?)

(4) 第4回日越俳句コンテスト (2013) 1位⁵ :

〈日本語部門〉 ダン・チャン・バオ・カイン
雨降りに土地を耕す明日思う

〈ベトナム語部門〉 チャン・ドック・ヴィエット

Trên lá môn non

Giọt sương đọng

Vầng trăng tỷ hon

(タロイモの葉落ち露小さな月)

(5) 第5回日越俳句コンテスト (2015) 1位⁶

チャン・ズイ・クオン

Mộ bên đường

Cơn mưa phùn ướt

Sân khấu để non.

(道の墓霧雨の中虫奏で) (河村きくみ訳)

4 在ホーチミン日本国総領事館、第3回日越俳句コンテスト冊子、2012年、21、15頁。

5 在ホーチミン日本国総領事館、第4回日越俳句コンテスト冊子、2013年、16、36頁。

6 在ホーチミン日本国総領事館、第5回日越俳句コンテスト冊子、2015年、42頁。

この句に対して、ドアン・レー・ザン審査員は、「涼しい春の雨の中、コオロギが歌っている。生と死、草と雨、無常と永久の狭間で楽しげに歌い、ひっそりとお墓を自分の生涯のステージとする。新しい詩情であり、知らない世界を描き出しているように思えるが、実は我々の気づかぬうちに身の回りで起こっているもの」⁷とコメントした。

第5回の俳句コンテストは日本語の審査が困難という理由でベトナム語のみの募集となった。現在、ベトナムの日本語学習者は約4万7千人いるが、「俳句研究の場、俳句による日本語学習の場」としての日本語部門がなくなったことは、非常に残念である。

3. 俳句の普及に伴う研究動向

3.1. 学術的研究

俳句の普及を背景に、大学において俳句に関する学術研究が徐々に始められている。しかし、これまで俳句に関する修士学位論文、博士学位論文のテーマは二つしかないようである。2010年、ホーチミン市国家大学人文社会科学大学アジア学部のグエン・ティ・ラム・アイン氏は俳句に関する初の修士論文「俳句の美意識」を発表した。修士号取得後、アイン氏は俳句そのものの研究をしていないが、日本文学の美意識に関連する研究論文を発表している。

博士学位論文は、2013年にホーチミン市国家大学人文社会科学大学文学言語学部グエン・ヴァー・クイン・ニュー（筆者）がベトナムにおいて初の博士論文『俳句——発祥・発展の歴史及び詩形の特徴』（図1）を発表した。これは2015年にホーチミン市国家大学出版会から出版された。これはベトナム語の俳句関連書の中で、俳句の歴史（俳諧）から現在までの俳句の発展及び俳句言語・作詞ルール、俳句に見る日本の文化及び美意識を紹介した

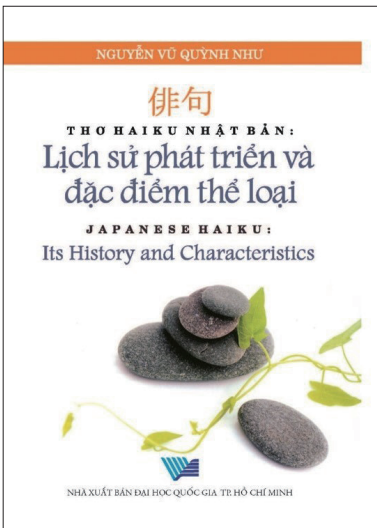


図1 『俳句』の表紙

7 在ホーチミン日本総領事館による和訳

唯一の書籍である。

また、ニューの多数の俳句関連の論文が様々な学術刊行物に掲載された。特に評価された論文は「俳句言語」『サイゴン大学文学・評論書』（2010）、「子供向け教育—俳句漫画」『サイゴン大学文学・評論書』（2011）、「正岡子規と革新俳句」『文学研究』（2010）、「ベトナムにおける俳句の受け入れに関わる課題」『東北アジア研究誌』（2012）、「第2世界大戦後年頭の俳句」『サイゴン大学文学・評論書』（2012）、「俳句から見た日本人の文明的なマナーの印象」『日本とベトナム19世紀末～20世紀初頭の文明開化書』（ベトナム教育出版社、2012）などである。

3.2. 研究論文

近年、日本の各財団、国際交流基金、諸大学との協力及び支援により、ベトナムでは、日本研究セミナーが定期的に行われ、日本研究が促進されている。南部のホーチミン市国家大学人文社会科学大学は、唯一の日本研究の拠点として、日本研究のシンポジウムが盛んに行われている。

ベトナムの俳句ブームに伴い、シンポジウムやセミナーにおいても俳句をテーマとする研究発表が増えている。芭蕉をはじめ、俳句の特徴、作句のルール、日本の文化から見る俳句等、多くの研究論文が発表されている。各シンポジウム、セミナーにおける主な俳句論文は以下の通りである。

- ① 2016年3月19日、ホーチミン市国家大学人文社会科学大学日本学部主催・国際交流基金後援セミナー「近世期のアジアにおけるベトナムと日本」
「江戸時代における日本俳人の松尾芭蕉の足旅」（グエン・ヴァー・クイン・ニュー）
- ② 2015年12月12日、ホーチミン市人文社会科学大学・麗澤大学共催の国際セミナー「日越文化——グローバルと発展」
「俳句における日本の「和」の文化」（グエン・ヴァー・クイン・ニュー）
- ③ 2015年8月23日、言語学学院主催の国際言語学セミナー
「俳句における余白」（グエン・ヴァー・クイン・ニュー）
- ④ 2013年12月20～24日、ホーチミン市国家大学人文社会科学大学言語文学学部・国際交流基金主催のシンポジウム「21世紀のグローバル化時代における日本とベトナムの文学研究」
「現代日本社会における俳句発展の傾向」（グエン・ヴァー・クイン・ニュー）
「俳句——文化の架け橋」（グエン・ティー・マイ・レイエン）

「俳句と六・八詩、五言絶句、ガザルの技法の比較研究」(グエン・ティー・マイ・レイエン)

- ⑤2011年11月8～9日、ホーチミン市国家大学人文社会科学大学日本学部主催・国際交流基金後援セミナー「日本とベトナムの「文明開化」の比較研究」
「俳句から見た日本人の文明的なマナーの印象」(グエン・ヴァー・クイン・ニュー)
- ⑥2011年12月6～7日、ホーチミン市国家大学人文社会科学大学言語文学部主催・国際交流基金後援セミナー「日本とベトナム文学——東アジアの視点から」
「川柳とベトナムの民謡における笑い」(ニャット・チエウ)
「百人一首における皇帝女子俳人」(チャン・ティー・チュン・トアン)
「ベトナムにおける俳句形式「五-七-五」の変形」(グエン・ヴァー・クイン・ニュー)
「俳句と六・八詩を考える」(グエン・ティー・タイン・スウアン)
「ベトナム語の俳句に見る日越文学交流」(グエン・コン・リー)
「ベトナムの禅の詩と日本中世俳句における詩形」(ファン・ティ・ホン)
- ⑦2010年3月23～24日、ホーチミン市人文社会科学大学言語文学部主催セミナー「日本と漢字文化圏諸国(ベトナム・中国・韓国)の文学における近代化(19世紀末から20世紀初まで)」
「正岡子規と現代俳句」(グエン・ヴァー・クイン・ニュー)
「台湾における俳句」(グエン・タイン・フォン)
「日本の新誌(短歌、俳句)」(ファム・スアン・グエン)

3.3. ベトナムの俳句クラブによる俳句研究増加

日越俳句コンテストを開催してから、俳句に関心を持つ者が増え、俳句はブームとなった。2007年にホーチミン市俳句クラブ、そして2009年にハノイの俳句クラブ、2015年には中南部のニャ・チャン俳句クラブが創立された。その後、他の地方、各大学でも俳句クラブが設立された。各俳句クラブでは、作句だけではなく、俳句への理解を深め、俳句研究も盛んになっている。

各俳句クラブは、会員が作句しながら、俳句の知識、感想を共有するため、配布用の年刊俳句冊子を発行している。また俳句研究等の短文が増えている。近年、この年刊俳句冊子に見られる俳句研究テーマの主要課題は下記のようなものである。

日本人の著名俳人：芭蕉、蕪村、子規、獺官、日本の女流俳人の俳句
俳句における美意識：禅、ものの哀れ、俳句のひとつのイメージ等
ベトナムにおける俳句の受容：ベトナム語の俳句名の考え、オープン俳句、改
新俳句、越俳句
ベトナム語の俳句：句形・季語の無視、音韻重視、国内化俳句、ベトナムの伝
統詩の中の俳句、ベトナムのイメージ
日本語俳句からベトナム語に訳する課題：越語の俳句は2行詩か3行詩か、
5-7-5句形導入必要、俳句の翻訳問題
俳句の国際化：世界で普及している俳句を紹介する。
日本現代の俳人：世界俳句協会の俳人の俳句を紹介する。
ベトナムの女流俳人について
俳句の生態

2015年までには、ホーチミン市俳句クラブ及びハノイの俳句クラブの年刊俳句冊子に投稿された俳句研究作文のテーマは様々である。日本の俳句についての研究テーマもあるが、ベトナム語で作句するための知識やテーマがより多く研究されている。「越詩における俳句」、「ことわざとカ・ゾウ（ベトナム民謡）の林から見慣れない花が咲く」、「俳句からの新日光」、「ベトナム人による作句」、「探求及び肯定中のベトナムの心の俳句」、「俳句の朗読と創作の幸せ」、「越俳句のシラバス研究」、「ベトナムへの俳句導入」、「俳句—3行なのか?」、「俳句、ベトナムの六・八の詩のリズムとベトナム語の俳句のリズム」、「越俳句を探す」、「俳句を作るベトナム人」、「俳句におけるベトナムの心」、「ベトナムの伝統詩の中の俳句」、「松尾芭蕉と香りの原理」、「俳句：詩形、言葉表現（形容詞なし）」、「日本古典俳句技法特徴」、「日本俳句を研究」、「川柳と俳句」等である。

4. 「質の高い成長」と今後の研究課題

グローバル化の進展に伴い、俳句は世界に普及し、ベトナムの俳句研究も充実されていくことを願っている。日本語学習者が急増しているベトナムにおいて、日本研究に関心を持つ人々にとって、日本文化・文学の研究を発展させるには、俳句の研究は不可欠である。ベトナムにおいて俳句の普及に伴って、俳句研究が増加していることは確かである。

俳句クラブの会員は俳句への興味・関心が非常に高く、俳句ブームの高揚に貢献している。また、日本の俳句に関する豊かな知識をもち、研究論文のレベルも

高い。ただ、ベトナム人の俳句研究者で、日本語で直接研究する人はまだ少ない。研究者のほとんどは、英語かフランス語を通して研究している。日本語能力のある俳句研究者が少ないのが現実である。

また、ベトナムでは、日本語文学、特に俳句に関する参考文献が不十分であり、俳句の教材、資料に触れることは未だ十分ではない。そのため、日本俳句を専攻するカリキュラムを持っている大学がほとんどない。このような状況の中で、日本語能力の限界、日本語の俳句集と研究資料に接することが困難なため、俳句の翻訳出版も少ない。紹介した数少ない出版物及び研究論文は俳句の概要を紹介するだけであり、今後、俳句を専門的に研究する書物の刊行が期待される。

俳句の知識を浅く広く有しているものの、俳句をよく知る知日家や日本研究者の形成にまで繋がっていない。また、俳句を含む文学作品の翻訳出版は量的にはまだまだ少ない。また、ベトナム語訳の場合は英語等の第三言語に依存しているのが現状である。今後は、重訳ではない直訳、著作権を適切に処理した出版が望ましい。

俳句の知識をより深めるために、日本人の俳句研究者、専門家と連携して研究を進めるべきであろう。日本からの官民連携による積極的で本格的な研究支援が不可欠である。それによって、ベトナムの俳句研究の発展に役立ち、日本研究全体の発展に貢献できるものと思われる。

参考資料

- グエン・ヴァー・クイン・ニュー『俳句——発祥・発展の歴史及び詩形の特徴』ホーチミン市国家大学出版社、2015年。
- ホーチミン市国家大学人文社会科学大学言語文学学部主催・国際交流基金後援シンポジウム「21世紀のグローバル化時代における日本とベトナム文学研究」2013年。
- ホーチミン市国家大学人文社会科学大学言語文学学部主催・国際交流基金後援シンポジウム「日本とベトナム文学——東アジアの視点から」2011年。
- ホーチミン市国家大学人文社会科学大学言語文学学部主催・国際交流基金後援シンポジウム「日本と漢字文化圏諸国（ベトナム・中国・韓国）の文学における近代化」2010年。
- 在ホーチミン日本国総領事館『日越俳句コンテストの冊子』2007、2009、2011、2013、2015年。
- ホーチミン市・ハノイ俳句クラブ『俳句冊子』（2013～2015年）
<http://www.hcmcgj.vn.emb-japan.go.jp/vn/thithohaiku2015.html>
<https://www.jpfg.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/vietnam.html>

24 インドにおける日本語教育の過去・現状・未来

P・A・ジョージ

はじめに

インド人の日本に対する興味・関心が深まってきたのは、日本の鎖国政策に終止符が打たれ、開国に向かった19世紀の後半から20世紀初期である。インドの日本語教育の歴史は浅いようだが、その道程を遡って見れば、今からおよそ90年前にインドで日本語講座が開講されたことがわかる。それは、アジア初のノーベル文学賞受賞者タゴールのおかげである。岡倉天心と友好関係を持っていたタゴールは自分の設立したヴィシュヴァ・バーラティ大学（タゴール大学）に1920年ごろ日本から日本語教師を招いて日本語教育を開始した。

岡倉天心とタゴールは、当時の欧米より経済成長や近代化が遅れたアジア全域の共存共栄を強調し、それを目指して協力し合うことを約束して共に行動を始めたのである。日本の明治以降の目覚ましい近代的発展に仰天したタゴールは、インド国民に「日本に見習え！」と呼びかけ、日本語や日本文化を紹介することによって自国民の啓発をはかろうと試みた。

しかし、残念なことに第二次世界大戦以前からのさまざまな世界規模の事変に伴い、世界事情が急変し、せっかく実現に移り出そうとしていたタゴールの夢は水の泡のように消えてしまった。もはやタゴール大学での日本語講座も継続性を失い、ついに放棄せざる得なくなった。それからの日本は次第に軍国主義に基づく領土拡張へ進み、一方、インドは宗主国イギリスからの独立を目指した独立運動に夢中で乗り出した。その結果、明治以降いったん互いに関心を持ち始めた日本とインドの両国は、次第に距離が開き、1950年代までの間、日本研究と日本語教育はインドで全く忘れられてしまった。

しかしインドは戦後の日本と早くも国交正常化をはかった国の一つであり、1952年に日印外交が樹立されている。本格的な日本研究と日本語教育が始まったのはその後である。1980年代になると、徐々に日印間の政治的・経済的・文化的交流がより密接になってきた。それに、1980年代前半に日本の大手自動車メーカーのスズキ株式会社が、インド首都圏のマルチ社と提携を結んで現地で小型自動車の生産を始め、大成功を収めた。この合弁会社の成功話に励まされて、多くの日本企業が次々とインド市場に進出した。それに伴って翻訳、通訳および

観光案内などの仕事が増え、日本語力のあるインド人に対する需要が急増した。それが過去に見られない日本語ブームを生み出すきっかけとなった。その結果、大都会だけではなく、地方都市にも日本語の学習者が増え、日本語学校が次々に新設されていった。

現在、インド人にとって、日本語は重要な外国語の一つで、学習者数が日々増え続けている。フランス語、ドイツ語、ロシア語、スペイン語などヨーロッパの主要言語および中国語はインド人の間では古くから人気があって大勢に学習されてきたが、実は、最近の統計によると、日本語が現在インドで入学応募者の数が三番目に多い外国語となっている。フランス語と中国語はそれぞれ一位と二位を占めている。その主な理由は、インド市場の開放と経済の自由化に伴う日印間の経済協力の強化、日本企業のインド市場への飛躍的な進出とITなど合弁会社の急増である。一方、日本のアニメや漫画など日本のソフト文化に興味持って日本語を習いたがるインド人の若者も最近現れ始めたが、欧米や豪州などと比べるとその数はまだ非常に少ない。

1. 多文化・多言語社会インド

インドにおける日本語教育の過去と現在について紹介する前に、まず参考のためにインド社会の複雑な構造について簡単に触れて置きたいと思う。

インドは世界でも類のない多様性に富む国で、古代から多民族、多言語、多宗教の共存共栄を重んじる国である。インド文化は、多様性と独自性を保ちながら、混合・統合を経て出来上がったものである。つまり、異質のよそ者を何の抵抗もなく「内」へ迎え入れることのできる一つの複合体だと言える。まず宗教についていえば、世界のすべての宗教の信者がインドに住んでいる。インド人口の80%を占めるヒンドゥー教は、宗教というよりもインド人の生き方・教養・習慣であると言った方がより適切である。寛大な心を持っているヒンドゥー教徒は基本的に「地球上の全ては一つの家族である」という人道主義的な思想と開放的な世界観・人間観を持ち、よそ者をいつでも迎え入れる用意がある。古代から異宗教が共存し、平和な国が維持されことに大きく貢献したのはヒンドゥー文化の寛大さに違いない。

民族について言えば、ヒマラヤ山脈の麓の地域や東北インドには主にモンゴル系が住み、北インド、西インドおよび中央インドには主にアーリア系の民族、南インドには主にドラビダ系民族が住んでいる。また、言葉も主にインド・ヨーロッパ語族とドラビダ語族と大きく二つに分かれる。それに、公用語が18語もあり、

それぞれの地方の言葉に基づき、国土は29の州と7つの連邦直轄領域に分かれている。全人口の約3割以上の人の公用語ヒンディー語（Hindi）は「インド連邦の共通公用語」に指定されており、英語は準公用語とみなされている。そのため、高等学校を卒業するまでにどこの学生も「母語」（自分の州の公用語）、「共通公用語」（ヒンディー語）、準公用語（英語）と三つの言語を習得しなければいけない。つまり、高等学校の教育を受けたインド人は、誰でも少なくとも三つ以上の公用語の運用能力を身につけているはずだ。インドの外国語教育、とりわけ最近大人気を呼んでいる日本語教育の普及について考えるとき、この事実を念頭に入れる必要があると思う。

2. インドの日本語教育——過去と現状

インドは大きい国で、人口は日本の10倍もある。だから、インドにおける日本研究と日本語教育の過去と現状を考えると、まず北インド、南インド、西インド、東インドと四つに分けて、各地方の公的機関と民間施設の日本語教育と日本研究がいかなるものかを調べたほうが便利でかつ分かりやすいと思う。ただ、ここですべてを取り上げて紹介することはできない。

まず、20世紀後半から行われてきた日本研究と日本語教育を簡単に説明し、各地方の日本語教育の概要に触れてから、日本語教育の現状を、ネルー大学およびデリー大学を事例に、簡単に説明させていただく。最後に、インドの日本語教育と日本研究を困難にする主な問題について簡単に記述したい。

前述のように、日本語教育および日本研究が本格的に動き出したのは日印外交樹立の1952年以降である。インド国防相が1948に設立した「外国語学校」(School of Foreign Languages) に1954年から公務員、外交官および軍人向けの日本語講座が開設された。それは独立インドにおける日本語教育の始まりだった。この講座は、1990年代前半に予算不足のためいったん中止されたが、1990後半に再開されている。それに次いで1955年に設立されたインド国際関係研究院 (Indian School of International Studies) は日本研究学科の博士課程の研究員を対象に日本語講座を開講した。同研究所は後にネルー大学に合併され、国際関係学院 (School of International Studies) として今も大きく活躍している。しかし、同大学院に日本研究学科が残っているものの、日本語講座だけは同大学の言語文学文化研究院 (School of Language, Literature and Culture Studies) に移された。

1957年10月29日に「日印文化交流協定」が結ばれ、インドの日本語教育に大きな励みを与え、インド人は政府の国費留学生として日本で日本学や日本語を学

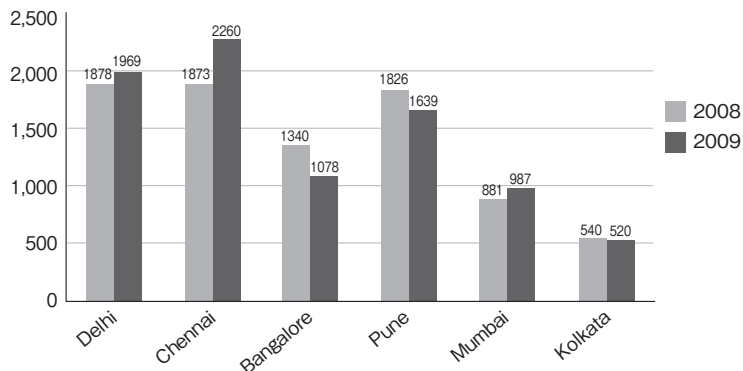
ぶ機会を与えられた。これらの先駆者が帰国してデリー大学、ネルー大学などの日本研究・日本語教育の担い手となった。一方、日本は1950年代後半、戦争による破壊から経済が回復して、1960年代の高度成長へ跳ね上がり、先進国並みの国際的影響力を発揮するようになり、世界における日本語の影響力と重要性が一気に高まった。

一方、日本政府も日本語を通して海外における日本理解を促進しようとさまざまな政策を実行した。その一環として、1958年にデリーとコルカタ（かつてのカルカッタ）の在外公館にパートタイムの日本語講座が開講された。コルカタ領事館内のコースは今も行われているが、デリーの日本大使館文化広報センターで教えたコースは数年前に文部科学省国費インド人留学生会（Mombusho Scholars Association of India: MOSAI）に運営権を譲った。それからデリー大学（1969年）、ネルー大学（1973年）などにも次々と日本語講座が開設された。

1980年代までの日本語教育・日本研究は首都デリーを中心に行われていた。もちろん、東インドのコルカタやヴィシシュヴァ・バーラティ大学、西インドのプーナ大学なども以前から日本語教育を行っていたが、いずれもパートタイムのコースであった。日本語教育は、次第に南インドの大都会、チェンナイ（かつてのマドラス）、ベンガロール（かつてのバンガロール）、ハイデラバード、西インドのグジャラート州などへも広がり、21世紀に入ってから、これらの大都会においてより活発に行われるようになった。地方でも日本語講座が開設されることになった。それに、2006年にインドの中等教育中央委員会（Central Board of Secondary Education: CBSE）の傘下にある学校では、日本語が第三言語として選択科目に指定され、第6学年から日本語を選択できるようになった。現在、首都圏付近約50以上の学校が日本語を教えているし、地方のいくつかの学校も教え始めているようだが、その統計はまだ不確定なため、実態はまだはっきりつかめていない。

以前インドでは、外国語の学習は「女性が趣味としてやるものだ」とか「頭脳の鈍い者が、他に選択肢がないからやるものだ」とか一般に軽視されていた。しかし、最近、外国語さえ知っていればいい仕事に就けると悟ったインド人の学生や失業で悩む若者たちは、日本語講座や他の外国語講座に応募する傾向を見せている。特に日本語の場合、年々応募者の数が各教育機関の定員数を10倍も20倍も上回るほど増えている。インド各地域で毎年実施されている日本語能力検定試験の受験者の数の推移を見てもこのことが分かる。最近の全国の統計はまだ公表されていないが、2009年度の能力試験受験者数を図1に示す。

図1 日本語能力受験者数（出典：2009年度国際交流基金調査）



下記の表1は、首都圏地区の過去4年間の日本語能力検定試験受験者数をまとめたもの。現在、日本語検定試験は、4月の第一日曜日と12月の第一日曜日と、年に2回実施されている。首都圏の受験者数の2012年から2015年までの増加率を見ると、年によってばらつきが多いこともあるが、平均して約22%の増加を示している。これは、外国語としては非常に高い比率であることを認めざるを得ない。

表1 首都圏（北インド）地区の日本語能力検定受験者数変移

（出典：MOSAI、ニューデリー）

年	7月（人）	12月（人）	合計（人）	前年比増加率（%）
2012	824	1094	1918	—
2013	1058	1269	2327	21
2014	1246	1347	2593	11
2015	1686	1821	3507	35

2013年に国際交流基金ニューデリーオフィスの行った調査によると、2012年現在インドで日本語を教えている教育機関は合計204か所で、日本語教師は約575人、総学習者数は約20,115人となる。2000年までに3万人の達成を目指す政府の計画をはるかに下回っていることは事実だ。にもかかわらず、年ごとにインドで日本語学習者数が上昇していることは非常に喜ばしいことである。機関別に学習者の割合を見ると、初等教育（第1学年から第8学年まで）では13.9%、中等

教育（第9学年から第12学年まで）では18.7%、高等教育（大学）では21.5%、学校以外の日本語教育機関では45.9%となっている（詳細は表2を参照）。

表2 日本語教育機関数、教師数及び学習者数

（出典：国際交流基金2012年度日本語教育機関調査）

機関数	教師数	学習者数				
		初等教育	中等教育	高等教育	学校教育以外	合計
204	575	2,796	3,759	4,318	9,242	20,115
		13.9%	18.7%	21.5%	45.9%	100%

インドで日本語教育を行っている主な機関は下記の通りである。国立・州立の場合、ネルー大学、デリー大学、英語・外国語大学、ベナレス・ヒンドゥー大学、タゴール大学、プーナ大学、ドゥーン大学、ボンディチェーリ大学、バンガロール大学、コチン大学などと高等教育の方が徐々に拡大している。初等・中等教育では、前述のCBSEの学校を挙げることができる。中等教育機関の日本語教育はこれからどんどん北上していこうと思われる。また、私立・民間の場合、MOSAI日本語学院、日本語センター、海外技術者研修協会（AOTS）の日本語講座、NPO「バラティア・ヴィディヤ・バヴァン」（Bhartiya Vidya Bhavan）の日本語講座などの人気が高く、インドの日本語教育において大きく貢献していると言える。

これからインド各地の日本語教育について簡単に紹介したいと思う。

北インドの日本語教育と日本研究

インドの首都ニューデリーや首都圏を含む北インド地区においては、ネルー大学、デリー大学などの公的機関の日本語教育が活発に行われている。約1500万人以上の人口を持つニューデリーは政治の中心地であるとともに主な商業都市の一つでもある。過去十数年の間首都圏では、合弁会社および技術提携の形で日本企業の進出が著しくなり、日本語関係の就職口も以前に比べて何十倍も増えた。その結果、日本研究者や日本語学習者数も増え続けている。前述のように、日印外交樹立の1952年以降、デリー大学、ネルー大学は率先して日本研究講座と日本語講座を開設し、インドの日本研究・日本語教育のメッカとなった。また、前記のMOSAI日本語学院、「バラティア・ヴィディヤ・バヴァン」、AOTS同窓会経営の日本語講座、日本語センター、ベナレス・ヒンドゥー大学、ドゥーン大学、

CBSEの学校など、小中規模の日本語教育機関や講座が新設されている。なかでも、デリー大学とネルー大学では学士課程から博士課程までのコースがある一方、ベナレス・ヒンドゥー大学及びドゥーン大学では学士課程までのコースを教えている。それ以外の教育機関では、パートタイム・コースや1年または2年を必要とするディプロマコースしか行われていない。

西インドの日本語教育

北インドに次いで日本語教育を積極的に行っているのは、プーナを含む西インド地区である。インド最大の商工業都市ムンバイ（かつてのボンベイ）や、その近くのプーナ市は昔から日本語教育の盛んなところとして知られているが、学習者数から見れば、ムンバイはプーナほど学習者数が多くない。ムンバイの日本語教育の歴史は1950年代後半までに遡るが、不思議なことに今のムンバイでは日本語教育はあまり活発に行われていない。インド最大の都会なのに、ムンバイの公的機関において日本語教育を全く行っていないのは皮肉なことだと言える。現在の日本語教育のほとんどは個人による小規模のもので、機関間の競争も少ないので、日本語教育のレベルは低い。

一方、プーナ市では最近、良質の日本語教育が行われている。プーナの日本語教育は1971年に印日協会の日本語講座開講から始まる。その後プーナ大学の外国語学部も1977年から非常勤講師による日本語講座を開設し、大人気を集めた。近年、非常勤講師たちは大学を次々と辞め、自ら日本語学校を設立して長年の教授経験を生かしている。現在、プーナでは民間教育機関の日本語教育が活発で、常時約1500人が日本語を学習していると言われている。ただし、プーナ大学以外に日本語を教える公的機関がないことはあまり喜ばしくない。しかもプーナ大学の日本語コースはパートタイムなので、日本語教育はある程度進行しているが、日本の文学、文化、地域研究の教育と研究は行われていない。そのため、日本学の高等教育を目指すプーナ大学の学生たちは日本語コースを修了後、ネルー大学の学士課程と修士課程に入学することがよくある。

南インドの日本語教育

北インドや西インドに比べれば、南インドの日本語教育の歴史は浅い。それは、1980年代まで日本語運用力をもつ人材を必要としなかったからである。つまり、その時までにはインドに進出した日本企業のほとんどが首都圏や北インドに集中していた。そして、1990年代以降、インドは徐々に経済自由化となり、特に自動

車会社、機会メーカー、精密機器製造会社、コンピュータや情報技術社など数多くの日本企業が日印合弁の形で南インドに進出し、活躍するようになった。IT事業が盛んになって、インドの「シリコンバレー」と呼ばれるカルナータカ州の首都ベンガロール市、精密機械、自動車、加工製品の中心地として栄えたタミール・ナード州の首都チェンナイ市、インド第2のIT産業地のテルンガナ州の首都ハイデラバード市に拠点を置く企業が日本企業との取引を増やし、日印合弁会社も急増した結果、これらの都市は日本語能力のある人材への需要も激増した。しかし、南インドでは日本語教育を提供する教育機関は、公的機関にしろ、民間学校にしろ、非常に少ないので、需要に応えかね、基礎的日本語さえない人が翻訳や通訳の仕事に携わるといった危険な状態が続いている。

各州政府は経済成長だけを念頭に置き、産業や経済の円滑な運営に必要な二次的な基盤を作ることを怠っている。日本語教育も同じ運命に遭っている。南インドでは正課として日本語コースをもつ大学はごく少ない。バンガロール大学、マドラス大学、コチン大学、ボンディチェーリ大学の日本語コースは未だにパートタイムで、あまり効果的とはいえない。例外なのはハイデラバード市の「英語・外国語大学 (English and Foreign Language University: EFLU) だけである。大学の前身は国立「英語・外国語中央研究所」(Central Institute of English and Foreign Languages) で、2001年に専任講師を2名募集して日本語コースを開講した。その後間もなく大学になると、日本語コースも学士課程に格上げされ、5、6年前に修士課程も開設された。専任助教授が5人おり、南インドの日本語教育の中心地として成長している。

南インドの日本語教育の一つの特徴は、一流企業が資格のある日本語教師を正社員として雇用して、自らのニーズに応じて社内集中日本語講座を開講し、効率的で会社の円滑な運営に役立つ日本語教育を行うことである。なかには日本から専任教師を採用している会社もある。また、大都会チェンナイでは、デリーと同じく AOTS の日本語講座や民間の日本語通信教育も行われている。南インドは将来IT企業がさらに栄える可能性をもつ地区なので、取引相手としての日本企業も急増し、日本語能力のある人材の需要も激増すると予測される。

東インドの日本語教育

前述した通り、インド最古の日本語講座は西ベンガル州のシャンティニケータンのヴィシュヴァ・バーラティ大学が1920年代に創設した日本語講座である。途中、一時的に中止されたパートタイムのコースは1954年に再開され、十数年

前に学士課程及び修士課程も新設され、東インドの日本語教育の中枢をなしている。この大学の付属高等学校にも履修科目の日本語をもち、インドの学校で初めて日本語を正課として教えたのである。東インドの大都会コルカタの日本領事館の日本語講座は前述したように1958年に開講されて、今も人気がある。300年以上の歴史を誇るこの大都会は近年、成長が停滞し、発展の見込みがあまりないので、ここへ進出する日本企業が少なく、日本語学習者の数は年々に減ってきているという。

3. デリー大学とネルー大学の日本研究と日本語教育

1969年10月に日印間に「インドにおける日本学奨励に関する覚書」が交わされた。それがきっかけで、国立大学のデリー大学が日本研究課程を新設し、学生が日本語原文の研究資料を読めることを目指す日本語講座も同時に開講した。一般人の学習者もこの講座に入れる。インドではじめて日本研究課程と日本語講座を同時にスタートした公的機関はこの大学である。デリー大学の日本語講座と日本研究課程は中国・日本研究学科 (Department of Chinese and Japanese Studies) の中に設置されている。日本研究は日本の経済、歴史、外交、政治などの修士課程 (MA) があり、その後1年か2年の哲学修士課程 (MPhil) があり、そして博士課程がある。日本語講座には2年間の修士課程 (MA in Japanese) および幾つかのディプロマ・コースがある。表3はデリー大学の日本研究と日本語教育の内容を示す。

表3 デリー大学の日本研究・日本語コース

フルタイム	パートタイム
	ディプロマ・コース (2年500時間)
インテンシブ・ディプロマ・コース (1年500時間)	上級ディプロマ・コース (1年)
上級インテンシブ・ディプロマ・コース (1年360時間)	
日本語修士課程 (MA in Japanese) (2年)	
日本研究哲学修士課程 (MPhil) (1年)	
日本研究博士課程 (PhD)	

デリー大学はかつて日本研究だけに主眼をおき、学生は日本語運用能力が義務づけられた。だが、約十数年前から日本語研究をも重視するようになり、言語学、日本文学、漢文と古典語などの学習が中心となる日本語修士課程が新設された。数年前、日本文学などの哲学修士課程 (MPhil) および博士課程 (PhD) が設置さ

れた。日本語修士課程を修了した学生は、同学部の日本地域研究科の研究生になるか、ネルー大学の日本語文学文化研究学科に研究生として入学する。現在、日本研究課程には十数人の履修者がいるが、日本語講座には、合計100名以上の学習者がいる。専任教官は、日本研究では3名、日本語講座では3名と、合わせて6人いる。教授、助教授および講師のいくつかのポストは空いているが、資格のある人が見つからず、採用に悩んでいるようだ。また、日本国際交流基金の「客員教授招聘援助計画」を利用して、日本から年に1名か2名の客員教授をデリー大学の日本研究・日本語学科に招聘している。客員教授たちはデリー大学の日本研究と日本語教育に大きく貢献している。

1969年に創立されたネルー大学は、インドの高等教育のメッカとして知られ、国立大学であるゆえ全国からだけではなく、海外からの学生も数多く集まる有名な大学院大学である。ネルー大学では学士課程があるのは外国語専攻だけである。言語文学文化研究学院では、英語と言語学の修士課程と博士課程、ヒンディー語、ウルドゥー語、タミール語、マラティ語、カンナダ語などインドの公用語の修士課程と博士課程、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、日本語、韓国語、アラブ語、ペルシア語など世界主要言語の学士課程、修士課程および博士課程が設けられている。デリー大学と違って、ネルー大学では、日本研究学科と日本語文学文化研究学科は、それぞれ国際関係学院と言語文学文化研究学院に所属している。

前述したように、ネルー大学の日本研究学科は、大学創立以前からインド国際関係研究所の中に作られたものが、1969年にネルー大学の国際関係学院の一学科として合併され、中国研究と朝鮮研究を含める東アジア研究センター (Centre for East Asian Studies) に改名され、再開されたものである。この日本地域研究科では、主に日本の地域研究が行われるが、今までおよそ20名以上の人が博士号を取得し、世間に出て、日印関係のさまざまな分野で活躍している。同センターでは今現在、3名の教官と訳15人の博士課程の研究生がいる。研究生たちは、学際的な視野をもつために、選択科目の初級日本語を学習しなければならないが、言語文学文化研究学院の日本語文学文化研究センターで行っている日本地域研究生向けの特別講座をも受けている。

ネルー大学の言語文学文化研究学院の一つの研究拠点である日本語文学文化研究センター (Centre for Japanese Studies) は日本研究学科とは違う大規模のセンターで、日本語、日本事情、翻訳と通訳 (和英・英和)、日本文学、日本社会と文化史、比較言語学などの教育や研究を活発に行っている。このセンターの日本語

講座は1973年に1年間のフルタイムのディプロマ・コースとしてスタートを切ったが、翌1974年に5年間の学士と修士課程を修了できる「5か年総合課程」に格上げされて人気を呼んだ。1982年に博士課程も新設された。学士課程から博士課程までの高等日本語教育や日本文学・文化の研究の場を提供するインド唯一の研究センターである。このセンターはすべてのコースで評判が高く、毎年応募者の数が定員数を何十倍も上回るだけでなく、スリランカ、ネパール、韓国など外国からの留学生のあいだでも人気を集めている。今までに約500名の学生が学士号を、約250名が修士号を獲得している。博士号については、今までは5人がそれぞれ日本の明治文学、児童文学、民謡文学、比較言語学の研究で博士号を取得している。現在、このセンターには、9名の専任教官と約140名の学習者がいる。四つの講師ポストは、適当な人材を数年前から採用できず、空いたままである。この大学は、デリー大学と同じく国立大学であるから、在籍者の数は常時ほぼ同じで、あまり変わらない。表4と表5はネルー大学の日本語文学文化研究学科と日本研究学科の履修内容を表したものである。

表4 ネルー大学日本語文学文化研究学科（言語文学文化研究学院）

日本語文学研究センター (3年コース)	学士課程（3年コース、週に20時間、約90名） 主なコース： 1. 仮名、漢字、テキスト 2. 会話、文法、作文 3. 翻訳・通訳 4. 日本文学史 5. 日本の文化史
修士課程 (2年コース)	主なコース 1. テキスト（新聞紙、小説、評論、エッセイ、文学作品など） 2. 翻訳・通訳 3. 現代日本語の用途（要約、手紙の書き方、論文の書き方、日本事情、ことわざ、慣用句、四次熟語、同音異義語、誤りやすい言葉など） 4. 日本の歴史（教養文化史） 5. 卒業論文（課題は学生に選択される）
博士課程（MPhil: 2年, PhD: 3年）	主なコース：比較言語学、日本文学、日本の社会や文化などに関するコースと前期博士論文と博士論文。

表5 ネルー大学国際関係学院日本地域研究学科の履修内容

博士課程 (MPhil: 2年, PhD: 3年)	主なコース:日本の地域研究関連科目 (日本経済、政治、外交、歴史など) 哲学修士論文 (MPhil Dissertation) 博士論文 (PhD Thesis)
---------------------------	---

4. インドの日本語教育の普及を妨げる要因

インドは多言語社会で、学校では英語を含め通常三つ以上（地方の公用語、共通公用語であるヒンディー語および準公用語の英語）の言語学習が義務づけられているため、学校教育において外国語を勉強するのはほぼ不可能である。履修科目として英語以外の外国語を教える学校は全国にわずか数百校しかない。それも主にフランス語、ドイツ語、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語、ペルシア語、アラビア語に限られている。ようやく2006年から日本語も導入された。

高等教育では、近年日本語教育と日本研究が注目されるようになったものの、予算不足や優先順位の変更のため、あまり進歩がなく、停滞状態が続いている。欧米やアジア諸国と違って、インド政府が外国語の専門家や地域研究の専門家を外交官、外交関係の仕事に任命することは滅多にないし、外交官向けの国家公務員試験では国連公用語以外の外国語が選択科目として認められていないので、苦勞して外国語を身につけても観光案内や通訳・翻訳といった平凡な仕事にしか就けない。そのため、学習者は一生をかけて日本語教育・日本研究などをやり続けようとしない。もし、インド政府が日本語能力のある人材を日印間の二国間関係の強化の媒介として利用する仕組みを作れば、意欲をもってより献身的に日本研究に取り組む人が出てくるかもしれない。

次に考えられる主な要因は、両国の民間交流の少なさと相手に対する互いの浅薄な知識から来る先入観などである。同じアジアの国なのに十数年前までの日印間の関係は単なる表面的なものに過ぎなかった。21世紀に入って、政治と経済、貿易や技術移転の分野で多少の進行が見られるものの、文化、文学などの面ではあまり関心がなく、互いに近くて遠い存在をまだ維持していると言っても過言ではない。インドにおける日本学の普及と、日本におけるインド学の普及は、この「無知」と「先入観」の壁を打ち砕かなければならない。これは、両国の国民が理解し合う決心と意欲をもって、共に努力しない限りなかなか実現できないと思う。

インド国内には日本の出版社の支社もなければ、日本の書籍の出版権をもつ現

地出版社もないから、日本研究と日本語教育に必要な資料、教材と教科書、辞書、研究書などの入手が非常に難しいのも一つの大きな問題である。物価の高い日本から書籍を購入しようと思っても、普通のインド人には経済的な負担が大きい。日本で出版された学術書をインドで入手できる仕組みを作ることが急務だと思われる。

インドにおける日本研究、とりわけ日本の文学、文化史、社会と教養、宗教、教育制度などの研究および地域研究は非常に遅れている。現在、ネルー大学とデリー大学で日本研究が行われているが、今後の日印関係を考えれば、それだけでは不十分だと思う。多くの公的教育機関に日本研究学科を新設して、日本研究を促進すべきだ。

日本語教育については、今のペースで進んでいけばよろしいと思う。日本語教育の最大問題は、共通教科書がないことである。現在、インド各地において日本語を教えるようになったが、統一された日本語教育シラバスも教科書もなく、教師の定期研修を行うまともな施設もない。それで、学習時間数が同じであっても、学習の場所・教育機関によって学習者の日本語能力に大きなバラツキが生じる。同一レベルのコースに同一の教材が使えるようなシラバス、教材などの統一化が必要であろう。国際交流基金は毎年教師研修を行っているが、それだけでは不十分で、どこかの国立大学で定期的に全国から日本語教師を呼び集めて研修させる仕組みが必要だと思われる。また、中等教育の場合も、学校の日本語教諭を養成するための教育学部を設ける必要がある。

おわりに

20世紀の終わりから始まった経済自由化と市場開放の結果、インド経済が大規模の成長を成し遂げ、多くの外国企業がインドに進出して投資するようになった。なかでも、日本企業は従来に比べて何倍も増えた。さらにIT革命とその世界的普及によってインドは情報技術主要国の一つに持ち上げられ、世界中から注目を浴びるようになり、日印の外交関係もより好ましい段階へ進んでいる。これからの日印関係はさらに密接になり、両国間の技術的、政治的、経済的、外交的關係が一層深まっていくに違いない。したがって、インドの日本語教育と日本研究も変わってゆく必要がある。将来に急増する人材需要を満足させるために、今から多くの日本語や日本学の専門家を育てなければならない。上記のように、2006年、中央中等教育委員会（CBSE）が履修単位が得られる第三言語として日本語を取り入れたことはその第一歩として評価できると思う。

現在、インドの日本語教育、日本学の普及に果たしている国際交流基金のニューデリー事務所の役割は特筆すべきである。毎年さまざまな行事や学会を主催・後援し、より多くのインド人に日本文化を紹介している傍ら、日本学の各分野で活躍している専門家に、彼らの研究に役立つような援助もいろいろな形で与えて奨励している。これからも国際交流基金のさらなる活躍が期待される。また、ニューデリーに事務局を持つインド日本語教師会（JALTAI）やプーナのプーナ日本語教師会（JALTAP）、コルカッタの日本語会話協会なども日本語教育の普及と日本文化の紹介に献身的に携わっている。また、MOSAI日本語学院のような非営利組織や日本語センターのような民間日本語教育機関などの貢献も無視できない。

中国研究や中国語教育に乗っ取られて、斜陽化を見せ始めた欧米の日本語教育と日本学と違って、インドの日本語教育と日本研究は、将来、主要な学習科目として発展していく可能性が非常に大きいと予測できる。両国民が互いに先入観の壁を超えて、より強い日印関係を築き上げ、同じアジア人だという認識を持ち、平和と繁栄を確保し、共存共栄のグローバル社会作りを目指して協力することがなによりも期待される。

参考文献

- ジョージ、プラット・アブラハム「インドにおける日本研究と日本語教育の現状と方向性」『福岡ユネスコ協会創立55年記念特集号』第39号（2003年）、54-67頁。
- 「アジア新時代の日印関係とインドにおける日本研究」、白幡洋三郎・劉建輝編『日本文化研究の過去・現在・未来——新たな地平を開くために』55-64頁、国際日本文化研究センター、2007年。
- 「インドにおける日本研究の現状：問題と将来性」『立命館言語文化研究』21巻3号（2010年）、95-104頁。
- George, P. A. "Status of Japanese Language Teaching in India: Current and Future Trends." In *India Japan: Blossoming of a New Understanding*, edited by Rajaram Panda and Yoo Fukazawa, pp. 96-132. New Delhi: Japan Foundation New Delhi and Lancer's Books, 2004.
- Sushila Narsimhan. "Japanese Studies in India: Major Trends and Challenges." In *Japanese Studies: Changing Global Profile*, edited by P. A. George, pp.183-215. New Delhi: Northern Book Centre, 2010.

IV 日本から世界へ、世界から日本へ

25 ヨーロッパにおける日本殉教者劇

——細川ガラシャについてのウィーン・イエズス会ドラマ——

新山カリツキ富美子

1. イエズス会ドラマ

イエズス会は1534年に、スペイン・バスク地方出身のイグナチウス・ロヨラ（1491-1556）とフランシスコ・ザビエル（1506-1552）らによって、宗教改革と対抗する内部革新と宣教と教育のために創立された修道会である。

イエズス会創立当初から教育と宣教を目的として、中等教育機関のギムナジウムを地域ごとに建設し、会の主旨に従った宣教師、特にアジア、アフリカへ向けての宣教師養成に力をいれていた。それ故、宣教に欠くことのできない、キリスト教の教理はもとより、それを促進させるより効果的な手立てとしてラテン語、音楽、ダンス、フェンシングなどが教えられ、それらをすべて取り入れたドラマを学期の終わり、または聖人の祝祭日に上演することが義務づけられていた。16世紀から18世紀まで各地のギムナジウムで上演された音楽劇の主題の多くは、宣教地での殉教に関するものであった。

1549年、ザビエルの来日によって、キリスト教が日本にもたらされ、当時の主だった大名に歓迎され、全国に広まった。いわゆる「キリシタン大名」は、九州では大村純忠、有馬晴信、天草鎮尚、大友宗麟、中央では高山右近、蒲生氏郷、小西行長と、黒田孝高、北では津軽信枚などがいた¹。イエズス会は、日本の宣教状況を詳細にローマの本部に報告しつづけた²。

1587年の豊臣秀吉のバテレン追放令に始まる280年余の弾圧によって、多くの宣教師と信徒が殉教した。そのうちの一人は、1600年に非業の死を遂げた細川ガラシャである。当時の日本では考えられないほど、ヨーロッパ人は日本の殉教者に強い関心を持っていた。現存する最古記録によれば、関ヶ原の戦いの7年後の1607年にイタリアの港町ジェノヴァで、小西行長を主題とする演劇「日本のアウグスト・津神殿」（Augustino Tucamidoni Re Giaponese）が上演されていた。

1678年、イエズス会司祭コルネリウス・ハザルトが、イエズス会のラテン語報告書をもとにドイツ語で著した『教会史 全世界に広まるカトリック教会の歴

1 フーベルト・チースリク『キリシタン史考』長崎：聖母の騎士社、1995年

2 松田毅一監訳『十六、七世紀イエズス会日本報告書』（第1期5巻、第2期3巻、第3期7巻）京都：同朋舎、1987～1998年。

史』の第1巻第3部「日本教会史」は日本の宣教と殉教を紹介している³。これに基づいてドイツ語圏の多くの作品が作られた。

ハプスブルク家の保護下にあるウィーンのイエズス会では、日本の殉教者を扱った劇は、ヨーロッパ各地で150以上の作品が作られ、500回以上の上演記録が、トーマス・インモース教授の研究をもとにした、私の現在までの調査研究によって確認されている。また書物としても出版されて、ハプスブルク帝国の人々に驚嘆させた。ただし、ウィーンの「イエズス会ドラマ」は、再演されないのが原則であった。

当時の神聖ローマ皇帝レオポルドI世（在位1658-1705）は、音楽に造詣が深く、教会音楽、オペラ歌曲、セレナーデ、オラトリオなどを作曲していた⁴。皇室ハプスブルク家の恒例祝日に上演されたドラマ（皇帝ドラマと称され、音楽を伴う）も度々キリシタン大名をテーマとした⁵。

ウィーンで上演されたドラマは10ほど現存している。そのうち、1614年の「豊後のシモンと妻、3人の子供たちの殉教」（*Quique Japoniae Martyres sub Canziua tyranno Ludvicus*）、1622年の「聖イグナチオとザビエル」（*Comedia de SS: Patribus Ignatio et Xaverio*）、1651年の「フランシスコ・ザビエル」（*Franz Xaverius*）がある。そして、1698年7月31日、イグナチウス・ロヨラの祝日と后妃エレオノーレの霊名「聖マグダレナ」の祝日（7月22日）を兼ねて、レオポルドI世とその家族、招待客の前で上演されたのが細川ガラシャの音楽劇「気丈な貴婦人」（*Mulier fortis*）である。ハプスブルク家の女性たちの手本とされた細川ガラシャは、舞台上だけではなく、印刷物も出版されて、ヨーロッパで広く知れ渡っていた。

オーストリアのみでなく、ドイツ、スイス、イギリス、ハンガリー、チェコ、ポーランドなどでもイエズス会演劇の上演は500回以上に及ぶ記録がある。ドイ

3 コルネリウス・ハザート（*Cornelius Hazart*, 1617-1690）はオランダ出身のイエズス会神父。『教会史 全世界に広まるカトリック教会の歴史（*Kirchen-Geschichte, das ist catholisches Christenthum durch die ganze Welt ausgebreitet*）』（*Wiener Universitätsdruckerei Leopold Voigt*, 1678）の第1巻第3部「日本教会史（*Japonischer Kirchen-Geschichten*）」（pp. 1-290）。オーストリア国立図書館に3冊の写本が存在する。

4 作品は、特別版・皇帝版（*Kaiserbände der DTÖ*）に皇帝の父フェルディナンドIII世の作品と共に収められている。ウィーンでは現在も日曜日のミサに彼のミサ曲がたまに演奏されている

5 1666年、皇帝レオポルドI世の最初の結婚の祝賀に、「*Honoris Ucondono*」と題する高山右近の信仰を語る音楽を伴う劇（バロックオペラ）が上演された記録が残っている。台本がオーストラリア国立図書館（ONBC Cod. 13241）に保管されている。

ツでは、カトリック教会が宗教改革後のプロテスタントの勢力を抑える必要性から、特にバイエルン地方のアイヒシュテート、インゴルシュタットで多くの作品が上演された。スイスでは、古くから民衆の野外劇の伝統があり、フランシスコ・ザビエルがチューリッヒ地方の守護聖人とされているので、日本の殉教者にも関心が高く、多くの作品が上演され、その資料（台本や楽譜など）は今もその地の図書館、修道院に保管されている。イエズス会ドラマの最後を飾るのは、私の調査では、1836年にウィーンで演じられた有馬のミハエルの殉教劇であった。

18世紀に入り、ドラマの中心がウィーンからザルツブルクのベネディクト派のザンクト・ペーター修道院に移り、「イエズス会ドラマ」の代わりに、「ベネディクト会ドラマ」と称されるようになった。フランツ・ヨーゼフ・ハイドンの弟ミハイル・ハイドン⁶が「右近殿〔高山右近〕」(Ukondono)を作曲し、アウグスブルク出身のエルンスト・エベリンが「小西行長」(Augustinus Tsucamidonus)などを作曲していた。

作品の保存に関しては、オーストリアでは、「イエズス会ドラマ」の記録はウィーンだけでなく、グラーツ、リンツ、ザルツブルクを始め、イエズス会ギムナジウムだった施設の図書館、スイスのベネディクト宣教会本部や他の修道院にも保管されている。だが、残念なことに、インモース教授の遺稿や掛け替ええない資料は日本から所属のベツレヘム宣教会本部に送られてから、修道院の文庫に30年間、封じ込められてしまい、閲覧も許されていない。

2. 細川ガラシャについての音楽劇「気丈な貴婦人」

この音楽劇の原本に出会うきっかけを作ってくくださったのは、1989年にウィーン大学カトリック神学部に客員教授として来訪したインモース教授の特別講演「オーストリアのバロック演劇における日本人の主役たち」(Japanische Helden im österreichischen Barocktheater)である。それを拝聴してから、細川ガラシャをテーマとするドラマを調査しようと決めて、インモース教授の示唆により、オーストリア国立図書館内の手稿本の部門に行き、ウィーンのイエズス会ドラマの収集本5冊(Cod. 9809-9813)の存在を確かめることができた。

1冊目(Cod. 9809)から読み始めて1週間以上経ったとき、4冊目(Cod. 9812)7番目の作品「気丈な貴婦人」(Mulier fortis)が細川ガラシャを主人公とする音

6 ミハイル・ハイドン(Michel Haydon, 1737-1806)は「ザルツブルクのハイドン」と親しまれ、「右近殿」(Ukondono)の作曲は現在、混声4部合唱曲のみが残っている。しかし、彼の多くのミサ曲と作曲が現存している。

楽劇だと発見した⁷。その時の感激は、初めてのイスラエル旅行の時、ナザレトの受胎告知教会の回廊に並ぶ各国の聖マリア像と絵画の一角に掲げられた十二単のマリアの絵（まさにガラシャ！）に出会った時と同じだった。思わず「あ！」と声を立てて、図書館の沈黙を破ってしまいそうだった。

他の黒ずくめの題名ページと違って、7番目の題名ページは金・赤・緑などの色が施され、次のように記されている。

MULIER FORTIS（気丈な貴婦人）

Cuius pretium de ultimis finibus（全世界の国境を越えて）

sive

GRATIA REGINI TANGO REGINA（グラーチア、丹後の王国の女王）

この手稿本（Cod. 9812）は326枚の紙からなり、大きさは310 x 220 mm、楽譜のページは10段の5線紙になっている。表紙は白い皮の製本である。各作品の最初のページは、編み糸のひもが縫い付けられている。その272枚目の右ページから279枚目の左ページまでが「気丈な貴婦人」である。

この台本は、前述ハザルト著書の第1巻第3部「日本教会史」の第13章「丹後の王妃の改宗とキリスト教的美徳」（Bekehrung und Christliche Tugenden der Königin von Tango）に基づいて、ウィーンのエエズス会士で、シレジア出身のアドルフ（Johann Baptist Adorf, 1657-1708）が書いたものである。彼は1696～1707年にエエズス会ギムナジウムを統率した教授で、後期バロック・ドラマの代表的作者で、この手稿本の作品の大半を書いている。作曲家はオルガニストで音楽教師のシュタウト（Johann Bernhard Staudt, 1654-1712）である。シュタウトはギムナジウムの生徒の時、日本の殉教劇に出演していた⁸。この二人が共作したエエズス会ドラマは40作以上残っている。

7 オーストリア国立図書館所蔵手稿本（ÖNB. Cod. 9809-9813）、Johannes Baptista Adolph, *Drama varia a gymnasio domus professe S.J. (a.1687-1704)*は、Waltraute Kramerの博士論文 *Die Musik im Wiener Jesuitendrama von 1677-1711* (Wien 1961) で言及されているが、丹後が中国地方の地名として書かれただけで、特別な考察もなく眠っていた。第4冊目Cod. 9812は、作品の上演年代からみれば、5冊の中で最初に書かれたものだとわかる。ちなみに各冊7つから8つの作品が収められている。

8 1665年のレオポルドI世とスペイン王女マルガレータとの結婚式に演じられた高山右近の劇「Honoris et Pietatis onnubium sive Ucondonus」に12歳のシュタウトはギムナジウムの生徒として出演している。

同じ作品で、1698年印刷のラテン語とドイツ語併記台本（ミュンヘン国立図書館所蔵）の題名のドイツ文は以下である⁹。

Gratia Königin deß Reichs Tango（丹後の国の女王・細川グラーチア）
Dessen Werth von den eussersten Weld Enden（その美德は全ての境を超えて）
Berühmbt von Stanhaftigkeit in Christlichen Glauben
（不変なるキリストへの信仰で名高いグラーチア）

題名ページの下半は、観劇者リスト、すなわち皇帝レオポルド I 世、后妃エレオノーレ・マグダレーナ・テレジア、二人の皇子（ヨセフ、カーロ）、4人の皇女（マリア・エリザベート、マリア・アンナ、マリア・ヨセファ、マリア・マグダレーナ）が記載されている。皇女たちはガラシャを手本にするように期待されたのだろう。題名ページの色彩と皇帝一家揃った観劇は、この音楽劇が重んじられたことを意味する。

この音楽劇の概要として、以下のように記されている。

丹後の国の王妃グラーチア〔ガラシャ〕は、国主ヤクンドーヌス〔細川忠興〕の留守中、洗礼を受け、子供たちにもキリスト教の信仰を教える。戦場から戻ってきた忠興は、ガラシャの入信を知って激怒し、ガラシャを虐待し、邪教への帰依を迫り、殺すと脅した。ガラシャは信仰を守り続け、その拷問に力尽きて、1590年8月、変わらぬ信念の魂が天に上げられた。忠興はガラシャの死後、自身の残忍な行いに苦悩し、暴君からガラシャの信仰の素晴らしい伝達者へと転身した。

劇中、細川忠興は野蛮な王「レックス・ヤクンドーヌス」(Rex Jacundonus)と名づけられる。

この音楽劇は、プロローグ、3幕、エピローグ、二つのコーラスという構成である。トーマス・ア・ケンピス(Thomas à Kempes, 1380-1471)の名著『キリストに倣いて』(*De Imitatione Christi*)を座右の書とするガラシャを描き、善と悪を対照させ、会話、音楽、ダンスを合わせたものである。

この劇の音楽は、大方は物語のための小道具のように登場する。ゆえに音楽場

9 ドイツ語併記は、ラテン語に弱い鑑賞者を助けるため本国語テキストPeriocheである。München, Bayelische Staatsbibliothek Cod.4⁰ Bav. 2184, I, 45. に収蔵される。

面はこの残されている写本のなかでも、一つ一つの楽譜が書かれておらず、ただ示唆のみのところもある、それはこの時代の劇音楽の習慣で、前奏曲、間奏曲などを、既成の自作曲、または同時代の作曲者の曲を使用することを表していることで明らかである。また、ダンス、フェンシングの場面が必ず挿入されている。それは当時のイエズス会ギムナジウムは、その社会的位置を反映し、身のこなし、いかなる状況に接しても廷臣する術を身に付けておくことが教育方針で、専門のダンス教授、フェンシング教授がいたことが知られている。

56人の役者が登場する（役者名が写本の最後頁にすべて記入されている）。大半は生徒で、せりふの短い役があてがわれて、主役のグラーチア（Gratia）＝ガラシャとヤクンドヌス（Jacundonus）＝忠興の台詞は非常に長いので、成人役者が演じた可能性が高い。イエズス会教師・生徒・専門の音楽家、王宮楽団の演奏家の共演によって上演されたようである。

プロローグとエピローグは各6曲ずつがシンメトリーに組まれ、主人公の気持ち音楽に凝縮され、徐々に終局へ導かれる。音楽の形式は厳密で、簡潔である。作曲家シュタウトは、ヴェネチア楽派の様式を取り入れ、修道会劇の域を越えず、無闇なコロラトゥール（装飾的音節）を避け、詩の韻を踏まえた曲をつけている。形式は当時のバロック劇・音楽に則って、劇の進行は、会話劇として演じられ、音楽場面は、それを縁取り、アレゴリーで歌われ、ガラシャの揺るぎない信仰を柱に喩え、善の不変（*Constantia*）と悪の怒り（*Furor*）との戦い、そして永遠の命を獲得する善の勝利を、ソロ、コーラスで歌い、時代の恒例のダンスで彩られている。その水準は当時の上流知識階級を観客をも満足させる高さである。

アレゴリーのアドベルジタス（切迫）、コンスタンチア（不変）、インクイエス（不安）はガラシャの気持ちを意味し、フロール（怒り）、クルデリタス（無情）、ポエニチュード（懺悔）は忠興の精神状態を表す。中心的な意味はアレゴリーに秘められている。アリアに伴われる器楽奏の平坦なりトルネッロ（反復）は、主人公の内面的動揺をよく表現する。重唱は、悲惨な最期にいたるまでの彼女の感情の変化、天上の幸への憧れを示し、史実の一部をも体験させてくれる。

ウィーンの手稿本には、2曲のダンス曲が書かれている。それは、1幕2場の忠興凱旋の場面で、マーチとイタリアの伝統的ダンス曲ガリアルダがコーラスとともに挿入され、忠興と家来たちの登場に華を添え、ドラマチックな効果を作り出している。フェンシングの場面は、通常の授業の成果を披露することにもなる。忠興の凱旋祝賀の大衆のコーラスは、トランペットに伴奏され、領主の権威を壮麗に表現する。その舞台装置は皇帝自らが指示しただろうか？

上流知識階級の観客をも満足させる高い水準だったと思われる。

3. 音楽劇「気丈な貴婦人」と史実との相違

この作品の主題は、ガラシヤの堅い信仰を伝え、夫からの拷問にも屈せず、地上の幸より、天上の永遠の命を信じて亡くなったことである。もちろん、これはイエズス会の報告書に記されたガラシヤの史実と違う。

1563年、織田信長（1534-1582）の名将明智光秀（1528-1582）の三女として誕生した玉は、16歳の時、信長の命により名将細川幽斎の息子忠興と結婚した。しかし、父の謀反が起こした本能寺の変により、夫に離縁され、丹後の山奥の味土野に幽閉生活を余儀なくされた。2年後、秀吉によって夫との復縁を許され、大坂に移った。侍女清原マリア（既にキリスト教徒）からキリスト教を知り、感銘を受けた。イエズス会報告書によれば、「野蛮な王（=忠興）は、高山右近（Justus Ucondonus）と交際があり、右近から既に、キリスト教について聞かされており、玉は関心を示したが、野蛮な王はびくともしなかった」とある。玉は、忠興の留守の間に洗礼を受けた。洗礼名ガラシヤ（Gratia）には、感謝、愛、恩寵の意味がある。九州から戻ってきた忠興はこれを知り、激怒する。

1598年、秀吉の死後、家臣たちは、東軍徳川家康陣と、西軍石田三成と連合した大名たちの陣とに分かれた。細川は石田側の敗北を見抜き、徳川側についたが、石田がガラシヤを人質にとることを心配した忠興は家臣に、その事態になれば、武士道に殉じてガラシヤを絶命させて、屋敷に火をかけるように命じた。

キリスト者としての掟を守り、自殺を避け、人質になることをも拒んだガラシヤは、家臣や腰元たちの殉死を禁じてから、家臣小笠原少斎に介錯させ、死に到った。彼女の死を知った石田は、人質を取るという戦略をあきらめた。ガラシヤの命は多くの人を救ったことになったのである。関ヶ原の戦いはたった一日で、徳川方の勝利と石田の敗北で終わった。

戦場から戻った忠興はガラシヤの最期を聞いて¹⁰、深い感銘を受け、イエズス会神父オルガンチーノに、ガラシヤのための追悼ミサを懇願した¹¹。この史実は、

10 「霜女覚書」。霜女はガラシヤの腰元の一人で、ガラシヤの命令でガラシヤの最期を見届け、教会の神父に報告した。それを書き留めたものが「霜女覚書」で、現在も細川家の永青文庫に保存されている。

11 松田毅一監訳『十六、七世紀イエズス会日本報告書』京都：同朋舎、1987～1998年。第3巻244-246頁、第4巻141-147頁に、亡妻ガラシヤのために2回にわたって（細川）越中殿が盛大な追悼ミサを望んだことが報告されている。

音楽劇「気丈な貴婦人」の第3幕第6場の忠興のキリスト教改宗の素材となっている。しかし、忠興が実際受洗したかどうかはさだかではない。彼の遺品にキリスト教のシンボルが多く見つかっている。ガラシヤが永遠の命を望んでいたことは、辞世の歌「散りぬべき時知りてこそ世の中の花も花なれ人も人なれ」からも読み取ることができる。

当時、細川ガラシヤはレオポルドI世の後妃エレオノーレの生き方と比較され、賞賛されていた。たとえば、1721年、ウィーンで出版された后妃の伝記において、二人の相似点が指摘されている¹²。伝記によると、后妃エレオノーレ (Eleonore Margdalena v. Pflantz-Neuburg, 1655-1720) は信仰篤く、一生神に仕える誓願を立てたが、若い后妃を二人相次いで失ったレオポルドI世の再三の懇願により、3番目の后妃となった。1711年に夫レオポルドI世の歿後、二人の息子が成人するまで、政治に大きな影響を与えた。息子は後にそれぞれ皇帝ヨセフI世と、皇帝カールVI世になった。姑の創設した女子のための勲章 Sternkreuzorden¹³を再興し、自身は常に黒い服を纏い、十字架を胸にかけていた。彼女とガラシヤとの共通点は、一つめは、類稀な美貌、気丈夫な性格、強い信仰、そして伝統を重んじること。二つめは、二人とも『聖書』の次にケンピスの『キリストに倣いて』を愛読したこと¹⁴。三つめは、信仰の証の十字架をつねに胸に提げていたこと。確かに音楽劇の中でも、ガラシヤが娘たちに十字架を与える場面がある。このようなガラシヤとの類似点は、エレオノーレの死亡告示にも書かれて、彼女の弟でドイツのデューリングゲンの大司教によって各地に知れわたるようになった。

当時のヨーロッパでは、多くのバロック演劇があるが、女性を主人公にするものは非常に少なかった。遠い国の女性の殉教死の音楽劇「気丈な貴婦人」がヨーロッパの中心のウィーンで上演されたことは、センセーショナルな出来事であったに違いない。

4. 日本での再演の意義

現存するイエズス会ドラマのうち、日本のキリスト者を主役にしたもので、音

12 *Leben und Tugenden Eleonorae Margaretae Theresiae, Römischen Kayserin*. 1721 Wien bei Schwendimann, p. 93. See Margrit Dietrich, "Gratia Hosokawa, Ein japanisches Vorbild für die Habsburger Dynastie.", in *Theologie zwischen Zeiten und Kontinenten: für Elisabeth Gössmann*, eds. Theodor Schneider, Helen Schüngel-Straumann, Vienna: Herder, 1993.

13 ハプスブルク家の男性に贈られる Goldenen Vlies に対しての女性のための勲章である。

14 『聖書』に次いで、当時ヨーロッパ人愛読されていた。フロイスの報告書には、ガラシヤの座右の書は『キリストに倣いて』と書いてある。

楽の部分を含めて完全な姿で保存されたのは、「気丈な貴婦人」だけである。音楽劇自体の歴史的、文化的価値だけではなく、オーストリアと日本との文化交流の始まりを示す貴重な資料でもある。

この音楽劇の台本と楽譜は、ウィーン大学音楽学部パス教授と私の共同編集で、インモース教授の序文「宗教史への紹介」、デイトリッヒ教授の論文「上演と演劇論」と、ラミンガー博士のドイツ語訳を添えて、『オーストリア音楽集大成』（DTÖ）第152巻として2000年に出版されるに至り、永久保存されることとなった¹⁵。

この刊行をきっかけに、私は日本各地で講演して、NHKのTV番組「その時歴史が動いた」にも報道され、多くの人々の関心を引きつけた。2004年、イタリアのクレモナ市で「気丈な貴婦人」が300年以上の時を隔てて初めて再演された¹⁶。その時の感激を忘れることができない。それ以来、ガラシャの故国の人々にもこれをいつか鑑賞していただけるようと祈念しつづけてきた。

昨年、友人とガラシャの幽閉地、丹後の山奥の味土野を訪れて「気丈な貴婦人」に思いを馳せた。宮津市内の宮津カトリック教会に足を踏み入れた途端、美しく清楚なステンドガラスの光の中にしっかりと立つ柱を見て、これこそ「気丈な貴婦人」の中で、ガラシャの信仰の強さを喩えた「柱」だと直感的に思った。すぐ神父様に「この柱の木材はどこからきたのでしょうか」と伺ったら、なんと「味土野から切り落とされたそうです」というお答えだった。

2017年10月、宮津のカトリック教会で「気丈な貴婦人」を再演することになった。宮津は、細川の居城でガラシャが忠興と幸せな2年を過ごした地、日本三景の一つ「天橋立」を目の前にした風光明媚な処。ガラシャを褒め称える1698

15 *Mulier fortis : Drama des Wiener Jesuitenkollegium* / Johann Bernhardt Staudt; veröffentlicht von Walter Pass und Fumiko Niiyama-Kalicki; unter Mitwirkung von Margret Dietrich, Thomas Immoos und Johann Ramminger, Graz: Akademische Druck-u. Verlagsanstalt, 2000. 「オーストリア音楽集大成 Denkmäler der Tonkunst in Österreich」(DTÖ) はG. Adlerの編纂で1894年から始まり、現在まで160巻を刊行してきた。*Mulier fortis*の刊行については、米田かおり「細川ガラシャとイエズス会の音楽劇 Walter Pass/Fumiko Niiyama-Kalicki校訂: Johann Bernhardt Staudt (1654-1712) 《Mulier Fortis》(DTÖ Bd. 152)を中心に」(『桐朋学園大学研究紀要』28号、2002年)を参照。残念なことに、約2年前、あるグループが、この台本のDTÖ刊行を無視して、自作品を「Mulier fortisの日本初演」と名付けて上演した。

16 2004年5月、イタリア・パヴィア大学の支援で、音楽学部教授アンジェラ・ロマニョーニの指揮で、学生、歌手・楽器のソリストたちの協力で、オーストリアの国立図書館に300年以上眠ったガラシャの演劇が日の目を見た。同じメンバーたちが今回の宮津上演にも協力してくれる予定。

年の音楽劇「気丈な貴婦人」を忠実な形で再演することは、この音楽劇の「里帰り」となり、当時のヨーロッパ人の抱いていたガラシヤへの敬愛を今日の日本人に知らせ、ガラシヤの物語から始まった、300年にわたる日本とオーストリアの文化交流の新しい展開でもある。

付録：

「気丈な貴婦人 Mulier fortis」の登場人物と音楽

Rex Iacndonus	細川忠興
Regina Gratia	ガラシヤ・細川玉
Princeps Filius 1.	細川忠隆
Princeps Filius 2.	細川忠利（または興秋）
Filia 1. (Filia maior natu.)	細川お長
Filia 2. (Filia minor natu.)	細川多羅
Charillus (Regina Charus Adolescens Nobilis)	小笠原少斎
Orcamus (Bonzorium Praefect)	高僧（太閤側）
Colinus (Aula Praefectus)	石見（細川家の家老）
Aulicus 1.-3.	細川家の家臣たち
Ephebulus 1. (Blandus, ej usdem Ephebus)	玉の腰元・清原マリア
Ephebulus 2. (Regina Charus Adolescens Nobilis)	腰元2
Ephebulus 3, 4.	腰元3, 4
Christianus	キリスト者（高山右近）
Filius Christiani	右近の息子
Puer Christianus 1, 2.	キリスト者の子供1, 2
Miles 1.-3.	兵士たち
Adol 1.-8.	貴族の若者たち
フェンシングの教授とその息子	

音楽部分（アレゴリー）

Constantia コンスタンチア	不変（テノール）
Furor フロール	怒り（バス）
Crudelitas クルデリタス	無情（テノール）
Inquies インクイエス	不安（メゾソプラノ）
Adversitas アドベルジタス	切迫（メゾソプラノ）

Poenitudo ポエニチュード
Praemium プレミウム
Populus ポプルス

懺悔（コントラアルト）
報い（ソプラノ）
民衆（混声4部）

器楽アンサンブル

Clarini I, II
Violini I, II.
Viola
Viola da gamba
Teorba e chitarra barocco
Cembalo

バロック高音トランペットI, II.
ヴァイオリンI, II.
ヴィオラ
ヴィオラ・ダ・ガンバ
テオルバとバロックギター
チェンバロ

26 The Prints of the Thirty-Six Immortal Poets in the Art Institute of Chicago

Michelle KUHN

For years, collections of Japanese art and books on the East coast of America have drawn considerable attention. The Burke Collection, the Boston Museum of Fine Arts, the New York Metropolitan Museum of Art, the Spencer Collection in the New York Public Library, and the Sackler and Freer Gallery in the National Museums of Asian Art at the Smithsonian Institution in Washington D.C. all contain exceptional works of Japanese art and print books. However, the tale of Japanese art and book collecting in America is incomplete if we do not consider the collections of other regions.

Through generous funding from the JSPS Grants-in-Aid Research Start-up Grant, I was able to visit the Art Institute of Chicago, the San Francisco Asian Art Museum, and the Los Angeles County Museum of Art; all famous within America for their collections of Japanese art, but perhaps less well known in Japan.

This paper will introduce two print books of the Thirty-Six Immortal Poets 三十六歌仙 in the Art Institute of Chicago collection, a black and white Saga-bon print from the early 17th century and a color Shunshō print from the late 18th century.

The Thirty-Six Immortal Poets are a grouping of thirty-six famous poets designated by the late Heian period (794–1185) politician and poet, Fujiwara no Kintō (966–1041). The Thirty-Six Immortal Poets include Kakinomoto no Hitomaro from the *Man'yōshū*, Ariwara no Narihira, famous for *The Tales of Ise*, Ono no Komachi, the famous poetess, and Ki no Tsurayuki, the compiler of the first Imperial collection of Japanese waka poems *Kokin wakashū*. The thirty-six poets are divided into two teams of eighteen poets, the left and the right. Poets from Hitomaro to Taira no Kanemori were on the left team and poets from Tsurayuki to Nakatsukasa were on the right team.

This kind of grouping was so popular that several variants were created, including the Thirty-Six Female Immortal Poets, a group of all female poets, as well as a “Later” Thirty-Six Immortal Poets that brought together poets of the centuries after Kintō had passed away. Pictorial depictions of these groups of poets became popular in the Edo period (1600–1868) taking many forms, including paintings pasted to albums or standing screens and print books. In the two books this paper will introduce, each of the thirty-six poets is illustrated

with a single poem of theirs next to or above them.

1. Saga-bon: The First Illustrated Print Books

The first text I will discuss is a Saga-bon version of the Kintō Thirty-Six Immortal Poets. More than simply beautiful print books, the Saga-bon are the earliest printed non-Buddhist illustrations of Japanese literature.¹ Although many extant copies of these Saga-bon print books are held in American institutions, English language research on the Saga-bon print tradition is still limited. In discussing the Saga-bon print books in the Spencer Collection of the New York Public Library, Uhnsook Park describes the Saga-bon thus;

Sagabon is the best known and most influential genre of movable type books in the early Edo period. The name Saga 嵯峨, is applied to a collection of at least thirteen titles of Japanese classical literature in various editions, printed by Hon'ami Kōetsu 本阿弥光悦 and Suminokura Sōan [sic] 角倉素庵 at Saga, near Kyoto, a village where Sōan lived and worked.

These works were produced in the years 1608 to about 1624. They were noted for lavish attention given to the quality of their paper, binding, calligraphy, and overall appearance. Consequently, the Sagabon are works of great beauty.²

The Saga-bon print collection created by Kōetsu includes editions of the *Ogura Hyakunin Isshu* (One-hundred Poets, One Poem Each), the *Kokin Wakashū*, *The Tale of Genji*, and *The Tales of Ise*, as well as the Thirty-Six Immortal Poets, among other works. Kōetsu designed the first printings himself, but they were so popular that dozens of copies and forgeries were created. As Uhnsook notes, the name of these printed books, Saga-bon, comes from the fact that the workshop of Suminokura Soan was located in a suburb of Kyoto named Saga.

The Saga-bon genre was first defined in Japanese scholarship in Wada Tsunashirō's book, titled *Sagabon-kō* (Research on the Saga-bon), published in 1916. Wada identified two copies, a "large copy" and a "medium copy" of the Saga-bon Thirty-Six Immortal Poets, but did not give the current locations of these extant books.

Wada specifies the size of these copies as below.

Large copy:

Page = L33.94×W24.54

1 David Chibbet, *The History of Japanese Printing and Book Illustration* (Tokyo: Kodansha, 1977), 114.

2 Uhnsook Park, "Illustrated Books of the Late Edo Japan: The Mitchell Collection in the New York Public Library's Spencer Collection," *Journal of East Asian Libraries* 1989 (87): 12–24.

Image boundary line= L29.09 ×W21.82.

Medium copy:

Page = L28.48×W21.51

Image boundary line = L26.06×W18.48.³

In both *Saga-bon zu kō* (Research on the Saga-bon Images) and *Kokatsujiban no kenkyū* (Research on Old Moveable Type Books), Kawase Kazuma classifies the copies of the Saga-bon Thirty-Six Immortal Poets into two types and three sub classes.⁴

Type 1

- A) Books that have multi-color gubiki⁵: Tenri University Library Scroll (previously held by Yasuda Bunko)
- B) Books that have single-color gubiki: Ochanomizu Seikidō Bunko (which has been colored with pigment and gold paint)
- C) Books that have plain paper with no gubiki: Tōyō Bunko

Type 2

- A) Reproductions: (a) Yasuda Bunko (status unknown)
(b) Tōyō Bunko

The books in Type 1 are all from the same wooden print blocks, so the size of their pages is roughly the same. The books in type 2A are newly created imitations of the original print blocks of the type 1A, B, C books, so they are larger or smaller than the books in type 1. At the time of Kawase's research, the only texts he was aware of were those in Japanese institutions. Many extant copies of the books in overseas collections had not yet been identified. His list has been added to and edited by later scholars based on new findings.

In *Kasen'e of the Edo Period (1600–186)*, Suzuki Jun compiled an exhaustive list of the extant Saga-bon versions of the Thirty-Six Immortal Poets, which has significantly modified Kawase's original classification. The "large copy" described by Wada appears to be that of Suzuki's "first printing", and the "medium copy" might be those Suzuki designated as "repro-

3 Wada Tsunashirō, *Saga-bon kō: Edo monogatari, Nishikie no kaiin kōshō, hoka* (Tokyo: Kuresu shuppan, 1995).

4 Kawase Kazuma, *Saga-bon zu kō*, 1932; Kawase Kazuma, *Kokatsujiban no kenkyū*, revised edition (Tokyo: Nihon koshosekishō kyōkai, 1967).

5 Gubiki is a paste as a base color beneath the printed ink.

ductions type 2”.⁶ Sizes were not included in Suzuki’s article.

First Printing:

- 1) Sackler & Freer Gallery (H32.9 × W24.9)
- 2) Tōyō Bunko (copy 1) (H32.6 × W24.4)

Second Printing:

- 3) New York Public Library (H33.3 × W24.7)
- 4) Ochanomizu Seikidō Bunko (H33.03 × W25.0, border dimensions: H29.69 × W22.57)
- 5) Tenri University Library (H33.5 × W50.2, border dimensions: H29.5 × W22.5) (previously held by Yasuda Bunko)
- 6) Harvard University Museum (H34.5 × W24.1)
- 7) Sackler & Freer Gallery, Pulverer Collection (H31.5 × W23.9)

Reproductions Type 1:

- 8) Boston Museum of Fine Arts (H30.7 × W23.8)
- 9) Tokyo Metropolitan Library
- 10) Tōyō Bunko (copy 2)
- 11) Tokyo University of the Arts Library (missing some pages)

Reproductions Type 2:

- 12) National Diet Library (border dimensions: H29.1 × W22.8)
- 13) Waseda University Library
- 14) Tōyō Bunko (copy 3)

2. Art Institute of Chicago’s Saga-bon

To Suzuki Jun’s list, I would add the Art Institute of Chicago’s Saga-bon book. The Chicago Saga-bon has a dark blue cover with a hand painted label “三十六歌仙書画” (Sanjūrokkasen shoga, Paintings and Writings of the Thirty-Six Immortal Poets). The prints themselves are on fragile, thin paper that has been pasted to thick white paper. The Chicago text is H35.5 × W25, border dimensions: H29 × W22.6, and is very close to the dimensions of the New York Public Library and the Harvard University Museum books. The Chicago Saga-bon has no preface and begins on the first page with the poet Kakinomoto no Hitomaro, continues

6 Suzuki Jun, “Kōetsu Sanjūrokkasen kō,” in *Kasen’e of the Edo Period (1600–186): The Transformation and Originality of the Courty Beauty in Ehon (illustrated books)*, ed. Kokubungaku Kenkyū Shiryōkan, 104–123. (Tachikawa: Ningen Bunka Kenkyū Kikō Kokubungaku Kenkyū Shiryōkan, 2009), p. 113.

through the first eighteen poets for the left team followed by all eighteen poets from the right and concludes with the poetess Nakatsukasa. The original Kintō order of the poets alternated poets from the left and right teams, and some reproductions (like the National Diet Library book) of the Saga-bon were rearranged to follow the Kintō order.

The cover of the Chicago book is not likely the original and the binding has been replaced. The title slip “Sanjūrokkasen Shoga” is almost certainly an addition from 1851 when a post script slip was attached to the inside of the back cover. The slip, originally in Japanese, reads;

Text by Honami Kōetsu, Posthumously known as Kōan. Images by Kanō Motonobu, known as Kohōgen. Offered in Spring, Kaei 4 (1851), year of the metal boar. 70-year-old Fujita Nagatoshi.

As Kōetsu lived 1558–1637 and Motonobu lived 1476–1559 it is unlikely that Motonobu was the artist for this particular book; moreover it contradicts the accepted belief that Tosa Mitsushige (1496–?) was the artist for the Saga-bon Thirty-Six Immortal Poets.

According to the internal records of the Art Institute of Chicago, below, the book in question is a slightly damaged copy of the text in the Freer Gallery.

Professor Koreshirō [sic] Wada in his book *Sagabon-Kō*, mentions two publications of this work on Sanjūrok-kasen. One corresponds to this book in our collection, and the other, according to his description is a book of smaller size with the plates reduced and altered in parts. We learn from Professor Wada that the illustrations have been considered to be by Tosa Mitsushige, the son of Mitsunobu. The Freer Gallery has in its library a perfect copy of this book, probably in its original condition; it measures 33×25 cm. The size of the blocks is the same as in our copy. Slightly tinted papers of yellowish and brownish shades are used interleaved with white papers. The sheets are not numbered, and there is no other inscription, excepting the names of the poets and their poems. The writings are judged to be copies made after Kwōetsu’s own calligraphy. Compared to illustrations of the *Ise Monogatari*, the illustrations of this book show much more elaborate work in engraving.⁷

7 From the notes pasted to the interior of the case for the Saga-bon Thirty-Six Immortal Poets, author unknown.



Image 1



Image 2

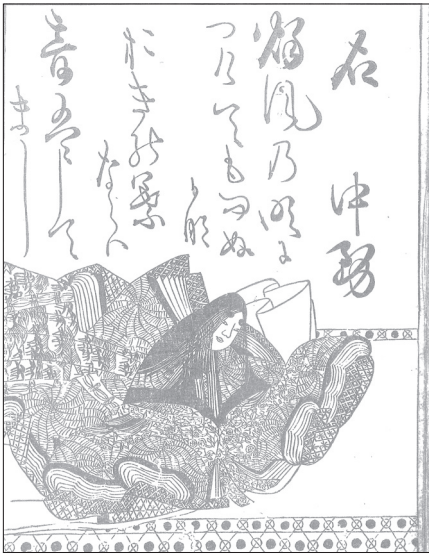


Image 3

Image 1: Saga-bon Thirty-Six Immortal Poets, courtesy of Freer Gallery.

Image 2: Above right, Saga-bon Thirty-Six Immortal Poets, courtesy of Art Institute of Chicago, photograph by Cristina Hirano.

Image 3: Saga-bon Reproduction (Above Left), courtesy of Iwase Bunko.

If the Art Institute of Chicago notes are correct, then this item should be correctly classified as either a first printing or a second printing. As the paper is currently in very bad condition, it is hard to tell if there was originally colored gubiki or white gubiki on the pages. Given the slight color variation, it may be possible that at one time there was colored gubiki on the pages, or at the very least white gubiki that has been rubbed away on certain pages.

Kasen'e of Edo Period, edited by Suzuki Jun, reproduces the entirety of the Saga-bon printed book of the Thirty-Six Immortal Poets held in the Arthur M. Sackler and Freer Gallery of Art in the National Museums of Asian Art at the Smithsonian Institution in Washington D.C. This enabled me to compare each picture in the Chicago Saga-bon (image 2) to the Freer book (image 1). Upon close inspection of the calligraphy and images, it is clear that the Chicago Saga-bon came from the same printing block as the Freer gallery book. I also compared the Freer and Chicago books with a reproduction (from an imitation block) housed in the Iwase Bunko Library of Nishio City, in Aichi prefecture (image 3).

Though many of the men portrayed in the Saga-bon Thirty-Six Immortal Poets wear simple garments, several of the men sport intricate patterns and the women's kimono all feature minute floral designs. In the poetess Nakatsukasa's image, it is clear from the details of her kimono pattern that the Freer and Chicago images came from the same block. Upon close inspection the Iwase Bunko book proves to be a less detailed reproduction and not a reprint using the same block.

For example, in the design for Nakatsukasa's kimono in the Freer and Chicago books, there is a linking hexagonal design with a thick exterior line, a thin interior line, and four dots in the center. In the Iwase reproduction, the hexagons have two lines of roughly identical thickness, the hexagonal shape is distorted in areas and instead of dots, there are lines or, in some cases, scrawls within. Not only the size of the blocks, but also the matching details down to the tiniest of lines implies that the Chicago book is from the same original block as the Freer book, confirming the suggestion made by the Art Institute of Chicago notes.

In terms of present condition, the very fragile pages of the Chicago book have been remounted on sturdier pages. The Chicago book does have water mark discoloration, a few places where the block did not print fully, some ink stains, and a few places where the paper has been worn away, but it seems to be in better condition than several of the other books in Suzuki's list. Using the online images for the Harvard book, the Harvard book seems to have been printed after the Chicago book as the images are fairly fuzzy due to the block having worn away or the block not being pressed against the paper correctly.⁸

8 See the Hitomaro image: <http://www.harvardartmuseums.org/collections/object/187362?position=12>

The Art Institute of Chicago Saga-bon is an extremely rare copy of the Thirty-Six Immortal Poets Saga-bon printed book and is likely one of the first copies of the second printing. Further study must be undertaken to compare this copy with the first editions as well as the second editions in both Japanese and American collections.

The fact that five of the 14 copies listed by Suzuki are held in American collections proves that collectors from all over the United States were eager to own one of the Saga-bon books, and moreover one of the Thirty-Six Immortal Poets. The Art Institute of Chicago Saga-bon Thirty Six Immortal Poets must be added to the list of extant copies, and its existence is indicative of the quality of the books in the Art Institute of Chicago's collection.

3. The Art Institute of Chicago Shunshō Print: A Brilliant Reproduction

Second, I would like to introduce a late Edo period edition of Shunshō's Thirty-Six Immortal Poets. Katsukawa Shunshō (1726–1792) was a leading ukiyo-e painter in the mid Edo period, and collections from across the United States are filled with his prints. The Art Institute of Chicago alone holds nearly 600 of his prints. To my knowledge there are eleven copies of Shunshō's Thirty-Six Immortal Poets, of which five are in American and British collections.⁹

Extant copies (in alphabetical order):

- 1) Boston Museum of Fine Arts copy 1 (from the Spaulding collection, donated in 1921)
- 2) Boston Museum of Fine Arts copy 2
- 3) British Museum copy 1
- 4) British Museum copy 2 (from Arthur Morrison, acquired 1906)
- 5) Freer Gallery Pulverer Collection
- 6) Saigū Historical Museum
- 7) Sankō Library
- 8) Shimane University Library
- 9) Tenri University Library
- 10) Tokyo Metropolitan Library Kaga Library
- 11) Tōyō Bunko

In the Art Institute of Chicago book, an incorrect colophon was pasted to the back of the book, naming it as the Nishiki Sanjūrokkasen. However, the Nishiki Sanjūrokkasen was actu-

9 All texts were found using the institutions' collection websites.

ally a depiction of the variant Female Thirty-Six Immortal Poets, not the original Kintō selection of male and female poets. On the last page of the Chicago book, an advertisement for the Shunshō print edition is seen next to the bibliographic information for the Nishiki Sanjūrokkasen. The advertisement, originally in Japanese, reads; “Color print illustrated text. Text by Sayama-Sensei, Thirty-Six Immortal Poets. One volume. Images by Katsukawa Shunshō. Printed in the previous year.”

The colophon for the Nishiki Sanjūrokkasen claims that the manuscript or print books were completed in Kansei 10, the year of the earth horse (1798) and published in Kansei 13, the year of the metal rooster (1801). Which would suggest that the Shunshō print was published in 1800. According to the colophon of the Boston Museum of Fine Arts book, the Shunshō print book was originally produced in 1789. Given that the Boston version of the text was likely printed in 1789 and Shunshō died in 1792, it is possible that the Chicago text was a posthumous commemorative reprint edition featuring Shunshō’s artwork.

The Boston Museum of Fine Art book (Accession number 2006.1804) may be taken as a representative of the original printing. The inside of the front cover of the Boston book is eggshell paper with gold and (imitation) silver flake followed by a nine-page introduction in flowing kana script (*sōsho*). On the 9th page (left side) Fujiwara Kintō is depicted at his writing desk formulating the Thirty-Six Immortal Poets, this is followed by one more page of introduction by the artist Shunshō. Finally on the 10th page (left side) the first poet, Hitomaro, is depicted in black and sepia. His poem is depicted on the reverse of his page with a light sepia toned watermark beneath the printed poem. The rest of the book follows this pattern with the poet on the left and her (or his) poem on the reverse side of that page.

In contrast to the Saga-bon, which imitated classical costume and postures, the Shunshō depictions of the poets are in a more contemporary style. The fine and delicate lines indicate great improvement in printing techniques since the Saga-bon texts were produced. Some of the men are in traditional court costume or hunting attire, but several are portrayed standing, which is unseen in the Saga-bon version. Likewise the women are portrayed in an ukiyo-e fashion. For instance, Ono no Komachi is standing like women in the bijin prints that Shunshō was so famous for.

The Chicago Shunshō book takes the original printing typified in the Boston book and revolutionizes both its format and color scheme. The Chicago book is a folded print (like an accordion) rather than bound pages like the Boston book. The cover of the Chicago text is a multi-color depiction of a flowing stream lined with pines and plum trees. The inside of the front cover is a multi-color watermark and the introductory pages have been removed or were never included. The first page is the depiction of Fujiwara Kintō, however the reverse of his



Image 4: Katsukawa Shunshō's Thirty-Six Immortal Poets (Saigū no Nyōgo), courtesy of Art Institute of Chicago, photograph by Cristina Hirano.



Image 5: Katsukawa Shunshō's Thirty-Six Immortal Poets (Saigū no Nyōgo), courtesy of Boston Museum of Fine Arts.

page is not the introduction by the artist Shunshō, but the poem by the first poet Hitomaro, so that the poet Hitomaro remains on the left, but Hitomaro's poem is visible on the right side. In the Chicago book, when you open to a page you see both the poet's image as well as his or her poem on the facing page, rather than the reverse as in the Boston book. As mentioned previously, the original Kintō order of the poets alternated poets from the left and right teams. The Boston copy of the Shunshō print follows the original Kintō alternating left and right pattern, but the Chicago Shunshō book, like the Chicago Saga-bon, has all the eighteen poets of the left team first followed by the eighteen poets from the right team

Where the Boston text has mainly plain paper underneath the poems, each poem in the Chicago book is printed with varying multi-color watermarks. The watermark continues onto the upper edge of the left side of the page above the image of the poet. Even the colors in which the poets are printed have been injected with more vibrancy. In the Boston book, Ariwara no Narihira is slightly demure in a beige hunting cloak and patterned pants, in the Chicago book his hunting jacket has become a brocade of green and brown while his pants have been printed in maroon and gold.

The second edition in the Boston Museum of Fine Arts (Accession number 2006.1803) is similar to the Chicago book in that some pages have watermarks. For example, on Saigū Nyōgo's page, the Boston book (image 5) has a watermark of four layers of pink clouds under the poem, which echoes the gradation of pink to white and pink again on the curtains. The curtains in the Chicago book (image 4) have been printed in purple at the top fading to white then to rose echoed by the watermark on the facing page, purple at top and salmon and rose at the bottom. Saigū Nyōgo's clothes are nearly identical in both books, she wears an over garment of light pink patterned with darker pink flowers, the layered garment underneath features roundels of flowers done in yellow and orange. The only difference is the undersides of the sleeves in the Chicago book are purple where the Boston book are white.

The Chicago Shunshō book may be a later reprint, perhaps even later than the colophon would suggest, but the blocks clearly match and the rich colors bring new energy to the designs.

The two printed books, the Saga-bon and the Shunshō book exemplify strikingly different traditions of Japanese Edo period print culture, but they are linked as reproductions of the Thirty-Six Immortal Poets. Moreover, the very order of the poets in the Chicago books is an uncanny coincidence. Both books follow the variant tradition of having the left team followed by the right, unlike the original Kintō order that alternates. In other editions of the Saga-bon as well as the Shunshō print in the Boston Museum of Fine Arts and others, the Kintō order is followed.

The Saga-bon itself is an exceptionally valuable find as it is one of less than ten copies of the original printing using the original blocks. Though the corresponding texts in the Spencer Collection in the New York Public Library, and the Sackler and Freer Gallery are more well known, the Chicago text is no less significant.

There are hundreds of other Edo period printed books in the Art Institute of Chicago collection. In fact, the exact number of books has not yet been calculated. From my limited study of just a few of the books in this enormous collection, it is clear that the collection contains many more unexpected and exciting treasures which deserve to be included in the wider awareness of Edo period print culture.

27 夏目漱石『心』における英訳の変遷

徳永光展

1. 漱石作品の英訳状況

漱石作品には多くの英訳が存在しており¹、『虞美人草』、『野分』以外の長編は英訳で読めるようになってきている。

一方、いくつもの翻訳が出ている作品はというと、『坊っちゃん』が5種類(1918, 1922, 1972, 2005, 2009)²、続いて『心』が3種類(1941, 1957, 2010)³となる。日本国内で最も読まれている両作品が英語圏でも複数の翻訳で読める状態にあるのである。ただし、両者ともに初訳を成し得たのは日本人であった。『坊っちゃん』はまず毛利八十太郎、続いて佐々木梅治が翻訳した。2000年代以降『坊っちゃん』が複数の英語話者によって再翻訳されている様子はこの作品の英語圏における注目度を物語っている。一方、『心』の初訳は近藤いね子によってなされた。日本では『坊っちゃん』が中学校、『心』が高等学校における国語教科書の定番教材であることから、日本人によっては馴染み深い作品であるが、それがそのまま英語圏での関心の高さ＝翻訳回数と直結している現実には興味深いものがある。

ちなみに、その他はどうであろうか。以下、作品名と翻訳出版年を掲げる。翻訳出版年に複数の記載があるものは、複数の翻訳が存在していることを意味する。詳細は注を参照されたい。原作発表順に列記すると、『吾輩は猫である』([第1部] 1972, [第2部] 1979, [第3部] 1986, [合本] 2002)⁴、『倫敦塔』(2005)、『カーライル

1 詳細は国際交流基金のHP「日本文学翻訳書誌検索」で検索できる。

2 *Botchan: Master Darling*, trans. Yasotaro Morri (Tokyo: Ogawa Seibundo, 1918); *Botchan*, trans. Umeji Sasaki (Rutland, Vermont and Tokyo: Tuttle, 1968) (翻訳は1922年完成); trans. Alan Turney (Tokyo: Kodansha International Ltd, 1972); trans. Joel Cohn (Tokyo: Kodansha International Ltd., 2005; London: Penguin Group, 2012); trans. Matt Treyvaud (Richmond: Ray Ontko & Co, 2009).

3 *Kokoro*, trans. Ineko Sato (Tokyo: The Hokuseido Press, 1941); *Kokoro*, trans. Ineko Kondo (Tokyo: Kenkyusha, 1948, 1969); *Kokoro: A Novel*, trans. Edwin McClellan (Chicago: Henry Regnery Company, 1957; London: Peter Owen, 1967; Rutland: Tuttle, 1969; London: Arena, 1984; and New York: Dover Publications, 2006); *Kokoro*, trans. Meredith McKinney (New York: Penguin Group, 2010).

4 *I Am a Cat*, I, II, III, trans. Aiko Itō and Graeme Wilson (Rutland, Vermont and Tokyo: Tuttle, 1972, 1979, 1986, new ed., 2002)

博物館』(2005)⁵、『琴のそら音』(1974)⁶、『趣味の遺伝』(1974, 2004)⁷、『草枕』(1968, 2008)⁸、『二百十日』(2002)⁹、『文学論』(2009)¹⁰、『坑夫』(1988)¹¹、『文芸の哲学的基礎』(2004, 2009)¹²、『夢十夜』(1974, 2000, 2015)¹³、『三四郎』(1977, 2009)¹⁴、『永日小品』(2002)¹⁵、『それから』(1978)¹⁶、『満韓ところどころ』(2000)¹⁷、『門』(1972, 2013)¹⁸、『思ひ出すことなど』(1997)¹⁹、『彼岸過迄』(1985)²⁰、『行人』(1969)²¹、『私の個人主義』

-
- 5 *The Tower of London and Tales of Victorian London*, trans. Damian Flanagan (London: Peter Owen Publishers, 2005).
 - 6 "Hearing Things," in *Ten Nights of Dreams, Hearing Things, The Heredity of Taste*, trans. Aiko Itō and Graeme Wilson (Rutland, Vermont and Tokyo: Tuttle, 1974).
 - 7 "The Heredity of Taste," *ibid.*; *The Heredity of Taste*, trans. Sammy I. Tsunematsu (Rutland, Vermont and Tokyo: Tuttle, 2004).
 - 8 *The Three-Cornered World*, trans. Alan Turney (Rutland, Vermont and Tokyo: Tuttle, 1968); *Kusamakura*, trans. Meredith McKinney (New York: Penguin Group, 2008).
 - 9 *The 210th Day*, trans. Sammy I. Tsunematsu (Rutland, Vermont and Tokyo: Tuttle, 2002).
 - 10 "Theory of Literature," in *Theory of Literature and Other Critical Writing*, eds. Michael K. Bourdaghs, Atsuko Ueda, and Joseph A. Murphy (New York: Columbia University Press, 2009).
 - 11 *The Miner*, trans. Jay Rubin (Rutland, Vermont and Tokyo: Tuttle, 1988).
 - 12 *My Individualism and The Philosophical Foundations of Literature*, trans. Sammy I. Tsunematsu (Rutland, Vermont and Tokyo: Tuttle, 2004); "Philosophical Foundations of the Literary Arts," trans. Michael K. Bourdaghs, in *Theory of Literature and Other Critical Writing*, eds. Michael K. Bourdaghs, Atsuko Ueda, and Joseph A. Murphy.
 - 13 "Ten Nights of Dreams," in *Ten Nights of Dreams, Hearing Things, The Heredity of Taste*, trans. Aiko Itō and Graeme Wilson; *Ten Nights' Dreams*, trans. Takumi Kashima and Loretta R. Lorenz (London: Sōseki Museum, 2000); "Ten Nights Dreaming" in *Ten Nights Dreaming and The Cat's Grave*, trans. Matt Treyvaud (New York: Dover Publications, 2015).
 - 14 *Sanshiro*, trans. Jay Rubin (Seattle: University of Washington Press, 1977; London: Penguin Group, 2009).
 - 15 "Spring Miscellany," in *Spring Miscellany and London Essays*, trans. Sammy I. Tsunematsu (Rutland, Vermont and Tokyo: Tuttle, 2002).
 - 16 *And Then*, trans. Norma Moore Field (Louisiana: Louisiana State University Press, 1978; Tokyo: Tuttle, 1988 edition).
 - 17 "Travels in Manchuria and Korea," in *Rediscovering Natsume Soseki with the First English Translation of 'Travels in Manchuria and Korea'*, intro. and trans. Inger Sigrun Brodey and Sammy I. Tsunematsu (Kent: Global Oriental, 2000).
 - 18 *Mon*, trans. Francis Mathy (Rutland, Vermont and Tokyo: Tuttle, 1972); *The Gate*, trans. William Sibley (New York: New York Review of Books, 2013).
 - 19 *Recollection*, trans. Maria Flutsch (London: Sōseki Museum, 1997).
 - 20 *To the Spring Equinox and Beyond*, trans. Kingo Ochiai and Sanford Goldstein (Rutland, Vermont and Tokyo: Tuttle, 1985).
 - 21 *The Wayfarer*, trans. Beongcheon Yu (Rutland, Vermont and Tokyo: Tuttle, 1969).

(1979, 2004)²²、『硝子戸の中』(2002)²³、『道草』(1971)²⁴、『明暗』(1972, 2014)²⁵となる。そのうち、英語話者による複数の翻訳を持つ作品は『草枕』、『文芸の哲学的基礎』、『夢十夜』、『門』、『私の個人主義』、『明暗』である。『三四郎』は同一人物による改訳なので、ここには含まない。

一方、翻訳者に着目すると、複数の作品を翻訳しているのは、伊藤愛子とグレイム・ウィルソンのペア（『吾輩は猫である』、『夢十夜』、『趣味の遺伝』、『琴のそら音』）アラン・ターニー（『坊っちゃん』、『草枕』）、エドウィン・マクレラン（『心』、『道草』）、ジェイ・ルービン（『三四郎』、『坊』、その他に短編として『私の個人主義』）、メレディス・マッキニー（『草枕』、『心』）、サミー・常松（『倫敦塔』、『趣味の遺伝』、『二百十日』、『文芸の哲学的基礎』、『永日小品』、『満韓とところどころ』、『私の個人主義』）となる。なかでも、ロンドン漱石記念館館長だったサミー・常松は、2000年代に入ってから、まだ翻訳されていなかった作品を重点的に扱い、出版したという意味で特筆される。また、メレディス・マッキニーは、既に翻訳のある作品を立て続けに新たな視点で訳出し直したという点で見逃せない。

2. 『心』の英訳

『心』には3種類の英訳がある。近藤いね子訳（1941年／日本、1942、48、50、59、69年再版）、エドウィン・マクレラン訳（1957年／アメリカ）、メレディス・マッキニー訳（2010年／オーストラリア）は、それぞれの翻訳者による作品解釈の結晶と呼ぶに相応しいが、英語圏で作品が受容されるためには越えなければならない障壁をも浮き彫りにしてくれる資料である。

3種類の翻訳は、『坊っちゃん』の5種類に続く多さである。まずは、太平洋戦争の最中に日本文化を輸出するかのようにして近藤訳が出版された。冒頭の謝辞において、英語話者の閲読を経た旨が記されていることから、英文として不自然

22 Soseki on Individualism. "Watakushi no Kojinshugi." trans. Jay Rubin, *Monumenta Nipponica* 34: 1 (1979); "My Individualism," in *My Individualism and The Philosophical Foundations of Literature*, trans. Sammy I. Tsunematsu (Rutland, Vermont and Tokyo: Tuttle, 2004).

23 *Inside My Glass Doors*, trans. Sammy I. Tsunematsu (Rutland, Vermont and Tokyo: Tuttle, 2002).

24 *Grass on the Wayside*, trans. Edwin McClellan (Rutland, Vermont and Tokyo: Tuttle, 1971).

25 *Light and Darkness*, trans. Valdo H. Viglielmo (London: Peter Owen, 1971; Rutland, Vermont and Tokyo: Tuttle, 1972 edition); *Light and Dark*, trans. John Nathan (New York: Columbia University Press, 2014).

な箇所は適宜改められたと考えられる。けれども、日本人による翻訳であるため、文章全体の流麗さという点をより満たすべく、この訳を乗り越える英語話者による翻訳が待ち望まれたのは必然であった。

エドウィン・マクレランの翻訳は、そのような状況に答えるべく生まれた作品であるといえる。同書は、ユネスコ翻訳集成・日本語シリーズの業績として認定を受けた。そのことによって権威を付与され、一層広く流通したと解釈できる。しかしながら、出版が1957年であったため、今日の立場から見れば、文体や表現に古さを感じさせる点が生じていたとしても不思議ではない。また、マクレラン訳出版後、半世紀の間における英語圏での日本研究の進展には目を見張るものがあり、よってその成果を取り込んだ新訳を求める機運もあってしかるべきである。マッキニーは50年経てば、英語も変化するので新訳が出るべきだと筆者に語ったが²⁶、先行訳が存在する中で敢えて新訳に挑み、現代に最も近い言語感覚を駆使したと考えられる。

以下では、3つの英訳を対象として、日本独特の文化的背景に根差した語彙、語法的に的を絞る、それらが近藤、マクレラン、マッキニーの諸訳でどのように異なっているか、または共通点を持っているかという観点から検討する。換言すれば、日本独特の表現がグローバルな視野に立てば如何なる変容を余儀なくされるかという議論にもなる。同時に、マクレラン訳に近藤訳からの、マッキニー訳にマクレラン訳からの影響関係が存在するかという点についても論究したい。

3. 翻訳者略歴

近藤いね子（1911-2008）は旧姓佐藤、1935年東北帝国大学法文学部英文科卒業。ケンブリッジ大学大学院に留学。1952年に日本人女性としては初となる文学博士を東京文理科大学にて取得。津田塾大学教授、退官後は名誉教授となったが、活水女子短期大学教授として引き続き教鞭をとった。現在も幅広く利用されている『プログレッシブ和英中辞典』（小学館、1986年初版）の編纂者として名高い。

エドウィン・マクレラン（Edwin McClellan, 1925-2009）は、神戸でイギリス人の父親と日本人の母親との間に生まれた。1942年にイギリスに渡り、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）で日本語を教えた。1948年、セント・アン

26 マッキニー氏には、2015年6月28、29日、オーストラリア国立大学のユニヴァーシティ・ハウス（Australian National University, University House）で面会し、お話をうかがうことができた。ご厚情に深謝する。

ドルース大学にて文学修士。その後、シカゴ大学で博士課程を修了。1957年よりシカゴ大学で教鞭を取るようになり、1972年にイエール大学に移籍。後に東アジア学科長を務めた。1994年、菊池寛賞受賞。1995年、野間文芸翻訳賞。1998年、勲三等旭日中綬章。漱石作品の翻訳としては他に『道草』がある。

メレディス・マッキニー (Meredith McKinney, b. 1950) は、オーストラリア国立大学に学び、学士・修士・博士を同大学で取得。文部省の国費留学生として、1972年から1974年にかけて京都大学文学部に留学。その後、1987年から1998年まで神戸市外国語大学にて外国人教師を務めた。通算約20年の日本在住後に帰国し、現在はオーストラリア国立大学の研究員として教育研究に従事するとともに、日本文学の翻訳者として活躍している。漱石作品の翻訳としては他に『草枕』がある。

マクレランは、1992年に発表した論説で『心』の翻訳について回想しているが、そこには近藤いね子の名前は一切登場しない。マクレランは『心』が自らにとって最初の翻訳だったばかりか、初めての出版物でもあった事実を明らかにしている²⁷。

岡田章子²⁸は印象の域を出ないものの、マクレランが近藤訳を参考している様子はないとしている。また、斉藤恵子²⁹や北条文緒³⁰も両者の比較論を展開するが、マクレランに近藤からの影響が見いだせるかという点については言及を避けている。

一方、マッキニーはマクレランの翻訳を知っており、読んだ経験も持っていたが、自らが再翻訳するに際してはマクレランの翻訳を見ることを避けるようにした、と筆者に話していた。参照していくと、どうしてもその翻訳に引きずられてしまうからというのが、その理由であったという。

したがって、この問題について、個々の文章ごとに細かな影響関係が存在するかどうかは考慮しなくてもよい。ただし、タイトルは3種類とも *Kokoro* であり、また重要な登場人物である *Sensei* (近藤訳では *the sensei*)、*Okusan* (近藤訳では *the okusan*) など、共通の訳語がみられる点から、大枠において符合する事実の

27 エドウィン・マックレラン「『こゝろ』の翻訳について」山中由里子訳、平川祐弘・鶴田欣也訳『漱石の『こゝろ』——どう読むか、どう読まれてきたか』新曜社、1992年。

28 岡田章子「『こころ』の英訳をめぐる——McClellan訳と近藤いね子訳の比較」『桃山学院大学総合研究所報』第4巻第1号(桃山学院大学総合研究所、1978年6月)。

29 斉藤恵子「二つのKOKORO——マクレラン訳と近藤いね子訳」『比較文学研究』第57号(東大比較文学會、1990年6月)。

30 北条文緒『翻訳と異文化——原作との〈ずれ〉が語るもの』みすず書房、2004年。

背景に本書をめぐる知識の共有があったという点のみを指摘しておきたい。

ちなみに、「御嬢さん」は、近藤がthe daughterであるのに対し、マクレランはOjosan、マッキニーはOjōsanとしてある。その上で、近藤は、okusanに「通常、敬称で呼ぶ際に使われるが、英語ではマダムと翻訳できるものである」(Kondo, 169)との注釈を添えている。一方、マクレランは、Ojosanに「この単語は、未婚女性、若い婦人、または古風な翻訳者であれば尊敬すべき娘と訳されるかもしれない」(McClellan, 148)、また、Okusanには「家庭の女主人、または妻と訳せる」(McClellan, 150)との脚注を添える。一方、マッキニーはOjōsanに「娘は作品中すべて未婚女性に対するこの敬称で呼ばれている」(McKinney, 235)との巻末注を記した³¹。

マクレランの翻訳は前述の通り、ユネスコのRepresentative Worksに登録されている。そのためか近藤訳は現在絶版となっており、もはや図書館などでしか現物に接することができない。一方、マッキニー訳は、ペンギン・クラシックスのシリーズに『坊っちゃん』、『草枕』、『三四郎』とともに所収されており、読み継がれるべき世界文学の1冊とされている。

4. 註釈から見える舞台裏

近藤訳は32か所、マクレラン訳は22か所、各頁下に註釈が記されているが、マッキニー訳では22か所の註が末尾に一括して示されている。註の数自体を見る限り、とりたててその多少を論じる必要はないように見える。けれども、問題とすべきはその内容にある。

近藤訳では「浴衣」(yukata)、「酒」(saké)、「帯」(obi)、「粥」(kayu)、「草履」(zori)といった日本文化を濃厚にまとった語彙がローマ字表記され、脚注がつけられている。けれども、それらには“a kind of”という語が付されている状況から推察できるように、英語圏の読者には説明しても、なお判然としない語彙としてしか理解されないと考えられる。

また、現代では日本食も海外市場に出回っているので、「箸」(hashi)を使う習慣は世界的に広がっているが、近藤訳が着手された1936年から完成をみた1938年頃(冒頭謝辞参照)にはアジア独特のものだった。よって近藤訳は、hashiの註にChopsticksという一語を掲げている。しかしながら、グローバル化が進

31 『心』の英訳引用はそれぞれIneko Kondo, trans., *Kokoro* (Tokyo: Kenkyusha, 1969); Edwin McClellan, trans., *Kokoro* (Rutland: Tulltle, 1969); Meredith McKinney, trans., *Kokoro* (New York: Penguin Group, 2010)に依拠。

展し、日本事情も少なからず海外に紹介されるようになった現代に完成をみたマッキニー訳にはそのような説明は登場しない。

一方、3つの訳に共通して解説が付けられている表現には、「琴」「先生」などがある。少し性質の異なるものを掲げ、検討してみたい。琴は、近藤訳では「楽器の一種」、マクレラン訳では「日本のハープ」、マッキニー訳では「チターのよ
うな日本の楽器で13の弦を持つ」と説明されている。新しい翻訳になるごとに説明が具体化している一例である。

先生は『心』の主人公なので、近藤は「日本語で教師の意。大学の教授でさえ学生からは先生と呼ばれる」、マクレランは「英語の teacher は、日本語の先生に最も近いがここでは満足できるものではない。フランス語の maître が先生で表現される概念をより適切に表現している」という脚注をつけた。確かに先行するフランス語訳では一貫して maître が使われており³²、この訳をマクレランが参照した可能性はある。これに対して、マッキニーは注釈ではなく序文において、「通常は teacher と訳されるが、先生とは知識人への深い尊敬のことばであり、師弟関係から見る師匠に近い権威を暗示するものだ」と説明し、より深い意味を示している。

一方、マッキニー訳に登場する註釈で、近藤、マクレランが無視している項目に地名に関する説明がある。順に掲げていくと、「鎌倉」(Kamakura)、「駒込」(the Komagome area)、「房州」(the Bōshū Peninsula)、「銚子」(Chōshi)、「両国」(the Ryōkoku district)、「真砂町」(Masago-chō)、「此三区に跨がつて」(through three city wards) に註釈が付けられ、登場人物が辿った位置関係を、日本に関して知識のない読者のために説明しようとする。

では、作品名の『心』についてはどうであろうか。近藤は後記で次のように述べている。「kokoro という単語は大変翻訳の難しい語で mind, heart, soul, spirit という意味がすべてこの一語に含まれているように思われる。heart, soul, または spirit という一語では単純に片付かない。この小説のフランス語が kokoro という語に当てているように、the human heart という語がおそらくは漱石がこの語で意味しようとした概念に最も近いであろう。しかし、翻訳者は、この語をそのまま残すのが最もよいと判断した。」ここから、近藤が先行するフランス語訳を参

32 Natsume Sōseki, *Kokoro (Le pauvre cœur des hommes)*, traduction française de Horiguchi Daigaku et Georges Bonneau (Institut international de coopération intellectuelle, 1934); *Le pauvre cœur des hommes (Kokoro)*, traduit du japonais par Horiguchi Daigaku et Georges Bonneau (Paris: Gallimard / UNESCO, 1957).

照したことが分かるのである。

マクレランは序文で「私が接した中で日本語のkokoroの翻訳として最もよいものはラフカディオ・ハーンによるもので、the heart of thingsというものである」と述べている。これは、漱石の『心』に先立つ1896年にラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が『心——日本の内面生活がこだまする暗示的諸編』³³の執筆に際し、タイトルをKokoroとし、奥付に記した解説を参照の上で述べたものである。漱石は同書の存在を当然知っていたであろう。漱石は同書から何らかのヒントを得て、自著『心』の執筆に向かった可能性を否定できない。マクレランのみならず、近藤いね子もまたハーンの著作にKokoroが存在する事実を踏まえた上で、訳書名をKokoroにしたのではないかと考えられる。

一方、マッキニーは序文の末尾に「作品名について」(ABOUT THE TITLE)という小文を掲げ、次のように説明している。「Kokoroはこの小説の作品名であるが、複雑で重要な単語であり、人間の感情に欠けた純粋な知性による著作からは区別されると同様、the thinking and feeling heartと説明され得るのがおそらくは最も良いものである。なぜならば、人のkokoroは感じると同様に考えるものであるが、heartとは、時として翻訳には適さないものだからである。しかしながら、kokoroという概念は小説全体に浸透したモチーフなので、私はheartという一語でそれを表現し、その上でできる限り翻訳の中でその存在を保つようにしている。タイトルに関してはオリジナルの単語を残すのが最も適当であると考えられる。」ここからは、マッキニーがより精緻な説明を読者に対して施している様子がうかがえる。しかし、マクレラン訳が半世紀にわたって広く読まれている状況下では、Kokoro以外のタイトルを選択する余地はもはやなかったと見るべきかもしれない。

5. 単語の比較考察

本節では、英訳に困難を来す表現が含まれていると考えられる箇所につき、3種類の英訳がいかなる形を取ったかを比較し、考察を加えたい。日本独特の語彙が含まれる箇所は特に難易度が高いと考えられるので、そのような箇所に着目してみることにする。以下、原文、近藤訳、マクレラン訳、マッキニー訳の順に掲げる。

33 小泉八雲『心——日本の内面生活がこだまする暗示的諸編』平川祐弘訳（河出書房新社、2016年）。

其西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否や、すぐ私の注意を惹いた。純粹の日本浴衣を着てゐた彼は、それを床几の上ですぼりと放り出した儘、腕組をして海の方を向いて立つてゐた。彼は我々の穿く猿股一つの他何物も肌に着けてゐなかつた。私には夫が第一不思議だつた。(6頁)³⁴

The moment the exceedingly white skin of that foreigner made its appearance in the booth, my attention was fixed upon him. He wore a real Japanese yukata, which he took off and threw upon a bench in a bathhouse. He then crossed his arms and stood facing the sea. He had nothing on except the short drawers which we wore, and this in itself struck me as strange. (Kondo, 3-4)

The Westerner, with his extremely pale skin, had already attracted my attention when I approached the tea house. He was standing with folded arms, facing the sea: carelessly thrown down on the stool by his side was a Japanese summer dress which he had been wearing. He had on him only a pair of drawers such as we were accustomed to wear. I found this particularly strange. (McClellan, 3)

The Westerner's marvelously white skin had struck me as soon as I came in. He had casually tossed his kimono robe onto the nearby bench and then, clad only in a pair of drawers such as we Japanese wear, stood gazing out toward the sea, arms folded.

This intrigued me. (McKinney, 5)

一見して目につくのは、西洋人を近藤がforeigner (外国人) と訳していることである。本文中には「西洋人」と明記されているので、ここはWesternerが思い浮かぶはずである。しかしながら、foreignerとされている様子からは、肌の色の異なる外国人は西洋人という通念が当時(1930年代)の日本社会に存在した事実がうかがえる。

「掛茶屋」を近藤はbathhouse、マクレランはtea houseと訳している。ここで

34 「心——先生の遺書」『漱石全集』第9巻(岩波書店、1994年)所収。小論における引用はすべてこれに依拠する。

いう「掛茶屋」とは、塩水で汚れた体を洗うと共に飲み物を飲んだり、食べ物を買って食べたりする場所なので、近藤、マクレランともに意味の一部を訳している。マッキニーはここを訳さず、原文の前の部分の「其時海岸には掛茶屋が二軒あつた。」(5頁)に stalls on the beach provided drinks and changing rooms という英語表現で対応させている。ちなみに、ここを近藤は bathing-booths on the shore (Kondo, 3)、マクレランは tea house (McClellan, 3) としている。つまり、原文では同一単語であっても、英語では状況によって、訳し分けていかなければならない様子がうかがえる箇所でもある。

「日本浴衣」を近藤は Japanese yukata とし、「着物の一種で男女共夏に着る」という脚注を添えた。マクレランは Japanese summer dress、マッキニーは kimono robe と訳しているが、日本事情に疎い読者にとってはマクレランが読み易い。「猿股」は、近藤が the short drawers、マクレランとマッキニーがともに a pair of drawers となっており、drawers (ズボン下) で理解可能である。

漱石は取り立てて意識せずには使用している言葉が翻訳者泣かせである場合は多々ある。例えば、「菫蕪閻魔」など、どのように処理すればよいのであろうか。

十一月の寒い雨の降る日の事でした。私は外套を濡らして例の通り菫蕪閻魔を抜けて細い坂道を上つて宅へ帰りました。(237頁)

It was one chilly rainy day in November. I, with my wet overcoat, passed through the shrine of Konnyakuemma as usual, and walked along the narrow slope toward home. (Kondo. 223)

On a cold, rainy day in November, I walked home as usual through the grounds of the temple of Konnyaku-Emma and up the narrow lane that led to the house. (McClellan. 196)

It was a cold, rainy day in November. Sodden in my overcoat, I made my way as usual past the fierce Enma image that stands in Gengaku Temple and up the hill to the house. (McKinney. 186)

近藤は菫蕪閻魔を固有名詞としてローマ字表記した上で the shrine、マクレランもローマ字表記の上で the temple としている。一方、マッキニーは「源覚寺

の残忍な閻魔のイメージ」とした上で、巻末に「源覚寺は東京の小石川地区にあるが、漱石が想定した「奥さん」の家の場所に近い。閻魔は死者たちの王国の支配者である」(McKinney, 186)との注釈を記している。現代の日本人読者にとっても難解な概念にまで踏み込んだ説明を添え、読者の注意を喚起しようとしている姿勢は、前二者と比べて深化した翻訳の様子をうかがわせる。

重松泰雄の「注解」によれば、「菫蕪閻魔」は当時の小石川区小石川初音町(現、文京区小石川2丁目)の源覚寺の通称。境内に木仏等身の閻魔像がまつられており、昔眼病の老女がこの尊像に日参し、閻魔の片眼をもらって快癒、お礼に好物の菫蕪を断って供えたという縁起があり、身代り閻魔として崇められる³⁵とのことであるが、このような最新の研究成果が参照された上で、マッキニーの翻訳は成し遂げられているようである。

上記に続いて、正月に歌留多遊びを家族でする場面を取り上げてみたい。

そのうちとしくはる
其内年が暮れて春になりました。ある日奥さんがKに歌留多を遣るから誰か友達を連れて来ないかと云つた事があります。(242頁)

Soon the old year had gone and the new one come. One day the *okusan* said to K that he should bring some of his friends as she was going to play poem-cards. (Kondo, 228)

The old year came to an end. One day, during the New Year season, Okusan said that we all ought to play a game of cards, and asked K if he would like to invite a friend to join us. (McClellan, 201)

The year ended, and spring came. One day Okusan suggested to K that he invite some friends over so we could play the New Year game of poem cards. (McKinney, 190)

近藤は脚注を付けなかったが、マッキニーは、上記の the New Year game of poem cards に、「伝統的なゲームで、参加者は有名な歌の下半部を書いてあるカードを取り、その歌の前半部に組み合わせなければならない。それらの歌は、藤

35 「注解」『漱石全集』第9巻(岩波書店、1994年)、343頁。

原定家（1162-1241）撰定の『百人一首』、つまり百人の歌人のそれぞれ一首、から選ばれる」（McKinney, 236）との巻末注を添え、読者の理解に供しようとする。

一方、マクレランは、その後続く「客も誰も来ないのに、内々の小人数で取らうといふ歌留多ですから頗る静なものでした」（242-243頁）との箇所を Since there were no guests, the gathering was small, and we had a very quiet game (McClellan, 201) と訳した上で、a very quiet game に対して、「このゲームは、正月に行われるものであるが、絵カードがフロアに置かれている。それぞれのカードは百人一首と呼ばれる選集にある歌に対応している。ある歌が詠まれると、参加者は対応するカードを一番に取ろうと試みる。特段の技能も必要としないあどけないゲームで、快活に行われている」（McClellan, 201）との脚注を添えている。こうしてみると、英語圏の翻訳者がいずれも百人一首を読者に理解させようとしている様子がうかがえる。

この直後、先生は「私はKに^{たい}一体百人一首の^{うた}歌を知つてゐるのかと尋ねました。」（243頁）と言うが、マクレランとマッキニーは上記のような注釈を施しているため百人一首をローマ字表記する。対して、近藤はイメージのみを読者に喚起させる曖昧な訳を選択している。

I asked him whether he knew the poems of this game at all. (Kondo, 228)

I said to him, “Don’t you know the *Hyakunin Isshu* poems?” (McClellan, 202)

I demanded to know whether he even knew the *Hyakunin isschu* poems. (McKinney, 190)

結果として、マクレランとマッキニーは、ここで取り上げられているのがただのカードゲームではなく、日本独自の文化的背景を持った新年特有の遊びであることを説明し得ているのである。

6. 評 価

岡田章子は、マクレラン訳について「M訳が平易さとひきかえに、日本人読者からみれば情緒が幾分犠牲になっている」が、「シンタックスの点では、M訳

の方がすぐれている」³⁶としている。これは英語を母語とする翻訳者が日本文学の翻訳に挑んだ際に必ず直面する問題であろう。その上で、近藤訳とマックレラン訳を比較した結果、次の結論を導いている。

大ざっぱに考えると、莫然としたままの味わいを残しておいた方がよい個所はK訳がすぐれている場合が多いように思われる。母国語で原文を味わうことができるための強味か、あるいは日本人の情緒のゆえだろうか。逆に、少々犠牲を払っても、簡潔さを重視する場合はM訳がよりすぐれている。さらに当然のことながら、会話の部分はM訳が自然である。(略)用語選択が重大な意義をもつ場合、語彙の範囲の広いMがまさることが多い。読者として読み易さという点からは、文も短く、比較的口語的表現の多いM訳の方がよいであろう。³⁷

齊藤恵子も同じ主旨の評価を次のように述べている。「少くとも、出来上った英文が、文体の一貫性を持ち、英文としての自然さを備えている点では、英語を母国語とした人の手になるものが、完成度が高いだろう。マクレラン訳はその点で、近藤訳より有利である。逆に、日本語の正確な理解、『こゝろ』の書かれた時代の日本人の生活感情、日々の暮らしぶり、家屋の構造や衣生活をつぶさに知っているという意味からは、近藤訳が優位に立つ」³⁸とある。しかも、近藤訳が原文のニュアンスを英文で保持しようと懸命である点を十分に認めて、「全体として文章の数の変更は少なく、漱石の言葉使いと文構造とに極力忠実であろうとしているのは、マクレラン訳ではなく近藤訳であり」³⁹、『『こゝろ』が近藤訳によって英語圏の世界で読まれることを望」み⁴⁰、「先生と「私」との緊密な関係に関わる部分で、原文の意図の把握、それに加えて言外の意をもくみとる敏感さにおいて、近藤訳が、切れ味鋭いのみで、硬い石を穿つような確かさをもっているのに対して、マクレラン訳は、いつもヴェール一枚へだててものをみるような、原文とのへだたりを感じさせる」⁴¹とも書いている。

確かに原文の意図が正確に把握された上で翻訳がなされているという点におい

36 岡田章子「『こころ』の英訳をめぐる」前掲、52、54頁。

37 同上、55頁。

38 齊藤恵子「二つのKOKORO」前掲、57頁。

39 同上、59頁。

40 同上、69頁。

41 同上、68頁。

では、日本語話者の近藤の訳がより原文に近いかもしれない。日本語を解しない英米圏の読者は、近藤訳を補助資料としつつ、マクレランやマッキニーの翻訳に接すれば、より正確な理解が得られるであろう。

では、英語を母語とするマクレランとマッキニーとに対しては、どのような評価を下せばよいのであろうか。この点に関する先行研究は見出せないが、筆者は以下の諸点から類推し、今後はマッキニー訳が評価の対象になっていくのではないかと考える。

- ①マッキニーは、漱石の『草枕』訳出後に『心』に取り組んだことからもうかがえるように、漱石の文体に既に習熟していたと考えられること。近藤やマクレランの『心』翻訳は研究者としての初期の業績であったのに対し、マッキニーは翻訳者として熟練の域に達してから『心』に挑んだこと。
- ②マッキニーは日本留学し、その後に英語教師として長年日本に滞在し、日本での生活体験も豊かであったこと。
- ③マッキニーは、出版に際して、出版社指定の査読者との間で訳稿の妥当性を巡ってやり取りを幾度も繰り返しており、訳文の表現は英語話者に受け入れられたものに仕上がっていること。

もちろん、米国籍のマクレランとオーストラリア国籍のマッキニーでは、英語の文体が異なる。前者がアメリカ英語であるのに対し、後者はイギリス英語を基調としている。また、マクレラン訳の出版から半世紀を経て出版されたマッキニー訳には、半世紀に及ぶ英語文化圏における日本研究の蓄積が活かされている点も明らかであろう。

7. 結 語

本稿では、夏目漱石『心』の日本語原文と英訳との対照を部分的に試みた。近藤、マクレラン、マッキニーはそれぞれの時代の翻訳者として最高の知性を持つ存在である。3種の英訳題名はすべて *Kokoro* であり、*sensei* という単語も訳されずに使用されている点において共通してはいるものの、訳文における影響関係はないとみてよい。注釈は、日本文化が極めて少数の英語圏読者にしか知られていなかった時代の近藤訳では事物の説明に終始したのに対して、マクレラン、マッキニーと時代が下るにつれて本文の解釈を補助する内容へと深まってきた。文章の完成度ではマッキニー訳がより練り上げられており、今後は広く読まれる可能

性があるだろう。その意味では、『心』の英訳は時代の変遷と共に進化している
のである。

また、マッキニーの新訳は出版社から求められたものだ、と筆者は直接訳者から
聞いている。マクレラン訳が時代の変化に伴って古くなりつつある状況を感じ
取った出版社側の判断は鋭い。

日本文化は英語圏で徐々に知られてきているが、日本文化に理解のある読者に
より精確な知識を提供しようとするマッキニー訳の註釈は、先行訳の注釈よりさ
らに詳細になっている。また、日本国内の研究成果をも取り入れている状況から
は、現代の翻訳者が日本研究に大きな役割を果たしている様子を如実にうかがう
こともできるのである。

28 日本統治期台湾の通訳者、通訳をめぐる近年の研究動向

富田 哲

はじめに

明治政府は、中央集権的な教育を通じて全国への「国語」の普及をはかった。江戸時代に幕藩体制の外にあった沖縄や北海道といった「辺境」では、他の地域以上に同地の琉球語やアイヌ語と「国語」の差が大きく、日本の領土とされた地域内での言語的多様性があらわになった。しかし言語政策上、単一の日本民族、単一の日本語の擬制に疑問がさしはさまれる余地はなく、「辺境」の人々の言語的同化が強制的に進められることになった。

ただ、その後日本が統治下に置いた台湾では、住民や言語の異質性は隠ぺいしようがなかった。もちろん、台湾総督府による台湾人への日本語教育は、統治開始からほぼ一貫して「国語」の教育として位置づけられていたし、「国語」をとおした台湾人の国民統合が建前としてはめざされていた¹。しかし、少なくとも統治後期の皇民化運動期にいたるまでは、ほとんどの台湾人にとって「国語」は「外国語」だったのであり、その教育は今日的に言えば第二言語教育の手法をとらざるをえなかった。そして、台湾語、客家語、原住民の諸言語など、従来から台湾で使われていた言語と日本語のあいだでは、通訳／翻訳という行為が介在することになった。

下関で日清戦争の講和会議がおこなわれているさなかの1895年3月、日本軍は澎湖諸島を占領、下関条約締結を経て5月末には台湾北部に上陸するが、日本軍は来台に際して多くの通訳者を帯同していた。かれらにはもともと陸軍通訳として日清戦争に従軍していた者もいれば、台湾占領を前にして採用された者もいたが、当然のことながら、日本軍は新領土では言語が通じないという状況を承知していた。ただ、来台前に台湾語などの能力を有していた通訳者はほぼ皆無だったと考えてよさそうである。来台したのは北京官話の通訳者であり、北京官話を解する台湾人と日本人が当事者のあいだに入る二重通訳、すなわち「台湾人当事者」

1 たとえば、1896年6月22日制定の台湾総督府直轄国語伝習所規則の第1条には、「国語伝習所ハ本島人ニ国語ヲ教授シテ其日常ノ生活ニ資シ且本国的精神ヲ養成スルヲ以テ本旨トス」とある。国語伝習所は甲科と乙科に分かれ、甲科は通訳者の養成、乙科は初等教育を目的としていた。「本島人」というのは台湾人のことである。

⇔「北京官話を解する台湾人」⇔「日本人の北京官話通訳者」⇔「日本人当事者」という方法での通訳が広くおこなわれていた。とはいえ、それはあくまで過渡的な状況であり、その後は台湾語などを習得した日本人、あるいは日本語を習得した台湾人が通訳にたずさわようになった²。

統治初期には台湾語などを学習する日本人も少なからずいたが、日本語を解する台湾人が増えるにつれて、日本人の学習熱も冷めていった。しかし、総督府、とくに法院や警察では、台湾語などの通訳にたずさわる日本人や日本語を解する台湾人が統治期を通じて配置されていた。こうした通訳者や通訳行為を対象とした近年の研究動向を整理、紹介するのが本稿の目的である。

ところで、一般的に日本語では、「翻訳」は書かれた言語の変換、「通訳」は話された言語の変換を意味する。しかし、翻訳と通訳の双方を包括しうる中国語の翻譯/翻译、英語の translation にあたるような語が日本語の通常の用法にはないようである。1970年代に西欧で生まれた Translation studies (TS) という学問領域の訳語としては、「翻訳学」「翻訳研究」「トランスレーション・スタディーズ」「翻訳通訳学」などがあるが、前者二つの「翻訳」はいずれも書かれた言語の翻訳と話された言語の通訳をふくんでおり、翻訳という語の一般的な意味とはずれがある³。

ちなみに、日本ではTSの研究団体として1990年に通訳理論研究会が発足、2000年には日本通訳学会が設立され、2008年には日本通訳翻訳学会（英語名称：The Japan Association for Interpreting and Translation Studies）と名称が変更された⁴。日本通訳学会の学会誌『通訳研究』の掲載論文を見ると、通訳にかんするものが多数ではあるものの、翻訳をとりあげた論考も散見され⁵、「通訳」がかならずしも翻訳研究を排除してはいなかったことがわかる。なお、台湾の翻訳通訳学研究の代表的な学会は台湾翻訳学学会という。

2 富田哲『植民地統治下での通訳・翻訳——世紀転換期台湾と東アジア』致良出版社、2013年、109-110頁。

3 鳥飼玖美子編『よくわかる翻訳通訳学』ミネルヴァ書房、2013年、i-ii。佐藤=ロスバエグ・ナナ「序」、佐藤=ロスバエグ・ナナ編『トランスレーション・スタディーズ』みすず書房、2011年、i-iii。本稿では、翻訳通訳学をTSの訳語として使用する。

4 Nana Sato-Rossberg and Judy Wakabayashi, Introduction, in *Translation and Translation Studies in the Japanese Context*, ed. Nana Sato-Rossberg and Judy Wakabayashi (London: Bloomsbury, 2012), 16. 日本通訳翻訳学会ウェブサイト「沿革」(<http://jaits.jp.org/home/history.html>)。2016年7月19日閲覧。

5 日本通訳翻訳学会ウェブサイト「学会誌アーカイブ」(<http://jaits.jp.org/home/archive.html>)。2016年7月19日閲覧。

いずれにしても、本稿が主題とするのは通訳を対象とした研究であり、翻訳の研究ではない。たとえば、日本統治期の先住民族や漢民族の口承文学の日本語や漢文への翻訳、欧米文学の漢文訳、中国や台湾の作品の日本語訳などを論じた研究はすでに文学研究などにおいて蓄積があるが⁶、本稿の考察対象からははずれる。

1. 台湾史において通訳者や通訳を研究するということ

澎湖諸島をふくむ台湾を一つの単位として歴史上の通訳が論述される場合、それは原住民と台湾にやってきた外来者とのあいだで発生したできごととして論じられることが多い。もちろん言語が通じないのは現住者と外来者のあいだのみとはかぎらない。現住者と外来者が同一の言語を共有している場合もあるだろうし、現住者のあいだでことばが通じないこともあるはずである。しかし、通訳の歴史がナショナルな単位の存在を前提として語られるとき、そこでは輪郭線の内と外が意識され、通訳は外から来た者と内にいた「本来的」な者の遭遇の場で不可避的におこなわれた行為であることが強調されるだろう。

張思婷は、2015年に台湾翻譯学学会の学会誌『翻譯学研究集刊』に発表した論文で、台湾の翻訳文学史を通観している⁷。張は、文献に記載されている台湾のもっとも早い時期の翻訳通訳活動が、17世紀初頭に福建南部の住民と台湾のシラヤ族とのあいだでおこなわれていた貿易にともなう通訳であるとしている。さらに翻訳文学の嚆矢を、1624年にオランダ東インド会社が台湾に拠点を置いたことにともない来台した宣教師が、ラテン文字を使って聖書などを台湾南部の新港社に住むシラヤ族の言語に翻訳したことにみている。そしてその後のおよそ4世紀のあいだ台湾は、オランダ、鄭氏王朝、清、日本、中華民国の5つの異なる「政権」の統治を受けたとし、統治権力の変遷が、翻訳活動（だれが、どの言語で、何を訳すのか）に大きな影響をあたえてきたとしている。ただ、あくまで翻訳文学の通史として書かれた論文であり、日本統治期をふくめ通訳にかんする記述はほとんどない。いまのところ、台湾の通訳史を通観するような論考は出ていないようであるが、かりにそのようなものが今後書かれるとすれば、やはり同様の視角が採用されるのであろう。

それはともかく、日本統治期の通訳という行為、あるいは通訳者そのものに注目が集まるようになったのはここ数年のことである。もちろん通訳者の存在が知られていなかったわけではないが、それを主題とした研究はこれまでなされてこ

6 張思婷、〈翻譯與政治：論台灣翻譯文學史〉、《翻譯學研究集刊》19、頁47-48。

7 同上、頁43-68。

なかった。その大きな理由は、おそらく翻訳通訳学研究が指摘するところの通訳者の不可視性に求められるのではないかと考える。

起点言語から目標言語に通訳がおこなわれる場合、そこには通訳者の主体性や恣意性が必然的に介在する。また、それらの言語、あるいは言語共同体の文化が非対称的な権力関係によって取り結ばれている以上、中立で透明な通訳などというものはそもそも不可能であると考えざるをえない。しかし私たちは実際には、起点言語から目標言語への等価の変換がおこなわれていることを前提として、通訳の成果を受容していることが少なくない⁸。

これを台湾史研究に引きつけて考えれば、次のように言えるだろう。日本統治期台湾の研究が利用する文字史料のなかには、総督府の日本人官員が接した台湾人の声が多々見つけられる。もっとも、この声が発せられてから文字によって記録されるまでの過程はけっして単純なものではない。たとえば、筆者が研究でよく利用する台湾総督府公文類纂には、とくに統治初期のものに、地方での視察を命じられた総督府官員が任務を終えて執筆した復命書が多数おさめられており、視察先で会った台湾人が語ったとされることばが記されている。しかしその多くは、台湾語などが話せない官員のそばにいた通訳者をとおして聞きとられたものであろう（かりに官員自身が台湾語などで直接会話したとしても、そこにはかれが聞きとった声を日本語に翻訳したものが記述されていることになる⁹）。しかし、実はこれらに通訳者の存在を見いだすことは難しい。どのような人物が通訳にあたったのか、通訳の現場がどのようなものだったのかが明記されていることはほとんどない。

しかし今日の歴史研究者が利用できるのは、史料に文字で記されている内容である。もちろん必要な史料批判を経たうえでの引用であり、それ自体に問題があるわけではない。ただ、史料を注意深く分析しても可視化できないものが研究対象になりにくいことは言うまでもない。

とはいえ、ここ10年ほどのあいだ、日本統治期台湾の通訳者あるいは通訳行為に注目が集まり、多くの研究が発表されてきた。もっとも、研究者によって考察の視角は多様であり、これらの研究を単一の学術的ディシプリンに帰属させられるわけではない。翻訳通訳史の観点からなされた研究もあれば、歴史学、言語学、民族学などからの関心にもとづいていると考えられる研究もある。次節では、

8 鳥飼玖美子前掲書、50-51頁。

9 復命書を執筆する際に、実際に聞いた内容がいかに取捨選択されたのかということも重要である。

2006年以降に発表された通訳者や通訳行為を主題とした研究を回顧するが、列挙している論考はあくまでも筆者の主観的な判断によって選んだものである¹⁰。特定の研究領域の存在が裏づけとなっているわけではないことをあらかじめおことわりしておく。

2. 日本統治期台湾の通訳者、通訳研究

回顧する期間をここ10年とするのには理由がある。というのも、2006年に発表されたある論文が、その後、相次いであらわれた研究の直接的、間接的な契機となったという側面が小さくないと考えるからである。この論文は、中央研究院台湾史研究所の許雪姬による「日治時期台湾的通訳」で、統治全期をつうじた官と民、そして台湾人と日本人の通訳者を包括的に論じたおそらく最初の論文である。許は、1980年代以降の台湾史研究を主導してきた研究者の一人であり、通訳通訳史研究というディシプリンを意識してこの論文を執筆したわけではないだろうが、研究領域を問わず後続の研究の多くが許論文からの触発を受けていたことはまちがいない。

以下に、2006年以降の研究の一覧をかかげる¹¹。学術刊行物に掲載されたもの、著作、学位論文を収録している。

日本統治期通訳者、通訳研究一覧

- 許雪姬, 〈日治時期台湾的通訳〉, 《輔仁歴史學報》18, 2006年, 頁1-35。
- 富田哲 『『明晰な』 センサスカテゴリが現れるまで——日本統治初期台湾総督府の『土語』認識』『多言語社会研究会 年報』4, 2007年, 30-56頁。
- 岡本真希子, 〈日本統治時代台湾の法院における「通訳」たち——「台湾総督府公文類纂」人事関係書類からみる台湾人/内地人「通訳」〉, 《第五屆台灣總督府檔案學術研討會論文集》, 南投: 國史館台灣文獻館, 2008年, 頁667-682。
- 富田哲, 〈日本統治初期の台湾総督府通訳官——その創設およびかれらの経歴

10 Anthony Pym, *Method in Translation History* (Manchester: St. Jerome, 1998), 161-166が指摘するように、歴史上の通訳者は、いわゆる通訳専従ではなく、通訳者以外にも多様な顔を持っていることが多い。ここでは、通訳に従事していた者がその能力を活用しておこなった諸活動をもふくめて通訳行為という語を使っている。

11 なお2006年以前のものだが、ポール・バークレー「日本人植民地者と原住民の交流問題——台湾の「蕃界」における通事と通訳をめぐって」『東アジアにおける国際秩序と交流の歴史的研究ニューズレター』2, 2004年, 10-15頁が、先住民居住地での「通事」や「通訳」を論じている。

と言語能力),《淡江日本論叢》21, 2010年, 頁151-174。

- 李尚霖,〈試論日治時期日籍基層官僚之雙語併用現象:以警察統通譯兼掌制度為中心〉,若林正文、松永正義、薛化元主編《跨域青年學者台灣史研究 第三集》,台北:稻鄉出版社,2010年,頁335-349。
- 富田哲,〈統治の障害としての「通訳」——日本統治初期台湾総督府「通訳」に対する批判〉,《淡江日本論叢》23, 2011年, 頁205-229。
- 石丸雅邦,〈從「台灣總督府公文類纂」看理蕃警察通譯兼掌制度〉,《第六屆台灣總督府檔案學術研討會論文集》,南投:國史館台灣文獻館,2011年,頁263-298。
- 葛西健二,〈日本統治初期・中期「理蕃」政策の変遷と「蕃通」警察官——その役割の変化と言語学習〉,淡江大學日本語文學系碩士論文,2011年。
- 林惠琇,〈日治初期的臺灣通譯:以官方設置為中心〉,《史地研究》3, 2011年, 頁153-172。
- 富田哲「日本統治期台湾をとりまく情勢の変化と台湾総督府翻訳官」『日本台湾学会報』14、2012年、145-167頁。
- 楊承淑,〈台湾日治時期的譯者群像〉,香港中文大學翻譯研究中心編《翻譯史研究》2, 上海:復旦大學出版社,2012年,頁160-194。
- 楊承淑,〈台湾日治時期的台籍譯者群像〉,《翻譯與跨文化交流研究:積淀與視角》,上海:上海外語教育出版社,2012年,頁43-61。
- 岡本真希子「日本統治前半期台湾の官僚組織における通訳育成と雑誌『語苑』-1910-1920年代を中心に」『社会科学』42(2、3)、2012年、103-144頁。
- 岡本真希子「『国語』普及政策下台湾の官僚組織における通訳育成と雑誌『語苑』-1930-1940年代を中心に」『社会科学』42(4)、2013年、73-111頁。
- 富田哲,《植民地統治下での通訳・翻訳——世紀轉換期台湾と東アジア》,台北:致良出版社、2013年。[上記の富田哲(2007)(2010)(2011)を修正したものを収録]
- 陳宛頤,〈通譯的國族認同之探討:以皇民化時代戰場通譯為例〉,輔仁大學跨文化研究所碩士論文,2013年。
- 楊承淑,〈譯者與贊助人:以林獻堂為中心的譯者群體〉,《譯者養成面面觀》,台北:語言訓練測驗中心,2013年,頁41-83。
- 楊承淑,〈譯者的視角與傳播:片岡巖與東方孝義的台灣民俗著述〉,《走向翻譯的歷史》,香港:香港中文大學,2013年,頁105-156。
- 楊承淑,〈譯者的角色與知識生產:以臺灣日治時期法院通譯小野西洲為例〉,《編

譯論叢》7(1), 2014年, 頁37-80。

- 楊承淑, 〈譯者與贊助人: 從日治時期警察通譯試題中的對話見端倪〉, 《翻譯學研究集刊》17, 2014年, 頁261-281。
- Cheng-shu Yang, "Police Interpretation Examinations in Taiwan during the Period of Japanese Rule," translated by Alan Chiu. *Asian Education and Development Studies* 3(3), 2014, pp. 253-266.
- 伊原大策, 〈日治時期初始臺語教材作者侯野保和與岩永六一之考察〉, 《台灣語文研究》10(1), 2015年, 頁31-56。
- 富田哲「市成乙重——日本統治初期の台湾語通訳者、教育者、著述家」『〈異郷〉としての大連・上海・台北』東京: 勉誠出版、2015年、379-392頁。
- 楊承淑, 〈台湾日治时期法院通译的群体位置: 以《语苑》为范畴〉, 《翻译与跨文化交流: 共生与互动》, 上海: 上海外语教育出版社, 2015年。
- 楊承淑, 〈日治時期的法院高等官通譯: 譯者身份的形成及其群體角色〉, 《第八屆臺灣總督府檔案學術研討會論文集》, 南投: 國史館台灣文獻館, 2015年。
- 楊承淑, 〈譯者與他者: 以佐藤春夫的臺閩紀行為例〉, 《東亞觀念史集刊》8, 2015年, 頁51-85。
- 樋口靖, 〈領台初期渡台日本人の見た台湾語〉, 《台灣文學研究》8, 2015年, 頁43-96。
- 涂紋鳳, 〈日治時期原住民蕃語集中的「警察」形象解析——以1905~1933年日蕃對譯教本為範疇〉, 輔仁大學跨文化研究所碩士論文, 2015年。
- 楊承淑編, 《日本統治期台湾における訳者及び「翻訳」活動——植民地統治と言語文化の錯綜関係》, 台北: 國立台灣大學出版中心, 2015年。

〈収録論文〉

伊原大策「日本統治時代初期における台湾語教本の系譜」

李尚霖「台湾植民地時代初期における日本統治と清代官話——「複通訳制」下の台湾官話使用者を中心に」

富田哲「ある台湾語通訳者の活動空間と主体性——市成乙重と日本統治初期台湾」

横路啓子「日本統治時代台湾の理蕃政策と通訳者——「生蕃近藤」とその周辺を中心に」

黄馨儀「日本統治期台湾における通訳兼掌制度—筆記試験の実施とそれが台湾語表記法に与えた影響」

楊承淑「訳者の役割とその知識生産活動—日本統治期の台湾における法院通

訳小野西洲を例として」

藍適齊「言語能力がもたらした「罪名」—第二次世界大戦で戦犯となった台湾人通訳」 台湾人戦犯研究からの発展

- 楊承淑, 《《語苑》里的译者角色—跨界于警察与法院的译者》, 《翻译史研究》5, 王宏志主编, 上海: 复旦大学出版社, 2015年, 頁188-215。

※以上の一覧は、通訳や通訳者を直接的に論じているものを列挙した。たとえば台湾語などの教育の実践や機関、教材の編集なども通訳者にかかわることがらにはちがいないが、この一覧には入れていない。参考までに、一覧に収録しなかった関連の論考を以下にあげておく。便宜上、辞書や教科書の言語学的分析の色彩が強いと判断したものはのぞいた。

- 江秀姿, 〈台湾における日本統治明治期の台湾語教育—教員講習所及び国語学校を中心に〉, 《東呉日語教育学報》30, 2007年, 頁49-79。
- 李幸真, 〈日治初期台湾警政的創建與警察的召訓 (1898-1906)〉, 國立台灣大學文學院歷史學研究所碩士論文, 2009年。
- 三尾裕子「蕃語編纂方針」から見た日本統治初期における台湾原住民語調査『日本台湾学会報』11、2009年、155-175頁。
- 富田哲「日本統治開始直後の『台湾土語』をめぐる知的空間の形成」『多言語社会研究会 年報』5、2009年、56-77頁。
- 劉惠璇, 〈日治時期之「臺灣總督府警察官及司獄官練習所」(1898 ~ 1937) : 臺灣警察專科學校校史探源 (上篇)〉, 《警專學報》4 (8), 2010年, 頁63-94。
- 賴欣宜, 〈日治時期臺灣語教科書之研究: 以《臺灣語教科書》為例〉, 國立台灣師範大學台灣文化及語言文學研究所, 2011年。
- 劉惠璇, 〈日治時期之「臺灣總督府警察官及司獄官練習所」(1898 ~ 1937) : 臺灣警察專科學校校史探源 (下篇)〉, 《警專學報》5 (1), 2011年, 頁1-34。
- 羅濟立, 《日治後期之殖民地警察與台灣客語、民俗文化的學習: 以『警友』雜誌為資料》, 台北: 五南圖書, 2011年。
- 樋口靖「領台初期の台湾語教学 (一)」『文学部紀要』25 (2)、2012年、23-40頁。
- 伊原大策, 〈日治初期的臺語教本系譜〉, 《編譯論叢》6 (2), 2013年, 頁67-98。
- 市川春樹, 〈日治最初期臺灣福佬話教材編纂之相關考察: 日本人對臺灣福佬

話的認知與概念),《台灣學誌》8,2013年,頁29-58。

- 市川春樹,〈東洋協會専門學校之臺灣語教育研究:以柯秋潔(1872-1945)教授法及其教學活動為討論核心〉,《靜宜中文學報》6,2014年,頁29-62。

論考一つ一つの内容を紹介することはできないが、以下、特筆すべきことをいくつか述べておきたい。

まず、輔仁大学跨文化研究所の楊承淑についてである¹²。楊はもともと通訳理論、通訳実務の研究者だが、2011年初頭、香港中文大学翻訳研究中心の王宏志が主宰する研究計画「翻訳与亜洲殖民管治」(翻訳とアジアの植民統治)のサブ計画「翻訳与台湾殖民管治」(翻訳と台湾の植民統治)を担当することになり、日本統治期の研究に取りくむようになった。また、同年後半には許雪姬が所属する中央研究院台湾史研究所の訪問研究員にもなっている。2012年9月には同研究所と香港中文大学翻訳研究中心が「日治時期的訳者と訳事活動工作坊」(日本統治期の訳者と翻訳通訳活動ワークショップ)を共催、さらに2013年9月には台湾翻訳学学会などの主催で、「訳史中的訳者」国際学術研討会(「訳史の中の訳者」国際学術シンポジウム)が開催された。同学会が2014年6月に刊行した『翻訳学研究集刊』第17輯は、このシンポジウムの報告にもとづいた論文を集めている。楊は2012年のワークショップ、2013年のシンポジウムとも報告をおこない、前者がもともとなった論文は香港中文大学翻訳研究中心の『走向翻訳的歴史』に、後者は『翻訳学研究集刊』に収録された。

楊の研究関心は、片岡巖、東方孝義、小野西洲ら警察、法院の通訳者、日本統治期の台湾人の民族運動のリーダー的存在である林獻堂の周囲の通訳者などから、総督府の通訳兼掌試験の問題、佐藤春夫の作品中の通訳者など、広範におよんでいる。豊富なデータベースの整理もあり、今後の研究への貢献も大きい。また、台湾翻訳学学会の幹部の一人でもある楊が、許雪姬(2006)を日本統治期台湾の通訳研究においてもっとも重要な文献であると位置づけつつ、翻訳通訳研究の立場から研究を発信し続けてきたことの意味は小さくないと考える。

楊は2012年から2015年にかけて、輔仁大学や科技部(科学技術省)の助成を受け、翻訳通訳史研究に関心を持つ研究者や大学院生を集めた研究会を主宰していたが、ここでの活動が2015年の『日本統治期台湾における訳者及び「翻訳」活動——植民地統治と言語文化の錯綜関係』の刊行につながった。同書の執筆者は

12 以下、楊にかんする記述は、本稿執筆にあたっての同氏からの教示を参考にしている。ご厚意に感謝申しあげる。

いずれもこの研究会のメンバーだった。輔仁大学跨文化研究所からは、研究会のメンバーが指導した日本統治期の通訳研究の修士論文も出ている¹³。

一方、朝鮮総督府と台湾総督府の官僚制度について詳細な研究をおこない、2008年に『植民地官僚の政治史——朝鮮・台湾総督府と帝国日本』（三元社）を上梓した岡本真希子も、法院（裁判所）の通訳者や通訳者養成の媒体となっていた学習雑誌について論考を発表している。植民地統治機構の人事システムに対する緻密な理解のもとに論を展開しており、総督府の通訳者を論じる者にとっては学ぶべきところが多い。なお、岡本は台湾の成功大学在職中、楊主宰の研究会に参加していたことがあり、岡本の研究は楊や筆者など、他の研究者にも頻繁に参照されている。

岡本真希子（2008）は、許雪姬（2006）のもとになっている2004年のシンポジウム報告にも言及してはいるが、通訳者への関心自体はそれまでの植民地官僚の研究を進める過程で浮かびあがってきたものようである。法院の通訳者にとくに注目する理由として、それが1898年に台湾人が初めて正規の官吏として採用されたポストだったこと、その後も、台湾総督府全体としてみれば台湾人官吏の割合がきわめて低いなかで、法院の通訳に就任する台湾人の割合がめだって高かったこと、一方で台湾語などを習得した日本人も台湾人とともに多数任用されており、法院通訳のほとんどが朝鮮人だった朝鮮総督府とは対照的であることをあげている¹⁴。

2011年までは許、岡本のほか、もともと社会言語学的な観点から日本統治期の台湾語をとりまく現象に関心を持ってきた李尚霖や筆者の研究のほか、警察による先住民統治を研究してきた石丸雅邦や葛西健二が、先住民居住地域で通訳にあたった日本人警察官に注目した論考を発表している¹⁵。また林恵瑋（2011）は、許雪姬（2006）、岡本真希子（2008）、李尚霖（2010）を先行研究としてあげつつ、統治草創期の軍や総督府の通訳者を論じた。これらはいずれも歴史学、民族学的

13 上記一覧の陳宛頻（2013）および涂紋風（2015）。

14 通訳に従事する者を「通訳」と呼ぶ用法は適切ではないと筆者は考えているが（翻訳に従事する者を「翻訳」とは呼ばない）、ここでは官制上の職称として「通訳」をもちいた。

15 李は2006年、一橋大学に博士論文「漢字、台湾語、そして台湾語文——植民地台湾における台湾語文運動に対する再考察」を提出している。楊は、2014年の〈譯者的角色與知識生產：以臺灣日治時期法院通譯小野西洲為例〉で、李の博士論文およびその前年に発表された論文（李尚霖「漢字、台湾語、そして台湾語文——植民地台湾における台湾語文運動に対する再考察」『ことばと社会』9、2005年、176-200頁）が、小野西洲の台湾語表記論を論じた嚆矢であると評している。小野は総督府法院通訳などをつとめ、台湾語学習雑誌『語苑』の編集に長年たずさわった人物である。

関心から通訳を研究対象としている。

2012年からの楊主宰の研究会のメンバーには翻訳通訳学プロパーの研究者や大学院生もいたが、日本統治期を研究対象とする者については、翻訳通訳学出身は少なかったように思う。楊承淑（2015）への寄稿者も、楊以外はみずからを翻訳通訳学研究者とはアイデンティファイしていないであろう。伊原大策は中国語学が専門で、2012年から2013年にかけて中央研究院台湾史研究所に訪問研究員として滞在していた際に日本統治初期の台湾語教科書の研究に取り組んだ。横路啓子は日本統治期台湾文学の研究者で、佐藤春夫の「霧社」に登場する先住民女性の通訳者（かつて夫だった日本人警察官に一方的に離縁されたという設定）を手引きとして、こうした通訳者が生まれてくる道筋を跡づけようとした。黄馨儀は日本統治期の台湾語文字表記のこころみ、藍適齊は第二次世界大戦の台湾人戦犯の研究を続けてきた研究者で、それぞれの研究関心からこの出版プロジェクトに参加した。

なお、樋口靖は『台湾語会話』（東方書店）などの著作のある台湾語研究の大家である。

おわりに

以上に述べたとおり、日本統治期の通訳研究は、楊をのぞけば、ほぼ翻訳通訳学研究を専門とはしない研究者によっておこなわれてきた。それゆえ、理論の利用や検討などはそれほど詳細にはおこなわれてこなかった。もっとも日本統治期の研究に取り組む以上、日本語で書かれた当時の史料を読解する能力や史料の構造に対する理解は不可欠であり、歴史研究者が通訳研究の多くを占めていること自体を批判的にとらえる必要はない。

ただ、これまでの通訳研究の蓄積を積極的に取り入れることで、研究をより進展させていくことができるはずである。筆者がとくに重要だと考えるのは、第1節で言及した通訳者の主体性や、通訳者がおかれた政治社会的環境への着目である。

公正かつ中立で周囲から不可視の存在であることを期待される通訳者の姿を、日本統治期の史料のなかに見いだすことは容易ではない。その具体的な現場となれば、なおさらのことである。しかしかれらは、けっしてことばを自動的に通訳する機械ではなかった。通訳者自身の意思や起点言語話者と目的言語話者の関係への介入などをとおして、通訳という行為が、多かれ少なかれ当該局面のなりゆ

きを左右したケースもあったはずである¹⁶。

通訳者（あるいは翻訳者）は目標言語への通訳のなかに自分自身を刻印する。起点言語の話者の声と通訳者の声のあいだに等価性は保証されていないのである¹⁷。もっとも総督府の通訳者の場合、等価の通訳をしていなかったとしても、その結果が統治側の意図に沿うものであったとすれば、それはそれで職務を忠実に遂行したということになるのかもしれない。しかし、かりに身内の通訳者であったとしても、かれがつねに「誠実」に通訳をおこなったともかぎらない¹⁸。通訳者本人がどの程度意識的だったのかは別としても、その主体性が「歴史」に影響をあたえうる余地はけっして小さくはない。

もちろん、これまでの研究がこの点に無関心だったわけではない。楊は翻訳通訳行為を可能にする賛助者の意向（それは通訳者の主体性にも影響を与えうる）に着目した分析を2013年および2014年におこない¹⁹、また2015年には、訳者の役割として「創造」「伝播」「操作」をあげ、それによって小野西洲の業績の意味を解釈しようとしている。筆者の2015年の2篇の論文は、総督府から台湾退去処分を受けた市成乙重という通訳者の主体性を論じた。横路啓子（2015）も、日本人男性と結婚して日本語を習得し通訳者となった先住民女性は、他の先住民からみれば「翻訳者は裏切り者」というイタリア語の警句を体現する存在だったとしている。冨田哲（2014）も、総督府上層が身内の通訳者グループをきびしく批判して弱体化に追いこんだ統治初期の事件をとりあげている²⁰。ただこれらは、興味深い個々の訳者やできごとを探求するというにとどまり、日本統治期の通訳研究を、翻訳通訳学における訳者の研究あるいは植民地統治下における翻訳通訳の意味を問う研究と接続し、対話を可能にするような普遍的なことをまだ十分には持ち得ていないのではないかと、自戒をこめて感じている。

通訳、翻訳という行為は、起点言語と目標言語やそれぞれの言語集団どうしの関係、言語の変換にたずさわる者の主体性、言語の変換がおこなわれる政治社会

16 Ikuoko Nakane, "The Myth of an 'Invisible Mediator': An Australian Case Study of English-Japanese Police Interpreting," *PORTAL Journal of Multidisciplinary International Studies* 6(1) (2009): 1-16.

17 ヘルマンズ・テオ「翻訳者、声と価値」、佐藤 = ロスベアグ・ナナ編前掲書、2011年、3-7頁。

18 武田珂代子『東京裁判における通訳』みすず書房、2008年、187-189頁。

19 André Lefevere, "Translators and the Reins of Power," in *Translators through History*, ed. Jean Delisle and Judith Woodsworth (Montreal: University of Ottawa and Concordia University, 1995), 132, 144-145.

20 王宏志、〈「叛逆」的譯者：中國近代翻譯史上所見統治者對翻譯的焦慮〉、《翻譯學研究集刊》13, 2010年、頁1-55も参照いただきたい。

的状況、そしてオリジナルと変換されたもののあいだの非等価性など、いずれの点においてもきわめて政治的、イデオロギー的ないとなみであると言わざるをえない。研究の主題としてとりあげれば訳者が可視化されるわけではない。非対称的な民族的関係、権力関係を前提とする植民地統治下で実践されていた通訳の現場を凝視することで、もしそれが不可能であればその現場を合理的な論証によって推測することによってはじめて、日本統治期台湾の訳者やその活動の史学的意味のみならず、翻訳通訳学的意味をも浮かびあがらせることができるはずである。

29 Internationalization of the Japanese Language in Interwar Period Japan (1920–1940) by Foreign Missionaries and Writers¹

Nanyan GUO

Introduction

The years following the end of the First World War saw an explosion in the number of foreign residents living in Japan. The numbers speak for themselves: in 1920, the foreign resident population sat at 78,061. This rose to 477,980 in 1930, and had reached 1,304,286 by 1940.² In other words, in the span of just two decades, the number of foreign residents in Japan increased sixteen-fold. During World War II, the foreign population decreased, and by 1950, five years after the end of the war, the population had dipped to 528,048, close to the level of 1930. The so-called “foreigners” included Chinese, Thais, English, French, and Germans, among others, as well as the “colonized people” of Korea, Taiwan, Sakhalin and Micronesia.³

It is easy to imagine that to these foreign residents, the Japanese language was a common language that provided a bridge between them and the Japanese people or other foreigners. The large number of people who use the Japanese as their second or third language have in fact “internationalized” the Japanese language because the language is no longer used only by its native speakers, but also by people who come from different linguistic and cultural backgrounds.

In the Japanese colonized territories like Taiwan and Korea, the colonized people were forced to use the Japanese language. Therefore the so-called “internationalization” is also colored by Japanese imperialism. Here, I shall only take into account the foreign people who willingly learned the Japanese language and managed to use it to create literary art.

The reason that I chose the “interwar period” as the time frame for my discussion of the foreign users of the Japanese language is because first and foremost it was a relatively peaceful time in Japan itself, and the number of foreign residents had peaked before the Pacific War commenced. Second, the volume of published works written in Japanese by foreign hands

1 Part of this paper was delivered at the “Modern Japanese History Workshop 2014,” at the University of Pennsylvania, 18 October, 2014.

2 「戦前の民籍または国籍別の在留外地人数と外国人人数」総務省統計局監修『国勢調査集大成 果人口統計総覧』東洋経済新報社、1985, p. 47.

3 Also see 磯田則彦「日本における外国人人口の分布とその変化」『福岡大学人文学論叢』Vol. 37, No. 3, 2005, pp. 845–860.

was at its largest before the end of World War II. It is one of the peaks of the waves of internationalized Japanese language.

In 1940, the percentage of foreign residents (1,304,286) in relation to the Japanese population (71,933,000) was 1.81%; in 2015 the percentage of registered foreign residents (2,232,189) in the overall population (127,110,047) was 1.82%,⁴ which shows surprisingly little increase over the last seven decades.

Among the large foreign population in interwar Japan, some communicated through not only spoken Japanese, but also the written language, and it is this subgroup that I will focus on here, while first looking at how the early missionaries set the stage.

Alessandro Valignano (1539–1606), one of the early European missionaries to arrive in Japan in the 16th century, observed that the Japanese language had a richer vocabulary and could express thoughts better than the Latin language. But he also believed that Japanese was hard to master because of the immense gap between speaking and writing. He wrote that no matter how hard “we foreigners” try, we would always be at a child’s level.⁵ However, contrary to Valignano’s assessment of the difficulty of mastering the Japanese language, a number of extant documents show that the missionaries’ understanding of Japanese rivaled that of native speakers in some cases.⁶

In the 1860s, following the establishment of Western treaty ports, foreign missionaries and educators came to live and teach in Japan, and many of them mastered the Japanese language. In order to better get their message across to the Japanese people, the missionaries printed their evangelical works in Japanese.

However, it was from the 1920s onwards that books written by foreigners gained prominence and came to be read by the Japanese masses. This paper will discuss several works written by foreign residents to see what kind of message they wanted to convey and how they were received by the Japanese society. My goal is to reveal the nature of the Japanese language in communication between Japan and the rest of the world in interwar Japan.

4 According to 法務省「平成27年末現在における在留外国人人数について（確定値）」and 総務省統計局「人口推計」.

5 Alessandro Valignano, *Sumario de las cosas del Japón* (1583) *Adiciones del Sumario de Japón* (1592) Editados por José Luis Alvarez-Taladriz, Tokyo: Sophia University, 1954; 松田毅一他訳『日本巡察記』平凡社、1973, pp. 26, 85. Also see 村田昌巳「アレッサンドロ・ヴァリニャーノとヴィンチェンツォ・チマッティ (III) ヴァリニャーノと日本語」『サレジオ工業高等学校研究紀要』No. 40, 2013, pp. 17–24. エンゲルベルト・ヨリッセン「16・17世紀におけるヨーロッパ人と日本語」『ピブリア』No. 102, 1994, pp. 157–180.

6 杉本つとむ『杉本つとむ著作選集——西洋人の日本語研究』八坂書房、1998, pp. 61–62.

1. Missionary Texts

Christians had long been persecuted in Japan and the ban on Christianity lasted even after the Meiji Restoration. Baptist missionary Jonathan Goble (1827–1896) arrived in Japan in 1860, where he stayed at Jōbutsuji Temple in Yokohama and studied the Japanese language. In 1867, he moved to the Tosa domain and started to translate the Bible into Japanese while teaching English. In 1871, he published the Gospel of Matthew, but it was confiscated by the government.⁷

After the Meiji government lifted its ban on Christianity in 1873, missionary work and the publication of Christian texts was once again allowed. Catholic missionary Marc-Maria de Rotz (1840–1914), who arrived in Nagasaki in 1868, was active in printing books in *kana*, a simplified form that came to be called “De Rotz print.” De Rotz believed that it was better to abandon using *kanji* in order to make the ideas of Christianity available to everyone, from farmers to fishermen, and to help Japan’s cultural enlightenment and development. He mostly used *kana* in his own writings.⁸

Of all the missionary texts written in Japanese, those by four members of the Roman Catholic missionary organization Societe des Missions Étrangères de Paris (Society of Foreign Missions of Paris) seem to be most prominent. The high Japanese language proficiency of Aimé Villion (1843–1932), François-Alfred-Désiré Ligneul (1847–1922), Lucien Drouart de Lezey (1849–1930), and Emile Raguét (1854–1929) was attested to by many people who attended their Masses or language classes. However, most of their books were “narrated” by themselves and “written,” “recorded,” “translated,” or “edited” by their Japanese assistants. “Penning” by themselves seems to have been a rather uncommon practice. Despite this fact, these books would not have been written without their initiation.⁹

Aimé Villion’s influential book *Yamato hijiri chishio no kakioki* (Notes on the bloodied Japanese saints, 1887), mainly based on *Histoire de la religion chrétienne au Japon* (1870) by Léon Pagès (1814–1886), dealt with the martyrdom of Japanese Christians from the 16th

7 小林功芳「横浜のパプテスト宣教師」『英学史研究』Vol. 1988 (1987), No. 20, pp. 159–170.

8 「カトリック出版物」上智学院編『New Catholic Encyclopedia 新カトリック大事典』研究社, 1996, p. 1137.

9 山梨淳「パリ外国宣教会の出版物と近代日本の文学者」『キリスト教文壇研究所トマス・アキナス研究所紀要』Vol. 25, No. 1, 2010, p. 82.

century to the 18th century. Seven editions of Villion's book were published up until 1931.¹⁰ It was praised by intellectuals, including Yamaji Aizan (1864–1917), Tokutomi Sohō (1863–1957), Akutagawa Ryūnosuke (1892–1927), Ōkawa Shūmei (1886–1957), Kinoshita Mokutarō (1885–1945), and Yoshino Sakuzō (1878–1933), among others. Uchida Roan (1868–1929)'s introduction to the book was responsible for making it widely known to the general public.¹¹

According to Matsuzaki Minoru's *Kirishitan chishio no kakioki* (Notes on the bloodied Christians, 1925), Villion's book was edited by Kako Giichi, who recorded Villion's homilies given in Kyoto from 1884 onwards.¹² Matsuzaki wrote that the first edition of Villion's book was written in "awkward oral Japanese" employing "childish vocabulary and rhetoric."¹³ But by the book's sixth revision in 1926 it had been "completely changed."¹⁴ The written style was praised by linguist Shinmura Izuru (1876–1967) as "common and plain" (通俗平明), and easy to understand.¹⁵ It seems that the first edition adhered closely to Villion's narrative style, but later editions were more refined by Kako's "writing" and "editing."¹⁶ Later, Villion and Kako collaborated on more books, including *Baramonkyō ron: Bukkyō kigen* (On Brahmanism: the origins of Buddhism, 1889),¹⁷ *Yamaguchi kōkyōshi* (A history of the Catholic church in Yamaguchi, 1897),¹⁸ and *Nagato kōkyōshi* (A history of the Catholic church in Nagato, 1918).¹⁹

There have been a number of books and articles on Villion's life in Japan, and many have mentioned his fluency in spoken Japanese.²⁰ However, little is mentioned about how he "authored" his books. The preface of *Baramonkyō ron: Bukkyō kigen* mentions the efforts he

10 ヴィリヨン閔、加古義一編『日本聖人鮮血遺書』京都：村上勘兵衛、1887；京都：加古義一、1888；訂正増補第6版、聖若瑟教育院、1911；日本カトリック刊行会、1926（There is a photo image of the Introduction hand-written by Villion in French, along with its Japanese translation, the book title and the writer's name）；7th version, 西宮：日本殉教者宣伝会、1931.

11 山梨淳「パリ外国宣教会の出版物と近代日本の文学者」pp. 92–98.

12 松崎実「自序」『考注切支丹鮮血遺書』改造社、1926, p. 10.

13 Ibid. pp. 6, 11「外人が不自由な日本語で」、「用語や修辭の稚拙」

14 Ibid. pp. 7, 12「六版に至つて殆んど面目が一新されたと云へる程増補改訂されてゐる」、「用語や修辭が異なり」

15 新村出「改版序文」松崎実『考注切支丹鮮血遺書』改造社、1926, p. 3.

16 山梨淳「パリ外国宣教会の出版物と近代日本の文学者」p. 93.

17 ヴィリヨン閔、加古義一編『婆羅門教論：仏教起原』京都：清水久次郎、1889.

18 ヴィリヨン閔、加古義一著『山口公教史』京都：加古義一、1897.

19 ヴィリヨン閔、加古義一編『長門公教史』京都：加古義一、1918.

20 See, for instance, 狩谷平司『ペリオン神父の生涯』大阪：稲畑香料店、1938；萩原新生「ペリオン神父のこと」萩原『青春の夢』高松書房、1943；鮎川義介「ヴィリヨン神父の思い出」友田寿一郎『鮎川義介縦横談』創元社、1953；山崎忠雄『偉大なるヴィリヨン神父——ヴィリヨン神父にまねびて』東京：山崎忠雄、1965.

made in studying Buddhism for three intensive years at various temples in Kyoto from 1880.²¹ There he gained an advanced knowledge of Japanese, and his literacy in *kanbun* (Chinese writing) was essential to his understanding of Buddhism and in his communication with other monks.

Villion's Japanese writing skills can be seen in *Kirishitan daimyōshi* (1929), his Japanese translation of *The Christian Daimyos* (1903), written in English first by Michael Steichen (1857–1929).²² The revised version in French (1904) was translated by Yoshida Kogorō and was published in 1930.²³ The preface of Villion's translation starts with the sentence, "This is an unskillful translation of the late Fr. Steichen's book."²⁴ The expression 拙き筆を以て翻訳 (lit. "translated by an unskillful pen") indicates that the translation was probably written by Villion himself.

Let us compare Villion's translation of the first sentences of the original English version to Yoshida's translation of the same section from the French version:

Villion: 西曆一五四九年（天文十八年）八月十五日、フランシスコ、ザヴェリヨはキリスト教を日本に布教する目的を以て九州鹿児島に渡来したのであるが、此日こそは日本に於ける宗教史並に政治史中に永く記念せらるべき日である。即ち当時欧米諸外国から全然孤立してゐた特殊の事情の下にある日本国民が、フランシスコ、ザヴェリヨの渡来した事によつて此等キリスト教諸外国と国際上の友交關係を開始するの機会が与へられたのである。²⁵

Yoshida: フランシスコ・ザベリヨが鹿児島に到着した日、一五四九年八月十五日（天文十八年七月十二日）は、日本の政治史・宗教史の上に、永く記憶されるであらう。実に、この日こそ、当時まで深い淵を以て隔てられてゐた、この不思議な国民を、基督教徒の大家族に引入れようとする計画の樹てられた最初の日なのである。²⁶

21 ヴィリヨン「婆羅門教序」ヴィリヨン閱，加古義一編『婆羅門教論——仏教起原』京都：清水久次郎，1889，pp. 1–19。「附録ビリオン師の回顧感想談」長富雅二編『ザベリヨと山口』山口フランシスコ会，1923，pp. 115–126。

22 スタイシェン著，ビリヨン訳『切支丹大名史』三才社，1929。

23 シュタイシェン著，吉田小五郎訳『切支丹大名史』大岡山書店，1930。

24 「序言」スタイシェン著，ビリヨン訳『切支丹大名史』：「茲に拙き筆を以て翻訳出版したるは悼むべき故スタイシェン師の遺書である。」

25 Ibid, pp. 1–2.

26 シュタイシェン著，吉田小五郎訳『切支丹大名史』，p. 1.

It is immediately obvious that Villion uses the old formal *bungo* style, while Yoshida adopts a more colloquial tone. The latter is easier to read,²⁷ but the former contains more information about the purpose of Xavier's arrival in Kagoshima, Japan's isolation in relation to the rest of the world, and the opportunity for Japan to establish diplomatic relations with other Christian countries. Villion's translation is more faithful to the original text, and it shows that his writing skills were at a high enough level for him to work on his own. Villion was probably too busy with other tasks to pen all of his books by himself. Nevertheless he always proof-read (閲) all the books "recorded," "written," "translated," or "edited" by Kako. From these efforts, we can sense his strong determination to communicate with the Japanese masses through "written" evangelical works.

This same determination can be seen in the approximately 70 books by François-Alfred-Désiré Ligneul published between 1886 and 1923, the more than 20 books by Lucien Drouart de Lezey published between 1897 and 1930, and Emile Raguet's translation of the Bible and other books published between 1890 and 1931. Most of their books are either "narrated" (述) by themselves and "written" (記) by their Japanese assistants, or "authored" (著) by themselves and "translated" (訳) by others.

Japanese people had shown interest in biographies of Christian saints since the early 1900s.²⁸ Another envoy to Japan from the Societe des Missions Étrangères de Paris, M. Julien Sylvain Bousquet (1877–1943), translated Thérèse de Lisieux's (1873–1897) autobiography *L'histoire d'une ame* (The story of a soul) and published it in 1911 under the title *Chiisaki hana* (The little flower). In the explanatory notes (*banrei*) of the translation, Bousquet wrote, "I am deeply ashamed of the inconsistency, repetition, inexperienced writing, lack of polish, and rough proofreading that has rendered many parts of this book hard to understand."²⁹ This statement, with a tad too much humility, proves that this translation was "written down" by Bousquet himself. The translation went through 15 editions by 1930.³⁰ In the 12th edition, the apologetic introduction had disappeared, and many parts of the book had been

27 The smooth flow of the sentences (文章の流麗なる点) was praised in a book review. See 今宮新「切支丹大名記、シュタイシエン著、吉田小五郎訳、大岡山書店発行」『史学』Vol. 9, No. 4, 1930, p. 165.

28 山梨淳「バリ外国宣教会の出版物と近代日本の文学者」『キリスト教文壇研究所トマス・アキナス研究所紀要』Vol. 25, No. 1, 2010, p. 98.

29 シルベン、ブスケ訳『小さき花——乙女テレジア之自叙伝』聖若瑟教育院，三才社，1911，p. 7。「凡例」：「前後不揃や重複になつた箇所もあり且つ文筆に慣れざる者の筆記と、推敲の余日なさと、校正の粗漏とにより渋晦の跡多きは、訳者の深く慚る所である」。

30 シルベン・ブスケ訳『幼な子に倣ひて——聖女小さきテレジアの践まれし愛の道』光明社，1930，「広告」。

revised and polished.³¹ St. Thérèse's contemplation of her spiritual growth attracted many in Japan, and influenced writers such as Miyazawa Kenji (1896–1933),³² Miki Rofū (1889–1964),³³ and Inoue Yōji (1927–2014),³⁴ among others. During WWII, Bousquet was tortured to death by Japanese military police in 1943.

“Writing” is an act of communication with a much stronger desire than to merely make an oral statement or have a conversation. Publications that circulate can reach a wide readership, and the interwar period provided a favorable climate for the mass production of cultural commodities in Japan. As only a very limited number of people were able to read European languages, missionaries found it necessary to convey Christian messages directly to the Japanese masses by writing in Japanese.

Learning the Japanese language as an adult is not easy. The desire to communicate with the masses led foreigners to write in Japanese, regardless of their religious affiliation. They made errors in writing, a characteristic inherent in second language acquisition, but even so-called native speakers do this too. Therefore, we can say that foreigners writing in Japanese were engaged in a meaningful task, given that the majority of Japanese people did not even write for the public.

2. Two Russian Writers

Vasili Eroshenko (1890–1952) was born in southern Russia and went blind due to a case of measles when he was four. He graduated from a school for the blind at the age of eighteen, and in 1910, he studied Esperanto. He traveled to Japan in 1914 and entered Tokyo Mōgakkō (Tokyo School for the Blind) in May 1915, and by all assumptions, he quickly mastered the Japanese language through listening and speaking. In November 1915, he wrote an essay titled *Ame ga furu* (It is raining), in which he described Miyazaki Tōten's (1870–1922) teaching on religion.³⁵ As he usually wrote using a Braille writer, his essays were published with the help of editors who transcribed them into *kana* and *kanji*. The following year, he gave a speech in Japanese on Russian education for the blind, the transcript of which was published

31 シルベン, ブスケ訳『小さき花——聖女小さきテレジア之自叙伝』12版, 福音社書店, 三才社, 1925.

32 板谷栄城「賢治と『小さき花』」『宮沢賢治研究』No. 7, 1997, pp. 401–405.

33 大谷恒彦「ブスケ神父と三木露風」『姫路人間学研究』Vol. 2, No. 1, 1999, pp. 67–68; 近藤健史「三木露風と聖女テレジア賛歌」『研究紀要』(日本大学通信教育部) No. 20, 2007, pp. 21–38.

34 井上洋治「リジューのテレーズをめぐって」井上, 山根道公『風のなかの想い』日本基督教団出版局, 1989.

35 エロシェンコ「雨が降る」『早稲田文学』No. 123, 1916.

in the school magazine.³⁶ Soon after, he published a commentary on several contemporary Russian works of dramatic literature in another magazine.³⁷ He was also active in promoting Esperanto in Japan, and he befriended intellectuals, such as writer Akita Ujaku (1883–1962), activist Kamichika Ichiko (1888–1981), Russian literature scholar Katagami Noburu (1884–1928), the owner of the Western restaurant Nakamura, Sōma Aizō (1870–1954) and his wife Kokkō (1876–1955), and anarchist activist Ōsugi Sakae (1885–1923), to name but a few.

Eroshenko often gave speeches in public. Eguchi Kan (1887–1875) described his speech in April 1921, titled “The Cup of Disaster” (*Wazawai no sakazuki*), as “musical” and “poetic,” and said that it “captivated the audience from start to finish.”³⁸ In this speech, Eroshenko criticized Japan’s colonial policies, which had given rise to anti-Japan movements in China, Siberia, and Korea. The draft of this speech was not published in Japan, but was instead taken to China, translated into Chinese and was published there in May.³⁹ Soon after, in early June, he was deported from Japan under suspicion of associating Japan with socialist countries through his promotion of Esperanto.⁴⁰

Instead of writing in his first language Russian and waiting for someone to translate it into Japanese, or never to be translated at all, Eroshenko wrote in Japanese in order to communicate his message to Japanese readers directly. Soon after his expulsion from Japan, his two anthologies *Yoake mae no uta* (Songs of dawn, 1921) and *Saigo no tameiki* (The last sigh, 1921), both written in Japanese, were published. His third anthology, *Jinrui no tameni* (For human beings), was written in Esperanto and was translated into Japanese and published in 1924.

Esperanto was created in 1887; it is said to be easy to learn because there are no grammatical exceptions, and there is a rich vocabulary useful for writing fiction and poetry.⁴¹

36 エロシェンコ「私立露国モスコウ盲学校状況」『内外盲人教育』Vol. 5, Spring Issue, 1916, p. 23.

37 エロシェンコ「露西亜文学に現はれたる女性」『層雲』Vol. 6, No. 7, 1916.

38 江口渙「エロシェンコ・ワシリー君を憶ふ——序に代へて」エロシェンコ著、秋田雨雀編『最後の溜息』叢文閣, December 1921, p. 8:「その時の彼の演説は実際一つの音楽であつた。詩であつた。歐洲人らしいアクセントをもつた日本語と、歐洲人らしい言ひ廻しとは更に彼の心の底から溢れ出る熱情と美しく響く声の調子とに助けられて、聴衆を飽くまで引きつけずに置かなかつた。」This article was originally published in『読売新聞』, 17–21 June, 1921.

39 It was published in a Chinese newspaper『民国日報』副刊「覚悟」26 May, see 藤井省三『エロシェンコの都市物語——1920年代東京・上海・北京』みすず書房, 1989, p. 32.

40 藤井省三『エロシェンコの都市物語』, p. 49.

41 安藤裕介「国際語としてのエスペラントの可能性(1)」『久留米大学外国語教育研究所紀要』No. 2, 1995, pp. 81–93.

However, the number of members of the Japan Esperanto Institute, established in 1917, was about 2,000 in 1922.⁴² Obviously, Eroshenko's writing would have had limited influence if he wrote only in Esperanto and waited for it to be translated into Japanese. Writing in Japanese enabled Eroshenko to transmit his message quickly to a broad audience. His voice in Japanese was directly accessible. His play *Momoiro no kumo* (Pink-colored clouds) provides a good example of his colloquial Japanese.⁴³

The essence of Eroshenko's work is the close connection of the imagined world and actual society through satire. For instance, the story *Semai ori* (Narrow cages) in *Yoake mae no uta* shows how the main character, an Indian tiger, discovers that all creatures (a sheep, a bird, a goldfish, and a young wife) live without freedom. They are either used to "the cage," or are afraid of being given freedom.

It is interesting that he wrote in the preface for his first anthology, *Yoake mae no uta*, "I did not intend to publish these stories in Japan. I planned to take them as a gift from this foreign country to the new Russia."⁴⁴ He continued on to say that he only wrote stories, gave public speeches, and acted in plays on social issues to achieve his mission, which was to make his life an "art" (*geijutsu*).⁴⁵ His cosmopolitan lifestyle of wandering around the world did not bother him much even though he was unsure of his next destination after leaving Japan. Writing in Japanese seems to have been a temporary means of communication for him, and he certainly wanted his messages to go beyond Japan.

In fact, his writings in Japanese and Esperanto were translated into Chinese, mainly by Lu Xun (1881–1936) and his brother Zhou Zuoren (1885–1967). Because of the political situation, his satire could only be printed in Japan and China in the 1920s and 1930s, with a certain degree of freedom, but not in Russia. His final literary work, "A Red Flower," was narrated in Japanese and recorded by a 16-year-old student, Karl Yoneda, in Beijing at Lu Xun's home in March 1923. It was translated into Chinese by Lu Xun, but was not published in Japan until Fujii Shōzō translated it back into Japanese from the Chinese version in

42 川原次吉郎『エスペラント概論』エスペラント同人社、1923, pp. 53–55.

43 秋田雨雀「童話劇「桃色の雲」を読んで」エロシェンコ著、秋田雨雀編『最後の溜息』, p.11:「言葉のひどく可笑しいのは、書き直して、立派な日本語にしたと思はれるところも二三あつた。その他は全部君の唇から自然に溢れ出たもので、この美しい一篇の童話を読んでみると、君の容貌や、声音や口癖なぞまで、はつきり思ひ出されて、何とも云へない懐しさを感じる」。

44 エロシェンコ、秋田雨雀編『夜明け前の歌——エロシェンコの創作集』叢文閣、1921, p. 5「自序」:「私はこの話を日本で発表するつもりではなかつた。この話を、私は新しいロシアに外国の土産として持つて行かうと思つた。」。

45 Ibid.「自序」:「私にとつては、私の生命、私のいのちそのものが芸術にならねばならなかつた。その生命は私の第一の芸術。話を書くこと、演説に出ること、社会の芝居に出ること、それらは皆生命といふ大なる芸術の飾りに過ぎない。」。

1989.⁴⁶ After returning to Russia, Eroshenko did not write much, and died in 1952 without any public recognition. Meanwhile, several stories from the above mentioned anthologies were included in a series of children's literature published in Japan.⁴⁷

Serge Grigorievich Elisséeff (1889–1975) was born in Saint Petersburg, and was studying at the University of Berlin when he met Shinmura Izuru, the future Japanese linguist. With the help of Shinmura and his friends, Elisséeff entered the Imperial University of Tokyo in 1908, and studied Japanese language and literature from the ancient period until the Edo period. He quickly mastered the Japanese language, frequently went to *kabuki* and *rakugo* performances, and learned *nagauta* and Japanese dance. He was the only foreigner among the protégés of Natsume Sōseki's Mokuyōkai gathering. Sōseki valued Elisséeff's critical prowess and asked him to contribute essays on Russian literature to *Asahi Shinbun's* literature column (*bungeiran*), of which Sōseki was the editor.⁴⁸

Elisséeff's Japanese skills were often on show when he used puns (*dajare*), and this ability impressed the Japanese people who met him.⁴⁹ Elisséeff was asked to write the preface in May 1910, two years after his arrival in Japan, for an anthology of six Russian works translated by Nobori Shomu. This indicates that not only Elisséeff's knowledge of Russian literature and critical ability were recognized, but also that his Japanese writing skills were highly regarded. In the preface, he praised Nobori's Japanese translation as "close to the original texts with no common errors, and perfectly conveying the taste of the original texts."⁵⁰ Nevertheless, Elisséeff admitted that it was difficult to read Kōda Rohan's (1867–1947) story *Futsuka monogatari* (A story of two days) because of the numerous Buddhist terms.⁵¹

Elisséeff graduated from the Tokyo Imperial University in 1912, and in 1914 returned to Russia. The Russian Revolution, which he had previously supported, was a source of constant fear to him. He was arrested for ten days in May 1919, and was kept as a "hostage" awaiting execution. After his release from prison, he and his family escaped to Finland in

46 藤井省三『エロシェンコの都市物語』, pp. 204–212.

47 For instance, 『日本児童文学全集 第12巻 少年少女小説篇2』(河出書房, 1953) includes Eroshenko's 「二つの小さな死」, 「狭い籠」 and 『少年少女日本文学全集7 小泉八雲・秋田雨雀・山村暮鳥集』(講談社, 1977) includes Eroshenko's 「海の女王と漁師」, 「鶯の心」, 「せまい檻」 and 「一本のなしの木」.

48 倉田保雄「解説——エリセーエフ小伝」エリセーエフ『赤露の人質日記』中央公論社, 1976, revised 1986, pp. 151–182.

49 エリセエフ, 安倍能成, 中村吉右衛門 and 小宮豊隆「エリセエフを囲んで」『図書』No. 43, 1953, p. 17.

50 エリセーエフ「序」昇曙夢訳『六人集』易風社, 1910; 再版は『六人集と毒の園』昇先生還暦記念刊行会, 1939, pp. 19–28.

51 川口久雄「芍薬の花——『エリセーエフ聞書』序書」『季刊芸術』Vol. 11, No. 2, 1977, p. 100.

1920, and then went to Paris, where he met Machida Shirō, an *Asahi Shinbun* correspondent, who asked him to write about his experience in Russia.⁵²

Several months later, Machida received Elisséeff's draft and was surprised by the "excellent writing and powers of observation."⁵³ The draft was titled *Sekiro no hitojichi nikki* (Diary of a hostage in red Russia) and was serialized in *Asahi Shinbun* from July until October of 1921; it was soon reprinted in book form in October 1921, and was widely hailed. There exists a photocopy of the first page of his draft that shows his skill in written Japanese.⁵⁴ This photocopy also proves that his written Japanese required minimal editing.

In *Sekiro no hitojichi nikki*, except for a few parts that may seem unclear because of the influence of other languages on the writer, the writing itself, with no excessive emotion and sentiment, draws the reader in with its clear descriptions of the changes in Russian society. The diary begins in November 1917 and goes through until September 1920. According to the book, the Bolshevik government executed 1000 "hostages" whenever one government member was assassinated. The "hostages," mostly intellectuals, capitalists, and officials from the previous government, were rounded up and arrested. Elisséeff's brother-in-law was murdered in retaliation for the assassination of a member of the government. Elisséeff was arrested as a "hostage," but was released because Saint Petersburg State University and the Academy of Sciences he was working for rescued him.⁵⁵ When Elisséeff successfully escaped to Finland with his wife and two young children, the reader of his tale no doubt breathed a deep sigh of relief. The narrative is spellbinding.

This book was praised by *Asahi Shinbun* (November 12, 1921, evening issue) as "better than what Japanese people could write" and was recommended to be read alongside *Sekishoku Rokoku no ichinen* (One year in red Russia), written by an Asahi correspondent Nakahira Aki-*ra* and also published in 1921. The details of starvation and political terror in Elisséeff's book offer first-hand information and experience from an intellectual's perspective. It is a book that could only be published outside of Russia.

In 1934, Elisséeff became the first head of the Department of Far Eastern Languages at Harvard University, where Tsurumi Shunsuke (1922–2015) met him and ranked his language proficiency in Russian as best, followed by French, German, Japanese and English.⁵⁶

There is a draft written in Russian, with the same content and actual names of the peo-

52 倉田保雄「解説——エリセーエフ小伝」エリセーエフ『赤露の人質日記』pp. 151–182.

53 Ibid.

54 エリセーエフ『赤露の人質日記』朝日新聞社, 1921.

55 エリセーエフ『赤露の人質日記』中央公論社, 1976, revised 1986.

56 鶴見俊輔「エリセエフ先生の思い出——東と西の出会い」『図書』No. 612, 2000, pp. 2–6.

ple mentioned in the Japanese version.⁵⁷ He sent this draft to his friend Nikolai Nevsky (1892–1937), who was teaching in Japan, probably to warn him of the danger of returning to Russia. Eventually Nevsky returned with his wife to Russia to teach at the same university and the couple was executed in 1937 for being “spies for Japan.”⁵⁸ That same year Elisséeff returned to Japan, but was under constant surveillance by the military police. He did not return to Japan until 1952.⁵⁹

Conclusion

From the above survey of foreigners who wrote in Japanese during the interwar period in Japan, we can glean several important points: (1) Their strong desire to communicate with the Japanese people led them to write or narrate in Japanese; (2) Books written in Japanese provided readers with direct, quick and effective access to the thoughts of the writers, which otherwise would have had to wait to be translated; (3) The difficulty of learning the Japanese language as an adult cannot be underestimated, but can be overcome; (4) The Japanese language was effectively used to convey religious messages, cosmopolitan sentiments, and accounts of anti-despotism; (5) Writing by foreigners in Japanese helped to make Japanese an “international language” during the interwar period, if we also consider the fact that the language was used in East Asia by colonized people from Taiwan, Korea, Manchuria and China in their anti-colonization activities.⁶⁰

Today there are about 2 million non-native speakers who are able to understand written texts in Japanese.⁶¹ During the last two decades, a phenomenon — that is, the fact that quite a number of non-native Japanese speakers have written novels, short stories, poems (including *haiku* and *tanka*), and essays in Japanese — has attracted the attention of readers and scholars. Many of these writers, such as Hideo Levy, Alex Kerr, David Zoppetti, Arthur Binard, Tian Yuan, Shirin Nezamafi, and Yang Yi, have been awarded literary prizes and have become the focus of academic research.⁶² There are even more foreigners writing scholarly books today. But as I have shown here, this phenomenon did not start a mere two de-

57 日野貴夫, 河合忠信「エリセーエフ「赤露の人質日記」露文草稿(1)」『ビブリア』No. 100, 1993, p. 345.

58 檜山真一「エリセーエフとネフスキイ」『立命館経済学』Vol. 46, No. 6, 1998, p. 17.

59 エリセエフ, 安倍能成, 中村吉右衛門 and 小宮豊隆「エリセエフを囲んで」『図書』No. 43, 1953, p. 18.

60 柳書琴「台湾作家呉坤煌の日本語文学——日本語創作の国際的ストラテジー」郭南燕編『バイリンガルな日本語文学——多言語多文化のあいだ』三元社, 2013, pp. 226–245.

61 郭南燕「序章 バイリンガルな文学とは？」郭編『バイリンガルな日本語文学』p. 12.

62 郭南燕「日本語文学のバイリンガル性」郭編『バイリンガルな日本語文学』pp. 421–436.

cares ago; rather, it has its roots in writing by foreigners centuries ago, in the late 16th century, the so-called Kirishitan Century.

Since the 1860s, the practice of foreigners writing in Japanese has continually evolved, with the interwar period seeming to be one of the most active periods of this phenomenon in modern times. In this respect, we can say that the Japanese language has, in fact, a history in which it has been loosened from the narrow confines of the notion of “nationhood.”

30 Crossing the Borders between the Living and the Dead: An Insight into Knowledge Transfer and Issues of Post-War Reconciliation¹

INAGA Shigemi

Heritage and inheritance are not always examined in relation to the idea of compensation. In the Japanese language, however, these ideas are closely interrelated. The verb “*tsugu*” means “succeed,” i.e. transmitting a heritage from one generation to another; while the verb “*tsugunau*” means “to compensate.” If “compensation” implies a loss, the idea of “succession” also presupposes a loss; Succession is an act of selection which inevitably excludes what one cannot transmit. Heritage management should be redefined from this insight: knowledge transfer cannot preclude the loss of knowledge; on the contrary, the loss is the initial condition on which heritage management is to be constructed. The paper will analyze this anomalous, or literally “preposterous” condition by focusing on several cases of knowledge transfer in the field of “intangible cultural heritage.”

1. Hiroshima Seventieth Commemoration

I grew up in Hiroshima, famous for the atomic bomb. The name of the city is also inscribed in Berlin; Hiroshima Strasse, located just in front of the Japanese Embassy, near the Potsdamerplatz, which had been cut into two by the Berlin Wall up until 1990. It is notorious that the new Japanese Embassy building after *Wiedervereinigung* is a faithful copy reconstruction of the pre-War Embassy of the Great Japanese Empire which served during wartime under Japan's Axial Alliance with Nazi Germany and Fascist Italy. It is shameful (or is it shameless?) that the name of Hiroshima is commemorated in connection with the infamous Japanese militarism. Quite obviously, it is not my intention to talk about Hiroshima as if it were my lofty task as a descendent of a victim who witnessed the nuclear disaster. From the outset, a Japanese speaker coming from Hiroshima (“je suis de Hiroshima” – Margaret Durras, *Hiroshima Mon Amour*), is not fully entitled to be an acclaimed representative of the atomic bomb victims. One should be ashamed if one were asked to fulfill such an ignominious task.

The task is ignominious for triple reasons. First, Japanese citizens cannot claim their to-

1 This paper was presented at the panel “Heritage Management as an Act of Compensation” of the Conference “Wounds, Scars, and Healing: Civil Society and Postwar Pacific Basin Reconciliation” at the University of Sydney, October 1–2, 2015. My thanks to Yasuko Claremont and Roman Rosenbaum for their kind invitation.

tal innocence on account of the atrocities committed by their parents and ancestors in Korea, China and in the Pacific islands during the War, including Australia.² Second, making use of the atomic bomb as an excuse so as to pretend to be the victim is simply hypocritical. To be the victim does not necessarily guarantee one's own moral superiority, nor does it automatically authorize the claimer to accuse the enemy of injustice. (Precisely for the same reason, justifying the atomic and other indiscriminate bombing on civilians, in the name of world justice and for the purpose of quickly ending the war, so as to diminish the total number of victims, is no less hypocritical). These are two basic conditions for any reconciliation when it comes with the side of "aggressors" and their moral descendants.³ But the most serious reason in our present context resides in the following: how is it possible for survivors to assume the role of those who could not survive.

All those who did know the truth of the catastrophe could not survive; only those who escaped from it can speak in the name of the dead in their place. But what the survived witness is only a shadow of the truth. Just as the shadow of irradiation left on the wall of the building. Those who left their own shadow figure on the wall could not survive, even if they were not instantaneously evaporated by the heat beam of the nuclear fission. "Eyewitness" is a treacherous term here because those who saw the light of the atomic fireball in their own eye near the epicenter simply lost their eyesight.⁴ Eyewitnesses are blind by definition; those who experienced the sound wave several seconds later had their ear tympanum ruptured, even if they were not blown away or crushed together with the falling buildings. (In the city of more than 250 thousand inhabitants, most of the houses were made of wood; only few main public buildings near the epicenter were constructed with reinforced concrete. Among them was the one to be re-named the "Atomic Bomb Dome".)

In reality, however, those who could fortunately escape immediate death had to suffer further and longer. During the rescue operations in devastating conditions, they witnessed the slow but relentless death of innumerable people, known and unknown. They had seen many people with their burnt skin hanging down from their face and arms wander around in

2 From the outset, this puts the case of Japanese empire in sharp contrast to the Jewish memorials in Germany and elsewhere in Europe. On this level, no comparison seems to me possible to establish between the two issues.

3 This aspect, or rather mutual complicity between the American occupation army and the post-war Japanese discourse construction, is convincingly demonstrated by Shibata Yūko 柴田優呼, "*Hiroshima/Nagasaki*" *hibaku shinwa o kaitai suru* "ヒロシマ・ナガサキ" 被爆神話を解体する (*Hiroshima/Nagasaki-Deconstructing the Myth of Bombing and Irradiation*), Tokyo: Sakuhinsha, 2015.

4 Akira Mizuta Lippit, *Atomic Light (Shadow Optics)*, Minneapolis: University of Minnesota Press, 2005. The book refers to the same metaphor by brilliantly applying derridian and lacanian rhetoric; the tactics which the present author intentionally avoids.

vain in search of drinking water. Many of them were drawn in the river (on the delta of which the city is located). Their bodies, piled up on the shore, soon began to decompose under the hot and humid summer weather. Later those who thought they could finally escape from the disaster, or those who entered the city for rescue, began all of a sudden losing hair, spitting blood or noticed their excrement covered with blood. People with these symptoms also died sooner or later. Even those who had not been seriously injured and safely evacuated the doomed city in ruin wondered several months later why their burned skin and minor injuries would not heal as usual.⁵ Obviously their chromosomes have been damaged by the nuclear irradiation (though the genetic mechanism was still unknown). In total, no less than 190 thousand people were killed by a tiny “Little Boy” dropped from a B-29 Bomber, nicknamed Enora Gay.

We commemorate the 70th anniversary of the Hiroshima and Nagasaki atomic bombing in the year of 2015. Those who were 20 at that moment turn 90. Within a decade, practically there will be no survivors who can directly transfer their experience and memory to the posterity. History teaches us that with the loss of eyewitnesses, the human species tend to repeat the same stupidities. The knowledge transfer bridging the generations is extremely fragile and versatile in this aspect (I use the term “knowledge” here with a wider acceptance, in terms of the “memory” as was the case in Saint Augustine in antiquities, and consider it in the context of the heritage management). At the Hiroshima Peace Memorial, there is a cenotaph with the inscription by Tadayoshi Saiga: “Let all the souls rest here in peace, as we shall never repeat the evil.”⁶ I wonder if the human species is wise enough to keep the promise the survivors of Hiroshima have made in front of the dead victims.

5 The movie *Hiroshima*, 1953, dir. Hideo Sekigawa, 104 minutes, tries to reconstruct, partly at least, the process of the bombing and irradiation in retrospect eight years later, but the visualization rather reveals its limit.

6 The English is by Saiga himself. Obviously the unspecified “we” causes several controversies. Though Saiga, as an idealist, hoped to include in this “we” all the surviving humanities from the catastrophe, the fact remains that for the American government as well as for the majority of American citizens, the dropping of the bomb cannot constitute, even nowadays, any “evil” at all, but rather an act of justice made against the Japanese. Some of the main opinion makers among the Hiroshima-Nagasaki victims, especially elite scientists and Christians, duplicated similar interpretations by identifying the A-bomb victims as the “elected target” by the fate, if not by God, and accepted it, not without resignation, in the name of scientific progress as well as part of the necessary compensation of the atrocities committed by the Japanese militarism. In a sense, the “brain washing” conducted by the GHQ worked with efficiency, even beyond expectation as the survivors almost overlooked the “aggressor” or the subject of bombing. Asian invaded lands and people remain almost completely out of the perspective of both the Americans and Japanese.

2. Transfer of Knowledge or a Witness of Loss

Any knowledge transfer by the human species cannot be exempt from this fate: what is transferred from one generation to another is like a shadow of the disappeared; it eloquently and cruelly shows the amount of the sacrifice that the transfer cannot help but make as its inevitable side-effect. What we can transfer as knowledge may well be no better than the by-product of the loss that it inevitably entails. This recognition of the inevitable loss allows us to regard human heritage as a struggle to compensate what we are not capable of compensating. Reconciliation, whatsoever should be based on this irremediable loss, from the outset.

The Questions of King Menander (Milinda Panha) is a famous Buddhist literature, an outcome of the conquest by Alexander the Great, recording, as it is said, the conversation between an Indian-Greek king, who ruled Afghanistan and the Northern part of India in the second half of the 2nd century B.C., and a Buddhist *bhikkhu* (monk), named Nāgasena. One of its most famous anecdotes is about fire. Is the burning fire on the torch the same fire as the one which was burning yesterday? So long as the burning continues, there is no interruption as a fire; and yet the fuel consumed in the fire can no longer be the same combustible provided yesterday.⁷ Human knowledge transfer cannot be much different from this fire, if we were able to grasp in one glimpse the entire human history, by condensing the wide time scape of several hundred years into one minute, for example.

As the opening of the famous essay by Kamo no Chōmei (1153/6–1216) states 800 years ago (1212), “the river stream is continuous and yet the water there is no longer the same.” “The foam floating and vanishing on the water current” (*nagare ni ukabu utakata* 流れに浮かぶうたかた) is a metaphor of the brief existence of each of us. Our individual consciousness flickers and disappears in a moment (just like the innumerable lanterns commemorating the dead souls on the Motoyasu and Ōta rivers of Hiroshima every summer); it is lost once for all and one after another incessantly. And yet the water current remains almost in permanence, for eternity, if judged from the human eye. The permanence of the river stream repeats its dynamic life according to the ecological system of water circulation on the planet. Since the immemorial past, the earth continues its rotation and revolution, with climatic heating-up and cooling-down, far beyond the life cycle of a tiny individual life and death. The amount of these “tiny foams floating and vanishing” constitutes the entire traces left by human species on the earth. And even this entire span of traces is nothing but an “Augen-

7 *Milindapañhā*, Japanese translation from the Pali original; 『ミリンダ王の問い』 by Nakamura Hajime 中村元 and Hayashima Kyōshō 早島鏡正, Tokyo: Heibonsha, 1963, Vol.1, pp.111–113 (Book I, chapter 2).

blick” in the geological time scale.

Knowledge transfer may also be explained in terms of tradition. The Japanese translation for Western “tradition” 伝統 is usually composed of two Chinese characters, “transmission” and “lineage”, but “transmission” of the “light of a lantern” is also a homonym which is respected in the esoteric Buddhism of the Tendai 天台 sect since the 8th century, in the monastery of Hieizan 比叡山 located at the east of the Kyoto basin. The lettering 伝燈 means transmitting the torch-fire of belief and teaching from one generation to another. It is true that the individual human transmitter cannot live for eternity, and should disappear one after another, but the fire on the torch is maintained like the relay of the sacred fire in the Olympic games, without losing its initial splendor.

How about Shintoism? The sanctuary of Ise 伊勢 celebrated its latest and 61st transfer in 2013, by replacing the old wooden structure with an entirely renewed and identical version.⁸ According to extant documents, the first transfer was conducted in the year of 690 in Gregorian calendar, or in the second era of the reign by the Empress Jitō 持統. Since that ceremonial initiation, each generation of the sanctuary has been dismantled and newly rebuilt every twenty years, shifting its location back and forth between the vacant empty place (for the former and next generation) and the place occupied by the wooden structure of the current generation). According to Junko Miki, scholar in aesthetics, the sanctuary’s “intangible vitality” generates from this rhythmical reciprocity between the ephemeral presence and the empty vacancy. The void suggests at the same time the past origin is already lost, and the not-yet born future shall succeed the heritage.⁹ The notion of “intangible cultural heritage” adopted by the UNESCO may find out an unexpected model case in the successive transfer 式年遷宮 ritually practiced at the Sanctuary of Ise.

It goes without saying that irregular interruptions took place by accident several times during the long history of more than one thousand three hundred years, due to civil wars and other disturbances. It must also be remarked that succession has not been maintained without any stylistic modifications. It is officially claimed that the current building faithfully inherits the style of the precedent model, thus transmitting to this day the initial style of the 7th century without alternations. And yet, in the 16th century (1582), for example, carpenters had to make the reconstruction without referring to the precedent structure, as it had been lost for long, due to the civil war which devastated the whole country. To use the terms

8 See Shigemi Inaga, « La Vie transitoire des forms, un patrimoine culturel à l'état d'Eidos flottant », in *Sanctuaire d'Ise*, Éditions Mardaga, 2015, pp.144–145.

9 Junko Miki, « Représenter le sanctuaire d'Ise une dialectique entre fermeture et ouverture », in *Sanctuaire d'Ise*, *ibid.*, pp.124–143.

in genetics, something like atavism (return to the archaic simplicity) or genetic mutation sporadically took place in token of the historical vicissitudes.

And yet, it seems as if the material discontinuity (in reality) has strengthened the spiritual sense of continuous and uninterrupted transfer from antiquity (in ideology). If one is capable of observing the span of 1400 years in one minute, one may certainly be surprised by the stability the sanctuary has managed to maintain. The (illusory) vision of its sustainability is fostered in contrast to the vicissitudes with which other historical monuments have passed through incessant rise and fall, edifications and destructions. Despite several interruptions in time (especially in the 15th–16th centuries) and minute oscillations in the details, the shrine of Ise as a whole successfully inherited its lost prototype as if the double spiral of the DNA faithfully reproduced itself in genetic transmission.

The driving force in the succession ritual of the Ise Shrine cannot be reduced to the idea of restoration or repairing. The idea of restoration is epitomized in the case of the ship of Theseus in ancient Athens: when one portion of the historical ship is rotten, that part was substituted by a new material, and in the long run, it is said, the original wood entirely disappeared from the ship of commemoration. This is what is happening to the Staircase of the Chateau de Fontainebleau, for example. Only 30% of the original stone remain there from the 16th century. In contrast, in the case of the Ise Shrine, the precedent structure is intentionally demolished as a whole so as to be replaced by an entirely renewed one. This total replacement implies the idea of metabolism; the sanctuary simulates the ecological succession which takes place in the surrounding forest. And the dismembered pieces are put into recycling for the secondary use in auxiliary sanctuaries all around Japan, especially in places where the shrines have been damaged or destroyed by natural calamities.¹⁰

This metabolic replacement together with the idea of recycling guarantees a sort of “permanence in impermanence.” The wooden structure, which is “eternally new” (as it cannot be more ancient than 20 years old) fosters the illusion of the presence of a building which is “eternally old” (as it dates from the year 690, at the latest, surviving, as it were, for more than 1300 years in succession). Discovering this eternally old and eternally new sanctuary, a German architect, Bruno Taut, proposed in the 1934, during his “exile” in Japan, a vivid comparison of Ise with the Parthenon in Athens: if the Parthenon is no longer but a ruin, a heritage of the lost glory of the Greek antiquity, Ise still maintains its living form as a spiritual

10 In recent years, the Nachi Shrine destroyed by flood or the shrine at the Rebus Island in the north were reconstructed by using the woods provided by the Ise.

symbol uniting a whole nation.¹¹

The notion of metabolism, evoked above, may be particularly relevant. The wooden structure is replaced every twenty years. No material continuity is aimed at. Yet by sacrificing material originality, the form as an idea (*eidōs*) is to be renewed and hopefully maintained for eternity. If Plato could see this in Japan, he would have been delighted in finding out the living model of his philosophical idea. The dichotomy of *eidōs* versus *hyre* (which stems from the wood as Spanish term suggests), are ideally combined and visualized in the practice of knowledge transfer through the ritual succession at the Ise shrine. Yet the materialized *eidōs* in Ise is void of sense; it does not put any predetermined theology or ideology onto the material, if not the message of successive transfer itself. Instead of “*signifiant flottant*” proposed by Roland Barthes and elaborated by Claude Lévi-Strauss, I would name it “*eidōs flottant*.”

Why “*eidōs flottant*”? The *signifiés* to be filled in this empty floating form cannot be found from within (*emic*), but it has been proposed from the outside (*etic*) by each of the successive generations; the empty and invisible precinct remains silent. It seems as if this silent empty receptacle had accumulated a succession of knowledge of its own, yet all of which are coming from exterior one after another. The temple has served as a passive depository of these *etic* documents trying to elucidate its mystery, in vain. The sanctuary stands for a mute observatory: by rejecting its own historicity, it reveals instead the historicity of these *etic* accounts on its own as these accounts have been attracted around this “silent center” (R. Barthes). Among them, the idea of “simulacra without original,” (Jean Baudrillard) was no exception. This idea was applied to the sanctuary at the previous transfer in 1993. Even this post-modern view of the sanctuary, proposed two decades ago, is by now inscribed in history. It is registered among the clichés of this chrono-political monument.¹²

3. Metempsychosis and the Renewal of Heritage

Shūzō Kuki (1888–1941), one of the most distinguished Japanese philosophers in the pre-war period, made reference to the metaphor of the torch-fire in the *Questions of King Milinda*. In 1928, at the end of his 8-year-stay in Europe, Kuki delivered two lectures in French at Pontigny explaining the oriental notion of Time to Western philosophers. From the torch-fire metaphor, demonstrating the continuity by way of discontinuity, Kuki moved to the story of Sisyphus in the Greek mythology. The giant is charged with the stupid task of transporting a

11 For more detail, see Jourdan Sand, “Japan’s Monument Problem: Ise Shrine as Metaphor,” *Past and Present* 226, 2015 (supplement 10): 126–152.

12 Shigemi Inaga, “To be a Japanese Artist in the So-called Postmodern Era,” *Third Text*.33 (Winter 1995–1996): 17–24.

huge rock to the top of the mountain. Whenever he pushes the rock to the top of the mountain, it mercilessly drops into the bottom of the valley, and Sisyphus has to climb down the path to resume the same toil again. The Western philological tradition had seen in this meaningless repetition, a doomed destiny, a course inflicted upon the giant as an extreme punishment. Yet Kuki boldly expressed his disagreement to this view.¹³

It was shortly after the outbreak of the Great Kantō Earthquake in 1923, a catastrophe which completely devastated Tokyo, the capital of Japan. Kuki had been repetitively asked by his European colleagues: why do the Japanese try to reestablish the metro-underground traffic network in the same metropolitan area which is doomed to the next earthquake within the span of one hundred years? Is the earthquake sinister? Is the destruction a curse or punishment to which the inhabitants of the archipelago are destined at the fringe of the Pacific Ocean? To this question, Kuki replied “No.” The will to resume reconstruction with hope, the courage to overcome negative fate and the determination of rejecting resignation, these are the message of the myth: To do one’s best without hesitating repetitive endeavor was the stern manifestation of one’s free will, a positive proof of the liberty, which had nothing to do with the predestinated defeatism or fatalism. Kuki states in this way and proposes to read in the myth of Sisyphus a torch-fire of hope, symbolizing the dignity of human free volition. It was 14 years later, or only two years after Kuki’s premature death in 1941 that Albert Camus published his *Mythe de Sisyphe* (1942). Several scholars speculate the possibility that the French existentialist could have been inspired from the reflection by the Japanese philosopher (Camus could not have missed the fact that the young Jean-Paul Sartre had been Baron Kuki’s “répétiteur” during his stay in Paris in 1920s).¹⁴

Among many possible references to Kuki’s bold reinterpretation of the Myth of Sisyphus, one may detect Kuki’s affinity with F. Nietzsche’s idea of the eternal return. The circular and recycling notion of Time is one of the stereotypical understandings of “Oriental Thought,” which lies in contrast to the “Western” modern idea of Time as linear development and progress. And yet, the idea of “eternal return” implies a famous paradox: so long as I am conscious that I am the outcome of an eternal return, my “self” should logically be different from my previous “self” by the very consciousness in question. For my previous “self” could not have noticed in advance its own rebirth into my present “self.” This self-consciousness is superfluous in any attempt to accomplish the perfect “eternal retour,” as it prevents

13 Shuzo Kuki, « La notion du temps et la reprise sur le temps en Orient, » repris dans *Propos sur le temps*, Paris: Philippe Renouard, 1928, pp.9–27.

14 Sugimoto Hidetarō 杉本秀太郎, “Tetsugakuteki Zuan” 哲学的図案 (Philosophical Design), in Monthly Report 月報, Kuki Shūzō Zenshū 九鬼周造全集 (*Complete Works of Kuki Shūzō*), vol. 1, 1981, pp.1–3.

“me” from being identical with the previous “self”. Once revealed, the self-consciousness thus saps the very condition of the eternal return. In other words, metempsychosis can be maintained so long as one is not aware of it.¹⁵

Here is another paradox of knowledge transfer: Tradition is self-deceptive by definition. Ironically enough, those who believe in their faithfulness to the precedent example inevitably deviate from the tradition because of their faithful-consciousness. On the contrary, those who have no notion of faithfulness or respect to tradition are incapable of measuring to which extent they are faithful or not in their heritage succession. This is obvious, for they are lacking in the will of succeeding the tradition or making effort for any faithful transmission. Only those revolutionaries (*hommes révoltés*, in Camus’s expression) who intentionally want to destroy tradition can grasp it, in as much as they are conscious of the critical distance they want to establish vis-à-vis the tradition in question. The tradition therefore would not reveal itself unless it is confronted with the destructive relationship such as disobedience, treachery or unconditional rupture... Accessible tradition always hides an inaccessible reverse side.

Thus, knowledge transfer turns out to be inseparable from the sense of irremediable loss. Succession and transfer of knowledge is nothing but the reverse side of its impossibility. What we can transfer to posterity is no more than the empty residue of what we wish to transmit in vain, the traces of loss indicating the failure of our endeavor to transmit. Ruins are the physical memory of such unsuccessful transfers. We call such debris and remains “ruin” as they have lost their *raison d’être* and practical value (be it utilitarian, political, economic, heuristic, or religious, or whatsoever), despite the fact that our ancestors put all their wisdom, intelligence and energy in their realization and maintenance (in their vain search of their “sustainability” in the future...).

What kind of ruins can Japan of the 20th century transfer to the posterity of human beings? Will it be the Atomic Bomb Dome in Hiroshima (1945) on the one hand, or the abandoned nuclear reactors of Fukushima (2011) on the other? And must we wait for the day when *Fukushima Strasse* will be installed side by side with *Hiroshima Strasse* in the Capital of the Bundes Republik Deutschland? Is it still allowed for us to cherish the optimistic hope of a Sisyphus in front of these nuclear disasters? The reconciliation with the dead is the task which still awaits us.

Let me finish by a requiem I composed in commemoration of the lost lives in the North Eastern Japan Great Earthquake of March 11, 2011.

15 Cf. Karl Löwith, *Nietzsches Philosophie der ewigen Wiederkehr des Gleichen*, 1935; Felix Meiner, 1986.

Survival

— At the end of the year 2011 —

To the memory of the lost lives at the 3.11 Earthquake

All of us

Who live on Earth are no other than the latest survivors.

In our shadow are hidden all who could not survive.

The enormous amount of the Dead sustains our Life.

Life is nothing but a peak of an immense iceberg;

Under the sea level lies the vast domain of the Dead.

Thanks to the invisible dark shadow of our dead companions,

We are allowed to live; entitled to a moment of survival.

Let us express our innermost thanks for being kept alive now,

For, it is the only way to praise those who could not survive.

The Dead are accompanying us so long as we live.

Let's stop worrying about the probability of our own survival rate.

For the last one who can happily survive is not the "I" who is alive.

It is only where the not-survived have given their place to the survivors,

That the sunlight reaches, and the darkness is wiped away to nurture new lives.

Just like the stump of a cut-down tree which put forth the new crimson buds,

Just like the carbonized stubbles nourishing the green sprouts on the burnt field.

Death is not the enemy of Life; it is a seedbed, a cradle for Life,

The dead provide us with the vigor, blessing us with the chance to live.

The mindful thought of the non-survivors is bestowed upon our lives.

It is our duty to accomplish this entrusted life, a gift sent from the dead.

And let us share our suffering of Life, in token of our respect to the Dead.

Facing the calamities beyond description, words fail us, we are kept voiceless.

Yet the voiceless silence gives birth to voices; words are spun again into a yarn of stories.

Yet the reanimated words will one day fall on the ground again, like the dead leaves;

And the leaf mold heaps up slowly and silently at the bottom of an unknown lake.

The soil accumulates annual sediment, while the trunk of a tree ages year by year.

The layers preserve the traces of climate mutations and earth-tectonics of the millennium.

Like the archival documents, the sediment of soil composes the chronicle of the planet.

The patterns of Lives are woven in the layers of fossilized terrain to record

The irreplaceable Chain of Being for eternity,

Crossing the animated and the inanimate.

The dignity of a soul lies in its transmigration, beyond individual Life & Death.

執筆者一覧

[編者]

郭 南燕 (Nanyan GUO) 国際日本文化研究センター 准教授

[執筆者] (執筆順)

Kevin M. DOAK Georgetown University (USA) 教授

ヴォルフガング・シャモニ (Wolfgang SCHAMONI)
ハイデルベルク大学 (Germany) 名誉教授

Eyal BEN-ARI Kinneret College on the Sea of Galilee (Israel) 教授

佐野真由子 (SANO Mayuko) 国際日本文化研究センター 准教授

堀まどか (HORI Madoka) 大阪市立大学 准教授

山崎佳代子 (YAMASAKI Kayoko)
ベオグラード大学 (Serbia) 教授

アグネシカ・コズイラ (Agnieszka KOZYRA)
ワルシャワ大学 (Poland) 教授

アンダソヴァ・マラル (Maral ANDASSOVA)
カザフ国立女子教育大学 (Kazakhstan) 研究員

ボトーエフ・イーゴリ (Igor BOTOEV)
ブリヤート国立大学 (Russia) 准教授

ボナヴェントゥーラ・ルベルティ (Bonaventura RUPERTI)
Ca' Foscari University of Venice (Italy) 教授

Andrew GERSTLE SOAS, University of London (UK) 教授

Alan CUMMINGS SOAS, University of London (UK) 専任講師

Cecile LALY 元国際日本文化研究センター 外国人来訪研究員

Richard TORRANCE The Ohio State University (USA) 教授

寺澤行忠 (TERAZAWA Yukitada) 慶應義塾大学 名誉教授

李 愛淑 (LEE Ae-sook) 放送通信大学校 (韓国) 教授

- 李 容相 (LEE Yong-sang) 又松大学校 (韓国) 教授
- 張 寅性 (JANG In-Sung) ソウル大学校 (韓国) 教授
- 龔 穎 (GONG Ying) 中国社会科学院哲学研究所 研究員
- 周 閱 (ZHOU Yue) 北京語言大学 (中国) 教授
- 顧 偉良 (GU Weiliang) 弘前学院大学 教授
- 姜 龍範 (JIANG Longfan) 天津外国語大学 (中国) 教授
- グエン・ヴァー・クイン・ニュー (NGUYEN Vu Quynh Nhu)
ベトナム国家大学ホーチミン市校人文社会科学大学 (ベトナム)
専任講師
- P・A・ジョージ (P. A. GEORGE) Jawaharlal Nehru University (India) 教授
- 新山カリツキ富美子 (Fumiko NIYAMA-KALICKI)
元ザルツブルグ大学音楽学部 (Austria) 研究員
- Michelle KUHN 名古屋大学 特任講師
- 徳永光展 (TOKUNAGA Mitsuhiro)
福岡工業大学 教授
- 富田 哲 (TOMITA Akira) 淡江大学 (台湾) 准教授
- INAGA Shigemi (稲賀繁美) 国際日本文化研究センター 教授

表紙図版

「朝顔」(墨絵) 中国美术学院教授 鄭巨欣

世界の日本研究2017
国際的視野からの日本研究

非売品

編者 郭南燕

発行日 2017年5月30日

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国際日本文化研究センター 海外研究交流室
〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町3-2
tel. 075-335-2222 (代表)

装丁 完倉正師

印刷・製本 株式会社 図書印刷 同朋舎

© 2017 International Research Center for Japanese Studies
ISBN 978-4-901558-88-4

ISBN 978-4-901558-88-4



NICHIBUNKEN

国際日本文化研究センター

International Research Center for Japanese Studies



JAPANESE STUDIES AROUND THE WORLD 2017 International Research Center for Japanese Studies